

ラーファイダーン

第II卷

1981

特集記事

イラク・ハムリン発掘調査概報

国士館大学イラク古代文化研究所

正 誤 表 CORRIGENDA (VOL. II)

	誤 errata	正 recta
p. 6 1.29	渡辺直径	渡辺直徑
p. 9 no. 39	土製品, 石製品	土製品
p. 10 no. 20	X線回析	X線回折
p. 16 1.26	Pl. 6-2	Pl. 9-2
p. 20 1.21 1.24	Pl. 5-2 Pl. 4-1	Pl. 8-2 Pl. 7-1
p. 21 1.1 1.28	Pl. 2 Pl. 8-4	Pl. 5 Pl. 11-4
p. 24 1.8 1.9 1.21	Pl. 11-1 Pl. 10-5~8 Pl. 2	Pl. 14-1 Pl. 13-5~8 Pl. 5
p. 27 1.22 1.30	Pl. 8-2 Pl. 12-2	Pl. 11-3 Pl. 15-2, 3
p. 31 1.34	Pl. 10-2	Pl. 13-2
p. 32 1.12 1.27 1.30	Fig. 19-6 17-1 Fig. 12-2	Fig. 19-13 17-4 Figs. 13-2
p. 39 Fig. 17 title	V, VI層	V, IV層
p. 42 1.15 1.17 1.20 1.33	Pl. 10, 11 Pl. 11-3, 4 Pl. 11-5 Pl. 11-2	Pls. 13, 14 Pl. 14-3, 4 Pl. 14-5 Pl. 14-2
p. 64 1.1 1.4 1.5	12~16 (4, 5)---(13) (21)---(20)	12, 16 (5, 8)---(11) (16)---(15)
p. 76 1.5	21-4	20-4
p. 97 1.18	Pl. 23-3	Pl. 23-2
Pl. 2-5	VIb層, LEVEL VIb	IVb層, LEVEL IVb
Pl. 19-7	Ubaid Period	Halaf Period
p. 143 1.20 1.21	21 m in CW 4	21 m in diameter of CW 5
p. 147 1.5	Pl. 15-5~8	Pl. 13-5~8
p. 156 1.19	Pl. 15-2	Pl. 13-2
p. 165 1.23	2.0 cm	20 cm
p. 171 1.7 1.9 1.16	feet feet upside down	legs knees upwards
p. 172 1.24	two steps	another step
p. 176 1.3 1.4	(4, 5)---(13), (21), ---(20),	(5, 8)---(11), (16), ---(15),
p. 178 1.14	day	clay
p. 183 1.26	Pl. 21-4	Pl. 20-4
p. 206 1.12	for	far
p. 207 1.10	Transportaing	Transportation
p. 211 1.21 1.31	faily out	fairly our
p. 213 1.3	nawwor-	narrow-
p. 241 no. 38 no. 39	Pottery, Ubaid Period Terracotta, Stone, Spindle Whorl	Pottery from Graves Terracotta, Spindle Whorl
Back Cover (contents XI-1)	Diffaractric	Diffractometric

ラーフィダーン II

目次

特集記事 イラク ハムリン調査概報 藤井秀夫編

例言	5
図版目次	8
挿図目次	9
表目次	10
はじめに	11
I 調査経過, 位置と環境	13
II テル・グッバ	16
III テル・ソンゴル A	50
IV テル・ソンゴル B, C	75
V テル・ハメディヤート	97
VI テル・グッバとソンゴル出土の石器	99
VII テル・グッバVII層の模型作成について	106
VIII イラク, ハムリン地区出土の人骨について	109
IX テル・グッバ出土銅器の分析 (英文)	216
X テル・ソンゴル B 検出石膏の分析 (英文)	219
XI ハムリン・バビロン出土日乾レンガの分析 (英文)	221
XII 総括	125
図版	
英文篇	131
研究所沿革	243

特集記事

イラク、ハムリン調査概報



テル・グッバ(高橋英彦氏画)

Tell Gubba by Takahashi, H.

例 言

本研究は昭和52（1977）年から文部省科学研究費補助金・イラク共和国考古庁・国土館大学三者の費用を主要なものとして実施した。特に文部省科学研究費について記すと次のようになる。いずれも研究代表者は藤井秀夫である。

- 昭和52年度 課題：イラク・カルバラ砂漠遺跡調査及びイラク・ハムリン山地テル・アル・グッバ発掘調査（海外学術調査—現地調査）
- 昭和53年度 課題番号：304146 課題：イラク・ハムリン遺跡調査（同上一現地調査）
- 昭和54年度 課題番号：404153 課題：イラク・ハムリン遺跡調査（同上一現地調査）
- 昭和55年度 課題番号：504348 課題：イラク・ハムリン遺跡調査（同上一総括調査）
課題番号：512033 課題：イラク，テル・グッバ第Ⅶ層発掘の建築遺構の復原に関する研究（特定研究1）
- 昭和56年度 課題番号：56122008 課題：イラク，テル・グッバ第Ⅶ層発掘遺構の復原に関する研究（特定研究1）

研究組織（所属は昭和57年3月1日現在）〔 〕内は現地調査参加年度

名称：イラク・ハムリン遺跡調査団

研究代表者

藤井秀夫（国土館大学イラク古代文化研究所教授）〔52～56〕

研究分担者

考古学担当

- 青木繁夫（東京国立文化財研究所修復技術部技官）〔53〕
- 井博幸（国土館大学イラク古代文化研究所助手）〔52～56〕
- 大津忠彦（出光美術館学芸員）〔53，54〕
- 大沼克彦（ロンドン大学，考古学研究所，大学院学生）〔53，54，55〕
- 小口裕通（国土館大学イラク古代文化研究所副手）
- 小谷伸男（富山大学人文学部教授）〔52，53，54〕
- 鎌田博子（京都大学大学院学生）〔53，54，55〕
- 川又正智（国土館大学イラク古代文化研究所講師）〔52，53〕
- 篠原徹（岡山理科大学理学部講師）〔53，54〕
- 松原隆治（南山大学大学院学生）〔54〕
- 松本健（国土館大学イラク古代文化研究所助手）〔52～55〕
- 八木和美（国土館大学イラク古代文化研究所研究補佐員）〔53，54〕

横山 昭一 (東京都目黒区美術館開設準備室学芸員) [53, 54]

形質人類学・地質学担当

石田 英実 (大阪大学人間科学部助教授) [52~54]

河畑 正敏 (歯科医師) [54]

欠田 早苗 (兵庫医科大学医学部教授) [53]

那須 孝悌 (大阪市立自然史博物館第四紀研究室学芸員)

和田 洋 (兵庫医科大学医学部助手) [53, 54]

建築学担当

井口 直巳 (赤羽都市・建築研究所研究員) [54]

伊藤 重剛 (テッサロニキ大学大学院学生) [54]

岡田 保良 (国土舘大学イラク古代文化研究所講師) [52, 54]

桐敷 真次郎 (東京都立大学工学部教授)

黒川 直樹 (東京都立大学工学部助手)

小林 文次 (日本大学理工学部教授)

西川 幸治 (京都大学工学部教授) [54]

浜崎 一志 (京都大学工学部助手) [54]

星 和彦 (東京都立大学研究生) [54]

堀内 清治 (熊本大学工学部教授) [54]

吉沢 政巳 (建築文化振興研究所主任研究員) [54]

イラク共和国考古庁調査官

モハメッド・アブドラ カーデル・アルモッサ [52]

マフムード・イスマイリ・マフムード [52]

アハメド・モタル・アレード [53]

サラハディーン・ハメド・フェリド [53~55]

研究協力者

稲葉素子 (大阪大学) 牛木久雄 (東京工業大学) 江本義理 (東京国立文化財研究所) 岡田浩海 (国土舘大学) 五味玲子 (国土舘大学) 清水建設株式会社研究所 白石律子 (国土舘大学) 高橋千鶴子 (国土舘大学) 中川善兵衛 (東京工業大学) 日産化学工業株式会社中央研究所 平尾良光 (青山学院大学) 宮越洋 (大阪大学) 山崎一雄 (名古屋大学) 渡辺直径 (帝京大学) 井光代

なお本調査が、日本・イラク両国の友好親善を深める上にも有意義な学術事業であると判断された、文部省、

外務省、駐割バグダード日本大使館、在京イラク共和国大使館を始め、数多くの大学、学界、企業、財団の方々からの御芳情を得て、首尾を完遂した事を本調査団は心より感謝申し上げている次第である。

本概報は前記費用と組織による調査・整理・研究の中間報告である。

特に出版用図面製作については主に次の者が各部分を担当した。：テル・グッバ；井博幸・岡田保良，テル・ソングルA；大津忠彦・鎌田博子・小口裕通，テル・ソングルB；松本健・横山昭一・小口裕通，テル・ソングルC；松本健・小口裕通，テル・ハメディヤート；川又正智，全体測量；川又正智，模型作成；岡田保良・星和彦・八木和美

なお文章は討議の上、下記の担当者が執筆した。記して責任をあきらかにしておく。

はじめに	藤井秀夫
I	藤井秀夫
II	小谷仲男・井 博幸
III	鎌田博子・大津忠彦
IV	松本 健
V	川又正智
VI	大沼克彦
VII	岡田保良・星 和彦
VIII	石田英実・和田 洋
IX	平尾良光
X	中川善兵衛
IX-1	山崎一雄
XI-2	日産化学株式会社中央研究所
XII	藤井秀夫
編集	藤井秀夫・井 博幸
編集補佐	川又正智
英文翻訳	生熊摩耶

なお本書で用いている方位は、現地調査開始当時の磁北である。

標高については、発掘当初海拔高を知る基準がなく、大まかな地図によりテル・グッバの麓に92mの基準点を仮定して作業を開始した。その後、付近の調査を行っていたドイツ調査団やベルギー調査団の協力を得て絶対高値を得、高度を補正した。そのため地形図の等高線は整数値を示していない。

図 版 目 次

1	1	テル・グッバⅦ層 中心施設	5	テル・グッバ	円筒形印章
	2	テル・グッバⅦ層 現状模型	6	テル・グッバ	石器
	3	テル・グッバⅦ層 模型断面	15	1	テル・グッバⅠ層 遺構
2		テル・グッバ 彩文土器	2, 3		テル・グッバⅡ層 遺構
3		テル・ソングルA, B, C, 彩文土器	4 ~ 8		テル・グッバⅡ層 土器
4	1	テル・グッバ 調査前	16		テル・グッバⅦ層 現状模型
	2	テル・ソングルA 調査前	17	1	テル・ソングルA サマッラ期建物 (南より)
	3	テル・ソングルB 調査前	2		テル・ソングルA サマッラ期建物 Iの塞がれた入口
	4	テル・ソングルC 調査前	3		テル・ソングルA サマッラ墓
5		テル・グッバ 調査中(東より)	18	1 ~ 4	テル・ソングルA サマッラ期土器
6	1	テル・グッバⅦ層 中心施設	5		テル・ソングルA テラコッタ小像
	2	テル・グッバⅦ層 東トレンチ	6		テル・ソングルA 土製紡錘車
7		テル・グッバⅦ層 中心施設	19	1 ~ 6	テル・ソングルA ウバイド期土器
8	1	テル・グッバⅦ層 中心施設(南より)	7		テル・ソングルA ハラフ期土器
	2	テル・グッバⅦ層 北側部分	20	1	テル・ソングルB Ⅱ層建物
9		テル・グッバⅦ層 円形建物 部分	2		テル・ソングルB 土器窯
10		テル・グッバⅦ層 円形建物 細部	3		テル・ソングルB 排水管
11	1	テル・グッバⅥ, Ⅴ層 初期王朝Ⅰ期 遺構	4		テル・ソングルB 礫敷道路
	2	テル・グッバ 初期王朝Ⅰ期 倉庫	5		テル・ソングルB 墓出土遺物
	3	テル・グッバ 初期王朝Ⅲ期墓 遺物出 土状況	21	1, 2	テル, ソングルB ウバイド期土器
	4	テル・グッバⅦ層 土壙内人骨発見状 況	3 ~ 7		テル・ソングルB ハラフ期土器
12		テル・グッバ 土器	22	1	テル・ソングルC ウバイド期遺構
13	1 ~ 4	テル・グッバ 彩文土器	2 ~ 5		テル・ソングルC 出土遺物
	5 ~ 8	テル・グッバ 押印土器破片	23	1	テル・ハメディヤート 土器窯
14	1	テル・グッバ 青銅器	2, 3		テル・ハメディヤート 遺物出土状況
	2	テル・グッバ ビーズ	4 ~ 6		テル・ハメディヤート 出土遺物
	3, 4	テル・グッバ スタンプ形印章	24		ハムリン盆地内 出土人骨

挿 図 目 次

1	ハムリン盆地内遺跡分布図……………	14	31	テル・ソングルA	サマッラ期土器……………	61
2	テル・グッバ地区遺跡分布図……………	15	32	テル・ソングルA	サマッラ期彩文土器……………	62
3	テル・グッバ 測量図……………	17	33	テル・ソングルA	サマッラ期素文, 刻文土器……………	63
4	テル・グッバ南 北 断面図……………	18	34	テル・ソングルA	ハラフ期土器……………	66
5	テル・グッバⅦ層 平面 断面図……………	19	35	テル・ソングルA	ウバイド期彩文土器……………	67
6	テル・グッバⅦ層 中心部……………	22	36	テル・ソングルA	ウバイド期彩文土器……………	68
7	テル・グッバⅦ層 上端平面図……………	23	37	テル・ソングルA	ウバイド期素文土器……………	69
8	テル・グッバ 北 東区遺構図……………	25	38	テル・ソングルA	墓出土 素文土器……………	70
9	テル・グッバ 初期王朝I期 倉庫図……………	26	39	テル・ソングルA	サマッラ期 土製品, 石製品……………	71
10	テル・グッバⅡ層 平面図……………	28	40	テル・ソングルA	石製品 銅製品……………	72
11	テル・グッバⅦ層 彩文土器……………	33	41	テル・ソングルB	発掘区域と建物……………	76
12	テル・グッバⅦ層 彩文土器……………	34	42	テル・ソングルB	断面図……………	77
13	テル・グッバⅥ層 彩文土器……………	35	43	テル・ソングルB	I II層 遺構図……………	78
14	テル・グッバⅥ層 彩文土器……………	36	44	テル・ソングルB	Ⅲ層 遺構……………	79
15	テル・グッバⅤ層 彩文土器……………	37	45	テル・ソングルB	Ⅳ層遺構……………	80
16	テル・グッバⅤ層 彩文土器……………	38	46	テル・ソングルB	I層 彩文土器……………	82
17	テル・グッバⅤ, Ⅳ層 彩文土器……………	39	47	テル・ソングルB	Ⅱ層 彩文土器……………	83
18	テル・グッバⅣ層 彩文土器……………	40	48	テル・ソングルB	Ⅲ層 彩文土器……………	84
19	テル・グッバⅦ～Ⅳ層 土器……………	43	49	テル・ソングルB	Ⅳ層 彩文土器……………	85
20	テル・グッバⅣ～Ⅱ層 土器……………	44	50	テル・ソングルB	墓出土土器……………	86
21	テル・グッバ 墓出土土器……………	45	51	テル・ソングルC	ウバイド期建物 と発掘区域……………	87
22	テル・グッバ 印章, 印影……………	46	52	テル・ソングルC	断面図……………	88
23	テル・グッバ 石器, 銅器……………	47	53	テル・ソングルC	ウバイド期建物……………	88
24	テル・ソングルA, B, C 測量図……………	51	54	テル・ソングルC	ウバイド期彩文土器……………	89
25	テル・ソングルA 発掘区域とサマ ッラ期の建物……………	52	55	テル・ソングルB, C	土製, 石製品……………	90
26	テル・ソングルA 北 南 中央区 断面図……………	53	56	テル・ソングルA, B, C	石器……………	91
27	テル・ソングルA北区 サマッラ期 の建物……………	54	57	テル・ソングルA, B, C	石器……………	92
28	テル・ソングルA南区 サマッラ期 の建物……………	55	58	テル・ハメディヤート	土器窯, 土 器, ガラス器……………	98
29	テル・ソングルA西区 初期王朝期 の遺構……………	56	59	テル・グッバ	測量風景……………	107
30	テル・ソングルA 墓実測図……………	58	60	頭最大長, 頭最大幅および頭長幅示数に よるハムリン出土成人男性頭骨比較……………		113
	1-Gr247 サマッラ期		61	頭最大長, 頭最大幅および頭長幅示数に よる南メソポタミア, ヨルガン・テベ出 土の前イスラム期成人男性頭骨の比較……………		114
	2-Gr279 サマッラ期		62	ハムリン (テル・グッバ, ソングルA), アシュールおよびニップール出土のイス ラム期成人男性頭骨の比較……………		115
	3-Gr 1 ウバイド期					
	4-Gr71 イシンラルサ/ 古バビロン期					

63	メソポタミアにおける前イスラム期とイスラム期 (テル・グッバ, ソンゴルA, アシュール, ニップール) 成人男性の頭骨の比較……………	116	65	日本隊検出遺構一覧……………	128
64	テル・グッバⅦ層 変遷図……………	126	66	地域別 鉛同位体比……………	217
			67	メソポタミア地域出土考古遺物の鉛同位体比……………	217

表 目 次

1	テル・グッバ石器組成……………	101	12	ハムリン出土頭蓋骨の示数および分類……………	122
2	テル・ソンゴルA, サマッラ期床面の石器組成……………	102	13	ハディーサ出土の新アッシリア期頭蓋骨計測示数……………	122
3	テル・ソンゴルB I層の石器組成……………	102	14	アシュール出土のイスラム期頭蓋骨計測示数……………	122
4	テル・ソンゴルB II層の石器組成……………	103	15	南メソポタミア, ヨルガン・テベ出土頭蓋骨の計測示数……………	123
5	テル・ソンゴルC I A層床面の石器組成……………	103	16	テル・グッバⅦ層青銅剣の鉛同位体比……………	218
6	テル・ソンゴルC I B層 (床面及びI A層床面直下) の石器組成……………	104	17	日乾レンガ成分の蛍光X線分析 (英文) ……………	221
7	テル・ソンゴルC II層の石器組成……………	105	18	X線回折による鉱物構成 (英文) ……………	222
8	テル・グッバ, ソンゴルA, B, Cの主な石器比率……………	106	19	蛍光X線による含有成分の分析 (英文) ……………	225
9	ハムリン, ハディーサ, アシュール, バビロン出土人骨の統計……………	119	20	X線回折による日乾レンガ中の含有結晶体証明 (英文) ……………	226
10	ハムリン, ハディーサ, アシュール, バビロン出土人骨の時代, 年齢, 性別統計……………	120	21	熱分析と燃焼による重量減少 (英文) ……………	227
11	ハムリン出土頭蓋骨の計測値および示数……………	121			

はじめに

イラク共和国はハムリン山地の周縁を利用して、そこを貫流するディヤラ川をせき止め多目的ダムを建設する計画を立てた。このためバグダードからディヤラ川に沿って北東へ約130kmないし150kmの地域に広がるハムリン盆地（サアディア盆地）中、海拔108m以下、350km²の地域が水没することになった。そこで、イラク考古庁は1977年春から水没地域の遺跡調査を開始した。ディヤラ川下流地域は既にシカゴ大学オリエント研究所によって広域調査が行われていたものの、この水没区域はほとんど未調査地域であったと見てよい。事前の表面調査による主なものだけでも、同区域に大小70数基以上の遺丘（テル）が存在し、それらがオスマントルコ期から新石器時代文化にまで溯ることが予想された。

思うにこの地域は、先史以来メソポタミアの南北を結ぶ通路及びイラン地方とメソポタミア中部を結ぶ要衝に当たっていたと推測され、今日なお不明な点の多い諸問題、たとえば、初期農耕文化の発展と変遷、都市国家形成期の状況、謎の民族シュメール人についての新知見、ハイランド文化とメソポタミア文化との関係などについて何らかの手懸かりが得られるのではないかと考えられた。

イラク考古庁は、ハムリン盆地の遺跡分布概況をまとめ、直ちにユネスコ及び従来メソポタミアで地道な発掘調査を行ってきた各国研究機関とその当該政府に、国際協力による緊急発掘調査を要請した。というのも、同地域に分布する遺跡群は余りにも多時期にわたって学術的に貴重な遺跡群であり、それだけに、人類共通の遺産と判断されたため、全世界の考古学者の協力による、イラク考古庁との共同調査が望ましき形として指向されたからである。

私どもはかねてから、メソポタミア文化の形成と発展について、その周辺地域との文化関連、また民族、集団の移動に注目していた。バグダードの南西110km地域にある、アル・タール洞窟群の調査はその視点において、イラク西南砂漠とメソポタミアとの関係を解明するために1971年以来逐行している。ちょうどイラクからハムリン盆地の遺跡発掘要請を受けたその年（1977年）、第5次隊を編成し（文部省科学研究費補助金による海外学術調査）、既に先遣隊を現地に派遣していた。しかし、ハムリン盆地遺跡の調査はアル・タール洞窟群の調査に比しメソポタミアの北と南、そして東のイラン地方との文化交流、集団の移動を解明するうえに、またとなき研究対象となりうると判断した。そこで早速、私どもは、文部省と協議し、テル・グッパ地区の予備調査を実施し、その学術的価値を確認した。この結果、文部省学術審議会の承認を得て、本調査に着手したのである。イラク側の呼び掛けに応じ、日本隊の他に多数の外国隊が参加し、各隊はそれぞれの研究テーマに従って選んだ遺丘の調査に当たった。各隊の調査した遺跡を総合すると、それらはササン朝ペルシャ期からサマッラ朝に溯る幅広い時期にまたがり、量的には、バルティア／ササン朝期、古バビロン期、初期王朝期、ウバイド期の遺跡群が顕著である。また、各国隊は常に往来し合い、遺構、遺物に関する会合や討議を重ね、ハムリン地域文化の究明に協力しあった。この協力を通じて、メソポタミアの文化遺産はまさしく、全人類共通のものであって、我々は、それを研究する考古学教室の一員であるという連帯感が培われた。その結果が、1978年、1979年、1981年の計3回にわたってバグダードで開かれた、イラク考古庁主催によるメソポタミア考古学に関する国際シンポジウムで発表された。

1979年4月20日から10日間、イラク国賓として、三笠宮崇仁殿下、同妃殿がお越しになられ、調査研究に御参

加下され、有益な助言と御指導を賜わった。深く感謝申し上げる次第である。

本調査を招聘し、私共の申し出を快諾された、考古庁長官、ムアイヤッド・サイード・ダメルジ博士の積極的な御推進に深き謝意を表す。併せて調査遂行上惜しみなき御助力を頂いた考古庁関係者、特に、ハムリン地域発掘隊の監督官ベヘナム・アブ・アル・スーフ博士、イラク考古庁ハムリン地区調査事務所長ケリム・アジーズ、ファーデル・マドルーム氏を始め、特に3年間の長期にわたって私共の共同研究者として、調査に参加されたサラハッディーン・ハミッド・フェリド氏に衷心より謝意を表す。また忘れてならないことは、この調査中、寛容溢れる碩学故フォアド・サファル教授をハムリンへの道路で、交通事故によって失った事であった。心から哀悼の念を表す。

ここで概報する内容は、バグダードシンポジウムにおいて発表した日本隊の成果を基礎とし、その後の調査によって判明したことを加え記述している。なお、本報告に使用した概要は *Sumer Hamrin* 特集号に投稿済みである (1980年4月提出)。

I 調査経過, 位置と環境

ハムリンダム水没予定地域で日本隊が発掘調査のために選んだ遺跡は、テル・グッバとテル・ソングルの三丘（南からA, B, Cと命名する）である。これらのテルはハムリン盆地内の諸遺跡のうちでも、ダム水門に近く、低い地点に位置している。小谷仲男と松本健は、1977年9月から10月にかけてハムリン盆地にいくどか足を運び、適当な発掘地をさがし、またハムリン盆地内遺跡の性格に熟知するよう努めた。当時、我々の手元にイラク考古総局の作成したハムリン遺跡分布図一枚があった。そして、はじめてテル・グッバを訪れたのは1977年9月25日である。ここではテル斜面のあちこちで、彩文土器片のほかに多量の石器剥片や、鎌刃の類を採集することができ、少くともテルの歴史がPre-Sargonid期にまで遡ることを知った。またテルの規模も、テル・スレイマや、テル・バラダンなどのハムリンの諸遺跡のなかでは小さな部類に属し、我々にとって調査を当初の短い予定期間内に完結することも不可能ではないと考えられた。しかしなお、このテルの最古の文化層まで到達できないことをおそれ、テル・グッバから見わたして、数百mの所に散在する低いテル（ソングルA, B）を踏査し、このテルの表面にもグッバ以上に多量の石器剥片がおちているのを観察した。代表者藤井秀夫の最終的な決断で、テル・グッバを発掘地を選び、これと並行してテル・ソングルの調査を行うこととした。

遺跡の選定ののち、1977年10月21日にテル・グッバに最も近いヌーリー・アミン村とバラダン・パウイー村の中間に宿舎を設営し、10月24日からテル・グッバの地形測量、ひきつづいてテル・ソングルの地形測量に取りかかった。測量図にもとづき、それぞれのテルに5×5m単位のグリッドを設定し、北から南へI, II, III……、西から東へ1, 2, 3……と、グリッド列を呼び、各グリッドはそれぞれを組み合わせることで、遺物、遺構の出土位置、測量の基準とした。この測量中に新しいテルに気づき、ソングルCと呼ぶことにした。

なお、テル・グッバの南にはテル・ハメディヤートと呼ばれる丘が、約2kmにわたってとぎれとぎれにつづき、ナリン川岸にまで及んでいる。その北側の丘上には、青緑釉の釉薬のかかった土器片やガラス片が散布し、パルティア期またはササン朝ベルシャ期の遺跡の存在が予想された。ハメディヤート南半部の丘は土器が皆無であり自然丘らしい。ハメディヤートについてもイラク考古庁の要請で小規模な試掘を実施した。

遺物整理を含む現地調査は、1980年3月27日、ダムの貯水により遺跡が水没するまで続けられた。その後も出土遺物に関する整理研究は、1981年9月までバヒージュ村にあるハムリン盆地遺跡博物館にて行った。

日本隊の選んだ調査区域は、テル・グッバを中心にして、東西各1km、南3km、北1km四方の区域である。テル・グッバはディヤラ、ナリン両川合流点の上流5kmのところであり、近くの町サアディヤの西12km、ジャラウラの南西19km、すなわち北緯34°12′、東経44°59′に位置している。

テル・グッバの周辺はハムリン盆地内でも遺跡の集中した地域の一つであり、グッバの北約1.3kmにはドイツ考古学研究所の調査したテル・ミリヤヒーエ北丘（ヘルベ）がある。このほか、ベルギー隊が調査したテル・サブラ、オーストリア隊によって調査されたテル・アブラなど近く存在する（Fig 1）。

テル・ソングルA, B, Cとハメディヤートの丘は、東北から南西方向に標高88mのラインに沿って、ほぼ弧をなして連なっていて、ここを中心に一段高い西北側は集落や耕地になり、低い東南側はカレックス属などはえる湿原である。集落や耕地にはディヤラ川の上流から遠々と灌漑水路が引かれ、耕地の灌漑ばかりでなく、村人の生

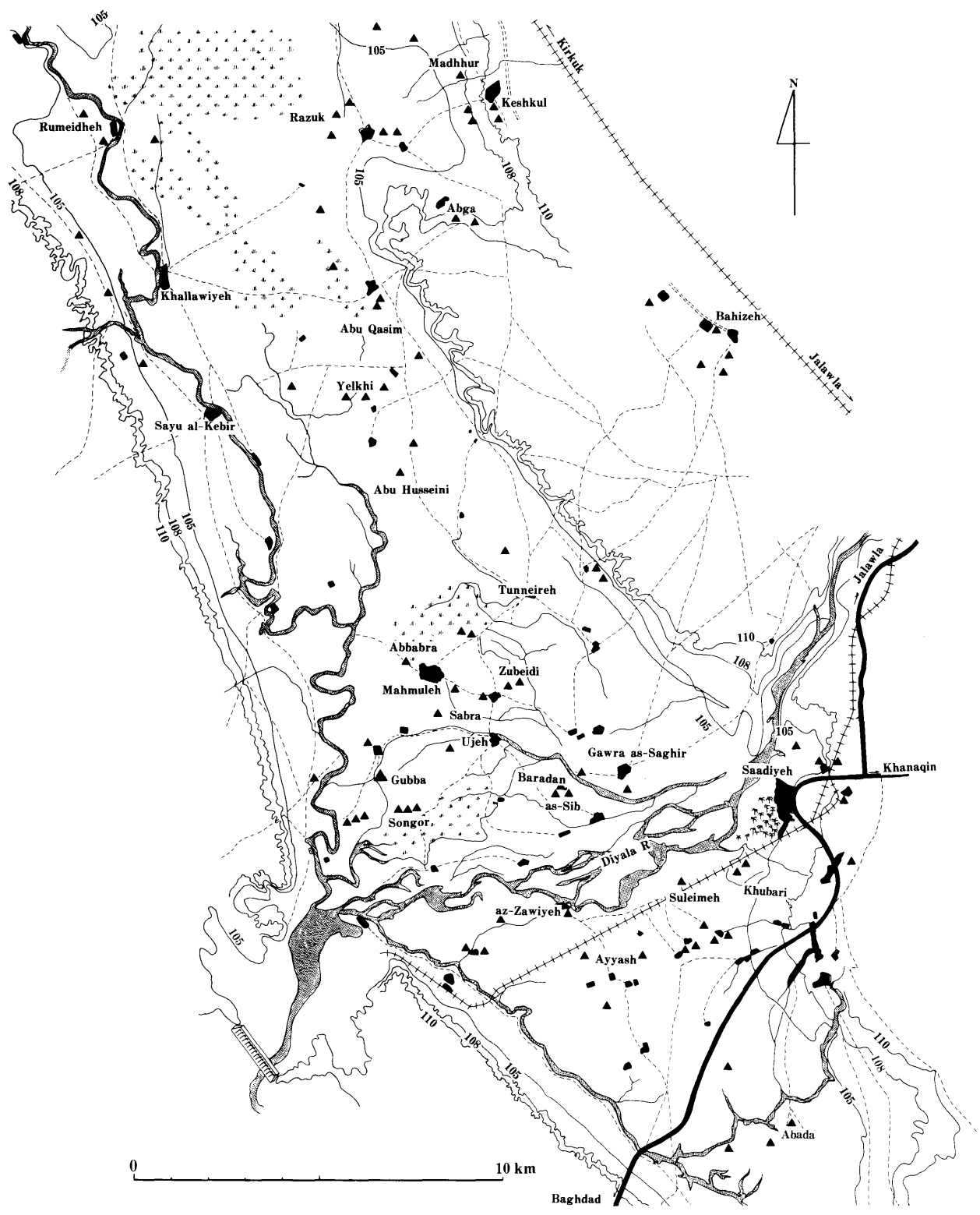


Fig. 1 ハムリン盆地内遺跡分布図 Map of Archaeological Sites in Hamrin Basin

活の大切な水源ともなっている。この流水もテル・グッバやソングルのそばを流れて湿原に入り、やがてティヤラ川へ落ちる。川にはコイ科などの魚類が多い。湿原の乾いているところは、村人のヒツジ、ヤギ、ウシの良い放牧地であり、家畜のほか、さまざまな水鳥、イノシシ、ウサギ、キツネ、オオカミなどの絶好の棲息地となっている。

ハムリン盆地での年間降水量は約300mm (11～3月が雨季)である。このため丘陵地では天水農業が可能であり、低地では灌漑農業も行なわれている。気温の年較差は激しく、夏は最高気温50度、冬は最低気温0度前後になる。ここでは、コムギ、オオムギが主に栽培されている。トウモロコシ、ゴマ、エンドウ、キュウリ、トマト、スイカ、オクラ等の野菜のほか、メンカヤ、ナツメヤシ、ザクロ、イチジク、ミカン、ブドウの果樹もみられる。また、ザグロス山脈やクルディスタン山岳地に比較的近いため、かつては遊牧民の冬の宿営地に適したところであったと思われる。とくに2月から3月にかけては植物が成育し、菊科などの草花が咲き乱れる美しい季節のひとつをたのしむことができた。

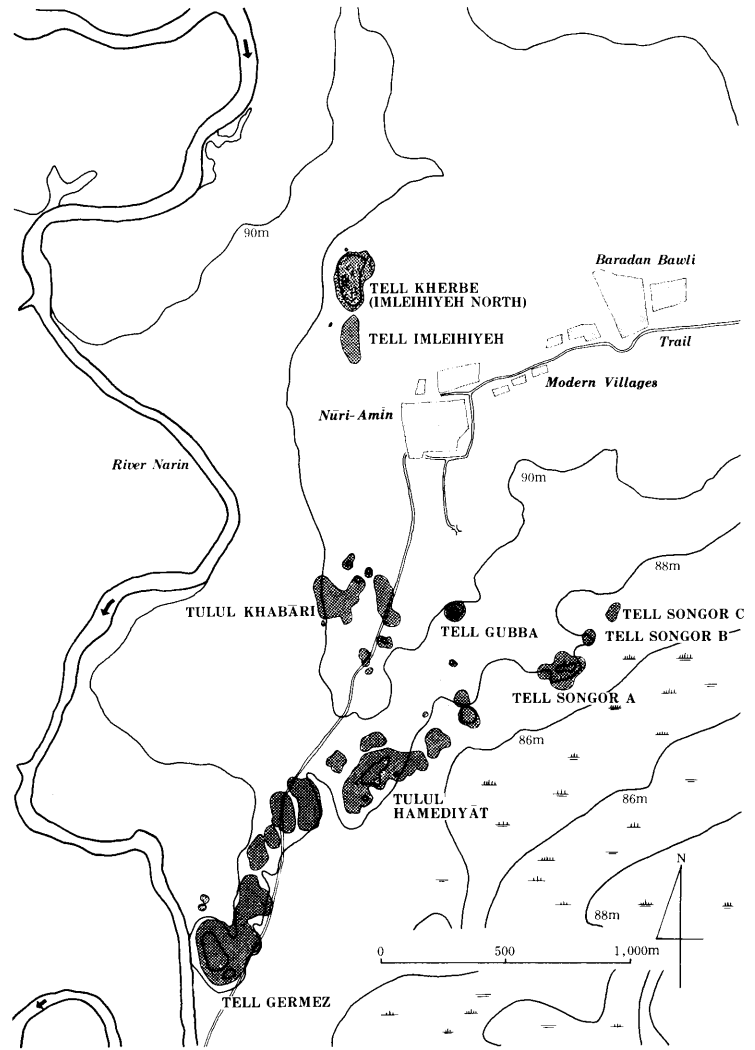


Fig. 2 テル・グッバ地区遺跡分布図
Tell Gubba and its Surroundings

II テル・グッバ

1 層位と遺構

テル・グッバは、地形測量図に示されるように、径約80m、高さ約8mの円形のマウンドで、頂部には径約20mほどの平坦部がある。側面からみると、南側が急斜面をなし、北面はゆるやかで、途中に一段平坦な部分がある (Fig. 3)。

発掘調査は1977年10月29日から始められ、1980年3月28日まで、ほとんど休むことなく、継続された。発掘の方針はテルの主軸に沿って、まず南北に幅9mのトレンチ (グリッド No. 9, 10列) を掘ることからはじめ、やがて東西方向にも幅9mのトレンチ (グリッド No. XII, XIII 列) を掘り、その後、適宜調査区域を拡大しながら、テルに内蔵された建築遺構と、その層位関係を明らかにすることにつとめた。その結果、地山に到達するまでに大きく7つの建築レベルの層序を確認し、上から I, II, III, IV, V, VI, VII と数えた。同一壁を使用したいくつかの床や、テルの局地的なレベルについては、上から a, b, c と数え、基本層位の細分とした。これらの建物レベルは、さらに大きく四つの時期にまとめることができる (Fig. 4)。

第 I 層 地表～深さ1.5m イスラム期の墓と、焼レンガ構築の墓廟基礎 (8×5m) があつた。

第 II 層 深さ1.5～3.5m アケメニッド・ペルシャ期の大建造物がある。

第 III～VI 層 深さ3.5～5.5m 初期王朝期の建物群の累積である。

第 VII 層 深さ5.5～8.0m 原文字期 (ジェムデッド・ナスル期) の円形建物で、このテルでは最初の建造物である。

(1) 後期原文字期 (ジェムデッド・ナスル期) VII 層

テル・グッバ付近の地山は、石膏分を多量に含んだシルト質の黄土である。テル中心部における地山の標高は90.5mで、周囲の平地よりやや高い。地山の高さがテル全体を通じて、あまり変化がないのは、最初にこの自然丘を利用した人々が、かなりの規模で削平したものと考えられる。こうして整地した地山の上に、人々は同心円プランに基づく一大建造物を建てた。建物の壁はすべて日乾レンガ (28×14×7～8cm) づみである。

中心円形基壇 (CW 1, 2) まずテルの中央に、直径5m、高さ3.5mで、上方に向かってやや広がる円柱状の基壇がつくられた。この中心にはひとつの炉 (径80, 深さ80cm) が設けられ、炉を幅50～80cmの小さい回廊が取りまく。回廊の床と炉の底とはほぼ同レベルである。円形基壇の下部には、ちょうど炉の真下を通る幅0.9m、高さ1.5m、奥行3.5mの坑道が施設されている (Fig. 6, PL. 6-2)。坑道は南側に入口をもち、天井は持送穹窿で、炉の底とは連結していない。坑道の入口部は本来閉塞され、さらに1m奥にも第2の障壁があつたようである。しかし、発掘時にはどちらも半ば破壊された状態にあり、内部からは、土器片以外なにもみいだせなかつた。おそらくこの円形基壇の施設が、これを取りまく円形建物全体の建設目的を解く鍵となるであろうが、残念ながら今のところ、直接的な手がかりは得られていない。ただ炉の底の灰土中から、完形素文の注口土器 (Fig. 19-6) を発見した。

さて、この円形基壇を中心に、五重に円形を描く壁がとりまき (CW 3, CW 4, CW 5, CW 6, CW 7), そ

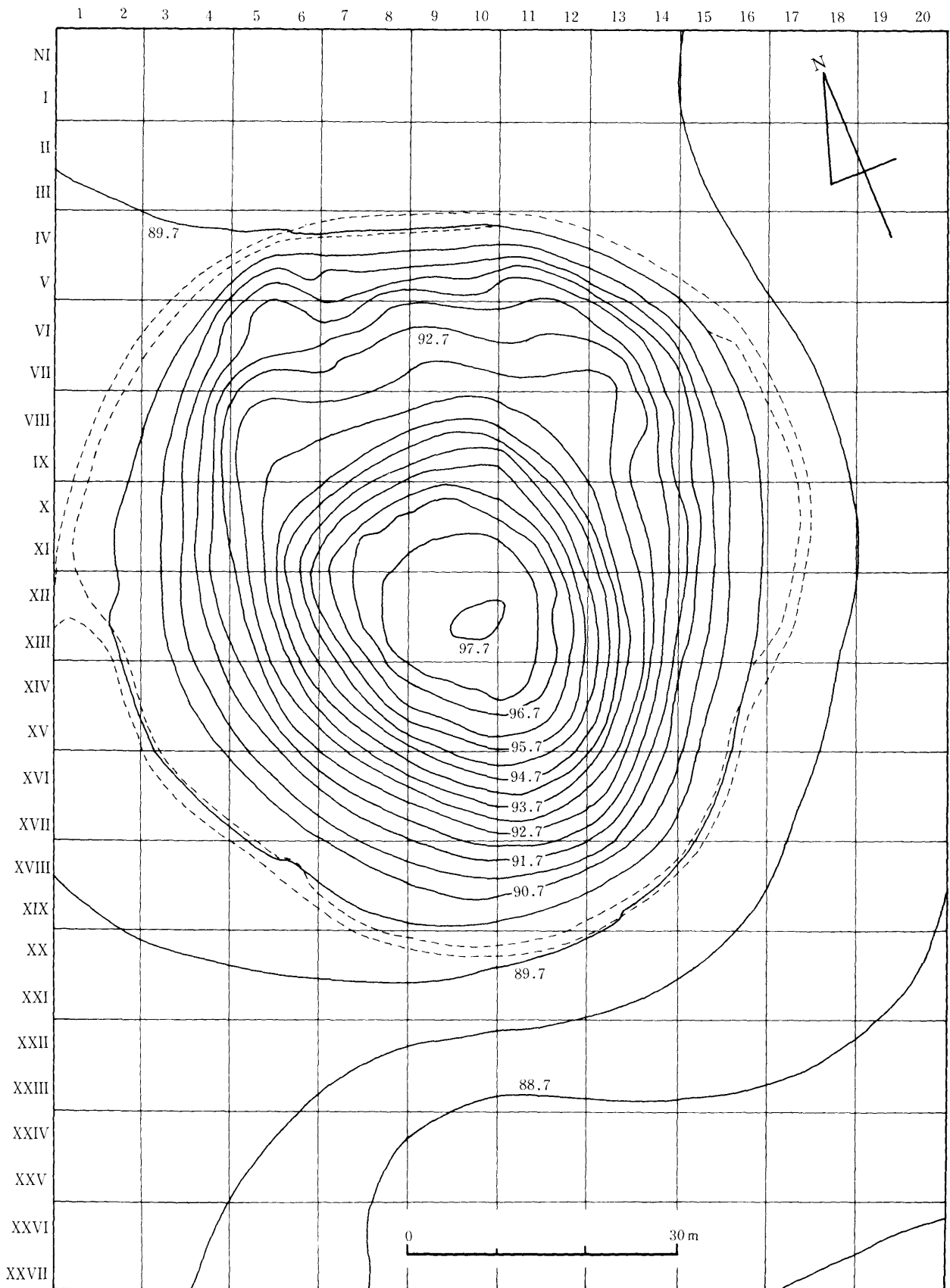


Fig. 3 テル・グッバ 測量図 Contour Map, Tell Gubba



Fig. 4 テル・グッバ南, 北断面図 Section, Tell Gubba

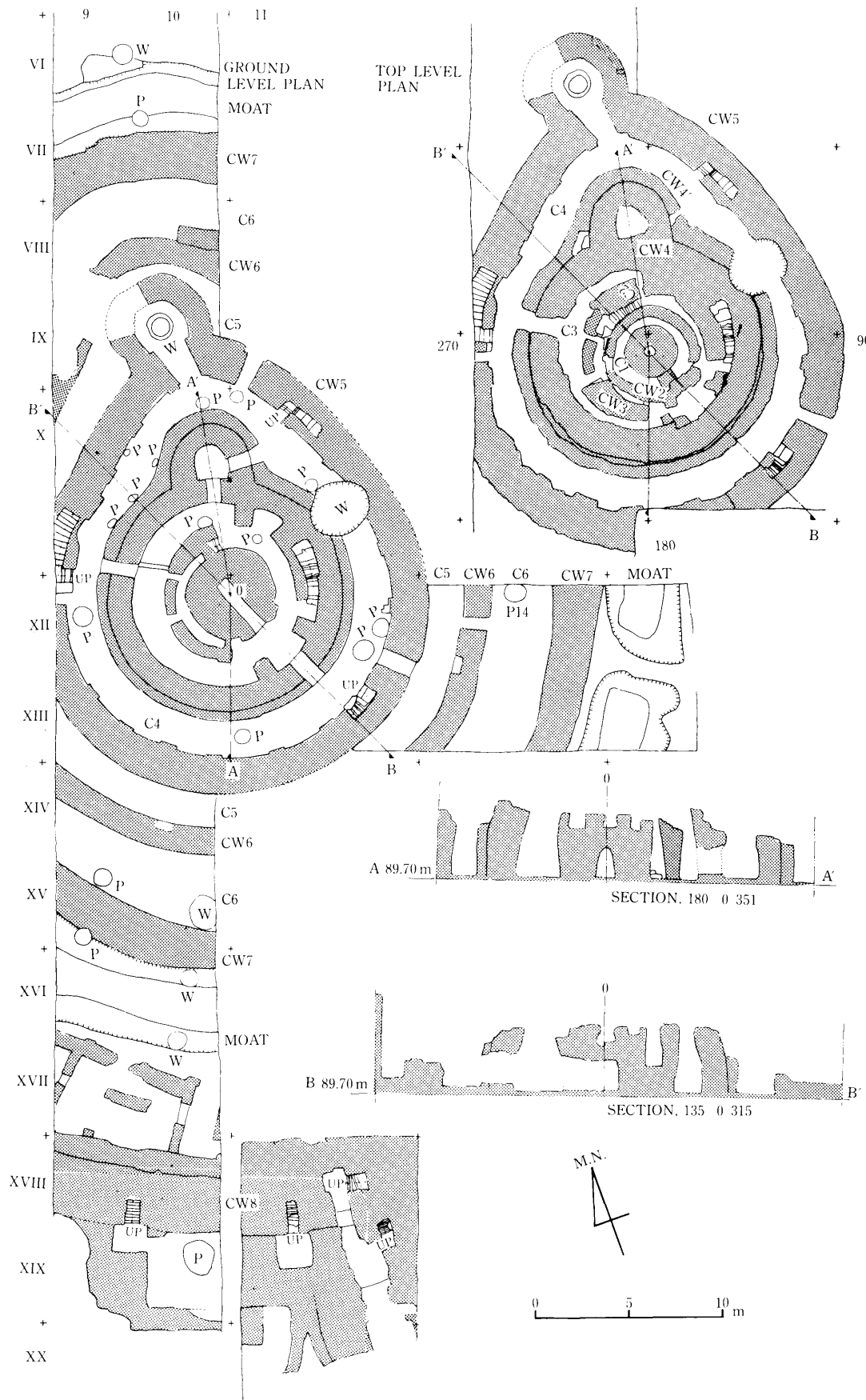


Fig. 5 テル・グッバ VII層 平面 断面図 Plan and Sections, Level VII, Tell Gubba

の間を五つの回廊(C 2～C 6)がめぐる。この外側には周濠が掘られており、さらにその外側にも最外郭の周壁(CW 8)がある。このようにして、建物の中心部から南側の壁端まで約40m、復元すれば径約80m範囲の円形プラン、厳密に言えば、やや南北に長い楕円形プランの建造物ができあがった(Fig. 5)。

周壁CW 3, CW 4と回廊C 3 円形基壇の外壁にあたるCW 2とCW 3とは、上方で互いに張りだし、床上4.5mばかりの高さで合致し、持送式穹窿をつくっていたらしい。同様な天井架構は、CW 3とCW 4、さらにCW 5も加えて直径約21mほどの上部構造がつくられていたらしい。

周壁CW 2とCW 3との間にある回廊C 2には、北よりに上階へ通じる階段が、逆時計まわりにしつらえられていた(Fig. 5, 6)。階段の下は回廊状の狭い部屋になる。また、回廊C 2の西側には二ヵ所に入口があり、回廊C 3と連結している。

周壁CW 4は基部で壁厚1.3m、上部で1.6mを測る。壁の外周径は12.5mの正円に近いプランであるが、北側に馬蹄形の突出部をつけ、その中を部屋として利用している(Fig. 6, R 3)。部屋には外部に通じる入口(東側)と内部回廊C 3へ通じる入口(南側)とがある。回廊C 3自体も、そのほか外部に通じる入口を西側と東南側の二ヵ所にもっている。周壁CW 4の残存は比較的良好で、残高は3.5～4mに及ぶ。なお、壁の東側には回廊C 3から上階へ通じる階段がある。

周壁CW 4' CW 5と回廊C 4 周壁CW 4の外面には厚さ2～3cmの泥土の上塗りが施されており、一度は外壁面を成していたらしい。ところがその上塗を直接おおって、厚さ50～70cmの日乾レンガ積の壁がつけ足された。それをCW 4'とよぶが、このCW 4'は上部にいくに従ってやや張り出している。これに対応するCW 5も同様であり、両壁は上部で合致し、持送式穹窿を成していた、と考えることもできる。従って周壁CW 4'とCW 5の増築は第II期になされたことが判る。周壁CW 5は壁厚2mで、外周径21mを測る。北側では前述のCW 4のプランに沿って楕円形状(卵形)を呈し、先端に円形の突出部をつくる。突出部の小部屋には径約1mの井戸が掘られていた(PL. 5-2)。周壁CW 4'とCW 5にはさまれた回廊C 4は幅約2mを有し、前述の狭い回廊(C 2, C 3)に比べ広々としている。外部に通じる入口を3ヵ所にもち、屋上に通じる階段も3ヵ所に検出された。階段の位置は入口に近く、それぞれ入口の左手にあり、時計まわりに登る。周壁CW 5の内側には他の壁と異なり一定の間隔で突出部がつく(PL. 4-1)。これは壁面の装飾化でもあるが、上方にいくに従い厚さ、幅を増すことから、天井の架構に関係した施設と推測することもできよう。

周壁CW 6, CW 7と回廊C 5, C 6 これらの施設は第III期の構築である。というのは、周壁CW 6(壁厚1.5～1.6m、残高1.0m)と周壁CW 7(壁厚2.0～2.5m、高さ1.0m)は、いずれも直接地山の上ののっけず、壁の基部と地山の間には、厚さ20～30cmの土器片を含む堆積層がある。つまり、中心建物だけの利用がしばらく続いたあと、なんらかの必要で、それを取りまく二重の壁が築造されたのである。この二壁は部分的にしか発掘されていないが、周壁CW 6の外周径は、南北約33m、東西約28mで、南北方向にやや長い楕円形を呈していたと考えられる。周壁CW 7も楕円形平面で、南北径約48m、東西約40mと推定される。回廊C 5は日乾レンガを敷きつめた床をもち、幅は1.5mであった。しかし、回廊C 6は幅3.0～3.5mと広い。なお回廊C 6における調査時点での観察によれば、ここには天井が架けられていた痕跡がなかった。

周濠と周壁CW 8 前述の周壁CW 7は周濠の内縁にごく接近して築かれている。周濠が時と共になかば埋もれて、その機能を果さなくなった時、それを補強する意味もあってこの壁が築かれたのであろうか。周濠は幅3.5～4.0m、深さ約2.0mのL字形断面で、テル全体をめぐっていたようである。ただ、東側にみられるように、

幅の狭い一部分を掘り残し、濠をわたる陸橋にしていたところもある (Fig. 5, PL. 2)。周壁CW 8は周濠の端から約6 m隔ったところから始まる。この壁は最終的には四重に構築されており、厚さ10mにも及ぶところもある。これは内側より、壁が徐々に外側に増築された結果であり、壁内には階段や、階段つきの小部屋などが施設されていた。周壁CW 8と周濠までの間には比較的広い空間があるが、そこには周壁を利用した大小の部屋がつくられていた。部屋の一部と周壁CW 8の内側部分は同時に構築されており、さらに、局部的ではあるが、この方形の部屋の壁は、周濠上面をおおう埋積土に載って築かれていることから、周壁CW 8も周壁CW 7と同様、周濠がその機能を果さなくなった頃に築かれたらしい。

層位の観察 円形建物は一度に完成したのではなく、ある一定の時間の経過と共に、修復や増築をかさねて、最終的にこのような全貌を呈するに至った。発掘時の観察によると、少なくとも三期の構築過程を経ているらしい。中心基壇とその外側のCW 3、CW 4は地山直上に築かれており、第I期 (VII d) に当る。第I期建物内の床面では三度にわたる床の上昇が顕著に観察され、建物の増築過程とよく対応する。第II期 (VII c) にはCW 4'とCW 5が増築されている。この時期は比較的激しい火災をうけており、火災の痕跡は回廊C 4にまで及んでいた。回廊中では火災にあった泥レンガを多数確認した。なお、周濠は第I期もしくは第II期に帰属することは明らかだが、層位的にはいずれとも決めがたい。第III期の床 (VII b) は、VII cよりはるかに強い火災の痕が残し、白く軽石化した灰が約30cmの厚さで堆積していた。VII b層の大火は中心部から回廊C 6、C 7にまで及んでいる。最後の床 (VII a) は、円形建物終末の床で、床上には日乾レンガの崩れたものが厚く堆積していた。VII a層の床は最初の床VII dからおよそ1 m上昇している。このころになると、周壁を貫通して各回廊をつないでいた三角形の入口は、高さ0.8m、幅1.0m程度に狭まってくる。この床を最後に、円形建物の下部施設はついに放棄されてしまう (Fig. 64)。

土壙と河原石 円形建物の性格を考えるうえで興味ぶかいのは、回廊C 3、C 4の床下に掘込まれていた土壙である (Fig. 5)。これらは径1.2~0.6m、深さ1.5~0.6mのもので、その形状は口が小さく、底が広い袋状をしている。なかには内壁面を日乾レンガでつんだものや、底面に日乾レンガを敷いたものがある。用途は地下の貯蔵穴、排水穴、あるいは敵の侵入を防ぐための落とし穴的な施設、さらには上部構造に関係する施設とする考えもあるが、現在のところ、いずれとも決定しがたい。特にC 4ではほぼ等間隔に配されているようにも受けとれ、なかでも入口の前面やその近くには必ず一つの土壙が存在する。土壙内埋積土は砂質土、もしくは日乾レンガのくずで、まれに灰や人頭大の石がまつているものもある。回廊C 6、C 7でもいくつかの土壙が発見されたが、とりわけ注目されるのはC 6に存在するPit 14 (Fig. 5)で、径約1 m、深さ2.3mを測る。この土壙中からは折り重なるようにして、16体の人骨が出土した。人骨はすべて不自然な姿で横たわっており、おそらく死体が投げ入れられたものであろう (PL. 8-4)。まず最初に小児数人が投げ込まれ、つづいて大人、子供を乱雑に投棄する。これと共に河原石や、焼けた木材なども投げ入れられていた。また、多量の土器片に混って壙底ちかくでは、完形の彩文土器 (Fig. 12-1) と、注口土器が出土した。人骨は子供が多く、成人と推定されたのは僅か5~6体であった。

回廊C 3、C 4、C 5や周濠のなかからは、人頭大の河原石が多量に発見され、陸橋のある周濠東側部分では約150個を数えた。回廊内の河原石はそれぞれの床面上 (VII b, VII c) にあり、崩れ落ちたと考えられるレンガと混在し、入口部や、階段周辺に集中していた。このような河原石が建物内に落ち込んでいるのは、屋上になんらかの役割で設置されていたものが、建物の崩壊とともに下に落ちたものか、あるいは外部的要因、たとえば敵が建物内部へ投石した、というようなことも推測できる。いずれにせよ、現在このテル周辺では河原石の類を見いだすこと

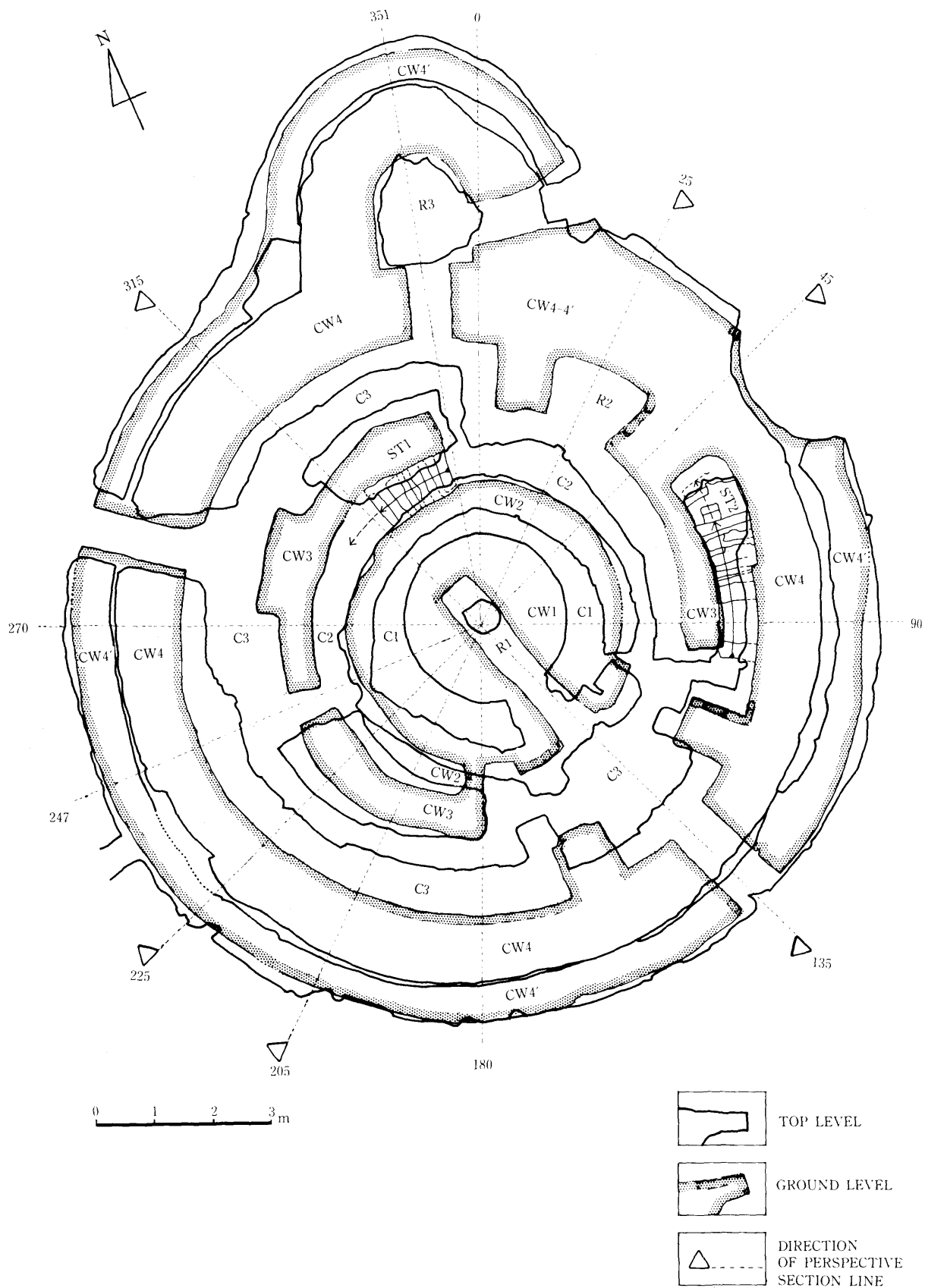


Fig. 6 テル・グッパ VII層 中心部 Central Structure, Level VII, Tell Gubba

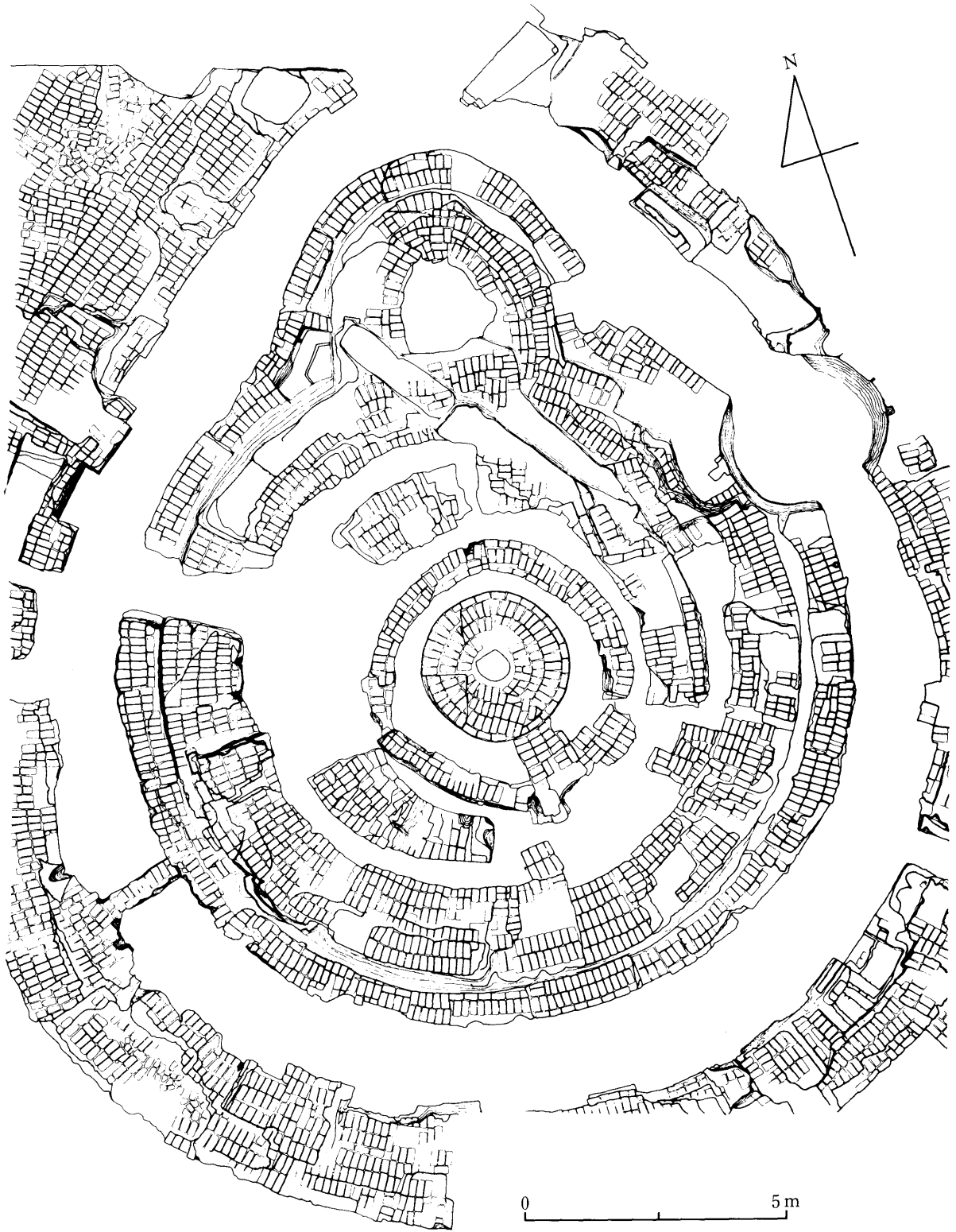


Fig. 7 テル・グッバ VII層 上端平面図 Top Plan, Central Structure, Tell Gubba

はできず、ディヤラ川か、ナリン川の河原より運ばれてきたものである。

遺物出土状況 回廊C 2, C 3, C 4, C 5では、VII d~VII a層を通じ、日常生活が行われたことを示す施設や、遺物に乏しかった。むしろ、床に据えられていたいくつかの粗製大甕の存在は、ここが穀物を主とする貯蔵の場所であったことを強く示唆している。回廊には各層を通じて炭化した小麦の穀粒が多く散積し、なかには粗製土器中に多量の穀粒が遺存している例もあった。回廊は貯蔵の目的にのみ使用されたのではない。たとえばC 4では、多量の骨角器や、石製紡錘車を発見している。このことは回廊が織物を織ったり、紡いだりする場所として使用されていたことを暗示しているのかも知れない。さらに、周壁CW 5の内壁中に銅斧2, 銅鑿1, 銅槍1がセットで収納されていたように(PL.11-1), 穀物のほか貴重な財物の収蔵場所として使われていたようにみえる。粗製大甕の口縁部には、しばしば円筒形印章を転がして押し印したものがあり(PL. 10-5~8), 所有者、あるいは奉納者を明らかにしているかに見える。押し印を有する粗製土器はCW 5より内側に限って発見された。そのほか赤, 黒で彩色された土器, 素文土器, 石製容器, 棍棒頭, スタンプ印章, 円筒形印章, 貝製, 石製の飾玉などが発見されたが、それらはCW 5より内側に集中し、外部に向かうに従い次第に少なくなる。石器, 特に鎌刃などは、円形建物中心部(C 4以内)では比較的少なく、あったとしても製品に限られていた(Fig. 23)。

(2) 初期王朝I期 VI, V, IV, IIIb層

原文字期の円形建物は、VII a層のさいごにくる崩壊をあとに、下部施設の使用は不可能となった。VII a層の上には厚さ1~2mの日乾レンガのくずれが堆積している。しかし円形建物がすっかり放棄されたのではなく、残存する円形建物の上部や、周壁を利用しながら新しい建築が行われている。この時代に使用されたレンガは、前代より多少大きくなり、33~30×15~16×8~9cmである。出土土器も変化する。

初期王朝I期になっても、下層の建物中心部は、径12mほどで多少の高まりをもち、テルの中心的位置を占めている。このため各種の部屋は、ここ(CW 4)を中心に放射状プランに基づいて建築されていた(Fig. 8, PL. 2)。それは、下層の円形基壇が中心的(神聖)な場所、という観念のためか、あるいはある程度の高まりがあったため、やむを得ずそうせざるを得なかったのであろうか。中心部同様、円形建物の周壁CW 8の南、西側も崩壊せず、後代まで利用されていた。初期王朝I期も後半に近くなると、部分的に円形建物の一部をカットしたり、直上に小さい建物が築かれたりするが、基本的には中心部をさけるような配慮が認められる。

この時期の建物は、前代の巨大な一体化した構造に比べ、規模は著しく小型化し、独立した建物が群在するという顕著な変化が認められる(Fig. 8)。

Fig. 8はテル北東部のV層を中心とした平面図である。図中、南側や、中央部に認められるように、長辺10m以上にも達する三棟の大きい建物を中心に、一辺1~3mの小建物が、放射状に配されていた。南側にある大建物は、長辺11m, 短辺4mで、その比率はほぼ3:1であり、長辺中央部に入口をもつ。入口の前面にはやや広いスペースがあり、南東へ延びる通路と連結する。南妻によった建物の内部には、日乾レンガで積まれた、長さ1.5m, 幅0.7mの低い台がある。北妻部分でもコーナーに寄せて、物を置く目的と考えられるベンチ状の施設を検出した。この建物の北側に接して、比較的大型で台形平面をもつ建物がある。出入口は東壁のコーナー近くにあり、前記建物と前面小広場を共有する。入口のすぐ左手には小さな台状施設が壁に設けて築かれている。床面の数カ所には、火を使用した痕跡が顕著に残る。それと共に、床を掘り凹め内面を焼き固めた径30cmほどの小穴二個と、

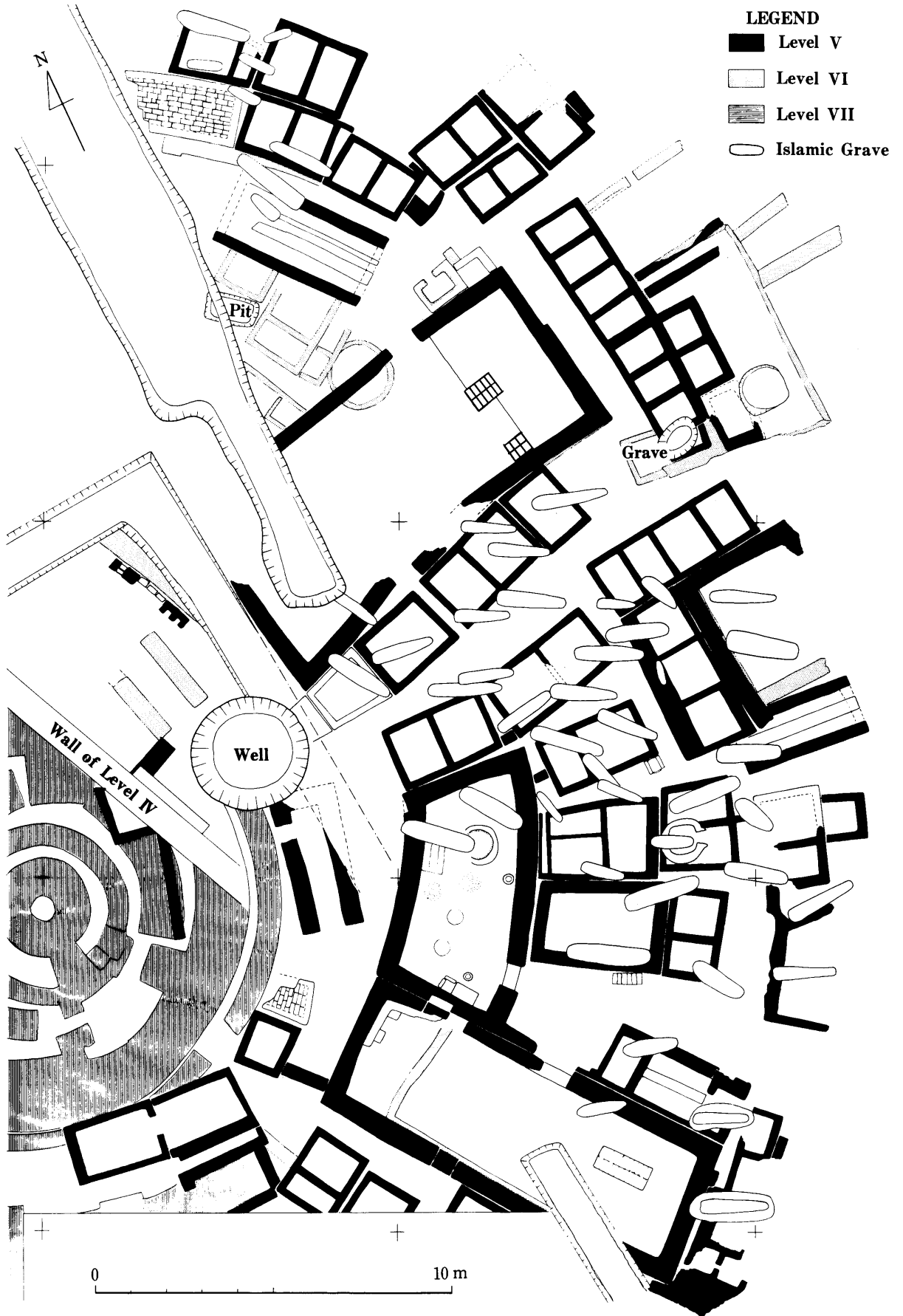


Fig. 8 テル・グッバ 北東区 遺構図 Early Dynastic I Houses Plan, Tell Gubba

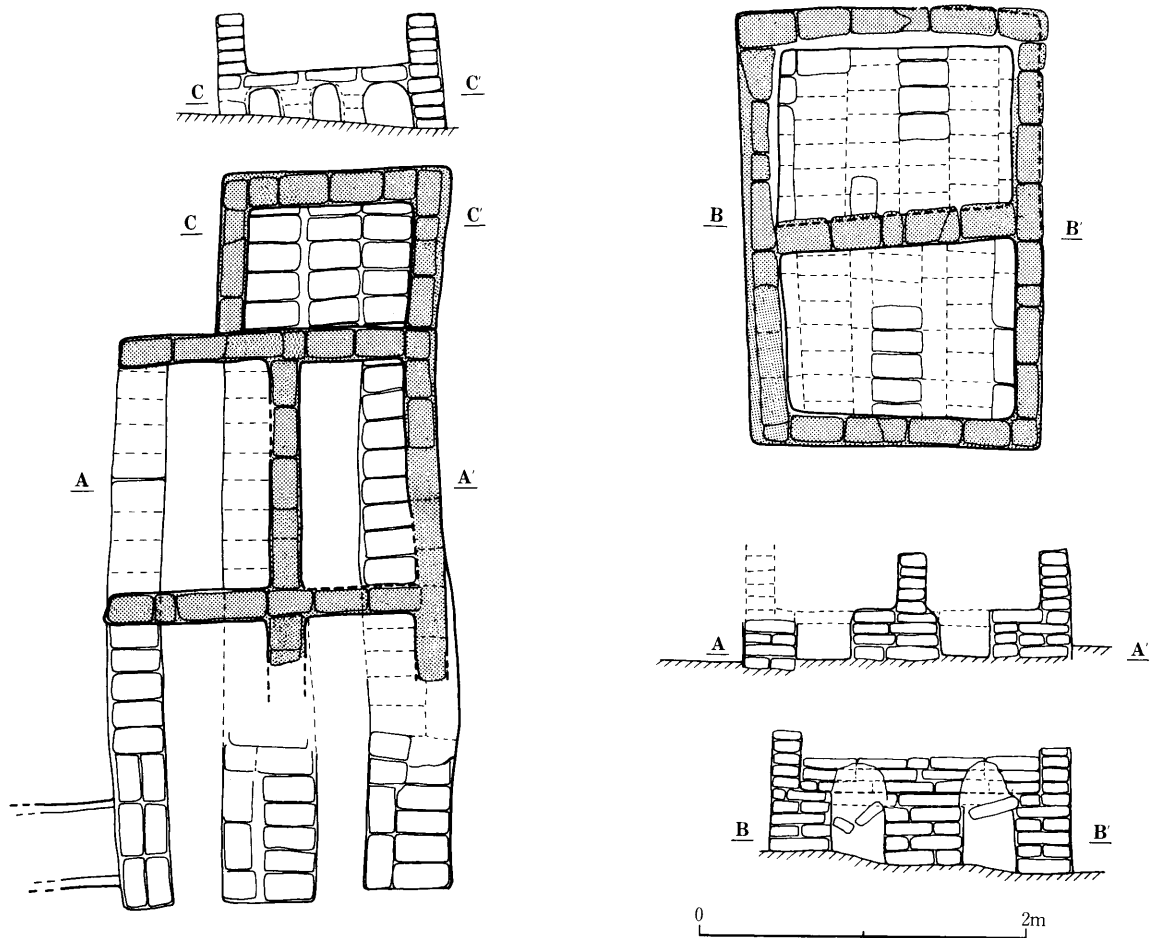


Fig. 9 テル・グッバ 初期王朝Ⅰ期 倉庫図 Plan of Store houses, E D I Period, Tell Gubba

床下に埋め込まれた粗製土器一個を発見した。図中、中央やや北側に存在する大形建物も、長さ11.5m、幅約5mで、前記の建物と同じく、単室で長辺側に出入口をもっている。入口に近い建物内の中央には、東妻によせて日乾レンガで作られた方形台状の施設がある。入口から見て台の奥側にもやや小型の土の台が壁に接して築かれていた。建物内からの出土遺物は少なく、粗製土器二個が床下に埋め込まれていたにすぎない。なお、建物の外側、入口の東には方形の炉が壁に接して作られていた。当区で発見された炉はこれと、台形平面をもつ建物内の2例のみであるが、初期王朝Ⅰ期を通じてみると、このような方形、もしくは円形の炉が奇妙なほど多いのが特色である。

大形の建物を中心に、その周囲には小さな建物が配されていた。小建物の多くは2つの部屋をもつものが多いが、なかには単室、あるいは四～七室が一線上に連続して築かれている例もある。また、一つの基礎を利用し、上部を四、六等分して小部屋を設けることも行われていた。これらは、並行する数条の基礎壁の上にレンガで床張りをし、その上部に壁を築いていた (Fig 9)。従って床下は並行する通気孔状となる。この通気孔は幅10~25cmで、日乾レンガ一枚で蓋ができるようになっている。両小口は通常開けられていたらしいが、まれに土器片、大石などで塞いだ状態で検出された例もある。建物の壁厚は既ぬ日乾レンガ半枚分(15~20cm)である。壁が著しく薄いため、人の居住施設としては不向きであり、これに加え、出土遺物は全くといって良いほど発見されず、床下に通風孔状施設を伴うことや、建物の周辺から炭化したムギが発見されることから判断し、これらの小建物は、穀物倉庫の集合体と考えられる。

建物間に配された通路は部分的に2 mほどの広さをもつところもあるが、既ね1 m以下で、ヒト一人か、ウマ、ロバが、やっと通れる程度に狭い。これは通路が企画性をもって配されていたのと異なり、必要に応じて大型建物の周辺に小建物が建て増しされた結果である。通路には灰や土器片が棄てられていた。部分的に小石を敷き込んだところもあった。今回の調査では多量の彩文土器を採集することができたが、これらの大半は通路に敷き込まれていた細片で、とりわけ大型建物の周辺部においてこの現象は顕著である。

初期王朝I期に属する層では、VI, V, IV層と時代が新しくなるにつれ、小建物は減少し、これに変わって、居住のためと考えられる部屋が増加する。それと共に、円形建物を中核とする観念も次第に薄れ、IV層に至っては、かつての中心基壇部分を大規模に削平し、厚い壁が築かれたりする(Fig. 8)。建物の配置も多少は円形に規制されてはいるものの、次第に方向的にそぐわない壁が築かれ始め、ついにIVa層では方向性を全く無視した壁が出現する。初期王朝I期を特色づける赤、黒で彩色された彩文土器も、IVa層以降ほとんど使用されなくなり、無文土器が主流となる。

(3) 初期王朝 III期およびアッカド期 IIIa層

初期王朝I期以降、テル・グッパでは、なおも何らかの生活が営まれていたらしい。この時代に属する建築跡は、後代に築かれたアケメニッド期の建物の地均しで、ほぼ削平され、部分的にしか確認されていない。検出された遺構は、Fig. 8に認められる大井戸、日乾レンガのくずで床張りをした建物などで、後者は、初期王朝I期の建物が、砂、土で床張りされていたのと好対象をなす。また、アケメニッド期の建物直下やテルの端部からは、初期王朝III期からアカド期にかかる頃と推定される土器が多量に出土した。しかしそれらに伴う遺構は明らかでない。

テルの端部から東へ25m離れて設定した地山確認のためのトレンチ中に、この時期に属する墓を発見した。トレンチが狭いため、墓の全貌は明らかでない。墓は現地表下2 mの深さに営まれていた。墓壙は東側に一段深い掘り込みを有するやや不定形の平面で、長さ5 m以上、幅2 m以上を測る。深い部分は日乾レンガで囲まれ、上部には土盛りがあったらしい。壙内には40個の土器が副葬されていた(PL. 8-2)。これと共に内部に黒色物質のつまった二枚貝1組、小さい銅片を発見した。人骨は一段深い部分にて発見したが細片となっており、方向、葬法は明らかでない。

(4) アケメニッド・ペルシャ期 II層

初期王朝III期以降の建物が放棄されて高くなったテルの上に、アケメニッド期の建物は建立されている。建立にあたって大規模な地均しがなされており、この中間にあったと推定される建物レベルは、すっかり消失していた。このような地均しののち、我々が調査の便宜上使用したグリットと、ほぼ対角線をなす方向で建物が築かれた。建材は長方形大形の日乾レンガで、47×25×10cmを標準型としている。

中央建物 (Fig. 10, PL. 12-2) 中心部にある南北16m、東西15.5mの方形の建物で、四辺の壁は厚さ約2.5mを測る。南壁の東にかたよって入口がある。内部は南北の方向で、三つの細長い部屋に仕切られている。仕切壁は厚く、部屋の占める空間より壁の面積の方が大きいくらいである。三つの細長い部屋の床は、河原石(径15~20cm)をびっしり敷いて、床固めがなされており、室内の床面は泥化粧で仕上げられていた。このうち中央の部屋は、ほかより幾分幅広くできており、床面の片側半分(東側)には河原石敷がなかった。おそらくそこに、

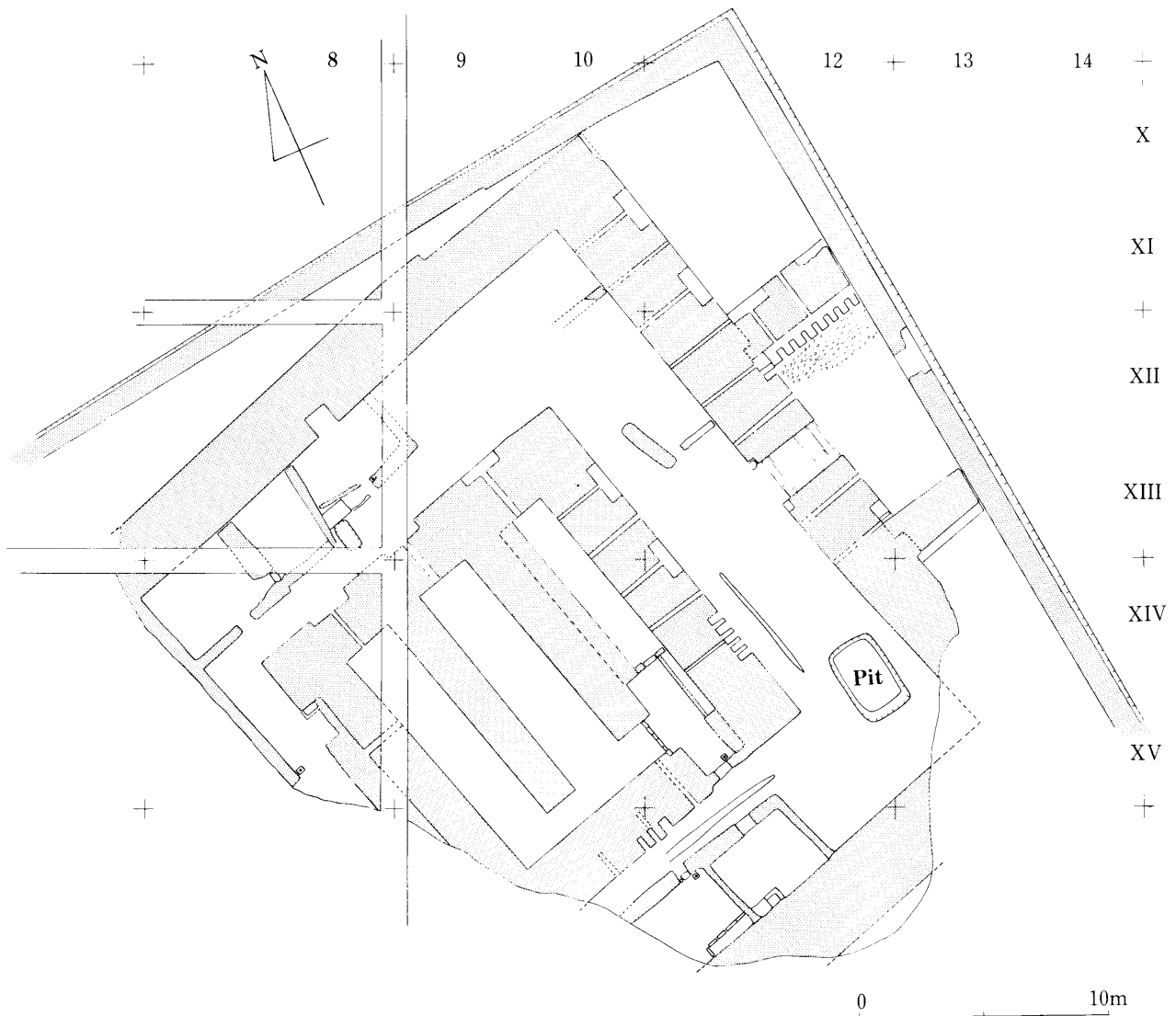


Fig. 10 テル・グッバ II層 平面図 Plan, Level II, Tell Gubba

屋上へ登るための階段がつくられていたものと思われる。屋上に構築物が存在した可能性は、下部の壁が異常に厚く、しかも強固につくられていることから推測できる。また、幅2.5mに満たない細い部屋は、日乾レンガによるヴォルト天井架構が容易であったとみられる。しかし壁の最も保存のよいところでも僅か2.2mの高さであるので、現状では上部構造について知る手がかりに乏しい。

外壁と回廊 中央建物の外を厚さ3mの壁がめぐり、そこに幅約5mの回廊がつくられている。ただ西側についてはテルの端部にかかり、正確な輪郭をつかむことができなかった。復元すれば一辺32mのほぼ正方形となろう。この外壁のうち、東壁の中央に幅約1.7mの入口が設けられている。この門口へは、テルの麓から少なくとも二段のテラスを登ってたどりつく。上方のテラスはしっかりした壁体で輪郭が固められ、入口の両側は外壁に直交する突出壁がテラスの上に張りだしている。いわは城門風のかまえである。とくに北側の突出壁の内側には、内部が楕歯状に仕切られたベンチ状の施設があり、その前面は河原石敷で床固めがしてある。このベンチ状の施設は、古代メソポタミア建築によくみうけるもので、物を安置したり、収蔵する場所に設けられている。

門口を入れば回廊となるが、発掘過程ではこの回廊はさまざまに仕切られて利用された形跡があった。しかしそれが建築当初からの施設であったか疑わしく、むしろ本来は中央建物の外をめぐる回廊であり、この回廊全面、

あるいは中央を仕切って片側に、大きなヴォルト天井がかかっていたらしい。ところどころでヴォルト状たて積みの日乾レンガの崩れたものにでくわしている。

壁龕施設 以上のべた建物はシンメトリックで、輪郭も単純であるが、壁面外側にはすこし工夫がある。外側の壁面には一定の間隔で龕状の凹部があり（幅1.6m、奥行0.5m）、壁面全体として凹凸の変化がつく。そして、凹凸のそれぞれ中央に幅20cm程度の間隙をあけている。この溝は壁の内から外にむかって斜めに下っている。本来の機能は、城壁の上より矢を放つ隙間（アローシュート）であったと思えるが、ここではもはやその機能はなく、壁面の装飾に化したもののようである。龕状の凹部は中央建物では、北壁、東壁にそれぞれ認められ、ほかの二壁にも同じように施されていた可能性がある。しかし東壁南端の壁龕にみられるように、後世に内部が櫛歯状に仕切られ、しかも壁が塗りこめられ、特殊な外からは見えない物置となったところもある。外壁についても、東壁北翼に保存の良い二例が認められたが、本来の設計では、門口をはきんで両側に三ヶ所づつの壁龕がついていたらしい。ところが、ある時、門口にいちばん近い壁龕をふさいで門前両側の突出壁がつくられた。構築過程からいえば、門前突出壁は後世の附加物といえる。しかし使用された日乾レンガの大きさは中央建物、外壁のそれと変わらないので、時期差はあまり大きいとは考えられない。

一方、テラスを支えている壁は、レンガの大きさが33×33×10cmと正方形のものとなっており、壁の方向も上述の建物とはすこしずれているので、時間差がある。おそらく門前のテラスや、外壁の崩れが目立ちはじめた時、これを補修するために構築されたもので、東側と北側に長さ約30mにわたって見いだされた。壁厚は約1m、高さはテラスの面以上にせず、ところによっては地下2mばかり掘り込んで、壁を埋め込んでいた。

この建物は相当長時間にわたって使用されていたらしく、中央建物をとりまく回廊では、床面が50cm以上上昇している。建物の最後の姿にあたるかどうか判らないが、最後に近いある時期に、中央建物の細長い部屋は大火にみまわれ、壁の泥化粧はもちろん、壁内部までも焼けていた。

（5）イスラム期 I層

アケメニッド期の大建造物は、遅くともイスラム時代が始まる以前には完全に崩壊し、その形状を留めていなかったようだ。ただ、バルティア、ササン朝ペルシャ期において、一体どのような状態であったか、はっきりしたことはいえない。発掘調査過程で、ササン朝ペルシャ期のものと考えられる土壙墓二基を確認している。このうちの一基はテルの頂部に近い西側で検出し、細頸のガラス容器三個を副葬していた。もうひとつは、テル北東部に検出され（Fig. 8, Grave）、円形土壙中に斧、鎌、剣、鑿などの鉄器多数と、素文壺を副葬していた。また、テルの表面ではバルティア、ササン朝ペルシャ時代に特徴的な青緑色釉のかかった土器片を多数採集しており、ここで何らかの生活が行われていたのかもしれない。

イスラム時代になって人々はもっぱら墓地として利用する。テルの地表から1.5～2.0mの深さまでは墓壙が無数に掘り込まれていた。これらは二段の素掘土壙である。ほとんど上部施設を伴わないが、なかには墓上にドーム状の墓廟を焼レンガで築いていたらしいもの（PL. 15-1）も発見された。しかし近年は墓地として利用することもなく、葬ったとしても小児に限られたという。ごく最近では完全に見捨てられ、魔性（ジン）の住む丘として村人に恐れられていた。

2 出土遺物

(1) 土器

今回の調査において我々は多量の遺物を発見した。なかでも土器の出土は多く、これらは彩文土器、素文土器、粗製土器に大別される。

初期王朝 I 期を代表する遺物として“Scarlet Ware”の名で知られる、赤、黒で彩色された彩文土器がある。テル・グッパの調査では、この彩文土器の完形、略完形品をおよそ300個体発見することができた。出土状況は、部屋内、通路上、土壇中と様々であるが、初期王朝 I 期の早い頃と推定される VI 層では、土壇出土土器が著しく多く、彩文土器総出土量の半数以上を占めている。たとえば Fig. 8 の北側に存在する土壇 (図中 Pit) は、 $1 \times 1.5 \times 1$ m の方形だが、彩文土器40個体以上とともに多量の無文土器、粗製土器が投棄されており、土器片が密に堆積しているため、壇中には土砂さえも入り込めないほどであった。VI 層ではこのような土壇を他にも数カ所で検出した。V 層でもこの傾向は強く、建物中からはほとんど発見されない。むしろ建物と建物の間にある狭い空間に棄てられているケースが多い。IV 層では、テルの全面が火災をこうむっていたため、ほとんどの遺物は原位置を動いていない。ここでは彩文土器を中心として、遺物は比較的規模の大きい部屋に集中し、しかも部屋内に設けられている方形炉の周辺で発見されることが多かった。

1) 彩文土器

① 原文字期

原文字期に属する彩文土器は、単彩土器と多彩土器に大別できる。

単彩土器 (Fig. 11-1, 3, 6, 7) ほぼ VII 層の全期間を通じて使用されており、彩色には、濃茶色(1)、濃緑色(3)、茶色ないしはオレンジ色かかった茶色(6, 7)などが用いられる。器形は胴部になだらかな脹みを有しており、最大径は胴中位にある例が多く、肩部と胴部の区別はつけづらい。短い頸部、外側に強く傾斜した口縁部、多少丸味をもった平底を特色とする。注口を伴う土器が多く、まれに穿孔された四耳をもつ土器(3)もある。胎土は砂などの混入物の著しく少ない精良なもので、総じて器肉は薄く、土器内面は頸の直下まで篋削りを行っている。外面も胴部以下を篋削りで薄く仕上げ、そののち全面に薄緑色や灰色がかかった白色の化粧土をうすくかける。この上に彩文が描かれる。

彩文は頸の直下に並行する水平線を二条めぐらし、その間をジグザグ文、列点文、並行線文などで埋めている。肩部には幾何学文が三カ所に描かれているが、1のように単純な並行線のみを描く例も知られる。6, 7の文様は単彩土器で最も多く使用されている。

多彩文土器 I 類 (Fig. 11-2, 4, 5) 器形、胎土は前述の単彩土器にちかい。3例ともロクロを使用せず、手作り成形である。広口注口土器2は器高より最大径のほうが大きい。彩色は黒とオレンジ色に近い赤色で焼成後になされている。文様は幾何学文と、蛇もしくは流水を表現したと思われる縦方向の波状文。器肉は薄く、内面は丁寧な篋削りを行う。4は狭い頸部と球形の胴部をもつ。肩部には濃赤色の彩文があり、赤色で囲まれた三角形の中には灰色がかかった黄色で格子文を描く。他に黄色の顔料はほとんど見いだされず、あるいは二次焼成によって変色したのかもしれない。胴部内外面は篋削り。5は円形の頸部と方形の胴部をもつユニークな土器である。彩色は2と同様で、胴部には格子文を描く。これはアミカゴなどをヒントにして作られたようだ。ほかに、これと同様の方型壺の破片二点が円形建物より出土した。

多彩文土器 II 類 (Fig. 12-1 ~ 6) 典型的な後期原文字期(ジェムデッド・ナスル期)の特色をもつ。それ

は、傾斜して外側に強く張り出す口縁部、直立した頸部、肩の高い位置にある小さな段、肩部と胴部を分かち稜線などの特色による。どの土器も、器高と最大径の比率はほぼ1：1で、最大幅は胴中位か、すこし低い位置にある。最大径は約20～40cmを計るが、頸部の径は器の大小にかかわらずほぼ10cmに統一されている。このタイプの土器で注口を有するものはない。まれに四つの把手(耳)が付けられた土器がある。四耳土器には角の取れた三角形で穿孔されたもの(4)と、円形で穿孔されない装飾的なもの(6)の二種がある。成形はすべてロクロ、使用された胎土はI類や単彩土器に比べ砂の混入率が多い。色調はやや灰色がかったクリーム色をなす例と、赤褐色に近いピンク色を呈するものがある。

彩色は濃赤色(プラム・レッド、ダーク・レッド)を肩の一部を残して土器全面に塗り、塗り残された区画にこげ茶色か黒褐色で幾何学文を描く。彩文は肩部中心に描かれ、胴部にまで施文される例は、出土品中わずかに例にすぎない(4)。施文は図中5を典型とし、これに植物、並行線、動物文(1)があるが、動物はごくまれにしか描かれない。なお、1、2、4、6の文様は、つぎの初期王朝I期に出現するディヤラ式彩文土器へと受け継がれる。なかでも2、6はジェムテッド・ナスル朝から初期王朝I期に移る過渡期の土器と考えられる。

② 初期王朝I期

初期王朝I期になって彩文土器はますます盛行し、器種も多彩になる。赤、黒で彩色された“Scarlet Ware”(ディヤラ式彩文土器)は、ディヤラ川流域を中心に広く分布し、ハムリン盆地内でも10指に余る遺跡でその存在が確認された。テル・グッパでは、このスカーレット・ウェアを出土する生活層を大きく3層検出し、各層間において、土器の形態や文様が微妙に異なることを知った。

VI層(Fig. 13, 14) VII層での彩文土器は、径約40cmを最大級としたが、ここでは径50cmを越えるものが現われる(Fig. 13-1～3)。注口土器の量が多くなる。装飾的な翼形の把手をつけたものが発生する(Fig. 14-1, 3)。大型の土器では肩部と胴部の境が明瞭でなく、VII層出土遺物と同様に広い肩部をもつ。一方、小型の土器では、VII層期に胴中位ないし下位にあった最大幅の位置が上方に移動し、肩部と胴部の境には鋭い稜が生じる。四耳(把手)土器も前代に引き続き存在する。これには横方向に長い耳に水平に穿孔したもの(Fig. 14-4)と、垂直に穿孔をしたもの(Fig. 14-7)のほか、さらに耳自体を縦方向に付けた例(Fig. 14-5)も存在する。また、頸部のない注口土器(Fig. 14-2)や、動物形容器に彩色を施すこと(Fig. 14-9)も行われる。

ほとんどの土器はロクロ成形で、大形土器のみ輪積で製作され、仕上げにロクロを使用する。胎土はVII層出土遺物に比べ砂粒の混入率が多くなり、ザラついた器壁となる。しかし例外も存在し、Fig. 14-6, 8のタイプのみはVII層単彩土器にちかい細い胎土が使用されていた。土器の色調は緑がかったものが多く、量は少ないがピンク色を呈するものもある。

施文は後期原文字期(ジェムテッド・ナスル期)と同様で、肩部を中心に幾何学文を描く。動物文や、植物文も多少採用される。VII層の土器では肩部に赤色帯を幅広く施すが、ここでは著しく狭くなり、パネルを区画するだけの役割となる。翼形一耳土器(14-1, 3)や、小形の四耳土器(14-5, 7)では、胴部以下の施文が広く行われ、むしろ胴部に主文様を配するようになる。しかし、大形土器で胴部に文様を描く例は少ない(PL. 10-2)。彩色は土器の表面にあらかじめ化粧土をかけ、器面を平らにしたのちに行われる。この化粧土の一部を平行または斜めにふきとって文様としたものがある(Fig. 13-3)。彩色は、濃い赤色、赤紫、オレンジ赤、赤褐色など多種の赤色が認められる。黒色はVII層期に使用されていた黒褐色や、濃い茶褐色から黒い色へと変化する。

VI層で描かれた文様の一部はVII層期からの踏襲だが、バタフライ文(14-2)、面互鋸歯文(14-7)などのような新しい文様も考案される。小型、中型土器の肩部文様は、三角形の赤の縁取りがあり、この中に斜めに交差する格子文を描く。この文様が連続することもあるが、Fig. 14-8のように、動物文などを文様間に配した例もある。なお図示してはいないが、VII層多彩文土器II類と同じように、胴部の全面に赤彩を施した土器も存在する。

V層(Fig. 15, 16) 形態、施文ともVI層のそれを受けつぎ、大きな変化は認められない。大型土器についていえば、肩部面積が縮小する。頸直下に突帯をめぐらし、ここにキザミをつけたり(15-4)、装飾的な四つの突起をつけた例(Fig. 16)がある。15-3には三角形と横長の耳が交互につけられていた。

文様はVI層出土土器にもまして、ひんぱんに動物、植物文が描かれるようになる。V層の典型的な土器はFig. 15-1, 2, Fig. 17-1で、これら三つの土器の肩部文様は、VI層出土例と多少異なっており、三角形に赤で縁取りされた文様と文様の間に、並行線、バタフライ文などが加わる。さらに、15-1の胴部に認められる連続するループを描く例は、VII, VI層にはほとんどなく、V層期以降好んで使用されるようになる。15-3には幾何学文や赤色帯が等間隔に配され、その間の余白部に魚を補える鳥を描く。この土器はFig. 19-6(刻文土器)とほぼ同一形態である。15-4は径42cmを計る大型土器で、肩部には幾何学文が配される。胴部は幾何学文帯で四つの広いパネルに区画され、そこには繋がれたウシ、草を食べているウシなど、それぞれ異なった情景を描いている。ウシの上部には大きい魚を描く。

Fig. 16はウシの土器と同一地点より出土した。口縁部と底部を欠く。肩部は赤色のバンドで細かく仕切られ、この小さい区画内に、すこしずつ異なる文様を細い線で丁寧に描く。胴部、口縁部は全面赤彩であったと思われる。

IV層(Fig. 17, 18) V層出土品と比べ、大きな器形的変化は認められない。ただ、V層まで行われていた四耳土器、単耳土器はほとんど姿を消す。土器の器形的な変化を大きくみると、VI, V, IV層と新しくなるにつれ、大型土器の器高は増しほっそりとしたものに変る。小型土器ではこの変化が顕著でない。また、整形はすべてロクロでなされ、技術的に進歩したためか、大型土器でも器肉の薄いものがある(18-1)。新しく考案された器形は、深鉢形土器(17-5)、バスケットハンドル付注口土器(17-7)があり、後者はIVb層に集中して発見された。

彩色での変化は、VI, V層に認められた濃赤色を呈するものは少なく、変ってオレンジ赤、スカーレット色を呈するものが多くなる。文様は従来の幾何学文に加え、ウシ、ヤギ、ヒツジ、イノシシ、ウマまたはロバ、水鳥、人物、魚、樹木、植物などの自然事象が描かれ、実際にはこれらがいくつかの組合せで描かれる。なかには物語叙述の意図すらうかがえるものもある。それらと共にバタフライ(17-1, 18-1)文や、縦方向に並列する直線、縦方向の波状文(17-6, 18-2)などの新しい文様も多く使用される。なかでも17-4, 18-1に類似した彩文土器は、ハムリン盆地内に散在する多くの同時代遺跡より発見されている。IV層での鳥の描き方は、17-4~6, 18-2にみられるように、尾と翼を区別していない。この点、V, VI層出土例(Fig. 12-2, 15-3)とは異なっている。また、動物文や人物文の写実性が増し、それぞれ対象を良く観察して描いたことが判る。17-4は肩部に装飾的な小突起3個をもつ。17-5は絵付けのさい土器を逆転させたため、文様は倒置している。18-2に描かれた人物は、動物のような顔をしており、両手で二匹の動物の首をつかんでいる。この人物は、頭髪はボサボサで長いあごひげをはやし、腰からミノ状のものをまとおう。人物を乗せた動物(山羊)も人物と同じように、ふさふさした毛をたくわえている。

VII層から、VI, V層にかけて盛行した彩文土器も、IV層期以降急激に行なわれなくなり、テル・グッバは新しい

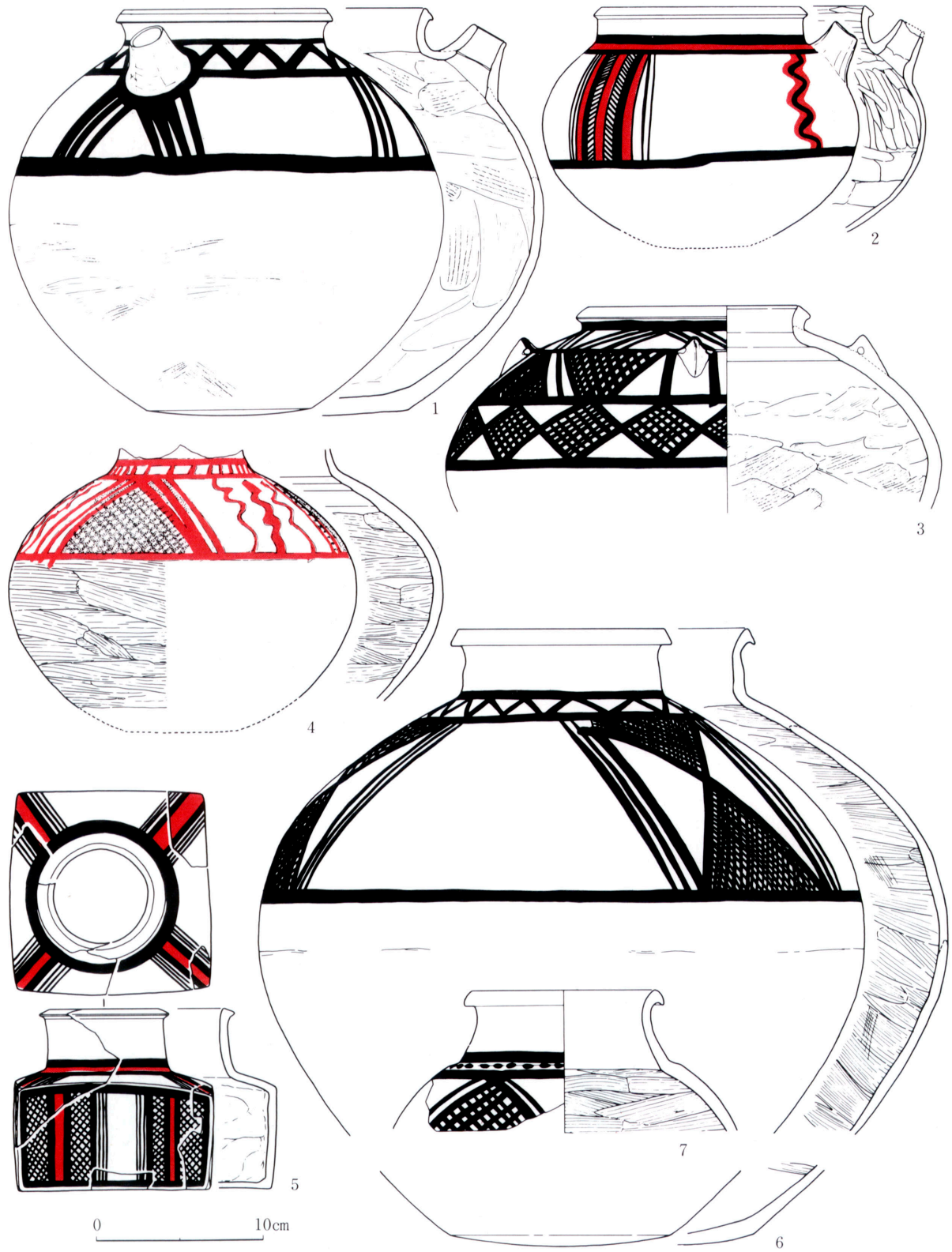


Fig. 11 テル・グッバ VII層 彩文土器 Painted Pottery, Level VII, Tell Gubba

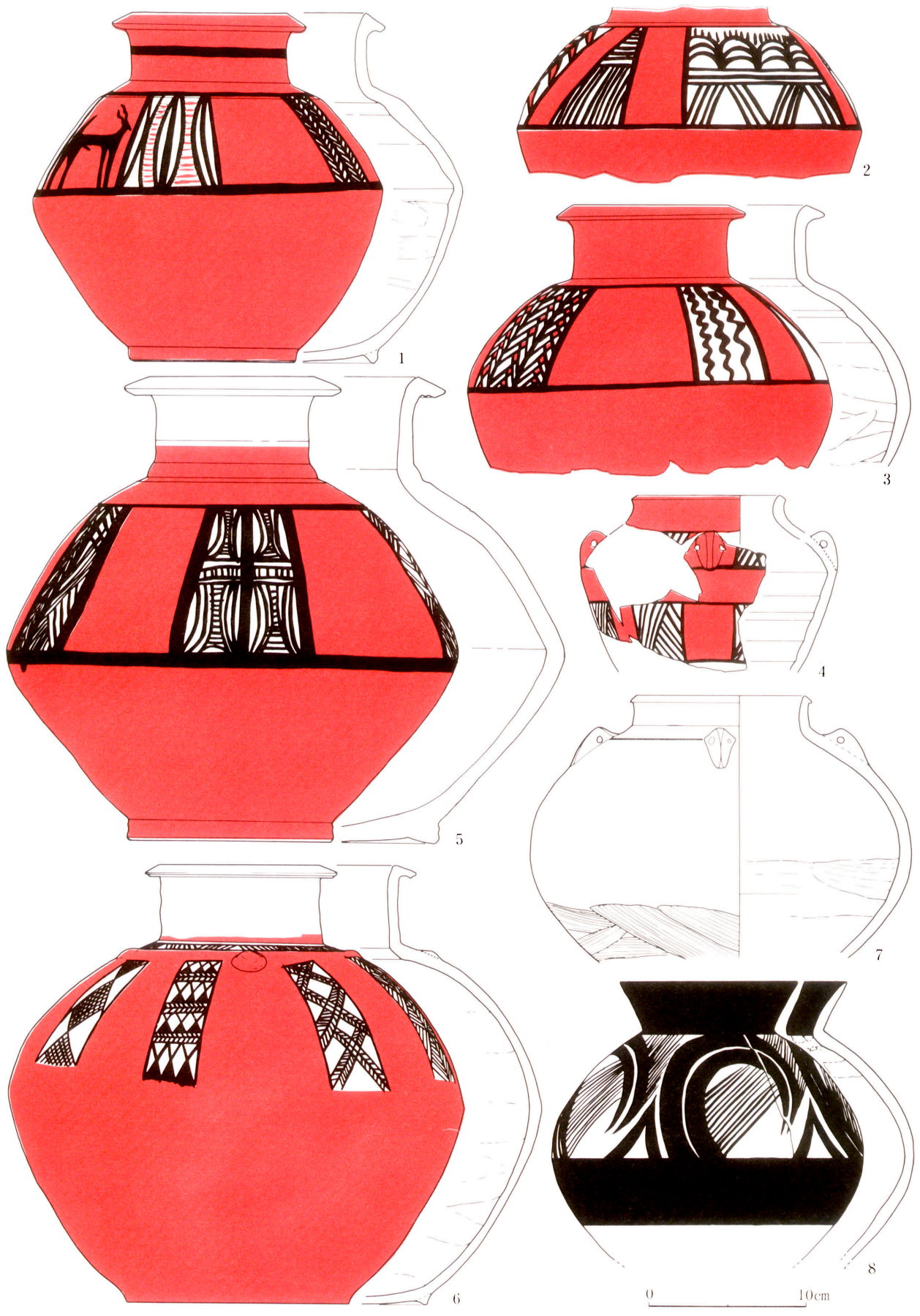


Fig. 12 テル・グッバ VII層 彩文土器 Painted Pottery, Level VII, (1~7), VI(8), Tell Gubba

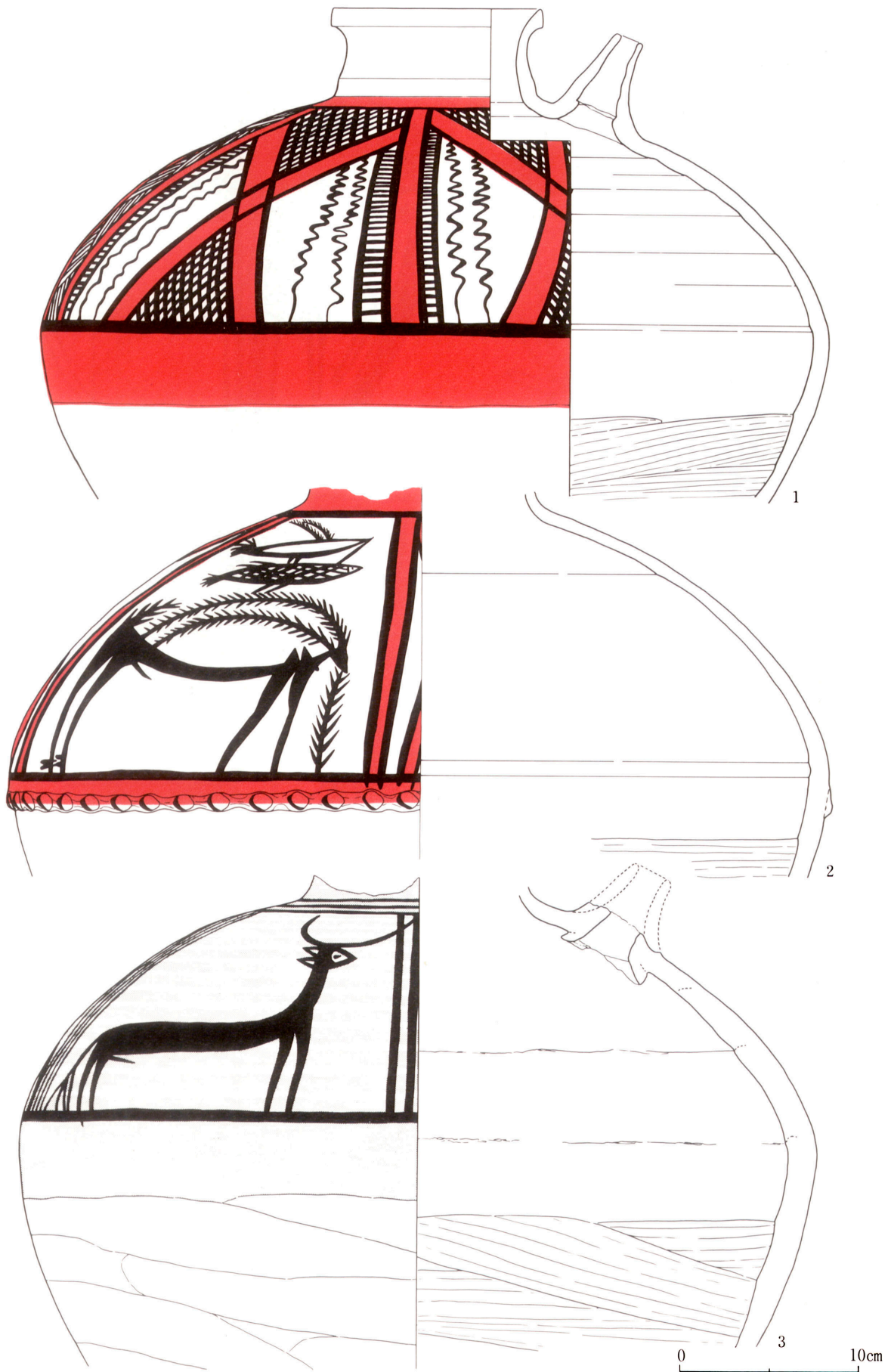


Fig. 13 テル・グッバ VI層 彩文土器 Painted Pottery, Level VI, Tell Gubba

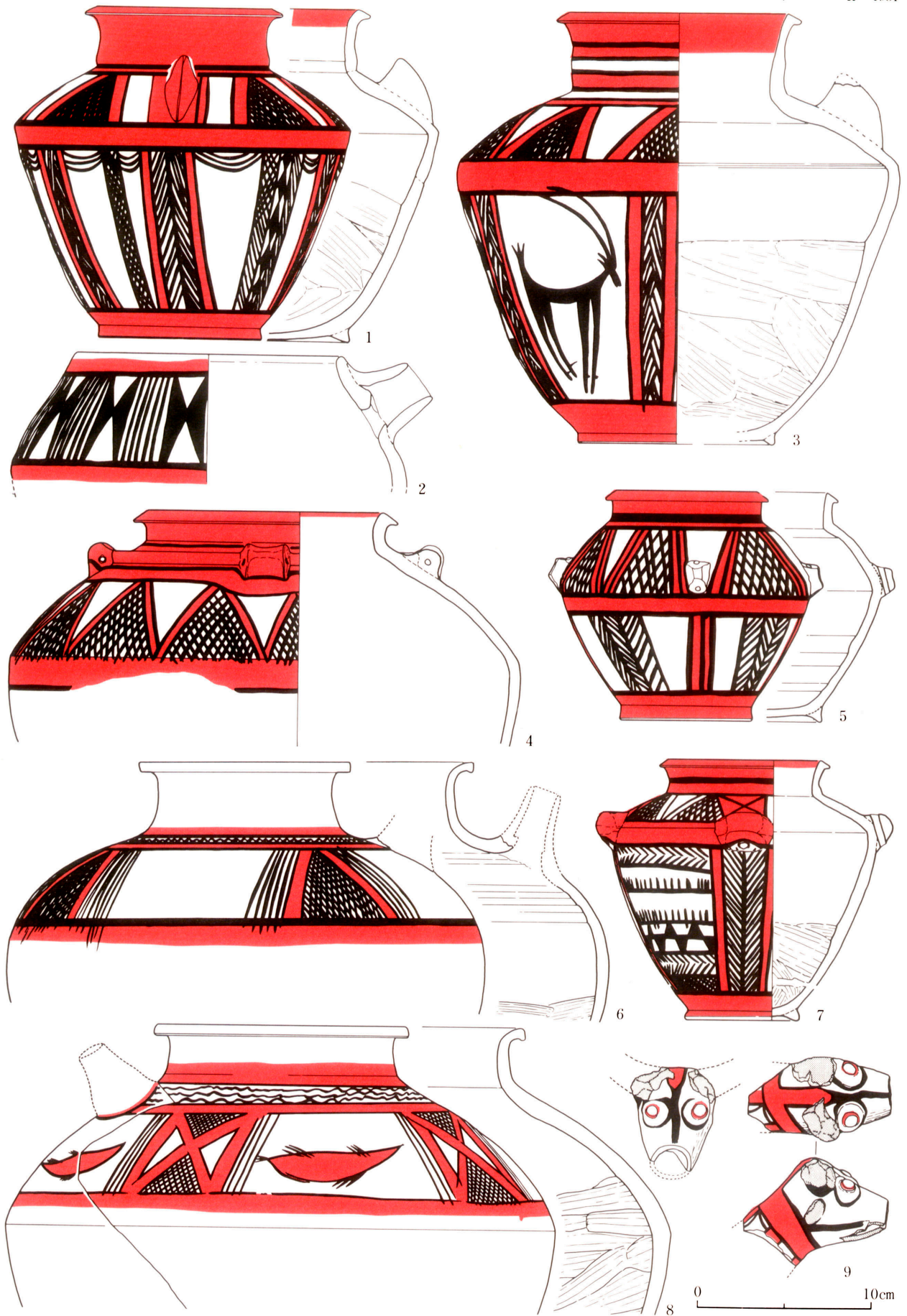


Fig. 14 テル・グッバ VI層 彩文土器 Painted Pottery, NoS. 1~4, 6~9 Level VI, No. 5 Level V, Tell Gubba

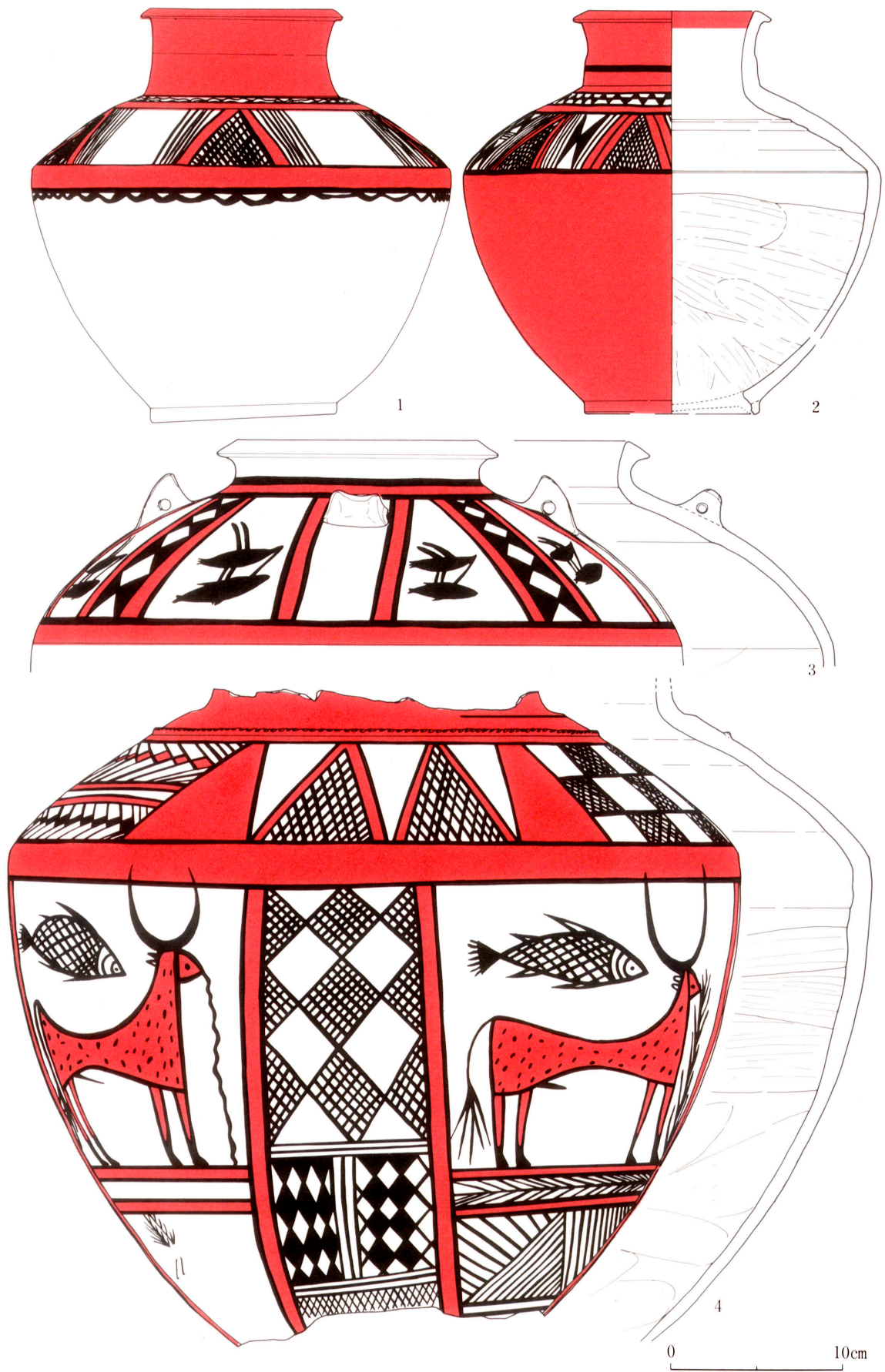


Fig. 15 テル・グッバ V層 彩文土器 Painted Pottery, Level V, Tell Gubba

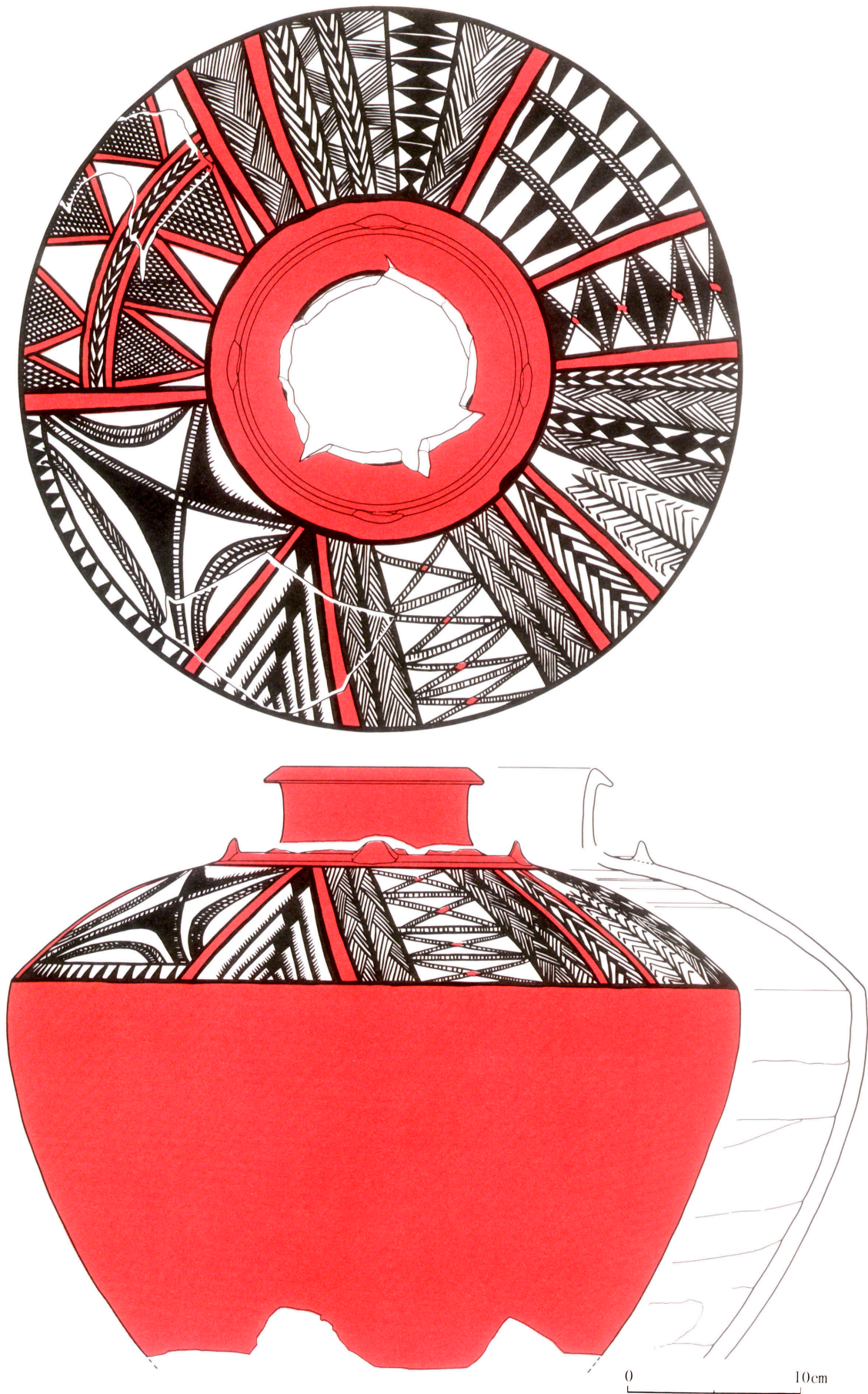


Fig. 16 テル・グッバ V層 彩文土器 Painted Pottery, Level V, Tell Gubba

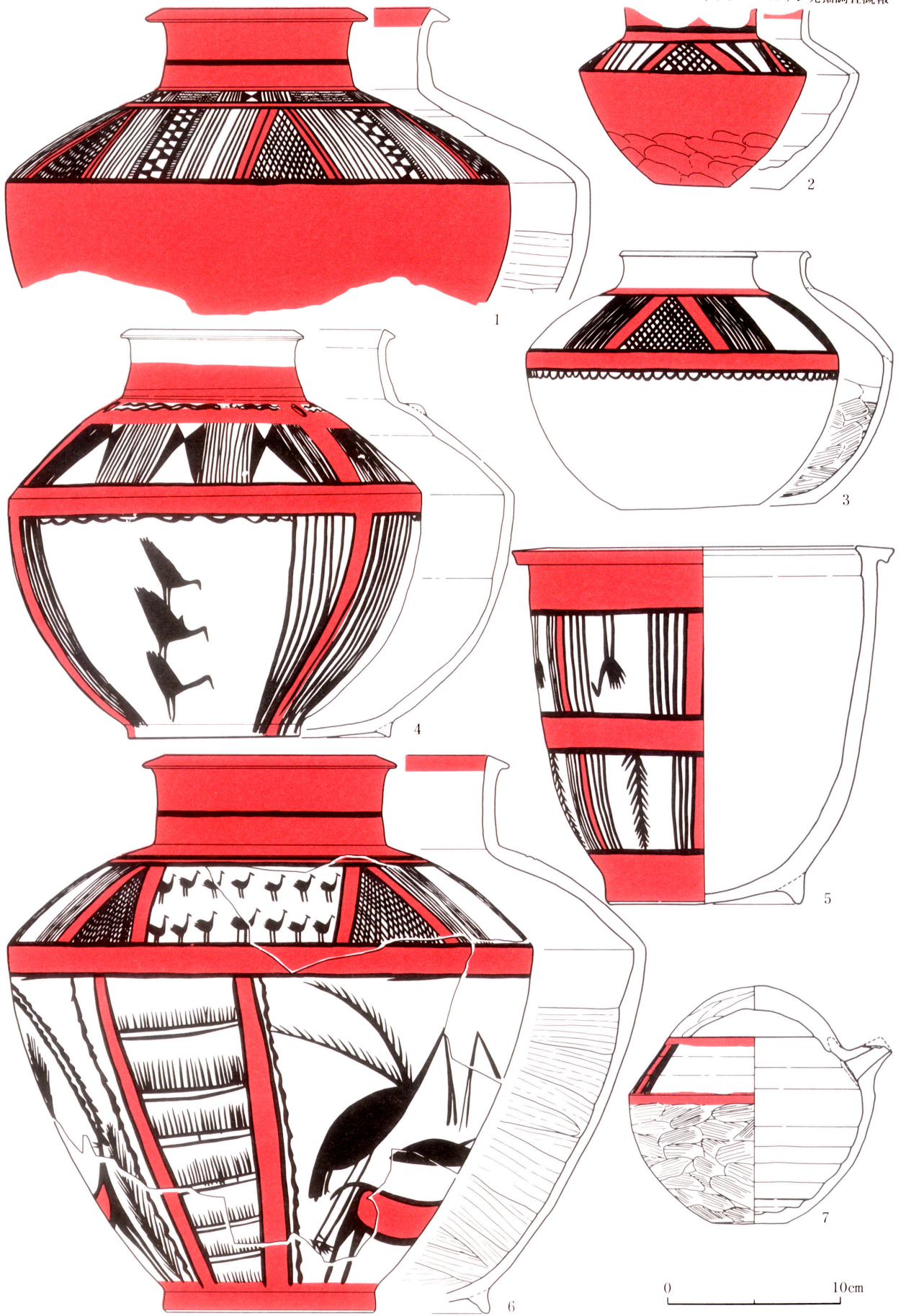


Fig. 17 テル・グッバ V, VI層 彩文土器 Painted Pottery, No.1 Level V, NoS.2~7 Level IV, Tell Gubba



Fig. 18 テル・グッバ IV層 彩文土器 Painted Pottery, Level IV, Tell Gubba

時代を迎える。Ⅲ層での彩文土器出土例は皆無に近いが、例外的に、前述したテル裾部発見の初期王朝Ⅲ期頃と推定される墓より、直立把手付の完好な彩文土器を発見した (Fig. 21-2)。彩色は黒と、オレンジ色がかった赤色である。

Fig. 12-8はⅥ層に集中して発見される土器で、Ⅶ層期の土器とも Scarlet Wareとも異なる。ロクロを使用せず手作りで成形され、球形に近い胴部と、くの字形に外反する口縁部を特色とする。精良な胎土を使用しており、外面には化粧土がかかる。彩色は緑がかった灰色、文様は一端が細く尖って終わる重圏で、円の中と、つぎの円との間には並行線を密に引く。これは鳥の翼、あるいは動物の角を図案化したものであろうか。量的には少なく、他地域 (イラン方面) からの搬入品と考えられる。

2) 素文、刻文土器 (Fig. 19, 20, 21)

19-1~6は円形建物に伴うⅦ層より出土した。半円形に近い壙 (1) と、側面がほぼ直線的に立ち上がるもの (2) がある。細身の坏 (5) は基部が細く、上部に向って少しずつ開く。注口土器 (6) は円形建物中心部の炉の中に納められていた。直立する口縁を有し、胴の張りはきつい。胴部下位には油状のものがにじんで、こげついた痕跡がある。小型壺 (4) の類例は円形建物から多量に発見された。壙形土器 (3) は器肉も厚く、1, 2と異なった使用目的らしい。Fig. 12-7に示した四耳土器はⅦc層床面より出土した。器形は前述のⅦ層多彩文土器Ⅰ類および Fig. 11-3と類似する。

19-7~13は初期王朝Ⅰ期 (Ⅴ, Ⅵ層) 出土品。壙形土器 (7, 8) はⅦ層期のそれに比べやや大きく、口縁部が内湾気味となる。口縁部の内側に張り出した稜をもつ土器 (9, 10) は、Ⅶ層出土品 (19-3) からの変化と推定されるが、器肉厚く、極めて雑なつくりである。この種の土器は初期王朝Ⅰ期の全期間を通じて発見されるが、器としては重く、さらに上記のような特徴から壺形土器等の蓋として利用されたと考えられる。細身の坏 (11) は、Ⅶ層出土例より大型化し、基部は安定したものとなる。体部は中位よりやや上から外反し、ラッパ状に開く。広口注口土器 (12) は、内外面とも篋削りの痕跡を明瞭に残す。刻文四耳土器 (13) はⅤ層出土の彩文土器 (Fig. 15-3) と多くの点で共通する。耳と耳の間と胴部にはキサミを施した突帯を配している。

20-1~5は初期王朝Ⅰ期 (Ⅳb層) 出土品、壙形土器 (1, 2) は下層のものに比べさらに大型化し、口縁部は外反する。灰色土器 (5) は北メソポタミアから発見されるニネヴェ^{注3}Ⅴ層タイプの土器である。灰色刻文土器 (3) は、胴部外面を細い竹管で施文する。なお、3, 5ともにⅣb層に集中して発見された。

20-6~8はⅢb層出土品。翼形把手付壺 (6) の肩部の高い位置には刻文がある。注口土器 (7, 8) には二種類あり、7は注口が短く、ずんぐりした器形をもつ。8は長く細い頸部をもち、注口は頸部に沿って高く直立する。胴はほぼ球形にちかく、頸の直下には刻文帯がある。

20-9~19はⅡ層出土品。壙形土器 (9~11) は平底で口縁部はやや外反する。9, 11のタイプは、Ⅱ層で最も多く発見された。やや深い壙形土器 (12) の器肉は薄い。突底小型壺 (13, 14) には、13のように器肉が厚く直立する短い口縁部と乳頭形の底を有するものと、器肉薄く、やや長い口縁部を有した精製土器 (14) がある。彩文土器 (15) には黄褐色の彩色が口縁直下と胴部にあり、頸部と肩の接合部には低い突帯がめぐっている。器肉は薄い。胴の側面に4つの稜をもつ土器 (16) の胎土は細かく、外面は横方向の丁寧なヘラミガキ調整である。胴部の低い位置には4つの凹み (Dimple)^{注4}がある。把手付土器 (18) は器形上、15と共通する特色をもつ。17はⅡ層建物の床下に営まれていた墓出土品であり、Ⅱ層より多少遡る時期のものかもしれない。底部と口縁部に特色がある。このほか、Ⅱ層建物の床面や、土壌からは、器肉の厚い大形のゴブレット (19) が十数点出土した。

Fig. 21はテルの裾部に検出された墓の出土品。ここでは、口縁部の外側にキザミや波状文を施した高杯（1）、肩部に小さく盛り上がる小突帯を連続させた壺（3、8）、直立ハンドル付壺（2、5）、大形壺（7）、算盤玉状底部穿孔土器（4）が出土した。2の肩部や胴部には、オレンジ色がかった赤色と黒色で描かれた彩文の一部が残っている。5の肩部には三角形に線刻された格子文があるが、このほかにも数例の同類の刻文土器が発見された。すべての土器に共通していることは、砂粒の混入率の多い砂っぽい胎土を使用している。いくつかの例外（6）を除きほぼ卵形の器形をもつ。高台は初期王朝I期のもものと比べ高く大きくなる。なお底部穿孔の小形壺はほとんど大形壺の中に収められた状態で発見された。

3) 粗製土器 (Fig.19-15, 16, 20-4)

粗製土器は、胎土中に多量の砂、碎石、スサなどを混ぜた厚手の手作り土器である。この利用は、ジェムデッド・ナスル期（VII層）、初期王朝I期を通じてあり、出土量は彩文土器や素文土器におとらない。器種は、甕（19-16）が多く、大型鉢（19-15）や、型作りされた鉢（20-4）などがある。甕では、径、高さともに60cmを越える大型品から30cm以下の小品まであり、VII、VI層では注口を有する例も知られた。甕のほとんどが口縁部に近い位置に張付突帯をめぐらしている。型作りの鉢は日常雑器として多量に生産されたようだ。本来、この種の土器はウルク期に盛行するタイプといわれているが、テル・グッパでは初期王朝I期まで残存することが判明した。

(2) 印章 (Fig. 22, PL.10, 11)

スタンプ形印章、円筒形印章、円筒形印章印影がある。

スタンプ形印章（22-16, 17, PL.11-3, 4）には、円形のものや動物形がある。石灰岩やマールを利用し、印面はドリルで小円を連続して穿ち、動物や、意図不明の文様を表現している。VII層床面より一例が出土したが、他は初期王朝I期に属する層より採集された。

円筒形印章（22-18~21, PL.11-5） 18, 19はVII層床面出土、20, 21は初期王朝I期の層より出土した。VII層出土の円筒形印章は、ステアタイト（凍石）で製作されており、文様は花文、幾何学文が多い。VI層期以降ではこれに加え、一方向を向いて並ぶ動物や、幾何学文と動物文を組み合わせた文様などが多くなる。

円筒形印章印影（22-1~15） VII層からIV層を通じ、粗製土器の口縁部や突帯上に、円筒形印章によって押印された印影を多量に発見した。それらからは100種類以上の異なる印章が判別できる。文様は、幾何学（1, 4, 7, 12）、動物（2, 5, 8, 15）、人物（8, 10）、花（6, 14）などがあり、これに複数の文様を組合わせたもの（3, 11, 14, 15）もある。テル・グッパではすでにVII層期においてこの種の押印が行われており、それが、初期王朝I期（VI~IV層）に爆発的に盛行する。しかしIIIb層では土器口縁部に押印することはほとんど行われず、変って、粘土塊に押印されたものが出土する。これとは別に、円形の土製土器蓋の一端に押印をもつものも発見された。全層を通じ押印は粗製土器に限られ、彩文土器や、精製素文土器には行われない。これらは奉獻、あるいは所有者の識別を意図としてなされたのであろうか。

(3) その他の出土遺物

ビーズ 円形建物の回廊や初期王朝I期に属する層からは、石、骨、銅、貝製のさまざまな形をもつビーズが出土した。種々のビーズを1,000個以上もつなぐ例（PL.11-2）もあったが、多くは単独出土品である。石製ビーズの材質は、凍石、水晶、石英、頁岩、方解岩、メノウ、カーネリアン、石灰岩、ヘマタイト、材質不明で

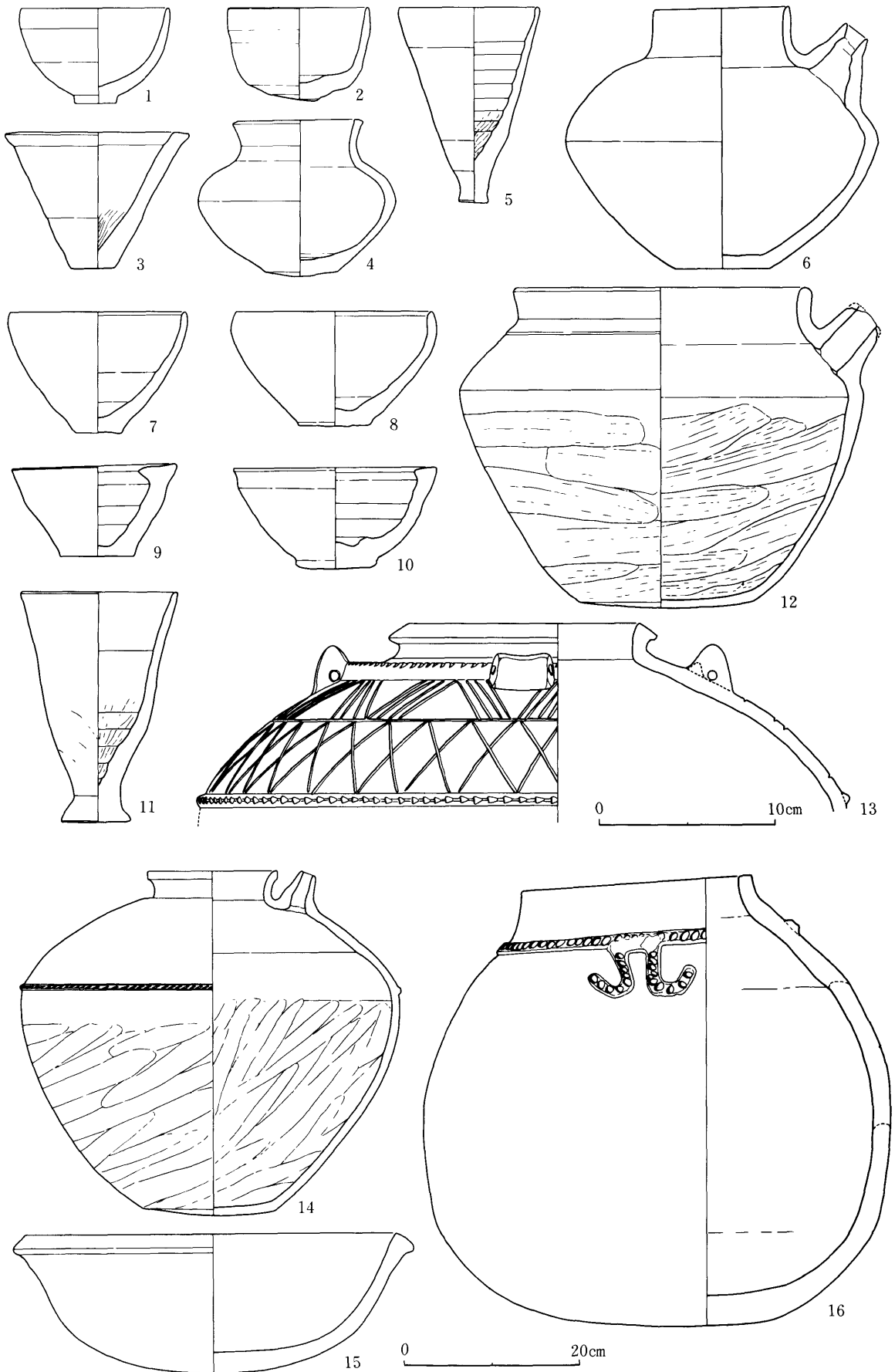


Fig. 19 テル・グッバ VII~IV層 素文, 粗製土器
 Pottery, Level VII (1~6), Level V.VI (7~13), Level IV (14~16), Tell Gubba

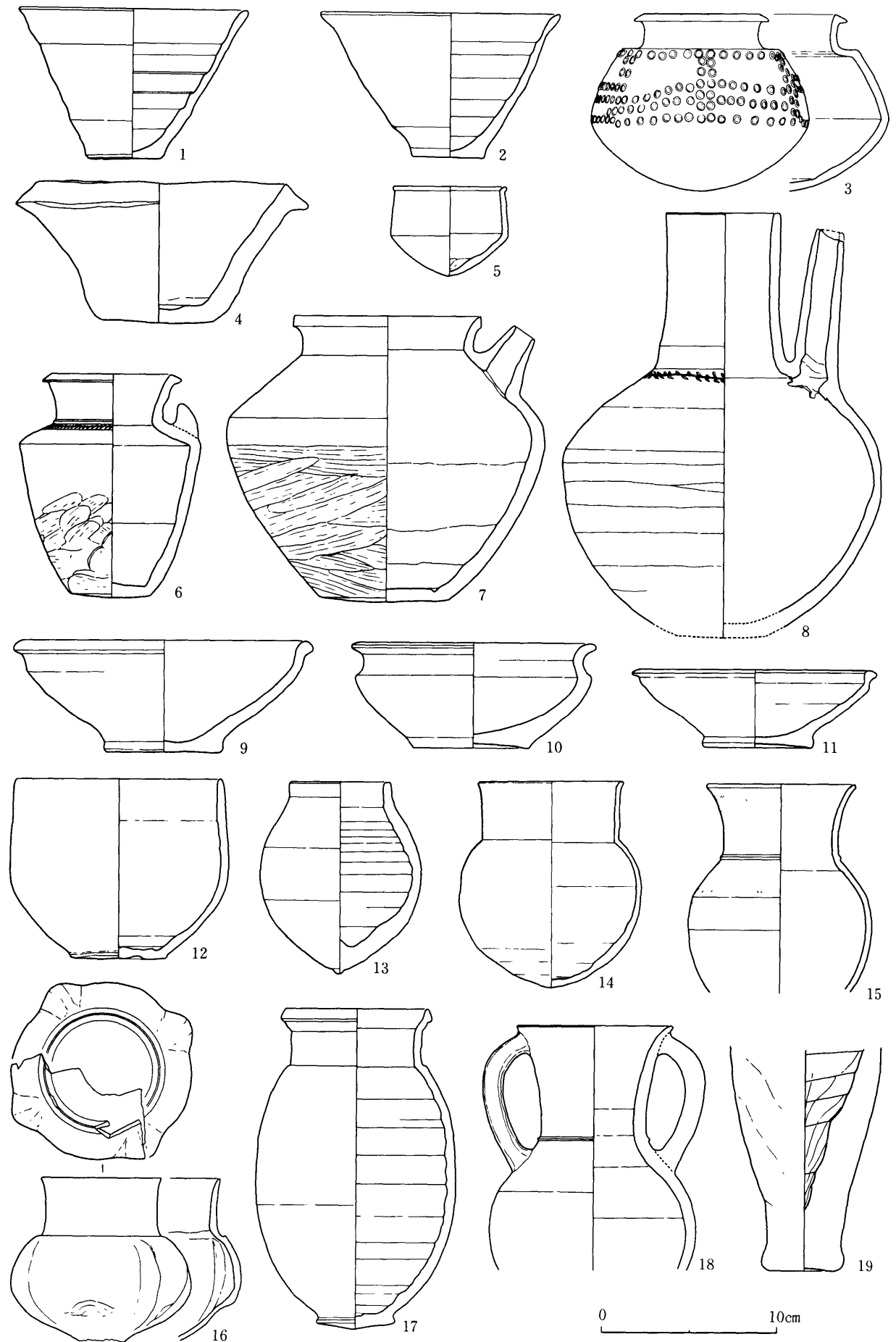


Fig. 20 テル・グッバ IV~II層 土器 Pottery, Level IV (1~5), III(6~8), II (9~19), Tell Gubba

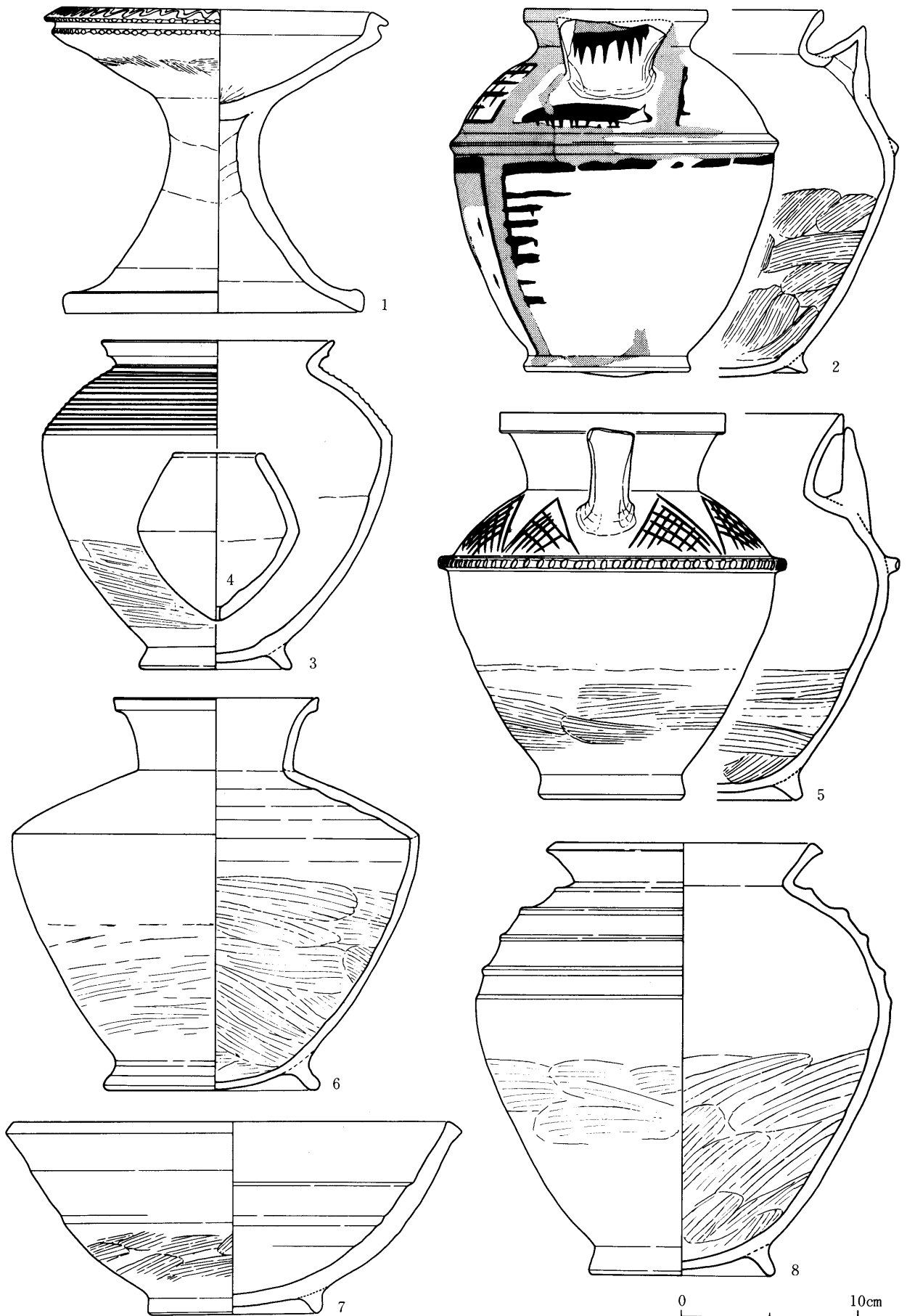


Fig. 21 テル・グッバ 墓出土 土器 Pottery from the Grave, Tell Gubba



0 10cm

Fig. 22 テル・グッバ 印章・印影 Seals and Seal Impressions, Tell Gubba

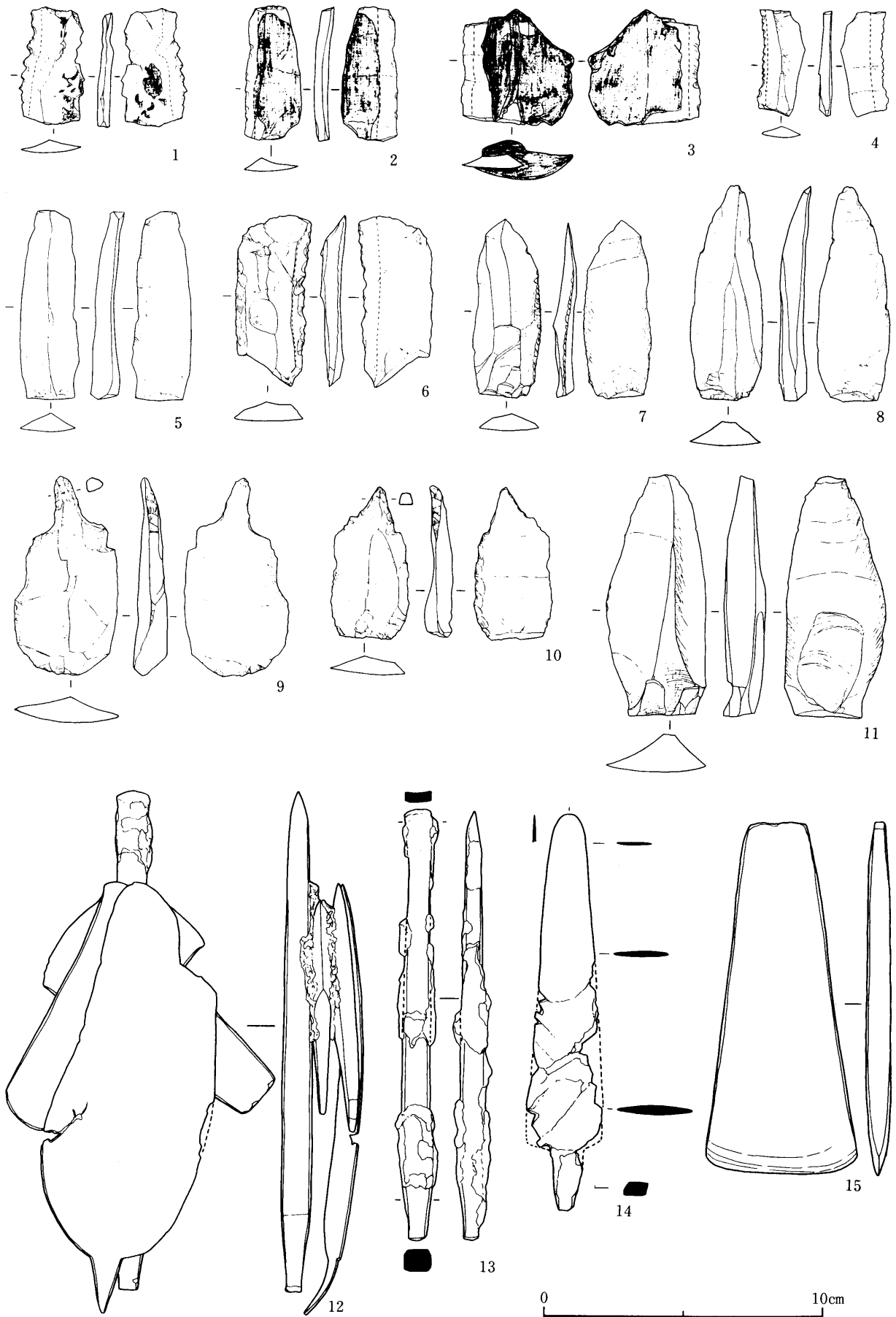


Fig. 23 テル・グッバ 石器、銅器 Stone Artifacts and Bronze Objects, Tell Gubba

ヒスイの如き緑色岩が選ばれ、ラピスラズリやトルコ石は発見されなかった。骨製では動物の角を利用した長いビーズが多く、長さ8cm、径1.5cmに達する大形品もある。貝製では二枚貝、角貝、子安貝など海水産のものが主である。ファイアンス製の小さいビーズもⅦ層円形建物に限って出土した。

銅器 (Fig. 23-12~15) 銅器のほとんどはⅦ層より発見され、上層に移るにつれ少なくなる。短剣(14)、鏝(13)、平斧(15)、環頭針、釘、鈍状銅器、U字形金具、ビーズなどが出土した。ほぼ単品出土であるが、PL. 14-1に示したように、工具がセットで出土することもあった。

石器 (Fig. 23) については後論、第Ⅵ章を参照されたし。

3 小 結

発掘調査の結果、当初だれも想像することのできなかった、円形の大建造物が地山の直上にて出現した。この建築物は、これまでのメソポタミア考古学史上類例のない建物で、すぐれた企画性と構造をもって築造されていた。こうした建物がなんであったかは、調査の最終目的のひとつであるが、はっきり断定できる材料に乏しい。今のところ少なくとも住民共同体の公共的施設であり、豪華な彩文土器や炉を多く伴っていること、特に中心部が炉であって、それを伝統的に重視していると考えられる点は、祭祀的、神殿的性格を強く感じさせる。神殿であると同時に、穀物や、財宝の貯蔵を兼ね備えていたと思われる。中心の炉と、その直下に施設されていたトンネル状の構造は、いわばこの建物の中心施設であり、特にトンネル状の構造は、前面が二重に閉塞され、全体の建物構成上、特異な機能を有していたようにみうけられる。かかることから、防禦的施設が考慮されていた。なんどか掠奪や火災にみまわれ、そのたびに防備が強化されていったようである。しかし、その努力もむなしく、円形建物は大きく崩壊する。一応この建物の建立から崩壊までの存続期間は、ジェムデッド・ナスル期前期から終末までと考えられ、おおむねB.C. 3,000年を前後した頃と推測される。

初期王朝Ⅰ期には、この崩れた円形建物の中心部を中核として建築群が発達するが、前代に見られるようなモニュメンタルな性格はなくなり、穀倉や民家、神殿らしきものが集合する。この時期、南メソポタミアでは都市化がなされるが、ここでは時と共に衰退していく。それは、Ⅵ、Ⅴ、Ⅳ層と時期が経過するにつれ、建物はますます貧弱化していることでも明らかであろう。そしてⅣa層にいたって円形基壇を中核とする観念も著しく薄くなり、下層の円形建物は完全にその生命を失ってしまう。

初期王朝Ⅰ期以降も、テル・グッバでは何らかの生活が行われるが、第Ⅱ層のアケメニッドペルシャ期までの様相は明らかでない。

Ⅱ層建物の性格をはっきり示すような施設や遺物はいまのところみつからない。しかし建物のプランをみると、よく類似した例がベルセポリスのダリウス王の謁見の間の四隅の望楼にある。もう一つの例は、最近イランのヌーシ・イ・ジャン遺跡で発掘された建物で、中央神殿の東側に附属した城砦と名づけられた建物である。^{註5} 共に内部に並行する細長い部屋を有し日乾レンガ積みである。特にヌーシ・イ・ジャン遺跡のそれは、壁龕施設が一定の間隔でつき、外観、機能においても、ひじょうに近い関係を物語っている。

注

1) Delougaz, P., 1947, *Pottery from the Diyala Resion, Oriental Institute Pubrication* Vol. LXIII, Chicago

- 2) *Sumer* Vol. XXXV, 1979, およびバグダッド考古学シンポジウムの成果による。遺跡を記すとソンゴル A, B, スレイマ, アブ・カーシム, カーシム, モトフル, アブガ, アハメド・ハッチョウ, ラズーク, ハラワなどがある。
- 3) 深井普司, 堀内清治, 松谷敏雄, 1974, 『テル・サラサート III, 第五号丘の発掘』, 東京大学イラク・イラン遺跡調査団
- 4) Mallowan, M.E.L., 1966, *Nimrud and Its Remains*, Collins, London
- 5) Stonorach, D. and Raof, M., 1978, "Excavation at Tepe Nush-i Jan", *Iran* Vol. XVI, London

III テル・ソンゴルA

1 調査の経過

テル・ソンゴルAはテル・グッバの南東約500mの所に位置する南北190m、東西140m、比高3m余のテルである (Fig. 24)。ソンゴルとは、「鳥のとまるような所」すなわち周囲よりその高さを認めうる、という意味をもつ。このテルは今回調査対象となったハムリン盆地内では稀有な、サマッラ期の遺跡のひとつである。この時代の遺跡としてはほかに、ナリン川西岸のテル・リハン^{注1}などがあるが、ある程度まとまったアセムブリッジを伴い、しかもハラフ文化やウバイド文化との関連を一遺跡の中でとらえることが可能と思われるのは、今までのところソンゴルAのみである。

遺跡の東側にはディヤラ川、ナリン川へと続く湿地が広がり、テルの形状や遺跡のこわれ方は、かなりの規模の浸蝕作用がこの湿地方向から及んだことを物語っていると思われる。調査は便宜上、テルを北、中央、西、南および出張った最西部に分け、テルの長軸方向を基線とした区割をもって調査区域の名称をつけた (Fig. 25)。ひとつのグリッドはローマ数字とアラビア数字で表わし、1辺5mの正方形に区画した。

1978年6月、テルの南端の高まりより発掘を開始し、順に中央、西、北各区と進み、おもに遺構の有無を確認していったが、テル北区においてサマッラ期の建物遺構がある程度まとまった遺物を伴って確認されるに及び、調査主力をこれにうつすことになった。後、南区の建物遺構もまた北区の建物と極めてよく似ていることから、同時期のものとして発掘区域を拡大し再調査した。これに先立って南区ではウバイド期の墓数基を確認した。中央区では広い範囲で地表面に日乾レンガ列をかすかに観察しえたが、それらの残存状況は極めて悪く、これについては調査を断念し、後述の如きおもにハラフ式土器を多量に含む土壌群を検出し、この性格をとらえることに主力を注いだ。西区では地表直下に日乾レンガによってつくられた遺構があり、出土遺物からはここでジェムデッド・ナルス期から初期王朝期の間のグッバの人々の活動があったと考えられる。

テルのほとんどがそうである如く、ソンゴルAもまた先史時代より墓を営むところとして利用されてきた。全部で280余の墓があった。調査の主力を傾けることとなったサマッラ期の建物調査に及ぶまでに、イスラム期、パルティア/ササン期、イシン・ラルサ/古巴ビロン期、ハラフ期などの墓の調査に多大な時間を費さねばならなかった。これらの墓は建物遺構を切り、かつ墓どうしも切り合いが多かった。

2 層位

テルの最高地点は北区にあり標高90.81mを計る。地山は赤褐色粘土からなり、ほぼ現地形に対応する高さ3mの平坦な丘を呈する。

(1) 北区 (Fig. 26-1)

上層は地表から順に灰赤褐色砂20cm、赤褐色砂20~30cmの堆積があり、ハラフ式土器とサマッラ式土器とを包含する。赤褐色砂を除去した段階でイスラム期からハラフ期までの墓およびハラフ期と思われる窯を検出した。下層はサマッラ期に属する。日乾レンガの崩土は厚く、中心部では80~100cmを計る。この下に床面上の堆積がある。建物4を除いては建物内では灰緑色土が数mmから20cmの厚さであり、この層とその上面に遺物が多い。床は灰褐色土で8~20cmの厚さがあり、遺物を含む。床の下は薄い灰混褐色土か赤褐色粘土の地山をなし、その上面

にサマッラ期の建物が建つ。建物の外では日乾レンガの崩土の下は青緑色土、灰、灰混赤褐色粘土、灰、青緑色土、灰混褐色土、地山と続く。このような堆積は建物1, 2, 3の周囲にみられる。建物2の外の西半から建物4にかけては日乾レンガの崩土の下が厚い灰層となっており、この灰層の上に建物4が建っていた。灰層の下は日乾レンガの崩土、灰混褐色土となる。建物4のみは一群の建物の中で後に建てられている。さて、V・VI・VII-18・19で検出した大きな壁の外、建物7の周囲では日乾レンガの崩土下に青灰色土の堆積がある。VI-17・16ではこれらの層はなくなり、表土、灰褐色粘質土、灰褐色砂質土、地山となっている。灰褐色砂質土の下でサマッラ期の墓（墓247）を検出した。

(2) 南区 (Fig. 26-2)

XXVIII・XXX-20では表土の下に日乾レンガの遺構があったが、これに伴うと確定できる遺物はない。他の地区では表土下に灰赤褐色砂があり、こ

の下にウバイド期とイシン・ラルサ/古バビロン期の墓がある。灰赤褐色砂の下にサマッラ期の日乾レンガの崩土があり、建物内では赤褐色砂、灰緑色土、地山となる。建物の外では地山上に薄い灰層がある。

(3) 中央区

表土は腐食土混褐色砂であり、その下に地山を掘りこんだ土壌の埋土が厚く堆積していた。埋土は2層に大別でき、上層は灰緑色土混褐色砂、下層は赤褐色粘土・灰混緑色土でなる。

(4) 西区

地表から順に灰赤褐色砂、スサ混灰褐色土、灰混褐色砂、灰緑色土混褐色砂の堆積があった。初期王朝期と考えられる遺構はスサ混灰褐色土を掘りこんでいる。最下層はハラフ式土器を多量に含み、中央部と同じ性格の土壌の埋土である。

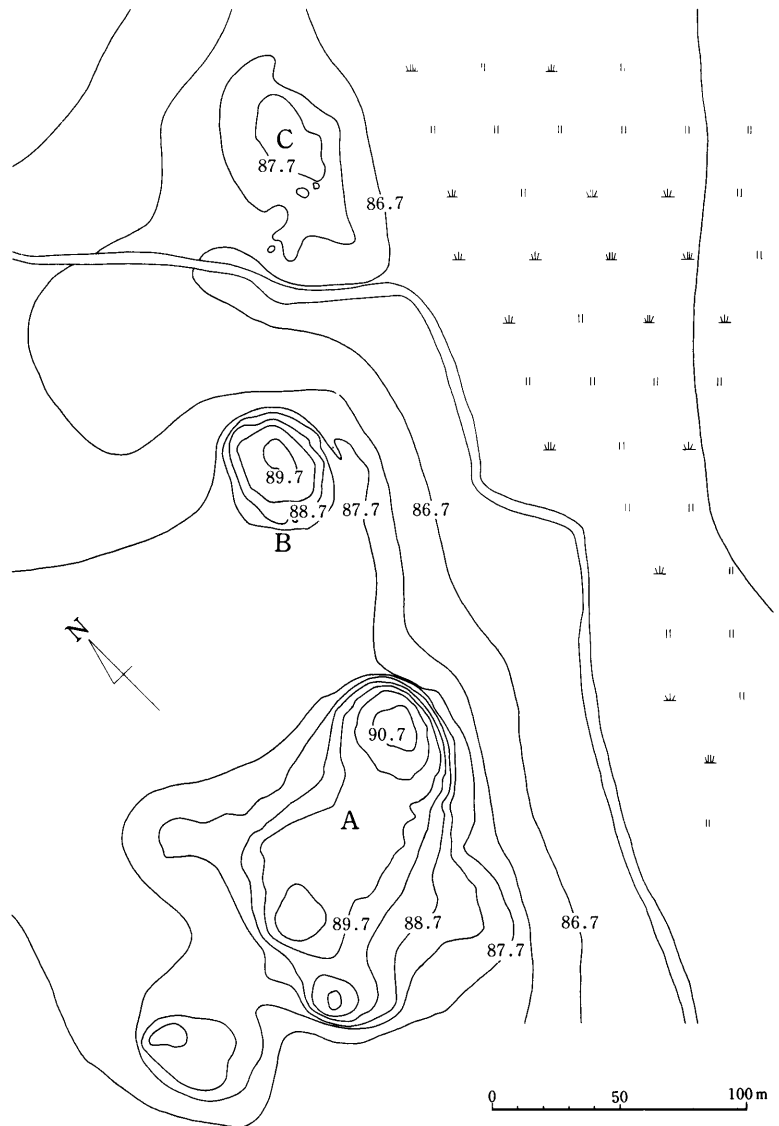


Fig. 24 テル・ソングルA, B, C 測量図
Contour Map, Tell Songor A, B, C

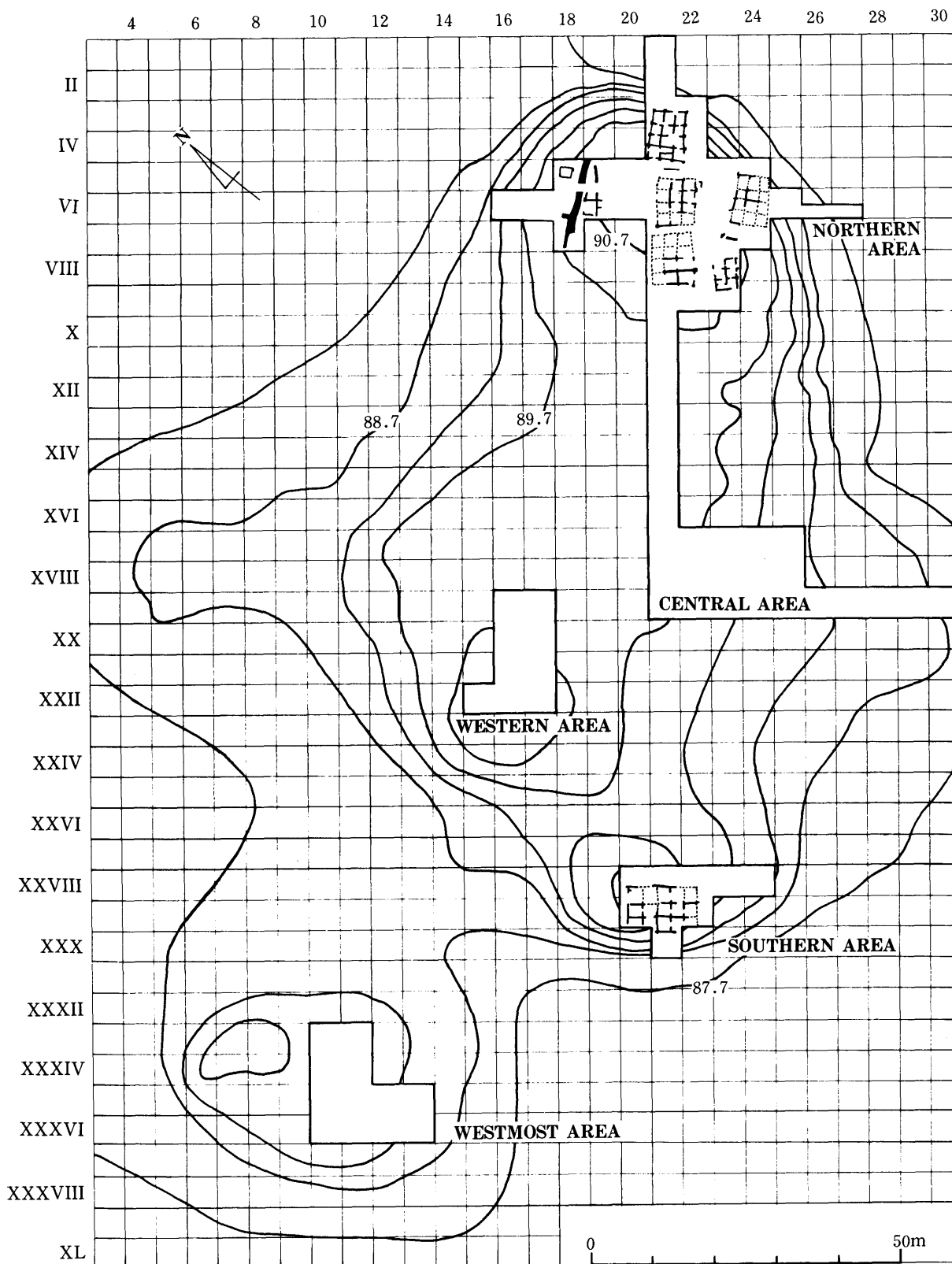


Fig. 25 テル・ソングルA 発掘区域とサマッラ期の建物 Excavation Area and Samarra Buildings, Tell Songor A

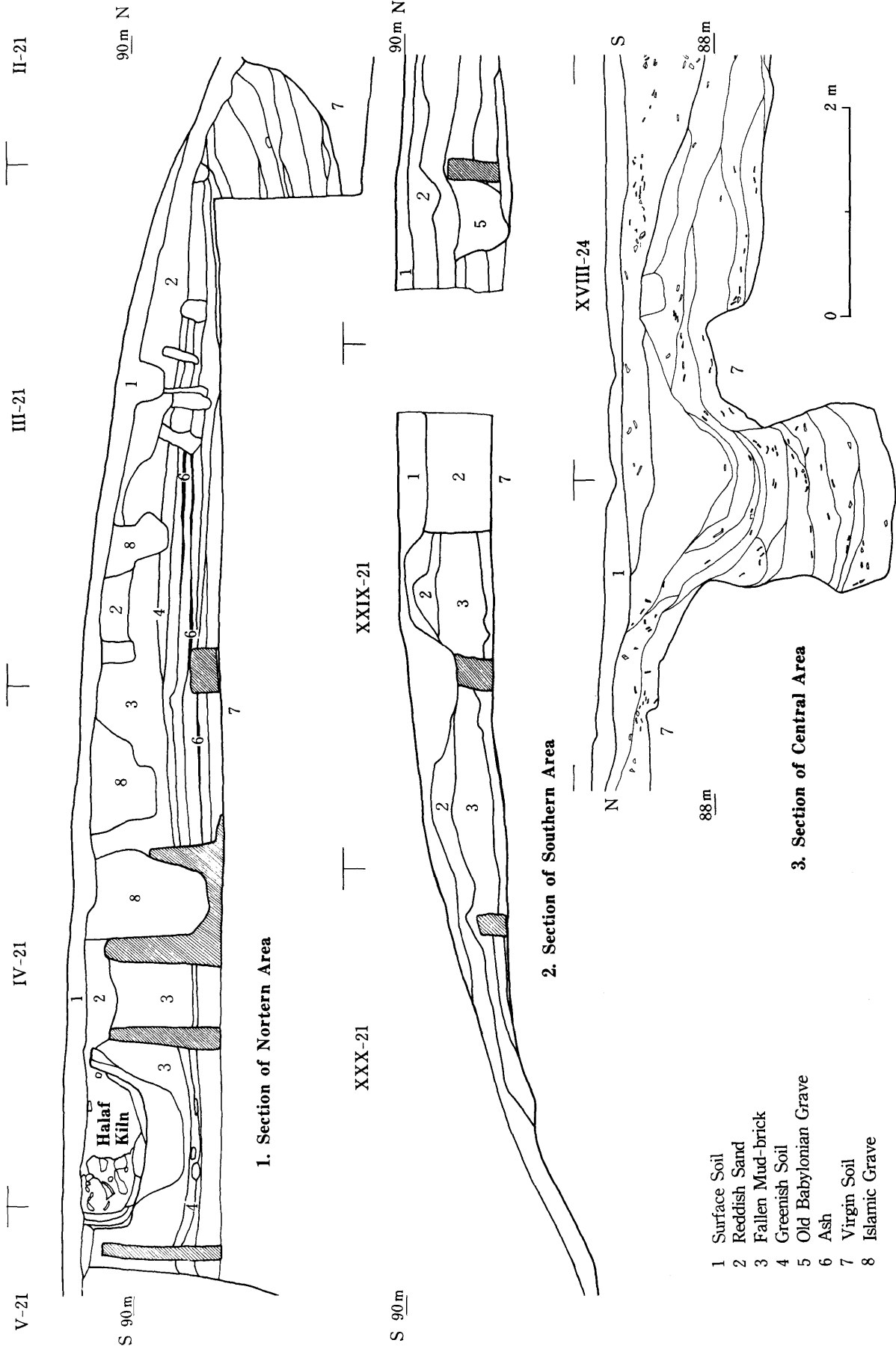


Fig. 26 テル・ソングルA 北、南、中央区 断面図 Sections, Northern, Southern, Central Area, Tell Songor A

3 遺構

(1) サマッラ期の集落遺構 (Fig. 27, 28)

テルの北区および南区の調査によって、サマッラ期の建物群および若干の付属遺構が検出された。後世の墓あるいは種々の掘りこみといった人為的破壊、加えて自然風化ということにより、建物の壁の残存状況は決して良いとはいえない。壁は最高で0.9m残っていた。これらのうち、比較的良好な残存状況の建物はIV・V-21・22にある(建物1)。この建物は地山もしくはその上の薄い灰混褐色土に直接建てられている。すなわち自然丘の平坦面上——この平坦面が人為的整形によるものか、あるいはもともとある程度の平坦面をもつ自然丘であったかは断定しかねるが——に日乾レンガを積み重ねている。使用された日乾レンガの多くは法量70×16×8.5cmの長大なものである。その下面と側面は平らとなっているが、上面はややふくらみ、指幅の凹線が長軸方向に数条み

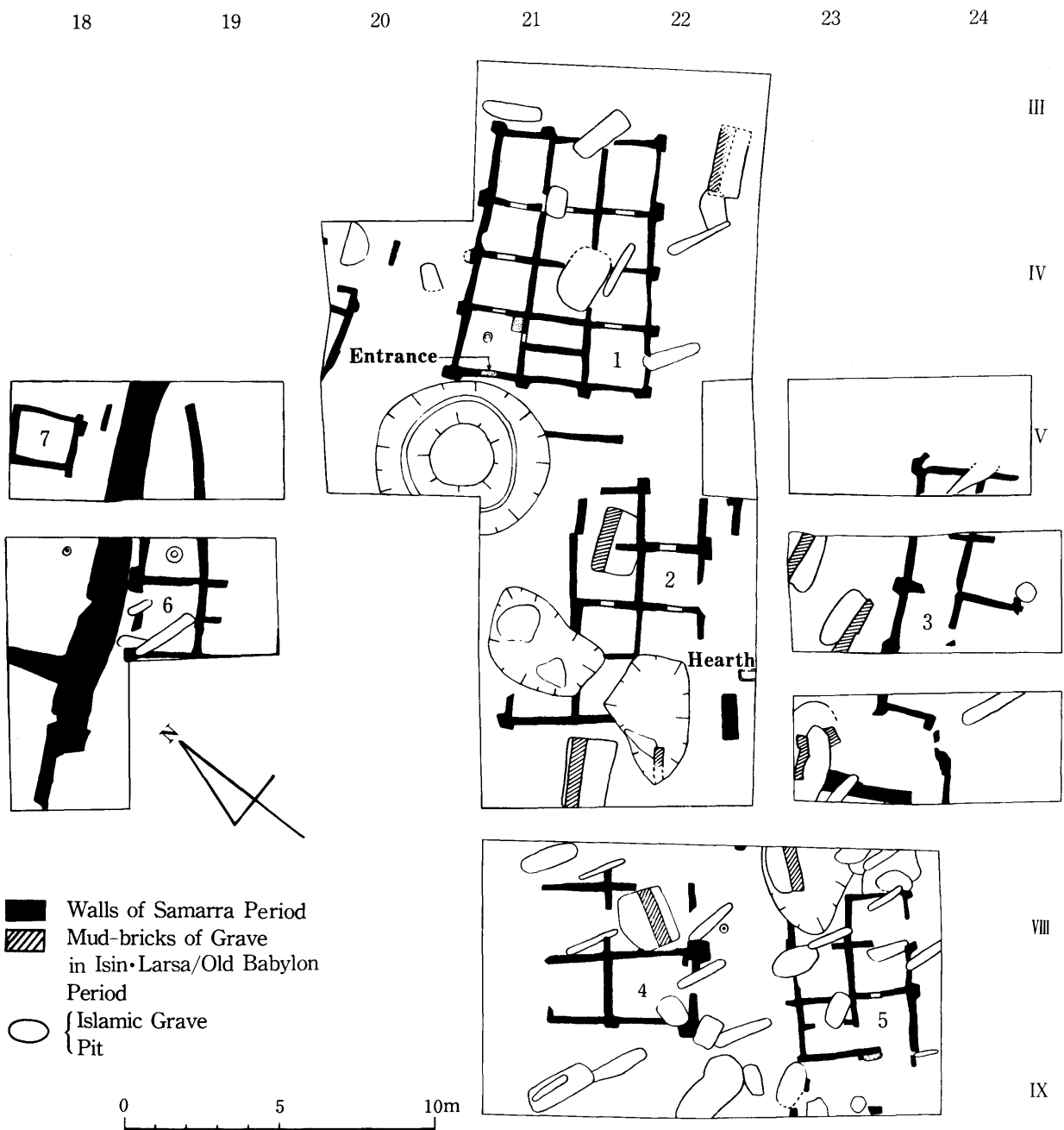


Fig. 27 テル・ソングルA 北区 サマッラ期の建物 Plan, Sammara Buildings, Northern Area, Tell Songor A

られる。日乾レンガの胎土中には割合多くの切りワラの混入を肉眼で認めることができる。このような日乾レンガを平面的には小口を連ねて一列でもって、約6×8mの規模の建物が構成されている。したがって壁の厚さとしては、レンガの幅16cmに内外面の上塗り（最厚4cm）を加えたものとなる。建物内部は基本的には4×3の12室に区画され、内法1.3~1.5m×1.5~2.0mの矩形の小部屋の集合体ということになる。建物の四隅および支切壁と外の壁が交わる場所の外面は、控壁となっている。日乾レンガはすべて組み合わせるように一段ずつ置かれ、控壁の部分では一段ずつ方向が90度異なるように置かれていた。日乾レンガの上下のつなぎ材としては泥が使用されている。その胎土は日乾レンガのものに比較してやや砂っぽい。このようにして壁は薄いが構造的には堅牢であったと推察される。

建物への入口は短辺側の西角の部屋に1ヶ所認められるが、これは粘土と日乾レンガの小片を層状に塗り重ねてふさがれている。屋外に対して開かれたままの入口は、後世の墓による破壊により断定はできないが、建物1では長辺側にはない。各部屋間の通路は長軸方向の4室でほぼ同一線上に開く位置にあり、幅は約50cmと狭く一定している。通路にあたる部分には「敷居」状に日乾レンガ2段がある。建物内の踏み固まった生活床面はこの日乾レンガの上面までとなっている。この床面は壁面部では壁をややのぼるような状態になり、最下段の日乾レンガを埋めている。

以上のような構造を有する建物1と同様の建物が北区の発掘範囲では7棟数えられる。建物間にある壁の性格ははっきりしない。

建物以外の日乾レンガの遺構としてはV~VII-18・19の周壁と考えられる大壁があげられる。建物に使用された長大な日乾レンガ2枚分（70~72cm×2）あるいは1.5枚分の長さの幅があり、厚く上塗りを施している。

その他の付属施設としては、炉がある。ひとつはVII-22区で認められ平面長方形である。いまひとつはV-19の断面に浅いU字形のくぼみをみせる。いずれも建物外にある。また、地山を掘りこんだ直径20cm、深さ15cm余の平面円形の穴がある。擂鉢状を呈し、内部には灰黒色の粘土が2cm余の厚さで塗付されている。うち1例は建物外であるが、2例は部屋のほぼ中央に位置し、建物と密接な関係をもつ施設であったと推察できる。建物2・3・5に囲まれた場所の中央では窯が1基出土した。

南区の建物に使用された日乾レンガおよび構築法は北区のものと基本的に異ならない。ただし建物の長軸が北区のものとは90度ずれていること、および部屋数が「5ないし6」×3という点で違いをみせている。発掘区域では1棟を検出したにとどまったが、テルの形状および埋土状況から判断し、仮りにさらにあるとしても1棟を予測できるのみである。南北各区の建物群それ自体についての相異点は上記の如くであるが、これに伴う遺物の出土状況には興味深いところがある。すなわち北区の建物内外で出土したテラコッタ女性像は、南区では1点も発見されなかったということ、また南区の建物に伴う大型厚手の粗製土器は北区ではまれである、という事象である。

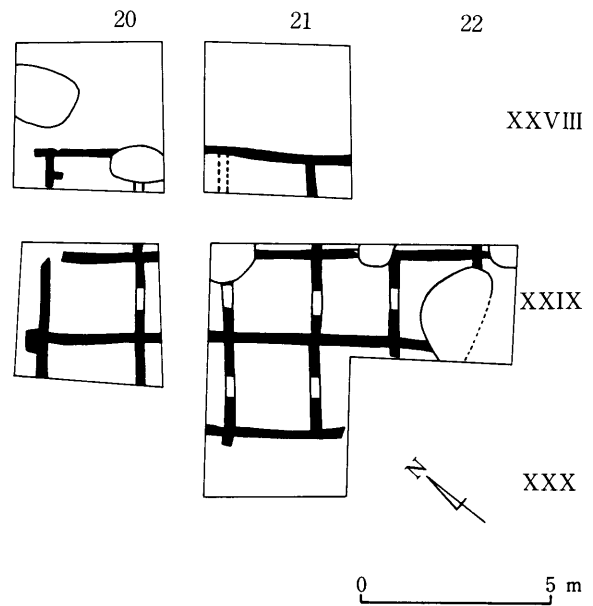


Fig. 28 テル・ソンゴルA 南区 サマッラ期の建物
Plan, Samarra Building, Southern Area,
Tell Songor A

(2) 中央区土壙群

XVII～XIX-21～27では、ハラフ式土器の多量につまった土壙が検出された。平面はほぼ円形で、地表下1.6～2.2mで底に達する。1例は地山を袋状に、地表下2.7mまで掘りこんでいる (Fig. 26-3)。石製容器、石器および少量のウバイド式土器片を混入し、多量のハラフ式土器片が比較的短期間のうちに埋まった形跡がある。この土壙群は発掘区域をこえて広がるものである。

なお、北区のVII・VIII-22の表土層直下でも多量のハラフ式土器を含む灰青色土のブロックがあったが、この場合は上記のような円形の土壙はなしていない。

(3) 西区の日乾レンガの遺構 (Fig. 29)

XX-16・17では地表近くで日乾レンガ1～3枚の厚さで残る初期王朝期の遺構があった。この日乾レンガは法量40×20×8cmで砂を多く含み、灰緑色を呈する。残存状態は悪いが、日乾レンガの長さ3枚分の幅をもつ部分と長方形の空所になった部分とがある。日乾レンガは一段ごとに積み方を変えており、側辺を長手積み^{ま2}にしている段がある。この遺構はヘヤット・カーシム遺跡に類似している。出土した土器はグッパ第III～VI層と同じものを含む。攪乱層出土の白色の石製飾玉はヘヤット・カーシムおよびグッパ第VII層から出土した飾玉と同型式であり、直方体の一面に圈点文を刻んでいる。なお、南区上層の日乾レンガ積みの遺構もレンガの法量、質、並べた方向が西区と同じであり、初期王朝期に属する可能性が強い。

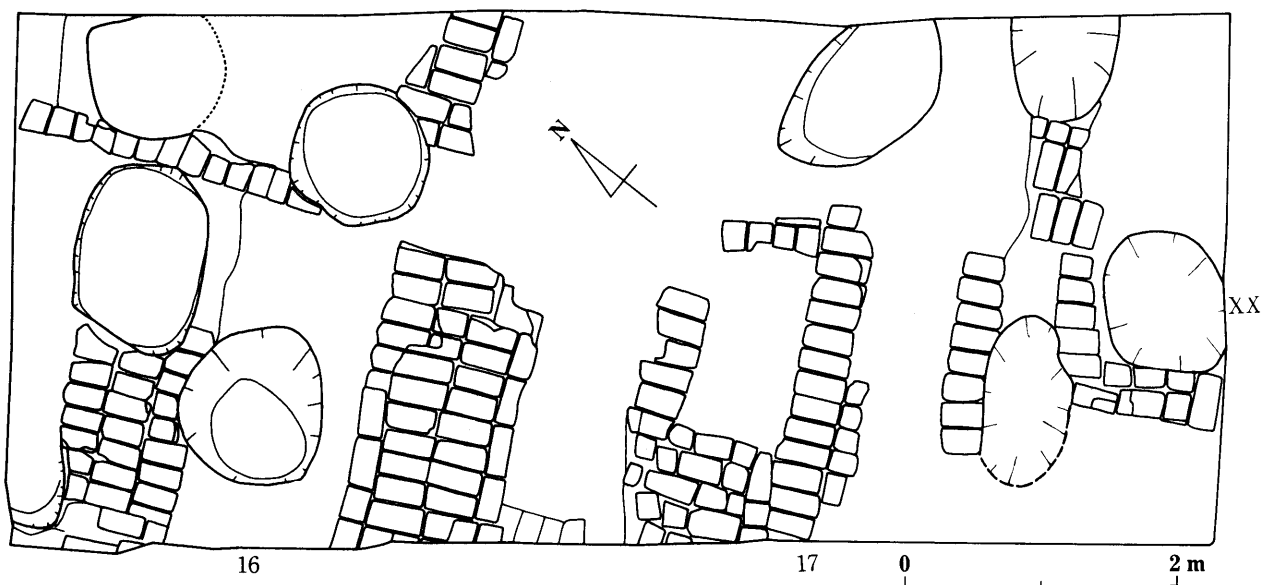


Fig. 29 テル・ソングルA 西区 初期王朝期の遺構
Mud-Brick Remains, Early Dynastic Period, Western Area, Tell Songor A

(4) 埋葬

1) サマツラ期

墓247 (Fig. 30-1) はVI-16の地表下0.4mのところ出土した。墓壙は北東-南西に長く、2×1.3mの楕円形を呈する。被葬者は墓壙の北側に、頭を東、足を西に向けて安置されている。保存状態は悪く頭骨は小片に砕けている。上体は仰臥し両腕は体側に伸ばす。腰は左を下にして中程度に曲げ、膝を強く曲げている。腓骨および胫骨は膝から外れ、離れている。頭骨近くには東からテラコッタ女性像 (Fig. 39-1)、彩文土器 (Fig. 31-1)、石製の角状製品 (Fig. 40-1)、無文のピーカー形壺の順で置かれていた。足元から南北方向に土器と石

白、河原石が置かれていた。土器はいずれもビーカー形壺に属する（Fig. 31—2～6）。このうち無文土器は4個で1個は片把手付である。2個は刻文をもつ。

墓279（Fig. 30—2）はV—22で出土した。サマッラ期の建物が建つ灰混褐色土層の下にあり、この層の下面から墓壇の底まで約1 mを計る。墓壇は袋状に下で広がる。完掘していないが楕円形の平面になるであろう。被葬者は頭を東、足を西に向け左側を下にして屈葬されている。顔は南東を向く。腕は肘で曲げ、顔近くに手をもってくる。腰と膝を中程度に曲げている。胸部に斜格子文のある壺（Fig. 31—7）がのり、頭骨の東に無文皿（Fig. 31—10）と楕円形の把手付彩文土器（Fig. 31—8）が、また墓壇の東部、人骨の足元にビーカー形壺（Fig. 31—9）の4個の土器があった。

これら2つのサマッラ期の墓は墓壇の形、被葬者と副葬品の占める位置で同一の特徴をもつ。埋葬姿勢も屈葬ということで共通する。墓279は明らかに建物より前のものである。調査は建物の下まで及ばなかったが、ほかに墓があることは予想できる。墓247と建物との時期的な関係を層位から明らかにすることはできない。

2) ウバイド期

XXVIII—20・21・22で5基が出土した。集中的な分布を示しており、南区がウバイド期の人々の墓地として利用されていたことを示す。

墓1（Fig. 30—3）はXXVIII—22で出土した。墓壇は北西—南東に長く、2.8×0.9 mを計る。両端は丸い。被葬者は墓の中央に長軸に沿って置かれている。頭は南東に向き顔面は北東を向く。両上腕と肩甲骨の一部が残っているが胸部の骨と脊椎のほとんどを欠く。北側に左大腿骨、南側に右大腿骨があり、左大腿骨の上に左脛骨がのる。足の指は腰近くにある。上体は伸ばし足は膝で折り曲げた伏臥の姿勢である。埋葬法としては特異といえよう。首の付近では黒曜石、紅玉髓製の直径1 cm前後の飾玉があった。腰から足にかけては直径0.4 cm程度の小飾玉が多数出土した。石製と木製とがある。左肩の外側にはチョーク状の玉（Fig. 40—2）があった。墓壇の頭側の端に点文をもつ土器、足側の端に彩文土器4個と無文土器3個の計8個の土器があった（Fig. 35—1, 3, 7 Fig. 36, Fig. 37—5～8）。

土器は2個、4個と重ねてあり、亀形土器は注口を上にして墓壇に斜めに立てかけてあった。土器の置き方をみると、土器自体を供えたと考えられることができる。亀形土器の下には小獣骨片が見出された。

墓4はXXVIII—20で出土した。東西1.1 m、南北0.8 mの隅丸長方形の墓壇中央に被葬者は頭を東、足を西にして置かれている。顔は北を向き右側を下にした屈葬である。頭骨の南側に獣骨があった。左大腿骨の上には大理石製の容器（Fig. 40—6）をのせていた。土器（Fig. 35—5, 6, 9, Fig. 37—1, 2, 4）と石製のパレット（Fig. 40—3）は人骨より20～30 cm上で出土した。

5基の墓は灰の多い褐色土で埋まっており、ほぼ同一時期に属するものと考えられる。墓壇、埋葬姿勢、副葬品の置き方について共通する特徴をあげることはできない。

3) イシン・ラルサ/古バビロン期

時期決定にとっての確たる資料に未だあたっておらず、ここでは墓形態の特徴にのみのもっとって一群の墓をあげる。いずれも墓壇内の被葬者の傍に、墓壇の長辺に沿って灰青色の日乾レンガ積を伴う墓19例がある。

いま、残存状況の比較的明瞭な墓63, 71（Fig. 30—4）、253, 259, 271を参照するに、概して長さ2 m強、幅1 m余の不整形の墓壇の1側に沿ってレンガ積がある。使用された日乾レンガは法量35×35×7 cmの、型入れによって作られたものである。スサをわずかに含み、きめは細かく堅緻である。墓71では7段、高さにして80

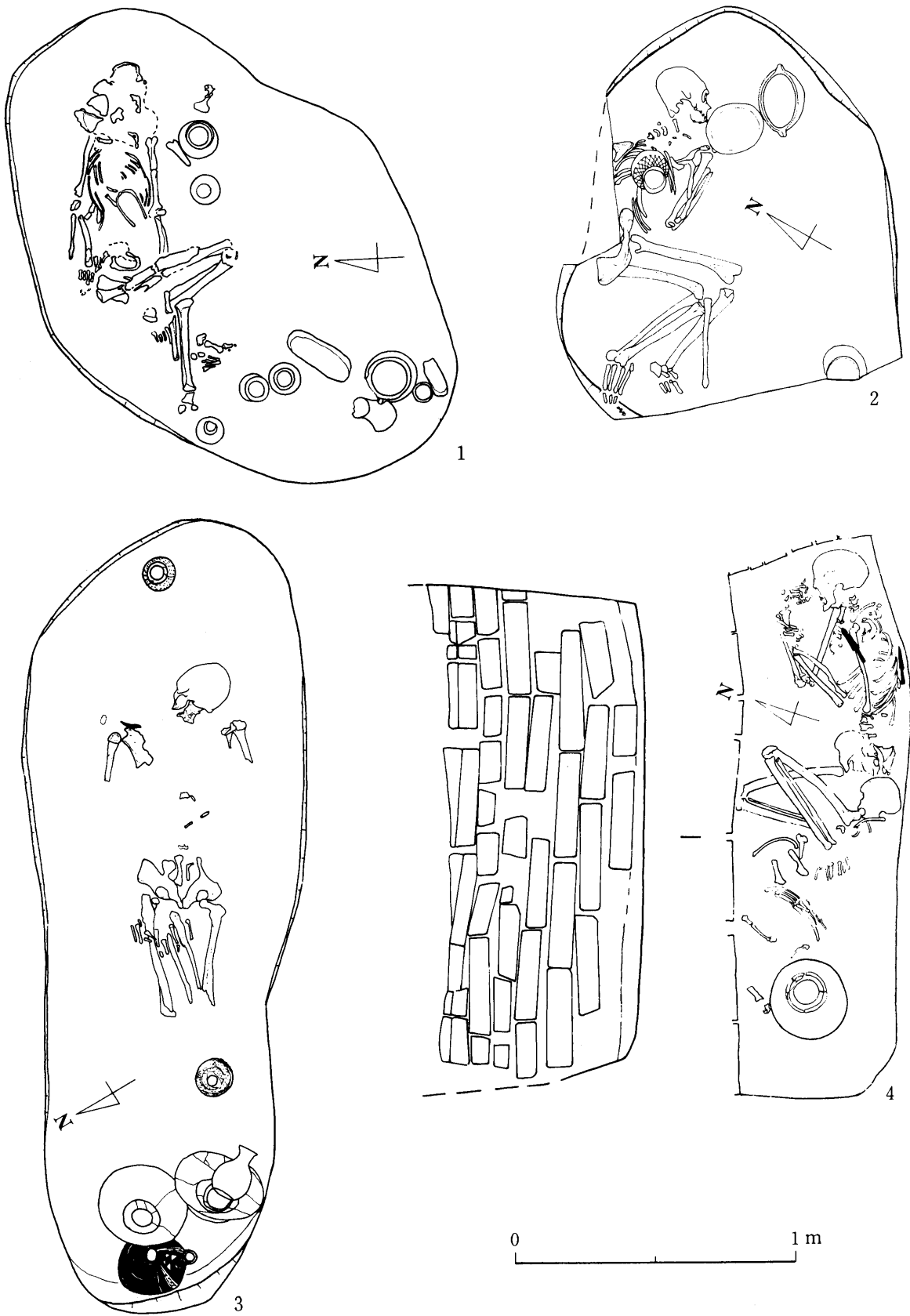


Fig. 30 テル・ソングルA 墓 1-Gr247 サマッラ期 2-Gr279 サマッラ期 3-Gr1ウバイド期 4-Gr71
 イシラルサ/古バビロン期
 Plan of Graves, 1,2-Samarra 3-Ubaid 4-Isin-Larsa/Old Babylon Period, Tell Songor A

cm余残存していた。レンガの積み方は粗く、水平にならない。墓63では極端に中央部でくぼんだ状態に積みあげられていた。被葬者はこのレンガ積の方に顔を向け、上肢は肘のところで軽く曲げ胸元でそろえ、手を顔近くにもってきており、下肢は膝を軽く曲げている。横臥屈葬の姿勢をとっている。墓63では仰臥の姿勢をとり、腕を顔方向に曲げている。頭位については統一性をもたないが、いずれも屈葬の姿勢で、顔をレンガ積の方向に向けているということでは共通し、大きな特徴のひとつとなっている。

副葬品としては壺をもつ (Fig. 38-1~3, 6~8, 12, 13)。そして墓63や71ではこの壺と被葬者との間には獣骨が認められるが、それは羊程度の大きさの動物のものと思われる。興味深いことに、この副葬された動物の頭蓋骨は墓壙内には認められない。土器以外の副葬品としては銅・青銅製の槍先、ピン、足輪 (Fig. 40-7~12)、飾玉などがある。

4) イスラム期

約240基の墓が出土した。残存状況の良いものでは2段に掘りこんだ墓壙の下の掘りこみに被葬者を置いているのが検出できた。このような墓では被葬者を置いた掘りこみの上に大きなレンガを斜めに立てかけている例が多い。このレンガには日乾レンガと焼成レンガと両方ある。1例、小さな焼成レンガを箱形に並べた中に被葬者を置いたものがある。切り合いが多いせいもあるだろうが、多くの場合は単純な平面葉巻形の墓壙を検出するのみであった。被葬者は頭を西、足を東に向け、顔は南、即ちメッカの方向に向けており、右側を下にした伸展葬の形をとる。墓壙にヴァライアティがみられると共に、被葬者は人類学的に2種類に分けられることが、石田英実、和田洋の研究で明らかになりつつある。1例、豊富な装身具をつけ、銅・青銅製の鏡を伴った墓があり、現代のイスラム教の風習と異なるものであった。これもソングル A のイスラム墓の性格が単純ではないことを物語る。

5) その他

このほかにハラフ期やパルティア/ササン朝期の墓がある。前者は小児墓で彩文土器 (Fig. 34-1, 2) を伴い、後者は施釉土器、鉄製品、ガラス容器を伴っている。

4 遺物

(1) サマッラ式土器

彩文土器、刻文土器、精製無文土器、粗製土器の4種類がある。

粗製土器のみは胎土にスサを混ぜ、器形は大型厚手の楕円形盤と壺に限られ、前三者とは大きく異なる。

製作は基本的に輪積みである。小品に手づくねと思われるものがまれにある。

1) 彩文土器

小破片が多く、器形の全体がわかるものは墓の出土品 (Fig. 31-1, 7, 8) や建物に伴う3点 (Fig. 32-1~3) などを数えるのみである。したがって器形のヴァライアティおよびそれぞれの数の多少については疑問が残るが、施文状況を加味して考えると壺、鉢、皿が基本的にあり、それぞれがいくつかの亜種に分けられる。長頸壺 (Fig. 32-9)、中型の直口壺 (Fig. 31-1, 7)、ビーカー形壺 (Fig. 32-1, 4, 5)、広口鉢 (Fig. 32-2, 6)、鉢 (Fig. 32-16~17)、台付鉢 (Fig. 32-20~22)、楕円形鉢 (Fig. 31-8) などがある。

胎土は細砂粒を多く含む。精製無文土器に比べてやや粗い胎土のものがある。整形は削り、撫でによるが、仕上げにはスリッパがけもみられる。磨きはほとんど認められない。焼成は良好で硬く焼きしめる。器体は鈍黄色から赤褐色を呈するものと灰緑色を呈するものとに大別することができる。そして、概して前者の彩文の色は赤

系統であり、後者では濃緑色などの緑系統である。彩文が緑系統のものには顔料が釉化している例がある。顔料は剝離しやすく、塩分の多い土壌中に包含されていたために水洗後も塩分が析出し、文様は不鮮明なものが多い。

文様は単彩で、2例 (Fig. 32-16, 19) を除いてはすべて幾何学文である。基本的には単純な線描文である。最も多用されている横線文は文様を施す部分を画し、様々な文様がその間に施される。格子目文 (Fig. 31-1, 8, Fig. 32-2, 6), 平行する短斜線 (Fig. 32-4, 5), 横のジグザグ文 (Fig. 32-5, 8) も多く認められる。波状文 (Fig. 31-8) や迷路文 (Fig. 32-23) も、これらと同様に閉じることのない線による文様である。これに対して三角形を基調とする文様は面的な文様として注意したいものである。4種類あり1:頂点を同一垂線上に有する三角形が内包される状態で重なる文様 (Fig. 32-4, 14), 2:三角形の内部を斜格子で填めたもの (Fig. 32-2, 12, 13, 17), 3:三角形の内部を斜線で填めたもの (Fig. 32-1, 7), 4:三角形の内部を塗りつぶしたもの (Fig. 31-8, Fig. 32-5) である。これらの三角形の文様を同時に2種類以上使用することは全くない。台付鉢の内面の中心には、円形を「井」字形に区画した中をさらに斜線で区画し、斜格子で填めた文様が目立つ (Fig. 32-21, 22)。

2) 刻文土器と精製無文土器

この2つは刻文の有無を除くと胎土や製作技法において同一であり、器形のヴァリエイティも重なる部分が多いので、一括して述べる。

胎土は多量の細砂——0.5mm程度と、1mmくらいまでの砂粒を混じてある。表面調整は削りと、幅2~3cmのものでかきとった条痕をみせる調整、撫で、磨きが認められる。磨きは幅3~7mmあり、疎密は個体によって異なる。また同一の器形でも表面調整は一定していない。色調には灰緑色、灰黄色~灰褐色、ピンク、暗褐色があるが、大多数は灰緑色を呈し硬質である。器形には長頸壺 (Fig. 33-1, 2), 短頸壺 (Fig. 33-4), ビーカー形壺 (Fig. 31-2~6, 9, Fig. 33-7, 8), 広口壺 (Fig. 33-6), 鉢 (Fig. 33-3, 5), 楕円形鉢, 皿 (Fig. 31-10) などがある。

長頸壺は高さ30cm前後で大きさは大体一定している。片口付、把手付がある。ビーカー形壺は出土量が極めて多く、ソングルAの代表的器形である。墓247出土の2例を除いては丸底で、胴部との境は鋭い稜をなす。器高に比して最大径が少し大きい。形は多様である。大ききで分けると器高6cm以下, 7~9cm, 13~15cm, 20cm以上に4分できる。器高13~15cmのものが多い。広口壺は厚手であり、Fig. 33-6に示す土器には片口が付き、底中央に「陶工」印を刻む。鉢は胴部が外に開くもの (Fig. 33-3) と扁平な球状胴部に短い口縁がつくもの (Fig. 33-5) とに大別できる。前者は内面を撫であるいは磨きで平滑にしているが、外面は削りのままの部分が多く粗い。後者は内面を撫で、外面には磨きを施す。刻文は胴部が外に開く鉢と皿には認められないが、ほかの器形では同じような割合で認めることができる。文様は鋭い刃状のもので1本ずつ切りつけるように施し、幅はほとんどが1mm以下で細い。先の丸いもので施した例も少しある。長頸壺では頸と肩の境に施文するが、他の器形では口縁付近に限られる。いずれも単位文様を横に並べており、施文部分は幅狭い。文様単位としては1~5本1組の斜線で作る山形文、短斜線、矢状文、2本の平行線の間に斜線やジグザグ線を施した山形文、弧文がある。長頸壺ではこれらの文様を数段重ねることが多く若干複雑に見える。

(2) ハラフ式土器 (Fig. 34)

胎土は砂粒をほとんど混じえず精良なものと、細砂を含むものがある。調整は撫でであるがへらで切った鋭い外形のものがある。地色は鈍黄色から赤褐色を呈し、白やクリーム色のスリップも用いられる。彩文土器には単彩と二彩とがあり、文様の色は赤、暗褐色、紫がかった褐色、黒が主体である。光沢のある彩文がある。



Fig. 31 テル・ソングルA サマッラ期 土器 Pottery from Samarra Graves, Tell Songor A 1~6-Gr247 7~10-Gr279

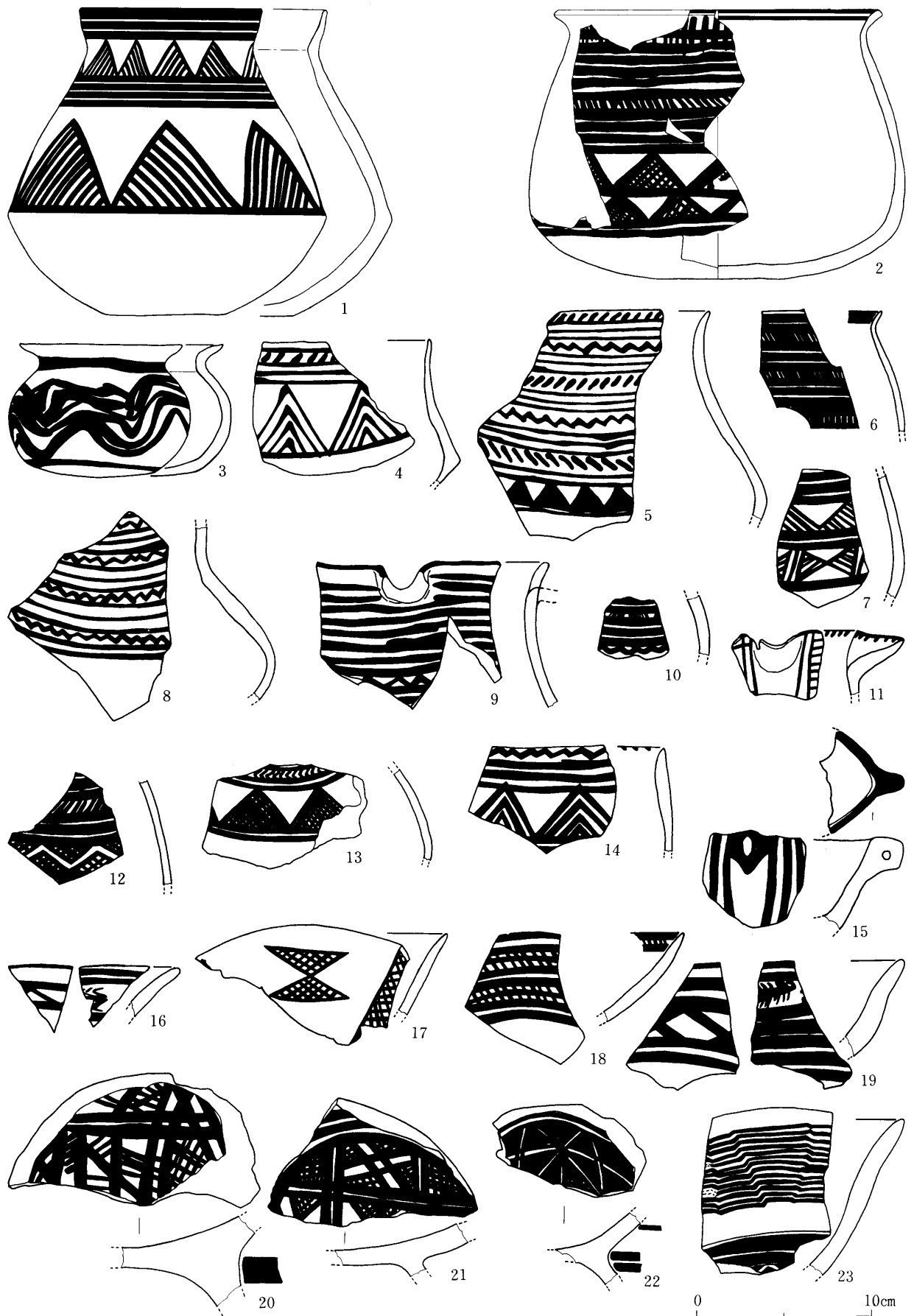


Fig. 32 テル・ソングルA サマッラ期 彩文土器 Painted Pottery, Samarra Period, Tell Songor A

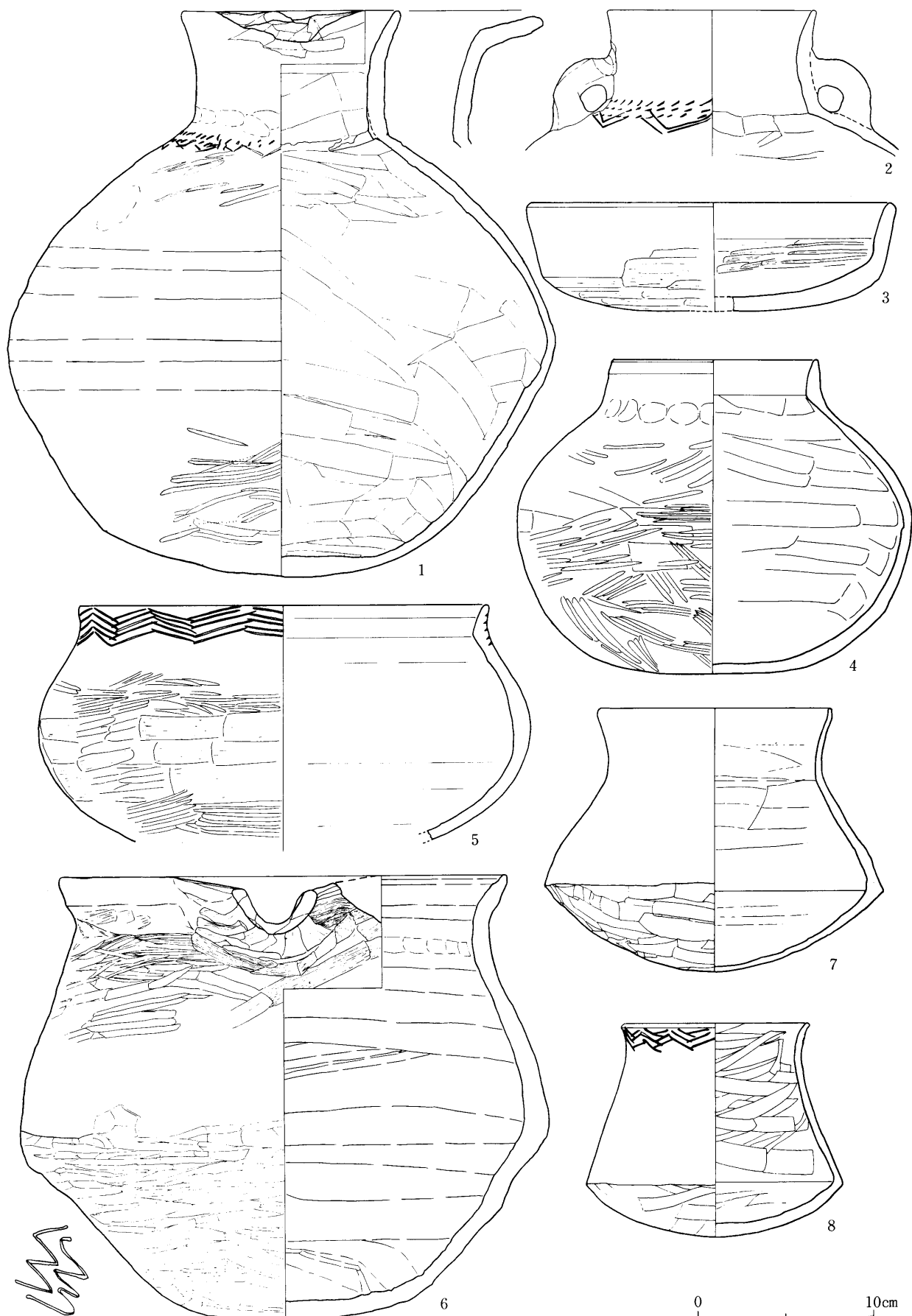


Fig. 33 テル・ソングルA サマッラ期 素文・刻文土器 Plain and Incised Pottery, Samarra Period, Tell Songor A

彩文土器の器形では肩の張る壺（3，4），口の開いた鉢（1，5，7～11），胴部が直立に近い鉢（12～16）が主たるものである。鉢には高台が多くみられる。文様は水平線間に同一単位を並べるものと縦の線でパネルに区切るものがある。三角形，ひし形，綾杉文，矢状文，魚鱗文，格子目を斜十字で填めた文様などの幾何学文が圧倒的に多いが，鳥（4，5）や四足獣（13）もある。

無文土器では鉢（21）のほかに長頸壺，短頸壺（20），皿があり，削りなどの粗い面をみせるものが多い。

（3）ウバイド式土器

表土に若干の破片が含まれるが，ここでは墓の出土品についてのみ述べる。

胎土は緻密であり，1mm以下の細砂を少量から中程度混じえる。少量の植物繊維が認められる土器もある。整形の痕跡と考えられる粗い条痕をしばしばみうける。彩文土器は特に丁寧なつくりであり，ヘラ撫でもある。胎土の色は鈍黄色や明黄褐色であるが，クリーム色のスリップを施すものが多い。文様は暗褐色から暗緑色を呈する。顔料の定着は良く，釉化した例がある。

1) 彩文土器 (Fig. 35, 36)

壺には胴部の稜の鋭い小型壺 (Fig. 35-1, 2)，扁平な壺 (Fig. 35-4)，下ぶくれの壺 (Fig. 35-3)，花瓶形壺 (Fig. 35-9) がある。Fig. 35-1～4の壺は外反する口縁をもち，頸部を幅広く帯状に塗りつぶし，胴部の最大幅の部位に施した水平線との間に各種の幾何学文様を施す。小さな丸底から口縁までゆるやかに立ち上がる開いた鉢 (Fig. 35-5～7) は薄手である。5では口縁部と底の水平線の上にひし形文を配するが，6，7では口縁に文様帯がある。そのほかの鉢には底と胴との境に稜のある比較的大型で厚手のもの (Fig. 35-8) と，全体に丸い形のもの (Fig. 36-2) とがある。Fig. 36-1の亀形土器の胴部の高さは6cmと扁平であるが，注口部をいれると12.5cmを計る。内面は稜の上1cmまでは丁寧に撫でているが，その上は指で押えたままであり，不規則な凸凹面になっている。

文様は細線で丁寧に描く。点文 (Fig. 35-1)，四弁の葉状文 (Fig. 35-2)，波状文 (Fig. 35-3, 9)，たてのジグザグ文 (Fig. 35-4)，内部を塗りつぶした三角形文 (Fig. 35-7)，斜格子文 (Fig. 35-3, 6) は壺と薄手の丸底鉢とにある。Fig. 35-8とFig. 36-2の鉢では胴部の内面を塗りつぶし，細く塗り残して表わした円の中に前者はロゼッタ文を，後者は波状文で囲んだ中に魚を3匹描いている。亀形土器もこれらと同様に塗り残しの細線を用いている。文様は注口部分を中心にして対称的に配する，塗り残しの三角形，ひし形を填めたたてのパネルと，そのほかの部分とに分けられる。器の2/3を周る塗り残しの線の4本のうち1本には短線を，比較幅広い稜の上の部分には内部を塗りつぶした三角形を配する。

2) 無文土器 (Fig. 37)

球状胴部に外反する口縁のつく壺 (Fig. 37-1, 5) と平底の碗 (3) および平底の体部が直立する皿 (8) は彩文土器にはない器形である。8の皿は6の壺をのせていたと思われる状態で出土しており，台と考えられる。極めて焼きの悪い粗雑なつくりである。

（4）そのほかの墓出土土器 (Fig. 38)

Fig. 38-1～3，6～8，10～13はイシン・ラルサ/古バビロン期の墓から出土した土器である。

胎土は少量の砂とスサをまぜているものが多い。12・13の器形の土器は輪積みの後に上半をろくろで仕上げているが，ほかはろくろ製である。色調は鈍黄色，赤褐色，灰緑色を呈する。

4・5はパルティア/ササン朝期の土器で，釉は青緑色，緑黄色を呈する。

9は手づくりの土器で胎土は精良である。明褐色を呈し、彩文の痕らしい部分がある。屈葬人骨の腰部に置かれていた品であるが、年代は不明であり、ソングルAではほかに同じものはない。

(5) サマッラ期の土製品 (Fig. 39)

1) 女性像

10点出土した。数は少ないが形態から少くとも4種類に分けることができる。

1は墓247出土の完形品である。胎土は砂を含まず緻密であり淡褐色を呈する。高さ10cm。胴体は左右別々につくって貼り合わせており、下半の中心線が大きく凹んでいる。座像で、手は乳房を抱く形である。足は前に刻んだ3本の線が足先を表すようでもあるが、形からは膝を曲げて座っているようにみえる。全体に均勢のとれた写実的な作品である。顔から説明すると、いわゆるコーヒー豆形の目は粘土を貼り付けてから沈線を施している。鼻は大きく高く、小鼻の部分には円形の刺突がある。耳にも刺突がある。額から上には幅広い帯状の部分があり、後頭部には舌状の突出がある。ここには2個の孔が上下に貫かれている。まげにした結髪やかぶり物を表わしているのであろう。かぶり物があるとすれば額から顎に続く沈線はその紐と考えられる。肩から胸には小円板を貼り付けてある。右肩、背、上腕には短い縦の線を刻む。また右下半身の上面と側面にも小円板を貼り付けてある。これらの貼付文や刻文は装身具か文身を表わすものであろう。前面の臍から続く凹部の両側の貼り付けは女性器の表現と考えられる。焼成は良く、表面は暗褐色を呈する。鉱物質以外のものによって着色したのであろう。3は同様の頭部である。これには砂を混じえてある。胴部破片が2個あるが、1と同様に砂を混じえぬ粘土でつくっており、淡褐色から灰赤褐色を呈する。4～7は土器と同じく細砂を多く含む胎土で、灰緑色地に暗緑色で文様を施す。スリップをかけたものもある。4は胴部で、角ばった肩と突き出した胸をもつ。手は腹の上ののせる。腹以外の全面に点状文を施す。手の先は丸いが、これからはみ出して指を4本描く。円形の貼り付けが首の周囲にあり、これも彩られている。背面の交叉した紐を描いたものとなつながら、首飾りとわかる。同じ形で彩文していないものがほかに1例ある。5・6は立像の下半身であり、丸く大きな尻と大きな足をもつ。5では足先に3本の沈線を刻み、指を表わしている。6の足は前後とも破損している。腹から尻にかけてと膝くらいの位置に横線を描く。5では足の上も彩っている。7は脚を伸ばして座った像の左側の下半身である。ちょうど貼り合わせる部分で外れている。5・6と同様に腹と足先をめぐる横線があり、中心部にも文様を描いている。2は上記のものとは全く異なる形態であり、写実性を欠く。腕は三角形に小さく突き出ただけであり、下半身は平たい球形である。胴との境に沈線があり、足を画しているらしい。頭部は破損している。胎土は砂粒を混ぜてあり、暗褐色を呈する。

2) 角状土製品 (8, 9)

一端は丸く一端はやや大きい砲弾形である。8では両側に突出部がある。次第に細くなる中空部があり、中に炭化物のような黒色粉末がはいついた。一種の容器と考えることもできる。

3) 紡錘車 (10~16)

算盤玉形のもの、土器片を打ち欠いて円形にしたものがある。前者は直径4cm高さ3cmと大きさはほぼ一定で、土器と同じく砂を多く混ぜた粘土でつくる。色は灰褐色である。一半に放射状の刺突文をもつ。10~14では円形に近いが、15・16では長い線になっている。いずれも横方向から刺き突している。他の一半は摩損が多く特に中心の孔付近はすれて^{ま3}いる。比較的摩損の少ない10で重さ31.8gを計る。



Fig. 34 テル・ソングルA ハラフ期 土器 Pottery, Halaf Period, Tell Songor A

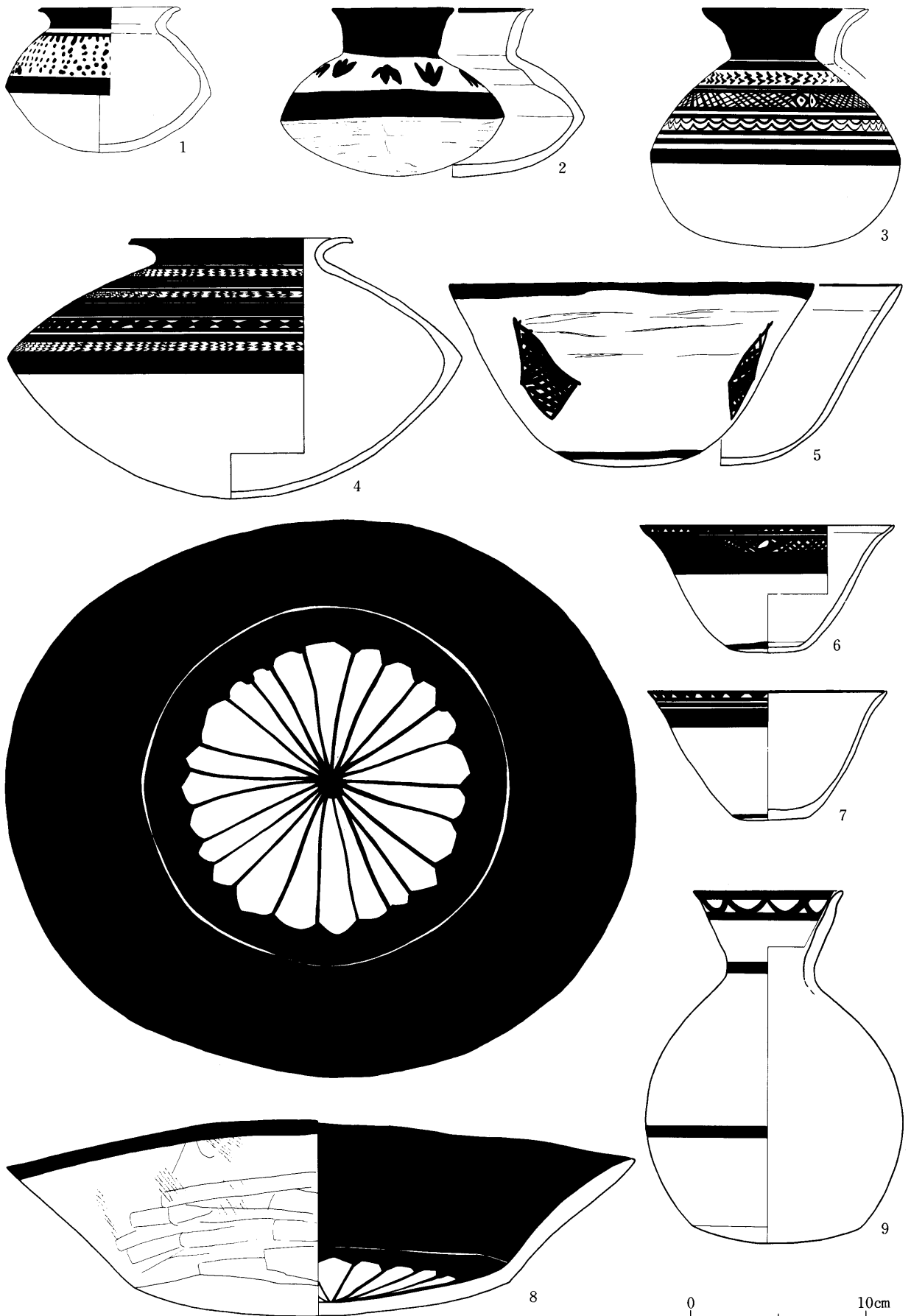


Fig. 35 テル・ソングルA ウバイド期 彩文土器 Painted Pottery, Ubaid Period, Tell Songor A

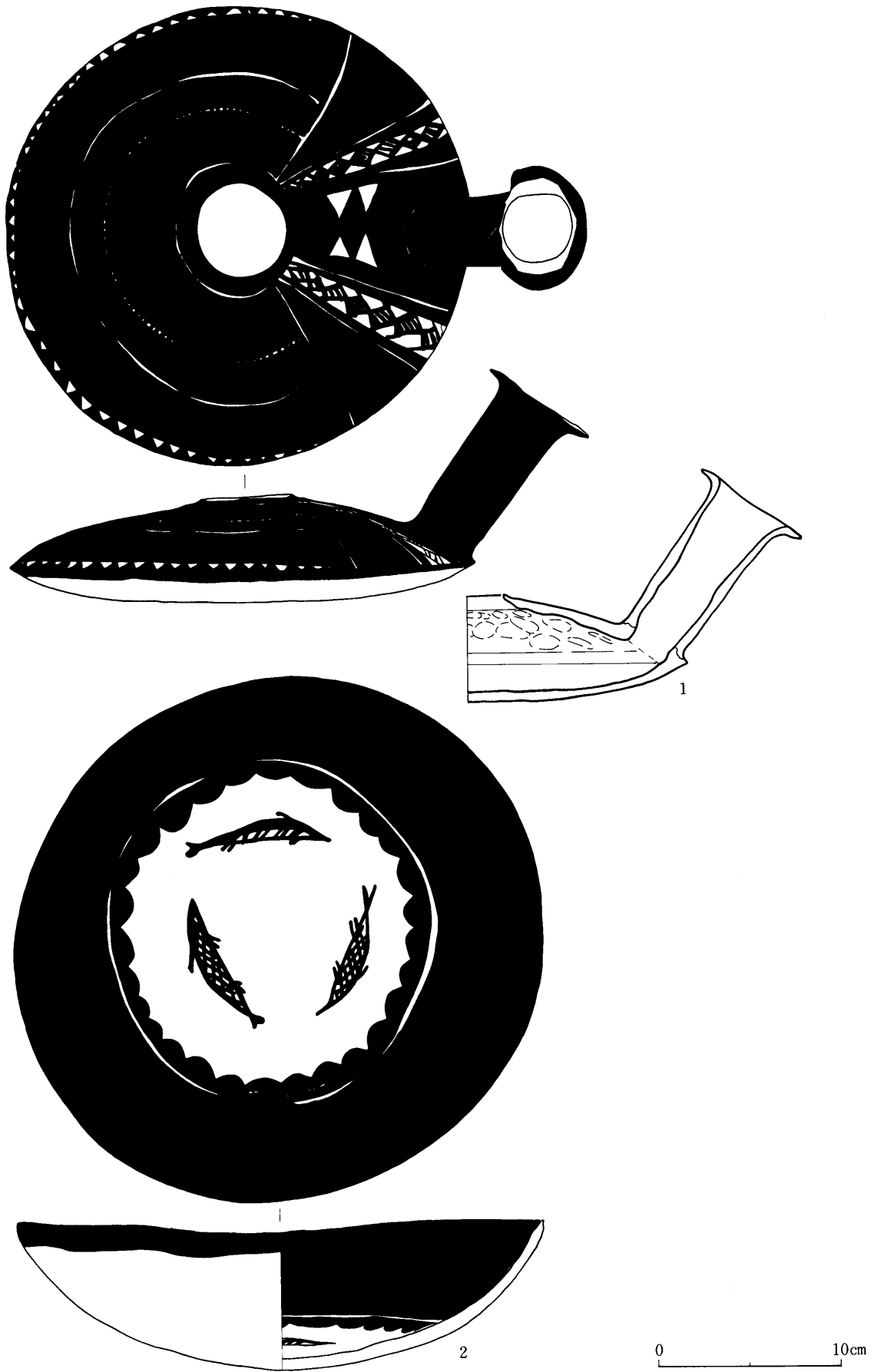


Fig. 36 テル・ソングルA ウバイド期 彩文土器 Painted Pottery, Ubaid Period, Tell Songor A

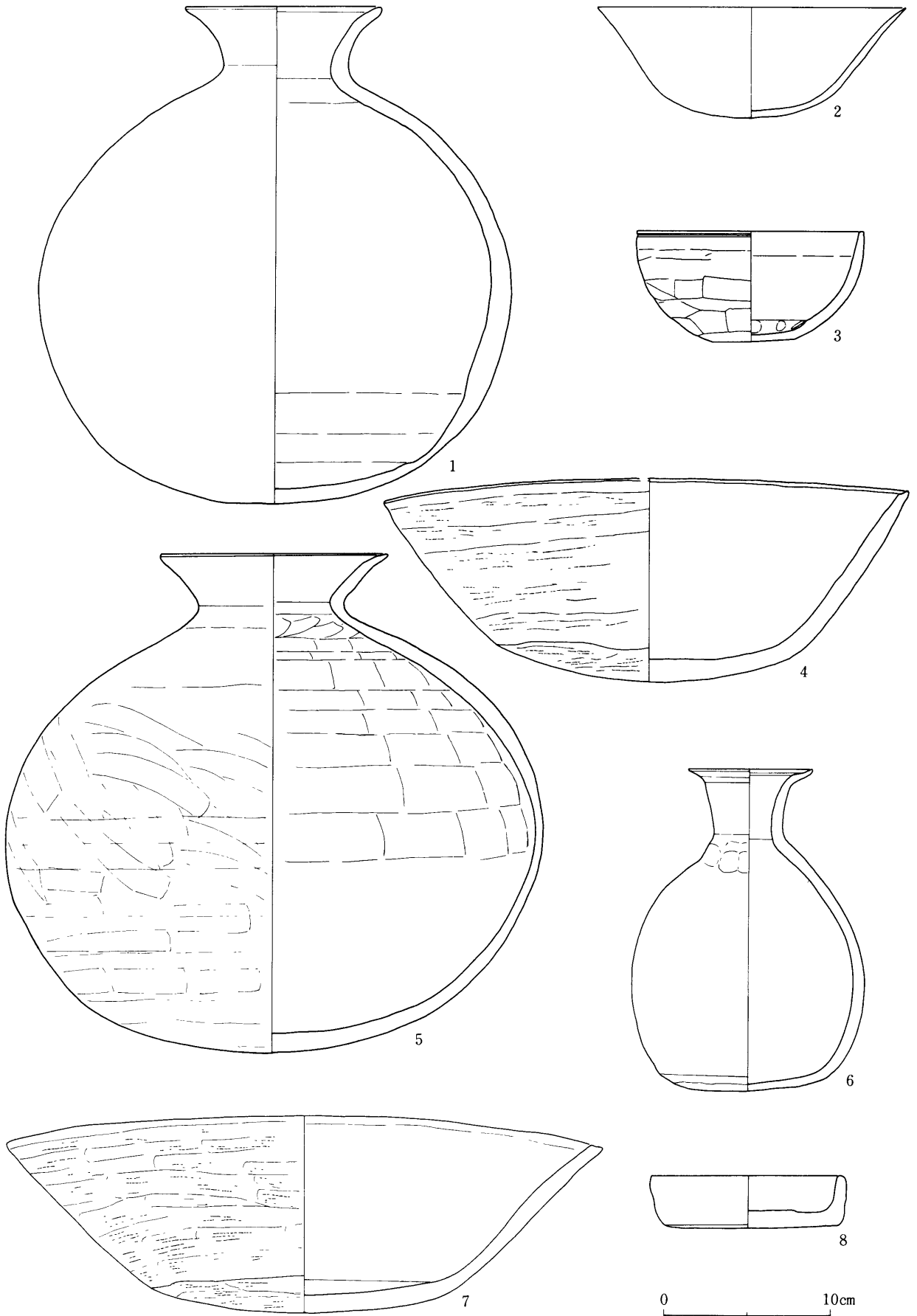


Fig. 37 テル・ソングルA ウバイド期 素文土器 Plain Pottery, Ubaid Period, Tell Songor A

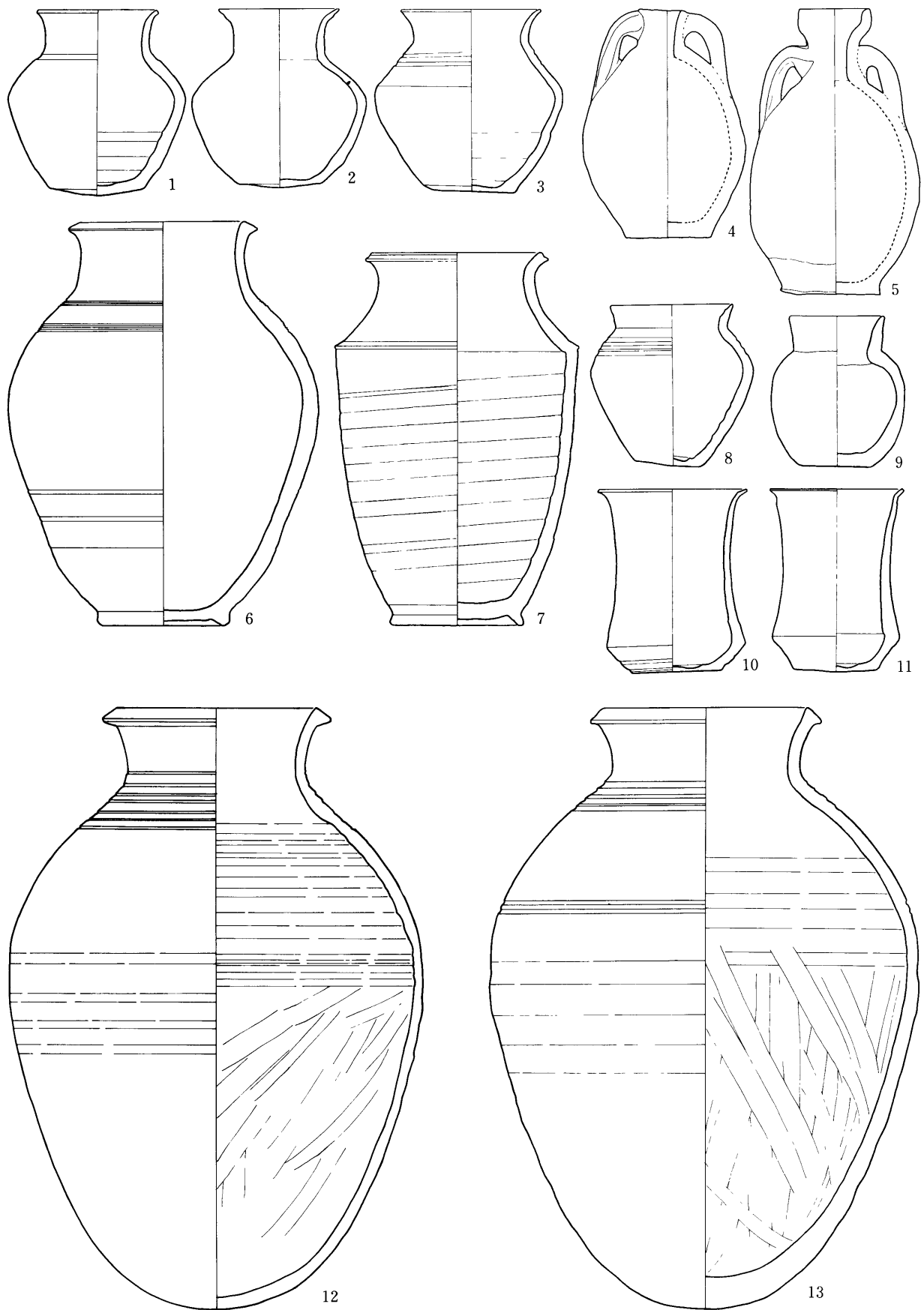


Fig. 38 テル・ソングルA 墓出土 土器
Pottery from Grave, Tell Songor A

1~3, 6~8, 10~13 Isin-Larsa/Old Babylon,

4.5 Parthian/Sasanian Period

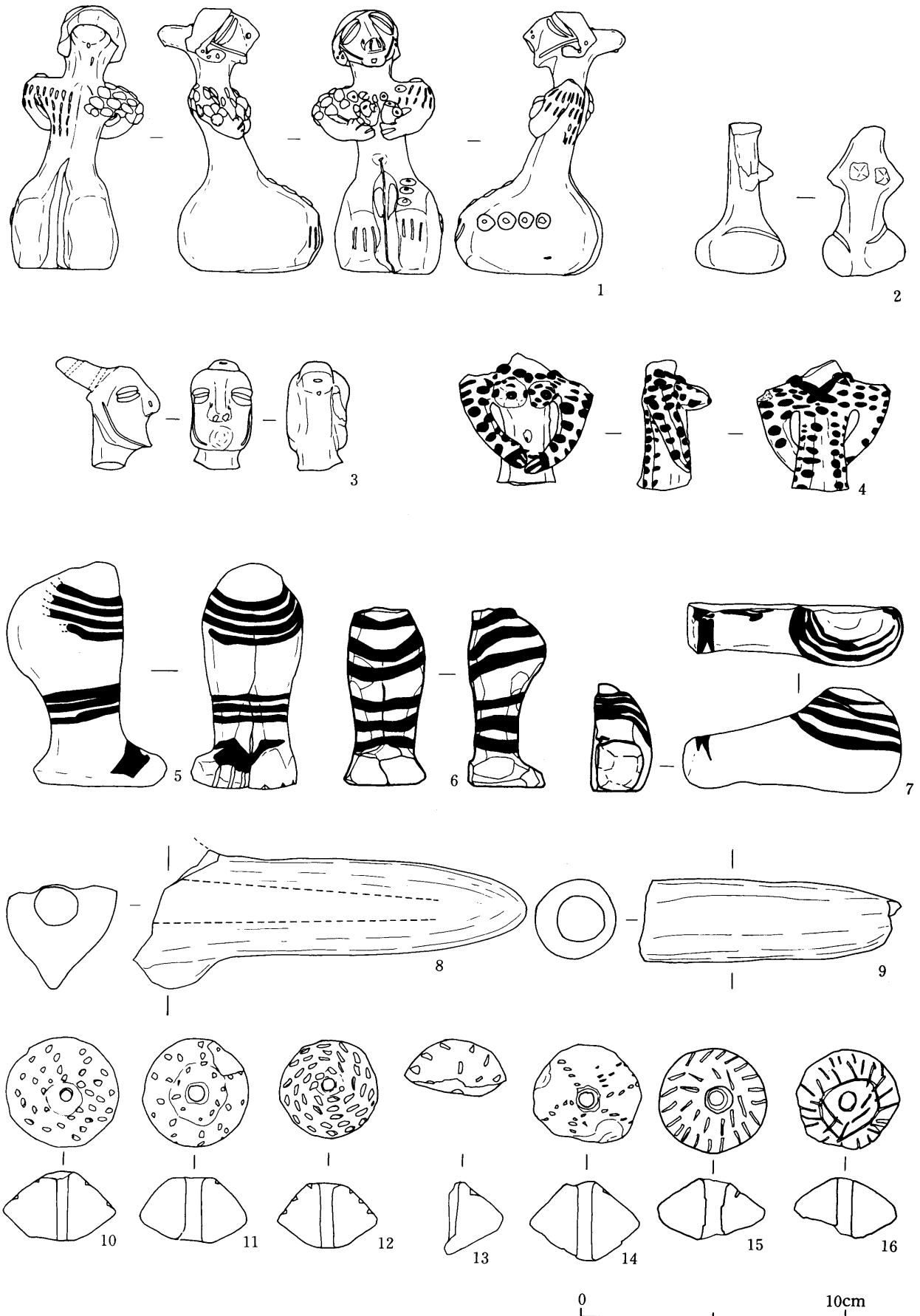


Fig. 39 テル・ソングルA サマッラ期 土製品
 Terracotta Objects, Samarra Period, Tell Songor A

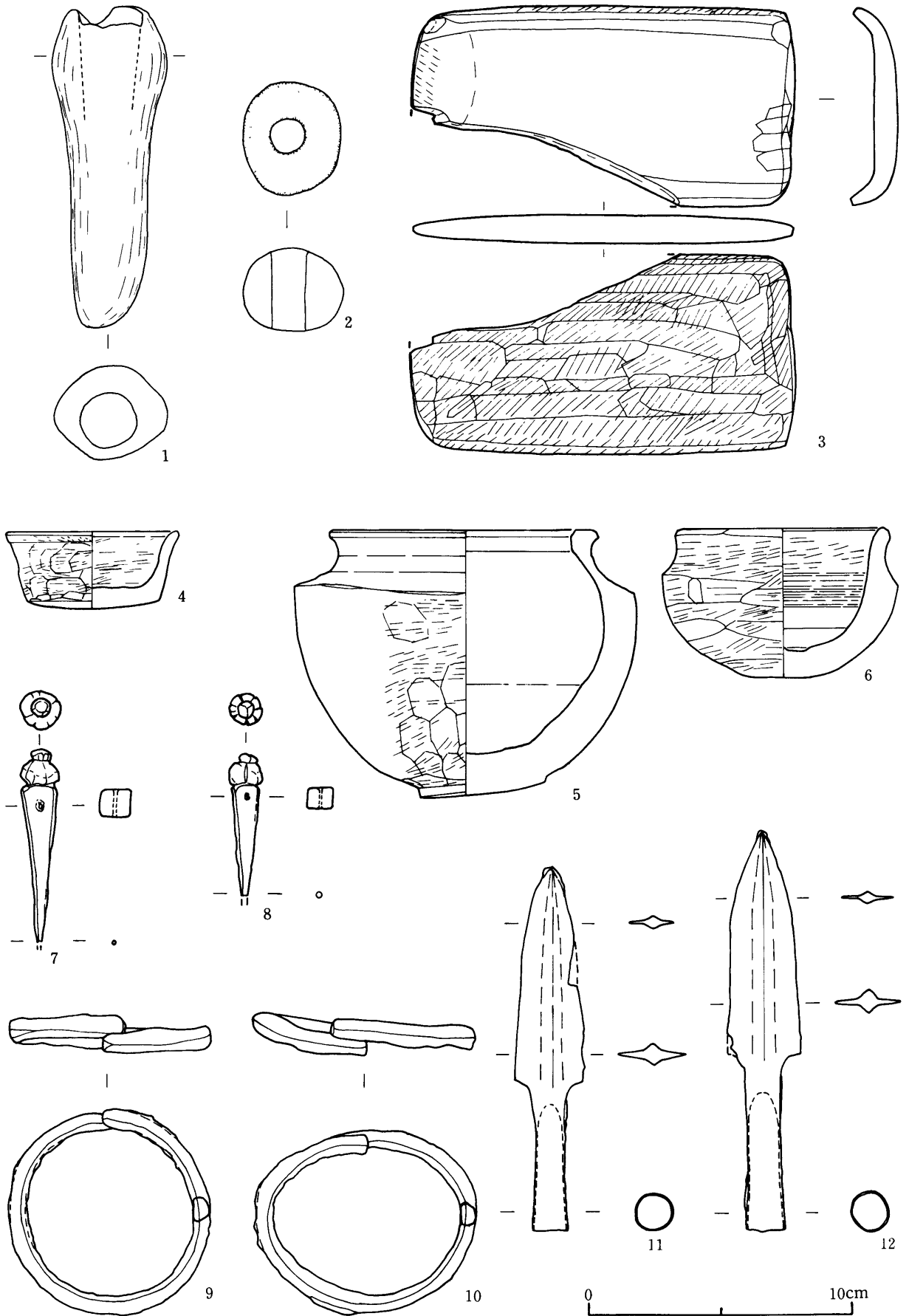


Fig. 40 テル・ソングルA 石製品 銅-青銅製品 Objects, Stone (1~6), Copper-Bronze (7~12), Tell Songor A

(6) 石製品, 銅-青銅製品 (Fig. 40)

1はアラバスター製でFig. 39-8, 9と同じ性格のものである。^{注4} サマッラ期の墓247出土。2はチョーク質の玉でウバイド期の墓1出土。3はウバイド期の墓4出土。大理石か。パレットで, 2辺は少し外開きに立ち上がり, 2辺は薄くなる。特に破損部のある側は薄い。削りの後に磨いてある。4~6の石製容器のうち, 4, 5はハラフ期。6はウバイド期の墓4出土。いずれも大理石製である。6は内面にほとんど水平の平行条線が走り, 底の中央が少し高い。仕上げの削りの工具を中心に置いたためと考えられる。7~12はイシン・ラルサ/古バビロン期の墓から出土した銅-青銅製品である。7・8はピン, 9・10は足輪, 11・12は槍先であり, 袋部は中空になっている。目釘2本が認められるものもあるが, 総じて錆が厚く, 身に関しても正確な形を明らかにできない。

5 小結

ソングルAではサマッラ期の集落の崩壊後はおもに墓地として利用されており, 内容は多くを含んでいるものの層位的に語れるところは少ない。また遺物整理は半ばであり, 小稿はごく中間的報告・考察にとどまる。

サマッラ期は集落が営まれる以前に墓279がつくられており, また建物にも若干の時期差がある。しかし遺物には差が認められなかった。建物とテラコッタの女性像は, ソングルAと^{注5} ヨガ・マミとを強く結びつける共通の特徴をもつ。ただ, 日乾レンガの形の違いがあること, 女性像の中にはFig. 39-2に示す, おそらくは系統を異にするものがあることに注意すべきであろう。^{注6} 土器はハムリン盆地のリハン遺跡出土のものとも最もよく似ている。ハムリン盆地の外の遺跡と比較して気づくところを, 以下に二, 三あげてみよう。ヨガ・マミの土器については十分な情報を得ていないことを断っておく。第1に, 小稿でピーカー形壺と呼ぶソングルAにおいて代表的な器形は, 遺跡内でのあり様において極めてこの遺跡独自の性格をもつ。類似する器形はエス・サワン遺跡の^{注7} 彩文土器にあり, 層位により出土量が異なると指摘されているのが注目できる。ただ, イポリトニの図によると稜は必ずしも鋭くない。第2に刻文土器の文様であるが, 施文方法が切りつけて沈線をひくものに限られており, マッタラ遺跡^{注8}にある刺突等の技法はみられない。また施文部は上下幅の狭い横の文様帯となることも特徴のひとつである。第3に彩文土器・刻文土器とも文様の種類はかなり限られている。以上のような点から, 時期差とともにサマッラ式土器の地域差ということを考えていく必要がある。

後代の墓について, 今回はウバイド期の墓から出土した土器はすべて図示した。ラス・アル・アミヤ遺跡^{注9}とはほぼ同時期かと考えているが, 限られた資料数と性格故, 十分な比較はできない。

サマッラ, ハラフ, ウバイドの各文化の関係を考える上でソングルA遺跡は非常に興味深い位置を占めている。

注

- 1) Gibson, McG., 1979, "Tell Rihan Chicago-Copenhagen Excavation at Uch Tepe Hamrin", *Sumer* Vol. XXXV
- 2) Forest, J.D., 1980, "Kheit Qasim I", *Paléorient* Vol. 6
- 3) 類似する遺物は, テル・エス・サワン遺跡の出土物にあり, 土製品とアラバスター製品がある。
 - i) Behenam Abu Al-Soof, 1968, "Tell Es-Sawwan Excavation fourth season", *Sumer* Vol. XXIV-1,2, PL.X-16 and PL.XII
 - ii) Faisal El-Wally, Behenam Abu Al-Soof, 1965, "The Excavation at Tell Es-Sawwan First Prelimi-

Report 1964”, *Sumer* Vol. XXI Fig. 74

- 4) 注3に同じ
- 5) Oates, J., 1968, “Prehistoric Investigations Near Mandari, Iraq”, *Iraq* Vol. XXX-1
1969, “Choga Mami, 1967-68: A Preliminary Report”, *Iraq* Vol. XXXI-2
Oates, D. and Oates, J., 1976, *The Rise of Civilization*, Oxford
- 6) この像は下半身の両側に沈線をもつこと、三角形の腕、正面から見た形から、ヤーリム・テベII出土の女性像に関連する。しかしヤーリム・テベ出土のものを側面から見ると非常に平たい。このタイプの像については、メルペルトらがテベ・ガウラ遺跡やアルパチャ遺跡の出土物と比較している。これらはハラフ層の出土であり。その層で出土しているサマッラ式土器については議論がある。
 - i) Merpert, R. Munchaev, N. Bader, 1978, “Soviet Investigations in the Sinjar Plain”, *Sumer* Vol. XXXIV PL. XII-3, 4, 8
 - ii) Tobler, A. J., 1950, *Excavation at Tepe Gawra*, Vol. II, Philadelphia, PL. CLIII-2
 - iii) Mallowan, M. E. L., Rose, C., 1933, “Excavation at Tell Arpachiyah”, *Iraq* Vol. II-1, Fig. 47-19
- 7) Ippolitoni, F., 1971, “The Pottery of Tell Es-Sawwan First Season”, *Mesopotamia* Vol. V-VI
- 8) Braidwood, R. J., 1952, “Matarrah a Southern Variant of The Hassuna Assemblage, Excavated in 1968”, *J. N. E. S.* Vol. XI
- 9) Stronach, D., 1961, “The Excavation at Ras Al-Amiya”, *Iraq* Vol. XXIII-2

IV テル・ソングルB, C

1 テル・ソングルB

(1) 調査の経過

テル・ソングルBは、テル・ソングルAの北東、約100mにあり、A、B、Cと並ぶソングルグループの中間に位置している。テルは、径60m×50m、比高約2mを測り、楕円形を成している。テルの最頂部は中心よりやや北東よりで、北側は急な斜面となり、南側はゆるやかである (Fig. 24)。

調査は1977年11月6日に開始し、1978年3月12日までを第Iシーズン、さらに1978年6月1日～1978年8月22日、1978年10月1日～12月30日、1979年8月2日～1980年3月23日まで断続的に実施された。

この発掘調査は、ハムリングダム建設による遺跡水没予定時期、1978年6月を考慮し、当初はグリットIX-9、X-9を中心に、層位確認と時期設定を目的として開始した。その後、遺跡水没時期の延期と発掘調査期間の延長に伴ない、全面調査に変更した。調査の結果、表層より、(1) 墓利用期：既ち、イスラム、パルティア／ササン朝ペルシャ期。イシン・ラルサ／古バビロン期。初期王朝期。ジェムデッド・ナスル期。(2) I層：遺跡の南斜面に集中するウバイド期の層。(3) II層：遺跡の中央部に建物を伴うハラフ期、ウバイド期の混在する層。(4) III層：II層建物下に確認されたハラフ期層。(5) IV層：遺跡の西斜面で確認された家屋を伴うハラフ期層、などが確認された。(Fig. 42)

(2) 層位と遺構

1) I 層 (Fig. 43)

土器窯と大溝を中心としたこの層は、テルの南側のゆるやかな斜面に検出された。土器窯の大きいものは長径2m、短径1mの楕円形をなし(K-1, K-6)、いずれも半地下式の構造をもっている。焚口は東側にあり大溝Bの方向をむいている。その他の窯は概して小規模で、直径1m前後の円形を呈するものが多い。K-10はレンガが使用されていたが、その他の窯ではレンガは検出できず、ほとんど掘込みの半地下式に近いものと推定される。またK-3は、他のものと構造的に異なり直径1.5mの円形で、焚口、燃焼室を有し、燃焼室の上には17個の通焰孔をもった棚を検出した。この棚はドーム式に作られ、最終的には4回修理されていた(PL. 20-2)。以上の窯群はそれぞれ僅かなレベル差が認められる。特にK-1, K-6は後述する大溝Bと関連が深いと考えられる。

大溝Aは長さ35m以上、幅1.5～2.5m、深さ1m前後のもので、II層の建物B-1を破壊して掘り込まれていた。埋土は砂を中心とした粘土混り土で、小片となった土器片が溝の底に堆積していた。

大溝Bは、大溝Aの南側にあり、大溝Aと2～4mの間隔を持ってほぼ並行に走る、そして、テルの瑞部を過ぎたあたりではほぼ直角に折れ曲り、ソングルA側へと向う。溝の長さは50m以上、幅は1.5～2.5mで、深さは約2mであった。溝内には土器窯のカス、灰、土器片、石器などが多量に含まれていた。

2) II 層 (Fig. 43)

テルの東側にある石膏床をもつ建物(B-1)と、西側の石膏床をもつ建物(B-2)からなっている。いずれも基本的には基礎を赤土で平坦にし、しかも強固にした後、建物を構築している。

B-1は長さ23×幅10mの建物で、東北部の半分は下層の建物の壁を利用して構築され、床は小礫混りの石膏で張られていた。また南西の延長部は傾斜地に赤土を埋め整地したのち構築されている。壁は練土でつくられ、幅70cmを測る。しかし、保存状況はあまり良くなく、壁の立上りは南東部で1m、北東部で10cmほどであった。また建物の北には径5~10cmの偏平な円礫を縦に敷きつめた幅1mの道が、長さ6.5mにわたって検出された(PL. 21-4)。

B-2は、基礎に1m前後の小区画(B-5, 5')を多数つくり、その中に赤土を埋め込み平坦に地均しする方法と下層の古い壁を利用し、さらに赤土で地均しする方法によって十字形の部屋を中心とした左右対称形に作られた建物である。このプランの基本は建物の基礎になった小区画を単位としたものである。入口は建物の北西部にあり、壁に段をつけ突出させて正面性をもたせている。壁は練土で作られ、厚さは約80cm、床には全面に小礫混りの石膏が張りつめられていた。しかし、堆積状況からみて壁には石膏は塗られていなかったと考えられる。

B-1とB-2の間には、いくつかの部屋が検出された。なかでもB-4では貯蔵穴と考えられる深さ1.5m、径1.5mのピットを発見した。さらにこの部屋より南西方向に、断面が円形と台形の土管で連結されたドレインを検出した(PL. 20-3)。II層建物で特徴的なことは、B-1, B-2のような大形の建物で、日常生活を推定し

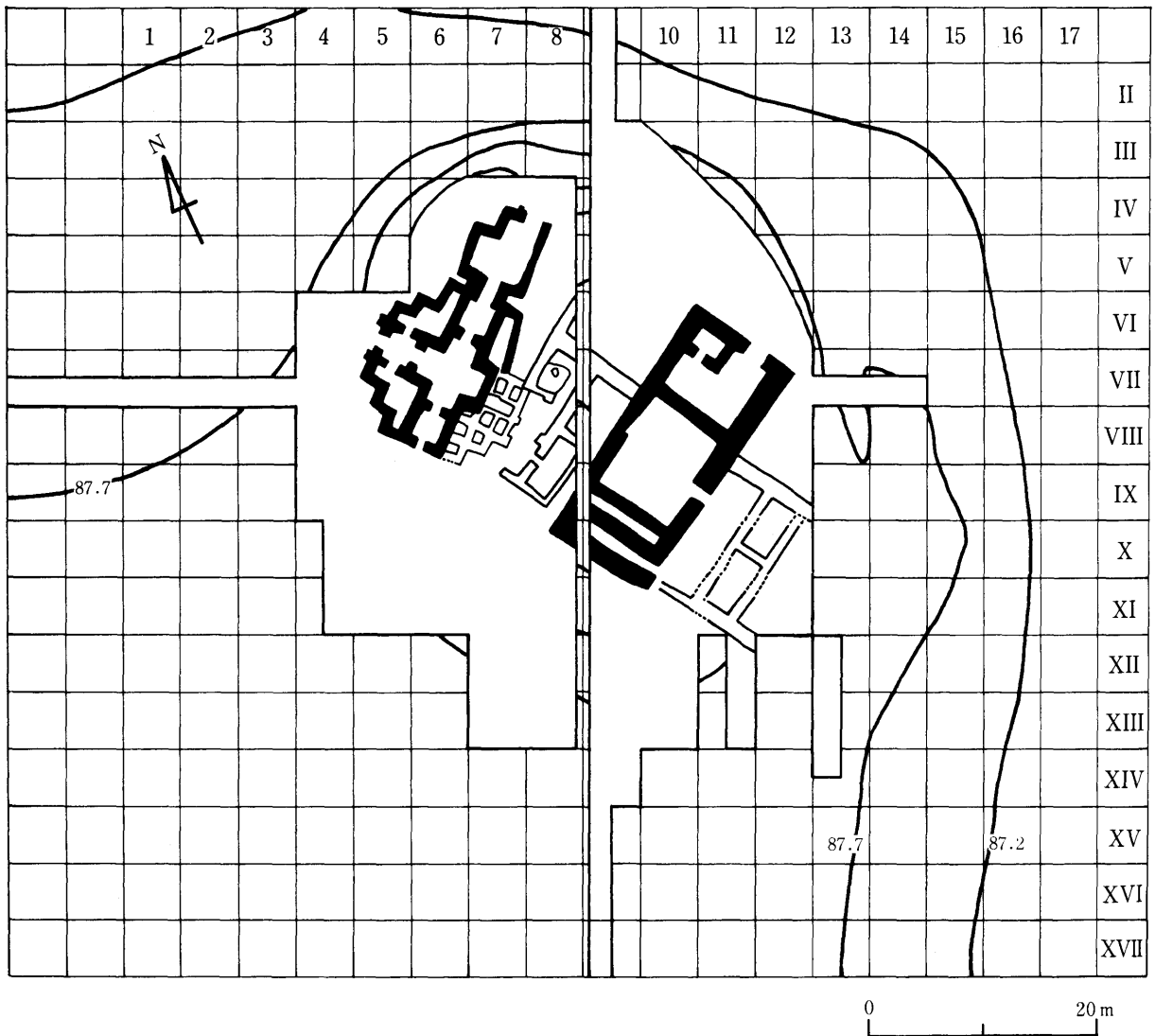


Fig. 41 テル・ソンゴルB 発掘区域と建物 Excavation Area and Buildings, Tell Songor B

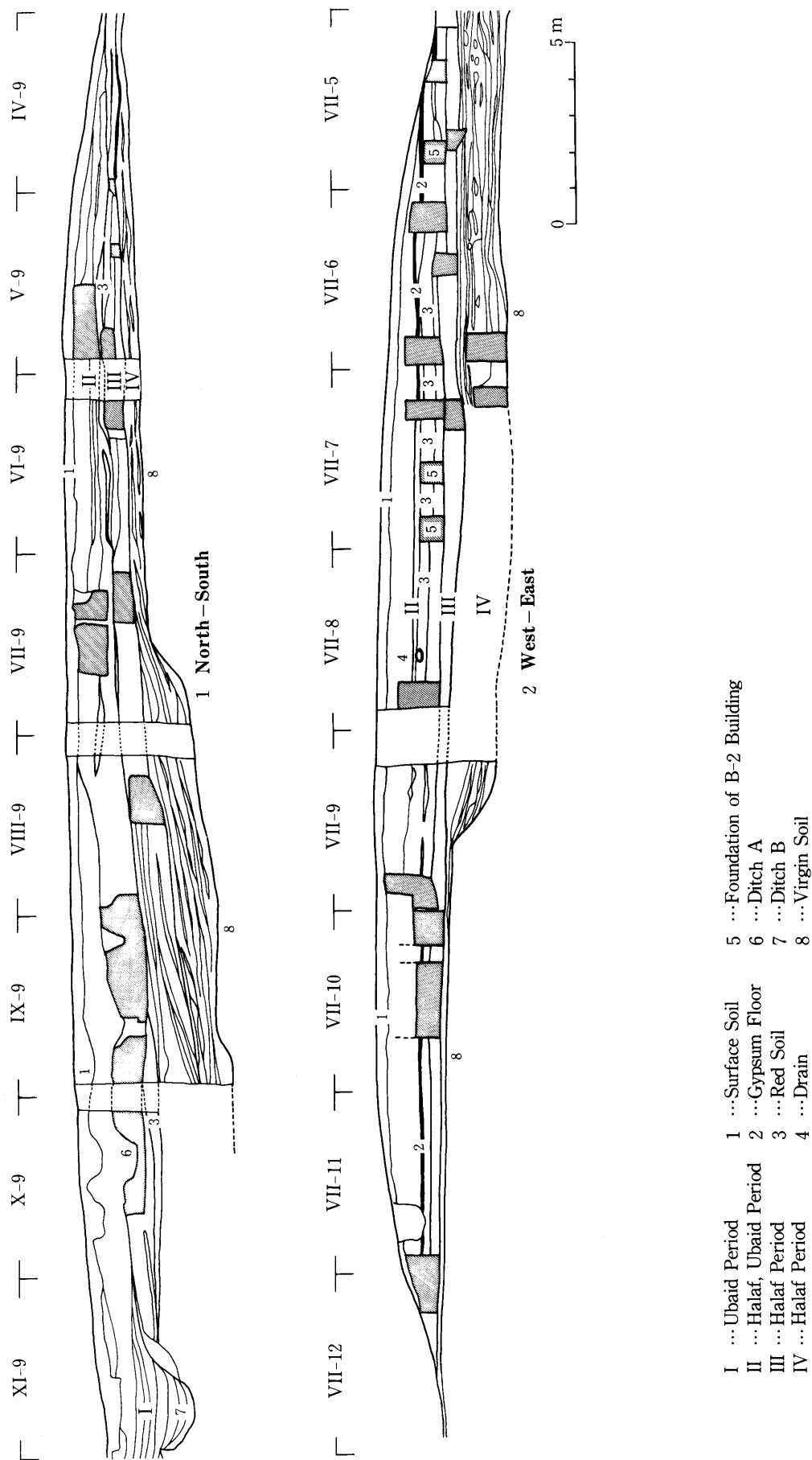


Fig. 42 テル・ソングオルB 断面図 Sections, Tell Songor B

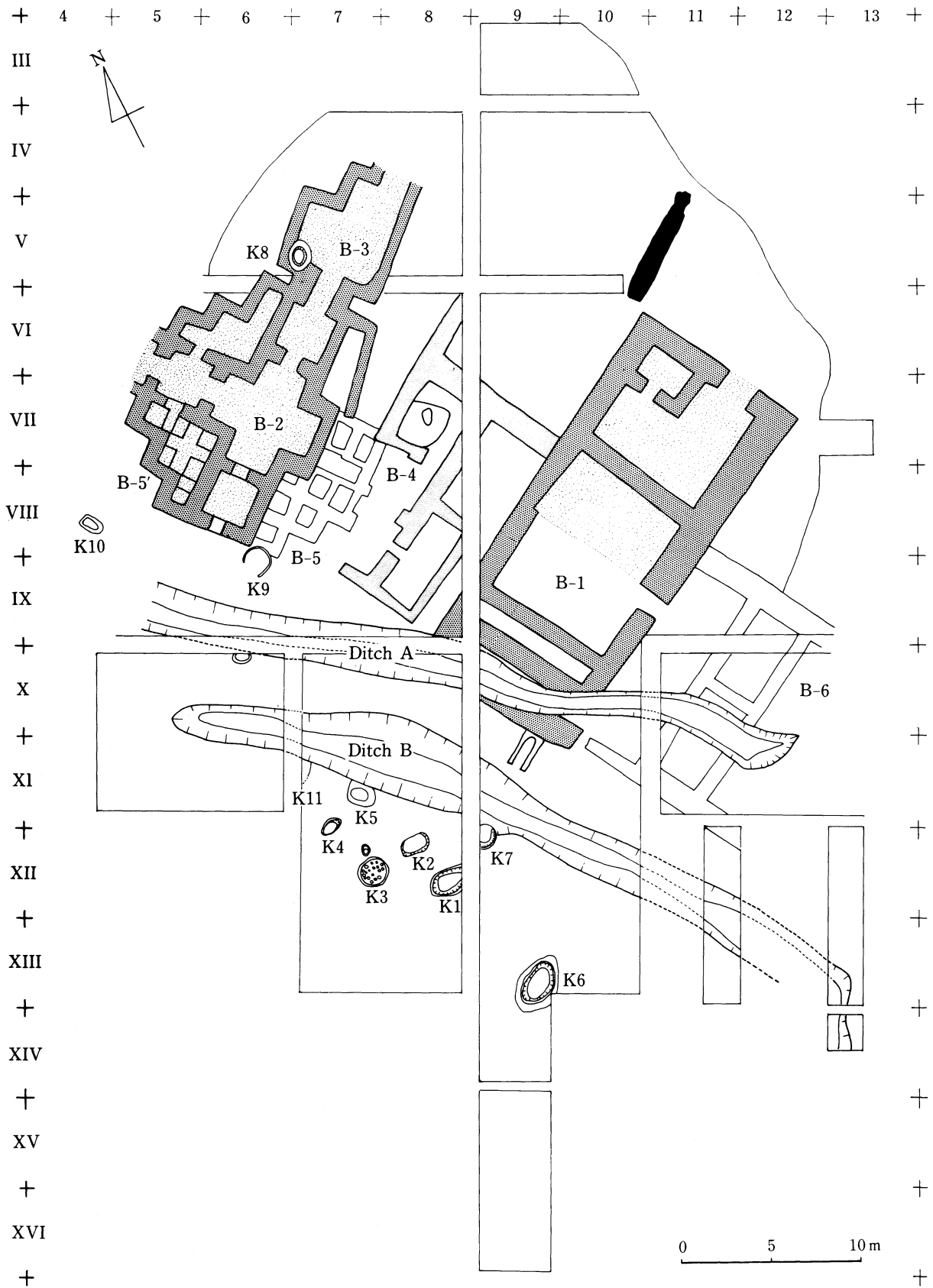


Fig. 43 テル・ソンゴルB I, II層遺構図 Plan, Level I,II, Tell Songor B

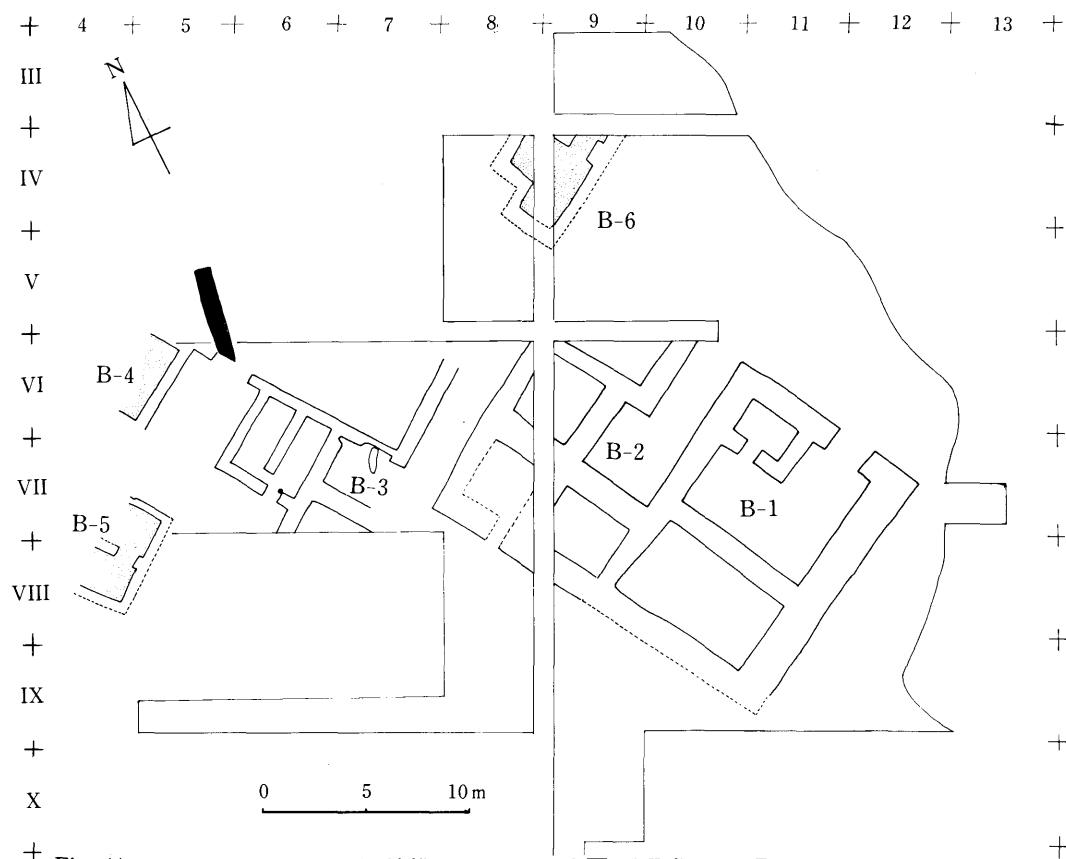


Fig. 44 テル・ソンゴルB III層遺構 Plan, Level III, Tell Songor B

得るような痕跡に乏しく土器片などはあまり出土しなかった。あるいは主な生活場所はB-4などであり、B-1, B-2は特殊な性格を有していたのかも知れない。

3) III層 (Fig. 44)

この層の建物は、II層の建物の基礎にも利用されていた。B-1はII層の建物(B-1)とほぼ同一プランで石膏張り床までの範囲を占めている。B-2は基本的にはB-1に付属する施設で、一辺3m前後の方形の部屋4つ以上を伴っている。壁は練土づくりで、壁厚1.0~0.7m、床はたたきしめられており石膏は張っていない。

B-3は、ドアソケット、炉を伴って発見された。建物はB-1, B-2よりやや薄い壁を有している。この建物は火災にあっており、そのために多量の土器・石器などがほぼ現位置を保って発見された。

このほかに、B-4, B-5, B-6のように石膏張り床をもった建物を検出したが、いずれも表土に近く風化が激しいために全容を明らかにできなかった。このなかでもB-6は部分的ではあるが、平面形がII層で検出された建物(B-2)と基本的に同一形を成すことが注目されよう。さらにB-3とB-4の中間で北側に延びる幅70cmの円礫敷の通路を長さ5mにわたって検出した。

4) IV層 (Fig. 45)

グリットVI, VII-6, 7の調査で、1セットを成す直径1.5mの2つの窯と、それぞれ独立した小さい建物2棟を検出した。西側に発見された建物は2つ以上の部屋から成り、外壁面にはほぼ等間隔にバトレスが付く。その東側の建物は単室と考えられるもので、西側建物同様、1つのコーナー部に控壁がある。両例とも練土で作られていた。また、ここでの特色は全体にわたって黒い灰層が堆積していることである。これは窯に関係したものであろうか。

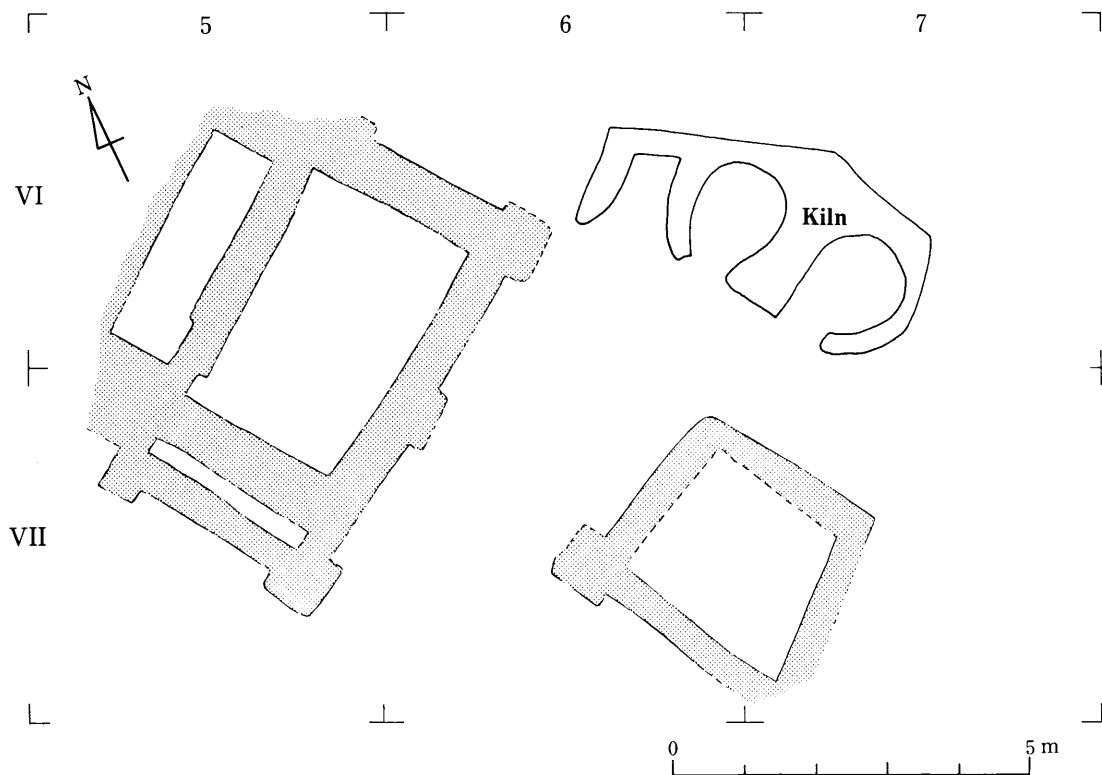


Fig. 45 テル・ソンゴルB IV層 遺構 Plan, Level IV, Tell Songor B

(3) 遺物

1) 土器

① I 層 (Fig. 46)

鉢 竜骨形浅鉢 (7) といわれるものが多量に出土した。その土器に描かれるモチーフは様々であるが、十字形、花文などを配したものが多い。このほか、内面を塗りつぶしたものや、内面を格子文で描き、外面の稜に単線を施したものも多い。この種の土器の大きさは、口径40、底径20、高さ10cm前後のものが多い。胎土は砂粒を含み、彩色は暗緑色や茶紫色が多い。このほか、小型薄手で粘土質の胎土を使用した土器も出土したが、無文のものが多い。

壺 頸は短く、耳付(横穴、縦穴)で頸から肩、胴の中央部にかけて彩文が施されている(2)。口縁部がゆるやかに外反し、肩と胴部の境にゆるやかな稜をもつ壺(3、4)には、口縁から肩部の全面に彩文が描かれている。このほか、広口で口縁直下の内面に蓋受けの突出部をめぐらした壺(5)も発見された。蓋受の数ヶ所には孔が穿たれている。

舟形土器 長径23cm、短径12cm、高さ10cm前後のものが多い。施文は、外面を全面塗りつぶしたもの、波状文を描いたものがほとんどである(1)

深鉢 器高18cm、口径30cm程のものが多い(10)。ほとんどは胴部に波状文が描かれている。ソンゴルB、Cから多量に出土した。

壺 I層出土壺中最も一般的な壺である(6)。施文は波状文、格子文を主に描く。

このほか、壺、碗などに描かれた貝殻文(8)、鳥文(9)、牛頭文(11)などは極めてハラフ的な文様であり、ソンゴルBの場合、ハラフ期の典型的文様が引続いて使用されていたことを示している。

② II 層 (Fig. 47)

遺物は少なく、ウバイド式土器とハラフ式土器が混在していた。ハラフ式土器として2, 3, 4, 7, 8があげられる。胎土は粘土質で表面には化粧土をかけている。彩文は白, 黒, 赤を使用して描く。ウバイド式土器と考えられるものに, 1, 5, 9, 11がある。5は内面に蓋受突帯をもつ深鉢で, 蓋受の数ヶ所に穿孔がある。この手法はウバイド式土器に多く認められる。しかし, 5の表面にはクリーム色の化粧土がかかり, 赤色で彩色しているところなどは, ハラフ式土器の要素もっている。11はハラフ期よりウバイド期まで引き続き用いられた土器で, 胎土は粘土質である。この場合, 胎土やクリーム色の化粧土がかかり, 燈色で彩文を描いた点などを見ると, ハラフ的色彩の強い土器といえる。10, 12はカップ形土器, ウバイド期遺跡より多く発見されるが, 本例は他と同様, 胎土, 整形, 彩色ともハラフ式土器的である。6は赤色磨研土器で, 胎土はスサを多くふくみ, 赤地にくすんだ黒色で彩色された, 縦方向に並行な文様をもつ。この種の土器は稀であり, メソポタミアではあまり発見されず, イラン高原から搬入されたものと考えられる。

③ III 層 (Fig. 48)

ハラフ期の特徴である肩部が直線的に張る壺(1~4, 6)の頸部は, 大型のものは一般に長く, 中, 小型は短い。このなかには肩部に4つの把手を持った例(2, 6)もある。4は口縁部の内側に蓋受の突帯をめぐらすもので, 同時代の他の遺跡ではあまり発見されていない。前記したII層出土遺物の場合, 孔は蓋受にあったが, 本器のそれは土器本体に穿たれていた。壺(7, 8)には, 赤色の単純な平行線が描かれている。仕上りは丁寧で光沢がある。8の小さい穴は補修孔で, 外側から内側へ片面穿孔されていた。この点, ウバイド期の土器はほとんど両面穿孔であった。なお, 7, 8の器型はウバイド期においても認められる。素文深鉢(12)は, ハラフ式土器, ウバイド式土器を通してみられる土器である。胴部に稜をもつ土器(13)は, 他の同時代遺跡ではハラフ期の代表的タイプとされる土器である。しかし, ソンゴルBでは僅か数点が出土したのみであり, この点, 量, 質ともに問題として残る。

④ IV 層 (Fig. 49)

深鉢形土器(1~4)の文様は主として外側に描かれ, 内側は口縁付近に数本の並行線を入れる場合が多い。彩色は赤, 黒, 白の多彩が多く, 土器の形態は, ウバイド式土器(Fig. 54-13)へと引き継がれる。鉢(5, 6, 8, 9, 10~14)の出土量が最も多く, いずれも内外面は細かい文様でうずめられている。なお, 16~24の高台の付いた底部破片は, 鉢型土器のものであろう。15は高環形の素文高台で, 出土数は少く, 特殊な用途に使用されたようだ。

IV層での特徴的な文様は, 格子文, 市松文, 円文, 波形文, 花文, などのほかに, 牛頭, 鳥, レオパードなどの動物文がある。この層の遺物はソンゴルA出土のハラフ式土器と極めて類似しており, ほぼ同時期として判断される。

⑤ 墓出土土器 (Fig. 50)

前述したように, ソンゴルBで確認された遺構は4層あり, ハラフ, ウバイド期に相当する。しかし, これらの遺構をこわして, およそ100基の墓が掘込まれていた。墓の営まれた時期は様々だが, ジェムデッド・ナスル期, 初期王朝期, イシシ・ラルサ/古バビロン期, パルティア/ササン朝期, イスラム期に大別でき, なかでもイシシ・ラルサ/古バビロン期の墓が多かった。

⑥ 石器 (Fig. 56, 57) 第VI章参照

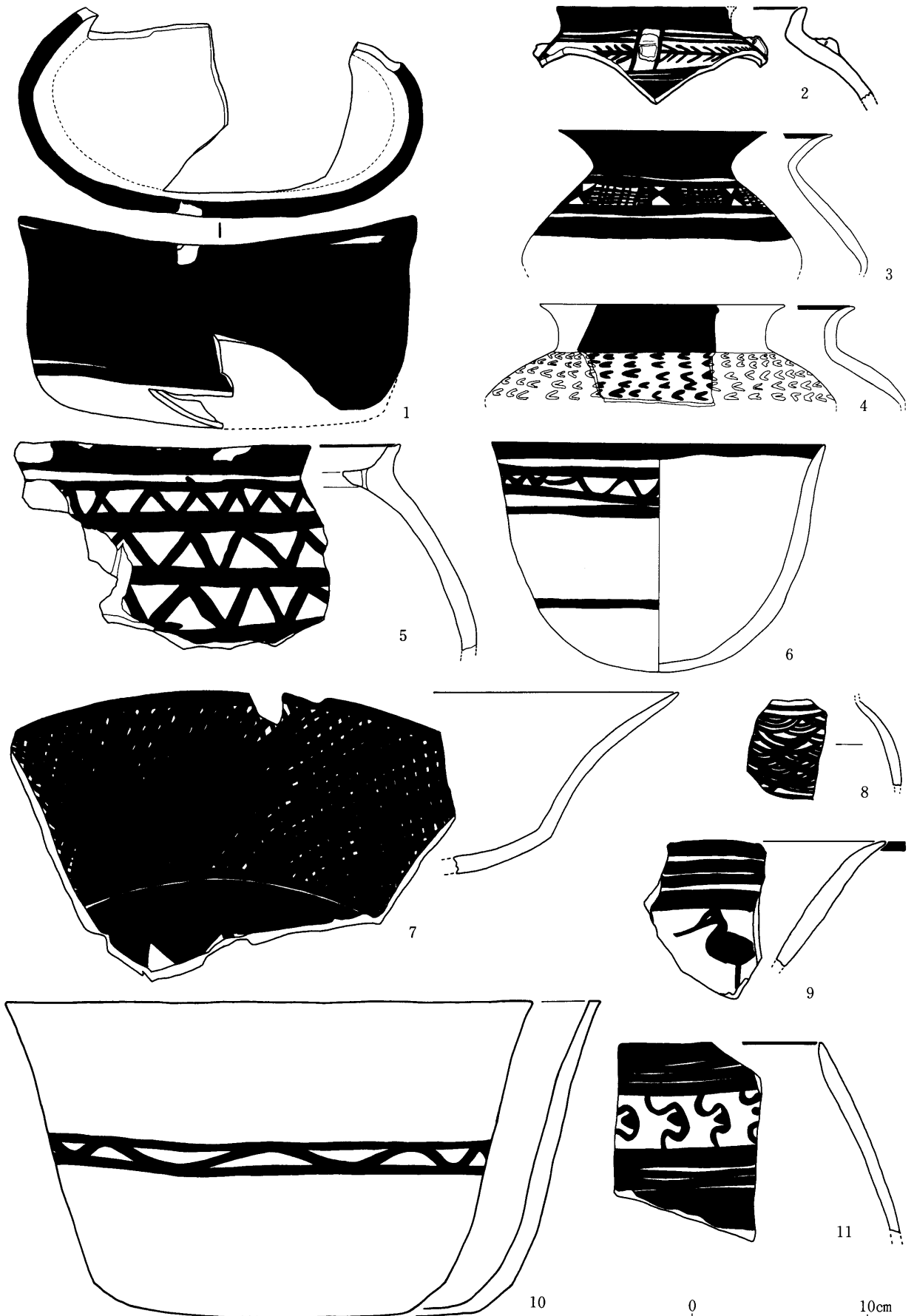


Fig. 46 テル・ソングルB I層 ウバイド期彩文土器 Painted Pottery, Level I, Ubaid Period, Tell Songor B



Fig. 47 テル・ソングルB Ⅱ層 ウバイド, ハラフ期土器 Pottery, Level II, Ubaid, Halaf Period, Tell Songor B

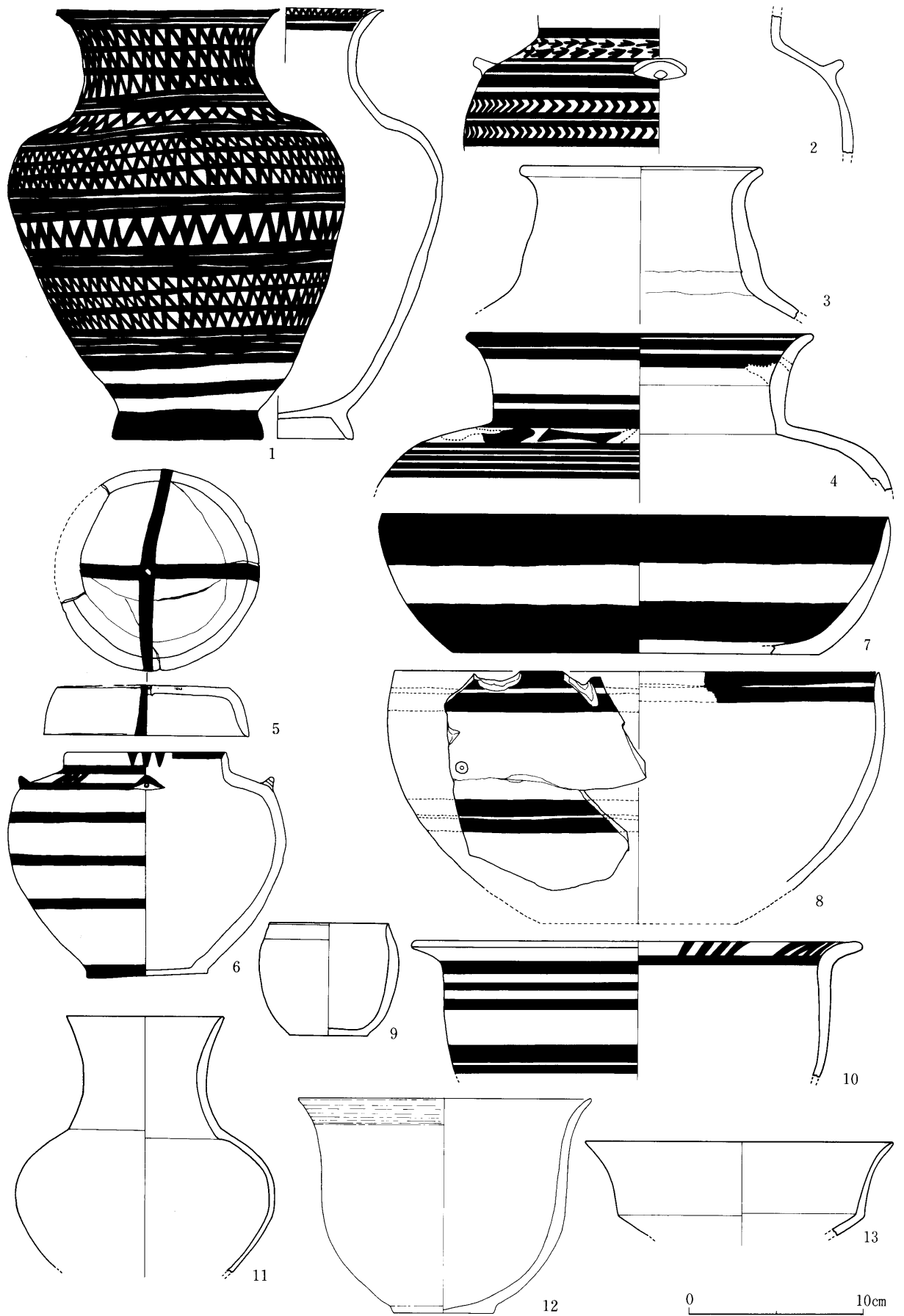


Fig. 48 テル・ソングルB Ⅲ層 ハラフ期土器 Pottery, Level III, Halaf Period, Tell Songor B

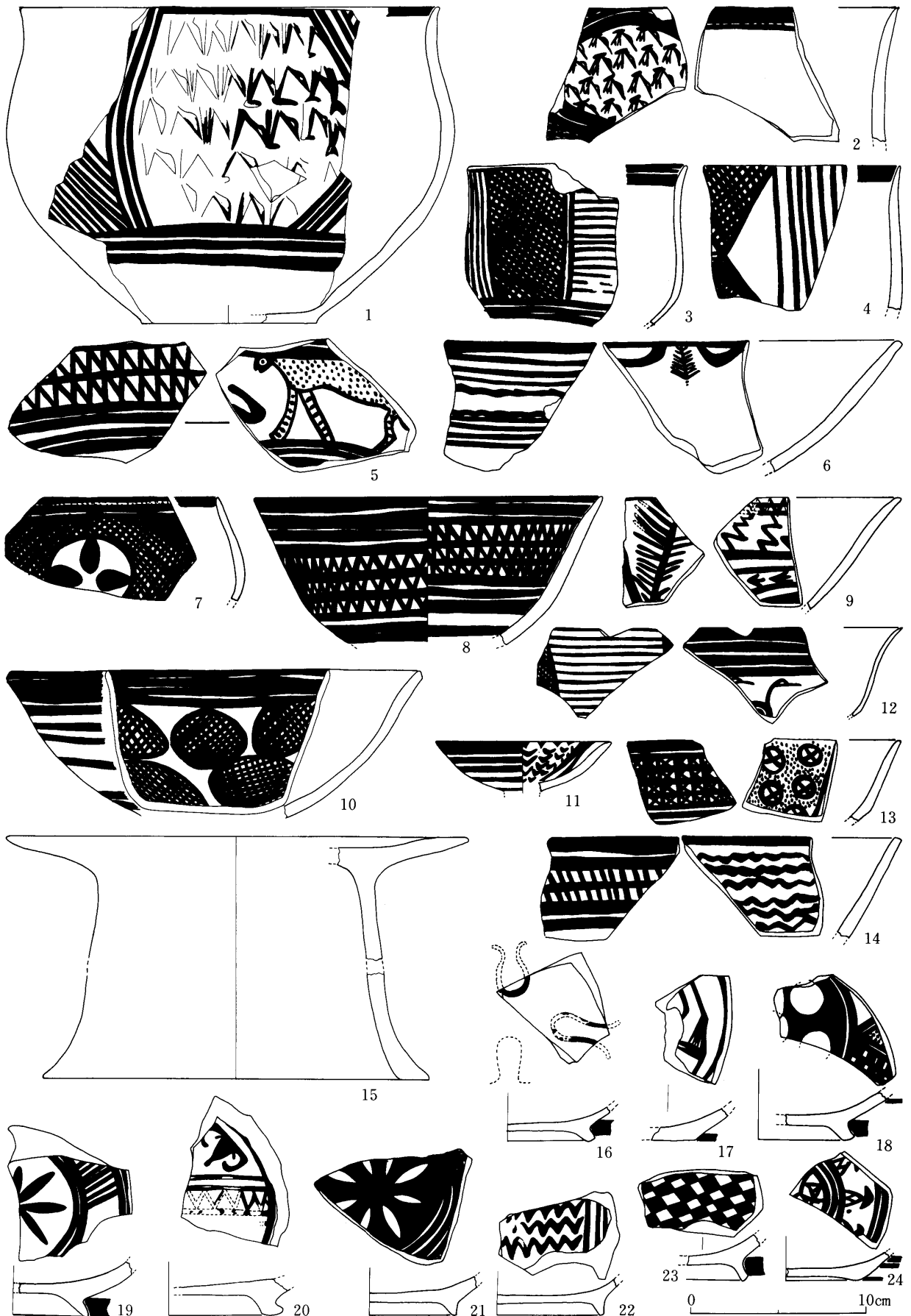


Fig. 49 テル・ソングルB IV層 ハラフ期土器 Pottery, Level IV, Halaf Period, Tell Songor B

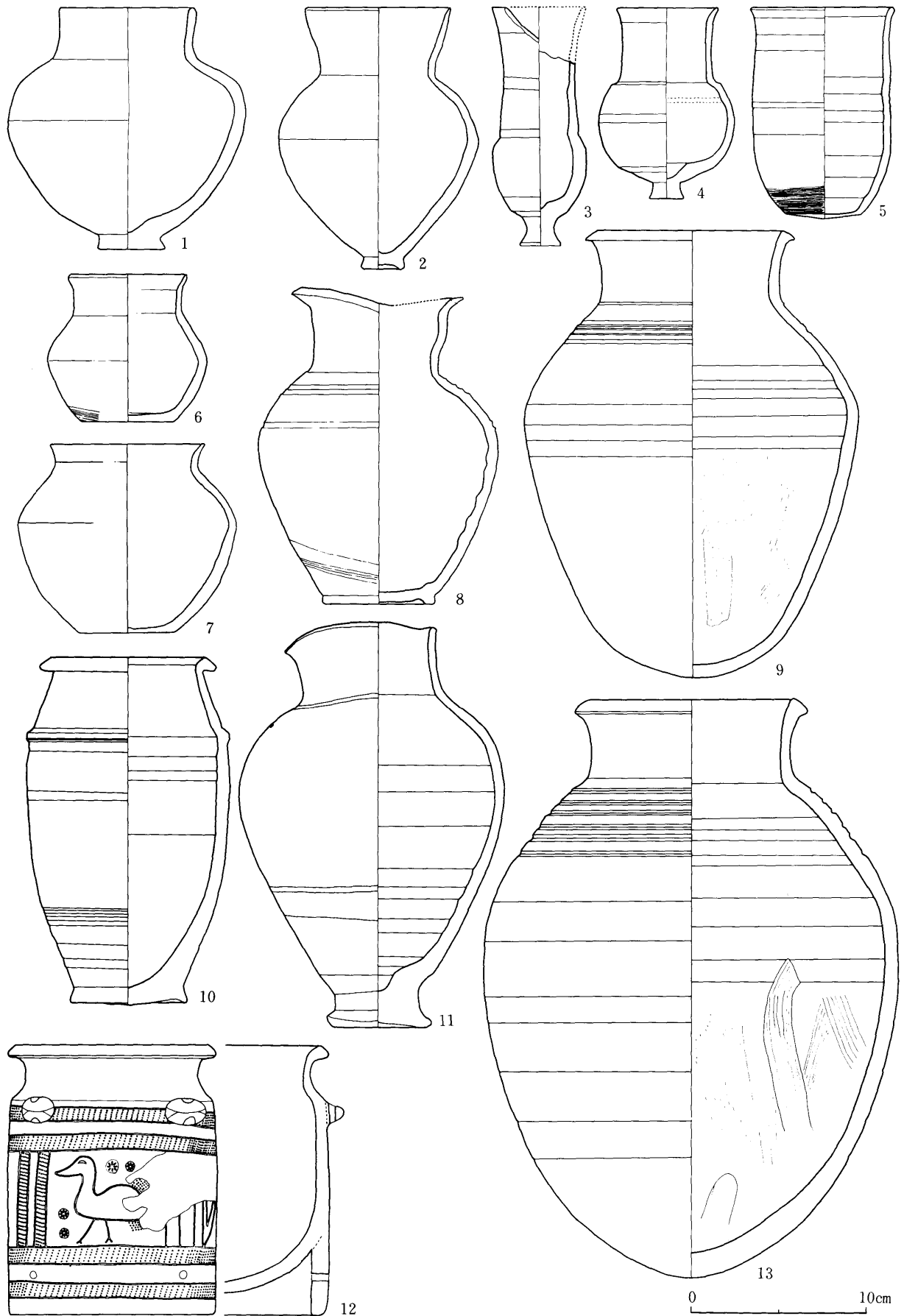


Fig. 50 テル・ソングルB 墓出土 土器 イシン・ラルサ/古バビロン等
 Pottery from Graves, Isin-Larsa/Old Babylon Period, etc, Tell Songor B

2 テル・ソングルC

(1) 調査の経過

テル・ソングルCは、ソングルBの東北約100mに位置し、南北40m、東西30m、比高1mの小さいテルである。テルの最頂部は88.25mであった。調査は1978年2月4日より開始され、途中、何度か中断されたが、1979年12月をもって終了した (Fig.51)。

(2) 層位と遺構 (Fig.52, 53)

このテルは低平で、表土から処女層までの深さは、僅か1.6mである。この中に、ウバイド期に属する2つの生活層が確認されたが、イスラム墓の攪乱や、ディヤラ川の氾濫と推定される侵食などによって、遺構の残りは極めて悪かった。I層は、ほぼ15×25mほどの区画内に検出された建物遺構をさし、部屋の床面は2枚 (I a, I b) あった。II層は、テルの北東部、グリットIV-6、V-6を中心に調査したが、遺構は検出されなかった。しかし、黒色あるいは緑色の灰混りの床二枚が確認された。

I層の遺構はIユニットと考えられる建物からなり、既ね、18の部屋を伴ったようである。それぞれの部屋は一辺2m前後の方形であるが、部分的にプランが不明瞭な所もある。壁は練土で作られており、厚さは70cm前後であったが一定していない。建物の数ヶ所には入口が設けられており、R-7内のパン焼ガマの横と、R-4とR-3の中間西側ではドアソケットを発見した。R-5の東側にはパン焼ガマがあり、その前面は小規模ながら石膏で床張りがなされていた。また、R-11の東側には、土器片を敷込んだドレインが、長さ7mにわたって確認された。更にこのドレインの下層 (I b) からは、2連の炉を発見した (Fig.53)

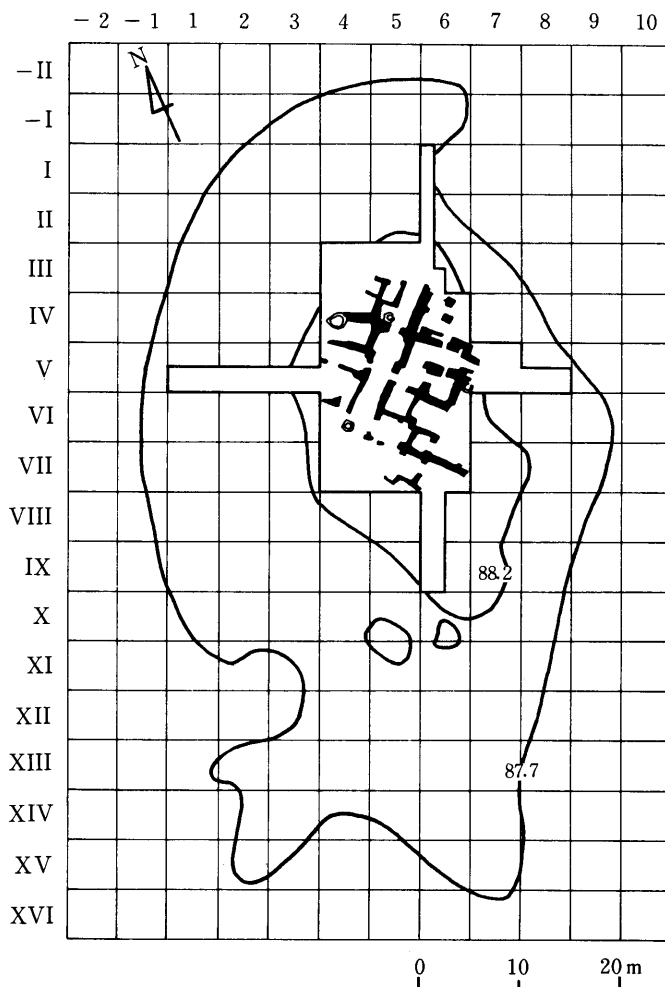


Fig.51 テル・ソングルC 発掘区域とウバイド期建物

Excavation Area and Buildings, Ubaid Period, Tell Songor C

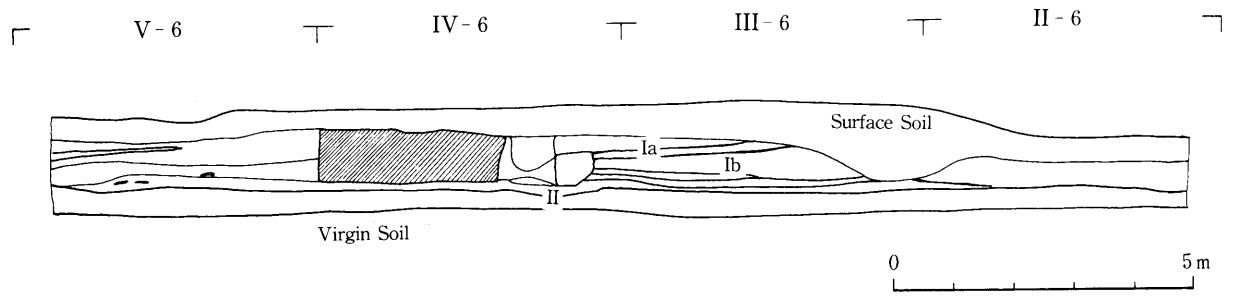


Fig. 52 テル・ソンゴルC 断面図(北-南) Section (North-South), Tell Songor C

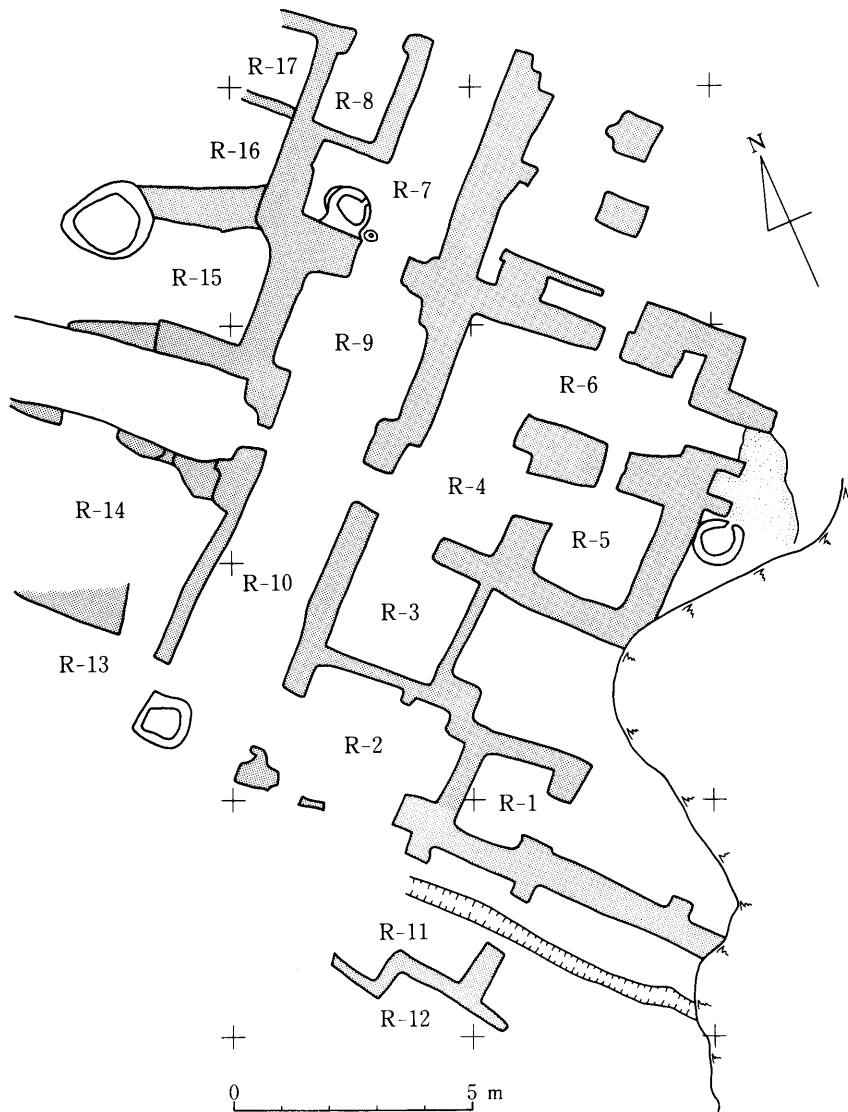


Fig. 53 テル・ソンゴルC ウバイド期の建物 Plan, Ubaid Buildings, Tell Songor C



Fig. 54 テル・ソングルC ウバイド期 彩文土器 Painted Pottery, Ubaid Period, Tell Songor C

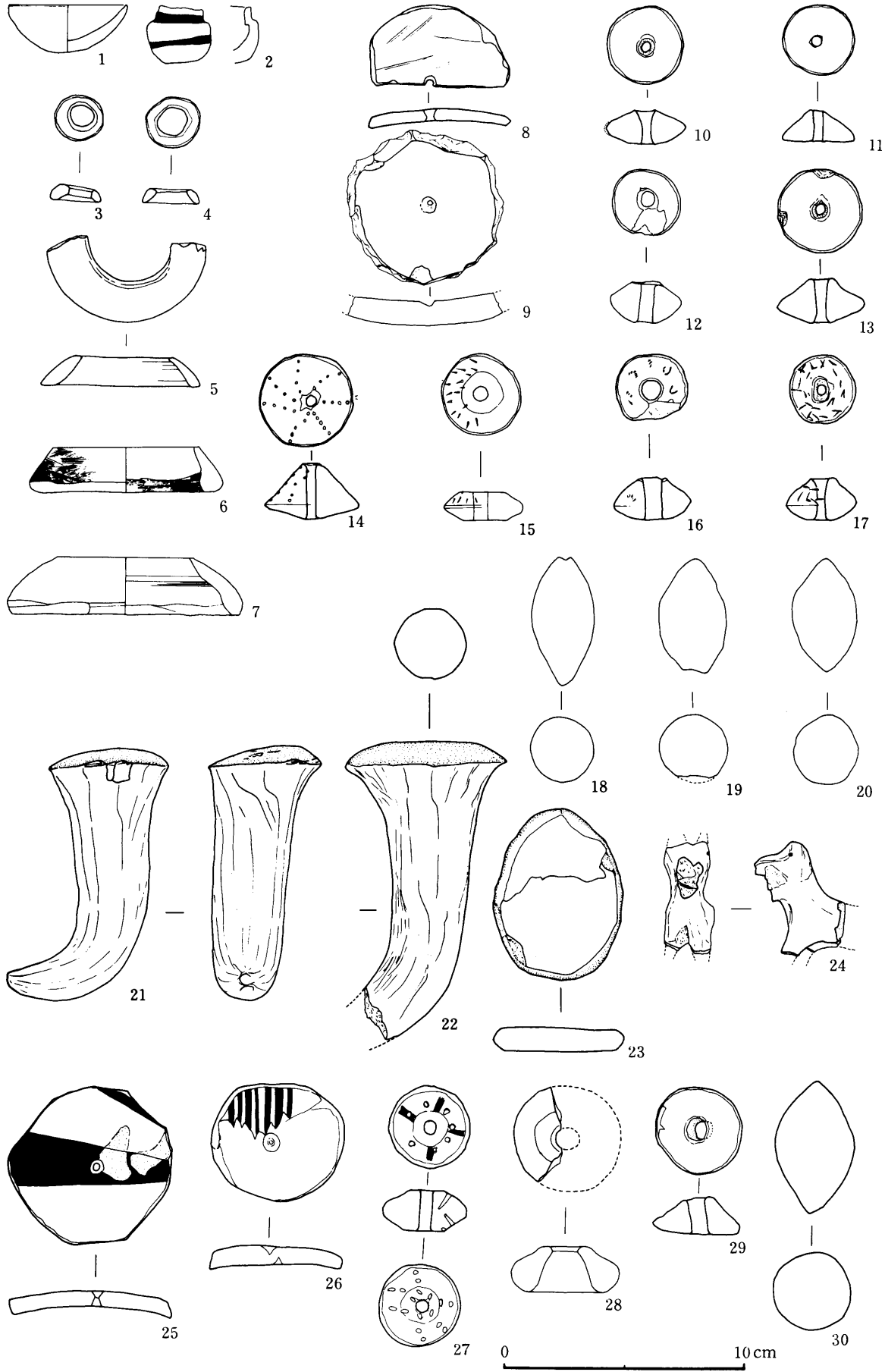


Fig. 55 テル・ソングルB,C 土製, 石製品 Terracotta and Stone Objects, Tell Songor B(1~24), C(25~30)

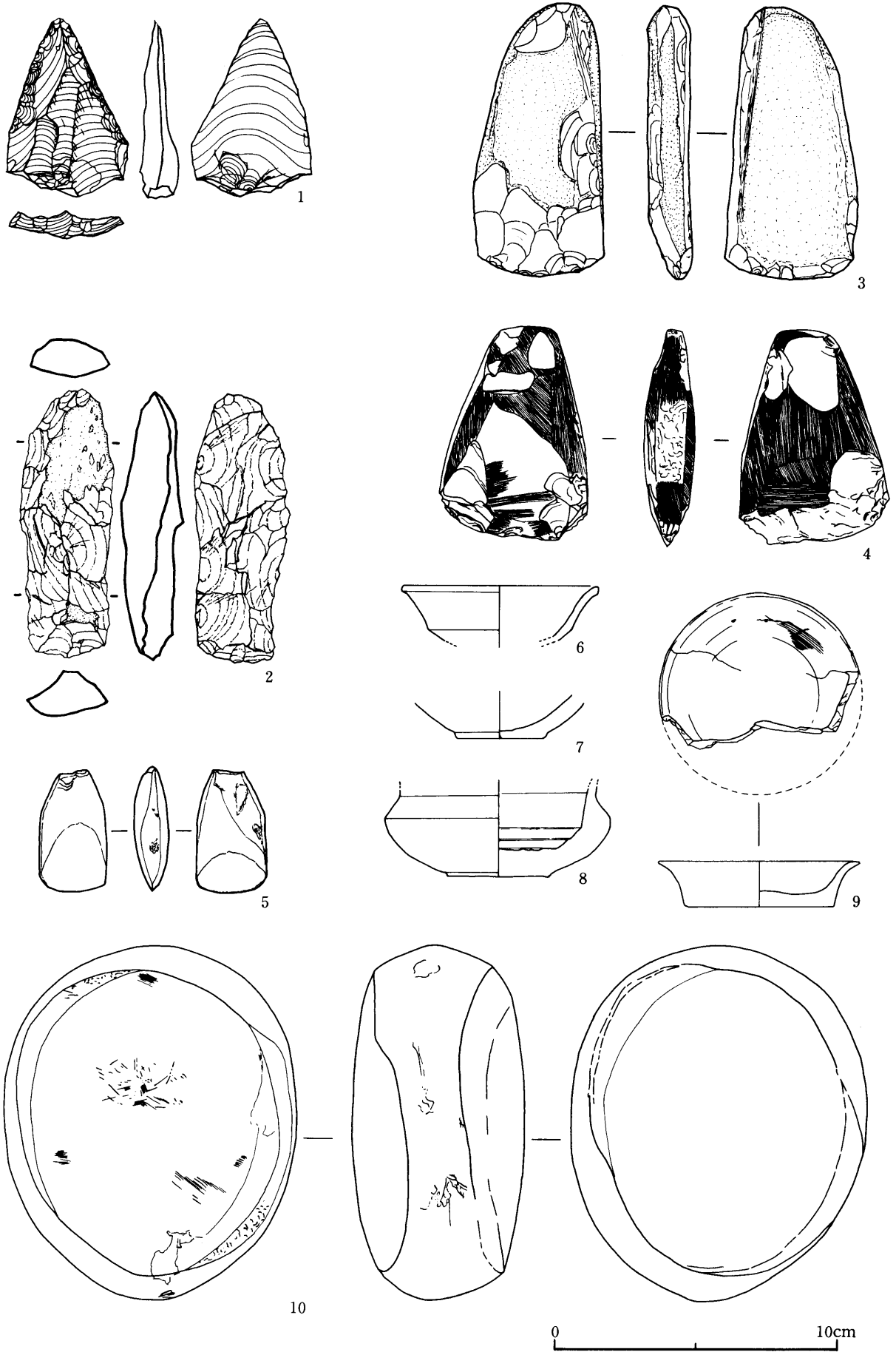


Fig. 56 テル・ソングルA, B, C 石器 石製品 Stone Objects, Tell Songor A(2), B(1, 4, 6~10), C(3~5)

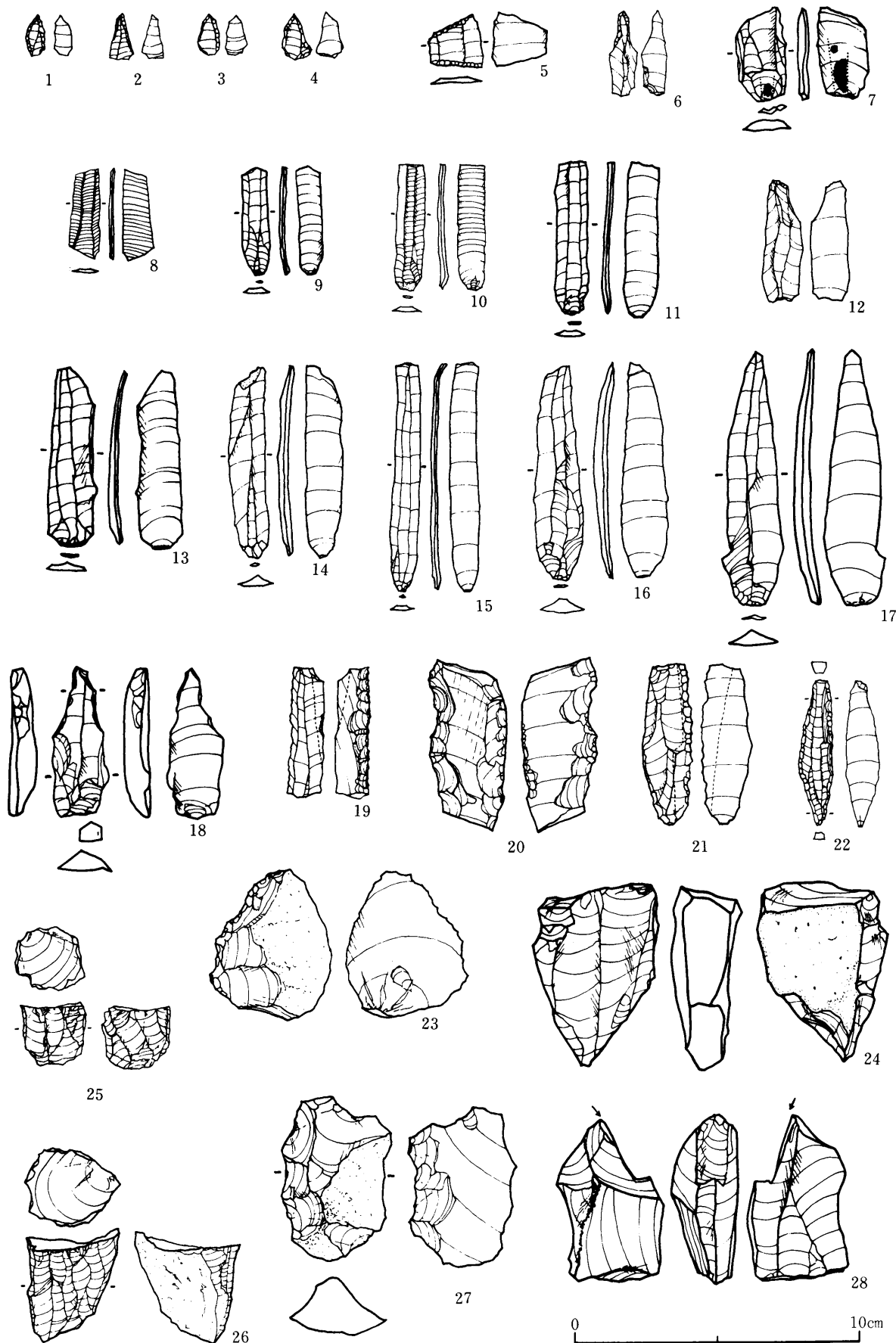


Fig. 57 テル・ソングル A,B,C 石器

Lithic Artifacts, Tell Songor A(11, 24, 28), B(1, 2, 5, 7~9, 13~15, 17, 18, 20, 22), C(3, 4, 6, 10, 12, 16, 19, 21, 23, 25~27)

(3) 遺物

1) 土器 (Fig. 54)

壺 1, 3, 4, 7, 8 にみられるように、中型、小型のものは短頸のものが多く、肩部に4つの耳をもつものがある。特に8は魚鱗文を施し、7は細い文様を描いている。壺2, 6のようにやや長い口縁部をもつものもある。これに似たものがソングルAから出土している (Fig. 37-6)。また、口縁の内側に蓋受をもつ壺 (10) も発見された。深鉢 (13) はハラフ期から続いて用いられているタイプで、外側全体に彩文が施されている。この土器内には幼児が埋葬されていた。

鉢 11はやや背丈が高く、外側に主として彩文が施されている。このほか、14に類似する竜骨型浅鉢も多く出土している。15は土器の底面に格子の刻文をもつ。テル・ソングル出土のウバイド期刻文土器は、すべてこの型に限られる。

亀甲形土器 ソングルA出土例 (Fig. 36-1) に比べ、やや小さく、器高の高い土器である。

ビーカー形土器 5と同じようなものが他にも数点出土している。器壁は薄く、粘土質の胎土をもち、丁寧に仕上げられている。類例をハッジ・モハメッド遺跡出土品に求むることが出来よう。このほか、ソングルB出土の赤色磨研の彩文土器 (Fig. 47-6) と同じ土器も出土した。

ソングルC出土土器の文様は、暗緑色、赤色、暗紫色などで描かれ、細い文様をもつものが多い。描かれた文様は、格子文、波文、菱形文、貝殻文、ジグザグ文、三角文、稜杉文、点文があり、具像文として植物、牛頭、鳥、蛇、レオパードなどを描く、胎土は粘土質であり、器壁の薄いものが多い。仕上げは化粧土に近い状態で、丁寧である。

2) 石器およびその他の遺物 (Fig. 55, 56, 57)

石器は主として、錐、鎌刃、スクレイパーである。石鏃はほとんど出土していない。この現象はソングルB I層と同じである。石材は黒耀石、半透明薄茶色フリントがあり、両側ともハムリン地区に産出せず、他地域から採来されたものであろう。このほか、石製碗、円板状すり石、球形磨石、砥石、メースヘッド等が出土した。土製紡錘車、釘形土製品等も発見された (Fig. 55, 56)。石器についてはVI章を参照されたし。

3 小 結

テル・ソングルはA, B, Cの三丘からなり、ディヤラ川と、ハムリン山地の北側を流れるナリン川の合流地点に近い位置にある。このハムリン山地は、ザグロス山系とメソポタミア低地との境にあるもので、原始農耕の起源とその伝播過程という問題や、ディヤラ川流域に関する研究、更にはイラン高原との文化交渉路の研究上、注目されていたが、今回のハムリンドム建設に伴い、一斉に発掘調査が開始され、種々の問題が徐々に明らかにされつつある。

テル・ソングルB, Cは、ハラフ期、ウバイド期を中心とする新石器時代の遺跡である。以下、今回の調査で明らかになった特色、問題点を記す。

ハラフ期

1. 建物の壁は練土が使われている。ソングルAで発見されたサマッラ期の建物に日乾レンガが使用されていたにもかかわらず、その伝統はハラフ、ウバイド期には受けつがれていない。
2. 建物は上層になるにつれ規模が大きくなり、III, II層では石膏張りの床をもつ。

3. ハラフ期の典型的タイプとされるクリーム碗形土器（広口で、頸部から肩部および胴部にかけて張る。胴部や口縁部に比較し器高の低い土器）は一点もなく、また、平底の鉢も出土していない。^{i.1}

4. 内外面に彩文を施した台付鉢が多く出土した。ここに描かれた文様はクロスハッチング（格子文）が主で、内面の底にはジグザグ、鳥、同心円、ロゼッタ（花文）などが主に描かれ、まれに牛頭文、連続菱形文などもある。テル・アルパチャなどでは平底の鉢や、碗が多く、台付のものは少ない。^{i.2}

5. 胴に稜のある鉢もハラフ期では一般的だが、テル・ソンゴルでは3片しかなく、しかも無文である。^{i.3}

6. 深鉢はアルパチャではみられず、テペ・ガウラ^{i.4} XX層に出土している。この種の土器はテル・ソンゴルB、Cでは多量に発見されるものであり、ウバイド期まで続くことが知られた。このタイプの彩文は、外側に、円、ロゼッタ、格子文、菱形文などを描き、細かく、丁寧に仕上げている。内側には口縁に数本の並行線を描く例が多い。彩色には赤、黒、そして空間に白を使用している。

7. 口縁が内側に内湾した直径約30cmの大形碗は、並行線文を主とした単純なものが多いが、外側に波形文を主として描き、塗り残し文様になっているものもある。これらのタイプ、文様はウバイド期になっても使用されている。

8. 彩文をもった壺は、ほとんど肩部がはり、稜をもっている。口縁部の内側に蓋受の突帯をもつものがある。蓋受突帯をもつ土器は、アルパチャ、テペガウラには認められない。この蓋受突帯を有する土器は、碗、長頸壺に限らず、短頸壺、鉢などにも採用されている。また後のウバイド期では広く普及した。無文の長頸壺も出土したが、肩には稜はなく、球に近いものが多い。

9. 皿型の彩文土器は、外面に十字文などを描き、中心に径5mmほどの穴があいている場合が多い。おそらく蓋などに使用されていたのだろう。特殊なタイプとして高台が出土している。

10. 石器については細長いブレードが出土し、石鏃などは出土しなかった。石臼が出土していることなどから農耕を主体とする生活であっただろう。アラバスター製の石製碗も出土している。

11. テラコッタ、護符類はほとんど出土していない。

ハラフ期は、テル・ソンゴルの場合、下層から徐々に彩文の簡略化が認められ、上層でウバイド文化に接している。ハラフ期（ハラフ式土器）の南限は、このテル・ソンゴルBや^{i.5}チョガマミ遺跡であり、時期もハラフ期後期にあたる。従って初期ウバイド期との接触は十分に考えられる。

ウバイド期

ソンゴルAで墓、ソンゴルBより土器窯、大溝、ソンゴルCで住居跡を検出した。遺構の特徴として次の点があげられる。

- 1 ソンゴル3丘を、墓、土器作り場、住居にわけ、それぞれ異った使いわけをしている。
- 2 建物は日乾レンガでなく練土によって作られている。
- 3 土器窯が13基検出されていることから、土器作り専業も考えられる。
- 4 埋葬は、幼児は屋内床下、成人は屋外の墓域になされている。

遺物については以下の特徴があげられよう。

- 1 亀甲形注口土器 注口は長く、器壁は薄い、器高は高い。
- 2 竜骨形浅鉢 口縁は外反し、底部付近に稜を持つ、底部は平底でなく丸味を帯びている。彩文は内側に格子文や全面塗り、底部には花文、格子文、三角文、牛頭文などが描かれている。

3 薄手鉢形土器 ほとんどが小型のもので、底部が丸底のものが多い。胎土は良質の粘土質で、器壁は2mm前後のものが多い。

4 薄手ピーカー形土器 テル・ソングルCより数点出土し、ハッジ、モハメッド式の影響が強い。文様も細かく、初期ウバイド期の特徴を示すものであろう。

5 蓋受付壺 この種の土器にはいくつかのバリエーションがある。例えば、内側の蓋受突帯を張り付けたもの、口縁を極端に外反させることによって、頸が口縁をなすものまである。ハラフ期においてもこのタイプが出土しているが、両時期に大きな差異は認められない。ただ紐通しの為と考えられる孔の位置（ハラフ期は蓋受突帯上に、ウバイド期には口縁に穿孔をもつ）が多少異なることが指摘できる。

6 深鉢 器形の特徴は、口縁がやや外反し、胴部がやや張る。底部は器形の大きさに比較して小さい。彩文は外側に細かく丁寧を描き、内側には口縁付近に数条の平行線を描くなどである。このタイプは、テル・ソングルのハラフ期より存在するが、南メソポタミアや、ラス・アル・アミアの初期ウバイド期には存在していない。^{注6}一方、北メソポタミアでは、テペ・ガウラ^{注7}XVIII層に発見されている。従って後期ハラフ期と、初期ウバイド期の接触期及び接触地に存在する器形といえる。

7 大型壺 器の口径は直径30cm前後のものも多く、器高は7cm前後である。文様は塗り残しの波形であり、澄色、赤色を使っていることが多い。この器形、文様はソングルではハラフ期より引続いて使用されている。

以上の土器は、ソングルB、Cではハラフ期からウバイド期まで使用された器形であり、この現象は後期ハラフ文化と、初期ウバイド文化の接触によるものと考えられ、テル・ソングルB、Cの特色を示すものである。

8 舟形土器 楕円形の舟型土器には2種類が認められる。1つは器高も低く、その表現は具体的で、ミニチュアに近いが、容器としても充分使用できる大きさである。他は、器高が高く、胴部は垂直に近く立ち上がるもので、体部外面を波形文、格子文、または全面に塗って彩色している。この舟形土器はテル・ソングルでは出土量も多く、舟を使用する生活があったことを示唆するものではなかろうか。

9 壺 大型壺の口縁は極端に外反したものが多く、胴部は一般に球状のものが多い。底部もほとんど丸底である。中型、小型の壺は短頸で、胴部はゆるやかな稜をもち、肩部に4つの耳をもつものが多い。

10 壺 口縁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は丸底である。文様は平行線と波形文、あるいは格子文が多い。このタイプの土器は比較的多く出土したが、相対的に粗い施文を行っている。

11 石器 錐が最も多く、鎌刃、スクレイパー等が出土している。石鏃と考えられるものは全んど出土しなかった。これは、狩猟等を中心とした生活ではなく、農耕生活を基盤とした生活形態を示しているのかも知れない。また、小型石錐が多量に出土することは、土器の補修作業などがひんばんに行われていたことを暗示しているであろうか。このほか、石臼、砥石、パレット、円形石板、石製壺なども出土した。

12 その他 刻文のある粘土製紡錘車や、土器片利用の円板状品、釘型土製品が出土した。

以上から、ハラフ期については、ソングルB最下層（IV層）からすでに後期ハラフに属すると考えられる。上層になるにつれ、文様の簡略化、素文化現象が認められる。そしてII層の項には初期ウバイド文化の進出に伴い、ハラフ文化とウバイド文化の接触があった。それが土器のタイプ、文様に表われはじめ、南メソポタミアではみられない、ハラフ文化を受け入れた、初期ウバイド文化を産みだしている。全体としてみればバグダッド南60kmのところにあるラス・アル・アミアのウバイド式土器に酷似している。その他赤色磨研土器に見られるように、

イラン高原との接触もみられる。時期的な問題は、ハラフ的要素、イラン的要素を多くもつ初期ウバイド (Ubaid 3) 期とすることができるのではなかろうか。

注

- 1) Mallowan, M. E. L., 1933, "Excavation at Tell Arpachiyah", *Iraq* Vol. II
- 2) 注1に同じ
- 3) 注1に同じ
- 4) Tobler, A. J., 1950, *Excavations at Tepe Gawra*, Vol II, Philadelphia
- 5) Oates, J., 1968, "Prehistoric Investigations Near Mandali, Iraq", *Iraq* Vol. XXX
- 6) Stronach, D., 1961, "The Excavation at Ras Al-Amiya", *Iraq* Vol. XXIII-2
- 7) 注4に同じ

V テル・ハメディヤート

ハメディヤートと呼ばれるのは、ソングル3丘から西南方向ナリン川岸まで一列にならんだテル群である。西南端のテルはゲルメツと呼ばれる（Fig. 2）。丘はだいたい北斜面がゆるく、南斜面は急である。周辺平坦部からの比高は5～6 mくらいのものがおおいが、ゲルメツはもっと大型である。ハメディヤートは、前述のグッバ、ソングルとことなり1978年12月から1979年3月にかけて小規模な試掘をおこなったにとどまる。

地表面における遺物の散布は、東北側の約3分の1ほどの部分のみであったので、のこり西南側3分の2は自然丘であろう。また遺物の散布している東北部分にしても、本来たかい部分である自然丘上に生活がいとまられたものであろう。時代はおおよそアルサケス朝からササン朝期とおもわれ、ハバーリと呼ばれるテル群（グッバの西、ハメディヤートの北、調査当時かなりの部分が耕作されていた）につながる1 km四方くらいの大集落であったともかんがえられる単層の遺跡である。

試掘地の一ヶ所は、大型土器置場である（Fig. 58-10, PL.23-2, 3, 4）。いくつかの土器は口縁を下にして伏せた状態であった。また Fig. 58-9 の土器は Fig. 58-11 の土器の中にあり、この土器はさらに Fig. 58-10 タイプの大型土器の中にはいていた。ここに接して、石膏とその上をアスファルト状のもので塗られた部屋が土管でつながっている（PL.23-6）。これは何か醸造関係の設備であるとかんがえられる。他に大型の土器窯などがあった（Fig. 58-1, PL.23-1）。この付近は工房区で、工房区と居住区はわかれていたものとおもわれる。

遺物中めだつものは、青釉の土器片と把手付大型土器（Fig. 58-11）である。前記土器置場の土器のおおきいものには高さ1 m、最大腹径60cmをこえるものもある。これは腹部に小孔を持ち底が突出し、内面はアスファルト状のもので塗られている（Fig. 58-10, PL.23-4）。表面にはマークがしるされている（PL.23-3）。

他には、鉄器、ガラス器、封泥などがある。いずれも破片である（Fig. 58-2～8, PL.23-5）。遺物は、試掘地出土品も他の表採品でも同様なものである。

テル・ハバーリの一部でも試掘をおこなった。ハメディヤートと同様な遺物が出土した。

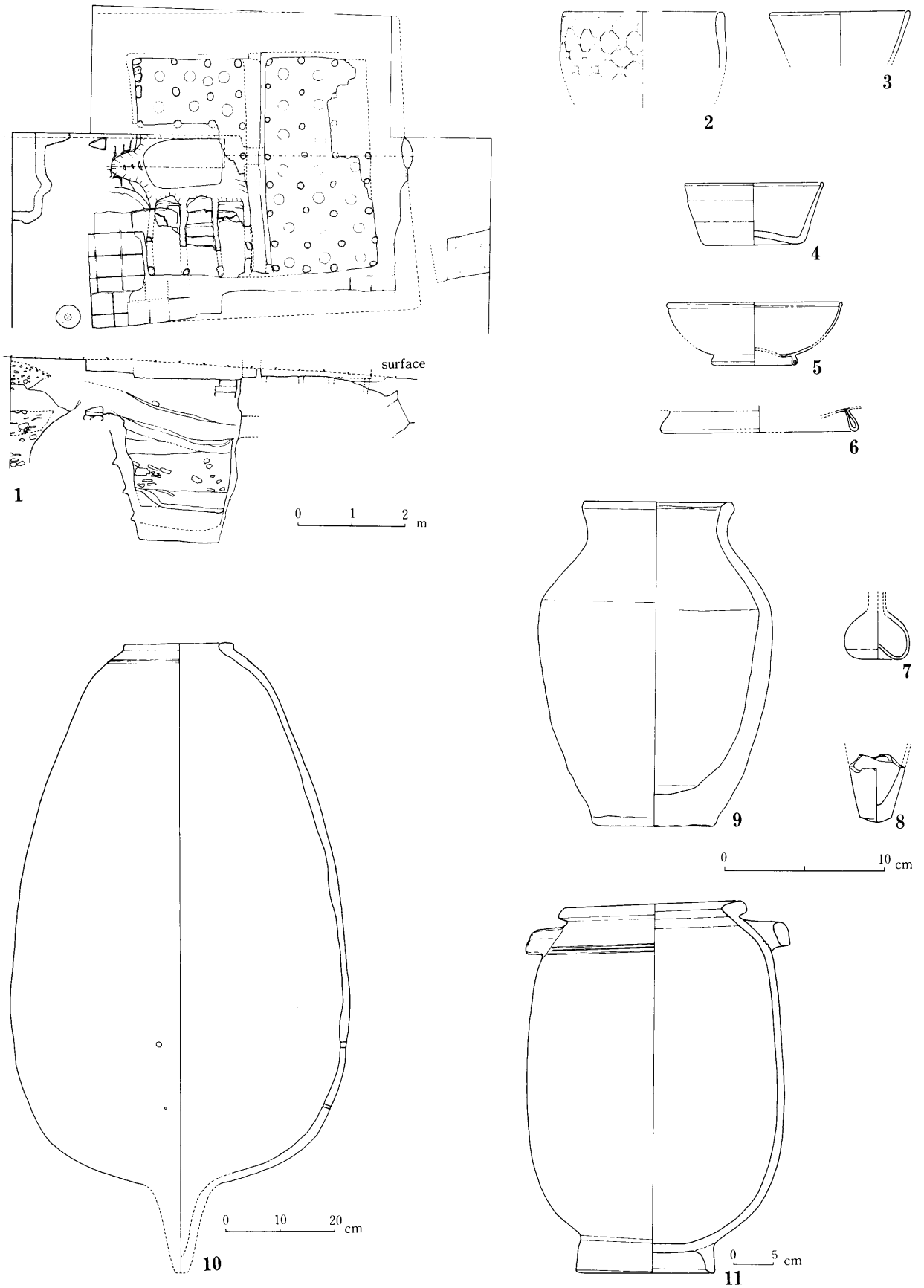


Fig. 58 テル・ハメディヤート 土器窯, 土器, ガラス器 Kiln, Pottery and Glass, Tel Hamediyat

VI テル・グッバ及びソンゴルの石器

本稿は、テル・グッバ、ソンゴル（A, B, C）から出土した石器組成のうちから、今日まで研究されたものに関する予備報告である。

Table 1 から Table 7 に示された石器組成のうち、いわゆる打製石器類は、チャート質か瑪瑙質のフリント、あるいは頁岩より作成されている。黒曜石製の石器は極めて稀である（Fig. 57—8, 9, 20）。

石器の素材となった石材については、非常に興味深い点がある。半透明、薄茶色の、極めて特徴的な良質の瑪瑙質フリントが、しばしばソンゴル B I, II 層、ソンゴル C I A, I B, II 層において、主に規則的に連続剥離された石刃、小石刃の素材となっている。しかし、グッバでは、この種のフリントから作成された石器は、今までのところ一点も確認されていない。

石器製作の傾向に関していえば、各石器組成の間にはかなりの相違が認められる。例えば、グッバのすべての層（IV 層以下）では、石刃の数が小石刃の数を圧倒しているが、それとは対照的に、ソンゴル B と C の 4 つの層（ソンゴル B I 層、ソンゴル C I A, I B, II 層）からは、小石刃が石刃より多く出土している。

更に、各層の間には、道具としての石器の組成についてかなりの相違点が認められる。Table 8 は 7 つの層（グッバ IV, VII 層、ソンゴル B I, II, ソンゴル C I A, I B, II 層）から出土した代表的な道具石器及び石製品の組成の相違を示す集積グラフである。

同グラフでまず認められる急上昇ラインは、S B I（ソンゴル B I 層）の項目 8 から 9 にかけて、及び G IV と G VII（グッバ IV, VII 層）の項目 1 から 2 にかけてのものである。このようなラインの急上昇は、ソンゴル B の I 層では錐が重要な役割を果たしており、また、グッバ IV 層、VII 層は、鎌刃によって特徴づけられるということを示すと考えられる。さらに、ソンゴル B II 層、および、ソンゴル C II 層には、スクレーパーがかなりの頻度で認められる。

ソンゴルの発掘調査過程で旧石器と思われる資料が 1 点発見された（Fig. 56—1）。それはソンゴル B VII—13 グリット出土で、我々が“無遺物層”と称した、薄茶色シルト層の頂部より—145cmの深度（テル自体の表面からは、—165cm）から出土した。

石材は、薄灰色のチャート質フリントであり、この種のフリントは、ハムリン地域でかなり頻繁に分布が認められる。背面（Dorsal surface）が、かなり白色化しているが、石器の周縁はほとんど磨滅しておらず、この石器が何らかの自然力によって、非常に遠い場所からこの地点に運ばれたとは考えにくい。

先端部（打面の反対部分）は、両側縁に沿った、腹面（Ventral surface = 打瘤のある面）から背面に向けて施されたやや急角度の刃部加工で、尖形に整えられている。刃部加工の施される前の剥片の原形は、ほぼ三角形であったと考えられるが、背面には、少なくとも 4 つの（この剥片が石核から剥離される以前の）剥離痕が認められる。これらの剥離痕は、求心的でも、準平行的でもなく、それ故、この石器の原剥片が典型的ルヴァロア・ポイントであったとは思われない。打面には凸形の面取りが認められるが、ルヴァロア・ポイントにしばしば見られる“Chapeau de gendarme（騎兵帽）”型の面取りではない。技術—形態的に見ると、この石器は、非ルヴァロア技法によって剥離された剥片上に加工されたムスティエ尖頭器であると考えられる。

この石器が、中期旧石器時代の産物で、その出土状態が原位置をかなり保っていたとすると、“無遺物層”は洪積世にまでさかのぼることになる。その意味でも、“無遺物層”を、周辺の洪積世地形との関連において再考することも可能である。

(注)

1 本稿でいう“石器組成”とは、“攪乱されていない考古学層から出土した石器セット”であり、グッパとソンゴルの各層にあてはめると、1) いわゆる打製石器、及び、2) 打製石器の製作工程と直接の関係を有さないとされる石器及び石製品、の二群からなる。更に打製石器には、石核、(石刻剥離工程で生じるすべての) 剥片、及び、道具あるいは武器としての石器、が含まれる。以下は本稿中、石器組成の区分に用いられた基本概念である。

1) 打製石器

〔石核〕 様々な形態がある。

〔剥片〕

原皮剥片：背面および打面のすべてか、ほとんど全てが原皮（原石を覆った自然面）である剥片。

部分的原皮剥片：背面上が原皮及び剥離痕の両者から成る剥片。

非原皮剥片：背面及び打面のすべてか、ほとんど全てが剥離痕である剥片。

石刃：非原皮剥片のうち、縦長（打点から先端部までの長さ）が横幅（縦長に直交した最大幅）の2倍かそれ以上のもの。

小石刃（細石刃）：石刃のうち横幅が1.2cmに満たないもの、あるいは縦長が5cmに満たないもの。

トサカ状剥片：背面上に、多少とも直線的な稜を施された剥片あるいは石刃、この剥片の準備、剥離は、不適当な形の原石上に、直線的な（ジグザグ状、あるいは直線状）稜線をしばしば作り、同線に沿ってまずこの剥片の剥離を、次にその後の石刃、小石刃の連続剥離を容易にするという目的をもっている。

石核修正剥片：石核の打面や側面などから剥離される剥片。この剥片の剥離は石核打面と表面とのなす角度、打面の位置などの修正のためであり、修正後の石核からの剥片剥離を容易化するためのものである。

ビュアリン・スポール：彫器の刃部加工の際に生じる特殊な形をした剥片。

チップ：大きさとは関係なく、剥片剥離工程、又は打製石器製作の際に偶然に生じたと考えられる剥片。

これの同定は極めて困難であり、主観的である。

〔道具、あるいは武器としての石器〕 刃部加工されたもの（スクレーパーなど）、刃部加工されずに利用されたもの（鎌刃のうちのある種のものなど）、がある。自然石、石核、剥片、チップにいたるまで、どんなものでもこれの素材になり得る。

2) 石製品、及び打製石器製作工程と直接関係しないと思われる石器。

2 あくまでも、I層の一部分であり、土器窯に直接関係すると思われる地域に限られる。

参 考 文 献

Bordaz, J., 1970 *Tools of the Old and New Stone Age*, New York

Bordes, F., 1961 *Typologie du Paléolithique ancien et moyen*, L'Institut de préhistoire du l'Université de Bordeaux

- Mortensen, P., 1973 "A Sequence of Samarran flint and obsidian Tools from Choga Mami," *Iraq*, Vol. XXXV, Part 1, 37—55
- Tixier, J., 1963 *Typologie de l'Épipaléolithique du Maghreb*. Arts et Métiers Graphiques, Paris

Table 1 テル・グッバ石器組成

IV 層		VIIb, C層	
(石核)		(石核)	
双円錐形 (双角錐形)	2	円錐形 (角錐形)	2
円錐形 (角錐形)	1	円盤形	1
角柱形 (円柱形)	1	その他	4
球形	1	(剥片)	
(剥片)		原皮剥片	4
原皮剥片	6	部分的原皮剥片	39
部分的原皮剥片	29	非原皮剥片	10
非原皮剥片	35	石刃	26
石刃	65	小石刃	9
小石刃	8	破片 { 剥片 石刃 小石刃	16
石核修正剥片	3		19
チップ	12		4
(道具/武器)		トサカ状剥片	1
チョッパー	1	チップ	2
スクレイパー	1	破片	11
刃部加工された石刃	1	(道具/武器)	
錐	2	細かく刃部加工された石刃	2
エンド・スクレイパー	1	截新された剥片, 石刃, 小石刃	7
挟入れのある剥片, 石刃	3	鎌刃	23
截断された剥片, 石刃	8	(石製品)	
細かく刃部加工された剥片, 石刃, 小石刃	6	石皿	7
鎌刃	25	楕円形の石	2
(石製品)		磨き石 (?)	2
石皿	10	計	191
楕円形の石	1		
磨き石 (?)	3		
磨製石斧	1		
計	226		

Table 2 ソンゴルA, サマッラ期床面の石器組成

(石核)			
小石刃用石核	1	スクレイパー	2
(剥片)		鋸歯状の刃部加工のある剥片	1
原皮剥片	1	鎌刃	2
部分的原皮剥片	5	(石製品)	
非原皮剥片	6	石	6
石刃	1	打ち欠かれた石	1
破片 { 剥片	4	石皿破片(?)	2
		石刃	2
チップ	5	磨き石(?)	10
(道具/武器)		石板(?)	1
ハンマーストーン(?)	2		計 57

Table 3 ソンゴルB I層の石器組成

(石核)			
角柱形(円柱形), 小石刃用	88	錐の先端部	1
球形, 小石刃用	33	刃部加工された剥片, 小剥片, 小石刃	19
円錐形(角錐形), 小石刃用	32	平坦面から刃部が加工された彫器	1
円盤形, 小石刃用	1	スクレイパー	1
その他, 小石刃用	62	急角度スクレイパー	11
(剥片)		截断された石刃, 小石刃	6
原皮剥片	168	鎌刃	6
部分的原皮剥片	394	幾何形細石器	1
非原皮剥片	95	(石製品)	
石刃	25	打ち欠かれた大石	1
小石刃	73	石皿(?)	1
破片 { 剥片	22	石皿の破片(?)	1
		石刃	15
		砥石の破片(?)	5
小石刃	27	楕円形の石	5
トサカ状剥片	11	楕円形石の破片	5
石核修正剥片	5	磨き石(?)	6
ビュアリン・スポール	1	磨製石斧の素材(?)	2
チップ	31	(黒曜石)	
(道具/武器)		剥片	1
ハンマー・ストーン	1	非原皮剥片	1
チョッピング・トウール	1	石刃	2
斧類	3	石刃の破片	1
刃部加工された小剥片(錐の先端部)	76		計 1241

Table 4 ソンゴルB II層の石器組成

(石 核)				
角柱形 (円柱形), 小石刃用	33	平坦面から刃部が加工された彫器	1	
円錐形 (角錐形), 小石刃用	12	截断面から刃部が加工された彫器	1	
球形, 小石刃用	7	スクレイパー	3	
双円錐形 (双角錐形), 小石刃用	2	急角度スクレイパー	2	
円盤形, 小石刃用	1	錐の先端部	2	
その他, 小石刃用	32	刃潰しされた小石刃	1	
(剥 片)				
原皮剥片	53	鎌 刃	2	
部分的原皮剥片	160	幾何形細石器	2	
非原皮剥片	27	(石製品)		
石 刃	27	楕円形の石	1	
小石刃	30	楕円形石の破片	2	
破 片 {	剥 片	7	磨き石 (?)	2
	石 刃	8	磨き石の破片 (?)	1
	小石刃	4	砥石の破片 (?)	5
トサカ状剥片	4	磨製石斧の素材	1	
石核修正剥片	5	石製容器の破片	1	
チップ	15	(黒曜石)		
(道具/武器)				
ハンマー・ストーン	2	石 刃	1	
ピック (?)	1	小石刃	3	
ピックの破片 (?)	1	小石刃の破片	2	
チョッパー	1	スクレイパー	1	
			計 466	

Table 5 ソンゴルC I A層床面の石器組成

(石 核)				
角柱形 (円柱形), 小石刃用	49	破 片 {	剥 片	44
円錐形 (角錐形), 小石刃用	19		石 刃	11
球形, 小石刃用	12		小石刃	30
双円錐形 (双角錐形), 小石刃用	2	トサカ状剥片		4
その他, 小石刃用	27	石核修正剥片		13
(剥 片)				
原皮剥片	63	※ビュアリン・スポール(細く刃部加工されている)		1
部分的原皮剥片	201	チップ		42
非原皮剥片	107	(道具/武器)		
石 刃	11	ハンマーストーン		1
小石刃	99	刃部加工された小剥片 (錐の先端部)		14
		刃部加工された小剥片		2
		刃潰しされた小石刃		1
		截断された石刃, 小石刃		4

挟入れのある剥片	1	磨き石 (?)	5
急角度スクレイパー	1	磨製石斧	3
※細かい刃部加工のあるピュアリン・スポール	1	磨製石斧の素材 (?)	2
鎌 刃	10	穴をあけられた石	1
幾何形細石器	1	穴をあけられたカルサイト	1
(石製品)		装飾品	1
楕円形の石	3	顔 料 (?)	1
打ち欠かれた大石	3	(黒曜石)	
砥 石 (?)	1	小石刃	4
砥石の破片 (?)	8	小石刃用の角柱石核	1
			計 806

Table 6 ソンゴルC I B層 (床面及びI A層床面直下まで) の石器組成

(石 核)			
角柱形 (円柱形), 小石刃用	73	刃部加工された剥片, 石刃, 小石刃	7
球形, 小石刃用	25	挟入のある剥片	2
円錐形 (角錐形), 小石刃用	24	刃潰しされた小石刃	2
円盤形, 小石刃用	2	鋸歯状の刃部加工のある剥片	1
舟底形, 小石刃用	1	截断された剥片, 石刃	4
その他, 小石刃用	80	鎌 刃	13
小石刃石核の素材	2	截断面から刃部が加工された彫器	1
(剥 片)			
原皮剥片	139	(石製品)	
部分的原皮剥片	629	楕円形の石	4
非原皮剥片	179	磨き石 (?)	4
石 刃	33	磨き石の破片	1
小石刃	163	打ち欠かれた石	5
破 片 {	剥 片	砥 石	1
		砥石の破片	5
		磨製石斧	1
トサカ状剥片	石 刃	磨製石斧の素材 (?)	2
		石	2
		石核修正剥片	8
チップ	70	ビーズ	1
破 片	5	石製容器の破片	3
(道具/武器)			
ハンマー・ストーン (?)	1	石膏の破片	1
チョッパー	1	顔 料 (?)	1
スクレイパー	4	(黒曜石)	
急角度スクレイパー	5	非原皮剥片	1
石核様スクレイパー	1	小石刃	4
刃部加工された剥片, 小石刃 (錐の先端部)	4	破 片	2
			計 1616

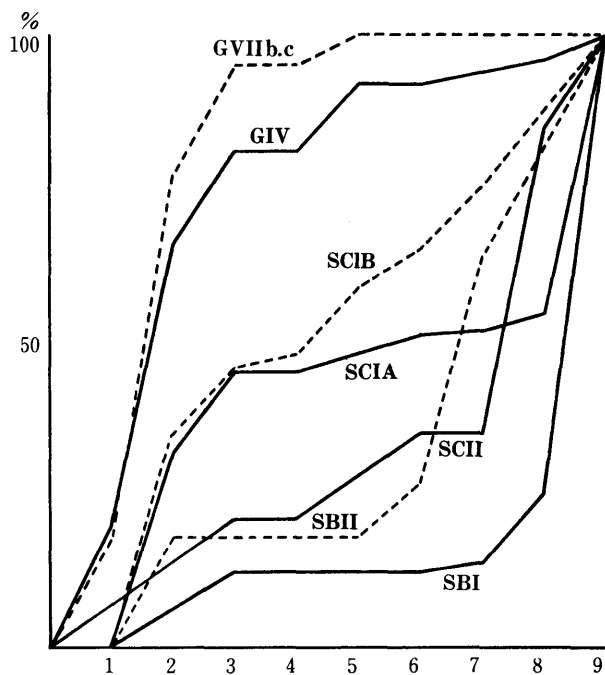
Table 7 ソンゴルC II層の石器組成

(石 核)			
角柱形 (円柱形), 小石刃用	31	刃潰しされた剥片	1
円錐形 (角錐形), 小石刃用	5	刃部加工された小石刃 (錐の先端部)	1
円盤形, 小石刃用	5	刃部加工された小剥片 (錐の先端部)	1
球形, 小石刃用	1	刃部加工された石刃	1
その他, 小石刃用	14	截断された石刃	1
(剥 片)			
原皮剥片	16	鎌 刃	1
部分的原皮剥片	175	(石製品)	
非原皮剥片	19	石 皿	1
石 刃	3	楕円形の石	5
小石刃	0	磨き石 (?)	3
破 片 {	剥 片	打ち欠かれた石	7
		砥石の破片 (?)	18
		円盤状に整形された石	1
トサカ状剥片	石 刃	穴をあけられた薄い石	1
		石核修正剥片	2
破 片	14	ドア・ソケット	2
(道具/武器)			
急角度スクレイパー	7	(黒曜石)	
		破 片	4
		ビーズ	3
			計 431

Table 8 テル・グッバ, ソンゴルの7つの層から検出された代表的な道具石器と石製品に関する集積グラフ

- 1 石 白
- 2 鎌 刃
- 3 截断された剥片
- 4 鋸歯縁付剥片
- 5 細かい刃付けをもつ剥片
- 6 刃つぶしされた剥片
- 7 搔 器
- 8 急角度搔器
- 9 錐

GVIIb.c: Gubba Level VIIb, c
 GIV : Gubba Level IV
 SCIB : Songor C Level IB
 SCIA : Songor C Level IA
 SCII : Songor C Level II
 SBII : Songor B Level II
 SBI : Songor B Level I



VII テル・グッバ第Ⅶ層の遺構模型の製作

1 遺構の記録

テル・グッバ第Ⅶ層の遺構は、円形という形態的な特徴や、持ち送り式のアーチやヴォールトを多用するという構造上の特色など、建築的にみて非常に興味深いものであった。しかもこうした建物は、かつて類例をみないものであったため、いつでも遺構全体を再構築でき、かつ精度の高い遺構模型を製作できる程度の記録をとどめる必要があると判断された。

このため、実測に際しては、できるだけ測点を多くとり、夥しい量にのぼる写真と合せて、遺構の現状を忠実に記録するよう努めた。しかし、それでもなお、遺構の形状や構造上の特徴のすべてが表現されたことにはならない。この不備を補うには、現地において、精度の高い立体的な遺構の複製をつくる以外にないと考えた。これを「素模型」とよんでいる。

以下、現地における遺構の実測と素模型製作の方法について記す。

(1) 実測

円形という平面上の特徴や、壁面が垂直方向にも湾曲していることを考慮して、第5壁以内に関しては従来の測量基準線とは別に、遺構のほぼ中心に新たな基準点を設定した。さらにこの点から北に向ってもとのグリッドと平行な線を0°とし、特徴的な壁面に着目して、時計まわりに0°、25°、45°、90°、135°、180°、205°、225°、247°、270°、315°、351°、の各方向を断面実測の基準線とした (Fig. 6)。作図にあたっては各基準線を含む垂直平面と壁面との交線を実測した。

遺構平面は、壁の上端面と下端面について、原則として中心角10°ごとの放射状の基準線を設けて実測した。立面図としては、開口部周辺および遺存状態のよい第5壁内面など、重要とみなした壁面の展開図を作成した。各図とも、縮尺は20分の1を原則とした (Fig. 59)。

なお、第5壁より外側では、従来の直交する基準線にしたがって実測した。

(2) 素模型の製作 (PL. 16-4)

製作の対象とした範囲は、遺構の中心部でかつ最も複雑な構成をもつ第4壁以内の全部と、第5壁のうち、控え壁がよく遺存している南西部分 (180°~270°) とである。縮尺は40分の1とした。

模型の材料としては、加工、運搬に容易なバルサ材を用いた。材1枚の厚さは2.0mmで、40分の1の模型では実寸の8cmに相当する。したがって、遺構を基準面から厚さ8cmごとの薄片にスライスした形状を、40分の1の縮尺で作図して、まず型紙をつくり、この平面形に沿って切断したバルサ材の薄板を積み重ねるという方法を採用した。各型紙は、遺構の上・下端平面図と断面図に基づいて作図した。このとき、型紙の輪郭すなわち遺構の水平断面の上では、実測された垂直断面との交点のみが直接の測点であるため、各測点の間では、壁面がなめらかに変化すると仮定して型紙の形状を決定している。床や壁体に施された部分的造作や細部の形態など、実測図の中に表現されていない箇所については、発掘現場で直接に遺構と照合した上で模型に修正を加えることによって、高い精度を保つようにつとめた。ただし、表面に現われるべきレンガの目地に関しては、実測図によるものとし、模型では、上端面での高さの変化をできるだけ正確にあらわすことに意をはらった。

2. 遺構模型の製作 (PL. 1-2, 3)

現地で得た大量の実測図、記録写真および素模型により、昭和55年度、本格的な遺構模型の製作にとりかかった。幸いにも、模型製作の費用を含めて、テル・グッバⅦ層の遺構に関する復原研究の経費として、2年度にわたる文部省科学研究費の助成をいただいた。

この模型の特徴は、もはや地上から姿を消してしまった遺構を、縮尺したとはいえ、ほぼ完全に再現した点にある。第Ⅶ層の遺構のうち、西トレンチ部分を除くすべての範囲を製作対象とした。

製作の方法は、現地製作の素模型と同様に、まず合板を積みあげることによって原型を製作し、これを雄型としてアクリル系樹脂によって最終的に成形し、完成品とした。全体の仕様はおよそつぎのとおりである。

- 1) 縮尺は40分の1とする。
- 2) 南北方向と東西方向で模型を断ち割り、断面にはレンガの目地を表現する (PL. 16-2・3)。
- 3) 原型本体は、厚さ2.0mmの合板を使用し、完成品にはアクリル系成形樹脂を用いる。
- 4) 表面の仕上げは、ビニール系塗料によって、レンガ部分、未発掘部分、地山部分を区分して着色する (PL. 16-1)。

以下、製作工程の全容を、原型と樹脂模型 (完成品) それぞれについて記録しておく。



Fig. 59 テル・グッバ中心部実測風景。遺構の中心に設けた基準点から放射状基準線の方角に鉄製のビームをわたし、これに垂直に鋼材を固定して断面図作成の基準線とした。

The survey for the central remains of Tell Gubba. An iron beam was put on the remains in a radial manner from the basic point and an vertical iron pole, which was fixed to the beam, was made the basic line for the section survey.

(1) 原型の製作工程

- 1) 実寸で8 cmごとに、縮尺40分の1の水平断面図を作図し、その型紙どおりに合板を切り抜いて積層する。最上面には、実測したレンガの目地を描く。同時に、垂直断面図を写しとった型板によって、合板の積層状態を補正する。
- 2) エッチングの手法を用いて、遺構最上面にあるレンガの目地を、各集合ごとにアクリル板に刻みつけ、シリコン樹脂で雌型をとる。これに石膏を流しこみ、合板1枚ぶんの厚さをもつレンガ集合の石膏小板を得る。これを遺構最上面の合板とおきかえる。
- 3) レンガ以外の遺構部分も含めて、実測レベルどおりに削平し、合板の露出部分全面にパテを塗布する。
- 4) 所定の断面位置に沿って原型を分割する。それ以外にも、原型は多数のパーツに分割したまま仕上げる。
- 5) 壁体側面の主要箇所および南北・東西の主断面には、実測図をポリエステル・シートにエッチングによって刻みこみ、これを貼りつける。
- 6) 遺構細部のうち、竪穴や据え付けの土器は、原型本体とは別にアクリル樹脂で成形し、本体にはめこむ。

(2) 樹脂模型の製作工程

- 1) 原型の各パーツごとにシリコンを2～3 mmの厚さで塗り、雌型を作製する。
- 2) シリコンの雌型の内面に、ガラス・クロスをはさみながらアクリル樹脂を2～3 mmの厚さに塗りこむ。
- 3) のこる内部空間に発泡樹脂を充填し、硬化した後、シリコン型をとりはずす。
- 4) 樹脂でできあがった各パーツをつなぎあわせ、つぎめに再度アクリル樹脂を塗りこんで表面を調整する。
- 5) 下地を着色したのち、日乾レンガの実際の色を基本にして、レンガ、未発掘部分、地山の3色を定め、ビニール系塗料を梨地状に吹きつけて仕上げる。
- 6) 模型台上に、主断面における開閉が可能ないようにとりつけ、ガラス・ケースをかけて完了である。

以上のようにして完成した模型は、遺構全体を把握する上で、何よりもすぐれた遺構の記録といえる。今後このこされた課題は、この遺構が、元来どのような構築物であったかという復原の問題である。目下、この模型を囲んで、議論が展開されている。まもなく復原案が提示されることになろうが、この模型を観察することによって、多くの人たちの間で、議論がますます発展することを期待している。

VIII イラク・ハムリン地域の出土人骨

1 はじめに

1977年秋、日本考古学調査団はハムリン遺跡群発掘調査プロジェクトへの参加を決定した。そこで、自然人類学班はあとに記す理由によりこのプロジェクトの実施中に可能な限り多数のメソポタミア人骨資料を収集する計画を立てた。すなわち同班は日本隊の遺跡で人骨の発掘を行う一方、ハムリンおよび他のメソポタミア地域で発掘調査中のイラク隊遺跡においても人骨資料の発掘と収集を行おうとする計画である。イラク調査隊は出土人骨を担当する隊員をもたないため、この計画はイラク考古庁のダメルジ長官 (Dr. Muay'ad Sa'id Damerji, President, State Organization of Antiquities and Heritage) の快諾と支援を受けたただちに実施に移せることとなった。こうして人骨資料の収集は、ダム完成によりハムリン遺跡群が人工湖の中に没した1980年3月まで続けられ、収集した資料総数は584個体分に達した。

考古学調査隊が自然人類学班をおき、人骨資料を大規模に収集したことはこれまでにあまり例をみない。それゆえこの収集計画の背景および目的、意義についてまずふれておきたい。最初に述べておかなければならないことは、日本考古学調査団の発掘調査に対する基本姿勢である。日本隊はこれまでの調査と同様にハムリンにおいても、遺構・遺物といった文化的側面とともに文化の担い手である人間の生物学的側面の分析をも重要視した。したがって自然人類学班がおかれ、班もその責を十分に果たすことを肝要とした。人骨資料の収集計画は上のような背景と次に記すイラクにおけるそれまでの経験を通して生まれた。

筆者の1人、石田は1973年以来考古学調査団のカルバラ、アル・タール洞窟遺跡調査に参加し、出土人骨の整理を分担してきた (Ishida, 1976)。この間、アル・タール出土人骨と他のメソポタミア出土人骨との比較を試みた際、非常に困惑したことである。それはメソポタミアにおいては出土人骨の研究が極めて少なく、現代イラク人の自然人類学的研究も同様で、バグダッド大学医学部に現代イラク人の骨格標本を求めたが、これも叶わぬ状態であった。古代文明の発祥の地であり、先史および歴史時代の遺跡は非常に多く、発掘調査も実に活発に行われている地域としては、上のことは全く意外であった。この地域の出土人骨の研究は、R. ソレッキー発掘のシャニダール・中期旧石器時代人に関する研究、新しい時代では、南メソポタミアのウル、ウバイド (Keith, 1927)、キシユ (Buxton & Rice, 1931)、ニップール (Swindler, 1951) それに北メソポタミアのヨルガン・テベ (Ehrich, 1939) に関する報告に限られる。

上記のことが何を意味するかは明らかであり、したがってハムリン地域での人骨研究に十分な成果をみるためにはハムリン全地域を含めメソポタミア各地からの人骨資料の収集が基本課題であった。

さらに、ハムリン内でのインテンシブな資料の収集には次のような予測と目的もあった。すなわち、イラク考古庁がハムリンプロジェクトに先立って行った遺跡群の予備調査では、ハムリン遺跡群のうち最も古くはサマラ期に属し、以後イスラム期に至る様々な時代に属する遺跡の存在を推定していた。一つの地域でこれほど巾広い時代帯に数多くの遺跡があり、その発掘がまたれるのは、それまでに例をみないものであった。従来のメソポタミアでの発掘は地域と時代を特定して行われた。それが考古学的発掘の常識でもある。しかし、このハムリン調査プロジェクトはダム建設という行政上生じた要因によるため、それまでとは異なる地域研究的な性格をもつ発掘であった。このような発掘調査から得られる人骨資料は地域住民の身体的特徴の時代的変容を知る上でかけがえ

のない資料となるものと考えられた。

さらにこのハムリン地域は南北メソポタミア、および東のペルシャと西のシリアを結ぶ南北路と東西路の交差する地域である。したがってこのような地域は文化と身性の両面についてより強い影響を東西および南北の諸地域から受けたものと推察される。その影響の程度を通時的に把えることには、この種の発掘調査の出土人骨は最適な資料といえる。

上の問題とも関連するが、Swindler (1956) はニップール (Nippur) の出土人骨を研究し、南メソポタミアではシュメール時代から紀元後9世紀のイスラム時代にいたるまで住民の形質にはほとんど変化がなかったと指摘した。このような形質上の通時的同質性がハムリンにおいても存在するのであろうか。この点についても十分な資料が収集されるならば、明確な答えを突き出せるものと期待された。

メソポタミアについては興味ある問題が多い。とくにシュメール人の起源とその後の動向についてであり、またメソポタミア住民の身性の形成に関するアラビア半島、イランおよびアナトリアなどの近隣諸地域からの影響などである。これらを形質上より詳細に分析することは考古学におけるメソポタミア研究に対し新しい視座を提供するかもしれない。イラクではいまのところ出土人骨を収集しようとする動きも、自然人類学研究の誕生のきざしもみることにはできない。しかし、我々の積極的な出土人骨の収集や研究が必ずやイラク人に出土人骨研究への興味をおこさせることになろうし、その興味こそが上にあげた諸問題の根本的な解決や新しい研究の展開へとつながる原動力になるものと考えられた。

人骨資料の目的と意義についてやや詳しく上に述べたが、この収集が事もなく順調に運んだわけでも、また当初の意図通りの成果を得たわけでもない。しかしこのような動きは出土人骨に対するイラク人考古学者の考え方をわずかであるが変えたことは事実である。我々にとっては十分といえないまでも今回収集した人骨資料は比較的多量であり、これまでが貧弱なだけに、今後の研究の基礎的資料としてその果す役割は大きいと考える。資料の整理は現在進行中であり、ここでは中間報告として、計測を終えた一部頭蓋骨について報告する。

2 収集資料と処理

1) 収集資料と移送

出土人骨の収集を対象とした遺跡は、ハムリン地域では日本隊が発掘したテル・グッパ、テル・ソンゴルA・B・Cの4遺跡を含め13遺跡であり、ハディーサ (Haditha) 地区では3遺跡、それにアシュール (Ashur) とバビロン (Babylon) 各1遺跡で合わせて18遺跡である。収集した資料総数は584個体分であり、遺跡ごとの資料は Table. 9 に示した。

収集した資料の約3分2はすでに日本に移し、現在大阪大学人間科学部人間生態研究室で保管、整理中である。整理が終っている361個体分の頭蓋骨については Table. 10 に遺跡、時代、年令、性別に示したとおりである。残り3分の1の資料については、イラク・イラン紛争によりイラク、バスラ港が一時的に使用不能となっているため日本への移送が大幅に遅れていたが、近日中にクエートの港を経由して日本に届くことになっている。

イラクより日本への移送において問題となった点は、人骨資料の大部分に発掘地の土壌が付着するため、植物防疫上の理由から人骨資料は、輸入禁止品扱いをうけることとなった点である。そのため、発送に先立ちこの土壌付人骨の特別輸入許可を農林水産大臣に申請し、輸入の特別許可を取得後国内へ持ち込み、研究室に搬入した。人骨より除去した土壌はオートクレーブで120°C、30分の滅菌後破棄し、土壌の除去困難な土壌付人骨はエチレ

ンオキサイドガスによるガス滅菌を行った。これらの処理により、処理後の人骨標本は輸入禁止品扱いを解かれる。

2) クリーニングと強化

土壌が付着する人骨のクリーニングは水洗いを行うと植物種子や胞子が散逸する恐れがあり、また保存状態の悪い標本は崩壊する場合もある。したがって全ての人骨資料のクリーニングは窒素ガスもしくは空気にガラス粉を混入して吹きつけてクリーニングするエアブラシュによった。

古い時代、とくにイスラム期より以前の人骨は保存状態が悪く、組み立て前に骨質の強化を必要とする資料が多くみられた。この悪い保存状態はメソポタミアで特に著しい土中の塩分と水分の作用による。これらの強化はアクリル系合成樹脂（パラロイド B-72）の10~20%溶液を作り、これを標本にふりかけるか、溶液中に浸し、液が骨質中に浸透した後、溶液よりとり出し自然乾燥させた。

3 ハムリン出土の頭蓋骨形態

ここではこれまでにクリーニング、組み立て、それに計測の終わったハムリン地域出土の成人男性頭蓋骨の形態について計測値にもとづき時代別（イシン・ラルサ/古バビロン、パルチア、イスラムの3時代）に概観する。次いで頭最大長、頭最大幅および頭蓋示数を基準に脳頭蓋形態の時代的变化を検討する。

ここで用いる材料は成人男性58体の頭蓋骨であり、その内訳はイシン・ラルサ/古バビロン期では、テル・スレイマ（Tell as-Suleimeh）の10体、テル・ソングル A（Tell Songor A）1体、それにテル・アブカーシム（Tell Abu-Qasim）の2体で合計13体であり、パルチア期についてはテル・ハバリ（Tell AI-Khabari）の2体とテル・ソングル B（Tell Songor B）の1体を含む3体である。イスラム期は合計42体で、そのうち18体はテル・グッバ（Tell Gubba）から、他の24体はテル・ソングル A から出土した資料である。これらの全ての頭蓋骨に第3大臼歯の萌出もしくは蝶・後頭骨結合の完了がみとめられた。性の判別では大部分は頭骨によったが、まぎらわしい場合は骨盤を用いて推定した。

1) イシン・ラルサ/古バビロン期頭蓋骨の形態

この期に属する頭蓋骨形態の特徴は著しい長頭であり、その典型的な標本を PL. 24-1 に示した。資料の計測値および示数の平均値 (M)、標準誤差 (S. E.)、標準偏差 (S. D.) を Table. 11 に示した。まず、頭最大長 (Max. Cran. Lg.) をみると、190.9mm と著しく大きいのが、逆に頭最大幅 (Max. Cra. Br.) は135.7mm と小さい。したがって頭長指示数 (Cranial Index) は69.9 と長頭型 (Dolichocranic) に近い過長頭型 (Hyperdolichocranic) を示す。頭高 (バジオン・ブレジマ高, Ba-br. Ht.) は136.7mm と比較的大きい。したがって頭幅高示数 (Ht.-br. I) は、103.6 と尖頭 (Acrocranic) と区別され、前面からみると頭部は左右に幾分細長く、かつ上方向にやや突出した形状を示す。頭長幅示数 (Ht.-lg. I.) では71.3 の中頭 (Orthocranic) で側面からみた場合に頭頂部輪郭線はなめらかな弧形を描く。概して云えばこの期の脳頭蓋は左右にせまく、前後に長いという特徴をもつ。Table 12 に示数と区分を示した。

2) パルチア期頭蓋骨の形態

先にも記したようにこの期に属する成人頭蓋骨は数が少ないため、ここに記すのは1例報告的であり、Table 11 は平均値のほか個別の計測値が含まれる。頭最大長および頭最大幅はともに小さい値 (181.5mm, 130.7mm) を示すが頭高 (Ba.-br. Ht.) は中程度 (131.0mm) である。頭長幅示数は73.5 の長頭型であり、頭幅高示数は10

3.2の尖頭で、頭長高示数は74.4の中頭 (Orthocranic) に属する。したがって脳頭蓋の形でみる限り、イシ・ラルサ/古代バビロンの脳頭蓋をやや小型化した形状といえよう。顔面部では上顔高 (Up. fac. Ht.) が比較的小さい (59mm) ため、小振りの上顔部で相対的に左右に広い形状をもつ (コルマン上顔示数は46.5で広上顔 (Euryen) (PL. 24-2)。

3) イスラム期頭蓋骨の形態

ハムリン地域出土のイスラム期頭蓋骨の資料はテル・ソンゴルAとテル・グッバの2つのテルからである。これらの2つのテルから出土した頭蓋骨は一見して形態の相違が明らかなため、それぞれを区分して計測値を処理した (Table. 11)。

まず、テル・グッバの頭蓋骨についてみる。頭最長および頭最大幅ともに中程度の大きさの値である (183.5mm, 138.0mm)。頭高 (Ba-br. Ht.) は137.8mmで比較的大きい。示数では頭長幅示数が75.5で中頭 (Mesocranic) であり、頭長高示数、頭幅高示数のそれぞれが、75.8, 101.2で高頭 (Hypsicranic), 尖頭となる。顔面部では、頬骨弓幅 (Bizyg. Br.) がやや小さく (130.4mm), 顔高 (Tot. fac. Ht.) が中程度 (118.8mm) であるためコルマン顔示数 (Tot. fac. I.) が90.6で狭顔 (Leptoprosopic) と区別される。この期の頭蓋骨は中程度の細面をもつ中頭型といえる (PL. 24-3)。

他方、テル・ソンゴルAより出土した頭蓋骨をみると、頭最大長が比較的小さく (180.2mm), 頭最大長では可成り大きい (144.7mm)。したがって頭長幅示数は81.9と大きくなり短頭型 (Brachycranic) に区分される。この点イシ・ラルサ/古バビロン頭蓋骨と著しく異なる。頭高 (Ba.-br. Ht.) は135.5mmと中程度で、頭長高示数は75.4の高頭で、頭幅高示数は93.9の中頭 (Metriocranic) である。顔面部では、頬骨弓幅134.8mm, 顔高118.9mmの中顔 (コルマン顔示数, 88.2) である。テル・ソンゴルAの頭蓋骨とテル・グッバの頭蓋骨の最も異なる点は幅径にあり、テル・ソンゴルの脳頭蓋は上からみて円く、前からみてかなり幅広い形状を示す (PL. 24-4)。

4) ハムリン地域における脳頭蓋の時代的变化

上にハムリン地域出土の頭蓋骨形態の概要を時代別にみてきたが、ここでは各時代間において最も著しい相違を示した頭最大長、頭最大幅それに頭長幅示数の3つの計測値および示数を基準にして脳頭蓋形態の時代的变化を検討する。Fig. 60は横軸に頭最大幅、縦軸に頭最大長をとり、頭長幅示数を斜線で示し、各標本の位置を図示している。これからも明らかなようにイシ・ラルサ/古バビロン期の頭形は頭長で大きく、頭幅で小さい過長頭型が多い。パルチア期の標本はわずかに2点であるが、頭長でやや劣り長頭型の区分に入る。イスラム期では頭長で小さく頭幅で大きい脳頭蓋が多く、テル・グッバの標本は中頭型の区分帯を中心に長頭型と短頭型に散在する。しかしその分布は長頭型への偏りが強い。しかし、テル・ソンゴルAの標本では著しく頭幅が大きく、頭長も小さくなりその分布は過短頭 (Hyperbrachicranic) の域を越えて超短頭 (Ultrabrachicranic) の域にもいたっている。

上のように時代的にその変化をみると、イシ・ラルサ/古バビロン期の前2千年紀初頭においては過長頭型一長頭型の脳頭蓋がみられ、紀元前後では長頭型となり、イスラム期に至ると長頭型から超短頭型にまたがる幅広い変異が生じ、全体として短頭型を示すといった著しい変化がみられる。

しかし、ここで検討を要する点は、各時代の資料が、ハムリン全体の各時代の特徴を十分に反映しているか、それとも出土したテルの特異性を強く表わしているかの点である。とくにイスラム期頭蓋骨はテル・グッバとテル・ソンゴルAの資料が大部分であるため、上の点は十分に留意を要する点である。但し、すでに発掘が完了し

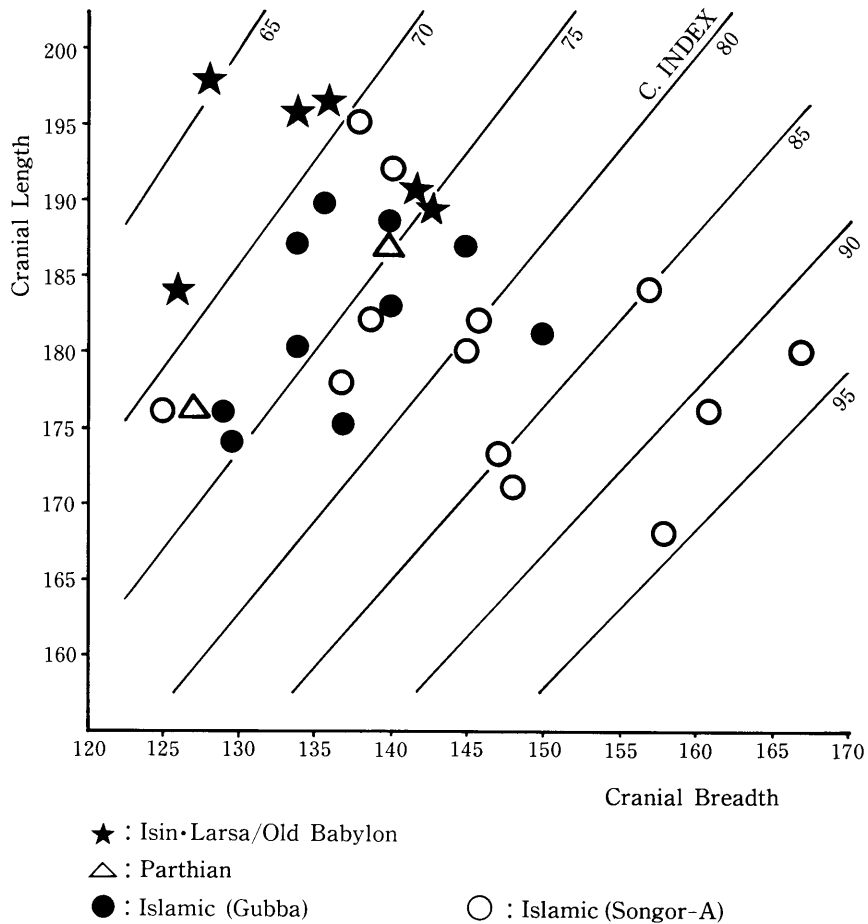


Fig. 60 頭最大長，頭最大幅および頭長幅示数によるハムリン出土成人男性頭骨比較

Comparison of cranial form of the adult males from the Hamrin by cranial length, breadth and index

ているため、今後の資料の追加がむずかしい。従って今後他の時代の分析を上の点を考慮して行うことが肝要と考えている。

ハムリンの脳頭蓋の時代的变化には著しい短頭化がみられるが、その因果関係については、同一集団の内的要因におけるものと、他集団からの影響等の外的要因によるものに大きく区分されるが、この地域では古くから高度な農業が行われており、生活環境や生活様式の変化がそれほど著しいものではなかったものと考え、外的な要因が大きいと考えられる。

4 メソポタミアの中のハムリン 脳頭蓋の比較

ハムリン地域における頭蓋骨形態の特徴について上に時代別、時代的变化をみたが、ここではハムリン脳頭蓋と他のメソポタミア地域出土の脳頭蓋との形態を比較する。ハムリンでは前イスラム期とイスラム期以降の頭蓋骨の形態に大きな差異がみとめられたので、ここでは前イスラム期 (Pre-Islamic) とイスラム期 (Islamic) に区分して検討する。

1) 前イスラム期メソポタミアにおけるハムリン脳頭蓋

Fig. 61はこれほどまでに報告されている前イスラム期脳頭蓋と、我々がハディーサ (Haditha) で収集した後期アッシリアの脳頭蓋の計測値 (Table. 13) をプロットし、それに加えてハムリン出土のイシン・ラルサ/古

バビロン期と、パルティア期の値が示されている。前掲の Fig. 60と同様に、横軸に頭幅、縦軸に頭長をとり、斜線は頭長幅示数を示す。ここで用いている数値は、ウバイド (AL-Ubaid) については Keith (1927), キシュ (Kish) は Buxton (1931), ニップール (Nippur) とセレウシッド (Seleucid) は Swindler (1956), ヨルガン・テペ (Yorgan Tepe) は Ehrich (1939) の報告によった。それぞれの値を示すマークのうち、平均値のみを示したものは円で囲まれたマークが用いられている。

Fig. 61における各脳頭蓋の計測値の分布についてみると、キシュA (B. C. 2,800~2,900), キシュW (B. C. 800~500) それにヨルガン・テペ (A. D. 300~400) では中頭および短頭の区分帯に分布する標本もあるが総じて長頭の区分帯を中心に分布していることがわかる。この中でハムリンのイシン・ラルサ/古バビロン脳頭蓋の位置をみると、時代が最も接近しているウル (B. C. 1,900~1,700) にほぼ等しい。頭長幅示数はウルで69.0, ハムリンで69.9である。これらの頭最大長が全体よりやや大きいところにあるが、ウバイド (B. C. 4,000) の脳頭蓋とも近く、頭形でみる限りにおいては、ハムリンの前イスラム期脳頭蓋は南メソポタミア頭蓋骨と大差が

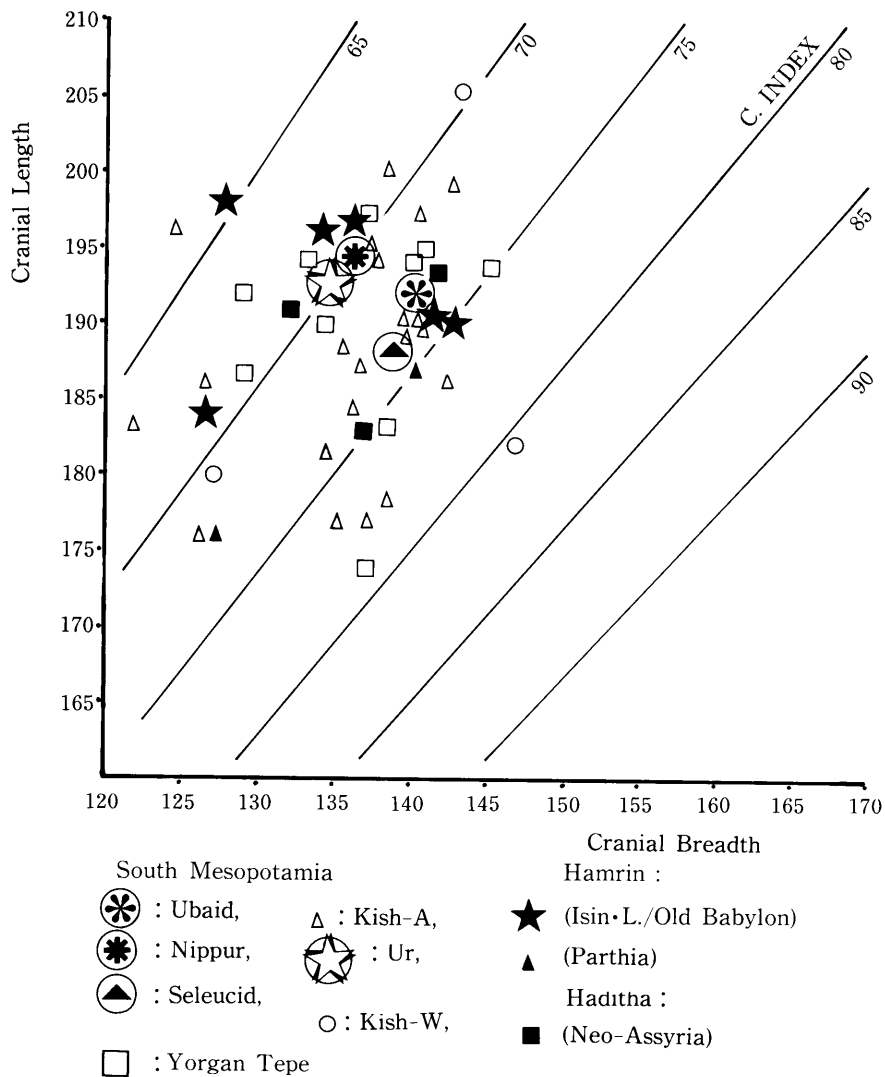


Fig. 61 頭最大長、頭最大幅および頭長幅示数によるハムリン、南メソポタミア、ヨルガン、テペ出土の前イスラム期成人男性頭骨の比較

Comparison of cranial form of Pre-Islamic adult males from the Hamrin, Southen Mesopotamia and Yorgan Tepe by cranial length, breadth and index

なく、同じグループとして考えることができる (Table 14)。

2) イスラム期メソポタミアにおけるハムリン脳頭蓋

メソポタミアにおけるイスラム期の頭蓋骨の形態に関するこれまでの研究は Swindler がニップールについてまとめた報告に限られるが、それに我々がアシュールで収集した頭蓋骨を加えて検討する (Table 14)。Fig. 62はニップールの平均値とアシュールの各標本を Fig. 61と同様にプロットし、それにハムリンのテル・グッバ、テル・ソンゴル A の標本を加えたグラフである。Swindler が指摘したように、ニップールの平均値は前イスラム期脳頭蓋の分布中心に近いところに位するが、アシュールの標本は中頭より短頭域に分布する。

上の2つのグループとハムリンのテル・グッバ、テル・ソンゴル A 頭蓋骨の頭形を比較すると、テル・グッバの頭形は長頭より中頭域が中心で、頭長においてやや劣るがニップールに近く、アシュールの脳頭蓋より頭幅においてやや小さく、頭長においてはほぼ等しいため、示数は小さくなり、より長頭の傾向を示す。テル・ソンゴル A の標本の分布は、先に述べたように長頭域より超短頭域にわたって非常に幅広く、上記3グループ分布域の全てを覆っている。このグループの特徴は幅広い分布と過・超短頭型の脳頭蓋の存在である。

ニップールの各標本についての計測値は Swindler (1956) の報告には記されていないが、彼が引用した Coon の資料の頭最大長および頭最大幅の標準偏差はそれぞれ $9 \cdot 47$ と $8 \cdot 39$ であるためほとんどの標本は長頭型に入

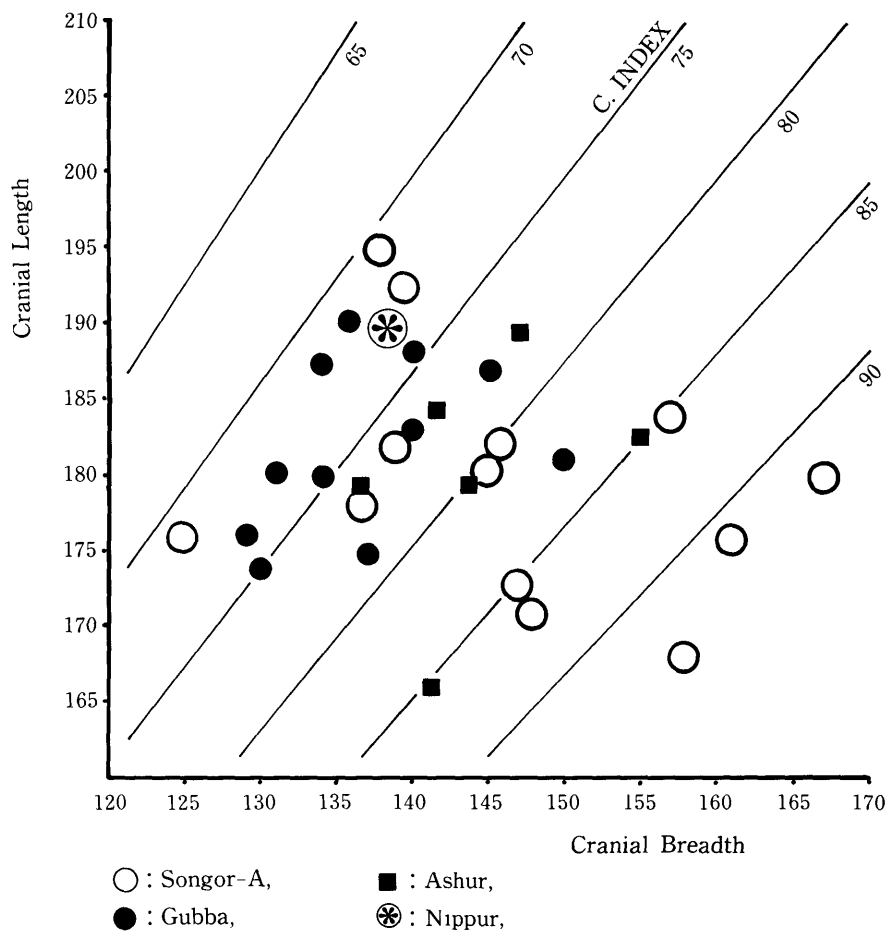


Fig. 62 ハムリン (テル・グッバ, ソンゴルA), アシュールおよびニップール出土のイスラム期成人男性頭骨の比較

Comparison of cranial form of Islamic adult males from the Hamrin (Tell Gubba, Tell Songor A), Ashur and Nippur

り、テル・ソングルAとは対照的である。

3) メソポタミアにおける脳頭蓋の時代的变化とハムリン脳頭蓋

はじめにも記したように、メソポタミアでの出土人骨の研究は乏しく、また我々が収集した人骨資料数もメソポタミア脳頭蓋の形態に関してその時空間的变化を論ずるに足るものではない。さらに収集した全ての資料の計測や統計処理も終わっていないので、ここでは上のタイトルで論ずるには資料不十分と思える。しかし、これからの研究のためにも、一度概観しておくことは意義のあることと考える。

南メソポタミア、ウバイドの頭形は長頭型であり、一部の標本は過長頭にも分布する。ほぼ近接したウルでも同じ傾向である。中部メソポタミアのキシシュではわずかに中頭型がみられるが、大半は長頭型もしくは過長頭型である。メソポタミア北東部のハムリンのイシシ・ラルサ/古バビロン期頭形はウル、ウバイドの頭形にほぼ等しい。やや時代が新らしくなるが、西メソポタミアのハディーサ・後期アッシリア期の頭形も、標本数は少ないが全て長頭型である。このようにメソポタミア全域において古くから長頭型が優勢である。さらにパルティア期を越え、ササン朝ペルシャ期に至ってもヨルガン・テペでみる限り短頭型はなく、ほとんどの標本が長頭型 (Fig. 63) にとどまっている。これは Swindler が指摘したようにメソポタミアにおいて頭形は著るしい時空間的同質

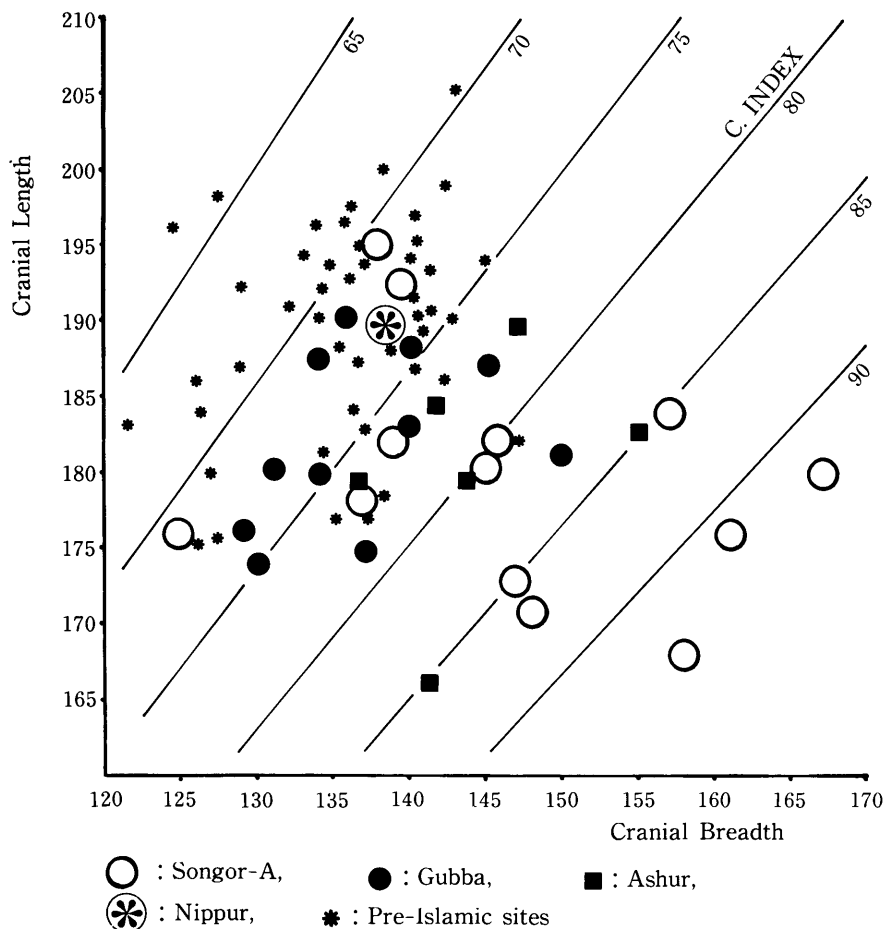


Fig. 63 メソポタミアにおける前イスラム期とイスラム期 (テル・グッバ, ソングルA, アシュール, ニップール) 成人男性頭骨の比較

Comparison of cranial form between Pre-Islamic and Islamic (Tell Gubba, Tell Songor A, Ashur and Nippur) adult males in Mesopotamia

性を示している。

しかし、イスラム期にはいつてハムリン、アシュールにおいては過短頭および超短頭型が現われる。一方南メソポタミアのイスラム期脳頭蓋（ニップール、A. D. 900）では依然として長頭型が優勢である（Fig. 63）。したがってこれまでの説（Swindler, 1959; Coon, 1951）と異なる点は北メソポタミアにおいてイスラム期に短頭型が出現することである。しかしながら、このハムリンおよびアシュールのイスラム期脳頭蓋がイスラム期内のどの年代に属するのかは、いまのところ不明である。これらの資料が非常に新しく、現代に近い可能性も考えられる。発掘時の副葬品から年代を決めることができなかつたので、ここで問題となるが、今後C¹⁴法などにより年代を決定する必要がある。

南メソポタミアとハムリンの比較において、イスラム期を除けばハムリンと南メソポタミアの頭形においてほとんど変るところがなかつた。これは古くにおいてはハムリン地域住人の身性に北方および東方地域の影響がほとんどなかつたこと、さらに南メソポタミアとのつながりが比較的強いものであつたことを示唆するものと受けとれる。

5 あとがき

この概報では人骨資料の収集目的、意義についてやや多くのスペースをさいた。それは、これまでの海外調査において日本の考古学調査隊はかつて行つたことがない方法でもあるため詳しく記した。調査地の国状により様々な方法がとられて然るべきであり、我々の方法が常に最善とはいいがたい。しかし、発掘し当然保存されるべき資料が顧みられない状況においてはこのような方法が執られて然るべきだと考える。また収集した標本についてイラク側が返却を求めることがあれば、イラク側の受け入れ態勢を確認した上返却し、出土した国の研究の発展に寄与することが望ましいと考えている。

ここでは主に頭蓋骨を計測値から検討したが、我々の標本の多くは全身骨格を含んでいる。したがって残る3分の1の資料が日本へ届き次第すみやかに整理し、各テルごと、かつ各標本についての詳しい記載を行うことにしている。統計処理についても計測値および非計測（観察による）のデータも組み入れ、様々な角度から分析を進める予定である。

この概報では頭蓋骨の計測と分析、脳頭蓋の比較を試みたが、敢えて人種的帰属の問題にはふれなかつた。メソポタミアの中核をなす人種は地中海型人種型（Mediterranean）とされており（Krogman, 1940; Ikeda, 1960; Ikeda, 1968）、それらは過長頭—長頭型に対応するものであるが、頭形のみで論ずるよりも、他の部分の計測値や非計測項目をも加えて十分に検討した後論じた方がより正しい結果が導かれるものとする。

ハムリンのテル・ソンゴルAのイスラム期脳頭蓋の形態は頭幅で大きな変異を示している。これは一つの集団がもつ変異の幅としては大きすぎると考えられる。本文中に記したが、ハムリン・イスラム期人骨、とくにこのソンゴルAについては、頭幅が最小、中程度、最大の各個体についてC¹⁴法による絶対年代をみる必要があると考えている。

なおここでは記さなかつたが、ハムリン出土人骨についての2、3の最近の分析結果記しておく。上顎歯の摩耗度について宮越 洋君（大阪大・人間科学部）が卒業研究として分析した。その結果によると、メソポタミアでは、イスラム期ですら歯の摩耗度が日本の縄文時代の歯のそれにほぼ等しいことを示す。ここでは年令に関係なく摩耗度を比較できる方法を用いている。

ウバイド期に属する頭蓋骨がテル・ソングルAより1体出土した。これは土圧により変形しているため計測には適さないが、頭形は過長頭もしくは超長頭型と推定される一方、上顎に第4大臼歯をもつ標本である。

さらにウバイド期の資料であるが、東部ハムリンのテル・アバーデ (Tell Abada) より出土した幼児26体につき、その死亡年令を長管骨の計測値より推定したところ、26体のうちその半数は生後6ヶ月以内に死亡し、残りの3分の2は1年以内に、他の3分の1は2年以内に死亡していることが推定された。前4,000年期の新生児死亡の状況を知る一つのデータである。

この概報の一部は1979年10月にイラク、バグバットにおいてイラク考古庁の主催による第2回バビロン、アシュール、ハムリンに関する国際シンポジウムで報告し (Ishida et al, in press), また1981年11月の第3回の同じ国際シンポジウムでも発表している。この概報はこの第3回シンポジウムで発表した原稿に少し手を入れたものである。

6 謝辞

この人骨資料の発掘と収集に関してイラクにおいては勿論のこと日本国内においても数多くの方々に長期にわたって御指導、御支援また御協力を受けた。ここに記して深謝の意を表したい。とりわけ俣野彰三教授・大阪大学人間科学部、には石田の幾回にもわたるイラクへの海外出張、資料の保管と整理、協力依頼の便宜等、全ゆる側面より御援助いただいた。イラクにおいてはイラク考古庁長官のダメルジ博士には長期にわたって変りない温かい支援をいただいた。我々の発掘、収集、移送に対する彼の支援は生涯忘れることができない。ハディーサ・プロジェクトの責任者であったS. ジャーシム氏、アシュール・プロジェクトの責任者であったA. タールック・マドール博士、バビロン・プロジェクトの責任者であったA. アハマド氏には資料収集について大変お世話を頂いた。彼等の協力なしには、収集はできなかつたであろう。1978年5月、石田のイラク出張が困難であった時、兵庫医科大学医学部の欠田早苗教授がイラク出張を快諾され、ハムリンの人骨資料収集を実際面で軌道に乗せてくれた。西アジアの自然人類学的研究の権威の1人である京都大学理学部池田次郎教授は石田にイラクでの調査参加を最初にすすめてくれた。1973年のことであった。以来終始御指導をいただいていた。奈良国立文化財研究所々長の坪井清足先生にはハムリン出土人骨収集計画の実行について一方ならぬ御支援をいただいた。資料の日本への輸送については三菱商事バクダット支店の方々に大変お世話を頂いた。大阪大学人間科学部長の甲田和衛先生、同学部西田春彦先生には人骨資料の保管につき便宜を頂いた。

この収集計画において協力者として1979年9月から4ヶ月間イラクへ出張してくれたのは河畑正敏氏 (当時、大阪歯科大学、助手、現在開業中) であった。また大阪大学医学部解剖学教室の正井秀夫教授、高辻功一助手の両先生にもお世話を頂いた。記してお礼を申し上げたい。

この資料収集と整理の実務的な面で、調査員以外の国士館大学学術振興課の増田末太郎課長、イラク古代文化研究所の教職員の方々、大阪大学人間科学部人間生態学研究室の諸氏にも大変御協力をいただいた。記してお礼としたい。

参考文献

- Buxton, D., and Rice, T., 1931 "Report on the human remains found at Kish," *J. Roy. Anthropol. Inst.*, LXI : pp. 57-119
- Ehrich, R., 1939 "Late cemetery crania," *Nuzi*, Vol. I : pp. 570-589, Cambridge Mass.

- Ikeda, J., 1960 "Contribution to the Anthropology to Iraq," *Acta Medica et Biologica*, Vol. VIII, pp. 109-129
- Ikeda, J., 1968 "Human Remains from the Tombs in Dailaman, Northern Iran," *Anthropological Studies of West Asia*, 9 : 1-35, The Institute of Oriental Culture, Tokyo
- Ishida, H., 1976 Human remains at Al-Tar Hill A : Osteological Study, *Al-Tar I, Excavation in Iraq, -1 1971-1974*, Kokushikan University, Tokyo
- Ishida, H., Wada, Y., Kanda, S., Fujii, H., A preliminary report on the Human Remains in the Hamrin basin, Iraq, *Sumer*, Baghdad in press
- Keith, A., 1927 Report on the human remains, *Ur Excavation* Vol. I (AL-Ubaid) : pp. 214-240, Oxford
- Krogman M., 1940 The people of early Iran and their ethnic affiliations. *Amer. J. Physical Anthropol.* XXVI : pp. 269-308
- Swindler, D., 1956 *A study of the cranial and skeletal material excavated at Nippur*. Museum Monographs, The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia

Table 9
Amount of skeletal material from Hamrin,
Haditha, Ashur and Babylon

Region	Site	No. of Specimens
Hamrin	Tell Gubba	105
	Tell Songor-A	249
	Tell Songor-B	37
	Tell Songor-C	12
	Tell Zubeidi	16
	Tell Khallaweh	7
	Tulul al-Khubari	8
	Tell Abu Qasim	4
	Tell as-Suleimeh	45
	Tell Abbadeh	26
	Tell as-Sib	7
	Tell Abu-Gubab	1
	Tell Hat-Osman	1
Haditha	Glei'eh	25
	Sur Jur'eh	28
	Tus Al Kiffar	4
Ashur		6
Babylon		3
Total		584

Table 10
Amount of cranial material reconstructed, from Hamrin, Haditha, Ashur and Babylon

	MATURED				UNMATURED	UNKNOWN	TOTAL
	MALE	FEMALE	UNKNOWN	TOTAL			
HAMRIN :							
TELL GUBBA ISLAMIC	18	10	5	33	19	3	55
ACHAEMENID						1	1
TELL SONGOR-A							
ISLAMIC	24	17	10	51	93	3	147
PARTHIAN		1		1	1		2
ISIN./O.B.	1		4	5	5		10
UBAID	1			1			1
TELL SONGOR-B							
ISLAMIC			1	1	3		4
PARTHIAN	1			1			1
ISIN./O.B.	1	1		2	1	1	4
TELL SONGOR-C							
ISLAMIC					3		3
TELL ZUBEIDI							
ISLAMIC	1	1		2	5	1	8
KASSITE	1	1	3	5	2	2	9
TELL KHALLAWEH							
ISIN./O.B.			1	1	2	3	6
TULUL AL-KHUBARI							
PARTHIAN	2	4		6	2		8
TELL ABU QASIM							
SASANIAN			1	1			1
ISIN./O.B.	2			2	1		3
TELL ES-SULEIMEH							
ISIN./O.B.	10	4	3	17	6	4	27
TELL ABBADEH							
UBAID					26		26
TELL ABU-GUBAB							
PARTHIAN					1		1
TELL HAT-OSMAN							
PARTHIAN						1	1
TELL AS-SIB O.B.		1		1		1	2
HADITHA :							
GLEI'EH NEO-ASSYRIAN	4	2	8	14		5	19
SUR JUR'EH NEO-ASSYRIAN	3		1	4	3	3	10
BABYLON :							
BABYLON							
NEO-BABYLONIAN			1	1			1
PARTHIAN	1	2		3			3
ASHUR :							
ASHUR							
PARTHIAN					1		1
ISLAMIC	7			7			7
	77	44	38	159	174	28	361

Table 11
Measurements and indices of crania excavated in Hamrin

M. N.		Islamic period								Parthian period		Isin Larasa Old Babylonian period			
		Tell Gubba (18)				Tell Songor-A (24)				n	M	n	M	S. E.	S. D.
		n	M	S. E.	S. D.	n	M	S. E.	S. D.						
1.	Max. Cran. Lg.	13	183.54	1.63	5.88	16	180.19	1.77	7.08	2	181.50	9	190.89	1.65	4.96
5.	Ba.-na. Lg.	14	103.64	1.01	3.79	21	102.38	1.12	5.13	1	96.	6	106.17	2.65	6.49
7.	Lg. of For. Mag.	8	36.25	0.70	1.98	18	36.39	0.79	3.35	1	36.	3	35.00	—	—
8.	Max. Cran. Br.	11	138.00	1.93	6.39	16	144.69	2.83	11.33	3	130.67	7	135.71	2.57	6.80
9.	Min. Front. Br.	14	94.21	1.36	5.07	20	96.10	1.21	5.42	1	90.	6	93.83	0.95	2.32
16.	Br. of For. Mag.	8	29.00	0.50	1.41	20	29.65	0.47	2.11	1	27.	2	31.00	—	—
17.	Ba.-br. Ht.	11	137.82	1.58	5.23	16	135.50	1.28	5.11	1	131.	6	136.67	0.95	2.32
23.	Horizontal Circ.	10	516.50	5.26	16.64	11	526.18	5.43	18.00	1	500.	5	529.80	5.30	11.86
24.	Transverse Arc	8	317.50	4.53	12.82	12	328.17	5.73	19.86	2	302.50	3	311.67	—	—
25.	Sagittal Arc	7	369.86	5.67	15.00	12	370.83	4.38	15.17	2	372.00	4	386.25	—	—
26.	Frontal Arc	14	124.79	1.71	4.37	15	125.27	1.24	4.82	2	125.00	8	130.38	1.10	3.11
27.	Parietal Arc	13	135.23	1.75	6.30	11	130.55	3.37	11.17	3	127.33	4	140.25	—	—
28.	Occipital Arc	7	113.14	2.82	7.47	12	114.25	2.12	7.35	3	119.67	4	115.25	—	—
8:1.	Cranial Index	10	75.54	1.08	3.42	13	81.84	2.24	8.08	2	73.51	6	69.91	1.58	3.87
17:1.	Ht.-lg. I.	9	75.78	0.97	2.92	13	75.41	0.79	2.86	1	74.43	5	71.34	1.04	2.32
17:8.	Ht.-br. I.	8	101.23	1.19	3.36	13	93.85	2.71	9.76	1	103.15	4	103.62	—	—
16:7.	I. of For. Mag.	7	80.51	2.07	5.47	17	81.51	1.41	5.79	1	75.00	1	91.43	—	—
40.	Facial Lg.	11	97.64	0.80	2.66	21	98.38	1.53	7.03	1	101.	1	100.	—	—
43.	Up. Fac. Br.	10	101.60	0.92	2.91	21	106.48	0.81	3.71	1	101.	2	102.50	—	—
45.	Bizyg. Br.	10	130.40	1.86	5.89	17	134.76	1.49	6.16	1	127.	—	—	—	—
46.	Mid. Fac. Br.	12	95.08	1.53	5.32	22	97.41	1.24	5.81	1	90.	1	96.	—	—
47.	Tot. Fac. Ht.	9	118.78	2.79	8.38	17	118.88	2.27	9.37	1	110.	—	—	—	—
48.	Up. Fac. Ht.	13	69.08	1.69	6.08	22	68.82	1.04	4.86	1	59.	1	70.	—	—
50.	Interorb. Br.	10	19.10	0.74	2.33	22	20.82	0.53	2.50	1	19.	2	19.50	—	—
51.	Orb. Br. (L)	8	41.25	0.49	1.39	20	42.05	0.32	1.43	1	40.	2	41.	—	—
52.	Orb. Ht. (L)	10	32.60	0.83	2.63	19	32.42	0.43	1.89	1	34.	2	34.50	—	—
54.	Nasal Br.	13	24.62	0.46	1.66	23	25.57	0.44	2.11	2	25.50	2	25.50	—	—
55.	Nasal Ht.	15	54.07	1.14	4.43	23	54.00	0.75	3.59	1	46.	2	50.50	—	—
62.	Palate Lg.	12	47.25	0.78	2.70	22	47.64	0.98	4.60	1	50.	4	46.50	—	—
63.	Palate Br.	11	36.73	0.63	2.10	20	38.25	0.61	2.73	2	32.00	4	35.75	—	—
65.	Bicondyl. Br.	4	120.50	3.97	7.94	10	119.60	1.81	5.74	1	110.	2	131.00	—	—
66.	Bigonial Br.	6	96.83	3.28	8.04	14	94.93	2.38	8.90	1	79.	3	93.67	—	—
70.	Ramus Ht.	9	61.89	1.20	3.59	14	62.07	1.85	6.93	1	62.	3	64.00	—	—
71.	Min. Ramus Br.	10	32.30	1.04	3.30	13	34.92	0.90	3.25	1	37.	4	36.00	—	—
47:45.	Tot. Fac. I.	7	90.55	1.46	3.88	13	88.21	2.04	7.36	1	86.61	—	—	—	—
47:46.	Tot. Fac. I.	8	126.44	2.78	7.85	16	121.65	1.78	7.12	1	122.22	—	—	—	—
48:45.	Up. Fac. I.	9	51.71	0.83	2.50	16	50.42	0.84	3.34	1	46.46	—	—	—	—
48:46.	Up. Fac. I.	10	73.12	2.06	6.52	20	70.75	0.94	4.20	1	65.56	1	72.92	—	—
52:51.	Orb. I. (L)	8	79.62	1.62	4.60	19	77.19	1.23	5.35	1	85.00	2	84.15	—	—
54:55.	Nasal Index	13	45.65	1.13	4.09	22	47.65	0.88	4.14	1	54.35	2	51.17	—	—
63:62.	Palate Index	9	77.92	1.87	5.60	20	80.44	2.04	9.11	1	68.00	3	77.74	—	—
40:5.	Cran. Basal I.	11	94.51	0.94	3.12	20	96.08	0.84	3.77	1	105.21	1	92.59	—	—

Table 12 Indices and classification of crania excavated in Hamrin

M. N.	Indecies	Islamic Period		Parthian period	Isin Larsa/ Old Babylonian period	
		Tell Gubba	Tell Songor-A			
8:	1. Cranial Index	75.54 Gubba	81.84 brachycranial	73.51 dolichocranic	69.91 hyperdolichocranic	
17:	1. Ht.-lg. I.	75.78 hypsicranial	75.41 hypsicranial	74.43 orthocranic	71.34 orthocranic	
17:	8. Ht.-br. I.	101.23 acrocranial	93.85 metriocranic	103.15 acrocranial	103.62 acrocranial	
16:	7. I. of For. Mag.	80.51 narrow	81.51 narrow	75.00 narrow	91.43 broad	
47:45.	Tot. Fac. I.	90.55 leptoprosopic	88.21 mesoprosopic	86.61 mesoprosopic	—	—
47:46.	Tot. Fac. I.	126.44 orthoprosopic	121.65 orthoprosopic	122.22 orthoprosopic	—	—
48:45.	Up. Fac. I.	51.71 mesen	50.42 mesen	46.46 euryen	—	—
48:46.	Up. Fac. I.	73.12 chamaeprosopic	70.75 chamaeprosopic	65.56 chamaeprosopic	79.92 chamaeprosopic	
52:51.	Orb. I. (L)	79.69 mesoconchic	77.19 mesoconchic	85. hypsiconchic	84.15 mesoconchic	
54:55.	Nasal Index	45.65 leptorrhine	47.65 mesorrhine	51.35 chamaerrhine	51.17 chamaerrhine	
63:62.	Palate Index	77.92 leptostaphyline	80.44 mesostaphyline	68. leptostaphyline	77.74 leptostaphyline	
40:	5. Cran. Basal. I.	94.51 orthognathous	96.08 orthognathous	105.21 prognathous	92.59 orthognathous	

Table 13 Measurements and indices of the Neo-Assyrian crania excavated in the Haditha

M. N.		n	M	M. N.		n	M
1.	Max. Cran. Lg.	5	187.60	51.	Orb. Br.	4	41.75
5.	Ba.-na. Lg.	4	104.00	52.	Orb. Ht.	4	32.75
8.	Max. Cran. Br.	3	136.33	54.	Nas. Br.	3	26.67
9.	Min. Front. Br.	3	97.00	55.	Nas. Ht.	4	52.75
17.	Ba.-br. Ht	4	136.75	62.	Pal. Lg.	2	45.00
8: 1.	Cranial I.	3	72.17	63.	Pal. Br.	2	34.50
17: 1.	Ht.-lg. I.	3	71.60	47: 45.	Tot. Fac. I.	—	—
17: 8.	Ht.-br. I.	3	99.32	48: 45.	Up. fac. I.	3	50.18
45.	Bizyg. Br.	3	133.33	52: 51.	Orb. I.	4	78.42
47.	Tot. Fac. Ht.	—	—	54: 55.	Nas. I.	3	51.63
48.	Up. Fac. Ht.	3	67.00	63: 62.	Pal. I.	2	76.78

Table 14 Measurements and indices of the Islamic crania excavated in the Ashur

M. N.		n	M	M. N.		n	M
1.	Max. Cran. Lg.	6	178.50	51.	Orb. Br.	6	43.50
5.	Ba.-na. Lg.	5	100.60	52.	Orb. Ht.	6	34.30
8.	Max. Cran. Br.	5	141.80	54.	Nas. Br.	6	23.30
9.	Min. Frant. Br.	6	97.50	55.	Nas. Ht.	6	55.67
17.	Br.-br. Ht.	5	131.80	62.	Pal. Lg.	6	45.33
8: 1.	Cranial I.	5	78.99	63.	Pal. Br.	6	35.00
17: 1.	Ht.-lg. I.	5	73.49	47: 45.	Tot. Fac. I.	2	91.90
17: 8.	Ht.-br. I.	5	92.94	48: 45.	Up. Fac. I.	4	54.63
45.	Bizyg. Br.	4	132.25	52: 51.	Orb. I.	6	79.13
47.	Tot. Fac. Ht.	2	125.00	54: 55.	Nas. I.	6	41.93
48.	Up. Fac. Ht.	6	72.33	63: 62.	Pal. I.	6	77.19

Table 15
Measurements and indices of crania excavated in Southern Mesopotamia and Yorgan Tepe

M. N.	Southern Mesopotamia and Yorgan Tepe									
	Al-Ubaid n Mean	Kish-A n Mean S. D.	Ur n Mean	Nippur n Mean S. D.	Seleucid Yorgan Tepe n Mean	Yorgan Tepe n Mean	Kish-W n Mean	Nippur (9 A. D.) n Mean S. D.		
1. Max. Cran. Lg.	6 192.80	13 191.51 10.88	3 193.60	23 193.70 5.38	3 188.00	11 190.78	4 191.00	16 189.72 9.47		
5. Ba.-na. Lg.	5 105.70	— —	3 107.60	19 106.05 4.66	2 104.50	6 106.05	1 94.30	— —		
8. Max. Cran. Br.	6 140.10	9 136.22 6.28	3 135.00	22 136.90 5.53	2 139.50	10 136.33	5 138.20	27 139.14 8.39		
9. Min. Front. Br.	7 96.45	10 94.40 3.98	3 97.60	26 96.69 4.53	3 94.30	12 96.45	4 92.30	19 95.84 2.46		
17. Ba.-br. Ht.	4 136.50	— —	2 144.50	19 136.74 5.96	2 132.00	6 141.17	1 122.	23 135.43 9.22		
8 : 1. Cranial I.	6 72.60	10 74.23 6.72	3 69.80	22 70.86 2.91	2 73.50	10 71.67	4 72.70	— —		
17 : 1. Ht.-lg. I.	4 71.20	— —	2 72.60	20 70.25 3.27	2 69.70	6 72.83	1 67.70	— —		
17 : 8. Ht.-br. I.	4 98.30	— —	3 105.50	19 98.79 6.46	2 95.30	6 102.67	1 96.00	— —		
45. Bizyg. Br.	5 127.60	1 130.	3 132.30	22 133.32 5.72	2 130.00	3 129.30	— —	21 129.00 7.95		
47. Tot. Fac. Ht.	6 118.10	— —	2 128.00	22 118.36 5.89	— —	5 117.50	— —	— —		
48. Up. Fac. Ht.	5 72.00	— —	3 76.60	23 68.91 4.69	2 73.50	8 74.33	— —	20 68.00 4.95		
51. Orb. Br.	3 40.00	3 43.83	3 40.00	20 39.95 1.60	2 38.00	7 38.90	2 41.50	14 40.35 2.11		
52. Orb. Ht.	4 33.60	5 32.98 11.35	3 36.00	23 32.57 1.86	2 36.00	8 33.44	— —	13 34.00 1.84		
54. Nas. Br.	6 25.70	1 23.5	3 26.60	24 26.71 2.13	2 24.30	6 24.42	1 25.60	29 23.63 1.71		
55. Nas. Ht.	6 54.00	— —	3 54.60	22 53.63 4.04	2 54.00	8 53.20	1 49.	23 50.23 4.45		
62. Pal. Lg.	6 51.80	— —	— —	23 41.17 5.25	2 57.50	8 56.44	— —	— —		
63. Pal. Br.	— —	— —	— —	23 40.30 3.72	— —	7 62.42	— —	— —		
47 : 45. Tot. Fac. I.	5 92.40	— —	2 97.00	20 89.45 4.13	— —	2 97.00	— —	— —		
48 : 45. Up. Fac. I.	4 56.30	— —	3 58.00	21 52.38 4.60	2 56.50	3 58.00	— —	— —		
52 : 51. Orb. I.	3 82.50	— —	3 90.0	19 80.42 3.37	2 94.70	7 84.83	— —	— —		
54 : 55. Nas. I.	5 47.70	— —	3 47.80	20 51.10 3.60	2 46.30	6 46.17	1 51.	— —		
63 : 62. Pal. I.	— —	— —	— —	21 90.67 7.14	— —	7 111.83	— —	— —		

- IX テル・グッバ出土銅剣の鉛同位体比
 - X テル・ソンゴル B 検出 石膏の分析
 - XI ハムリン, バビロン出土日乾レンガの分析
- 上記 IX~XI章は英文参照

XII まとめ

2年半にわたる現地調査の期間中、イラク考古総局、国内関係諸機関、および同時にハムリン盆地内の遺跡調査にたづさわった外国調査団等の協力により、我々は種々の興味ある発掘成果を得た。それを時代順に以下に記述する。

テル・ソングルAにおいて、サマッラ期の村落遺跡を検出した。これはハムリン盆地内で発見された最も古い初期農耕文化期の遺跡の一つである。この村落は厚い防禦壁に囲まれており、村落の形態は、同時代に属するテル・エス・スワン遺跡^{注1}と共通する要素をもっている。また、発見された建物のプランは、^{注2}チョガミ遺跡発見の建物と酷似し、さらに出土した遺物の中には、^{注3}チョガミ遺跡でトランジショナル・タイプとされるものが存在する。

ソングルAでは、サマッラ期の村落の廃絶後、ハラフ式土器をともなう文化が浸透する。ハムリン盆地内におけるハラフ期の遺跡は、テル・ソングルA、Bのほか、イタリア隊によって調査が行われたテル・ハッサン^{注4}があり、これらはハラフ文化圏の南限に位置している。テル・ソングルBでは建物を伴うハラフ期の層を二層確認し、ソングルAでは土壌群と、サマッラ期建物の上部に掘りこまれたハラフ式土器を伴う土器窯 (Fig. 26) を発見している。ソングルB II層では、ハラフ式土器とウバイド式土器が混在して発見され、注目された。ここに検出された建物B-2は、^{注5}類例がヘヤット・カーシム、^{注6}テル・アバダ、^{注7}テペ・ガウラなどから発見されており、いずれもウバイド期に属している。しかし、ソングルBのこの建物は、入口部の構造などにおいて、それらと多少異なる要素をもち、必ずしも、ウバイド期に属する建物と断定することはできない。テル・ソングルBでは、すでにIII層において石膏張床をもち、II層B-2と共通した形状を呈する建物が存在しており、ハラフ期にB-2のような建物の先駆があった可能性もある。また、II層B-2の建物は断面図にみられるように、二つの床をもっているようだ。それから推定される床下に存在したと考えられる建物の平面形は、現在のB-2より複雑な構造であったらしい。テル・ソングルBのハラフ式土器を伴う層は、すでに最下層からハラフ後期に属する。II層はハラフの特徴を有しながら、ウバイド式文化に強く影響されたと考えられる極めて特徴的な土器が発見され、それらはハムリン盆地の地理的特殊性や、ハラフ文化とウバイド文化の時間的關係などを証明する好資料である。この問題は極めて重要であり、早急な判断は控え、今後の共同研究課題としたい。

ウバイド文化の痕跡は、テル・ソングルA、B、Cにおいて発見され、墓地、工房（土器窯）、住居として使用されていた。出土遺物の特色はラス・アル・アミア遺跡出土例と類似しており、初期ウバイド期に属する。しかしながら、土器のなかにはハラフ的特色をもつものも少からず含まれ、ハムリン地区の特殊性を明らかにしている。なお、ソングルBで検出された石膏床は、異常なほど、硬化現象が観察されたので、その組成分析と硬化原因について分析を行なった。その結果、現在の主成分は半水石膏であり、その硬化現象については、床塗りは当初二水石膏であったものが、廃墟となったのち、乾燥気象条件や、夏期における日中の土壌および岩石の温度上昇により、除々に脱水していったか、もしくは試料中に少量の石膏が含まれていることから、半水石膏からこの分だけの復水により硬化したものと推定されている（第X章英文参照）。

テル・グッパVII層で発見された円形建物を伴う層は、ジェムデッド・ナスル期に属し、南・中部メソポタミア

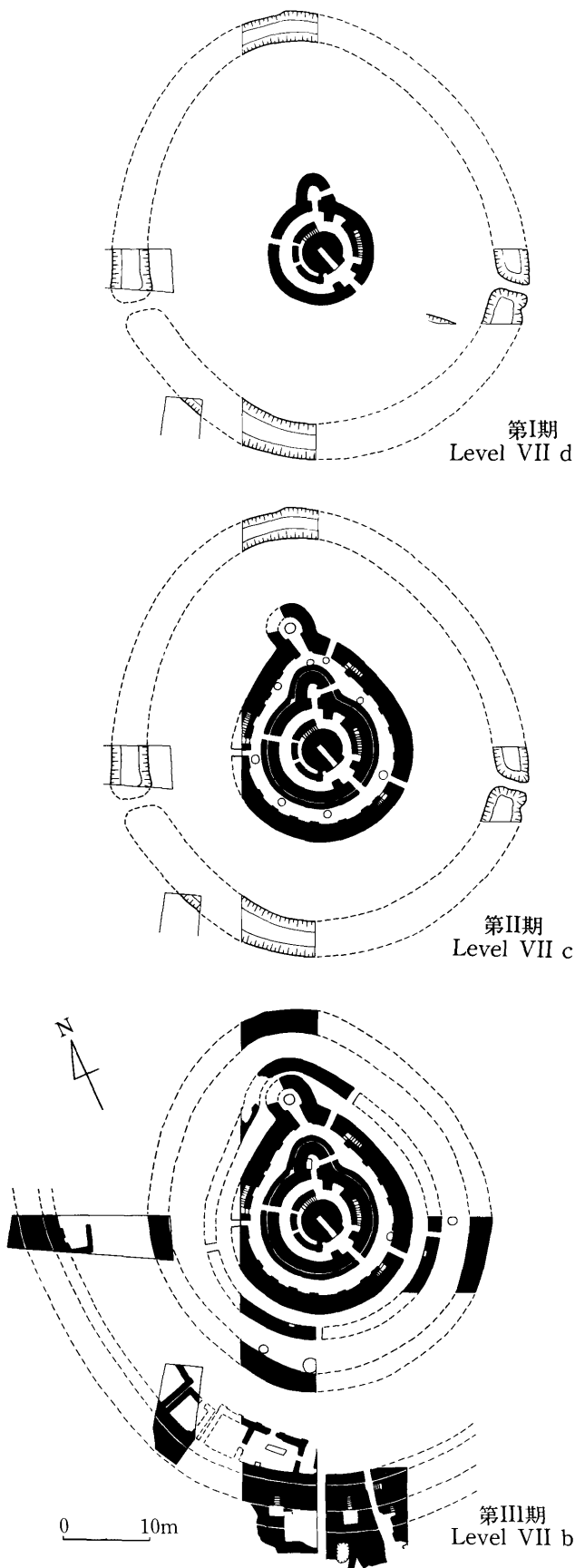


Fig. 64 テル・グッバ VII層 変遷図
Transition of Plans, Level VII, Tell Gubba

で文字が使用され始めるころに相当する。ここに発見された円形の建物は、現在までのところ例のないユニークな構造を有し、特異な存在である。建物の性格や、機能を明らかにする努力は現在進行中であるが、例のない建物だけに、なかなか解明の糸口がつかめない。この場合、時期的には多少異なるが、テル・モトフル^{注8}、テル・ラズーク^{注9}、さらには現在調査進行中のテル・スレイマ^{注10}が参考となろう。これらの建物はいずれも初期王朝期に属する。我々が参考とするのは、円形平面をもったテル・グッバVII層建物の構造や機能が、初期王朝期まで何らかの形で継承された、と考えるからである。これらのどの建物にも共通することは同心円状の厚い壁を有することで、それは、防備を前提として築かれたようである^{注11}。テル・グッバの建物も、最終的には城砦風となるが、そこまでの過程で、数回の増拡を経たことが明らかになった (Fig. 64)。

第I期 (VII b) は、周濠で囲まれた中心に建物を配し、周囲に広い空間を設けている。中心部への出入口は2ヶ所以上にあり、比較的開放されたプランをもつ。このプランニングに比較的近いものに、広い聖域をもつテル・ブラク^{注12}の眼神殿や、広いD字型基壇上に築かれたテル・ウカイル^{注11}の彩色神殿があげられ、ウルク期からジェムデッド・ナスル期にかけては基壇が不整形で、広さも広く神殿の周囲にかなりの余地が取られていたらしい^{注14}。しかし、グッバVII d層の建物が、神殿であったとする積極的根拠は乏しく、建物プランも同時代の神殿プランからは著しくかけはなれている。

第II期 (VII c) になってI期に築かれた施設の外側に、井戸を囲んで厚く強固な壁を築く、外側に築かれた壁は、カファジェ楕円形神殿の内周壁と同じようにほぼ等間隔にバットレスが配されている^{注14}。この壁は中心施設の防備を目的とすると共に、その内側に広い生活空間を生みだしている。建物の平面形は周濠にほぼ沿った卵形プランへと変化する。

第Ⅲ期（Ⅶ b）になり周濠は埋没し機能しなくなる。これに代って周濠の内側に沿って厚い壁が築かれる。さらにその外側に都城壁を想定させるような外周壁が出現し、広い範囲を取り囲む。この壁は前代にもましてプランが直線的となる。都城壁の内側には、壁に沿って連続する方形の部屋が築かれ、祭壇状の施設をもつ部屋や、住居的性格を有したと推定される部屋を発見した。この時期において円形建物全体は、諸機能をあわせもった複合体を形成する。また、この都城壁は時の推移と共に、外側に厚い壁が付け足され、最終的には厚さ10m以上にも達するものとなった。初期の円形建物は顕著な防備施設を伴わないが、後代になればなるほど防備が強化され、ついに防備に力点をおく建物へと変わる。それは当時の社会情勢、特にグッバの人達にとって防備を強化せねばならない状況によるためであろう。それを裏づけるようにグッバⅦ層では2回の大火災の跡を発見している。

これほどまでに強固な防備を施した建物も破局を迎える。最後の日を示すかのようにⅦ bの大火災層からは、焼けた人骨や、16名もの人々が投げこまれていた土壙などを発見している。Ⅶ b層の火事ののち、円形建物の中心施設は荒れるにまかせ、手を加えることはなかったらしい。そして、しばらくたったある日、円形建物の中心施設は崩壊する。建物の崩壊はほぼジェムデッド・ナスル期の終末期ごろと考えられる。それと前後し初期王朝Ⅰ期へと移る。

ところがテル・グッバ出土土器の観察によれば、ジェムデッド・ナスル期から初期王朝Ⅰ期への変遷は漸移的であり、この間に明瞭な断絶は認められない。その変遷過程は、すでに調査が行なわれたディヤラ川流域の同時代遺跡とよく対応している¹⁶。初期王朝Ⅰ期の人々はジェムデッド・ナスル期のような、モニュメンタルな建物は築造しなかった。建物の平面にも円形を採用することなく、方形で小さく独立した建物を築く。ここにおいて、円形建物の系譜は途断する。一方、土器については、前代に行われていた彩文土器を受けつぎ発展させ、メソポタミア考古学史上最後の華を咲かせる。しかしながら、総体的にみると、テル・グッバの初期王朝Ⅰ期の人々も、ジェムデッド・ナスル期の繁栄は取りもどせず、次第に衰退へと向かっていったことは、遺構や遺物が証明している。顕著な例として、金属器、装身具等の出土量が上層に向かって少なくなる。なお、第Ⅶ a層出土の青銅剣（Fig. 22-14）について、銅鉱石の産地を推定するため、鉛同位体比の測定を行った結果、ウル出土の鉛容器（ジェムデッド・ナスル期）の産地と近いのではないかという成果が得られた。（第Ⅸ章 英文参照）

ハムリン盆地内で初期王朝Ⅰ期に属する遺跡は、テル・モトフル、ラズーク、アブ・カーシム、スレイマ、アハメド・ハチョウ、サブラ、アブガ、ハラワ、ヘヤット・カーシムなどがある。ハムリン盆地内ではこの時期になって、モトフルやラズークなどに円形建物が出現する。一方、テル・アブ・カーシムに認められるように¹⁷、方形を基調とした建物も出現し、複雑な様相を呈する。テル・グッバではジェムデッド・ナスル期に築かれた円形建物の周壁の一部が、都城壁的な役割をもちながら、ほぼ、楕円形プランで繞らせていたらしいが、初期王朝Ⅰ期の比較的早いころに崩壊してしまう。それ以後、二度と円形プランの建物は採用されることはなかったようだ。なぜ他の初期王朝Ⅰ期の遺跡で円形建物が新築されたにもかかわらず、グッバの人々は円形建物を再構築しようとしなかったのか、疑問が残る。

テル・グッバでは初期王朝Ⅱ期に属する明確な資料を欠く。この現象はハムリン盆地内に共通し、ディヤラ川流域や、南メソポタミアの編年と異なっている。あるいは我々が初期王朝Ⅰ期として処理したものの後半は、初期王朝Ⅱ期に相当すべきもので、ハムリン盆地での初期王朝Ⅰ期はかなり長期に及んだかもしれない。テル・グッバの裾部で発見された墓は、テル・モトフル発見の墓と遺物、遺構ともに類似し、時期的に近かったようだ¹⁸。

紀元前二千年期に属する遺構は、テルソンゴルA、Bにて発見された墓のみで、建築遺構は認められない。し

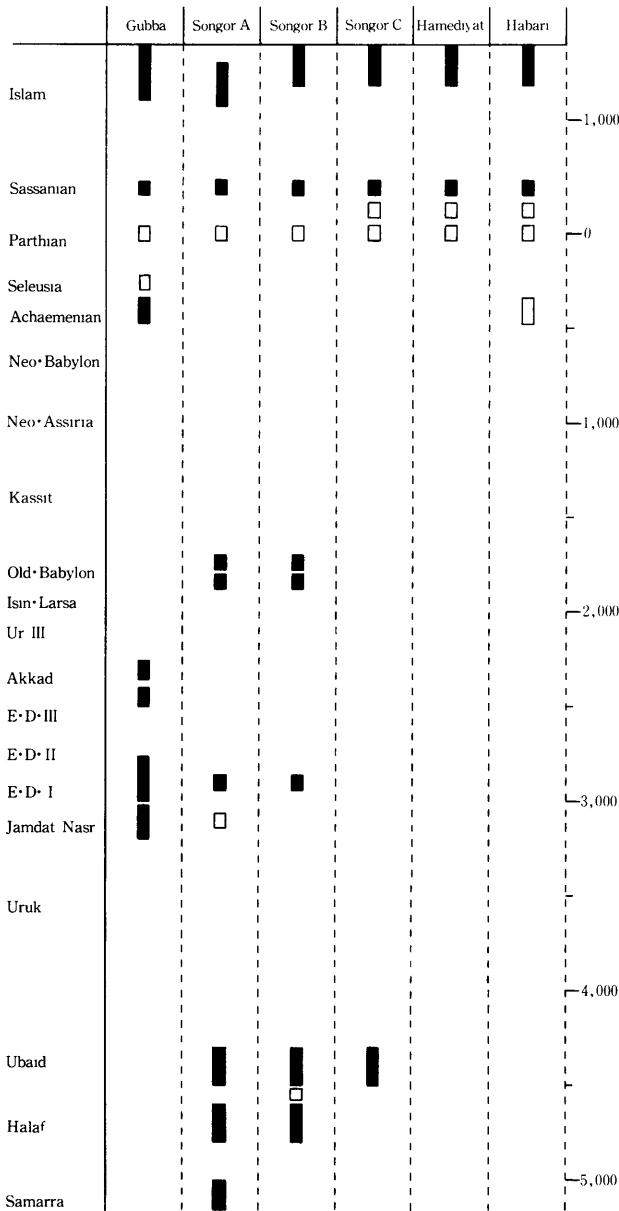


Fig. 65 日本隊検出遺構一覧
Table of Archaeological remains excavated by Japanese expedition

以上、今回の調査によって、明らかになった事例を列記した。これらの調査を通じ、テル・グッバを中心とする東西 2 km、南北 2 km の範囲に、サマッラ期から、パルティア・ササン朝ペルシヤ期に至る遺跡の分布が判明した。これを図示すると Fig. 65 のようになる。紀元前二千年期とウルク期に空白期を認めるが、おおむね生活は継続する。そのことは、この地域はハムリン盆地中において、農耕、牧畜、狩猟生活に非常に適した区域であったようだ。テル・グッバ VII 層に検出された円形プランの建物は、現在までの調査例を見る限り、特異な構造である。従って、もろもろの角度から、研究上活用するため、模型として残すことに意義を認め、文部省科学研究費特別促進費の交付を受け、発掘現状を示す遺構模型を作成した。併せてその復元研究も進めている。

このほか、私たちは調査した遺跡出土の人骨について、自然人類学的分析を行うため、ハムリン地域の他遺跡や、現在調査進行中のバビロン、アッシュール、ハディーサ地域から、可能な限り多数の人骨を、イラク考古庁の特別な配慮を受けて蒐集した。現在それらの標本は整理、分析中である。中間的な報告によれば、頭形に関する

かし、この時代の葬法をみると、床下埋葬が広く行われていることから、ソングル A、B とともに同時代の建築遺構が存在した可能性も強い。ただ、テル・グッバの北約 2 km にあるオーストリア隊が調査したテル・アバブラで、同時代の遺跡が発見されており、両者の間に何らかの関係があったかも知れない。

テル・グッバ II 層で発見された建物は著しく厚い壁で囲まれ、城砦風の構造を有している。ハムリン盆地内で発見されたアケメニッド・ペルシヤ期の遺跡は他にテル・アブ・アル・スワード II が挙げられるにすぎない。グッバで発見された建物の構造は、ヌーシ・イ・ジャン遺跡と共通し、遺物も、スーサ、パサルガダエ出土品に類例が求められる。いずれにせよ、この建物は、アケメネス王朝の版図拡充策の一環として、幹線道路筋、もしくは地域拠点に造られた建物とみることができよう。

テル・ハメディヤートの広がり、東西約 1 km、南北約 1 km を測り、テル・グッバの西側にあるテル・ハバーリーまでを含んでいる。この約 1 km² の範囲にパルティアからササン朝ペルシヤごろの大きな町が営まれていた。ハメディヤートの調査では、土器窯、貯蔵施設、醸造施設を検出した。これらは遺跡の南側に集中し、居住区域とは分かれていたらしい。また、テル・ソングル A、B で同時代の墓、グッバでもこの時期に属する墓を発見した。

限り、イスラム期以前では、ハムリン地域の諸遺跡間には著しい差異が認められず、これまでに南メソポタミアで出土している標本と比較しても同様に、いずれも長頭型である。他方、イスラム期になると、頭長の短いもの、即ち、中頭および短頭のグループが出現してくる。前者がテル・グッバ、後者がテル・ソングル A 出土の一群である。この点、南メソポタミアのニップール出土のイスラム期頭蓋骨の形態と異なっている。

なお、テル・グッバ第Ⅶ層を構築している日乾レンガの成分と成作法や、回廊中で火災を受けた日乾レンガの変化の分析、彩文土器の胎土、顔料の分析、花粉分析、C-14による年代測定などについても現在実施中である。

以上は現在までの調査研究の概要であり、引き続き本報告の出版を準備している。最後に本調査研究に多大な助言、協力をおしまれなかったドイツ考古学研究所バグダッド所長 R. M. ブーマル博士、ならびに、英国考古学研究所長 J. N. ポストゲイト博士、また特に本調査に厚き御援助を頂いた三菱財団、東レ科学振興会、石橋財団、日本・イラク経済委員会、中東協力センター各位に深甚な謝意を表す。

注

- 1) Behenam Abu Al-Soof, 1968, "Excavation of the Tell es-Sawwan Fourth Season", *Sumer* Vol. XXIV
- 2) Oates, J., 1969, "Choga Mami 1967-68. A Preliminary Report", *Iraq* Vol. XXXI-2
- 3) Oates, D., and Oates, J., 1976, *The Rise of Civilization*, Oxford
- 4) Invernizzi, A., 1980, "Excavation in the Yalkhi Area", *Mesopotamia* Vol. XV
- 5) Forest, F., 1980, "Rapport sur les Fouilles de Kheit Qasim III Hamrin", *Paléorient* Vol. 6
- 6) Sabah About, 1979, "Tell Abada", *Sumer* Vol. XXXV
- 7) Tobler, A. J., 1950, *Excavation at Tepe Gawra*, Vol. II, Philadelphia
- 8) Killick, R., Roaf, M., 1979, "Excavation at Tell Madhhur", *Sumer* Vol. XXXV
- 9) Gibson, McG., 1979, "At Uch Tepe Hamrin", *Sumer* Vol. XXXV
- 10) Muhammad Az-Zahawi, 1981, 「テル・スレイマ」第3回バグダッド国際考古学シンポジウム発表
- 11) 注9に同じ
- 12) Mallowan, M. E. L., 1947, "Excavation at Brak and Chagarbazar", *Iraq* Vol. IX
- 13) Lloyd, S., Safar, F., 1943, "Tell Uqair Excavation by the Iraq Government Directorate of Antiquities in 1940 and 1941", *J. N. E. S.* Vol. II
- 14) 小林文治, 1959 『建築の誕生』, 相模書房
- 15) Delougaz, P., 1940, *The Temple Oval at Khafajah*, *O. I. P.* Vol. LIII
- 16) Delougaz, P., 1947, *Pottery from the Diyala Region*, *O. I. P.* Vol. XLIII
- 17) Awad Al-Kassar, 1979, "Tell Abu Qasim", *Sumer* Vol. XXXV
- 18) 注8に同じ
- 19) Trenkwalder, H., 1979, "Tell Ababura", *Sumer* Vol. XXXV
- 20) Abudul Rahiman, M. A., 1979, "Tell Abu Al-Súud II", *Sumer* Vol. XXXV
- 21) Stronach, D., Roaf, M., 1978, "Excavation at Tepe Nush-i Jan", *Iran* Vol. XV
- 22) Ghirshman, R., 1954, "Village Perse Acheménide", *Mission Archéologique en Iran*, Tome XXXVI
- 23) Stronach, D., 1978, *Pasargadae*, Oxford

图 版

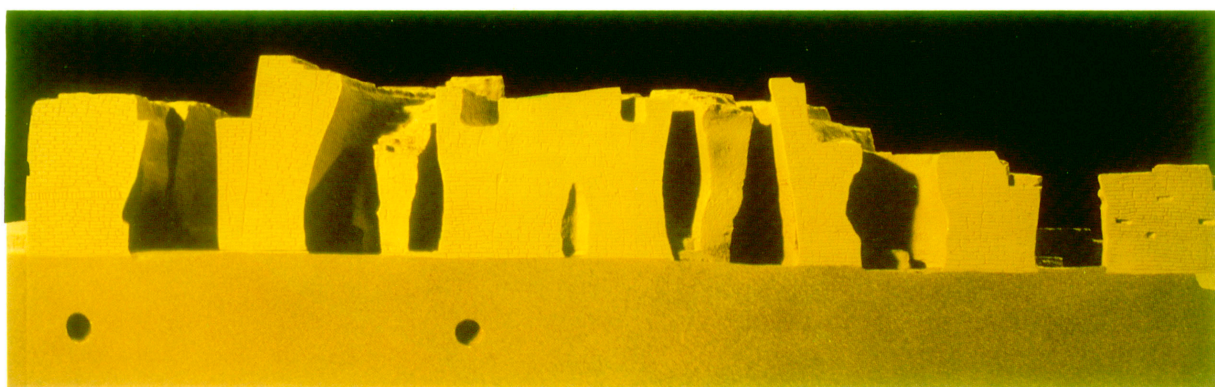
PLATES



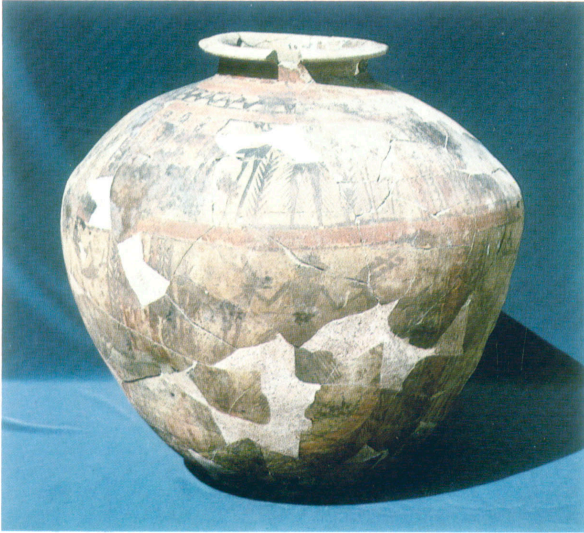
1 VII層 中心部の構造 Central Structure, Level VII



2 VII層 現状模型 Model of Level VII



3 VII層 現状模型の断面 Section of the Model, Level VII



1 IVb層 Level IVb



2 VI層 Level VI



3 V層 Level V



4 VI層 Level VI



5 VIb層 Level VIb



6 VI層 Level VI



1 サマッラ期 ソンゴルA Samarra Period, Songor A



2 サマッラ期 ソンゴルA Samarra Period, Songor A



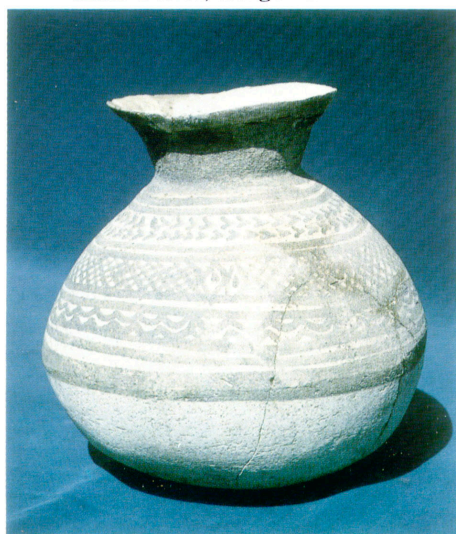
3 ハラフ期 ソンゴルA Halaf Period, Songor A



4 ハラフ期 ソンゴルB Halaf Period, Songor B



5 ウバイド期 ソンゴルC Ubaid Period, Songor C

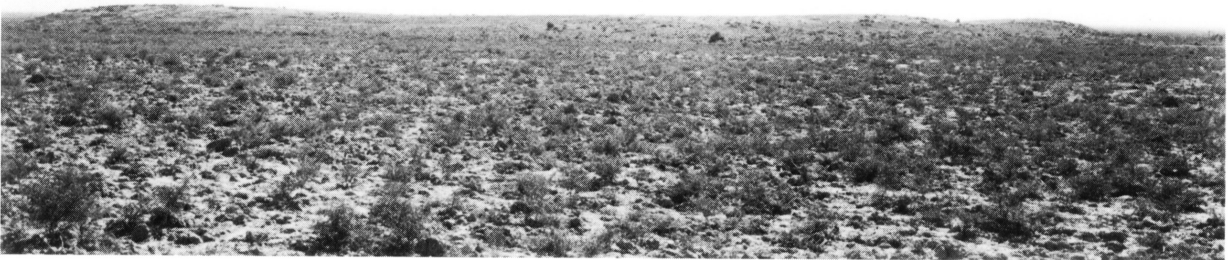


6 ウバイド期 ソンゴルA Ubaid Period, Songor A

テル・ソンゴルA, B, C 彩文土器 Painted Pottery, Tells Songor A, B, C



1 テル・グッバ Tell Gubba



2 テル・ソングルA Tell Songor A



3 テル・ソングルB Tell Songor B



4 テル・ソングルC Tell Songor C



発掘調査中のテル・グッバ　Tell Gubba under Excavation



1 VII層 中心施設 Central Structure, Level VII



2 VII層 東部分 Eastern Part, Level VII

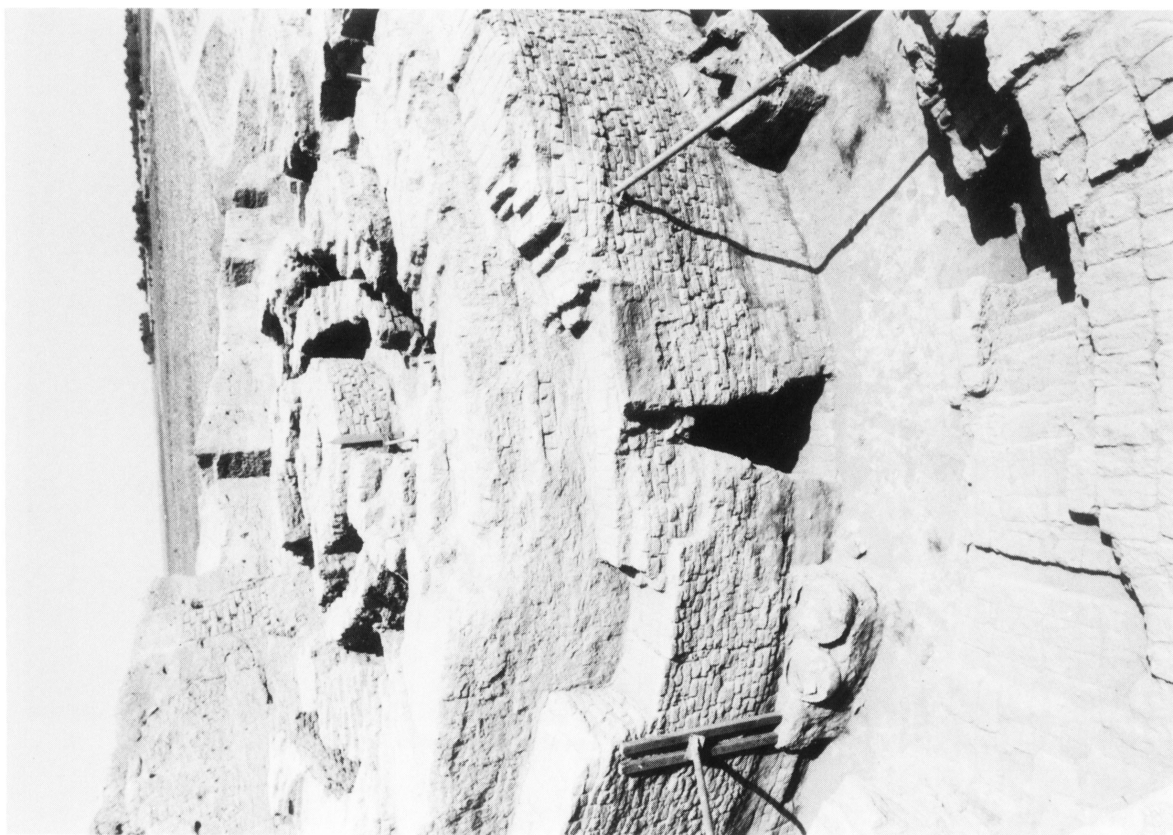


1 VII層 中心施設 Round Structure, Level VII

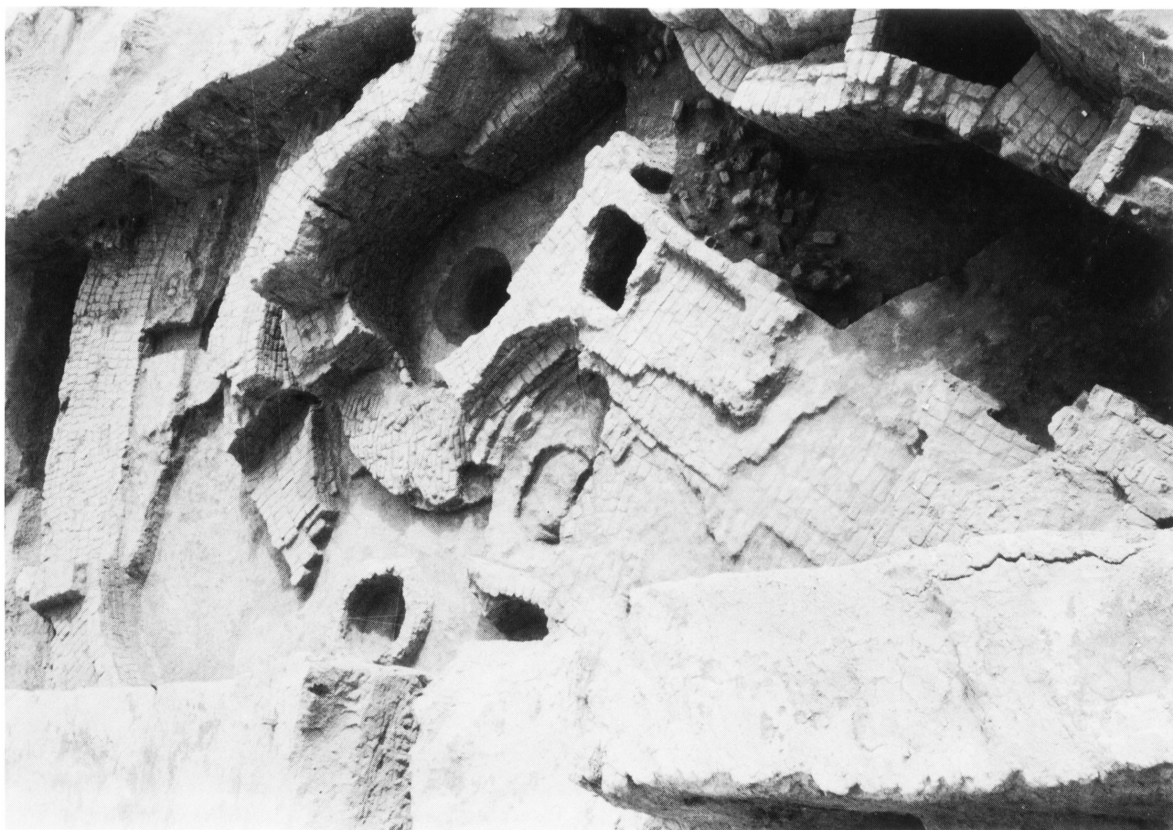


2 VII層遺構 (中央上方はIVb~V層) Structure, Level VII and Level V ~IVb (Central Top)

テル・グッバ Tell Gubba



1 Ⅶ層 中心施設 Central Structure and its Entrance, Level VII

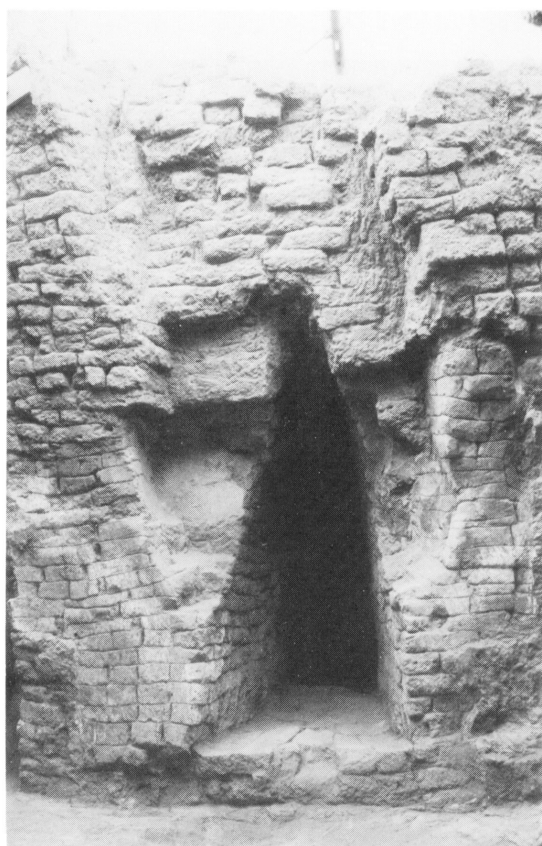


2 Ⅶ層 北側部分 Northern Part, Level VII

テル・グッバ
Tell Gubba



1 VII層 迫出穹窿構造
Corbeling Vault Structure, Level VII



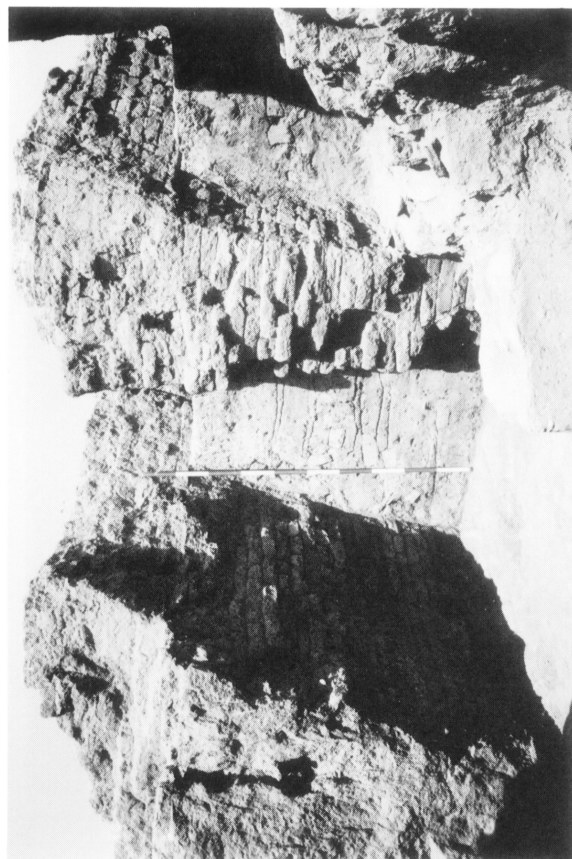
2 VII層 トンネル状遺構
Tunnel Like Structure, Level VII



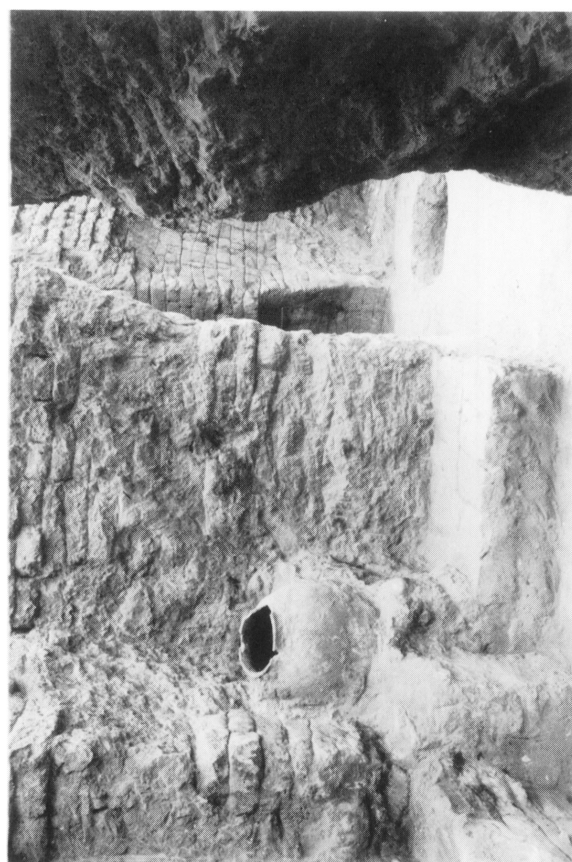
3 VII層 中心施設 東より Central Structure, Level VII, from the East



1 CW 3とコリドー-C 2, C 3 Walls and Corridors

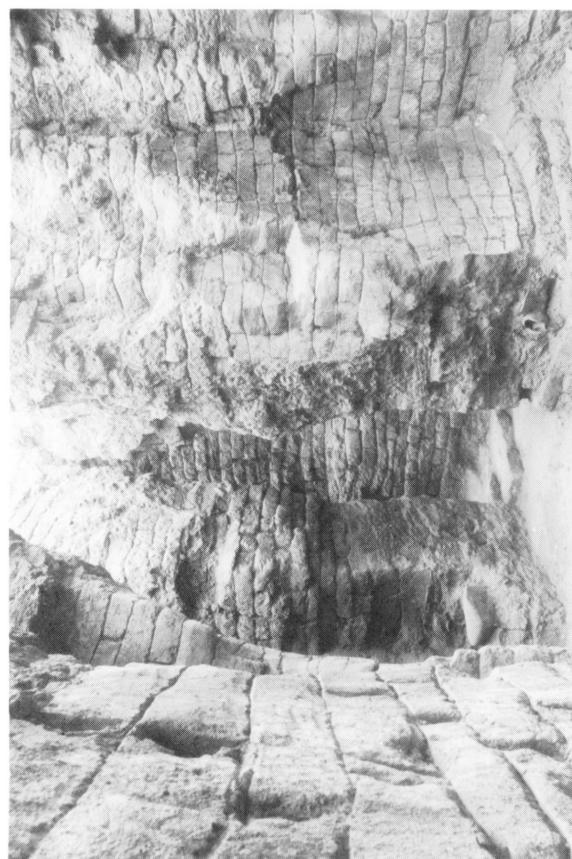


2 コリドー-3内の堆積とCW3 Accumulation in Corridor 3 and CW3



3 コリドー-3内の粗製土器 Coarse Jar in Corridor 3

テル・グッバ 中心施設 細部



4 コリドーと壁 Corridor and Walls

Detail of Central Structure, Level VII, Tell Gubba



1 V, VI層 遺構 (初期王朝I期) Structure, Level V,VI (Early Dynastic I Period)



2 初期王朝I期の穀倉 Storage House, Early Dynastic I Period



3 初期王朝III期墓 土器出土状況 Pottery from Early Dynastic III Grave



4 VII層 土坑内の人骨 Human Bones in Pit, Level VII



1 Ⅶ層 彩文土器 Painted Pottery, Level Ⅶ



2 Ⅶ層 彩文土器 Painted Pottery, Level Ⅶ



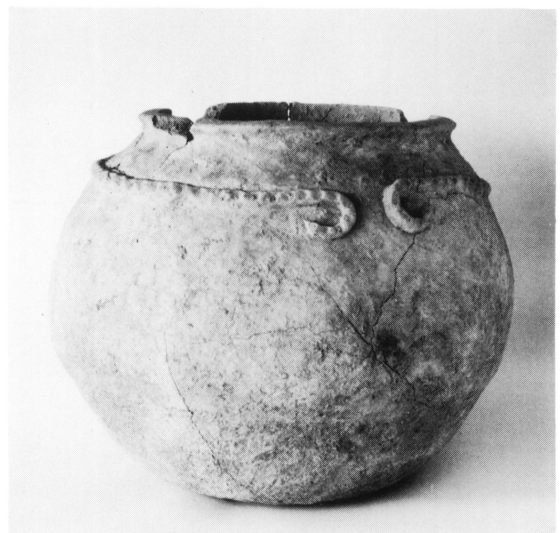
3 Ⅶ層 彩文土器 Painted Pottery, Level Ⅶ



4 Ⅶ層 素文土器
Spouted Pottery from Fire Place, Level Ⅶ



5 Ⅳ層 粗製土器 Coarse Jar, Level Ⅳ



6 Ⅵ層 粗製土器 Coarse Jar, Level Ⅵ



1 VI層 彩文土器 Painted Pottery, Level VI



2 VI層 彩文土器 Painted Pottery, Level VI



3 V層 彩文土器 Painted Pottery, Level V



4 VI層 彩文土器 Painted Pottery, Level VI



5 押印付粗製土器 Sealed Coarse Jar



6 押印付粗製土器 Sealed Coarse Jar



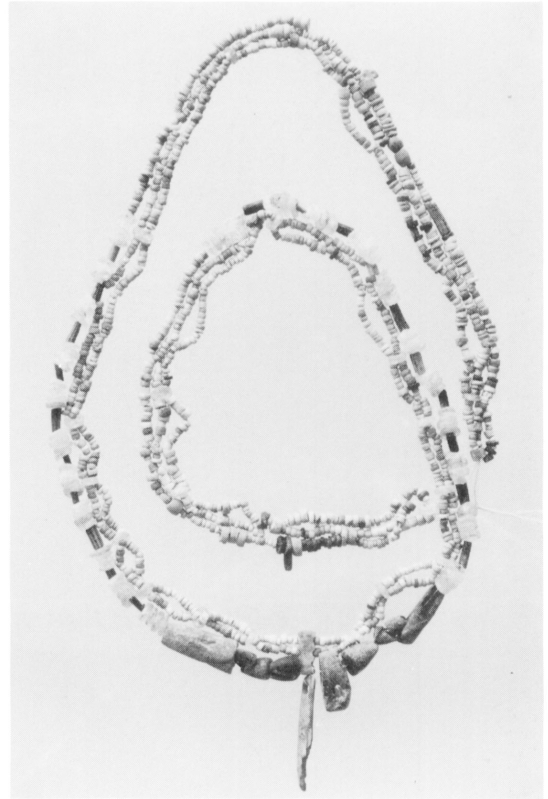
7 押印付粗製土器 Sealed Coarse Jar



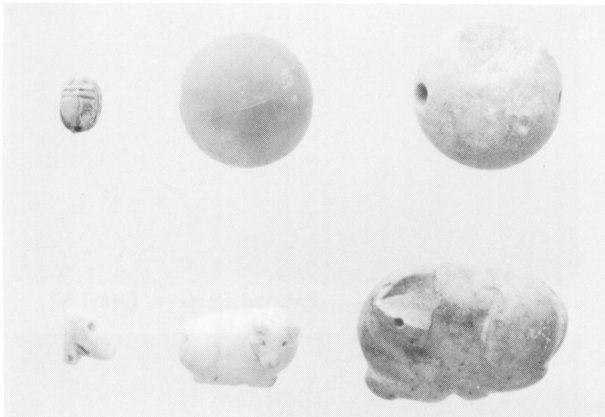
8 押印付粗製土器 Sealed Coarse Jar



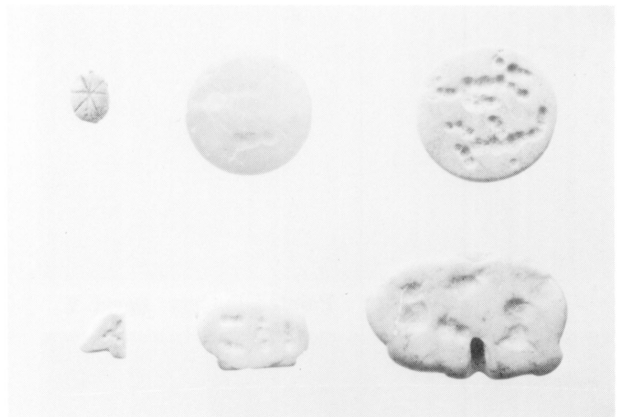
1 銅器 Bronze Objects



2 ビーズ Beads



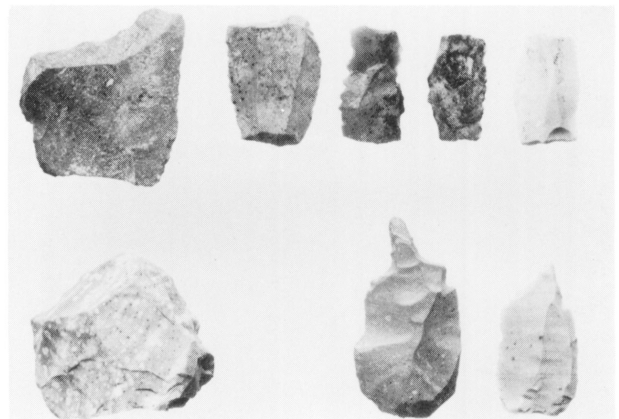
3 スタンプシール (表) Stamp Seals



4 スタンプシール (裏) Stamp Seals



5 シリンダーシール Cylinder Seals



6 石器 Stone Artifacts



1 I層 遺構 **Structre, Level I**



2 II層 中心施設 **Central Structure, Level II**



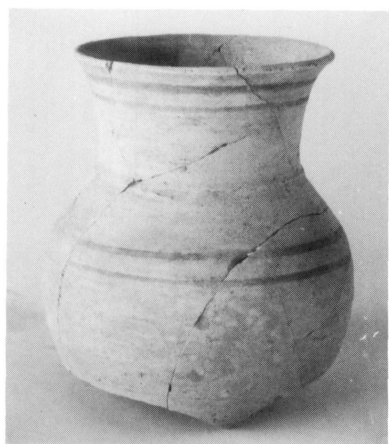
3 II層 遺構 東より **Wall Structure, Level II, from the East**



4 II層 ランプ **Lamp, Level II**



5 II層 碗形土器 **Bowls, Level II**



6 II層 彩文土器
Painted Pottery, Level II



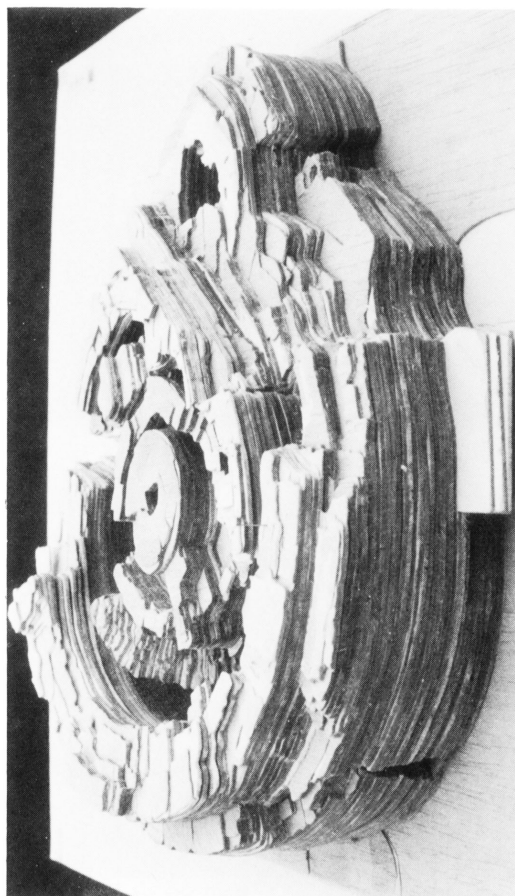
7 II層 素文土器
Plain Pottery, Level II



8 II層 碗形土器 **Bowl, Level II**



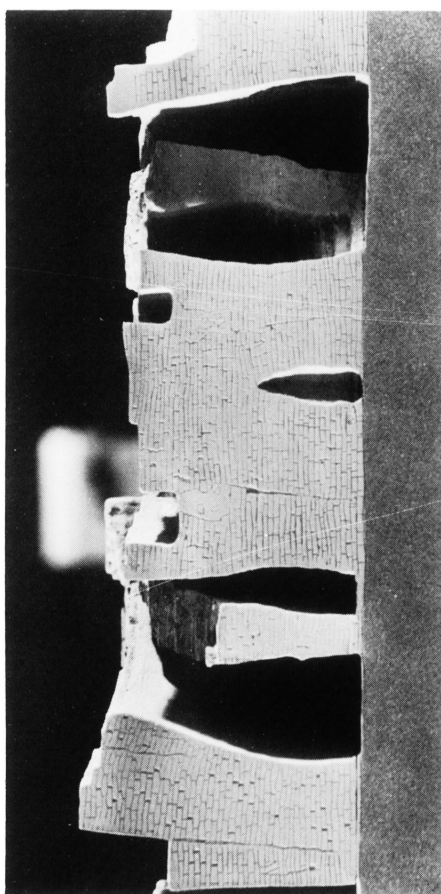
2 模型全景 General view of the Model



4 素模型 Primary Model
Model of Level VII, Tell Gubba

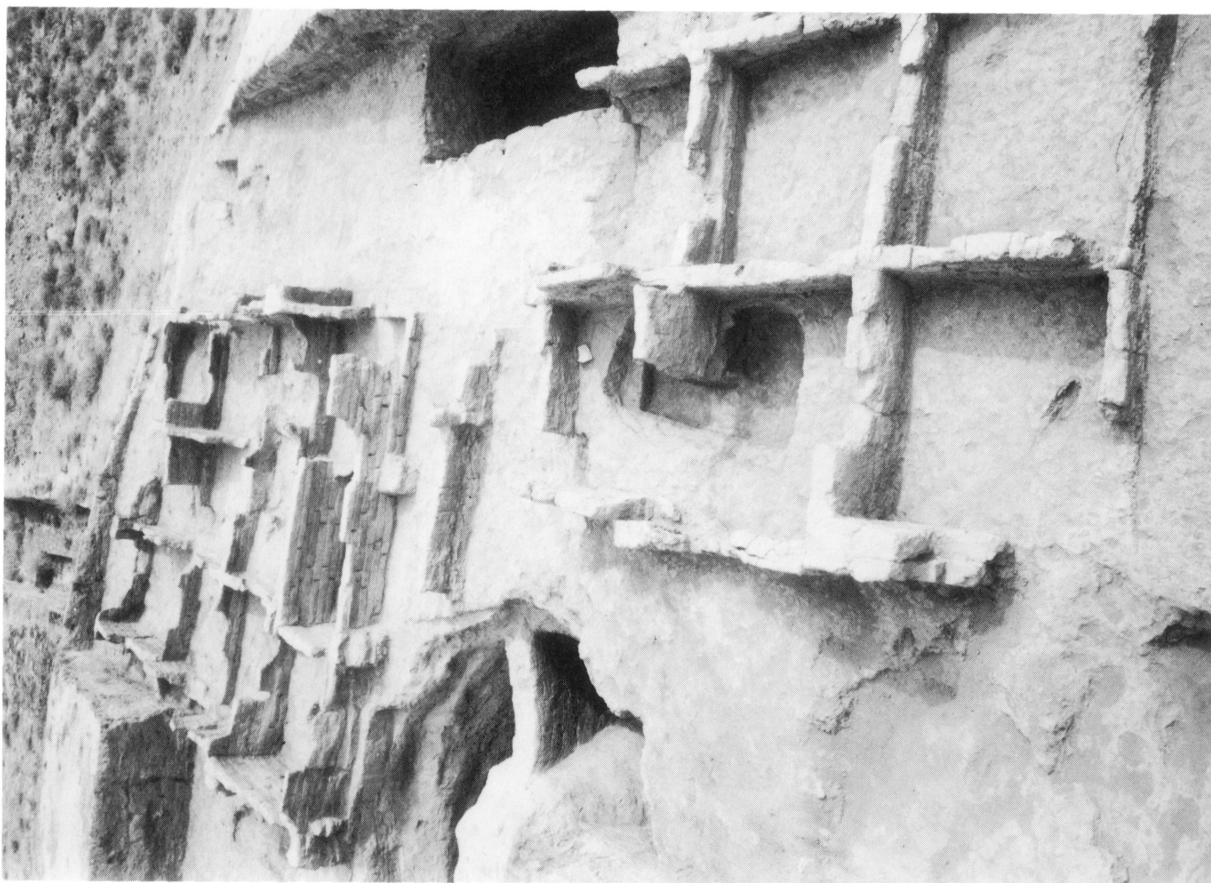


1 第8壁細部 Detail, Wall 8



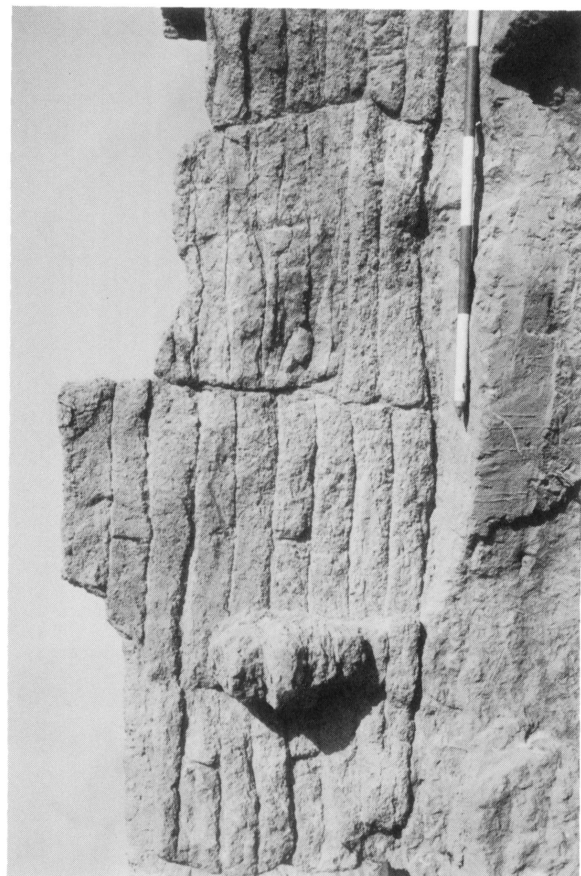
3 中心部断面 (北-南) Section of the Model, Central Structure,

テル・グッバ VII層 模型



1 建物 サマッラ期 南西より Samarra Houses, from the Southwest

テル・ソングルA



2 閉塞された入口 サマッラ期 Closed Entrance, Samarra House



3 墓 No. 247 サマッラ期 Grave No. 247 Samarra Period

テル・ソングルA



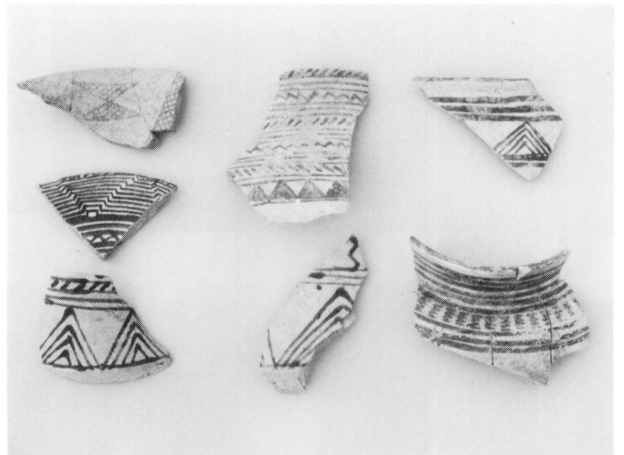
1 刻文土器 Incised Pottery



2 彩文土器 Painted Pottery



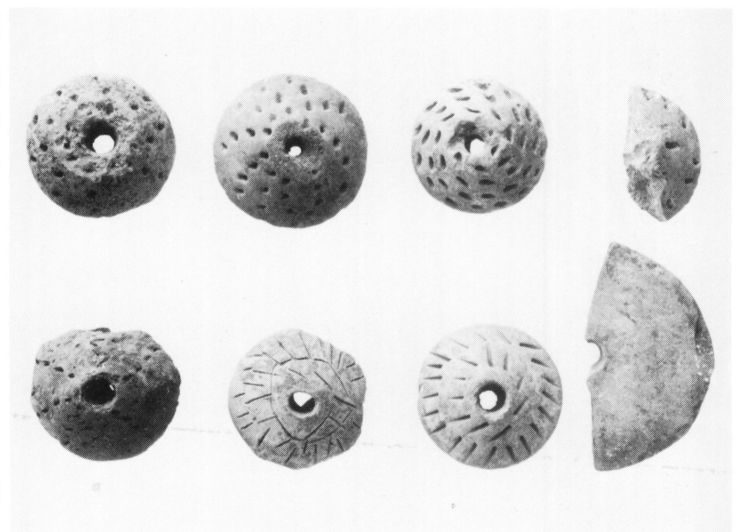
3 刻文土器破片 Incised Pottery



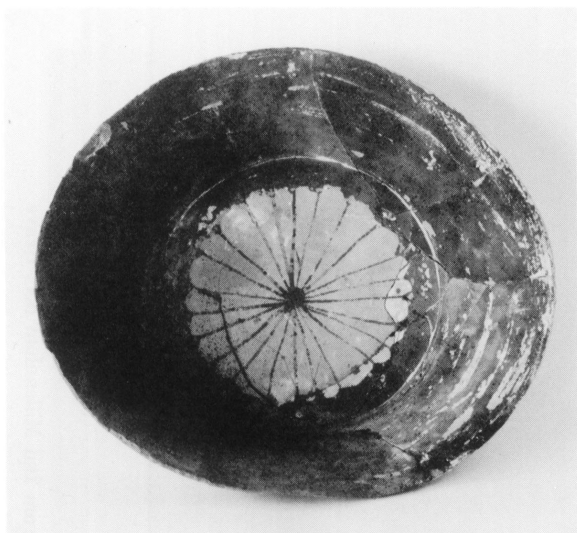
4 彩文土器破片 Painted Pottery



5 テラコッタ小像 Terracotta Figurine



6 土製紡錘車 Spindle Whorls



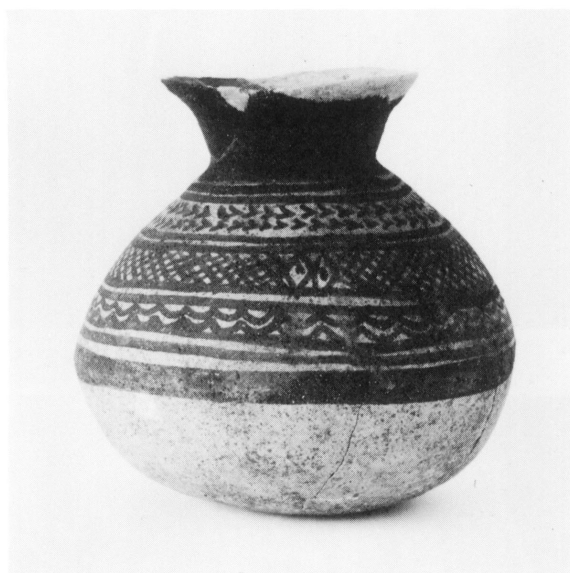
1 ウバイド期 大皿 Bowl, Ubaid Period



2 ウバイド期 大皿 Bowl, Ubaid Period



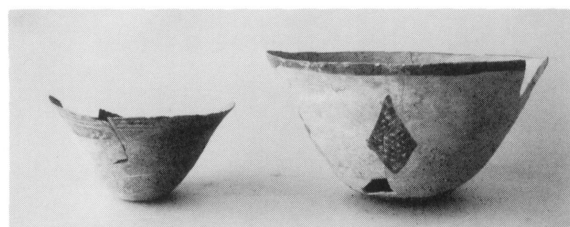
3 ウバイド期 壺 Jar, Ubaid Period



5 ウバイド期 壺 Jar, Ubaid Period



4 ウバイド期 亀形注口土器
Tortoise Jar, Ubaid Period



6 ウバイド期 碗 Bowls, Ubaid Period



7 ハラフ期 壺, 碗 Pot and Bowl, Ubaid Period

テル・ソングルA 彩文土器 Painted Pottery, Tell Songor A



1 Ⅱ層 建物 Structure, Level II



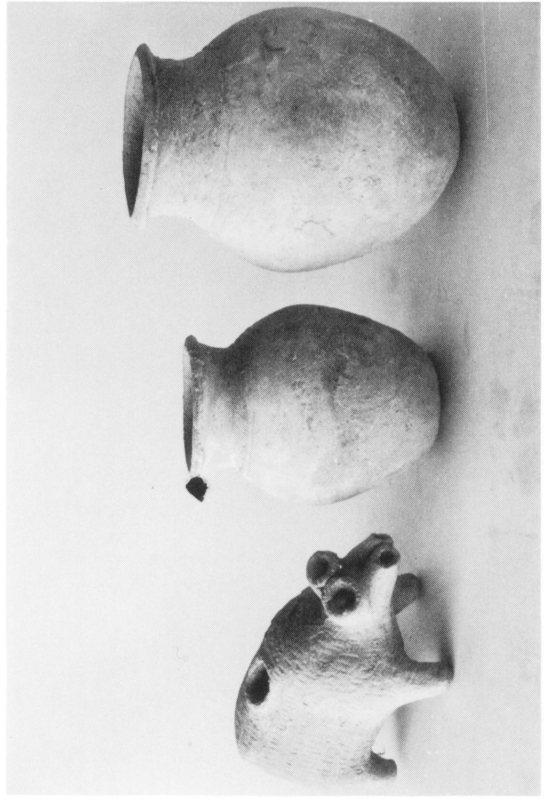
2 Ⅰ層 土器窯 Pottery Kiln



3 排水管 Drain Pipe

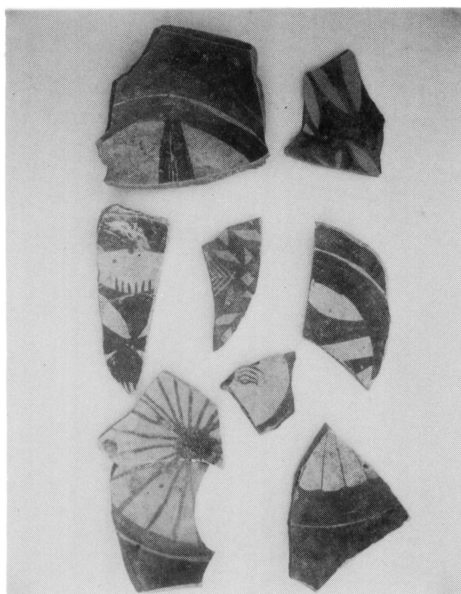


4 礫敷道路 Stone Pavement



5 墓出土遺物 Finds, from 2nd Millennium B.C. Grave

テル・ソンゴルB Tell Songor B



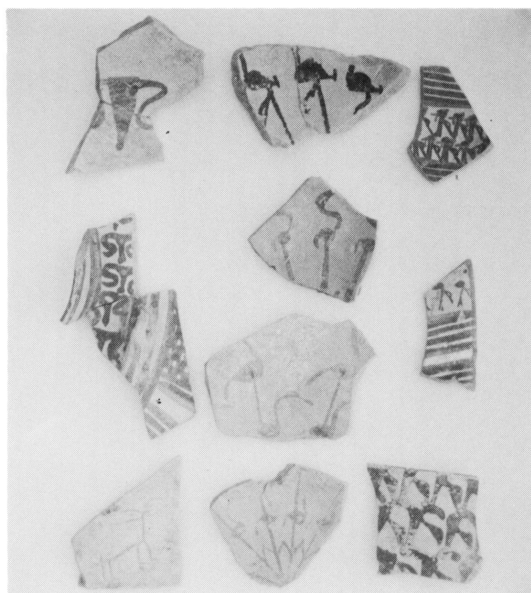
1 ウバイド期 Ubaid Period



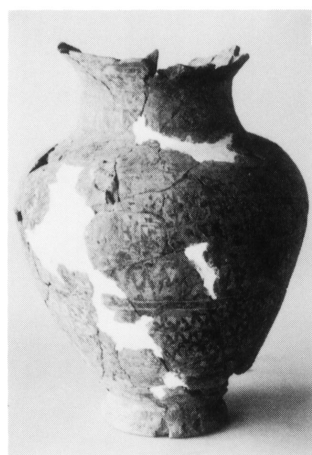
2 ウバイド期 Ubaid Period



3 ハラフ期 Halaf Period



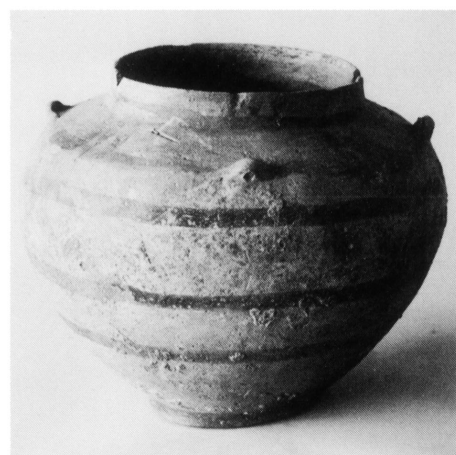
4 ハラフ期 Halaf Period



5 ハラフ期 Halaf Period



6 ハラフ期 Halaf Period



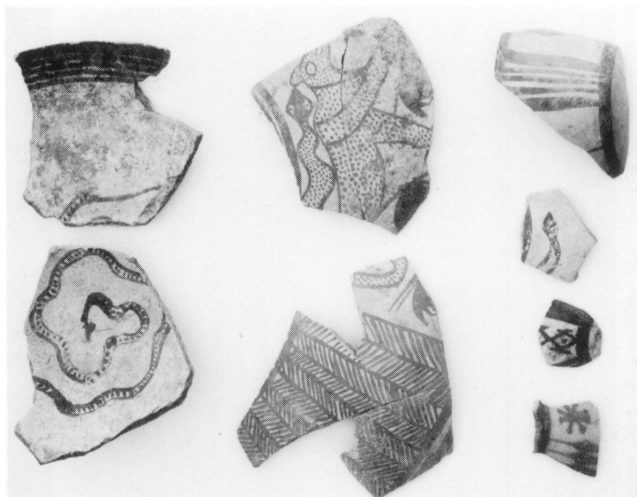
7 ハラフ期 Halaf Period



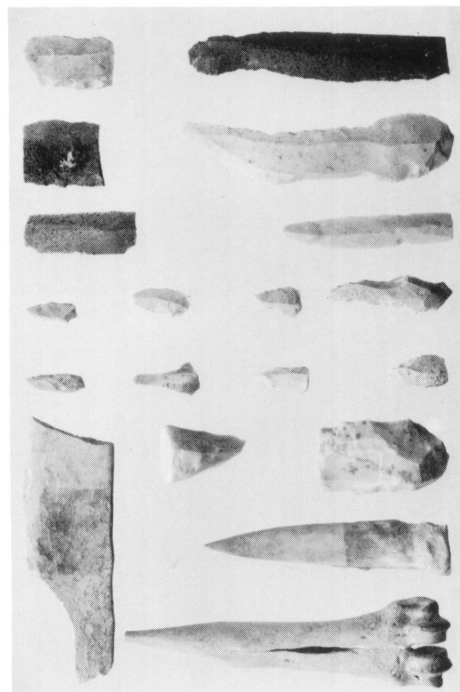
1 ウバイド期 遺構 General view, Ubaid Settlement



2 ウバイド期 土器 Pottery



5 ウバイド期 土器 Pottery



3 石器、骨角器 Stone and Bone Objects

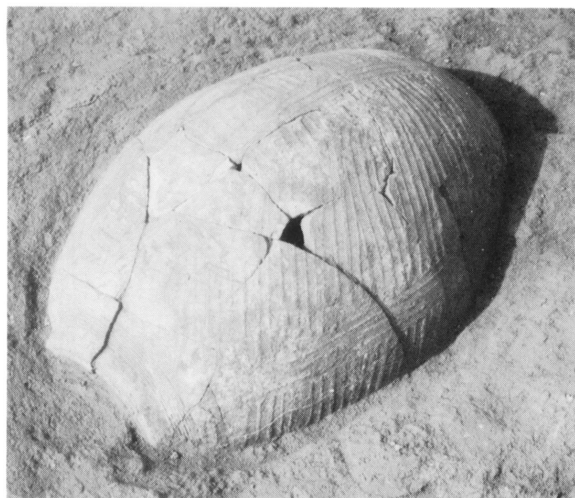


4 ウバイド期 土器 Pottery

テル・ソンゴルC, ウバイド期 Ubaid Period, Tell Songor C



1 土器窯 Pottery Kiln



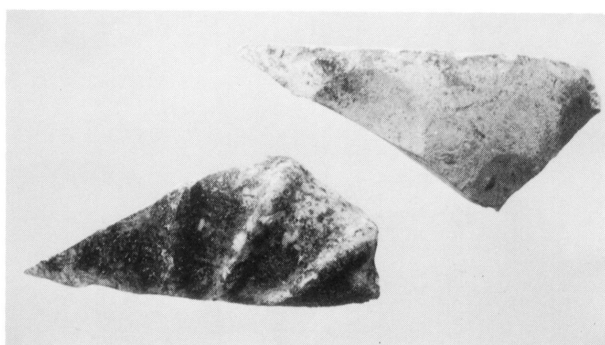
3 土器出土状況 Big Jar



2 大型土器出土状況 Big Storage Jars



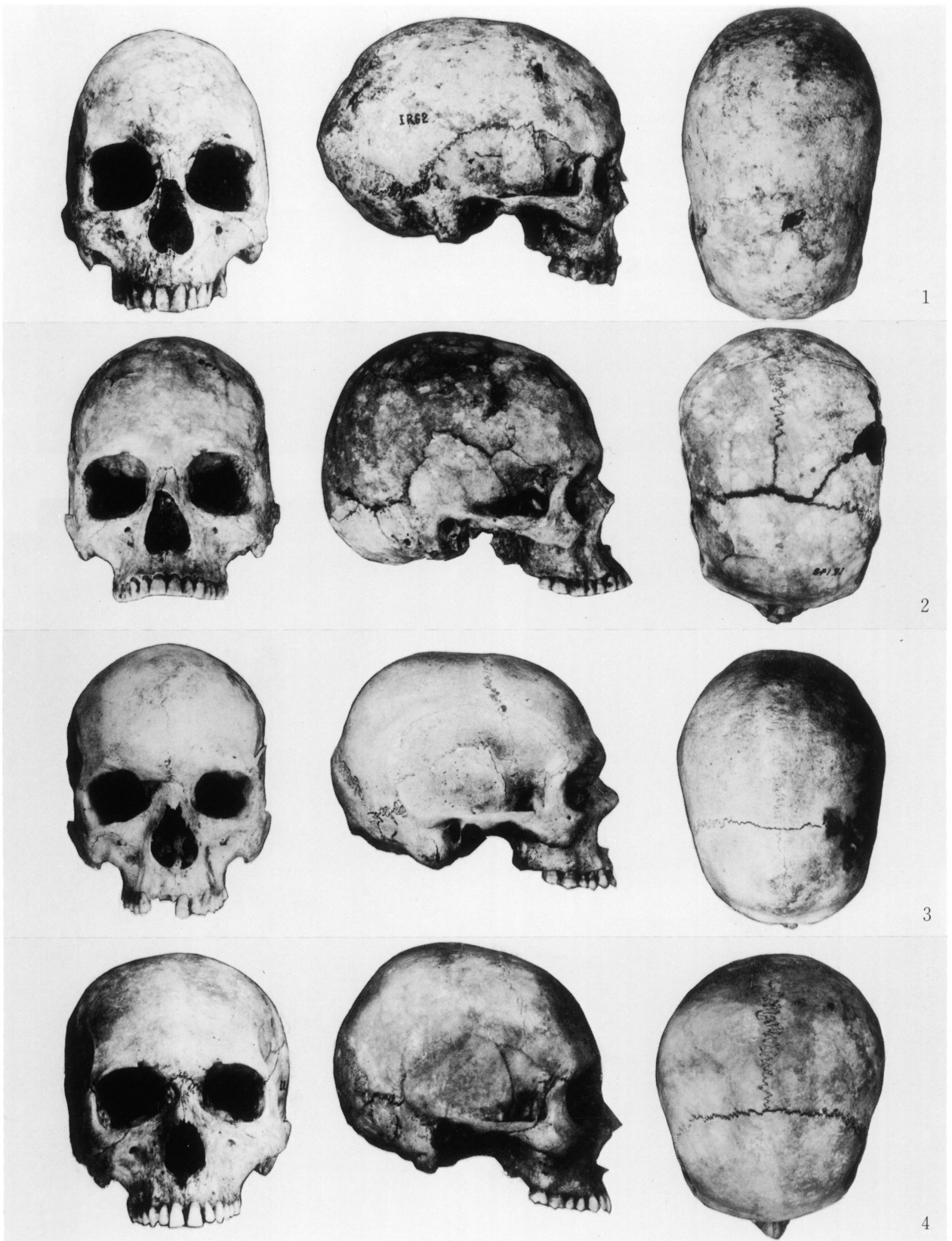
4 大型土器底部 Bottom of Big Jar



5 ガラス器破片 Glass



6 土管形土器 Drain Pipe



- 1 テル・ソングルA イシン・ラルサ/古バビロン期 Isin-Larsa/old Babylon Period, Tell Songor A
- 2 テル・ソングルA パルティア期 Parthian Period, Tell Songor A
- 3 テル・グッバ イスラム期 Islamic Period, Tell Gubba
- 4 テル・ソングルA イスラム期 Islamic Period, Tell Songor A

ハムリン出土人骨 Human Remains from Hamrin

PRELIMINARY REPORT OF EXCAVATIONS AT
GUBBA AND SONGOR

EDITORIAL FOREWORD

This research work began in October 1977, jointly financed by the Grant-in-Aid for Scientific Research of the Ministry of Education, Science and Culture, Japan, and the State Organization of Antiquities and Heritage of the Republic of Iraq, and Kokushikan University which dispatched this expedition.

Name of Party

The Japanese Archaeological Expedition to Hamrin, Kokushikan University

Research Organization (Position as of March 1, 1982)

Director

Hideo FUJII Kokushikan University

Archaeologists

Shigeo AOKI Tokyo National Research-Institute of Cultural
Properties

Hiroyuki I Kokushikan University

Hiroko KAMADA Kyoto University

Masanori KAWAMATA Kokushikan University

Ryūji MATSUBARA Nanzan University

Ken MATSUMOTO Kokushikan University

Nakao ODANI Toyama University

Hiromichi OGUCHI Kokushikan University

Katsuhiko OHNUMA London University

Tadahiko OHTSU Idemitsu Museum

To'oru SHINOHARA Okayama College of Science

Kazumi YAGI Kokushikan University

Shōichi YOKOYAMA Meguro Museum of Art

Physical Anthropologists and Geologist

Hidemi	ISHIDA	Osaka University
Sanae	KANDA	Hyogo Medical College
Masatoshi	KAWABATA	Dentist
Takayoshi	NASU	Osaka Museum of Natural History
Yō	WADA	Hyogo Medical College

Architects

Kazushi	HAMAZAKI	Kyoto University
Kiyoharu	HORIUCHI	Kumamoto University
Kazuhiko	HOSHI	Tokyo Metropolitan University
Naomi	IGUCHI	Architect
Jūgō	ITŌ	Thessaloniki University
Shinjirō	KIRISHIKI	Tokyo Metropolitan University
Bunji	KOBAYASHI	Nippon University
Naoki	KUROKAWA	Tokyo Metropolitan University
Kōji	NISHIKAWA	Kyoto University
Yasuyoshi	OKADA	Kokushikan University
Masami	YOSHIZAWA	Architect

Iraqian Researchers

Muhammad Abudul-Kadel Al-Mossa
 Mahumud Ismail Mahumud
 Ahmad Mutar Aleed
 Salahaldeen Hamed Ferid

Co-operator

Yoshimichi EMOTO (Tokyo National Research-Institutue of Cultural Properties)
 Reiko GOMI (Kokushikan University), Yoshimitsu HIRAO (Aoyama University)
 Mitsuyo Ii, Motoko INABA (Osaka University), Hiroshi MIYAGOSH (Osaka Uni-
 versity), Zenbei NAKAGAWA (Tokyo Institute of Technology), Nissan Chemical
 Industries Ltd. Central Research Institute, Hiromi OKADA (Kokushikan
 University), Institute of Simizu Construction Company Ltd., Ritsuko SHIRAIISHI
 (Kokushikan University), Chizuko TAKAHASHI (Kokushikan University), Naotsune

WATANABE (Teikyo University), Hisao USHIKI (Tokyo Institute of Technology),
Kazuo YAMASAKI (Nagoya University),

We wish to express our sincere gratitude for all the courtesies shown by the Ministry of Education, Science and Culture, the Ministry of Foreign Affairs, the Japanese Embassy at Baghdad, the Iraqi Embassy at Tokyo, various universities, companies and foundations, under the recognition of the importance of this research work in order to deepen the appreciation of friendly relations between Japan and Iraq, which have fortunately enabled us to fulfill our work.

This is an preliminary report of investigation and research conducted by this organization as well as that of the above express.

Texts were written by the following members after much debate:

Preface	Hideo FUJII
Chapter I	Hideo FUJII
Chapter II	Nakao ODANI, Hiroyuki II
Chapter III	Hiroko KAMADA, Tadahiko OHTSU
Chapter IV	Ken MATSUMOTO
Chapter V	Masanori KAWAMATA
Chapter VI	Katsuhiko OHNUMA
Chapter VII	Yasuyoshi OKADA, Kazuhiko HOSHI
Chapter VIII	Hidemi ISHIDA, Yō WADA
Chapter IX	Yoshimitsu HIRAO
Chapter X	Zenbei NAKAGAWA
Chapter XI-1	Kazuo YAMASAKI
XI-2	Nissan Chemical Industries Ltd., Central Research Institute
Chapter XII	Hideo FUJII
Editors	Hideo FUJII, Hiroyuki II,
Associate editor	Masanori KAWAMATA
Translator	Maya IKUMA

Drawings for publication were chiefly completed by the following:

Tell Gubba: Hiroyuki II, Yasuyoshi OKADA,

- Tell Songor A: Tadahiko OHTSU, Hiroko KAMADA, Hiromichi OGUCHI
Tell Songor B: Ken MATSUMOTO, Shoichi YOKOYAMA, Hiromich OGUCHI
Tell Songor C: Ken MATSUMOTO, Hiromichi OGUCHI
Tulul Hamediyāt: Masanori KAWAMATA
Topographical Map: Masanori KAWAMATA
Model of Level VII: Yasuyoshi OKADA, Kazuhiko HOSHI, Kazumi YAGI

Direction employed in this report is based on magnetic north of the time when this field work began.

The excavation was started with a tentative level point of 92m set at the foot of the tell Gubba depending on a rough map, because on the initial stage of our work we had no standard under which its sea level could be confirmed. Later on, thanks to the cooperation of German Archaeological Expedition and Belgian Archaeological Expedition, taking part in the neighboring excavations, we obtained its absolute height with the result that the height could be quite naturally corrected. That is why there are no integral numbers denoted on the contour lines of the topographical map.

PREFACE

The Iraqi government laid a scheme for constructing a multiple-purpose dam by utilizing the Hamrin Mountains region and damming up the Diyala river which goes through the very region. Thus, the area of 350 km² at the height of 108 m or less above sea level out of the whole Hamrin basin (the Saadiyah basin), which expands about 130 km to 150 km north-eastern part from Baghdad along the Diyala river, was scheduled to sink under water. Then, in the spring of 1977 the Iraqi State Organization of Antiquities and Heritage started investigations of the historic sites located in the area destined to be sunk under water. It may well be said that this area was hardly investigated, though the down stream of the Diyala river had widely been surveyed by the Oriental Institute of Chicago University before that time. In this connection, only the preparatory surface survey prior to the above had predicted the existence of at least 75 big and small *tells* in this area, ranging from the Ottoman Empire up to neolithic culture.

It is probable that this area used to be a passage connecting the north with the south in Mesopotamia and an important place linking the Iran Region to Middle Mesopotamia ever since the prehistoric age. Therefore, this area is expected to hold some clue toward the solution of still unknown problems such as the growth and change of primary farming culture, the situations of the formation-age of city states, new information on the secret race, Sumerians, and relationship between highland culture and Mesopotamian culture.

Without losing time, the Iraqi State Organization of Antiquities and Heritage, having arranged their preparatory site investigation of the Hamrin Basin, appealed to UNESCO and several institutes abroad and their governments which had been engaging in steady excavation work in Mesopotamia for help and asked them to join in their urgent excavation research under international cooperation. That is because the historic sites scattering in this area are precious enough to be regarded as common heritage of the mankind for many years, so that it was desired to carry out joint scientific studies with the Iraqi authorities through the cooperation of the archeologists all over the world.

As for the formation and development of Mesopotamian culture, we have been long interested in the cultural relationship between Mesopotamia and its surrounding regions, races and mass-migrations. From this point of view, since 1971, we have been investigating the cave groups at Al-Tar located 110 km south-west of Baghdad to clarify the relationship between the southwestern desert of Iraq and Mesopotamia. Just in the year

(1977) when we were asked to participate in the site excavation of the Hamrin Basin by Iraq, the 5th Campaign for Al-Tar was starting and an advance party had already been sent forward (that is, the scientific research abroad backed up by the Grant-in-Aid for Scientific Research in the Ministry of Education, Science and Culture, Japan). On that occasion, however, we understood that the investigation of the Hamrin Basin sites would be the subject of a pressing need to illuminate the cultural relations between the south and the north of Mesopotamia, those between this area and East Iranian Region, and mass-migrations, greatly surpassing the investigation of Al-Tar cave groups. Then, we hurriedly conducted preparatory survey in Tell Gubba after consulting with the officials in the Ministry of Education, through which scientific value of this area could be identified by ourselves. Thus, we set about our research on a full scale acknowledged by the Scientific Research Organ of Consultation in the Ministry of Education. In response to the Iraqi urging, Japanese and many other foreign parties rushed to the tells chosen by themselves according to their research subjects respectively. Generally speaking, the sites investigated by each team cover a wide range of time from the Sasanian Period through the Samarran Period. Among them, predominant in number are the site groups belonging to the Parthian/Sassanian Period, the Old Babylonian Period, the Early Dynastic Period, and the Ubaid Period. All the participants from other countries pulled together for their studies of the Hamrin region culture, frequently meeting and communicating their opinions on finds and remains with each other. This cooperation has brought about solidarity among themselves that Mesopotamian cultural heritage should be commonly cherished by all the human beings and that each of them felt proud of being a student of the archeology classroom. And then, the results were announced at the International Symposium on Mesopotamian Archeology held in Baghdad under the auspices of the Iraqi State Organization of Antiquities and Heritage three times in 1978, 1979 and 1981.

When T.I.H. Prince and Princess Takahito Mikasa paid a visit to Iraq as state guests for ten days beginning on April 20, 1979 and joined in our research work, we were encouraged by Prince Mikasa's valuable advice and guidance.

We gratefully acknowledge a favor of Dr. Muaiyad Said Damerji, President of State Organization of Antiquities and Heritage, who willingly invited this Expedition responding to our proposal with pleasure. At the same time, we express our sincere

thanks to the officials of State Organization of Antiquities and Heritage such as Dr. Behenam Abu Al-Soof, Head of the Hamrin Region Expedition, Mr. Kerim Azizu and Mr. Fadel Madhroom, Heads of the Hamrin Region Survey Office of State Organization of Antiquities and Heritage, all of whom helped us a great deal to facilitate our work, and also to Mr. Salahdeen Hamid Ferid who took part in our work as our co-oprator for three years. Furthermore, we cannot get over the tragedy that Prof. Fuad Safar, a man of generosity and learning, lost his life on his way to Hamrin on account of the traffic accident during the work. We express our regret over his death from all our hearts.

Here we deal with the outline of the results made by us Japanese party mainly depending on what we stated at the Baghdad Symposium with some additional things cleared later. The summary treated in this report is as same as the one already written for the special issue '*Sumer*' for Hamrin.

I INTRODUCTION

Tell Gubba and Tell Songor 3 hills (named A, B, C from the south) are the historic sites chosen by the Japanese expedition for excavation in the area scheduled to sink under water due to the Hamrin Dam Construction Project. These tells are situated near the sluice gate, lower than many other Hamrin sites. Mr. Nakao Odani and Mr. Ken Matsumoto visited the Hamrin Basin very often from September to October 1977 to look for some good place for excavation, and made efforts to get really acquainted with the characters of the sites in the Hamrin Basin. In those days, a sheet of the Hamrin Site Distribution Map compiled by State Organization of Antiquities and Heritage, Iraq, was ready at hand. It was September 25, 1977 that we first visited Tell Gubba. Everywhere around the tell slopes, lots of stone artifacts and blades as well as fragments of painted pottery could be collected, from which we learned that its history is traced back at least to the Pre-Sargonid Period. As its scale was rather smaller than the other Hamrin sites, such as Tell Suleimeh and Tell Baradan, we presumed it not impossible to complete our survey into the very tell within the initial short time. Nevertheless, being afraid of our inability to reach its oldest cultural level, we began to switch our survey to the low tells, Tells Songor A, B, located several hundreds meters away from Tell Gubba. Then on their surfaces, we also found more stone artifacts than at Tell Gubba. After all, Prof. Hideo Fujii, Head of the Japanese Expedition, determined on excavating Tell Gubba. It followed that we were to carry out our survey into Tell Gubba side by side with that into Tell Songor.

Having decided the site of excavation, we established our lodging house midway between Nuri-Amin Village and Baradan-Bawi Village, nearest to Tell Gubba, on October 21, 1977, and began to make a topographical survey of Tell Gubba on October 24, and then that of Tells Songor. Under this topographical survey, a low tell was found and labelled Tell Songor C. According to the survey map, a grid-unit of 5 m × 5 m was first settled on each tell with the grid rows termed I, II, III... from north to south and 1, 2, 3... from west to east, respectively. Thus, the combination of each grid number refers to the excavated location of the finds and remains and criterion of the measurement.

To the south of Tell Gubba, there is an intermittent stretch of Tulul Hamediyāt no less than 2 km up to the Narin River banks. On the north-side hill, we found fragments of glazed pottery and glass scattered, from which the existence of the sites in the Parthian Period or the Sassanian Period has been estimated. We could not find any pottery from

the south half of Tells Hamediyāt; they seem to be of natural formation. In Hamediyāt, too, a small scale trial excavation survey was done by ourselves in reply to the Iraqi State Organization of Antiquities and Heritage.

Our fieldwork together with basic studies of the finds continued until March 27, 1980 when the sites disappeared under water because of the storage of dam water. After that we went on studying the excavated materials up to September 1981 at Hamrin Site Museum in Bahizeh Village.

The research area chosen by the Japanese party covers 1 km east, 1 km west, 3 km south, and 1 km north from Tell Gubba. And Tell Gubba is situated at 34°12' north latitude and at 44°59' east longitude, 5 km upper than the junction of both the Diyala River and the Narin River, lying 12 km west from the nearest town Saadiyeh and 19 km southwest from Jalawla.

The vicinity of Tell Gubba is noted as one of the areas where lots of sites are thronging in the Hamrin Basin. There are Tell Imlehiyeh North (Tell Kherbe) investigated by the German Archeological Institute about 1.3 km north of Gubba, Tell Sabra by the Belgian party, and Tell Ababra by the Australian party near Gubba (Fig. 1).

Tells Songor A, B, C and Hamediyāt are running in nearly an arced line of 88 m height from north-east toward south-west. On the higher north-west side than this central line, there expand villages and farms, whereas on the lower south-east side than this central line, there spread moors with *Carex* growing on them. An irrigation waterway is seen to stretch far away from the upper stream of the Diyala River into the villages and farms, functioning as an indispensable water source for the villagers' life. This water also runs beside Tell Gubba and Songor, and finally flows into the Diyala River through the moors. We saw a lot of fish like carp in the stream. The dry part of the moors works as a good pasture for the villagers' sheep, goats, and cattle, and serves as a cozy home of various waterfowls, boars, rabbits, and wolves, too.

Annual rainfall of the Hamrin Basin is about 300 mm, and its rainy season lasts from November to March. This makes it possible to do dry farming on its highland, while irrigation farming is being conducted on its lowland. Temperature change there is from extreme to extreme all through the year, ranging from the hottest temperature of 50°C in the summer time to the coldest temperature of 0°C or less. Wheat and barley are chiefly grown here. And such trees as cotton, pomegranate, fig, orange, and grapes can be seen in addition to the vegetables as corn, sesame, peas, cucumber, tomato, watermelon, and okra. Since the Hamrin Basin is not far from the Zagros Mountains and the Kur-

distan Mountains, it would often be a very useful winter lodging place for the nomads to stay. And we really enjoyed a good time in February and March when plants grew and some sorts of chrysanthemums and other flowers were in full bloom there.

II TELL GUBBA

1. LEVELS AND REMAINS (FIG. 3)

As shown in the topographical map, Tell Gubba has a mound of about 80 m in diameter, and is 8 m higher than the surrounding plain. On its top there is a flat space of about 20 m in diameter. Its south side view presents a steep slope, while its north has a gentle slope with a flat portion halfway.

Our excavation survey started on October 29, 1977 and lasted until March 28, 1980 almost without interruption. It was initiated with digging 9 m wide trenches in the north-south direction along its principal axis (Grids No. 9; No. 10), followed by digging 9 m wide trenches in the east-west direction (Grids No. XII; No. XIII). And then, while gradually expanding the excavation area, our efforts were made to clarify the relationship between the structural remains hidden underneath the tell and the levels on which they had been located. Thus by the time we reached its virgin soil, seven stages of structural levels were roughly identified such as I, II, III, IV, V, VI, and VII from top to bottom (Fig. 4). And some floors sharing the same wall and the other minor levels have been further classified into a, b, c from its top. Moreover, these levels can largely be divided into the four periods of time.

Level I Ground surface... 1.5 m Excavated here were the graves in the Islamic period and a cemetery (8 m × 5 m) built of baked bricks.

Level II 1.5 m...3.5 m Here is a large building belonging to the Achaemenian period.

Level III–Level VI 3.5 m...5.5 m There are a mass of buildings in the Early Dynastic period.

Level VII 5.5 m...8 m Here is a round building in the late Protoliterate period, the earliest building in this tell.

(1) The Late Protoliterate Period, Level VII

The virgin soil around Tell Gubba is of silty loess containing a lot of gypsum. The center of its virgin soil is 90.5 m high, a little higher than the surrounding flatland. It is probably because the initial utilizers of this natural plain leveled the ground on quite a large scale that we see no great variety in height of the virgin soil all over the tell. On the virgin soil, thus leveled, those ancient people constructed large buildings based on

the concentric circle plan. All the walls of the buildings were piled up with mud bricks ($28 \times 14 \times 7$ cm apiece).

Center-Circular Platform, CW₁; CW₂

First, at the center of the tell, was constructed a cylindrical platform of 5 m in diameter and 3.5 m in height with its upper portion getting gradually wider. Then, at the central portion of the platform, a fireplace (80 cm in diameter; 80 cm in depth) was installed, around which was placed a small corridor of 50 to 80 cm in width. The corridor floor and the fireplace bottom are nearly on the identical level. And underneath the circular platform, there is a tunnel-like structure of 0.9 m wide, 1.5 m high and 3.5 m deep running directly below the fireplace (PL. 9-2). The tunnel-like structure has an entrance on its south side with a corbel vault ceiling, not linking with the fireplace bottom (Fig. 5, Section). The entrance to the tunnel-like structure, however, had originally been closed, and further 1 m deeper the second barrier seems to have existed. During our field work, we found both of them nearly broken, and could find nothing but some potsherds from their inside. It is probable that the circular platform facilities should hold the key to solve the whole construction purpose of the surrounding round building plan. To our regret, however, the direct clue leading to its solution has not been given yet. Now it is only remarkable that a spouted plain pottery (Fig. 19-6) has been discovered in an entire shape from among the ash on the fireplace bottom.

The circular platform as a core is surrounded by the five-fold circular walls (CW₃, CW₄, CW₅, CW₆, and CW₇), and between them there encircle the five corridors (C₂, C₃, C₄, C₅, and C₆). And then a moat goes round the outer side of CW₇, and a final circular wall (CW₈) stands further outside. After all, it is about 40 m long from its center to the south wall end. Thus, when extended, the structure of 80 m diameter circular plan, more strictly speaking, that of an oval plan somewhat longer in the north-south direction has been formed (Fig. 5, 64).

Circular Walls, CW₃; CW₄, Corridor C₃

The outer walls of the circular platform, CW₂ and CW₃, protrude themselves each other at their upper portions until they join at about 4 m above the floor level, thereby forming a corbel vault structure. Such ceiling structure as the above is also observed between CW₃ and CW₄ and between CW₄' and CW₅ respectively. It is therefore presumed that the 21 m diameter roof facilities were hanging between its center and CW₅.

The corridor C₂ located between the circular walls CW₂ and CW₃ has a staircase going up counterclockwise, which is positioned northward (Fig. 5, 6). Under the staircase there is a small room. The corridor C₂ is connected with the corridor C₃ at two entrances on the west side.

The circular wall CW₄ is 1.3 m thick at the bottom and 1.6 m thick at the top. Its outer circumference has nearly a circle plan of 12.5 m with a horseshoe-like projection on the north, in which there is a room. This room owns two entrances leading outside (east) and to the inside corridor C₃ (south). And the corridor C₃ itself also has two other entrances leading outside, one on the west side and the other on the south-east side. The circular wall CW₄ is rather good in preservation with its remaining height reaching as high as 3.5–4.0 m.

Circular Walls CW₄' ; CW₅, Corridor C₄

The outer surface of CW₄ has been finished with 2–3 cm thick mud plaster, which seems to have once functioned as the outer wall surface. And then directly on top of the mud plaster, there came a new addition of wall piled up with mud bricks in the thickness of 50–70 cm, which we call CW₄'. The circular wall CW₄' gradually projects itself upward, until it joins the corresponding circular wall CW₅ at its upper portion. It is thus presumed that a corbel vault structure was once formed here. Therefore we can tell that such an extension of the circular walls CW₄' and CW₅ was built in some later period. The circular wall CW₅ is 21 m in outer circumference with its 2.0 m wall thickness. It has an oval shape running along the plan of the circular wall CW₄ on the north side and forming a round projection at its edge (PL. 8–2). In the small room located at the projected edge, a well of 1 m in diameter has been found. The corridor C₄ positioned between CW₄' and CW₅ is about 2 m wide, much more spacious than the corridors C₂ and C₃. Furthermore, the corridor C₄ has three entrances toward the outside and three staircases to the upstairs. Each of the staircases is positioned left near the entrance, ascending clockwise. Some battresses are recognizable at almost regular intervals inside the circular wall CW₅, different from the others. This may mean the decoration of wall surface. On the other hand, however, it is considerable that this had something to do with the layout of the ceiling structure since the battresses get thicker and wider toward the top.

Circular Walls CW6; CW7, Corridors C5; C6

These are the structures constructed a little later. It is evident from the fact that neither the circular wall CW6 (1.5–1.6 m thick; 1 m high) nor the circular wall CW7 (2.0–2.5 m thick; 2 m high remained) stands directly on the virgin soil, but that there are some accumulated layers of potsherds in 20–30 cm thickness between the wall base and the virgin soil. That is, only the central structure had been utilized for some time, until the two-fold walls around it were constructed later on from necessity. These two walls have only partially been excavated, but the circular wall CW6, whose outer circumference is about 33 m in the north-south direction and about 28 m in the east-west direction, presents itself in an oval shape slightly longer toward north-south. The circular wall CW7 also takes an oval shape, measuring about 47 m in the north-south direction and about 40 m in the east-west direction in outer circumference. The corridor C5 built between both walls is rather narrow, 1.5 m wide, whereas the next corridor C6 is wider, 3.0–3.5 m wide, over top of which it seems to have had no ceiling.

Circular moat and Circular Wall CW8

The above-mentioned circular wall CW7 has been built very close to the side of the circular moat. This wall seems to have been newly constructed in order to reinforce the moat whose function had almost gone out of use, half-buried after many years. It is probable that the moat, which has a U-shaped sectional plan of 3.5–4.0 m wide and about 2.0 m deep, used to encircle the whole tell. On the east side, however, we observed portion kept from digging so as to use it as a bridge across the moat (Fig. 5, PL. 5). The circular wall CW8 starts about 6 m distant from the end of the moat. After all, the wall itself has been constructed in four-fold system, some part of which is no less than 10 meter thick. Inside the wall, some small rooms with stairs and some staircases have been identified (Fig. 5,). This is apparently resulted from the wall's gradual enlargement made from inner toward outer side. We see some space open between the circular wall CW8 and the outer moat, where various sized rooms have been confirmed utilizing the circular wall. These rooms and the inner part of the circular wall CW8 appear to have been constructed at the same time. Moreover, it is partly observed that the walls of these square rooms are positioned on the accumulated mud covering the upper surface of the moat, from which it is presumable that the circular wall CW8 was constructed after the outer ditch had been out of use just as the case of the circular wall CW7.

Levels Observation

This round building, as already mentioned, was not completed at a time, but after the repetition of remodeling and expansion it has finally given such a whole view after a certain time advanced. Our excavation survey observes that this round building has gone through at least three stages of its structural processes (Fig. 64). The circular platform and its outside circular walls CW₃ and CW₄ are in Period 1 (VIIId) because they are constructed directly upon the Virgin Soil. It is clearly observed that the floor levels inside the buildings in Period 1 are elevated three times, which can correspond to their enlargement processes a great deal. And in Period 2 (VIIC) the circular walls CW_{4'} and CW₅ were additionally constructed. There is a certain evidence of their having been severely burnt down and the fire trace has spread up to the corridor C₄. It is evident that the moat comes from either Period 1 or Period 2. Stratigraphically speaking, however, we have not come to a conclusion yet, though it seems natural that the moat was constructed in Period 1 if seen from a plane angle. The floor (VIIb) in Period 3 has the evidence of fire on much larger scale than the floor VIIC, leaving white pumiceous ash accumulated on it in 30 cm thickness. The big fire on the floor Level VIIb ranged from the center through the corridors C₆ and C₇. The final floor (VIIa) happens to be that of the terminal period of the round building. Broken fragments of the mud bricks have been thickly accumulated on the floor. The floor level VIIa is about 1 m higher than the initial floor level (VIIId). Here, the entrance has become smaller with the dimension of 0.8 m height and 1.0 m width, piercing the circular wall and connecting each corridor. Thus, with the final floor VIIa, the lower facilities of the round building came to be abandoned at length.

Pits and Rubbles

What is interesting in thinking about the characteristics of the round building is the existence of some pits found underneath the floors of the corridors C₃ and C₄ (Fig. 5). They are 0.6–1.2 m in diameter and 0.6–1.5 m in depth, the shape of which looks like a flask with a small mouth and a large bottom. Some of their inner walls are piled up with mud bricks; others have bricks laid on the bottom. As for the uses of these pits, they were probably intended for underground grain store, drain holes, pitfall-like facilities against enemy invasion. Furthermore, they may have been some facilities related to those of the upper structures, but we have not arrived at any conclusion about them yet. Especially in C₄, these pits seem to be arranged nearly at regular intervals, gath-

ering around the entrance. The earth buried inside the pits contains sandy soil or the fragments of the mud bricks, where we could identify few finds. Also in the corridors C6 and C7 we saw several pits, among which our attention was directed to the one discovered on the east side of the corridor C6 (Fig. 5-P 14, PL. 11-4), measuring about 1 m diameter and 2.3 m depth. Inside the pit, we found sixteen human bodies lying one upon another. All of them were found lying awkwardly, from which we presume that they were thrown away into the pit after death. First, several infants were probably thrown away, and then adults and infants were dumped down at random. Together with the human remains, rubbles and burned wooden fragments were also thrown away into the pit. Furthermore, mixed with a number of potsherds, an entire painted pottery (Fig. 12-1) and a spouted pottery have been discovered near the bottom of the pit. Many of the human bodies were children, while only five or six bodies were presumed to be adults.

Inside the corridors C3, C4, and C5 and the moat, a lot of human head-sized rubbles were discovered. On the east side of the moat, over which there lies a land bridge, we found 150 rubbles in all. The rubbles inside the corridors were found lying on the floor surfaces, mixed with the mud bricks which had presumably fallen into pieces, gathering around the entrances and staircases. Anyway, little is known as to why such rubbles have fallen into the inside portions of the structures. Did the rubbles, which had been originally placed on the roof for a certain purpose, come to fall off with the collapse of the structures? Or did some enemies throw the rubbles at their insides from the exterior? No such rubbles or the like are to be found around this tell, from which it is obvious that the rubbles must have been carried here from a distance anyhow.

Circumstances of Finds Under Excavation

The corridors C2, C3, C4, and C5 were scarce of the facilities and finds with which it is known that people had their normal life all through Levels VIIId-VIIa. But the existence of some big coarse jars standing on the floors strongly suggests that grain used to be chiefly stored there. All through the levels of the corridors, carbonated wheat grains were found scattered. And we found a lot of grains still remaining in some of the coarse jars. In the meantime, it does not seem that the corridors were used for only the purpose of storage, for we have found a lot of bone objects and stone spindle whorls in the corridor C4. This may reveal that the corridors would also function as the place of weaving and spinning. Furthermore, as shown in the case that two copper axes,

one copper chisel and one copper spear head were found stored together in the inner wall of the circular wall CW₅ (PL. 14-1), it is also believed that they were used for storehouses of precious treasures as well as for those of grains. Around the rims of the coarse big jars were often seen such patterns as cylinder seals were pressed by rotation (PL. 15-5~8) which may mean the identification of their owner or dedicator. Besides, red and black colored pottery, plain pottery, stone vessels, mace-heads, stamp seals, cylinder seals, shell beads, and stone beads were discovered. The discovery of stone implements such as sickle blades was rather scanty in the center of the round building (inside the corridor C₄ or inner part than that).

(2) The Early Dynastic I Period, Levels VI, V, IV, IIIb

As mentioned above, the lower facilities of the round building in the Protoliterate period thus fell out of use after Level VIIa had collapsed at last. Over Level VIIa broken fragments of mud bricks were found accumulated in 1-2 m thickness. Yet, the round building was by no means entirely abandoned. While re-utilizing the upper portion of the remaining round building and the circular walls, a new building construction thus started. The mud bricks used here got slightly bigger, 33~30×15~16×8~9 cm, than those of the previous period.

Still in this period the lower central portion of the round building served as a core of the tell, having 12 m in diameter and a slight elevation in height. In this connection, various rooms were built in a radial way encircling the central portion (Fig. 8, PL. 11-1). Is this partly because the lower circular platform was considered as a sacred center, or partly because it happened to have a certain mound there? Just as this center, the south and west parts of the circular wall CW₈ of the round building had not broken, but had still been utilized up to the later generations.

Toward the end of the Early Dynastic I period, however, some parts of the round building came to be partially cut and small rooms were newly constructed upon its core. Yet, basically they were so constructed as to avoid the very core. The buildings in this period show such a remarkable change as they became rather small and independent in groups unlike those of the gigantic systematic method in the previous generation.

For example, Fig. 8 shows a plan of the north-east part of the tell. As recognized in the south and center portions of this plan, small rooms of 1~3 m per side are arranged in a radial plan with a large structure of not less than 10 m long as their center. The large building seen on the south has the dimensions of about 11 m×4 m in the ratio of

nearly 3 to 1 and has its entrance in the middle of the longer side. There is an ample space observed in front of the entrance. Inside the building, we found a offering table (?) of 1.5 m long and 0.7 m wide piled up with mud bricks, and at the northern part a fixed stool-like facility on which things can be placed has been uncovered. And adjoining to this building, we discovered a big building of trapezoid plan. Its entrance is on the east side (longer side), just at the inner left side of which a small table-like fitting is observed on the wall. There are some traces of fire on the several spots of the floor surface inside the building, and a big coarse pottery was found built in the floor. The another big building seen at the center of this figure is about 11.5 m long and about 5 m wide and it has a single room with its entrance on the longer side, just as the above-mentioned building. There are very few finds uncovered from here; only two coarse jars were found built in the floor of this room. And then a square oven has been identified at the south side of the entrance outside the building. This is the only oven found here. Throughout the Early Dynastic I period, however, it is strange to notice that such square or round ovens have been found in quantities.

Several small buildings are arranged around such a large building which served as a core. Many of the small buildings are provided with two rooms, and some have only one and others have four to seven rooms arranged in a consecutive line. Most of them are so constructed as their floors are laid over several foundation walls running in parallel, on which walls are constructed (Fig. 9). Thereby, the place under the floor has a ventilator-like function running parallel with each other. This ventilator is 10–25 cm wide and can be kept covered with a piece of mud brick. Both sides seem to have been originally kept open, some of which are found clogged with potsherds and big stones. The wall of the building is no more than half the thickness of the mud brick (15–20 cm thick). Furthermore, many small rooms are installed by utilizing a foundation, upper side of which is divided into four to six. It is evident that these rooms were not fitted for dwelling purposes because of their exceedingly thin walls. It is therefore considered that these small structures may have worked as an assemblage of granaries, judging from the situations that finds were scarcely unearthed, ventilator-like installations were located under the floor, and some carbonated wheat was found around the structures.

The passages between the houses are partially 2 m wide, but are generally less than 1 m wide for people, horses, and donkeys to narrowly pass through. On the surface of the passage, ash and potsherds have been thrown away, and we sometimes saw

pebbles laid there. Through the current excavation we could collect numerous painted pottery, most of which were their fine fragments laid on the passage. In particular, this was remarkable around the large buildings.

On the levels belonging to the Early Dynastic I period, small buildings decreased from Level VI into Level IV along with the advance of time. Instead, the rooms supposedly intended for dwelling increased in number. Thereby, the concept of the round building as a core was gradually lost, until it was on Level IV that a thick wall came to be built with the portion of the center circular platform largely leveled down (Fig. 8). Although the whole view was still slightly under the rule of circular shape, irregular walls in direction began to appear. And at last on Level III there came the walls with their directions utterly ignored.

(3) The Early Dynastic III Period, Level IIIa

After the Early Dynastic I period, the village in Tell Gubba was markedly deserted, but still a certain kind of dwelling seems to have been kept on. Most of the building remains in this period were obscure owing to the leveling carried out for the later buildings constructed in the Achaemenian period. This can be suggested from the evidences that a number of potsherds were discovered from under the Achaemenian floor and on the slope of the tell, and that there existed a big well of no less than 3 m in diameter with the underlying remain cut through (Fig. 8, Well).

Furthermore, from the inside of the trench set for the confirmation of the virgin soil about 25 m away east from the edge of the tell, we could find a grave belonging to this period. The full particulars of the grave have not been cleared yet because the trench was narrow. The grave lay at the depth of about 2 m below the present ground surface. It has a hole further deeper on its east side, whose form is rather indeterminate, measuring over 5 m long and over 2 m wide. It seems that the deeper portion would be surrounded by mud bricks and a mound of earth would cover the surface. As burial goods, forty pottery were discovered inside the grave hole (Fig. 21, PL. 11-3). And together with them, a bivalve in which black matter was stuck has been uncovered here. Some human bones were found broken to pieces, the burial direction and method of which are still unknown.

(4) The Achaemenian Period, Level II

On the elevated tell caused by the buildings belonging to later than the Early

Dynastic III period, the Achaemenian buildings have been constructed. Prior to their construction the ground-leveling was carried out on a large scale. Hence, all the building levels which were supposed to exist during the periods, had utterly disappeared. After the leveling had been completed, some buildings were built in the direction nearly diagonal to the grid used for facilitating our survey. As for their building material, big rectangular mud bricks were used with their standard type of $47 \times 25 \times 10$ cm apiece.

Central Building (Fig. 10, PL. 15-2)

This is a square building of 16 m in the north-south direction and 15.5 m in the east-west direction with the walls on four sides having about 2.5 m thickness, and is located at the center. There is an entrance at the east side of the south wall, whose interior is divided into three slender rooms. The partition walls are much thicker than the room open spaces. All the floors of those three slender rooms are thickly covered with pebbles (15-20 cm in diameter) to make them hardened, and the wall surfaces inside the rooms are also decorated with mud-plaster. Among them, its middle room is rather wider with no pebbles covered on its east half. A staircase going upstairs seems to have been fitted here. There is a possibility of some structures having existed on the roof because the lower walls are too thickly and solidly constructed. It was probably easy to build a vault ceiling with mud bricks over the slender rooms of less than 2.5 m wide. At present, however, little is known as to the upper structure, since even the best-preserved portion is not more than 2.2 m high.

Outer Wall and Corridor

Outside the central building, a 3.0 m thick wall goes round, where a corridor of about 5 m wide is constructed. Nevertheless, it was unable to grasp its precise outline of the west side, because it happens to be the very end of the tell. Once its restoration has been over, it would draw a silhouette of nearly a square in the dimension of 32 m a side. At the center of this east outer wall, there is a main gate of 1.7 m wide, to which at least two stages of terraces are ascended from the foot of the tell. The surface of the upper terrace is hardened with solid wall body, and on both sides just in front of the gate we saw the walls, which directly cross with the outer wall, projecting over the terrace. It looks as if it were a castle gate. In the inner side of the north projecting wall, there is a bench-like facility, inside of which is denticulately partitioned with its front floor hardened with rubbles. Such a bench-like facility as often seen in the ancient

Mesopotamian architecture was installed for putting or storing things there.

After passing through the gate we arrived at a corridor, where we saw an evidence of utilization by partitioning it in many ways as our work advanced. It is still uncertain, however, whether or not this was of the original design ever since its earliest construction. It is rather presumable that this corridor used to be the one encircling the central building. A big vault ceiling probably used to be hanging all over the corridor or over one side with its half partitioned. Here and there, we found broken fragments of mud bricks which had been piled up in the vaulted way.

Niche Facilities

Although the buildings mentioned heretofore are all simple and symmetrical in outline, there are somewhat unique devices recognized on the outside wall surface. The outside wall surface has niche-like recesses (1.6 m wide; 0.5 m deep) at regular intervals giving variety of the wall surface. And at the center of each niches there is a gap of about 20 cm wide which is slanting down from inside of the wall toward its outside. Its original function is considered to have been an arrowshoot, through which arrows had been shot from behind the castle wall. Here, however, such functions having been lost, they were probably used for wall decorations. Those niche-like recesses can be recognized at three parts on the north wall and the east wall of the central building, respectively. The other two walls may also have been applied with such decoration. But just as seen in the case of the niche-like recesses located at the south end of the east wall, its interior was denticulately partitioned with the wall coated in later days, thus serving as a secret storeroom at a time. Furthermore, two niches found on the north wing of the east wall are the ones well preserved. According to the original design, there used to be the niches at three parts respectively on both sides of the gate. But, in a certain period, there emerged projecting walls at both sides by the gate with the niches located nearest to the gate blocked. Judging from their building process, these projecting walls beside the gate might be regarded as a posterior addition. Nevertheless, the mud bricks used there are almost as large as those used on the central building and the outer wall, so little difference in time seems to lie between them.

On the other hand, the wall supporting the terrace uses square bricks of $33 \times 33 \times 10$ cm apiece, and its wall direction is a little differently arranged from that of the above-mentioned building. Therefore, a certain time lag may lie here. This wall was thus probably constructed in order to repair the worn-out terrace in front of the gate and

the outer wall. It was found stretching as long as about 30 m east and north. Its wall thickness was about 1 m while its height was not higher than the terrace surface, some part of which was buried about 2 m deep underground. This building seems to have been used for fairly a long time; the floor surface of the corridor surrounding the central building has been raised 50 cm or more. Perhaps at a certain time close to the termination of the central building, its slender rooms were burnt by a big fire and not only the mud plaster but also the inner side of the very wall was completely destroyed.

(5) The Islamic Period, Level I

It is presumed that the big buildings built in the Achaemenian period had been utterly destroyed sooner or later than the Islamic period came. Up to this time, however, it is still unknown how they got through the Parthian and Sassanian periods. During our field work, we have confirmed two graves supposed to be in the Sassanian period. One of them was discovered on the west side near the top of the tell, and three slender-neck glasses were found as burial goods. The other was discovered on the north-east side of the tell, and from the inside of the grave pit such iron implements as axes, sickles, swords and nearly an entire shaped plain pottery have been uncovered as burial goods (Fig. 8, Grave). And then, near the top surface of the tell numerous blue-green glazed potsherds, characteristic of the Parthian and Sassanian periods, have been collected. Hence, it does not necessarily follow that no daily life was done there in those days.

In the Islamic period, people utilized the tell solely for graves. From its ground surface to the depth of 1.5–2.0 m we found numerous grave holes dug. These are the double-staged pits, most of which are without upper facilities. But we can sometimes see some foundation walls built of burnt bricks over the graves (PL. 15–1). It seems that they were not utilized as graves in later years, but if any they were used limited only for infants' graves. In recent years, they have been completely abandoned, and have been feared as the hill of "Zin (Spirit)" by the villagers.

2. FINDS

(1) Pottery

As the result of our current excavation survey, we could unearth a great number of finds. Among them, the discovery of pottery was predominant, which is classified

into painted pottery, plain pottery and coarse pottery. All through the levels of the round building in the Protoliterate period, finds were uncovered, most of which came from the floor surfaces of the building, inside the pits and the moat.

The red and black painted pottery known as 'Scarlet ware' is a typical example in the Early Dynastic I period. At Tell Gubba we could find about 300 entire and nearly entire shaped ones of this kind. Such painted pottery were found from various places such as inside the rooms, on the passages, and from inside the pits. And on Level VI, which is thought to be rather early in the Early Dynastic I period, the number of pottery excavated from the pits was quite predominant, occupying more than half of the total number of the painted pottery. For example, Fig. 8 shows a square pit of $1.0 \times 1.5 \times 1.0$ m (Pit). There we found numerous plain pottery and coarse pottery dumped down together with forty or more painted pottery. Inside the very pit, potsherds were too thickly accumulated for even the sand to be allowed. On Level VI several other pits like this have been uncovered. In addition, a lot of pottery have been laid on the passages. Also on Level V such tendency is still strong and we could rarely see any finds inside the buildings. In most cases, they were thrown away on the narrow space between the buildings. On Level IV, thanks to the fire spread all over the tell, most of the finds existed at the locations where they originally used to be. Here the painted pottery and the other finds were chiefly unearthed from large rooms, many of which were found around the square ovens fitted inside the rooms.

1) Painted Pottery

Late Protoliterate Period (Fig. 11; Fig. 12)

The painted pottery belonging to the Late Protoliterate period (Jamdat Nasr) are to be largely divided into monochrome and polychrome pottery.

Monochrome Pottery (Fig. 11-1, 3, 6, 7)

This kind of pottery was used all through the time on Level VII, the coloring of which is dark-brown (1), dark-green (3), brown, or orange-brown (6, 7). Many have a gentle swelling on their body, and it is generally difficult to distinguish the shoulder from the bulge, since their largest dimension usually happens to be around the middle of the bulge. Short necks, bevelled rims, and slightly roundish flat bottoms are their features. There are many spouted vessels. In the meantime, we can find few vessels with four pierced lugs (3). Their fabric is of good quality almost without sand

mixture. They are generally thin in their vessel wall with their inside portion scraped up to just under the neck with a spatula. Their outside portion is also made thin with a spatula to the bulge or lower part, and then all the surface is slightly decorated with light-green or greyish white slip. Painted patterns have been arranged on it. There are zigzag, punctate, and plover patterns between two parallel horizontal lines drawn just below the neck. Geometric designs are recognized at three ports on the shoulder. As seen in 1, some have only simple parallel lines. 6 and 7 show the patterns most frequently used in monochrome pottery.

Polychrome Pottery, Type I (Fig. 11-2, 4, 5)

Their vessel forms and fabric are similar to those of the above-mentioned monochrome pottery. These three vessels have been altogether handmade without using wheels. 2 is a wide mouth spouted jar with its maximum width larger than its height. It is colored black and orange-red, which is applied after burning. The painted patterns are of geometric and vertical wavyline ones probably describing snakes or flowing water. It is very thin in its vessel wall and its inside is carefully scraped. 4 has a global bulge and a contracted slender neck. We see dark-red painted patterns on the shoulder, and greyish yellow cross-hatched patterns are drawn in the triangle lined with red. Now that such yellow color is hardly identified at any other occasion, this may have caused by the secondary burning. Both the inside and outside of the bulge are spatula-scraped. 5 is a unique vessel having a square body and a round neck. Its coloring method is the same as that of 2, and cross-hatched patterns are drawn on the body. This seems to have been modeled after a basket or the like. Furthermore, two fragments of such similar square pots as this have been discovered in the round building.

Polychrome Pottery, Type II (Fig. 12-1~6)

They have the features of what is called the Jamdat Nasr type pottery: the wide bevelled rim, the upright slender neck, the small carination on the high shoulder portion, and the distinct ridge clearly dividing the body from the shoulder. Every vessel has its vessel height and its maximum width in the ratio of 1 to 1, with the maximum width located at the middle of the bulge or slightly lower than that. Their maximum width ranges from 20 cm to 40 cm, whereas most of the neck diameters are standardized about 10 cm irrespective of their vessel size. There are no spouted jars among this type. Four lugged jars are rarely recognizable: one has pierced triangles lacking

corners (4), and the other has non-pierced round decorative studs (6). The wheel is used for making every shape, and the sand mixture in the fabric is much more than those of polychrome pottery Type I and monochrome pottery. Some vessels have greyish cream color and others have reddish brown pink.

Plum-red or dark red is painted all over the pottery except a portion of their shoulder, where dark brown or blackish brown geometric designs are applied. The center of the pattern painting is on the shoulder. Among them only two are the ones painted down to the bulge (4). As seen in Fig. 12-5, which is typical, their patterns are of plants (2), lattice, parallel-lines, and animals (1). But the animal patterns are rarely seen. Moreover, the patterns observed in 1, 2, 4, and 6 were to be survival to those of the Diyala-type painted pottery in the next Early Dynastic I period. Among them, 2 and 4 are considered to be the ones belonging to the transitional¹⁾ period from the Jamdat Nasr into the Early Dynastic I period.

The Early Dynastic I Period

In the Early Dynastic I period, the painted pottery enjoyed prosperity in greater variety in their vessel type. The pottery painted red and black were called "Scarlet wares" (or Diyala type painted pottery) because of their clear coloring, and were widely distributed over the Diyala valley and other areas. Also in the Hamrin basin, the existence of this sort of painted pottery has been confirmed at ten or more sites,²⁾ which is expected to contribute greatly towards new chronological studies. In particular, at Tell Gubba there are three levels where the Scarlet wares have been found. And we have studied so far that there are slight differences in type and pattern of the pottery according to the levels where they were unearthed. Thus the painted pottery are to be summarized in the order of level as follows:

Level VI (Fig. 13; Fig. 14)

The maximum width of the painted pottery unearthed on Level VII was 40 cm or so, while that of the painted pottery on Level VI was not less than 50 cm, as shown in Fig. 13-1, 2, 3. The quantity of spouted pottery got larger here, too. Such decorative ones as fitted with winged lugs have appeared (Fig. 14-1, 2). Although the big-sized pottery generally have no clear distinction between the shoulder and the body, they have wide shoulders just like the ones discovered on Level VII. In the meantime, the maximum width of the small-sized pottery, which had been around the middle or lower position of

the bulge on Level VII, markedly came to move upward, thus resulting in the appearance of a clear carination between the shoulder and the body. The four-lugged jar have been in use successively from the previous generation. Some of them have horizontally long lugs (4), and others have vertically pierced lugs (7). In addition, some are fitted with the lugs themselves on the vertical position (5). There have appeared neckless spouted jar (2) and colored animal-shape vessels (9).

Most pottery have been formed by wheels, while only big-sized ones have been produced through the piling up method first and then using a wheel as their finishing. The mixture of sand particles in the fabric is more than that on Level VII and the vessel wall has become rather rough in texture. But exceptionally fine fabric resembling that for monochrome pottery on Level VII has been used only for 6 and 8. Many of pottery color are greenish or the like, while they are rarely pinkish.

With regard to the painted patterns, we also see geometric designs mainly on the shoulder just as those in the Jamdat Nasr period. Some animal and plant patterns are also adopted here. On Level VII red panel was broadly used on the shoulder, but here red panel is getting narrowed, only to be used as panel partition. The winged single-lug jar (1; 3) and the small four-lug jar (5; 7) are mostly provided with their patterns on the bulge or lower positions giving their motifs rather on the shoulder. In the meantime, however, very few big jars have their painting on the body (PL. 15-2). Their painting was done with the vessel surface made smooth while applying the slip all over. We sometimes saw such patterns as a part of the slip was wiped out in horizontal or oblique to have it patterned (Fig. 13-3). There are various colors such as dark red, purple-red, orange-red, brown and so forth. And blackish brown and dark brown, both of which had been previously used, turned to black or the like here. Parts of the patterns identified here are the ones continued from those of the Jamdat Nasr period. On the other hand, such new patterns as butterflies (2) and horizontal intersected zigzag (7) have also been devised. Small-and medium-sized pottery have a red-bordered triangle on the shoulder, in which slantingly cross hatching patterns are arranged. And such patterns are sometimes seen continuously and some are arranged with animal patterns (fish) as shown in Fig. 14-8. Moreover, we found some vessels whose body is colored red all over like the polychrome pottery Type II in the Jamdat Nasr period, which have not been figured yet, though.

Level V (Fig. 15; Fig. 16)

Types and patterns here have followed the former ones on Level VI. No marked

change can be recognized in them, but the big-sized pottery have their shoulder area lessened. Some have an incised ridge right below the neck (Fig. 15-4), or is provided with four decorative projections here (Fig. 16). Fig. 15-3 shows four-lugged jar, where horizontally long lugs and triangle lugs are alternately arranged.

Here animal and plant patterns have been painted more frequently than those on Level VI. Fig. 15-1, 2 and Fig. 17-1 show the typical specimens on Level V. The shoulder painting patterns seen on these three vessels are slightly different from those on Level VI; here parallel lines and butterfly patterns are newly added between the triangle patterns bordered with red. Further, such continuous loops observed on the body of Fig. 15-1 were rarely discovered on Level VI. These are the ones which have become popular on Level V or later. In Fig. 15-3, geometric patterns and red belts are arranged at regular intervals, on the margins of which we see some birds catching fish. This vessel is nearly identical with the one in Fig. 19-6 (Incised jar) in type.

Fig. 15-4 shows a big pottery measuring 42 cm in diameter with geometric patterns arranged on the shoulder. The body is partitioned with four wide panels of geometric belts, where tied bull and feeding bull are drawn in various ways. Big fish are painted on top of these cattle.

Fig. 16 shows the one of the best specimens from Level V. The shoulder is finely partitioned with red belts, the insides of which are carefully drawn with fine lines of a little different patterns respectively. Its body and neck are likely to have been painted red all over.

Level IV (Fig. 17; Fig. 18)

No remarkable change in vessel shape has been recognized here compared with the finds unearthed on Level V. But here we could hardly see the four-lugged pottery and monochrome pottery which had been prevalent up to Level V. Speaking of the transition of the vessel shapes, big-sized pottery became taller in vessel height, and so slenderer as the time advanced from Level VI toward Level IV. Small-sized pottery show no such remarkable change as this. All the vessel formation was done with a wheel. As shown in Fig. 18-1, such thin vessel walls have appeared in big-sized pottery, too, probably resulted from more advanced technique. Among the newcomers, there are deep bowls (Fig. 17-5) and spouted pottery with a basket-handle (Fig. 17-7); were found concentratedly on Level IV.

As for their colors, the dark red ones, which had been identified on Level VI and

Level V, became fewer, replaced mostly by the orange-red. In the meantime, the quantity of the painted pottery excavated here has exceedingly decreased as well.

In addition to the geometric designs having prevailed up to that time, such descriptions of nature as cattle, sheep, goats, wild boars, horses or donkeys, waterfowls, human beings, fish, trees and plants have appeared. In fact, some of them were drawn combined together. We could even see some patterns from which a certain story had been intentionally suggested (Fig. 18-2). Together with them, such patterns as butterflies (Fig. 17-4; Fig. 18-1), birds (Fig. 17-4, 5, 6; Fig. 18-2), vertical parallel lines and vertical waveforms (Fig. 17-6; Fig. 18-2) have come frequently employed. Especially, the painted pottery resembling Fig. 17-4 and Fig. 18-1 have been discovered from various sites in the Hamrin basin. As seen in Fig. 17-4, 6 and Fig. 18-2, the way of drawing birds on Level IV is that of not discriminating a tail from a wing, different from the cases on Level VI (Fig. 13-2; Fig. 15-3). Moreover, we can tell that the realistic description of animal and human beings has been more powerful here because each subject was kept under keen observation. Fig. 17-4 shows the one whose shoulder is provided with three decorative small projections. Fig. 17-5 is the one whose patterns are drawn upside down as the vessel itself was made reversed when applying patterns. The human figure drawn in Fig. 18-2 has an animal-like face, seizing the heads of two animals by both hands. He has untidy hair, grows a long beard and is clothed in a straw-like cape around the lower half of his body. The animal (goat), which is mounted by the human figure, also has shaggy fur. The painted pottery, which had been prevalent from Level VII up to Level V, were rapidly dwindling later than Level IV. Thus, a new era dawned in Tell Gubba at last. Almost no painted pottery have been excavated on Level III, except that an entire shaped painted pottery was found from the grave, which is supposed to belong to the Early Dynastic III period, located at the foot of the very tell, as to which we have already mentioned (Fig. 21-2).

Fig. 12-8 shows a vessel of the kind which are collectively found on Level VI b, and is different from the Jamdat Nasr wares or the Scarlet wares. This kind has the feature of nearly global bulge and the outward curved rim like the figure '<', the formation of which is done by hand without using a wheel. The excellent fabric is used for this vessel, whose outside surface is covered with slip.

2) Plain Pottery

The plain pottery in Fig. 19-1~6 have been unearthed from the round building

(Level VII). There are a semi-global bowl (1) and the one whose side stands nearly upright (2). The slender cup has a narrow base, getting gradually wider upward (5). The spouted jar (6) has been found dedicated on the bottom of the fire place located at the center of the round building. Small pots like the one illustrated in Fig. 19-4 have been unearthed from the round building in quantities. And the four-lugged jar (Fig. 12-7) was discovered from the floor of Level VIIc. It closely resembles the polychrome painted pottery Type I unearthed from Level VII as already mentioned.

Fig. 19-7~13 are the ones belonging to the Early Dynastic I period (Level V; Level VI). The bowl-type vessels 7 and 8 are a little larger than the specimens from Level VII, and their rims are slightly bent inward. The vessels 9 and 10, which have projected ridges inside their rims, are thick in vessel wall and are coarsely made. This sort of pottery have been discovered all through the Early Dynastic I period. They are too heavily produced to be used as containers. Therefore, such pottery are considered to have worked as lids for jars. The solid foot goblet (11) is bigger than the one unearthed on Level VII with its steadier base. Its body slants outward from the portion a little higher than the middle just like the shape of trumpet. 12 is a wide mouth spouted jar whose outside and inside surfaces are finished with a spatula. The incised four-lugged jar (13) resembles a great deal the painted pottery on Level V (Fig. 15-3). Incised ridges are arranged between each lug and on the bulge.

Fig. 20-1~5 came from Level IVb. The conical bowls 1 and 2 are much bigger than those from lower levels, whose rims are slightly bent outward. 5 is similar to the pottery discovered on Level V at Nineve³⁾ in North Mesopotamia. This uses fine fabric and is colored grey. 3 is also a grey ware, decorated with circle incision on the outside body. These pottery 5 and 3 and the like have been collectively discovered on Level IVb.

Fig. 20-6, 7, 8 are found on Level IIIb. The pot 6 is fitted with wing-type lugs and has incised patterns on the upper shoulder. 7 is a spouted jar, while 8 is a spouted one with a long slender neck, directly below which some incisions are patterned. Its bulge is of nearly a global shape, whose spout stands straight along the neck.

The pottery shown in Fig. 20-9~19 came from Level II. 9, 10 and 11 are the bowls having a flat bottom and an outward slanting rim. 12 is a little deep bowl. 13 and 14 have slightly pointed bottoms. 13 is thick in vessel wall and has a short neck. 15 is colored yellowish brown right below the rim and on the body, and is thin in vessel wall with a low ridge belt going around the junction between the neck and

the shoulder. 16 is a yellowish grey pottery having four ridges on the sides of the bulge. At the low portions between the ridges there are dimple made with fingers.⁴⁾ This uses fine fabric and its outside surface is carefully burnished with a spatula. The pottery with two handles (18) has the feature common to that of 15 in vessel form. 17 was unearthed from the grave located underneath the wall of Level II. Or it may be the one from a little earlier than Level II. Its bottom and rim are rather unique. Besides, about 19 big goblets with a thick wall have come uncovered on the floor surface of the structure on Level II and the pits.

Fig. 21 shows the finds from the grave uncovered at the foot of the tell. Here are the fruit stand whose outside rim has incised decoration (1), the pots with an outward slanting rim like the figure '<', whose shoulder is continuously fitted with slightly raised ridge belts (3; 8), the jars with an upright handle having a ridge belt between the shoulder and the body (2; 5), a big-sized bowl (7) and the small pot with bottom hole (4). The painted pottery (2) in orange red and black have partially remained on the shoulder and the body. Further, on the shoulder of 5 there are lattice patterns incised with triangles, and other several incised pottery resembling this have been discovered. It is commonly observed in all the pottery here that they are made of rough fabric with a lot of sand particles in it. And except for several cases (6), they have nearly oval side views, and their ring bases have become larger and higher than those of the pottery in the Early Dynastic I period. The small pottery 4, whose bottom has been pierced through, was found in a big jar.

3) Coarse Pottery (Fig. 19-15, 16; Fig. 20-4)

This is a hand-made thick pottery whose fabric is mixed with much sand, rubble, and straw. This kind had been used all through the Jamdat Nasr period and the Early Dynastic I period. The excavated quantity of the coarse pottery is similar to those of the painted pottery and plain pottery. Most of them are jars (Fig. 19-16, PL. 12-5,6), and others are big bowls (Fig. 19-15) and mold-made bowls (Fig. 20-4). Some jars are large enough to exceed 60 cm in the dimensions of both diameter and height, and others are smaller than 30 cm in the dimensions. On Level VII and Level VI some spouted jars have been unearthed, most of which are fitted with plastic ridge belts near their rims. Finger-pressed patterns and rope patterns were seen on the ridge belts, and a great many of cylinder seal impressions have also been confirmed. The inner surface of the big bowl in Fig 19-15 has been exceedingly worn out and smooth. It is likely that the mold-made

bowls (Fig. 20-4) were produced in quantities for domestic purpose. This type, having originally been prevalent in the Uruk period, was survived to the Early Dynastic I period in Tell Gubba.

(2) Seals

Lots of stamp seals, cylinder seals, and impressions of cylinder seals have been discovered.

Stamp seals (Fig. 22-16; 17, PL. 14-3, 4) consist of round types and animal types, where animals and obscure patterns have been represented by drilling small circles continuously. Only one has been unearthed from the floor of Level VII, while all the others have come from the levels belonging to the Early Dynastic I period.

Cylinder Seals (Fig. 22-18~21, PL. 14-5) 18 and 19 are the finds from the floor of Level VII, whereas 20 and 21 are the ones from the Early Dynastic I period. The cylinder seal from Level VII is made of steatite and is rich in flower and geometric patterns. The ones coming from Level VI or later contain many animals facing to the same direction and many geometric and animal patterns combined together.

Impressions of Cylinder Seals (Fig. 22-1~15, PL. 13-5~8) All through Level VII toward Level IV, we have found a lot of impressions pressed with cylinder seals on the rims and ridges of the coarse pottery. And one hundred or more kinds of different seals have been identified from them. They are of geometric patterns (1, 4, 7, 12), animal patterns (2, 5, 8, 15), human patterns (8, 10) and flower patterns (6, 14), and sometimes of the combinations of two or more patterns (3, 11, 14, 15). The coarse seal-impressed jars had already appeared on Level VII, and suddenly became popular in the Early Dynastic I period (Level VI to Level IV). On Level IIIb, however, the patterns pressed on the rim of the pottery were hardly observed, and those pressed on the clay lumps were unearthed instead. Besides, we could find such impressions as had been pressed on one end of the round lid made of clay. These pressed patterns were seen limited only to coarse pottery, never recognizable on the painted pottery or the plain pottery. Such sealings may have been intended for identifying the dedicator or the owner of the very vessel.

(3) Other Finds

Beads

From the corridors of the round building and the levels in the Early Dynastic I

period various shapes of beads made of stone, bone, copper or bronze, and shell have been unearthed. Among them we saw one thousand or more beads of many kinds tied together (PL. 14-2). But most of them were found individually. The stone beads are made of steatite, crystal, quartz, shale, calcite, agate, carnelian, limestone, hematite, and jade-like green stone. Neither lapis-lazuli nor turquoise has been discovered. As for bone beads, there are many long beads made of animal horns, some of which measure as long as 8 cm in length and 1.5 cm in diameter. As for shell beads, many are of bivalve, horn shell, and cowrie from the sea. The small beads made of faience or frit have been uncovered only from Level VII of the round building.

Bronze objects (Fig. 23-12~15)

Most of the Bronze objects were discovered from Level VII: the higher the levels are, the rare their discovery is. They are axes (15), swords (14), chisels (13), needles, nails, curved chisels, beads, and U-letter shaped decorative metal fittings. Although most of them were found separately, we found axes, spearheads, and chisels placed all together as shown in Fig. 23-12.

Stone objects (Fig. 23) See Chapter VI

3. CONCLUSION

As a result of the excavation survey, a large round building could be discovered directly upon the virgin soil, which nobody had expected. This is one of the most unique structures that the archaeological history of Mesopotamia ever revealed. It has been built according to an excellent project and structural technique. Although it is one of the final targets of our investigation to solve what such series of structures were constructed for, we are still lacking in enough material through which to lead to its conclusion. To say the least, however, they were probably working as public facilities commonly utilized by the dwellers. Moreover the discovery of many painted pottery and the existence of a fire place on the core which seem to have been traditionally regarded important, strongly suggest to us that they had the character of festival and sanctuary in themselves. Perhaps they used to function as grain and treasure storehouses as well as a holy place. The central fire place and the tunnel-like structure observed directly under it must have played an important role as a core of this building. In particular, the very sight of the front-blocked tunnel-like structure intuitively reminds

us of a certain facility like a grave. After the Early Dynastic I period, some way of life still continued, but things up to Level II in the Achaemenid period are rather obscure.

Neither facilities nor finds through which the character of Level II building is clearly understandable have been discovered so far. Yet the watchtowers seen at four corners of King Darius' audience hall in Persepolis are very similar to this building (Fig. 10). Another resemblance is a structure named 'Fort' attached to the east side of central temple, which was recently unveiled at Nush-i Jan in Iran.⁵⁾ All of them are composed of slender rooms lining in parallel inside, which are piled up with mud bricks. In particular, the structure in Nush-i Jan is provided with niches at regular intervals, suggesting to us that this and Tell Gubba Level II building have strong relations between each other in outside view and function.

Notes:

- 1) Delougaz, P., 1947, *Pottery from the Diyala Region*, Oriental Institute Publications Vol. LXIII, Chicago
- 2) Based on *Sumar* Vol. XXXV, 1979 and *Iraq* Vol. XLI, 1979. E D I Tells in Hamrin: Tell Gubba, Tells Songor A, B, Tell Abu Qasim Tell Kheit Qasim, Tell Madhhur, Tell Razuk, Tell Hallawah, Tell Abga, Tells Ahmad-Hatchow, Tell Oasaat, Tell Suleimah, Tell Rubeida (in Bahizah)
- 3) Fukai, S., Horiuci, K., Matsutani, T., 1974, *Telul eth Talatbat, The Excavation of Tell V*, The Institute of Oriental Culture, Tokyo University
- 4) Mallowan, M. E. L., 1966, *Nimurd and Its Remains*, Collins London
- 5) Stronach, D., Rcaf, M., 1978, "Excavation at Tepe Nush-i Jan", *Iran* Vol. XVI

III TELL SONGOR A

1. PROCESS OF THE EXCAVATION

Tell Songor A is located about 500 m southeast of Tell Gubba, and 190 m long in the north-south direction and 140 m wide in the east-west direction with its relative height of about 3 m (Fig. 24). Songor means 'the place where birds can perch'; in other words we can say that its height is noticeable in the surrounding area. Tell Songor A is one of the most unique Samarra Period sites in the Hamrin Basin, which is the subject of our current research. There are also some other sites belonging to this period, such as Tell Rihan¹⁾ on the west bank of River Narin. Tell Songor A, however, has been so far the only site that is likely to enable us to grasp its assemblage and relations with Halaf and Ubaid cultures.

To the eastern part of the site there is a moor spreading toward the River Diyala and the River Narin. It seems to tell us that the present breakage and deformation of the very tell and the site resulted to a great extent from erosion caused by this moor region to a great extent. For convenience's sake, excavation areas were named after the division based on the long axis direction of the tell, such as Northern, Central, Western, Southern, and Westernmost projecting parts (Fig. 25). Each grid was marked off with Roman numeral and Arabic numeral into one 5-meter square.

The excavation was initiated in June 1978 starting from the south-end hill, and then was gradually expanded into the Central, Western, and Northern areas, where it was our principal work to confirm the existence of the structural remains. When the Samarra Period architectural remains could be identified with a number of materials at the Northern part of the tell, our main target was switched to this area. And then the excavation area was again escalated into the Southern area because the architectural remains of the Southern area were found to resemble those of the Northern area, thereby judging that both of them belong to the same period. Prior to this, several Ubaid Period graves had been identified in the Southern area. At the Central area, slight traces of mud bricks in rows could be widely observed on the ground surface. But further research had to be given up because of their very poor survival condition. Then, here our attention was directed to investigate pit groups containing numerous Halaf Period pottery to study their characteristics, as will be mentioned below. At the Western area, there are some structural remains built of mud bricks directly below the ground surface.

And the excavated materials from here suggest that there was some activity of the Gubba people ranging from the Jamdat Nasr Period to the Early Dynastic Period.

Just as most of the other tells, Songor A had been utilized for graveyards ever since the prehistoric age, and in all over two hundred-eighty or more graves were discovered here. We had to spend much time on the survey of the graves belonging to the Islamic Period, the Parthian/Sasanian Period, the Isin-Larsa/Old Babylonian Period, and the Halaf Period, before working on the remains of Samarra Period, which is the theme of our current study. We found these graves had been cut into the architectural remains. And it was often seen that the graves themselves had also been severed by other burials, which sometimes overlapped them.

2. LEVELS

The topmost portion of the tell, which is at the Northern area, is 90.81 m high. Its virgin soil consists of reddish brown clay, and it forms a flat hill of 3 m high nearly corresponding to the present geographical features.

(1) The Northern Area (Fig. 26-1)

Upper layers are accumulated with 20 cm greyish red-brown sand and 20-30 cm reddish brown sand in the order of the ground surface, containing the Halaf pottery and the Samarra pottery. After removing the reddish brown sand, some graves ranging from the Islamic Period to the Halaf Period, and a kiln, presumably coming from the Halaf Period, have been excavated. Lower layers belong to the Samarra Period. The crumbled mud bricks are rather thick, measuring 80-100 cm at the central portion. Further below, there was some accumulation found on the floor. Except for Building No. 4, greyish green soil varies from several millimeters to 2.0 cm in thickness inside the buildings. And many finds were confirmed in this layer and its surface levels. The floor is of greyish brown soil with a thickness of 8-20 cm, where some materials were found. Under the floor, there lies thin brown soil mixed with ash or reddish brown virgin soil, on which there were the buildings that existed during the Samarra Period. Outside the buildings, lower than the crumbled mud bricks, there range bluish green soil, ash, reddish brown clay mixed with ash, ash, bluish green soil, brown soil mixed with ash, and virgin soil. Such accumulations are seen around Buildings Nos. 1, 2, and 3. From the west half outside Building No. 2 to Building No. 4,

there develops a thick ash layer below the crumbled mud bricks, on which Building No. 4 was found constructed. Under the ash layer there are crumbled mud bricks and brown soil mixed with ash. Among these building groups, only Building No. 4 has been the one built in later generations. In the meantime, outside a big wall excavated at V. VI. VII-18. 19, around Building No. 7, we saw an accumulation of bluish grey soil under the crumbled mud bricks. At VI-17. 16, however, instead of the previous accumulations, what appeared was surface soil, greyish brown clayish soil, greyish brown sandyish soil, and virgin soil. Under the greyish brown sandyish soil, a Samarra Period Grave No. 247 was unearthed.

(2) The Southern Area (Fig. 26-2)

At XXVIII. XXX-20, a mud brick remains were found under the surface soil. But there are no materials which can be defined to accompany this. At the other grids, below the surface soil, greyish red-brown sand could be confirmed, under which there lay graves of the Ubaid Period and the Isin-Larsa/Old Babylonian Period. We saw crumbled mud bricks coming from the Samarra Period under the greyish red-brown sand, while inside the building reddish brown sand and greyish green sand were found accumulated on the virgin soil. Outside the building, there was a thin ash layer on the virgin soil.

(3) The Central Area

The surface soil contains brown sand mixed with corroded soil, under which there are thick accumulations of buried soil coming from the pits which were dug of the virgin soil. The fill can be roughly divided into two layers: the upper layer is of brown sand mixed with greyish green soil, and the lower one of reddish brown clay and green soil mixed with ash.

(4) The Western Area

In the order of the ground surface, there are accumulations of greyish red-brown sand, greyish brown soil mixed with chaff, brown sand mixed with ash, and brown sand mixed with greyish green soil. The remain presumably of the Early Dynastic Period has been constructed with the greyish brown soil mixed with chaff dug out. The lowermost layer contains a great number of Halaf pottery, where the fill of the pits similar to that of the Central Area has been confirmed.

3. STRUCTURAL REMAINS

(1) The Samarra Period Village (Fig. 27, 28)

After the research at the Northern and Southern areas of the tell, some buildings of the Samarra Period and their associated remains have come uncovered. Owing to some artificial destruction such as grave-construction in later periods and other various diggings as well as natural weathering. The remaining walls in these buildings were not in satisfactory condition. The walls are observed to be not more than 0.9 m high. The building at IV. V-2 is among the ones which are relatively well preserved (Building No. 1). This building had been constructed directly upon the virgin soil or the overlying thin brown soil mixed with ash. We saw some mud bricks piled up on the flat surface of the natural hill, we are not sure whether the flat surface has resulted from artificial arrangement or it originally used to be a natural hill of flat nature. The mud bricks used there are as big as $70 \times 16 \times 8.5$ cm apiece. The bricks are flat in their under-and-side views, while there are some swellings in their upper view, on which a few dented lines of a finger width are observed in the long axis direction. In the mud brick body, a certain amount of the cut-straw mixture is recognizable with the naked eye. After all, a building of about 6×8 m in size had been built of such mud bricks whose ends are lined up in a row on the same level. Thus, the brick width, 16 cm, plus the inside-and-outside plaster, maximum 4 cm, equals the wall thickness. The inside part of the building is basically partitioned into twelve rooms, 4 times 3, with walls, making an assemblage of small rectangular rooms of $1.3-1.5$ m \times $1.5-2.0$ m in the inside dimensions. At the four corners of the building there stand battresses and also at the outer side of the crossing of the partitioning wall with the outer wall. All the bricks are so arranged as combined together one by one, and at the battress parts, they are placed one stage after another with its direction facing 90° different. Mud is used for bonding the material which joins each mud brick on the top, bottom and sides. This bonding material is rather sandy unlike that of the mud bricks. In spite of having such a thin wall, this is considered to have been an excellent structure due to its durability.

An entrance to the building, which is located at the west corner room on the building shorter side, has been stacked with clay and small blocks of mud bricks. No entrances that had been kept open toward the outdoors could be found on the long sides of Building No. 1. But it is not sure because some parts of the walls were destroyed by the later graves. Passages between each of the four rooms on the long axis direction

were constructed in an identical line with the regular width not being more than 50 cm. Each of the passage portions had two steps of bricks resembling a threshold. The hardened floor surface inside the building was caused by its constant use by its previous inhabitants has come up to the upper side of these mud bricks. The floor surface the somewhat elevated beside the wall portion, thus burying the lowermost mud bricks.

At the northern excavation area, there are 7 buildings which are similar in construction with that of Building No. 1. Characteristics of the walls between the buildings, however, are still obscure.

There is a large wall which is thought to be a defensive wall of V~VII-18.19 among the mud brick remains. The wall is as thick as 1.5 to 2 pieces of the big mud bricks (70-72 cm × 2), that were used for the building, over which mud plaster has been thickly applied.

A number of hearths were found. One of them is of a rectangular plane unearthed at VII-22. Another shows a shallow 'U' letter dent on the section of V-19. Both of them were found lying outside the building and probably belong to this facility or one of the others. And there are some round plane pits measuring 20 cm in diameter and about 15 cm in depth which have been dug out of into the virgin soil. They are conical in shape, the inside of which is coated with greyish black clay in about 2 cm thickness. One of the pits was found outside the building, while the other two were located nearly at the center of the room, from which they are presumed to have had some purpose with the very building. A kiln has come uncovered at the center of the place which is surrounded with Buildings No. 2, 3, and 5.

The mud bricks used for the buildings at the Southern Area and their construction method are not basically different from those at the Northern Area. But there are such differences as the long axis of the building here is deviating 90° from that of the Northern Area and there are '5 or 6 rooms times 3' in the Southern Area. At this excavation area, only one building has been discovered. So far as this problem is concerned, another building can be expected at most, judging from the shape of the very tell and its soil accumulation. The above mentioned are the differences in the building groups that exist between the Southern Area and the Northern Area, and we are much more interested in the differences of the materials excavated in these two areas. For example, the female terracotta figurines unearthed inside and outside the buildings at the Northern Area were never be discovered at the Southern Area, whereas the big thick coarse pottery found accompanying the building at the Southern Area were rarely found at

the Northern Area.

(2) Pit Groups at the Central Area

At XVII~XIX-21~27, we uncovered the pits filled with the Halaf pottery in huge quantities. They are usually round in their shape, measuring 1.6–2.2 m from the ground surface down to the bottom. There was one piece, in the shape of a bag, Fig. 29 which was found after digging down 2.7 m below the ground surface and into the virgin soil. The pits include stone vessels, stone implements, and a small number of the Ubaid potsherds. And a great many of the Halaf potsherds seem to have been filled there over a short span of time. We found such pit groups extending far beyond our excavation area.

Furthermore, directly below the surface layer of VII. VIII-22 at the Northern Area, we could find greyish blue soil blocks together with quantities of Halaf pottery. But they are not the round pits like the preceding ones.

(3) Mud Brick Remains at the Western Area (Fig. 29)

At XX-16. 17, some remains built of one to three mud bricks in thickness coming from the Early Dynastic Period have been found near the ground surface. These mud bricks, 40×20×8 cm apiece, contain a lot of sand in greyish green color. Though they are very poor in survival condition, three lengths of the mud bricks and some rectangular vacancy have been left behind. The piling method of the mud bricks varies with every step, and we sometimes see the stretcher method applied to some sides. They resemble those in the Kheit Qasim Site.²⁾ Some of the pottery excavated here are identical to those coming from Level III~VI in Tell Gubbah. The white stone bead decorated with a dot in circles incised on a rectangular surface, uncovered from the disturbed level, belongs to the same type as that of Kheit Qasim Site and that of Level VII in Tell Gubbah. Similarly, the remains piled up with mud bricks located at the upper layer of the Southern Area are identical with those of the Western Area in brick measurement, quality, and arranging method, which are most likely to belong to the Early Dynastic Period.

(4) Burial

1) *The Samarra Period*

Grave No. 247 (Fig. 30-1) was excavated 0.4 m below the ground surface at VI-16.

It has an oval shape of 2×1.3 m, longer in the NE-SW direction. The only skeleton that was found at the north side of the grave hole with his front part of his skull facing eastward and his feet westward, and we see his skull broken into pieces. He is lying on his back with both arms stretched along the body, and is moderately bending himself at his left waist down and his knees are strongly bend. The splint bone and the shin-bone were off the knee and found separated. Beside the skull, we found a female terra cotta figurine (Fig. 39-1), a painted pottery (Fig. 31-1), alabaster horn shaped objects (Fig. 40-1), and a plain beaker shaped jar placed from the east side. And pottery, a stone quern, and rubbles were lying in the north-south direction at the feet. All of the pottery belong to beaker shaped jars (Fig. 31-2~6). Among them there were four plain pieces, one of which is fitted with a handle, while two are incised.

Grave No. 279 (Fig. 30-2) was uncovered at V-22, below the brown soil layer mixed with ash on which the Samarra Period buildings were constructed. It is about 1 m from the lower part of this layer to the bottom of the grave. The grave hole looks like a bag expanding downwards. If completely dug out, the shape will be like an oval plan figure. The dead was found bending down with the head eastward, the feet westward and the left side down. His face was facing south-east with the arms bent down at the elbows and the hands coming near the face. The waist and the knees were moderately bent over. There were 4 pottery discovered in all, i. e., a cross-hatched painted jar (Fig. 31-7) was found on the chest, a plain dish (Fig. 31-10), an oval-shaped painted pottery with handles (Fig. 31-8) located at the east of the skull, and also a beakershaped jar (Fig. 31-9) was found at the feet.

These two Samarra Period graves have similar features in the shape of the grave holes, and the position of the dead with their burial goods. There is something similar about their bent burial forms, too. *Grave No. 279* is apparently older than the very buildings. The extent of our investigation did not include the underside of the buildings, but it would be safe to assume that more graves like these could be found. It is impossible to clear the chronological relationship between *Grave No. 247* and the buildings from the strata.

2) *The Ubaid Period*

Five graves were excavated at XXVIII-20, 21, 22, from which a dense distribution suggested that the Southern Area was utilized for a grave yard during the Ubaid Period.

Grave No. 1 (Fig. 30-3) was found at XXVIII-22. The grave hole is longer in

the NW-SE direction measuring 2.8×0.9 m. Both ends are round. The dead is lying along the long axis at the center of the grave with the head facing southeastward and the face northeastward. Although some parts of both upper arms and the shoulder blades could be found, most of the chest bones and backbones were missing. A left thighbone was found on the north and a right thighbone on the south, while a left shinbone was found on the left thighbone. The toes were found near the waist. The dead is lying on his face, with the upper body stretched and the feet bent down at the knees. This burial method appears to be quite a peculiar one. Beside the neck there were obsidian and carnelian beads of about 1 cm in size. From the waist to the feet, we could find a great many tiny beads which were 0.4 cm in diameter. Some were made of stone, and others of wood. Beside the left shoulder, a chalk bead (Fig. 40-2) was uncovered. Eight pieces of pottery were found in all, i. e., one dotted piece located at the end of the head side, four painted pottery and three plain pieces were located beyond the feet (Fig. 35-1, 3, 7, Fig. 36, Fig. 37-5 ~ 8).

One piece of pottery was laid on top of another, and another was on top of the other three. The tortoise jar was slantingly rested against the grave hole with its spout upside down. The way of placing the pottery makes us consider that the ancient people dedicated the pottery there. Under the tortoise jar, bone fragments of some small animal were confirmed.

Grave No. 4, uncovered at XXVIII-20, is of a rectangular shape with round corners in the dimension of 1.1 m eastward and 0.8 m northsouthward, at the center of which the dead is placed with the head eastward and the feet westward. This also adopts the bent-burial method, the face was lying on its right side and it faced to the north. On the south side of the skull there were some animal bones. On the left thighbone a marble vessel (Fig. 40-6) placed. Pottery (Fig. 35-5, 6, 9, Fig. 37-1, 2, 4) and a stone palette (Fig. 40-3) were discovered 20-30 cm above the human bone.

The five graves, buried in the ashy brown soil, are regarded to come from nearly the same generation. We can see no features common to their grave holes, burial positions, and the setting methods of their burial goods.

3) *The Isin-Larsa/Old Babylonian Period*

Let us mention a group of graves based only on features of the grave form, because we have not yet come across the exact data through which the age is determined. We found nineteen graves where greyish blue mud bricks had been piled up along the longer

side of the grave hole beside the dead.

Referring to Grave Nos. 63, 71 (Fig. 30-4), 253, 259, and 271, all of which are in relatively good in condition, bricks are generally piled up along a side of the irregular square grave holes in the dimension of 2 m or more length and 1 m or more width. The mud bricks used there are, 35 × 35 × 7 cm apiece, are the products of a molding method. They slightly contain chaff and are fine and solid in texture. In grave No. 71 seven stages of mud bricks in the height of about 80 cm were remained. Their piling-up method is too awkward to give the horizontal level. In Grave 63, the bricks were found too be quite indented at the central portion. The skeleton is facing toward the brick piling with the arms slightly bent at the elbows, clasping the hands together at the chest toward the face. And the knees are found lightly bent down, resulting in a bent-lying posture. In Grave No. 63, the dead is lying on his back with the arms bent toward the face. We can see no uniformity in the head position of the various dead, but all of them are remarkably characteristic in bent-burial method and the faces directed toward the brick piling devices.

Jars were used as burial goods (Fig. 38-1 ~ 3, 6 ~ 8, 12, 13). In Grave No. 63 and Grave No. 71, some animal bones were discovered between the jar and the dead. They seem to have been about the same size as sheep similiar sized animal. What is interesting is the fact that the skull of animal was invisible inside the grave holes. The burial goods other than pottery are copper/bronze spear heads, pins, leg-bands (Fig. 40-7 ~ 12) and beads.

4) *The Islamic Period*

About 240 graves have come excavated. We could uncover a well-preserved grave, on the bottom of which, dug down two steps further, the dead was lying. It is frequently seen in such graves that some big bricks are slantingly rested on top of the dug-out portion under which the dead are lying. Both mud bricks and baked bricks are used there. Another example is that the dead was placed inside the small baked bricks which were arranged in the shape of a box. Probably because of the frequent diggings each other, we could excavate nothing but simple plan cigar-shaped holes in many graves. The dead are usually placed with their heads to the west, their feet to the east, and their faces to the south, which is the direction of Mecca, stretching themselves with their right sides down. There is much variety in the grave holes, and the dead can be anthropologically divided into two kinds of people, which is being further clarified by the joint

studies of Dr. Hidemi Ishida and Mr. Yō Wada. Furthermore, we found a grave accompanied by plenty of personal ornaments, a copper/bronze mirror, which is different from the manners and customs in the present Islamic culture. This may suggest that the characteristics of the Islamic graves at Songor A is by no means simple.

5) *Others*

Others a grave was from the Halaf Period and some graves were from the Parthian/Sassanian Period. The former is a grave for a child, where painted pottery (Fig. 34-1, 2) was excavated, while in the latter glazed pottery, iron objects, and glass vessels were uncovered.

4. FINDS

(1) Samarra Pottery

There are four groups of pottery such as painted pottery, incised pottery, fine plain pottery, and coarse pottery. The coarse pottery largely differ from the other three, which is tempered with chaff and their vessel forms are limited only to big and thick oval basins and jars. Coil-building method is generally adopted for their production. On the other hand, a few small products are considered to have been made by the pinching-up method.

1) *Painted Pottery*

Most of them are small fragments, and some goods from graves (Fig. 31-1, 7, 8) and three objects found accompanying the buildings (Fig. 32-1~3) and so forth are the only ones whose whole vessel form is clear. Thus, there is room for doubt about the variety of the vessel forms and the quantity of each form. But they are basically divided into jars, bowls, and dishes with their applications of paintings additionally taken into consideration. Each of them is further divided into some sub-types. i.e., long-necked jars (Fig. 32-9), middle size straight-necked jars (Fig. 31-1, 7), beaker-shaped jars (Fig. 32-1, 4, 5), wide-mouthed bowls (Fig. 32-2, 6), bowls (Fig. 32-16, 17), bowls on stands (Fig. 32-20~22), and oval bowls (Fig. 31-8).

This pottery is tempered with much fine sand. Some of them are rather coarse in texture compared with that of the fine plain pottery. Shaving and smoothing are seen for their shaping, while slip-casting is sometimes conducted for finish treatment. But

burnishing is seldom confirmed. They are well fired and hard. Their colors are roughly classified into buff to reddish brown and greyish green. The former's paints are generally red or the like, whereas the latter's ones green or the like. Some green paints show vetrification. Their paint is fragile enough to scale off, and even after washing, salt appears on the surface of the pottery because it was covered in salty soil. The designs are obscure on many sherds. They are monochrome and all the designs except two (Fig. 32-16, 19) are geometric ones. Basically they are simple linear designs. Most frequently used are the horizontal lines. They divide the ornamental zones in which various designs are applied. Latticeworks (Fig. 31-8, Fig. 32-2, 6), parallel short Oblique lines (Fig. 32-4, 5), and horizontal zigzags (Fig. 32-5, 8) are also observed very often. Just like the above, waves (Fig. 31-8) and meanders (Fig. 32-23) are the ones of never closing lines. What is remarkable, in the mean time, is the designs whose fundamental units are triangles. They can be called 'plane designs'. There are four kinds such as: 1) a series of triangles whose tops are on a perpendicular line (Fig. 32-4, 14), 2) the triangles whose inside is filled with cross-hatches (Fig. 32-2, 12, 13, 17), 3) the triangles whose inside is filled with hatches (Fig. 32-1,7), 4) the solid triangles (Fig. 31-8, Fig. 32-5). Two kinds or more triangle designs of these are never used at the same time. The inside center of the bowl on stand often has a circle divided like chinese character '井', which is further divided by oblique lines into triangles and filled with cross-hatches (Fig. 32-21, 22).

2) *Incised Pottery and Fine plain pottery*

The above two are to be reported here because they are the same in texture and making method except for the application of the incised ornament or not, and they have many vessel forms in common. The fabric is tempered with a lot of fine to medium sized sand and coarse particles less than 1 mm. As for the surface treatment, the trace of scraping with a tool of 2 to 3 cm width, smoothing and burnishing are recognizable as well as shaving. Each burnishing is seen in 3 to 7 mm width and its density varies one by one. And the surface treatment is not uniform even in the same vessel form. Their colors are greyish green, greyish yellow to greyish brown, pink, and dark-brown. Most of them, however, are greyish green in hard quality.

There are long-necked jars, (Fig. 33-1, 2), short-necked jars (Fig. 33-4), beaker-shaped jars (Fig. 31-2~6, 9, Fig. 33-7, 8), wide-mouthed jars (Fig. 33-6), bowls (Fig. 33-3, 5), oval bowls, and dishes (Fig. 31-10).

Long-necked jars are about 30 cm tall and are usually of the same size. Some are fitted with lips or handles. Beaker-shaped jars are uncovered in huge quantity, which is a typical vessel form in Songor A. Except for two examples from Grave No. 247, they have a round base with a keen carinated contour noticeable on the border of the body. They are full of variety in shape. They can be divided into four classes according to their heights: 6 cm or less, 7 to 9 cm, 13 to 15 cm and 20 cm or more. Many are the ones with 13 to 15 cm height. Wide-mouthed jars are thick, and the one shown in Fig. 33-6 is equipped with a lip and a potter's mark is incised on the center of the outer base. Bowls are roughly divided into two: the one whose sides are open outward (Fig. 33-3) and the other whose squat global bulge is fitted with a short rim. (Fig. 33-5). The former's inside is smoothed and burnished, but most part of its outside is only shaved and left coarse surface. The latter's inside is smoothed, and its outside is burnished.

Incised ornaments are not observed on the bowls with outward open sides and the dishes, but are seen on the other vessels in a similar proportion. The incisions are slashed with a sharp blade or the like one by one. And the breadth of grooves is usually as fine as 1 mm or less. There are also some instances whose grooves are made with a blunt edge. Long-necked jars are ornamented on the border between the neck and the shoulder, while the other vessels are ornamented only around the rim. All the elements are arranged in the horizontal zone, which is rather narrow in width. The elements are the chevrons consisting of a set of 1 to 5 oblique lines, short oblique lines, arrow-like patterns, the chevrons, between two parallel lines of which oblique lines or zigzag lines are applied, and arc patterns. We found such patterns repeated on top of the others several times in long-necked jars, which are seen a little more complicated.

(2) Halaf Pottery (Fig. 34)

Some bodies contain fine sand, while others are so good as to include only minimal amount of sand grains. The body treatment was done by smoothing it. Some vessels show a sharp outward shape which was cut with a spatula. On the field colors ranging from dull yellow to reddish brown, white or cream colored slip is arranged. In painted pottery there are monochrome and bichrome, and their patterns are mainly colored red, dark-brown, purplish-brown and black. Some have glossy painted patterns.

Shoulder swollen jars (3, 4), open-mouthed bowls (1, 5, 7~11), and semi-straight bulged bowls (12 . 16) are the major vessel shapes of the painted pottery. The bowls are often fitted with a ring base. We see some patterns of a same element arranged

between parallel lines and others of some panels vertically arranged. Most of them are such geometric patterns as triangles, lozenges, herring bones, fish scales, and slant-crossing lattices besides birds (4, 5) and 4-limbed animals (13).

Plain pottery are bowls (21), long necked jars, short necked jars (20), and plates. Many are rough in due to the trimming.

(3) Ubaid Pottery

Some fragments were found from the surface soil. But only the materials from the graves are to be mentioned here. The fabric is very fine in texture, tempered with a sparce to medium concentration of fine to medium sized sand of 1 mm or less. Some are tempered with a little plant fiber. We could often find coarse striations presumably resulted from shaping. In particular, painted pottery are elaborately made, sometimes smoothed with a spatula. The body color is buff or light yellowish brown, some of them are applied with cream colored slip. Their paints are dark brown or dark green. It shows highly adherent nature and vetrification is observed in some of them.

1) *Painted pottery* (Fig. 35, 36)

There are sharp-carinated small jars (Fig. 35-1, 2), squat jars (Fig. 35-4), full-bulged jars (Fig. 35-3), and vase-shaped jars (Fig. 35-9). The jars shown in Fig. 35-1~4 have an everted rim and the neck is widely painted all over in band with various geometric designs between this band and the parallel lines drawn on the maximum bulge portion. The open bowls, whose sides gently rising from a small round base toward the rim (Fig. 35-5~7) have a thin wall. On bowl 5 in Fig. 35, lozenges are arranged between the horizontal lines at the rim and the bottom, while bowls 6 and 7 have ornamental zones around their rims. Other bowls consist of relatively big and thick ones with a carination around the border of the base and the sides (Fig. 35-8) and the round ones as a whole (Fig. 36-2). The bulge of the tortoise jar in Fig. 36-1 is as squat as 6 cm, but inclusive of the spout, it is 12.5 cm tall. Its inside is carefully smoothed up to 1 cm above the carinated portion, and its further upper side has only been pressed with fingers, thus resulting in irregular up-and-down face. The designs are carefully drawn with fine lines. Dots (Fig. 35-1), four petalled leaf-like patterns (Fig. 35-2), wavy lines (Fig. 35-3, 9), vertical zigzags (Fig. 35-4), solid triangles (Fig. 35-7), and crosshatching (Fig. 35-3, 6) are seen on jars and thin round-base bowls. The bowls shown in Fig. 35-8 and Fig. 36-2 are the ones whose inside bulges are painted all over, and a circle line is reserved. The former has a rosetta motif in the circle, and the latter has three fish drawn

inside wavy lines. Just like these ones, reserved fine lines are seen on the tortoise jar. The designs constitute two parts. One part has panels filled with reserved triangles and rozenges. Another has four reserved lines which go around two-thirds of the vessel. One of these lines is filled with short lines and relatively broad one on the carination is filled with solid triangles.

2) *Plain Pottery* (Fig. 37)

Global jars with everted rims (Fig. 37-1, 5), flat based small bowl (3), and flat based dish with upright sides (8) are the vessel forms in plain pottery dish 8 is presumed to have functioned as a saucer judging from such uncovered condition as jar 6 was very likely placed on. This is coarsely shaped and poor in firing.

(4) The Other Pottery Coming from Graves (Fig. 38)

The pottery shown in Fig. 38-1 ~ 3, 6 ~ 8, and 10 ~ 13 are excavated from the graves belonging to the Isin-Lara/Old Babylonian Period. Many are tempered with a little sand and chaff. The upper halves of No. 12 and 13 are finished on wheel after coil-building, and others are of wheel-made. Their colors are buff, reddish brown and greyish green.

No. 4 and 5 are the ones coming from the Parthian/Sasanian Period, which are glazed bluish green or greenish yellow. No. 9 is hand-made with a fine texture. It is light brown and we see some traces which look like painting there. It was set at the waist of the dead buried in the bent method. Its period is still obscure. Moreover, this kind of pottery is the only one that has been discovered in Songor A.

(5) Clay Objects in the Samarra Period (Fig. 39)

1) *Female Figurines*

Ten figurines have been unearthed so far. Although the number is small, they can be divided into at least four kinds in shape. No. 1 is a complete shape uncovered from Grave No. 247. The texture is fine, without any sand, and its color is light brown. It is 10 cm tall. The trunk has been jointed together after the right side and the left side were separately made. We saw the center line of the lower half largely indented. This is seated holding her breasts with her hands. The three grooves in front are likely to show toes, but it looks like sitting with the knees bent down from its whole shape. It is indeed a well-balanced naturalistic object. The face has so called 'coffee-bean eyes' where clays were applied and then grooved. She has a high and big nose, at the wings

of which are seen round stabbed spots. On the ears, too, there are stabbed spots. We saw a broad band-like part around the forehead. And there is a tongue-like projection at the back of the head, two perforations are vertically going through it. Perhaps it will show her coiffure in a chignon way or some headdress. Supposing it were some headdress, the grooves running from the forehead to the chin is thought to be its strings. Some appliqué pellets were found from the shoulder up to the breast. Short vertical lines are incised on the right shoulder, the back and the arm. There is also some appliqué pellets on the front and the side of the right lower body. These appliqué and incisions may stand for some accessories or the tattoo. The appliqué clay seen on both sides of the dent starting from the navel on the front are likely to be her genital organs. This figurine is well fired, colored dark brown on the surface. Perhaps it may have been colored with something other than minerals. Figurine No.3 is the similar head, is tempered with sand. There are two trunk fragments which are made of clay without any sand like No. 1, and their color is light brown to greyish red brown. No.4 to 7 are made of the day tempered with the same fine sand as that of pottery with dark green painting applied on the greyish green field. Slip is used on some of them. No.4 is a trunk which has square shoulders and protruding breasts. The hands are put on the abdomen. It is dotted all over except on the abdomen. It is round at the end of the hands and four fingers are painted coming out of the very hands. Round appliqué pellets around the neck are also painted. This is further connected to the drawing of the tabs crossed at the back, which has been identified as a necklace. We have found one more figurine with the same shape as No.4, it is not painted. No.5 and 6 are the lower halves of the standing figures, having big and round hips and big legs. No.5 has grooves on the end of the feet, describing toes. Both front and back sides of No.6's feet are found broken. Several horizontal lines are drawn from the abdomen to the hip and around the knees. The feet portion of No.5 is also painted. No.7 is the left side lower half of a figurine sitting with the legs stretched out, and is the one just removed off at the jointed part. Just the same as in No.5 and 6, we see horizontal lines engirdle on the abdomen and on the top of the feet, some designs also drawn at its center. No.2, entirely different from the above in shape, lacks reality. The arms are just slightly protruded in triangle shape with its lower half shaped into a flat ball. The grooves drawn on the border of the trunk will probably mark off legs. The head was already broken down. The fabric is tempered with sand grains, its color is dark brown.

2) *Horn Shaped objects* (8, 9)

These objects look like bullet with one end getting round and the other a little bigger. Both sides of No.8 have protruding parts, having a gradually smaller hollow, inside of which carbon-like black powder was identified. This may be a container.³⁾

3) *Spindle Whorls* (10~16)

We have seen two kinds of spindle whorls such as a biconical shaped one and a round one made of a battered potsherd. The former is of nearly the same size, 4 cm in diameter and 3 cm in height, and is made of clay tempered with much sand like pottery. Its color is greyish brown. They have radial stabbed ornaments on one face. Such incisions are almost round in No.10 to No.14, whereas they are long lines in No.15 and No.16, each one of which is stabbed from the horizontal direction. The other faces are largely worn out or broken, especially around the center hole. No.10, which has not shown much wear, weights 31.8 g.

(6) Stone, Copper-Bronze Objects (Fig. 40)

No.1 is made of alabaster,⁴⁾ having the same features as Fig. 39-8, 9, and is found in Grave No. 247 in the samarra Period. No.2 is a chalk ball, uncovered in Grave No.1 in the Ubaid Period. No.3, coming from Grave No.4 in the Ubaid Period, is a pallette probably made of marble. Its two sides are rising a little outward, while the other two are getting thinner. Especially, the damaged side is thinner. It has been polished after cutting. Among No.4 to No.6 stone vessels, No.4 and 5 belong to the Hlaf Period, and a No.6 from Grave No.4 in the Ubaid Period. All of them are made of marble. No.6 has nearly horizontal striations inside, and its inner bottom center is a little elevated. This is probably because a finish-scraping tool was placed at the center. No.7 to No.12 are the copper-bronze objects excavated from the graves in the Isin-Larsa/Old Babylonian Period. No.7 and 8 are pins, No.9 and 10 are anklets, and No.11 and 12 are spearheads with sockets. Two rivets have been identified in one spearhead. Generally, however, they are fretted with so much rust that their shapes cannot be accurately made out.

5. CONCLUSION

Songor A was mainly utilized for a graveyard after the Samarra village had collapsed.

Stratigraphically speaking, little can be said about this site in spite of its profound signification. As pigeonholing of our excavated materials this is just a preliminary report.

In the Samarra Period, Grave No.279 had been constructed before the village was formed. And then there is a little difference in generation between each building. But we could find no such time difference among the excavated materials. The buildings and the terracotta female figurines have some common features with which Songor A and Choga-Mami⁵⁾ can be strongly connected. Yet attention should be paid to the difference in the shape of mud bricks as well as the existence of a female image probably coming from different origins, as shown in Fig.39-2.⁶⁾ The pottery here resemble those of Tell Rihan in the Hamrin Basin quite closely. The following are the remarks so far made by ourselves as a result of the comparative studies between this and the other sites located outside the Hamrin Basin. We have to admit, however, that we have not yet collected enough data on Choga-Mami pottery. In the first place, the vessel form as we call it 'the beaker-shaped jar' in this report, which is one of the most typical vessel forms in Songor A, bears a striking peculiarity of its own as far as the circumstance of its position uncovered inside the very site is concerned. Similar vessel shapes of this kind can be found among the painted pottery in Es-Sawwan Site. What is remarkable is that the excavated quantity of such vessel shapes is reported to vary with the levels.⁷⁾ And Ippoliti's drawing indicates that its carinated portion is not so sharp. Secondly, the designs of the incised pottery are seen to only adopt the method of drawing the grooves by cutting down. On the into the body contrary, we cannot see such stabbing technique as observed in Mattara Site⁸⁾ here. And the arrangement of a narrow horizontal ornamental-band is also one of the features here. Thirdly, there is not great variety in the designs of painted pottery and incised pottery. Such being the situation, it would be necessary for us to consider not only the difference in time but also that in area of the Samarra Pottery.

As for the later graves, all the pottery uncovered from the graves in the Ubaid Period have been illustrated here. Though they seem to be nearly contemporaly with those in Ras Al-Amiya Site,⁹⁾ combined and numbers character prevent us from making thorough comparative studies.

The finds from Songor A are very interesting especially in thinking over the cultural relationship among the Samarra, Halaf and Ubaid periods on the excavated materials which were left undone halfway must be hurriedly resumed.

Notes:

- 1) Gibson, McG., 1979, "Tell Rihan Chicago-Copenhagen Excavation at Uch Tepe Harmin", *Sumer* Vol. XXXV
- 2) Forest, J. D., 1980, "Kheit Qasim I", *Paleorient* Vol. 6
- 3) Close analogues have been reported in the materials from Tell Es-Sawwan. One is pottery and another is an alabaster object.
 - i) Behenam Abu Al-Soof, 1968, "Tell Es-Sawwan Excavation fourth season", *Sumer* Vol. XXIV-1, 2, PL. X-16 and PL. XII
 - ii) Faisal El-Wally, Behenam Abu Al-Soof, 1965, "The Excavation at Tell Es-Sawwan First Preliminary Report 1964", *Sumer* Vol. XXI Fig. 74
- 4) *ibid.*
- 5) Oates, J., 1968, "Prehistoric Investigations Near Mandari, Iraq", *Iraq* Vol. XXX-1
1969, "Choga Mami, 1967-68: A Preliminary Report", *Iraq* Vol. XXXI-2
Oates, D. and Oates, J., 1976, *The Rise of Civilization*, Oxford
- 6) This figure relates to the ones from Yarin Tepe II, on the point of view that they have grooves on both sides of the lower body, triangular arms, and the front view. But these from Yarin Tepe II are very flat seeing from the side. Figurines of this type have been compared with ones from Tepe Gawra and Tell Arpachiyah by Merpert and others. They came from the Halaf levels, and there are discussions on the Samarra pottery coming from the very levels.
 - i) Merpert, R. Munchaev, N. Bader, 1978, "Soviet Investigations in the Sinjar Plain", *Sumer* Vol. XXXIV PL. XII-3, 4, 8
 - ii) Tobler, A. J., 1950, *Excavation at Tepe Gawra*, Vol. II, Philadelphia, PL. CLIII-2
 - iii) Mallowan, M. E. L., Rose, C., 1933, "Excavation at Tell Arpachiyah", *Iraq* Vol. II-I, Fig. 47-19.
- 7) Ippolitoni, F., 1971, "The Pottery of Tell Es-Sawwan First Season", *Mesopotamia* Vol. V-VI
- 8) Braidwood, R. J., 1952, "Matarrah a Southern Variant of The Hassuna Assemblage, Excavated in 1968", *J. N. E. S.* Vol. XI
- 9) Stronach, D., 1961, "The Excavation at Ras Al-Amiya", *Iraq* Vol. XXIII-2

IV TELLS SONGOR B AND C

1. Tell Songor B

(1) Process of the Excavation

Tell Songor B is about 100 m distant from Tell Songor A and is just in the middle of Tell Songor A and Tell Songor C. It has an oval shape of 60 m × 50 m with its relative height of about 2 m. Its topmost portion is located a little north-eastward off the center with a steep slope toward the north and a gentle slope toward the south (Fig. 24).

The first season of our investigation started on November 6, 1977 and ended on March 12, 1978. After that the excavations were carried out intermittently from June 1 to August 22, 1978, from October 1 to December 30, 1978, and from August 2, 1979 to March 23, 1980.

The initial target was to identify levels and to settle their ages mainly around Grids IX-9 and X-9, while taking into consideration the scheduled sinking date of this area, June 1978, due to the Hamrin Dam construction project. And then we could switch to an overall excavation owing to the postponement of the sinking date, by which our excavation period was quite naturally prolonged. As a result, it has been confirmed that there are from the top to the bottom, (1) Grave Utilization Periods: Islamic, Parthian/Sasanian, Isin-Larsa/Old Babylonian, Early Dynastic, and Jamdat Nasr Periods; (2) Level 1: the Ubaid level concentrated on the south slope of the site; (3) Level II: the mixed level of the Halaf and Ubaid Periods accompanied by some buildings at its center; (4) Level III: the Halaf level identified underneath the Level II buildings; and (5) Level IV: the Halaf level accompanied by some houses on its west slope (Fig. 42).

(2) Levels and Remains

1) *Level I* (Fig. 43)

This level including mainly pottery kilns, and big ditches was found on the gentle slope toward the south. The large pottery kilns have oval shapes of 2 m in longer diameter and 1 m in shorter diameter (K-1, K-6) with semi-underground structure. The entrance of the fire box is on the east side, facing Big Ditch B. The other pottery kilns are of small sizes, most of which have circle plans of around 1 m in diameter. K-10 is built of burnt bricks, but the other ones have no traces of the bricks which have

been used, and are presumed to be of nearly dug-out semi-underground construction. In the meantime, K-3, a round shape of 1.5 m in diameter, is different from others in construction, having an entrance and a fire box. And on top of the fire box has been uncovered a shelf fitted with 17 fire holes. The dome-like shelf has an evidence of repair four times in all (PL. 20-2). The above kiln groups have a slight difference to one another, and K-1 and K-6 seem to have been greatly associated with Big Ditch B to be mentioned below.

Big Ditch A, measuring 1.5-2.5 m wide, 35 m or more long, and about 1 m deep, has been dug out after destroying Building B-1 on Level II. Buried here was mainly sand mixed with clay, and small pieces of potsherds were accumulated on the bottom.

Big Ditch B is to the south of Big Ditch A, running nearly in parallel with Big Ditch A with an interval of 2-4 m between the two and turning at almost a right angle near the end of the tell toward Tell Songor A. The ditch is not less than 50 m long, 1.5-2.5 m wide and about 2 m deep, inside of which a lot of pottery kiln wastes, ashes, potsherds and stone implements were discovered.

2) *Level II* (Fig. 43)

This is chiefly composed of Building B-1 with a gypsum floor located east and Building B-2 with a gypsum floor located west. Basically, both of them were constructed after their foundations had been leveled with red soil for further consolidation. B-1 is a building of 23 m L × 10 m W, and its north-eastern half has been found to utilize the underlying building. The floor is built of gypsum mixed with pebbles. And the south-western extension was constructed after the slope had been leveled by filling red soil. The wall made of "tauf" is 70 cm wide, and is poor in preservation with the wall remaining 1 m high on the south-eastern side and 10 cm high on the north-eastern side. To the north of the very building, there was a road of 1 m in width and 6.5 m in length, vertically laid with flat pebbles of 5-10 cm apiece (PL. 21-4).

B-2 is a building symmetrically constructed with a cross-shaped room as its core under the method that a lot of small partitioned-rooms of around 1 m (B-5, 5') were first built as its basis, in which red earth was filled for leveling and that the underlying old walls were utilized by filling them with red earth for leveling. Fundamentally, this building was so planned as to make the small partitioned-rooms of the building basis function as a unit. The entrance to the building is in its north-western side, whose wall has been protruded into stairs, where the character of front porch is considerable. The

wall made of “tauf” is about 80 cm thick, and the floor is covered with gypsum mixed with pebbles all over. From the accumulated condition, however, no gypsum seems to have been coated on the wall.

Several rooms were uncovered between B-1 and B-2. At B-4, there was a pit of 1.5 m depth and 1.5 m diameter presumed to be a storage hole. Moreover, to the south-western side of this room, we could find a drain pipe which was connected with earthen pipes whose sections were round and trapezoid. (PL. 20-3) Characteristics common to Level II buildings are that such big buildings as B-1 and B-2 are scarce of traces from which daily life is presumable. Very few potsherds were discovered from here. Thus, there is a possibility that the main life may have been spent in B-4, while B-1 and B-2 were playing a particular role of their own.

3) *Level III* (Fig. 44)

The buildings on this level are also utilized as the foundation of Level II Buildings. Building (B-1) here has nearly an identical plan as that of Level II B-1, with gypsum lay-out occupying up to the floor. B-2 is basically an annex to B-1, having 4 or more square rooms of about 3 m a side. The “tauf” wall is 1.0-0.7 m thick, and its floor without gypsum has been hardened. B-3 was uncovered together with a door socket and a hearth. Its wall is a little thinner than those of B-1 and B-2. A lot of pottery and stone artifacts have been discovered where they used to be in the past because this building was burnt in a fire.

Furthermore, the other gypsum floor buildings, B-4, B-5, and B-6, have been uncovered, but their full particulars could not be cleared owing to their severe weathering as well as their having been located near the surface level. Though partially, however, B-6 plane has proved to be of basically the same shape with that of Level II B-2. Moreover, there was a pebble-paved path of 70 cm width and 5 m length between B-3 and B-4 stretching toward north.

4) *Level IV* (Fig. 45)

By the investigations at Grids VI and VIII-6 and 7, there were uncovered a set of 2 kilns of 1.5 m in diameter and 2 independent small buildings. The west-side building consists of 2 or more rooms, whose outside wall surface is provided with buttresses at about equal intervals, while the east-side building is regarded as a single room. Just as the former one, we could see a buttress at a corner. Both are built

of "tauf". What is remarkable here is that black ash has been accumulated all over. It is unknown whether this was caused from the existence of the kilns.

(3) Finds

1) Pottery

① *Level I* (Fig. 46)

Shallow Bowls: Carinated shallow bowls (7) were unearthed here in quantity. There are various designs on the pottery including mainly those of cross and rosette. Some are painted all over the inside portions. And others are arranged with cross hatching patterns all over the inside portions while a single line is running around the outside carinate point. This kind of pottery are usually 40 cm in rim diameter, 20 cm in bottom diameter, and about 10 cm in height. The fabric contains small sand grains mostly colored dark green or brownish purple. The other carinated shallow bowls are small and thin, many of which have no patterns.

Jars: The short-neck ones with lugs (horizontal and vertical) are painted from neck and shoulder toward the center of the body (2). The jars with a slight everted rim and a gentle ridge on the border of the shoulder and the body (3, 4) are painted all over the rim toward the shoulder portion. The other is the one with a wide mouth, whose inside is provided with a jut directly below the rim for supporting a lid (5). There are four holes made on the jut.

Boat-Type Pottery: They are usually 23 cm L. × 12 cm W. × 10 cm H. Most of them are colored all over their outside portions or drawn with wavyline patterns (1).

Deep Bowls: They are mostly 18 cm in vessel height and 30 cm in rim diameter (10). There are wavyline patterns frequently seen on the bulge. This type of pottery have been uncovered from Songor B and C in quantity.

Bowls: This is one of the commonest bowls unearthed from Level I (6). Wavyline and cross hatching are the main motifs. Besides, shells (8), birds (9), and cow heads (11) described on jars and cups are the typical patterns often seen in the Halaf pottery. This suggests that the Halaf designs were continuously adopted at Songor B.

② *Level II* (Fig. 47)

There are few finds here with Ubaid pottery and Halaf pottery lying together. The Halaf pottery are 2, 3, 4, 7, and 8. Their fabric is made of clay and its surface is decorated with slip. They are colored white, black and red. The Ubaid pottery are probably 1, 5, 9, and 11. Among them, 5 is a deep bowl whose inside is fitted with an inner

projection for a lid. And several perforations are seen on the projected part. This is the method often observed in Ubaid pottery. On the other hand, the surface of 5 is decorated with slip and colored red, which also reveals the Halaf pottery features. 11 is the feature successively used from the Halaf period up to the Ubaid Period. Its fabric is of clay. Seeing that cream-colored slip is applied to the fabric with patterns colored orange, 11 can be rich in the Halaf features. 10 and 12 are bowl-type pottery often discovered from the Ubaid sites. Just like others, however, these are strong in Halaf pottery features from their fabric, form arrangement and coloring. 6 is a red burnished pottery, containing a lot of straws in its fabric, which owns such vertical-parallel patterns as are colored dark black on the red painted field. This kind of pottery are found in only Choga-Mami and Ras al-Amia.

③ *Level III* (Fig. 48)

The neck portions of the straight-shoulder jars, typical in the Halaf Period, (1...4, 6) are generally long in big ones, whereas short in middle-sized and small ones. Among them are jars whose shoulders are fitted with 4 lugs (2, 6). 4 is the jar whose inside rim has a projection band for a lid. This type is scarcely found from any other site belonging to the same period. With regard to Level II finds, as already mentioned, holes were observed on the inner projected parts, while the holes here are identified on the rims themselves. Bowls 7 and 8 are provided with simple red parallel-line patterns, and are carefully finished with good burnish. The small holes of 8 are those of repair, pierced one way from outside toward inside. In the meantime, almost all of the Ubaid pottery were of both-side perforations. Such vessel shapes as 7 and 8 are also recognizable in Ubaid pottery. Plain deep bowl 12 is the type successively seen in Halaf pottery or Ubaid pottery. The pottery with a ridge around the bulge, 13, is the one representative of the Halaf Period in the other sites belonging to the same period. Here at Songor B, however, very few have been unearthed. This is yet the problem unsolved, especially with regard to the quality and quantity of this type.

④ *Level IV* (Fig. 49)

The designs of deep bowls (1...4) are chiefly drawn outside while several parallel lines are running near their inside rims. They adopt multiple colors of red, black, and white. Their shapes are shown in Fig. 54-13. The bowls (5, 6, 8, 9, 10...14) are the largest in number. All of their innersides are filled with delicate patterns. Probably

the bottom fragments with ring base 16...24 belong to the shallow bowl pottery. 15 is a base of a fruit stand and is the one rarely discovered, which seems to have been intended for some particular use.

The characteristic patterns of the finds from Level IV are cross hatching, chequer, circle, wavyline, and rosette. Besides, there are such animal designs as bukranium, bird and leopard. The finds from this level closely resemble those of the Halaf Period at Songor A, from which both are judged to come from the similar generation.

⑤ *Pottery from the Graves* (Fig. 50)

As already mentioned, the levels identified at Songor B are four in all, which are dated to the Halaf and Ubaid Periods. But many graves have been found to have destroyed these remains. These graves date to the Jamdat Nasr, Early Dynastic, Isin-Larsa/Old Babylonian, Parthian/Sassanian and Islamic periods. Among them, the graves in the Isin-Larsa/Old Babylonian Periods were predominant. The pottery shown in Fig. 50 were unearthed from such graves.

⑥ *Stone Artifacts* (Figs. 56, 57) Refer to Chapter VI.

2. TELL SONGOR C

(1) Process of the Excavation

Tell Songor C, about 100 m north-eastern apart from Songor B, is a small tell of 40 m in the north-south direction, 30 m in the east-west direction, and 1 m in relative height. Its topmost portion is 88.25 m above the sea level. Excavation began on February 4, 1978 and lasted until December 1979 with several intermissions on the way (Fig. 51).

(2) Levels and Remains (Fig. 52, 53)

This is a very low and flat tell measuring only 1.6 m deep from the surface soil down to the virgin soil.

Two levels belonging to the Ubaid Period have been identified here. Owing to the grave-disturbance caused in the Islamic Period and the erosion presumably resultant from the floods of the Diyala, they were very poor in survival conditions. Level I is a building settlement uncovered within a block of 15 m × 25 m, having two

floor levels (Fig. 52, Ia, Ib). On the other hand, we could not confirm any remains on Level II in spite of the research carried out mainly at Grids IV-6 and V-6 in the northeastern part of the tell. Only two floor levels mixed with black or green ash have been uncovered here.

Level I perhaps consists of a unit of buildings, where there used to be 18 rooms. Each room is a square of around 2 m a side. But parts of their plan is not clear. The wall made of "tauf" is irregularly about 70 cm thick. We could find several entrances to the building. Door sockets were uncovered beside the oven in R-7 and at the mid-west between R-4 and R-3. In the east of R-5 there was an oven, in front of which a small gypsum laid floor has been excavated. And in the south of R-1 we saw a drainage of 7 m length paved with potsherds. Furthermore, from the underlying level (Ib) below this drainage, 2 series of hearths were discovered.

(3) Finds

1) Pottery (Fig. 54)

Jars: As seen in 1, 3, 4, 7, and 8, small-and middle-sized jars are usually short-necked. Some are furnished with 4 lugs on the shoulder. 8 has fish scale patterns, while 7 is decorated with delicate patterns. Just as 2 and 6, some jars have rather long rims. The jars similar to these have been uncovered at Songor A (See Fig. 40). And the jars whose inner rim is fitted with a projection for a lid (10) were discovered here. Deep bowl 14 is the type continuously adopted since the Halaf Period with patterns painted all over the outside portion. An infant was found buried inside this bowl.

Shallow Bowls: 11 is a little taller with patterns painted chiefly on their outside. And lots of carinated shallow bowls, resembling 14, were also discovered. 15 has cross hatching incisions on its bottom. The Ubaid incised pottery unearthed at Tell Songor are limited only to this type.

Tortoise Jar: This is a little smaller than the one (Fig. 36-1) which was found from Songor A, but its vessel height is taller.

Beaker-type Pottery: There were unearthed five pieces of it and a few more similar ones. Their vessel walls are rather thin with their clayish fabric carefully finished. Their resemblances are seen among the finds from Hajj Muhammad Sites. We could also find the same black paint on the red burnished pottery unearthed at Songor B (Fig. 47-6).

The pottery unearthed from Songor C generally have delicate patterns, colored dark green, red, and dark purple. We can see cross-hatching, wavyline, lozenge, fish

scale, zigzag, triangle, herringbone, and dot patterns here. And then, as concrete ones, there are bukranium, bird, snake, and leopard patterns. Most of them are composed of clayish fabric and thin vessel walls. Slip or something like that is used for their finishing in elaborate touch.

2) *Stone Artifacts and Other Finds* (Figs. 55, 56, 57)

Flint artifacts are chiefly drills, sickle-blades, and scrapers. No arrow-head has been unearthed. This situation is similar to that of Level I at Songor B. As for the raw material, there is very few obsidian and some semi-transparent light brown flint, neither of which is originated in Hamrin. So these raw materials seem to have been brought here from some other areas. The other finds are stone vessels, discoidal and globular rubbing stones, whet stones, and mace heads, while earthen spindle whorls and bentnails have come uncovered (Fig. 55). As for the stone artifacts, see Chapter VI.

3. CONCLUSION

Tells songor consist of three tells, A, B, and C, located near the junction of two rivers, the Diyala and the Narin which run to the north of the Hamrin Mountains. In addition, the Hamrin Mountains happen to be on the border between the Zagros Mountains and the Mesopotamian Lowland. Consequently, attention had been focussed to this area for such problems as the origin of primitive farming and its propagation process, the Diyala area and cultural exchange roads to and from the Iranian Highland. Thus, the Hamrin Dam construction enabled us to start all of the above researches all at once, and these problems are being solved one by one.

Tells Songor B and C are neolithic sites chiefly dating to the Halaf and Ubaid Periods. Given below are the features and problems so far cleared as the result of the current investigation:

The Halaf Period

1. "Tauf" is used for the building walls. Despite the fact that mud bricks were adopted in the Samarran buildings discovered at Songor A, this mode is not taken over into the Ubaid and Halaf Periods.
2. As the levels get upper, the buildings become larger. We see this situation in Levels III and II accommodated with gypsum floors.

3. None of such typical pottery (cream bowl) in the Halaf Period have been identified as wide-mouthed, swollen from neck onto shoulder and body, smaller in the vessel height compared with the sizes of the body and rim portions. Flat-based bowls have not been unearthed, either.¹⁾
4. There have been uncovered many bowls with ring base, inside and outside of which are mainly painted with cross-hatching. On the inside bottom, we see zigzag, bird, concentric circle, and rosette patterns. We rarely see bukranium and series of lozenge patterns. At Tell Arpachiyah, such pottery as flat-based shallow bowls and bowls, were unearthed whereas there were very few bowls with ring base.²⁾
5. Though the shallow bowls with ridges around their bodies are commonly found among the finds in the Halaf Period, only three fragments of such kinds are unearthed at Tell Songor. What is more, they are altogether with the plain ones.³⁾
6. Deep bowls were not found at Arpachiyah, but were unearthed from Level XX of Tepe Gawra.⁴⁾ However, it is understood that such ones are found abundantly at Tells Songor B and C, and further have been traced up to the Ubaid period. On their outsides, they are carefully finished with delicate circle, rosette, cross-hatching, and lozenge patterns, while, on their inside rims, several parallel lines are usually drawn. They are colored red or black, and white is used on blank spaces.
7. The big bowls of about 30 cm in diameter with their rims bent inward mainly adopt simple parallel-line patterns. Some are arranged with wavyline patterns outside to make a certain portion reserved from coloring. These types and patterns are still used in the Ubaid Period.
8. Almost all of the painted pottery have swollen shoulders and ridges, some of which are fitted with a projected band for a lid on their inner rims. Such pottery as have a projected band for a lid are seen neither at Arpachiyah nor at Tepe Gawra. This method has been used not only for the bowls, long-necked jars, short-necked jars, but also for the shallow bowls. And then, this type is widely used later in the Ubaid Period. There are plain long-neck jars uncovered, too. They have no ridges on the shoulder, many of which are of semi-global shapes.
9. Lid like painted pottery are often fitted with cross patterns outside with a hole of about 5 mm made in the center. This sort seems to have been used as a lid. Fruit stand were also unearthed.
10. As for stone artifacts, sickle blades have been uncovered, but not a single arrow-head. The discovery of querns makes us consider that the dwellers used to live de-

pending on farming. Arrabaster-made stone cups were uncovered as well.

11. Terracottas and amulets have rarely been discovered here.

In the Halaf Period of Tell Songor, simplified technique is observed on the painted pottery from the lower and upper levels, and in the upper levels it has something to do with the Ubaid culture. Thus, the southernmost limit of the Halaf pottery would be around Tell Songor B and Choga-Mami,⁵⁾ which falls on the latter part of the Halaf Period. Accordingly, there is a possibility of its contact with the Early Ubaid.

The Ubaid Period

So far excavated are the graves from Songor A, the pottery kilns and big ditches from Songor B, and the dwelling remains from Songor C, the features of which are to be mentioned below:

1. Three hills at Songor independently had such different uses as grave yard, pottery kiln and dwelling place.
2. The buildings are built of "tauf", not of mud-bricks.
3. From the discovery of 13 pottery kilns, it is considered that some people were engaged in pottery-making as their principal occupation.
4. It is their burial method that infants were found from under the floor inside the house, while adults were buried outdoors in the grave yard.

As for the finds, there are the following characteristics:

1. *Tortoise jar*: Long spout, thin in vessel thickness, high in vessel height.
2. *Carinated shallow bowl*: Everted rim with a ridge recognized near the bottom. The bottom is not flat but rather round. There are cross-hatching and full-painted patterns inside, and on its bottom we see rosetta, cross-hatching, triangle, and bukranium patterns.
3. *Bowl-type pottery*: Most of them are small with round bottom. Fabric is of light green clayish quality and it is about 2 mm in vessel thickness.
4. *Beaker-type pottery*: Several of this kind, strongly reminiscent of by the Hajji Muhammad type, have been uncovered from Tell Songor C. Very thin in vessel thickness with fine delicate patterns. This is likely to represent the characteristics of the Early Ubaid.
5. *Double-mouthed jar*: There are some varieties. For example, some have their inner projection for a lid stuck together and others have their neck portions functioned as rims by excessively bending them outward. This sort has been unearthed from the

levels in the Halaf Period, too. But there is no great difference between the things of both periods. Slight differences are that the hole supposedly for the string to go through is made on the projected band for a lid of the jar in the Halaf pottery while the hole is positioned on the rim of the jar in the Ubaid pottery.

6. *Deep bowl*: Slightly everted rim and swollen body; its bottom is rather small compared with the whole body size. Fine patterns are carefully painted outside and several parallel lines are around the inside rim. This kind has existed since Tell Songor Halaf Period, but not in the Early Ubaid Period of South Mesopotamia or Ras al-Amiya.⁶⁾ In North Mesopotamia, however, this can be seen from Level XVIII of Tepe Gawra.⁷⁾ Thus, this kind of vessel must have existed in the time and place at which the Late Halaf and the Early Ubaid had some contact with each other.

7. *Big bowl*: About 30 cm in diameter and about 7 cm in vessel height in most cases. They are often colored orange or red with the reserved wavyline patterns. This kind of shape and pattern had been continuously used since the Halaf Period at Tell Songor.

The vessel shapes mentioned above had continued from the Halaf Period to the Ubaid Period at Tells Songor B and C.

This seems to have resulted from the contact of Late Halaf culture and Early Ubaid culture, revealing the characteristics of Tells Songor B and C.

8. *Boat-type pottery*: There are two kinds of oval boat-type pottery. One is very short in height, and concrete just like a miniature, but must have worked as a container. The other is tall in vessel height with its nearly vertical bulge, whose outside surface is patterned with wavyline, cross-hatching, or all-over paint. This kind of vessels have been found at Tells Songor B and C in quantity, suggesting that it was necessary to use boats in the dwellers' daily life.

9. *Jar*: Excessively everted rims and global bodies in many cases. Their bottoms are generally round. Small-and middle-sized ones have short necks with gentle ridges around their bulges fitted with four lugs on their shoulder portions.

10. *Bowl*: Nearly vertical rim and round bottom. Their patterns are usually parallel lines, wavyline, or cross-hatching. This sort has been uncovered in large numbers, but their patterns are rather coarse.

11. *Stone artifacts*: Flint drills are largest in number. Others are flint sickle blades and scrapers. There is no arrowhead. It may suggest that the inhabitants used to rely on farming, not on hunting. And a lot of small drill bits found there may tell us that people would often be busy repairing their pottery by boring it. Besides, querns,

whet stones, palettes, round stone plates, and stone vessels have been uncovered. 12. *Others*: Incised clay spindle whorls, disk-like objects made of potsherds, and earthen bent-nails have come discovered.

It is, therefore, considered that the lowest level of IV at Songor B may have begun to belong to the Late Halaf Period already. We see the pottery patterns more and more simplified toward the upper levels. And there were some cultural contacts between the Halaf and the Ubaid as the result of the break of the Early Ubaid culture. And this influence is gradually shown in type and pattern of the pottery uncovered; thus in Level II such early Ubaid culture as based on the Halaf culture and different from anything in South Mesopotamia was born. As a whole, they closely resemble in terms of pottery type to Ras al-Amiya, located 60 km south of Baghdad. There were also some contacts between here and the Iranian Highland, as suggested by the red burnished pottery. After all, their age may probably be in the Early Ubaid (Ubaid 3) involving a lot of Halaf and Iranian features in themselves.

Notes:

- 1) Mallowan, M. E. L., 1933, "Excavation at Tell Arpachiyah", *Iraq* Vol. XI
- 2) *ibid.*
- 3) *ibid.*
- 4) Tobler, A. J., 1950, *Excavation at Tepe Gawra*, Vol. II Philadelphia
- 5) Oates, J., 1968, "Prehistoric Investigations Near Mandali, Iraq", *Iraq* Vol. XXX
- 6) Stronach, D., 1961, "The Excavation at Ras Al-Amiya", *Iraq* Vol. XXIII-2
- 7) *ibid.* Note 4)

V TELUL HAMEDİYĀT

The tells called by the name of Hamediyāt are low hills stretching towards southwest in a row (Fig. 2). We put sounding at one of them from December 1978 to March 1979. Judging from the finds, all the remains over the hills seem to be dated to the Parthian/Sasanian period. This settlement might have been connected to the Tells called by the name of Khabāri.

Architectural Remains

One of the structures unearthed has been consisted of the square room which contained a row of big, tall jars laid against the wall (Fig. 58-10, PL. 23-2, 3, 4) and the small twin rooms, upper and lower, which were coated with asphalt-like material on gypsum and conducted by a pottery pipe each other (Pl. 23-6). They might have been a brewhouse and the belonging storehouse. There were also found a big kiln consisting of two rooms (Fig. 58-1, Pl. 23-1) and some small rooms coated with gypsum on the floors and walls nearby.

Small Finds

Among the pottery-sherds recovered, the blue glazed potsherds and a big jar with handles are noteworthy, which are datable to the Parthian/Sasanian period (Fig. 58-11). The big, tall jars mentioned above are also remarkable, over 1 m in height and 60 cm in the widest diameter with pointed bottom and coated with asphalt-like material inside (Fig. 58-10, Pl. 23-4). The other finds are iron fragments, small clay lumps impressed with stamps and fragments of glass wares (Fig. 58-2~8; Pl. 23-5).

The finds by this sounding are the same as those by surface gathering from other places in Hamediyāt and Khabāri.

VI STONE ASSEMBLAGES FROM GUBBA AND SONGOR

In this report the stone assemblages¹⁾ from Tells Gubba and Songor are briefly described. The inventories of the assemblages so far studied are presented.

Of the stone assemblages shown in Tables 1 to 7, the lithic artifacts are manufactured on chert-like or agate-like flint and silicified shale, but obsidian is rarely used for the raw material. (Fig. 57-8, 9, 20) An interesting problem in this connection is that a very characteristic agate-like flint, which is semi-transparent, light-brown coloured and of extreme compactness of texture, was often used for the raw material, especially for regularly detached blades or bladelets, at Songor B (Levels I and II) and Songor C (Levels IA, IB and II), although a single artifact on such flint has not been confirmed at Gubba.

As to *débitage*, considerable difference is observed between the assemblages. All the levels at Gubba have yielded many more blades than bladelets, whereas more bladelets are recognized than blades in the four assemblages from Songor B and Songor C (SB:I, SC:IA, SC:IB and SC:II). There are also differences in tool inventory from level to level. Table 8 is the cumulative graph showing such difference in the representative stone artifacts from seven levels (Levels IV and VII of Gubba, Levels I²⁾ and II of Songor B, and Levels IA, IB and II of Songor C). The most distinct linear ascents in this graph are that of SB:I between Items 8 and 9, and those of G:IV and G:VII between Items 1 and 2. Such sudden rises seem to indicate that drills played an important role in Level I of Songor B, and the two levels of Gubba are characterized by many sickle blades. Also, it is observed that scrapers play a considerable role in Level II of Songor B and Level II of Songor C.

During the excavational works at Songor, a probable Palaeolithic artifact was unearthed in Grid VII-13 of Songor B. (Fig. 56-1) It was found in the light-brown coloured soil deposit, which we had called "Virgin Soil", at the depth of 145 cm below its top surface (165 cm below the surface of the tell). The flint itself is chert-like and light-grey coloured, and this kind of flint is fairly often found in the Hamrin area. Its edges are so slightly abraded that it is unlikely that it was carried to this spot by natural agency from very far away. Its dorsal surface is considerably patinated white. It is a flake tool with a distal end pointed by direct, semi-abrupt retouch along both lateral edges. The original shape of the blank on which this retouch was executed seems to have been

roughly triangular. It has at least four flake scars on the dorsal surface. These scars show neither centripetal nor semi-parallel pattern, and it is thought that the blank was not a typical Levallois point. The butt is convexly faceted, though it is not of “chapeau de gendarme” type. Techno-typologically, it can be classified as Mousterian point made on Non-Levallois flake.

If this artifact really is a Middle Palaeolithic product and is not derived from a very distant place, the “Virgin Soil” can be dated back to the Pleistocene. It is, therefore, possible to re-evaluate the “Virgin Soil” in connection with the Pleistocene topography of the surrounding area.

Notes:

1) “Stone assemblage” meant in this report is “a set of stone artifacts deriving from an undisturbed archaeological level”, which in the case of Tells Gubba and Songor consists of (a) lithic artifacts comprising core, débitage (all of the results of core reduction sequence) and tool and/or weapon and (b) stone objects that do not seem to be directly connected with débitage.

(a) Lithic artifacts

(Core)

Various morphological types

(Débitage)

Cortical flake: Flake with cortex on all or almost all of its dorsal surface and butt.

Partly-cortical flake: Flake with both cortex and previous flake scars on its dorsal surface.

Non-cortical flake: Flake with previous flake scars on all or almost all of its dorsal surface and butt.

Blade: Non-cortical flake whose length is equal to or more than twice its width.

Bladelet: Blade whose width is less than 1.2 cm, or whose length is less than 5 cm.

Crested flake: Flake or very often blade with more or less straight crested ridge on its dorsal surface. Such a crested ridge is sometimes prepared on inappropriately shaped stone as a guiding line for the detachments of this initial flake and subsequent blades or bladelets.

Core-rejuvenation flake: Flake detached from core platform, core side and etc. This detachment is intended for making easier the subsequent débitage removal from the modified core.

Burin spall: Specially shaped retouch-flake produced in making burin facet.

Chip: Flake, large or small, which is regarded to have been produced accidentally during débitage or tool making. Very difficult to be identified.

(Tool and/or Weapon)

Retouched or unretouched. Any kind of blank can be used for it.

(b) Stone objects

2) This is a part of Level I and is directly related to pottery kilns.

Bibliography

- Bordaz, J., 1970. *Tools of the Old and New Stone Age*. New York
 Bordes, F., 1961. *Typologie du Paléolithique ancien et moyen*. L'Institut de préhistoire de l'Université de Bordeaux
 Mortensen, P., 1973. A Sequence of Samarran flint and Obsidian Tools from Choga Mami. *Iraq*, Vol. XXXV, Part 1, 37-55
 Tixier, J., 1963. *Typologie de l'Épipaléolithique du Maghreb*. Arts et Métiers Graphiques, Paris

Table 1 Stone assemblages from Gubba		Level VIIIb, c (Core)	
Level IV		Conical (Pyramidal)	2
(Core)		Discoidal	1
Bi-conical (Bi-pyramidal)	2	Miscellaneous	4
Conical (Pyramidal)	1	(Débitage)	
Prismatic (Cyrindrical)	1	Cortical flake	4
Globular	1	Partly-cortical flake	39
(Débitage)		Non-cortical flake	10
Cortical flake	6	Blade	26
Partly-cortical flake	29	Bladelet	9
Non-cortical flake	35	Fragmentary	
Blade	65	flake	16
Bladelet	8	blade	19
Core-rejuvenation flake	3	bladelet	4
Chip	12	Crested flake	1
(Tool and/or Weapon)		Chip	2
Chopper	1	Fragment	11
Scraper	1	(Tool and/or Weapon)	
Retouched blade	1	Finely retouched blade	2
Drill	2	Truncated flake,	7
End-scraper	1	blade and bladelet	
Notched flake and blade	3	Sickle blade	23
Truncated flake and blade	8	(Stone object)	
Finely retouched flake,	6	Quern	7
blade and bladelet		Elongated pebble	2
Sickle blade	25	Rubbing stone (?)	2
(Stone object)			
Quern	10		191
Elongated pebble	1		
Rubbing stone (?)	3		
Polished axe	1		
	226	Table 2 Stone assemblage from Samarra floor, Songor A	
		(Core)	
		Miscellaneous, for bladelet	1

(Débitage)	
Cortical flake	1
Partly-cortical flake	5
Non-cortical flake	6
Blade	1
Fragmentary	
flake	4
blade	2
Chip	5
(Tool and/or Weapon)	
Hammer stone (?)	2
Scraper	2
Denticulated flake	1
Sickle blade	2
(Stone object)	
Stone	6
Chipped stone	1
Fragmentary quern (?)	2
Elongated pebble	5
Rubbing stone (?)	10
Stone platter (?)	1
	57

Table 3 Stone assemblage from
Level I, Songor B

(Core)	
Prismatic (Cyrindrical), for bladelet	88
Globular, for bladelet	33
Conical (Pyramidal), for bladelet	32
Discoidal, for bladelet	1
Miscellaneous, for bladelet	62
(Débitage)	
Cortical flake	168
Partly-cortical flake	394
Non-cortical flake	95
Blade	25
Bladelet	73
Fragmentary	
flake	22
blade	15
bladelet	27
Crested flake	11

Core-rejuvenation flake	5
Burin spall	1
Chip	31
(Tool and/or Weapon)	
Hammer stone	1
Chopping-tool	1
Axe/adze	3
Retouched small flake	76
(Drill bit)	
Drill bit	1
Retouched flake, small flake and bladelet	19
Burin on break	1
Scraper	1
Steep scraper	11
Truncated blade and bladelet	6
Sickle blade	6
Geometric microlith	1
(Stone object)	
Chipped large stone	1
Quern (?)	1
Fragmentary quern (?)	1
Fragmentary whetstone (?)	5
Elongated pebble	5
Fragmentary elongated pebble	5
Rubbing stone (?)	6
Blank of polished axe (?)	2
(Obsidian)	
Partly-cortical flake	1
Non-cortical flake	1
Blade	2
Fragmentary blade	1
	1241

Table 4 Stone assemblage from
Level II, Songor B

(Core)	
Prismatic (Cyrindrical), for bladelet	33
Conical (Pyramidal), for bladelet	12
Globular, for bladelet	7

Bi-conical (Bi-pyramidal), for bladelet	2
Discoidal, for bladelet	1
Miscellaneous, for bladelet	32
(Débitage)	
Cortical flake	53
Partly-cortical flake	160
Non-cortical flake	27
Blade	27
Bladelet	30
Fragmenatary	
flake	7
blade	8
bladelet	4
Crested flake	4
Core-rejuvenation flake	5
Chip	15
(Tool and/or Weapon)	
Hammer stone	2
Pick(?)	1
Fragmentary pick (?)	1
Chopper	1
Burin on break	1
Burin on truncation	1
Scraper	3
Steep scraper	2
Drill bit	2
Backed bladelet	1
Sickle blade	2
Geometric microlith	2
(Stone object)	
Elongated pebble	1
Fragmentary elongated pebble	2
Rubbing stone (?)	2
Fragmentary rubbing stone (?)	1
Fragmentary whetstone (?)	5
Blank of polished axe (?)	1
Fragment of stone vessel	1
(Obsidian)	
Blade	1
Bladelet	3
Fragmentary bladelet	2
Scraper	1

Table 5 Stone assemblage from
Level IA (Floor),
Songor C

(Core)	
Prismatic (Cyrindrical), for bladelet	49
Conical (Pyramidal), for bladelet	19
Globular, for bladelet	12
Bi-conical (Bi-pyramidal), for bladelet	2
Miscellaneous, for bladelet	27
(Débitage)	
Cortical flake	63
Partly-cortical flake	201
Non-cortical flake	107
Blade	11
Bladelet	99
Fragmentary	
flake	44
blade	11
bladelet	30
Crested flake	4
Core-rejuvenation flake	13
(Burin spall* (finely retouched)	1)
Chip	42
(Tool and/or Weapon)	
Hammer stone	1
Retouched small flake (Drill bit)	14
Retouched small flake	2
Backed bladelet	1
Truncated blade and bladelet	4
Notched flake	1
Steep scraper	1
Finely retouched burin spall*	1
Sickle blade	10
Geometric microlith	1
(Stone object)	
Elongated pebble	3
Chipped large stone	3
Whetstone (?)	1
Fragmentary whetstone (?)	8
Rubbing stone (?)	5

Polished axe	3
Blank of polished axe (?)	2
Holed stone	1
Holed calsite	1
Ornament	1
Pigment (?)	1
(Obsidian)	
Bladelet	4
Prismatic core for bladelet	1
	806

Table 6 Stone assemblage from Level IB (IB and IB Floor), Songor C

(Core)	
Prismatic (Cyrindrical), for bladelet	73
Globular, for bladelet	25
Conical (Pyramidal), for bladelet	24
Discoidal, for bladelet	2
Keel-shaped, for bladelet	1
Miscellaneous, for bladelet	80
Blank of bladelet core	2
(Débitage)	
Cortical flake	139
Partly-cortical flake	629
Non-cortical flake	179
Blade	33
Bladelet	163
Fragmentary	
flake	42
blade	26
bladelet	22
Crested flake	6
Core-rejuvenation flake	8
Chip	70
Fragment	5
(Tool and/or Weapon)	
Hammer stone (?)	1
Chopper	1
Scraper	4
Steep scraper	5
Core-like scraper	1

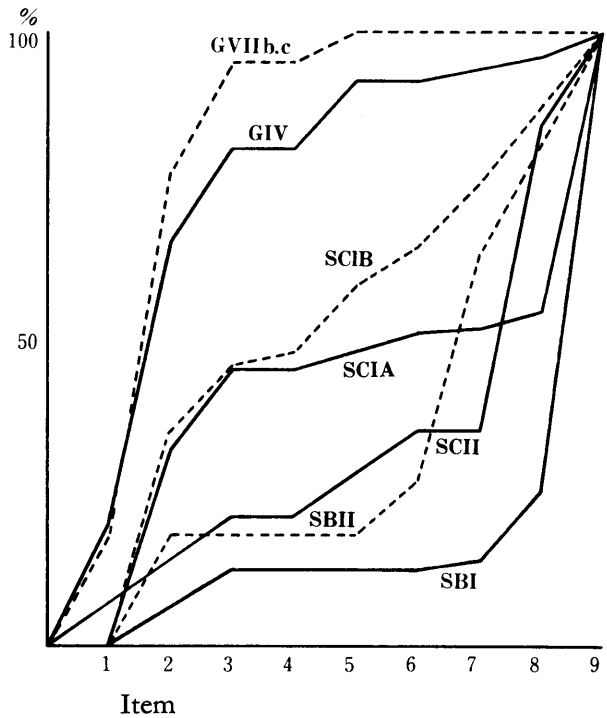
Retouched flake and bladelet (Drill bit)	4
Retouched flake, blade and bladelet	7
Notched flake	2
Backed bladelet	2
Denticulated flake	1
Truncated flake and blade	4
Sickle blade	13
Burin on truncation	1
(Stone object)	
Elongated pebble	4
Rubbing stone (?)	4
Fragmentary rubbing stone (?)	1
Chipped stone	5
Whetstone	1
Fragmentary whetstone (?)	5
Polished axe	1
Blank of polished axe (?)	2
Stone	2
Bead	1
Fragment of stone vessel	3
Gypsum fragment	1
Pigment (?)	1
(Obsidian)	
Non-cortical flake	1
Bladelet	4
Fragment	2
Ornament	3
	1616

Table 7 Stone assemblage from Level II, Songor C

(Core)	
Prismatic (Cyrindrical), for bladelet	31
Conical (Pyramidal), for bladelet	5
Discoidal, for bladelet	5
Globular, for bladelet	1
Miscellaneous, for bladelet	14
(Débitage)	
Cortical flake	61
Partly-cortical flake	175

Non-cortical flake	19
Blade	3
Bladelet	20
Fragmentary	
flake	2
blade	2
bladelet	14
Crested flake	3
Core-rejuvenation flake	2
Fragment	14
(Tool and/or Weapon)	
Steep scraper	7
Backed flake	1
Retouched bladelet	1
(Drill bit)	
Retouched small flake	1
(Drill bit)	
Retouched blade	1
Truncated blade	1
Sickle blade	1
(Stone object)	
Quern	1
Elongated pebble	5
Rubbing stone (?)	3
Fragmentary rubbing stone (?)	2
Chipped stone	7
Fragmentary whetstone (?)	18
Discoidally shaped stone	1
Holed thin stone	1
Door socket	2
(Obsidian)	
Fragment	4
Bead	3

Table 8 Cumulative graph showing different inventories of representative stone artifacts from seven levels at Gubba and Songor



1	Quern	6	Backed piece
2	Sickle blade	7	Scraper
3	Truncated piece	8	Steep scraper
4	Denticulated piece	9	Drill (bit)
5	Finely retouched piece		

VII MAKING A MODEL OF THE BUILDING OF LEVEL VII AT TELL GUBBA

1. Records of the Structural Remains

The structure built on Level VII was very interesting from architectural aspect because of its containing many novel features of construction, such as round shape and vaulting remains of corbeled wall. Since it is among the most unique structures, reconstruction of all the structural remains at some other place just as it was found at the excavation site is currently under consideration. It was, therefore, a pressing need that at least its main part should be preserved by making a correct copy of the structure as a model. We tried recording its existing situation as correctly as it was, so that we could draw a measuring plan precisely and take a great many of recorded photographs. However, we thought it still insufficient to grasp the characteristics of its form and construction. Thus, we came to the conclusion that, in order to fill up such a defect, a record in three-dimensions of high fidelity should be indispensable for its future reconstruction as well as for making a high-precision model, while proceeding with our measurement work. In this connection, it is the very model, which we call a 'primary model', made under excavation at the site that could fulfill our need.

(1) Measuring

Besides the datum line already prepared, a new datum point for measuring within CW₅ was fixed nearly at the center of this building, taking the structural feature of 'circle' into consideration. Next, with the grid line stretching northward from this point defined as 0°, it was further marked off into divisions clockwise, 25°, 45°, 90°, 135°, 180°, 205°, 225°, 247°, 270°, 315° and 351°, each direction of which is to be a datum line for measuring the section. The choice of these angles was resulted from the characteristics of the wall faces (Fig. 6), and intersection of vertical plane including datum line with the wall face was measured. As for the wall plans, the longitudinal and latitudinal distance were measured from the other radiating datum lines at intervals of 10, so that we could make both the topmost plan and the ground plan (Fig. 59). As for the elevations, development of the presumably important wall faces were measured. Outside of CW₅, however, measuring was based on the original datum lines crossing at right angle to one another. A scale of one to twenty was applied here in principle.

(2) Primary Model (PL. 16-4)

This model covers the core up to CW₄, which is regarded as most complicated and important portion, and the south-west portion of CW₅ (180°-270°), where buttresses are well preserved. A scale of one to forty was applied here. As the model material, balsa wood is chosen because of its ease in processing and convenience in transportation. The balsa wood, 2 mm in thickness apiece, is equivalent to 8 cm thickness in actual size. The shape of the structure which is sliced off in 8 cm thickness each from datum position is patterned on paper according to a scale of one to forty. Then, we went on piling up each plate of balsa wood as directed by the pattern plan. Each paper pattern was prepared based upon the ground plan and the sections of this structure. Here, the shape of the paper pattern is settled on the presumption that an actual wall face makes a smooth change between each measuring point appearing on the outline of the paper pattern, namely, the horizontal section of the structure.

Thus, by piling up each piece of balsa wood one after another, the whole model was to be eventually finalized. As for the portions indescribable on the drawing such as partial fixtures applied to the wall faces and wall bodies, we aimed at acquiring high fidelity through modification given on the very model after they were directly referred to the solid facts at the excavation site. Joints, which ought to appear on the surface, have been excluded from this model and their description are left to the drawing. Careful attention was focussed upon copying the variation in height at the topmost plane with accuracy.

2. Genuine Model of the Structural Remains (PL. 1-2, 3)

In 1980 we started to make a genuine model of the remains based on a great many of the surveyed drawings, recorded photographs, and the balsa-material model so far obtained from the site. Fortunately we could prosecute the two years' studies for reconstruction of the remains on Level VII, thanks to the Grant-in-Aid for Scientific Research in the Ministry of Education, including the model-making cost.

(1) Characteristics of the Model

This model is characterized by the achievement that the remains, which had once disappeared under water, could be almost completely reproduced. Its reproduction contains all the remains on Level VII except for the west trench portion. As for our reproduction method, plywood was first piled up one upon another through the adoption of the same

method as that of the balsa model-making which had been tried on the site, and finally its formation was completed by using acrylic resin patterned upon the plywood material model. Its full particulars are to be specified as follows:

- ① The model is made on a scale of one to forty.
- ② The model is cut into the north-south direction and the east-west direction respectively, on each section of which joints of bricks are represented (PL. 16-2, 3).
- ③ The original model uses plywood in the thickness of 2.0 mm, while the final model uses acrylic resin for formation.
- ④ The surface is finished up with vinyl paints making a distinction among brick portions, unexcavated portions and natural soil portions (PL. 16-1).

(2) Process of Model-Making

Next, the process of work is to be roughly mentioned below:

1) *Original Model-Making*

- ① Plywood is cut out according to the plan of each horizontal cross-sectional view and then piled up in order. Measured joints of bricks are drawn on the top surface. Piling-up of the plywood is further corrected in accordance with the mold where the vertical cross-sectional view has been copied.
- ② By means of etching method, each assemblage of bricks on the top portion is carved in the acrylic board, which is then patterned with silicone resin. Then, with plaster poured into the mold, small plaster boards of the brick assemblage in the thickness of a piece of mold are thus obtained. Next, the plywood lying on the top is replaced by them.
- ③ All the portions including the brickless ones are to be planed down according to the actual measurement, and the model is to be finished by applying emulsion putty to it.
- ④ The original model is to be divided along prescribed cross-sections; besides, it is to be finished while dividing it further into many other parts.
- ⑤ The joints of bricks are carved in the main side faces of the wall and the main sections of the north-south direction and the east-west direction. As for the joint-representation, polyester sheets, where surveyed drawings are etched, are used instead of plaster.
- ⑥ Among the various remains, pits and built-in pottery are to be produced with acrylic

resin apart from the original model itself.

2) *Resin Model-Making*

Then, the process of completing the model used by resin is to be given below:

- ① Each part of the original model is molded in silicone: the model is coated with silicone in the thickness of 2–3 mm, and its outside is further hardened by plaster.
- ② The inside portion of the silicone mold is coated with acrylic resin about three times until 2–3 mm thickness is given. On the way, glass cloth is to be inserted there to make the resin stronger.
- ③ After applying acrylic resin, the inside is filled with foam formation resin of fivefold foaming rate. Then plaster and silicone are to be removed after the resin has been hardened.
- ④ All the parts are joined together with the joints coated with resin again for formation and adjustment.
- ⑤ Prior to the finish-coloring, three colors of the natural soil, the unexcavated portion, and the brick accumulated portion are to be determined based on the actual colors of the sun-dried bricks. Underpainting having been completed, the model is finished with those paints blown upon each portion of it which represents the quality of earth.
- ⑥ The model itself is placed on the model-stand covered with green cloth, and is kept in a glasscase.

The model completed in this way can boast itself to be one of the most excellent recordings of the remains. Moreover, it has become easier for us to introduce the remains to many people through this model. Although the unsolved problem about this is that of reconstruction as to what kind of the building used to be, our discussion using the model is coming closer to conclusion. Hence, it will not be long before our reconstruction plan should be presented to the well-wishers.

VIII HUMAN REMAINS FROM HAMRIN

1. Foreword

In the autumn of 1977 we decided to participate in the Hamrin Archaeological Project. Then the Physical Anthropological Section of the expedition planned to collect as many human remains as possible during this project for the full understanding of human remains excavated at our sites. The plan was willingly supported by Dr. Muayad Sa'id Damerji, President of the Iraqi State Organization of Antiquities and Heritage. We succeeded in putting the promptly into practice. We went on collecting human remains until March 1980 when the all of the Hamrin sites sank in the artificial lake due to the completion of the Hamrin dam, and we collected 584 remains in total.

The reason for leaving included the physical anthropological section in our project team was that we had thus for given importance to the biological analysis of Mesopotamian ancient people as well as to their analyses from cultural view points. At Hamrin, we have excavated and collected human remains in order to solve such research problems as mentioned below.

The first major objective was to document historical changes in physical characteristics of the inhabitants of the Hamrin basin. As is generally known, the Hamrin basin is located at the intersection of the roads from the northern Mesopotamia southern Mesopotamia and southern Iran. Therefore, throughout the history of Mesopotamia, the inhabitants might have been susceptible to strong cultural and physical influences from the surrounding regions. Since the earliest archaeological level of the tells in Hamrin might trace back to the Samarra period, we expected to detect physical changes which have occurred during the past 6,000 or 7,000 years. This study should be relevant not only to archaeologists but also to physical anthropologists. If we clarify how the physical characters of the early inhabitants were formed and changed, this will add a new dimension to studies of cultural change in the region.

Our studies might also lead to the identification of the people who innovated Mesopotamian civilization. The investigation of human remains is one of the most important tools for solving this problem. It requires a large number of specimens and the analysis of populations all over Mesopotamia through space and time. There are studies on the human remains of Seleucid by Hamy (1884), Kish A and W graves by Buxton (1924), Al-Ubaid by Keith (1927), Yorgan Tepe by Ehrich (1936), and Nippur by Swindler

(1956). But these studies do not provide a sufficient base for informed discussions on the people who developed the Mesopotamian civilization. We must continue to accumulate specimens in order to generate proper data. Our third objective is to assess the amount of the morphological homogeneity through time. Swindler (1956) suggested that there was outstanding similarity in the crania of all the cranial series from Nippur dwellings in the valley of Euphrates and Tigris. This view, however, is not based on enough data obtained from many specimens. Therefore, this view should be reexamined when sufficient data are obtained.

2. Collected Materials and Their Treatment

1) Collected Materials and Their Transporting

The sites intended for collection of unearthed human remains are 18 in all, i.e., the Hamrin region: 13 including 4 unearthed by the Japanese team, such as Tell Gubba, Tell Songor A, B, C; the Haditha region: 3; Ashur: 1; Babylon: 1. The Total number collected so far amounts to 584. Table 9 shows the number of materials classified into each site separately.

Two-thirds of the collected materials have already been brought into Japan and they are in the custody of the Department of Biological Anthropology and Human Ecology, Faculty of Human Sciences, Osaka University. Reconstruction and classification of skulls of 361 individuals have been done. Table 10 indicates their full particulars listed according to site, period, age, and sex. Arrival of the remaining one-third in Japan is far behind schedule due to the temporary closure of Basra Harbour. But we expect them to arrive in Japan via a port in Kuwait in the near future.

The serious problem concerning their transportation into Japan from Iraq was the soil adhering to the human remains. They were prohibited to enter Japan in order to prevent epidemics from spreading in here. To cope with this difficulty, an application was made to the Minister of Agriculture, Forestry and Fishery for a special sanction to import the soil-adhering human bones into Japan prior to their departure. After having acquired a special permit, we could bring them into our office. The soil removed from the bones was disposed of after having been sterilized by 120 centidegrees of autoclave for 30 minutes. In the meantime, other soil-adhering bones, which were found difficult to remove the soil, were sterilized by ethylene-oxide gas. After such treatment, prohibition of importing the human skeletal materials was removed.

2) Cleaning and Strengthening

It is feared that when the soil-adhering human bones are cleaned by water, plant seeds and spores might be washed away or ill-preserved bones might be broken. To avoid this, therefore, cleaning of human skeletal materials was done by the air-brush method in which glass-powder mixed-nitrogen gas or air was blown on them.

Since the bones in the old days, especially older than in the Islamic period, were often found in the state of poor preservation, strengthening of bone texture prior to reconstruction was necessary in many cases. This poor state of preservation is attributable to excessive salt and water in the ground of Mesopotamia. The bones are strengthened by sprinkling 10–20% solution of acrylic resin (Pararoid B-72) on them or leaving them intact for spontaneous drying after they are taken out from the solution when it has completely permeated them.

3. Characteristics of the Skull Form from Hamrin

Two-third of the skulls collected from Hamrin have been cleaned, reconstructed and measured so far. The skulls belong to three periods: Isin-Larsa/Old Babylonian, Parthian and Islamic periods. In this section, the forms of the skulls of each period are preliminarily reported on the basis of the metrical data, and the historical changes of the skull form in Hamrin are briefly discussed using measurements of the maximum cranial length, maximum cranial breadth, and cranial index. Only adult male skulls were analyzed. The total number of the skulls is 58 consisting of 13 Isin-Larsa/Old Babylonian skulls (Tell as-Suleimeh: 10, Tell Songor A: 1, Tell Abu Quasim: 3), 3 Parthian skulls (Tell Al-Khabri: 2, Tell Songor A:1), and 42 Islamic skulls (Tell Gubba: 18, Tell Songor: 24). Age was assessed by the eruption of the third molar and the union of basilar suture. Sex was determined by the following features: the supra-orbital ridges, the upper margin of the orbits, the muscular ridges, the mastoid process and nuchal crest. Features of the pelvis were used when necessary.

1) Skull Form of the Isin-Larsa/Old Babylonian Period

The skull form of this period is characterized by a marked long-headedness. A typical example is presented in Plate 24-1. The metric data and indices of the skulls are shown with means and standard deviations in Table II. The maximum cranial length is markedly long (190.9 mm), on the contrary, the maximum cranial breadth is relatively

small (135.7 mm). Therefore, the cranial index is small (69.9) and these skulls are classified as hyperdolichocranic. As the basi-bregmatic height is relatively high (136.7 mm), the breadth-height index (103.6) is acrocranic type. In frontal view, the contours of the cranium are high and narrow. The height-length index (71.3) is orthocranic. On the whole, it can be said that the form of the Isin-larsa/Old Babylonian skulls is long and narrow. Classification of the indices is shown in Table 12.

2) Skull Form of the Parthian Period

As mentioned above, there are only a few adult male skulls from this period. Table 11 shows their means and measurements. The maximum cranial length and breadth are relatively short and narrow (181.5 mm, 130.7 mm), and the basi-bregmatic height is medium. The cranial index (73.5) is dolichocranic, and breadth-height index (103.2) is acrocranic. The length-height index (74.4) is orthocranic. The Parthian skull is similar to the Isin-Larsa/Old Babylonian skull in shape, but smaller in size. As the upper facial height, however, is relatively low (59 mm), the shape of the facial portion looks relatively wide. The upper facial height index (46.5) is the euryen (Pl. 24-2).

3) Skull Form of the Islamic Period

Some differences of form between the skulls from Tell Gubba and Tell Songor A were recognized. Therefore, skulls from the two tells were analyzed separately.

We will consider first the skulls from Tell Gubba. Both the maximum cranial length and breadth are medium (183.5 mm, 138.0 mm). The basi-bregmatic height is relatively high (137.8 mm). The cranial index (75.5) is relatively small but mesocranic. The length-height index (75.8) is hypsicanic and the breadth-height index (101.2) acrocranic. In the facial portion, the maximum bizygomatic breadth (130.4 mm) is slightly narrow, but the total facial height (118.8 mm) is relatively high. Therefore, the total facial index (90.6) is leptoprosopic. The skull form of Tell Gubba are characterized long-headed with bilaterally narrow face (Pl. 24-3).

On the other hand, the skulls from Tell Songor A are markedly wide bilaterally. The maximum cranial breadth (144.7 mm) is very wide, in contrast to the relatively short maximum cranial length (180.2 mm). The cranial index (81.9) is brachycranic which differs from those of the other crania, especially the crania of the Isin-Larsa/Old Babylonian Period. The basi-bregmatic height (135.5 mm) is medium. The length-height index (75.5) belongs to the hypsicanic type and the height-breadth index (93.3) to the

metriocranic. In the facial portion, both measurements (134.8 mm, 118.9 mm) of the bizygomatic breadth and the total facial height are medium, and the total facial index (88.2) is mesoprosopic. The skull form of Tell Songor A is characterized as round-headed (Pl. 24-4).

4) Historical Changes on Skull Form in Hamrin

The characteristics of the skull form of each period was described in the previous section. In this section, the historical changes of the maximum cranial length and maximum cranial breadth, and cranial index are summarized and discussed. Figure 60 shows the distribution of the dimensions of the individual skulls from Hamrin. The dimensions of the Isin-Larsa/Old Babylonian skulls are distributed in the dolichocranic range, having high maximum cranial length and low maximum cranial breadth. More than half of the skulls of this period are distributed in the hyper-dolichocranic range. The Parthian skulls, although only two are available, are distributed in the dolichocranic range. In the Islamic period, most of the skulls have lower maximum cranial length, but maximum cranial breadth varies from about 125 mm to 170 mm. The skulls of Tell Gubba are concentrated in the boundary between the dolichocranic and mesocranic ranges. However, the skulls of Tell Songor A are scattered from the dolichocranic to the brachyocranic range, and some of them reach the ultra-brachyocranic range through the hyper-brachyocranic range. These changes in time can be summarized as follows: at the beginning of the second millennium B.C., the skull form was long-headed, but changed gradually during the Islamic period, in which two forms, mesocranic and brachyocranic, appeared. The reasons for such changes are not clear, but it can be supposed that some long-headed people came into the Hamrin region in the early Islamic period, since it is not conceivable that there were remarkable changes of the life patterns and environment during this period which affected the physical characteristics of the people.

4. Comparisons of the Cranial Forms from Hamrin and Other Sites in Mesopotamia

In this section, the cranial form of Hamrin will be compared with other cranial specimens from Mesopotamia. In Hamrin, the marked changes in form appeared in the Islamic period. Accordingly, the pre-Islamic and the Islamic specimens will be compared respectively.

1) The Forms of Hamrin Crania in Pre-Islamic Mesopotamia

Figure 61 shows the distribution of the maximum cranial length and breadth and cranial index of the pre-Islamic crania. The metric data are cited from the following authors: Keith (1927) for al-Ubaid, Buxton (1931) for Kish, Swindler (1956) for Nippur and Seleucid and Ehrich (1939) for Yorgan Tepe. The data on the Neo-Assyrian crania from Haditha are based on materials collected in Haditha by the present authors.

As shown in Figure 61, some crania of Kish-A (B.C. 2,800–2,500), Kish-W (B.C. 800–500) and Yorgan Tepe (A.D. 300–400) are distributed in the mesocranic and brachycranial ranges, but on the whole, most of the skulls are concentrated in the dolichocranic range. The distribution of the Hamrin crania is similar to that of the Ur, which is close in time to the Isin-Lara/Old Babylonian period. The cranial index of the former is 69.0 and of the latter 69.9. Both are similar to that of Al-Ubaid (B.C. 4,000). The cranial form of the pre-Islamic crania of Hamrin is similar to that of the pre-Islamic South Mesopotamia (Table 14).

2) The Form of the Hamrin Crania in Islamic Mesopotamia

Metric data on the Islamic Mesopotamian crania are limited to Swindler (1956), but the data on crania from Ashur were obtained from the materials collected by the authors. The Figure 62 shows the distribution of the mean of Nippur, and individual measurements of Ashur and Hamrin. As Swindler pointed out, the position of the Nippur crania is fairly near to the center of distribution of the pre-Islamic crania. The form of Gubba crania is more similar to that of Nippur than those of Ashur and Songor A, while the maximum cranial length is shorter than that of Nippur. The Ashur crania are distributed in both the mesocranic and brachycranial ranges. Furthermore, some of the Songor A crania reach to the hyper-brachycranial and ultra-brachycranial ranges. Songor A crania are widely distributed, covering almost all ranges of distribution of Islamic crania. These comparisons show that there was a wide variation leaning towards round-headedness in northern Mesopotamia.

3) Historical Changes in Cranial Form in Mesopotamia

As mentioned at the beginning of this paper, previous studies on the Mesopotamian crania have been limited, the quantity of our material from Mesopotamia is not sufficient for discussing historical changes in cranial form in Mesopotamia. Moreover, one-

third of our materials collected during the Harmin expedition are still in the process of being analyzed. However, some discussion on such changes should be useful for future analysis.

The cranial form of the Al-Ubaid in South Mesopotamia is dolichocranic, although some of them are hyper-dolichocranic (Fig. 63). This tendency is seen in Ur near Al-Ubaid. At Kish in the middle part of Mesopotamia, a few of the crania are mesocranic, but most of them are dolichocranic and hyper-dolichocranic. In northeastern Mesopotamia, the Hamrin crania of the Isin-Larsa/Old Babylonian period are dolichocranic, similar to those of Al-Ubaid. Even in a later period, the Neo-Assyrian crania of Haditha are dolichocranic. Such a tendency was seen in the Sassanian period. Brachyranic crania are not found in this period and most of the crania are distributed in the dolichocranic range. Therefore, it can be said that since the fourth millennium B.C., the dolichocranic type has been dominant in the whole Mesopotamia.

In the Islamic period, however, some hyper-brachyranic and ultra-brachyranic crania appeared in Hamrin and Ashur of northern Mesopotamia, while the long-headed crania give a striking picture with uniformity and stability in southern Mesopotamia. This fact might suggest that the Hamrin region was not affected by round-headed type until the Islamic period and Hamrin had a somewhat close connection with southern Mesopotamia.

5. Afterword

In this preliminary report, the skull form has been studied chiefly from metric data, but most of our specimens were uncovered with post-cranial skeletons. As soon as all the other one-third of specimens arrive in Japan, we will start to process the material for a detailed analysis. Furthermore, we will analyze the specimens from many different angles by using metric and non-metric data in statistics.

This report covers measurements and indices of skulls, avoiding the problems of racial affiliation. The Mediterranean is regarded as a dominant racial type in Mesopotamia, which corresponds to hyper-dolichocranic or dolichocranic (Krogman, 1940; Ikeda, 1960, 1968). However, we believe it better to refer to its affiliation after elaborate studies on not only skull form but also on the other parts with metric and non-metric data, through which more accurate results will be expected.

The Islamic crania of Tell Songor A have a wide range of variation in the maximum

cranial breadth. This variation is considered to be too wide for a racial group to be recognized. Therefore, it seems necessary to examine the dates of specimens of the narrow-, medium- and wide-heads respectively by means of the carbon-14 dating.

In the meantime, we are to report a few more about the recently produced analytical results of the human remains unearthed in Hamrin. The analysis of the upper molar wear made by Mr. Miyakoshi, Faculty of Human Sciences, Osaka University, in his thesis indicates that even the tooth wear in the Islamic period in Mesopotamia has proved to be nearly equivalent to that in the Jōmon period in Japan.

We have uncovered a skull belonging to the Ubaid period at Tell Songor A. Though its deformation caused by earth pressure prevents us from measuring it, it is estimated that the cranial index may be hyper-dolichocranic or ultra-dolichocranic. The skull has the fourth molars on the maxilla. According to the data of 26 Ubaid babies uncovered at Tell Abada, ages of death were as follows: 50% within 6 months, 35% within a year, 15% within 2 years. This is one of the data of the death age of babies in the 4000's B.C.

Part of this preliminary report was presented at the 2nd International Symposium on Babylon, Ashur and Hamrin held under the auspices of the Iraqi State Organization of Antiquities and Heritage in Baghdad in October, 1979 (Ishida et al, in press), and it was also presented at the 3rd International Symposium in November, 1981. The present report is somewhat changed from the one which was presented at the 3rd Symposium.

6. Acknowledgements

We would like to express our sincere thanks to many personages of Japan as well as of Iraq who have given us helpful advices, encouragements and supports on the matters pertaining to excavation and collection of human remains for such a long time. Especially, we are deeply grateful to Professor S. Matano, Faculty of Human Sciences, Osaka University, for his advices, encouragements, and supports. Meanwhile, in Iraq, Dr. M. S. Damerji, President of State Organization of Antiquities and Heritage, has long given his warm support to our excavation, collection and transportation, and we shall never forget his kindness. And Dr. B. Abu-Al-Soof who was General Director of Iraqi expedition teams, Dr. T. Madhloom who was Director of Ashur Expedition,

Mr. Sabah Jasim who was Director of Haditha Expedition, and Mr. A. M. Mehdi who was Director of Babylon Expedition helped us a great deal with the matter of collecting materials. Without their cooperation, we would have failed to complete our field work. Professor S. Kanda, Department of Anatomy, Hyogo Medical College, willingly approved. Ishida to plan to go to Iraq when it was the situation was difficult in May, 1978, and enabled us to make the project of collecting human remains get on the right track. Professor J. Ikeda, Faculty of Science, Kyoto University, who is one of the authorities on the physical anthropological study of West Asia, was the first to advise. Ishida to join the research work in Iraq. It was in 1973, and since then Prof. Ikeda has always encouraged us in every respect. Many thanks are also to Dr. K. Tsuboi, Director of the Nara National Research-Institute of Cultural Properties, who greatly helped us with the realization of the collection project of the human remains in Hamrin. Members of the Baghdad Branch of Mitsubishi Corporation, kindly helped us in transportation of our specimens to Japan. Professor K. Koda, Director of Faculty of Human Sciences, Osaka University, and Professor H. Nishida, Faculty of Human Sciences, Osaka University, also kindly advised and helped us regarding the custody of the specimens.

Mr. M. Kawabata (Research Fellow of Osaka Dental College as well as a dentist) well over to Iraq as a research colleague of this project and stayed there for four months in 1979. We are also very grateful to Professor H. Masai and Mr. K. Takatsuji, Department of Anatomy, Medical School of Osaka University, for their warm cooperation.

Furthermore, we appreciate a great deal the helpful suggestions from Mr. S. Masuda, Chief of Science Promotion Section, Kokushikan University, all of the staff members of the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, and all of the colleagues of the Department of Biological Anthropology and Human Ecology, Faculty of Human Sciences, Osaka University.

References

- Buxton, D., and Rice, T., 1931, "Report on the human remains found at Kish". *J. Roy. Anthropol. Inst.* LXI: pp. 57-119.
- Ehrich, R., 1939 "Late cemetery carnia." *Nuzi*. Vol. I: pp. 570-589, Cambridge, Mass.
- Ikeda, J., 1960 "Contribution to the Anthropology to Iraq." *Acta Medica et Biologica*. Vol. VIII: pp. 109-129.
- Ikeda, J., 1968 "Human Remains from Tombs in Dailaman. Northern Iran." *Anthropologi-*

- cal Studies of West Asia*. 9: 1-35. The Institute of Oriental Culture, Tokyo
- Ishida, H., 1976 Human Remains at Al-Tar Hill A: Osteological Study. *Al-Tar* 1.
Excavation in Iraq, 1971-1974, Kokushikan University, Tokyo.
- Ishida, H., Wada, Y., Kanda, S., Fujii, H., in press "A preliminary report on the human remains in the Hamrin basin. Iraq." *Summer*, Baghdad,
- Keith, A., 1927 Report on the human remains. *Ur Excavation* Vol. I (Al-Ubaid): pp. 214-240, Oxford
- Krogman, M., 1940 "The people of early Iran and their ethnic affiliations". *Amer. J. Physical Anthropol.* XXVI: pp. 269-308.
- Swindler, D., 1956 *A study of the cranial and skeletal material excavated at Nippur*. Museum Monograph, The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

IX LEAD ISOTOPE RATIOS OF BRONZE FROM TELL GUBBA

This bronze was excavated from Tell Gubba Level VIIa. Lead isotope ratio of this was measured. The lead isotope ratio was nearly close with that of a material from Ur.

Lead has 4 isotopes, ^{204}Pb , ^{206}Pb , ^{207}Pb and ^{208}Pb and these isotopes except ^{204}Pb are decay products of ^{238}U , ^{235}U and ^{232}Th respectively. So that the isotope composition of lead differs with ages and localities where the lead ore was deposited. Practically the lead isotope ratios of $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ vs. $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ of ore from the world differ for each district as shown in Fig. 66.

On the other hand lead has been known to be one of a useful metal to make bronze objects since early ages. Most of the bronze objects of those days contain lead as major component from 1 to 30% or more. If a special lead mine was used for the bronzes only in one district, those bronzes would have same lead isotope ratios.

Some of lead isotope ratios of archaeological samples from Mesopotamia area have been published by Brill, Murozumi and others as shown in Fig. 67. Lead isotope ratios obtained from the bronze from Tell Gubba was shown in Table 16 and Fig. 67 (marked with ★).

The Tell Gubba sample located very similar position to the sample from Ur rather than the other any sample in Fig. 67. This is only one measurement and this cannot be so strong suggestion, but if they were same lead isotope ratio and they used same ore lead, following would be estimated with some possibility: Ur city would have some kind of relationship with Tell Gubba economically even they were in fight each other. Many bronze materials such as sword, arrowhead and others were made in some place and were carried to many cities by caravan.

When lead isotopes of many samples of those days were determined, economically related area and distribution of materials will be clarified.

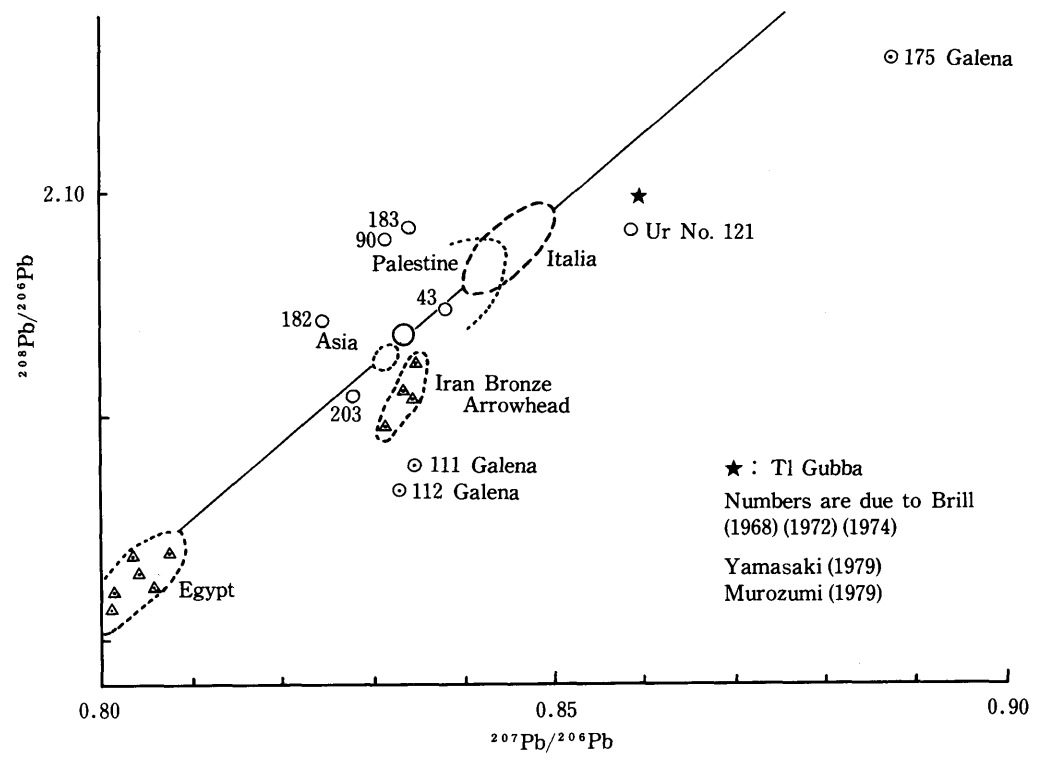
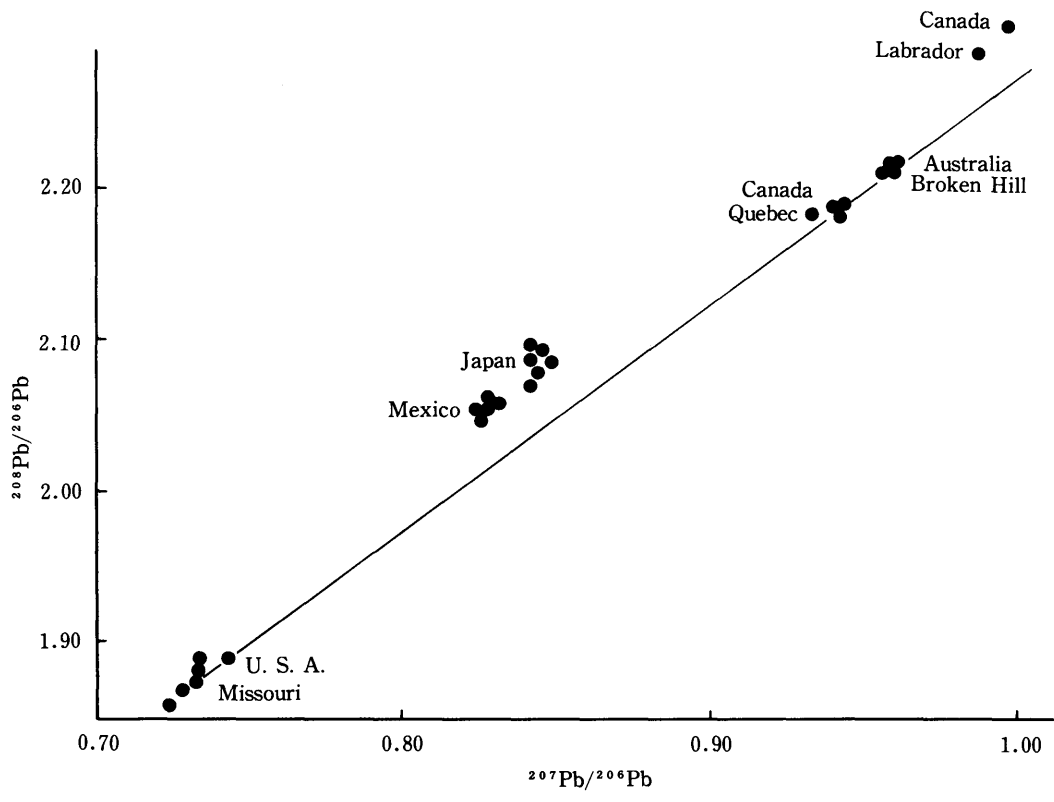


Table 16. Lead isotope ratio of Bronze Dagger of Tell Gubba

$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
18.08 (0.3)	0.8594 (0.2)	2.097 (0.2)

(): coefficient of variation

This value was determined by Murozumi et al.

References

- Brill, R. H. and Wampler; J. M., *Amer. J. Archaeo.* XX, 1967
- Brill, R. H.; Lead isotope in Ancient Coins. *Special Publication No. 8, Royal Numismatic Society.* Oxford University Press. 1972, p. 279.
- Brill, R. H., Barnes, I. L. and Adams, B.; *Recent Advances in Science and Technology of Materials*, Plenum Press, 1974. p. 9
- Murozumi, M., Nakamura, S., Yuasa, M., Tokai, M. and Yamasaki, K.; Meeting of Japan Geochemical Society, 1979
- Yamasaki, K., Murozumi, M., Nakamura, S., Hyuga, M., Yuasa, M.; *Nippon Kagakukai Zasshi*, 1979, p. 1112

X ANALYSIS OF FLOOR MATERIAL FROM BUILDING B-2, LEVEL II, TELL SONGOR B

The samples were examined by the powder X-ray diffractometry. According to the results of the analysis, the main component is hemi-hydrate gypsum (in other words, calcined gypsum, i.e. $\beta\text{-CaSO}_4 \cdot \frac{1}{2}\text{H}_2\text{O}$). In addition, it has been found that the samples comprised a fairly large quantity of quartz and calcite as well as a small quantity of gypsum, feldspar and palygorskeite. The samples were obtained from the cement or the mortar of an ancient building structure. It seems to me more or less correct because the samples consist mainly of hemi-hydrate gypsum. Generally speaking, however, when mortar is made by mixing hemi-hydrate gypsum with water and leaving it to harden up, the hemi-hydrate gypsum is hydrated and turns into gypsum dihydrate, which is the generally called gypsum, or $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$. There is one question in this respect: the content of gypsum (that is, gypsum dihydrate) in the samples is small. Beside, there is another question that how the considerable hardness shown by the samples has been brought about.

In this connection, I would like to briefly tell you what changes will occur when gypsum (i.e., gypsum dihydrate) is given heat. Under normal conditions, the gypsum turns into hemi-hydrate gypsum at a temperature of 130°C to 190°C and then changes into anhydrous $\text{III}\beta\text{-CaSO}_4$ at a temperature of 190°C to about 300°C . When it is left in the air, the $\text{III}\beta\text{-CaSO}_4$ takes in moisture content and returns to hemi-hydrate gypsum. In addition, if hemi-hydrate gypsum is left in the air in such a place as Japan where there is a high percentage of humidity, the gypsum is hydrated bit by bit and goes back to the gypsum as it formally was. That which has fully gone back gypsum hardly hardens even if it is mixed up with water. If the gypsum is given added heat to attain a temperature of more than 300°C , it will turn into anhydrite (II-CaSO_4). Even if it is mixed up with water, this anhydrite will not be hydrated and is stable as an anhydrite. By the way, let me add that the equilibrium transition temperature between gypsum and hemi-hydrate gypsum when in contact with water is exactly 97.5°C .

On the basis of such a heating behavior of gypsum and the property of hemi-hydrate gypsum (namely $\text{III}\beta\text{-CaSO}_4$), I have to consider how the samples have been processed. It is not easy to find out the answer to the question. Yet, I will set forth below my just simple tentative assumption. In view of the state of hardening of the samples, there is a possibility that gypsum was burnt into hemi-hydrate gypsum, which was then

mixed up with water and left to harden up. (The temperature at which the gypsum was burnt is estimated to have been lower than 300°C as no hard gypsum is contained at all.) Then, there comes a question why the samples contain a large quantity of semi-hydrate gypsum and, on the contrary, a small quantity of gypsum dihydrate. This point is concerned about if it is true, and the answer to this question can not go beyond the scope of assumption. I have just assumed that when the material represented by the samples was used instead of mortar or cement, it was probably gypsum dihydrate and that after the building structure had become ruins, the material was dehydrated bit by bit under Iraq's dry weather conditions and the daytime temperatures of soils and rocks in summer, though I do not know how high the temperature rises. Iraq's deserts contain a very large volume of gypsum. It is not dehydrated and exists as gypsum itself. There is an inconsistency in this respect. It can be considered, however, that the gypsum existing in a desert has a large grain size while the material once burnt into hemi-hydrate gypsum has a very fine particle size, and thus rehydration and dehydration can take place with ease. If it is a fact that the daytime temperature of the soil in Iraq in mid-summer rises over 90°C even for quite a short time, the possibility pointed out above seems to be very high as the samples has by now passed as long as a few thousand years.

Another possibility is that the small volume of gypsum contained in the samples has hardened up the hemi-hydrate gypsum by that volume via rehydration.

What has been stated above is all I am able to say. I have to admit that I can not say any more detailed things. It should be pointed out that we ourselves are a little bit surprised with the fact that the most part of the samples in question was hemi-hydrate gypsum.

By the way, let me add that as the most part of the samples is hemi-hydrate gypsum, when the samples were broken down into fine particles and mixed with water, they hardened up much harder than they had been before.

XI-1 X-RAY DIFFRACTOMETRIC STUDIES ON THE
MUD BRICKS FROM HAMRIN AND BABYLON
PRELIMINARY INVESTIGATION

(1) Samples

- (i) Mud bricks collected on the top of the round wall CW 6 of the Tell Gubba Level VII, Hamrin.
- (ii) Mud bricks collected in the room XXIV-20 situated on the east-south corner (lowest level of the west wall) of the Tell Songor A.
- (iii) Mud bricks collected at the Nabu-Sa-hari Temple, Babylon.

(2) Preparation for Analyses on the Hamrin Mud Brick

Since the mud bricks of Hamrin contain much coarse grains, they were separated by elutriation in water. A small lump (10 grams) of the brick was dispersed in water (100 ml), and coarse grains precipitating immediately were separated from fine grains precipitating within 20 minutes. The amount of the former was about 1.5 g and that of the latter (fine grain) about 7 g. Mud bricks of the Songor A and Babylon were analyzed without separation of coarse grains.

(3) Fluorescence X-ray Analysis

Qualitative fluorescence X-ray analysis was carried out under the the following operating conditions:

X-ray used for excitation: Chromium. Voltage and current: 40 KV, 30 mA.
Crystals for analysis: LiF and ADP. Counter: Scintillation counter and proportional counter.

Detected elements are listed in Table 17.

Table 17 Qualitative Elemental Analysis by Fluorescence X-ray Analysis

Sample	Al	Ca	Fe	K	Mg	S	Si	Sr	Ti
Hamrin (fine gr.)	++	###	###	+	+	+	###	+	++
Hamrin (coarse gr.)	+	###	++	+	+	###	###	++	+
Songor A	+	###	###	+	+	###	###	++	+
Babylon	++	###	###	+	+	+	###	+	++

###: Large amount, ++ :small amount, + : minute amount

(4) X-ray Diffractometry

To identify the component minerals of the mud bricks powdered bricks were analyzed by X-ray diffractometry under following operating conditions: Target: Copper, Filter: Nickel, Voltage and Current: 35 KV, 15 mA, Scanning speed: 1° per min.

Detected minerals are listed in Table 18.

Table 18 Mineral components detected by X-ray diffraction

Sample	Quartz	Gypsum	Calcite	Feldspar	Kaolinite	Micas
Hamrin (fine gr.)	++	—	##	+	+	+
Hamrin (coarse gr.)	+	++	++	+	—	—
Songor A	++	+	++	+	+	+
Babylon	++	—	++	++	+	+

##: Large amount, ++: small amount, +: minute amount, —: absence

(5) Discussion on the Results

The results of fluorescence X-ray analysis agree with those of X-ray diffractometry. For example, gypsum, $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$, is not found in the fine grain part of the Hamrin mud brick, and only a minute amount of sulfur is found by X-ray fluorescence analysis.

The mineral compositions of fine and coarse parts of the Hamrin brick are different, but the whole brick is similar in composition with the brick of Songor A, and they contain both gypsum and calcite. On the other hand in the Babylon bricks no gypsum is found, and they are easily crushed. This is because gypsum in the bricks of Hamrin and Songor makes these bricks very hard. According to the view of the present author gypsum, $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$, loses a part of its water of crystallization upon heating. When thus heated gypsum is mixed with mud and water to make bricks, heated gypsum takes up water again and re-formed gypsum crystals make the brick very hard.

As this is a preliminary investigation, a more detailed investigation of these mud bricks collected at three areas is to be carried out in future.

The author wishes to express his gratitude to Dr. K. Morita, Tamano Technical Research Laboratory, Nagoya for his collaboration in carrying out X-ray investigations.

XI-2 REPORT ON COMPOSITION-ANALYSIS OF
BRICKS FROM BABYLON AND HAMRIN

(1) Sample

- | | |
|-------------------------------------|-----------|
| 1) Babylon's ancient mud brick | (A brick) |
| 2) Babylon's newly made mud brick | (B brick) |
| 3) Babylon's ancient baked brick | (C brick) |
| 4) Babylon's newly made baked brick | (D brick) |
| 5) Hamrin's ancient mud brick | (E brick) |
| 6) Hamrin's ancient burnt brick | (F brick) |

(2) Analysis Methods

- 1) Analysis of constructive elements by fluorescent X-ray analysis.
- 2) Composition-analysis of crystallines by X-ray diffraction.
- 3) Analysis of dehydration and decomposition by thermal analysis.

(3) Period of Measurements

Dec. 11, 1979-Jan. 9, 1980

(4) Results of Analysis

Table 19 Identification of elements contained in bricks by fluorescent X-ray analysis.

Table 20 Identification of crystallines contained in bricks by X-ray diffraction.

Table 21 Weight loss by thermal analysis and ignition.

(5) Discussion

1) Identification of elements contained in bricks

There is no difference of constructive elements in each brick. Main elements are Ca, Si, Fe, Al, K, Ti and Mg, and micro impurities are Cl, S, heavy metals and rare metals.

B brick contains more rich Cl in surface layer than inner part and so it suggests that B brick was soaked in sea water.

2) Identification of crystallines contained in bricks

Main crystallines in each brick are CaCO_3 , $\alpha\text{-SiO}_2$ and anorthite, and there

are a little crystallines such as micas and clay minerals

But CaCO_3 and anorthite are not detected in C and D brick. It suggests two reasons:

- i) Raw materials are different between mud brick and baked brick.
- ii) Raw materials are same but they are changed in quality by burning.

And so we heated each brick for 1 hour at 800°C to investigate how they change in quality by burning. After that we analysed them by X-ray diffraction.

In the result, we found that CaCO_3 changed to CaO and anorthite was not changed substantially. In addition we found that $(\text{Ca}, \text{Mg}, \text{Fe})\text{SiO}_3$ observed in baked bricks was not newly created when mud bricks were baked. There is a possibility to create $(\text{Ca}, \text{Mg}, \text{Fe})\text{SiO}_3$ when they are baked at higher temperature, but we consider that it was not able to obtain such higher temperature in ancient time. Therefore, we think raw materials are different between mud bricks and baked bricks.

Hamrin's burnt brick contains a lot of $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$, so we consider it was not burnt actually.

3) Thermal analysis

Three endothermic peaks were observed in each brick except D brick.

We understand that the broad peak at around 70°C is the dehydration of adhesive water or hygroscopic water, the sharp peak at around 120°C is the dehydration of $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ to CaSO_4 , and also the sharp peak at around 730°C is the decomposition of CaCO_3 to CaO . Therefore $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ and CaCO_3 are contained in every brick except D brick.

D brick was not changed in weight when it was burnt to the temperature of 800°C , and for this reason we consider the raw materials of D brick are different from others or the burning temperature is more than 800°C .

F brick has the peak of dehydration ($\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O} \rightarrow \text{CaSO}_4 + 2\text{H}_2\text{O} \uparrow$) and so it is said that it was burnt, but it was not actually.

(6) Conclusion

- 1) We observe that constructive elements are same in each brick and so we understand constructive elements in bricks are same in each district.

Each brick is composed of Ca, Si, Fe, Al, K, Ti and Mg as main elements and many kinds of micro elements.

- 2) Each brick contains CaCO_3 , $\alpha\text{-SiO}_2$ and anorthite as main crystallines, and micas, clay minerals and natural gypsum as subcrystallines except C and D brick. C and D brick do not contain CaCO_3 but $(\text{Ca, Mg, Fe})\text{SiO}_3$ as main crystalline. And F brick contains a lot of natural gypsum.
- 3) We consider burning temperature of D brick was higher than that of C brick.
- 4) We consider F brick was not burnt actually.

Table 19 Identification of elements contained in bricks by fluorescent X-ray analysis

No.	Elements contained				Remarks	
		Much	Medium	Little		
1	Babylon's ancient mud brick	Surface layer	Ca, Si, Fe	Al, K, Ti Mg, Cl, S	Ba, Zr, Y, Sr Rb, Zr, Cu, Co Cr, Ce, Ni, Mu	
		Inner part	-do-	-do-	-do-	
2	Babylon's newly made mud brick	Surface layer	-do-	-do-	-do-	Cl is richer than inner part.
		Inner part	-do-	-do-	-do-	
3	Babylon's ancient baked brick	Surface layer	-do-	-do-	-do-	
		Inner part	-do-	-do-	-do-	
4	Babylon's newly made baked brick	Surface layer	-do-	Al, K, Ti Mg	-do-	Cl and not detected substantially.
		Inner part	-do-	-do-	-do-	Cl and S are not detected substantially. Zn is richer than surface layer.
5	Hamrin's ancient mud brick	Whole	-do-	Al, K, Ti Mg, Cl, S	-do-	
6	Hamrin's ancient burnt brick	Surface layer	Ca, Si	Fe, Al, K Ti, Mg, Cl S, Sr	Ba, Zr, Y, Rb Zn, Cu, Ni, Co Mu, Cr, Ce	Fe is little and S, Cl and Sr are much compared with other bricks.
		Inner part	-do-	-do-	-do-	-do-

Table 20 Identification of crystallines contained in bricks by X-ray diffraction

No.			Crystallines identified		Remarks
			Original	Heated for 1 hour at 800°C	
1	Babylon's ancient mud brick	Sur- face layer	CaCO ₃ , α-SiO ₂ , anorthite* ¹ , illite* ² montmorillonite* ³	—	
		Inner part	-do-	CaO, α-SiO ₂ , anorthite illite	Clay minerals lost by dehydration.
2	Babylon's newly made mud brick	Sur- face layer	-do-	—	
		Inner part	-do-	CaO, α-SiO ₂ , anorthite illite	
3	Babylon's ancient baked brick	Sur- face layer	α-SiO ₂ , (Ca, Mg, Fe)SiO ₃ anorthite	—	
		Inner part	-do-	α-SiO ₂ (Ca, Mg, Fe)SiO ₃	
4	Babylon's newly made baked brick	Sur- face layer	-d-o	—	
		Inner part	-do-	α-SiO ₂ (Ca, Mg, Fe)SiO ₃	
5	Hamrin's ancient mud brick	Whole	CaCO ₃ , α-SiO ₂ , anorthite illite montmorillonite	CaO, α-SiO ₂ anorthite illite	
6	Hamrin's ancient burnt brick	Sur- face layer	CaCO ₃ , α-SiO ₂ , CaSO ₄ ·2H ₂ O anorthite montmorillonite	—	
		Inner part	-do-	α-SiO ₂ CaSO ₄ , CaO	

*¹ CaAl₂Si₂O₈*² (K, Na, Ca)₂O·3.33(Mg, Mn)O·4.3(Al, Fe, Ti)₂O₃·16(Si, Al)O₂·4H₂O*³ Al₂O₃·4SiO₂·H₂O, nH₂O

Table 21 Weight loss by thermal analysis and ignition loss

No.		Weight loss by thermal analysis			Ignition loss (800°C × 1 hr)	DTA peak (Endothermic peak)* ¹	Note (CaCO ₃)* ²	
		Room perature -150°C	150- 800°C	Total				
1	Babylon's ancient mud brick	Surface layer	2.6%	11.3%	13.9%	14.56%	70°C 120°C 735°C (B) (S) (S)	25.7%
		Inner part	2.2	12.4	14.6	15.02	70°C 120°C 740°C (B) (S) (S)	28.2
2	Babylon's newly made mud brick	Surface layer	3.6	13.9	17.5	18.78	70°C 125°C 725°C (B) (S) (S)	31.6
		Inner part	2.1	15.7	17.8	17.96	70°C 125°C 743°C (B) (S) (S)	35.7
3	Babylon's ancient baked brick	Surface layer	0.22	2.7	2.9	4.31	70°C 115°C 705°C (B) (S) (S)	6.1
		Inner part	0.54	4.6	5.1	6.53	75°C 120°C 710°C (B) (S) (S)	10.5
4	Babylon's newly made mud brick	Surface layer	0	0	0	0.11	115°C (B)	—
		Inner part	0	0	0	0.02	40°C (B)	—
5	Hamrin's ancient mud brick	2.2	12.1	14.3	15.08	65°C 120°C 740°C (B) (S) (S)	27.5	
6	Hamrin's ancient burnt brick	Surface layer	5.1	17.2	22.3	22.35	80°C 135°C 745°C (B) (S) (S)	39.1
		Inner part	2.8	17.8	20.6	22.38	70°C 130°C 745°C (B) (S) (S)	40.5

*¹ The peak at around 70°C: The dehydration of adhesive water or hygroscopic water

The peak at around 120°C: $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O} \rightarrow \text{CaSO}_4 + 2\text{H}_2\text{O} \uparrow$

The peak at around 730°C: $\text{CaCO}_3 \rightarrow \text{CaO} + \text{CO}_2 \uparrow$

*² Weight % of CaCO₃ calculated by weight loss at around 730°C.

(B) Broad peak

(S) Sharp peak

PROPERTY TEST OF BRICKS IN BABYLON

1. *Samples*

- (1) Babylon's ancient mud brick (A brick)
- (2) Babylon's newly made mud brick (B brick)
- (3) Babylon's ancient baked brick (C brick)
- (4) Babylon's newly made baked brick (D brick)

2. *Measurements*

- (1) Surface tensile-strength by surface tension test
- (2) Permeant depth and amount of RF-100 into bricks
- (3) Water-resistant test
- (4) Weather-resistant test by sunshine weather meter
- (5) Abrasion-resistant test

3. *Period of measurements*

Dec. 11, 1979–Jan. 9, 1980

4. *Result of test*

- (1) Surface tesile-strength by surface tension test

(Unit: kg/cm²)

kinds of brick	Side face		Laid part	
	Not treated	Treated RF-100	Not treated	Treated RF-100
A brick	0.39	0.95	0.15	0.90
B brick	2.04	—	2.08	—
C brick	3.53	13.80	8.15	10.13
D brick	11.46	—	17.40	—

The figure in the above list is the average of three times tests.

- (2) Permeant depth and amount of RF-100 into bricks

kinds of brick	Permeant depth		Permeant* Amount
	Side face	Laid part	
A brick	3–5 mm	3–5 mm	1.9 kg/cm ²
C brick	5–24	3–10	2.7

* Dilute solution (RF-100: water=1:1)

(3) Water-resistant test

kinds of brick	Dipped in water 10 min.		Dipped in water 48 hr	
	Not treated	Treated RF-100	Not treated	Treated RF-100
A brick	Swelling Breaking	Cracking	Breaking	Cracking
B brick	Swelling	—	Breaking	—
C brick	Unchanged	Unchanged	Unchanged	Unchanged
D brick	Unchanged	—	Unchanged	—

(4) Weather-resistant test by sunshine weather meter for 24 hours

kinds of brick	Not treated	Treated RF-100
A brick	Breaking	Swelling slightly
B brick	Breaking	—
C brick	Unchanged	Unchanged
D brick	Unchanged	—

(5) Abrasion-resistant test by JIS-K-5491

kinds of brick	Not treated	Treated RF-100
A brick	2.35 g	0.70 g
B brick	0.50	—
C brick	0.25	0.05
D brick	0.30	—

The figure in the above list is the weight grams of bricks which abraded by dropping sand to the surface of bricks

5. *Conclusion*

(1) Surface strength of bricks

Both A brick and C brick have very brittle surface. But by painting and permeating of RF-100 to bricks, the surface of bricks strengthens remarkably.

(2) Permeant depth of RF-100 into bricks

RF-100 permeated deeper in C brick than in A brick. We consider this is the reason why C brick has many micro holes which were caused by burning. And so we consider the permeant depth of RF-100 is sufficient in C brick, but not

necessarily sufficient in A brick.

(3) Water-resistance

It is observed when RF-100 is painted and permeated, water-resistance is improved both in A brick and C brick. Especially that of A brick is improved remarkably.

(4) Weather-resistance and abrasion-resistance

It is also observed weather-resistance and abrasion-resistance are improved by painting and permeating of RF-100.

XII CONCLUSION

During our two-and-a-half years' field work in the Hamrin basin, we have obtained various interesting results thanks to the hearty cooperation from the State Organization of Antiquities and Heritage of the Iraqi Government, several domestic authorities concerned, as well as from some foreign expeditions jointly participated in the excavations with us there at the same time. The following is a summary of the excavation results arranged in order of date:

At Tell Songor A, the Samarran village site has been unearthed. This is one of the oldest sites that have ever been discovered in the Hamrin basin. This village was surrounded by thick defense-walls, the mode of which has something similar to Tell es-Sawwan¹⁾ in the same period. And the plan of the houses discovered here closely resembles that of those in Choga Mami.²⁾ Among the uncovered pottery, however, there are some which are classed in transitional type at Choga-Mami.³⁾

At Songor A, the Halaf culture appeared after the Samarran village had been abandoned. Besides Tells Songor A and B, Tell Has'an⁴⁾ excavated by an Italian team, is another site coming from the Halaf period in the Hamrin basin. At Tell Songor B, two levels of the Halaf period accompanied by buildings have been confirmed, while at Tell Songor A, pit-groups and pottery kilns dug out above the Samarran houses (Fig. 26) have been uncovered. Moreover, attention was directed to our discovery that the Halaf and Ubaid pottery were mixed together on Level II of Songor B. Building 2 excavated here can be cited as a resemblance with the ones discovered from Kheit Qasim,⁵⁾ Tell Abada,⁶⁾ and Tepe Gawra,⁷⁾ all of which belong to the Ubaid period. This building of Songor B, however, differs slightly from them on the structural technique of the entrance, from which it does not necessarily follow that the very building should belong to the Ubaid period. Already on Level III of Tell Songor B, there had existed the buildings with gypsum floors which look like B-2 on Level II. This suggests to us that in the Halaf period there were such structures as could herald the emergence of the ones like B-2. As shown in the crosssectional view, B-2 on Level II seems to consist of two floor levels. Judging from this, it is probable that the plan of the building presumed to have been lying below was of more complicated structure than that of B-2. Halaf levels at Tell Songor B belong to the latter part of the Halaf period even at the lowermost level. On Level II, we could find such distinctive pottery as were perhaps strongly influenced by the Ubaid culture while

possessing the Halaf features. They will make useful data from which geographical characteristics of the Hamrin basin and the time relationship between the Halaf and Ubaid cultures can be identified.

We can trace the Ubaid culture in Tells Songor A, B, and C, where a cemetery, a workshop (Pottery kilns), and dwelling houses have been uncovered one after another. The materials discovered here have something to do with the ones from Ras al-Amiya, and belong to the Early Ubaid period. In the meantime, we found not a few pottery which are rich in the Halaf traits, revealing the peculiarity of the Hamrin region itself. With regard to the gypsum floors identified at Songor B, excessive hardening was observed on them.

Therefore, its samples were put through an analytical examination in order to clear its composition and hardening. In result, most of the tested samples have proved to comprise hemi-hydrate gypsum now. In view of the hardening state, it was probably gypsum dehydrate that was first applied to flooring. But the building structure having come to ruin, perhaps the material was gradually dehydrated because of exposure to dry weather and the daytime temperature rise of the soil and rock during the summers. It is also presumable that the small volume of gypsum contained in the samples has hardened up the hemi-hydrate gypsum through rehydration of only that volume (See Chapter X).

The level accompanied with the round building on Level VII of Tell Gubba belongs to the Jamdat Nasr period. The round building discovered here is one of the most remarkable structures that have ever existed there. Though we are making every effort to clear the character and function of this round building, it is very difficult to grasp them due to its unique existence. As the case stands, Tell Madhhur,⁸⁾ Tell Razuke⁹⁾ and Tell Suleimeh,¹⁰⁾ currently under excavation, may have many things to do with this round building, even though there are some time differences among them. All these buildings come from the Early Dynastic period. What deserves solving depends on the fact that such structural technique and function as the round building on Level VII of Tell Gubba seem to have been taken over into later generations in some ways. The features common to all these buildings are that they are provided with thick concentric circle walls, which have probably been built for a defensive purpose.¹¹⁾ It has been cleared that the buildings at Tell Gubba at last ended in a fort-like view after several enlargement constructions had been repeated on the way.

At Period I (VIIId) a building has been arranged at the center of surrounding cir-

cular moat, around building there are wide open spaces. And we see two or more entrances toward the center. The ones similar to this planning are the eye-temple at Tell Brak¹²⁾ where there are spacious sacred lots and the painted temple at Tell Uqail¹³⁾ which is built on a wide 'D'-figured platform. Thus, it is probable that such temples as were built on irregularly-shaped terraces from the Uruk period through the Jamdat Nasr period were usually large with wide open spaces around them.¹⁴⁾ In the meantime, however, we are short of positive grounds for deciding that the building on Level VIId of Gubba used to be a temple, whose plan is exceedingly different from the plans of Gubba in the same period.

At Period II (VIIf), a thick and strong wall has been constructed with a well placed inside, further inside of which there was a structure built at Period I. The outer wall is arranged with buttresses nearly at regular intervals just as the inner wall of Temple Oval at Khafajah.¹⁵⁾ This wall was intended for the protection of the central structure as well as for securing the spacious living lots inside. Thus, the building plane view has turned to an oval (egg-shape) plan almost according to the circular moat plan.

At Period III (VIIf), the circular moat has come buried into malfunction, replaced by a thick wall constructed inside along the circular moat line. Then, the city wall or something like that emerged there enclosing a wide range instead. The plan of this wall has got much straighter than that in the previous age. And inside the outer wall, there are series of square rooms along the wall, some of which are provided with altars and others are perhaps for dwelling. At this period, the round building has become a complex having various functions. As the time advanced, the outer wall was added with thicker walls outside again and again until it finally ended in the thickness of 10 m or more. Although the round building had been free of any defensive installation in the early age, its defense was strengthened more and more in the later generation. And at last it turned to a building of powerful defense. This is probably because the Gubba people had to guard themselves against enemy due to the social necessity of that time. Its evidence is seen in the discovery of two times' big fire traces on Level VII of Tell Gubba.

Nevertheless, there came a day when the building of such a strong defense had to be ruined. On Level VIIf of the big fire, we have found some burnt human bones and a pit where no less than sixteen people were dumped down as if they showed the last day. After the fire on Level VIIf, perhaps the central facilities of the round building were abandoned to decay without any restoration. Years went by and one

day its central facilities finally came to an end, which is regarded to be toward the end of the Jamdat Nasr period. Then, time changed to the Early Dynastic I period.

Observation of the pottery excavated from Tell Gubba suggests to us that the time change from the Jamdat Nasr period into the Early Dynastic I period was rather gradual without any distinct intermission. Its process is clearly correspondent to that of the sites in the same age located in the Diyala region so far investigated.¹⁶⁾ The people in the Early Dynastic I period did not construct such monumental buildings as those in the Jamdat Nasr period had done. They did not employ round shapes in their buildings, but built small square independent buildings instead. Here, genealogy of the round buildings had come to a halt. As for pottery, in the meantime, the painted pottery of the previous age were inherited and developed in this period, when the painted pottery enjoyed their last glory in the history of Mesopotamian painted pottery. On the whole, however, the remains and finds here prove that the people in the Early Dynastic I period of Tell Gubba failed to win back the prosperity of the Jamdat Nasr period, and went to ruin. Taking an example, it is remarkable that the upper the levels become, the fewer metal objects and beads we have found. As for the bronze dagger uncovered from Level VIIa (Fig. 22-14), its lead isotope ratio was measured to estimate where the lead ore comes from. Then, we have got a result that the lead ore perhaps originated near the place where the lead vessels excavated at Ur were produced (See Chapter IX).

The other sites in the Early Dynastic I period in the Hamrin basin are Tell Madhhur, Razuk, Abu-Kassem, Suleimeh, Ahamad Hachow, Sabra, Abga, Hallowa, and Kheit Qasim. At this period, round buildings have appeared at Madhhur and Razuk in the Hamrin basin. But things have become rather complicated because square-based buildings also emerged here as seen in Tell Abu-Kassem.¹⁷⁾ At Tell Gubba, a part of the circular wall of the round building constructed in the Jamdat Nasr period finally collapsed at the beginning of the Early Dynastic I period after its having formed like an oval plan while functioning as the city wall or the like. After that such round planning structures seem to have never been erected. In this connection, there still remain some questions as to why the Gubba people would not start reconstructing their own round buildings again in spite of the fact that the other sites in the Early Dynastic I period has kept on employing such structures.

Tell Gubba does not have enough data through which things in the Early Dynastic II period are clearly understandable. This can be commonly said in all through the Hamrin basin different from the history of the Diyala valley and South Mesopotamia.

The presumption is that the latter part of the Early Dynastic I period judged by ourselves should have been classed in the Early Dynastic II period. It is, therefore, considerable that the Early Dynastic I period in the Hamrin basin may have continued rather longer. The finds and remains from the graves discovered at the foot of Tell Gubba are similar to those discovered at Tell Madhhur,¹⁸⁾ suggesting that both of them are very close in time.

The graves uncovered at Tells Songor A and B are the only remains belonging to the 2nd millennium B.C., but none of the structural remains have been found during that period. In those days, however, under-floor burial method widely prevailed, from which there is a possibility that the structural remains contemporary with the above graves existed at both Tells Songor A and B. Similarly, a site contemporary with Songor A and B has been found by the Austrian expedition at Tell Ababra¹⁹⁾ about 2 km north of Tell Gubba. Thus, both of them may have had some connections with each other.

The structure discovered on Level II of Tell Gubba was surrounded by quite a thick wall like a fort. Besides, Tell Abu Al-Suud II²⁰⁾ is the only site belonging to the Achaemenian period discovered in the Hamrin basin. The structure of the building uncovered at Gubba is similar to that of Nush-i Jan in Iran,²¹⁾ and its finds have a resemblance to those of Susa²²⁾ and Pasargadae.²³⁾ In short, this building may be regarded as the one constructed on some main road or at some strongpoint according to one of the developmental policies of the Achaemenian empire.

Tulul Hamediyāt seems to have spread about 1 km in the east-west direction and about 1 km in the north-south direction up to Tell Khabari located west of Tell Gubba. Inside the very area of about 1 km², there was a large town in the Parthian period through the Sasanian period. At Hamediyāt, pottery kilns, storage and brewery remains have come investigated. These facilities may have flocked toward the south separated from the dwelling area. And we could find such graves as belong to this period at Tells Songor A, B, and Gubba.

The result of the current investigation is that we could identify sites of the Samarran period through the Parthian Sasanian period scattered over the land of 2 km in the east-west direction and 2 km in the north-south direction with Tell Gubba at their center, as shown in Fig. 65. Although there is some blank age in the Uruk period and 2nd millennium B.C., it seems that the dwellers kept on living there. This area in the Hamrin basin may have been fit for the people to live on farming, cattle-raising, and hunting. What is worthy of note is the round planned building unearthed on Level VII of Tell

Gubba. This has indeed a unique structure as far as the research so far available is concerned. Consequently, it became necessary for us to preserve the round building as a model in order to study it further in many ways. Then, by the financial assistance of the Scientific Research Fund of the Ministry of Education, we have completed its remain model with which we can grasp the excavated situation as it is. In addition, the study of its restoration is now in progress.

Moreover, in order to make physical anthropological analyses of the human bones excavated at our sites, we collected as many human bones as possible from other sites in the Hamrin region, Babylon, Assur, and Haditha, which are now under investigation, backed up by the Iraqi State Organization of Antiquities and Heritage. Thus, pigeonholing and analyses of those specimens are now under way. According to the interim report, as far as the skull types are concerned, all of them belong to dolicho-cranic ones, since there are no marked differences among those of the sites in the Hamrin region in the days earlier than the Islamic period. The report also indicates that things are the same when compared with the specimens excavated in South Mesopotamia. In the Islamic period, however, there emerged short-headed group. The former are from Tell Gubba, while the latter are from Tell Songor A. This is different from the Islamic crania types excavated at Nippur in South Mesopotamia.

Currently under way are the analyses of component and production method of the mud bricks constituting Level VII at Tell Gubba, the analyses of the mud bricks with some change caused due to the fire in the corridor, the analyses of the fabric and color of the painted pottery, the pollen analyses, and the ¹⁴C chronological measurement.

This is a preliminary report of our research work so far carried out. And a final report is now being prepared for publication. In conclusion, we wish to extend our special acknowledgment to Dr. R. M. Boehmer, Director of German Archaeological Institute in Baghdad and Dr. J. N. Postgate, Director of British School of Archaeology in Baghdad who have spared no efforts to give us plenty of advice and cooperation.

We should like to express our sincere gratitude to H.I.H. Prince Takahito Mikasa who kindly appreciated, from his viewpoint as a historian, the significance of producing the miniature model of Level VII of Tell Gubba to be reconstructed in its excavated situation, which had been requested by the Iraqi State Organization of Antiquities and Heritage, and to which we had responded positively. We also should like to thank Dr. Kiyotari Tsuboi, Director General of the Nara National Research Institute of

Cultural Properties, for his kind suggestions and valuable help in the completion of the miniature model of Tell Gubba Level VII. And especially as the head of our expedition, I like to thank all of the research members for their daily efforts to proceed our studies.

Notes:

- 1) Behenam Abu Al-Soof, 1968, "Excavation of the Tell es-Sawwan Fourth Season", *Sumer* Vol. XXIV
- 2) Oates, J., 1969, "Choga Mami 1967-68: A Preliminary Report", *Iraq* Vol. XXXI-2
- 3) Invernizzi, A., 1980, "Excavation in the Yalkhi Area", *Mesopotamia* Vol. XV
- 4) Oates, D., and Oates, J., 1976, *The Rise of Civilization*, Oxford
- 5) Forest, F., 1980, "Rapport sur les Fouilles de Kheit Qasim III Hamrin", *Paleorient* Vol. 6
- 6) Sabah About, 1979, "Tell Abada", *Sumer* Vol. XXXV
- 7) Tobler, A. J., 1950, *Excavation at Tepe Gawra*, Vol. II, Philadelphia
- 8) Killick, R., Roaf, M., 1979, "Excavation at Tell Madhhur", *Sumer* Vol. XXXV
- 9) Gibson, McG., 1979, "At Uch Tepe Hamrin", *Sumer* Vol. XXXV
- 10) Muhammad Az-Zahawi, 1981, "Tell Suleimah", in the 3rd Bahgdad International Arcaelological Symposium
- 11) *ibid.* Note 1)
- 12) Mallowan, M. E. L., 1947, "Excavation at Brak and Chagarbazar", *Iraq* Vol. IX
- 13) Lloyd, S., Safar, F., 1943, "Tell Uqail Excavation by the Iraq Government Directrate of Antiquities in 1940 and 1941", *J. N. E. S.* Vol. II
- 14) Kobayashi, B., 1959, *The brith of Architecture*, Tokyo
- 15) Delougaz, P., 1940, *The Temple Oval at Khafajah*, O. I. P. Vol. LIII
- 16) Delougaz, P., 1947, *Pottery from th Diyala Region*, O. I. P. Vol. LXIII
- 17) Awad Al-Kassar, 1979, "Tell Abu Qasim", *Sumer* Vol. XXXV
- 18) *ibid.* Note 8)
- 19) Trenkwalder, H., 1979, "Tell Ababura", *Sumer* Vol. XXXV
- 20) Abudul Rahiman, M. A., 1979, "Tell Abu Al-Súud II", *Sumer* Vol. XXXV
- 21) Stronach, D., Roaf, M., 1978, "Excavation at Tepe Nush-i Jan", *Iran* Vol. XV
- 22) Ghirshman, R., 1954, "Village Perse Achemenide", *Mission Archelologique en Iran*, Tome XXXVI
- 23) Stronach, D., 1978, *Pasargadae*, Oxford

LIST OF PLATES

- | | | | |
|---------|---|----|--|
| 1 | Tell Gubba | 2 | Tunnel like Structure, Level VII |
| 1 | Central Structure, Level VII | 3 | Central Structure, Level VII, from the East |
| 2 | Model, Level VII | 10 | Detail of Central Structure, Level VII, Tell Gubba |
| 3 | Section of Model, Level VII | 1 | Walls and Corridors |
| 2 | Painted Pottery, Tell Gubba | 2 | Accumulation in Corridor 3 and CW ₃ |
| 1 | Level IVb | 3 | Coarse Jar in Corridor 3 |
| 2 | Level VI | 4 | Corridor and Walls |
| 3 | Level V | 11 | Tell Gubba |
| 4 | Level VI | 1 | Structure, Level V, VI (Early Dynastic I Period) |
| 5 | Level IVb | 2 | Storage House, Early Dynastic I Period |
| 6 | Level VI | 3 | Pottery from Early Dynastic III Graves |
| 3 | Painted Pottery, Tell Songor | 4 | Human Bones in Pit, Level VII |
| A. B. C | | 12 | Pottery, Tell Gubba |
| 1 | Samarra Period, Songor A | 1 | Painted Pottery, Level VII |
| 2 | Samarra Period, Songor A | 2 | Painted Pottery, Level VII |
| 3 | Halaf period, Songor A | 3 | Painted Pottery, Level VII |
| 4 | Ubaid Period, Songor B | 4 | Spouted Pottery from Fire Place, Level VII |
| 5 | Ubaid Period, Songor C | 5 | Coarse Jar, Level IV |
| 6 | Ubaid Period, Songor A | 6 | Coarse Jar, Level VI |
| 4 | Tells before Excavation | 13 | Findings, Tell Gubba |
| 1 | Tell Gubba | 1 | Painted Pottery, Level VI |
| 2 | Tell Songor A | 2 | Painted Pottery, Level VI |
| 3 | Tell Songor B | 3 | Painted Pottery, Level V |
| 4 | Tell Songor C | 4 | Painted Pottery, Level VI |
| 5 | Tell Gubba under Excavation | 5 | Sealed Coarse Jar |
| 6 | Tell Gubba | 6 | Sealed Coarse Jar |
| 1 | Central Structure, Level VII | 7 | Sealed Coarse Jar |
| 2 | Eastern Part, Level VII | 8 | Sealed Coarse Jar |
| 7 | Tell Gubba | 14 | Findings, Tell Gubba |
| 1 | Round Structure, Level VII | 1 | Bronze Objects |
| 2 | Structure, Level VII and V~IVb | 2 | Bead |
| 8 | Tell Gubba | | |
| 1 | Central Structure and its Entrance, Level VII | | |
| 2 | Northern Part, Level VII | | |
| 9 | Tell Gubba | | |
| 1 | Corbeling Vault Structure, Level VII | | |

- 3 Stamp Seal
 4 Stamp Seal
 5 Cylinder Seal
 6 Stone Artifacts
- 15 Tell Gubba
 1 Structure, Level I
 2 Central Structure, Level II
 3 Wall Structure, Level II from the East
 4 Lamp, Level II
 5 Bowls, Level II
 6 Painted Pottery, Level II
 7 Plain Pottery, Level II
 8 Bowl, Level II
- 16 Model of Level VII, Tell Gubba
 1 Detail, Wall 8
 2 General View of the Model
 3 Section of the Model, Central Structure
 4 Primary Model
- 17 Tell Songor A
 1 Samarra House, from the South west
 2 Closed Entrance, Samarra House
 3 Grave No. 247 Samarra Period
- 18 Finds, Samarra Period, Tell Songor A
 1 Incised Pottery
 2 Painted Pottery
 3 Incised Pottery
 4 Painted Pottery
 5 Terracotta Figurin
 6 Spindle Whorls
- 19 Painted Pottery, Tell Songor A
 1 Bowl, Ubaid Period
 2 Bowl, Ubaid Period
 3 Jar, Ubaid Period
 4 Tortoise Jar, Ubaid Period
- 5 Jar, Ubaid Period
 6 Bowls, Ubaid Period
 7 Pot and Bowl, Ubaid Period
- 20 Tell Songor B
 1 Structure, Level II
 2 Pottery Kiln
 3 Drain Pipe
 4 Stone Pavement
 5 Finds, from 2nd Millennium B.C. Grave
- 21 Painted Pottery, Tell Songor B
 1 Ubaid Period
 2 Ubaid Period
 3 Halaf Period
 4 Halaf Period
 5 Halaf Period
 6 Halaf Period
 7 Halaf Period
- 22 Tell Songor C
 1 General View, Ubaid Settlement
 2 Pottery, Ubaid Period
 3 Stone and Bone Objects, Ubaid Period
 4 Pottery, Ubaid Period
 5 Pottery, Ubaid Period
- 23 Tulul Hamediyāt
 1 Pottery Kiln
 2 Big Storage Jar
 3 Big jar
 4 Bottom of Big Jar
 5 Glass
 6 Drain Pipe
- 24 Human Remains from Hamrin
 1 Isin-Larsa/Old Babylonian, Tell Songor A
 2 Parthian, Tell Songor A
 3 Islamic, Tell Gubba
 4 Islamic, Tell Songor A

LIST OF FIGURES

1	Map of Archaeological Sites in Hamrin Basin (Saadiyah Basin)	14
2	Tell Gubba and Its Surroundings	15
3	Contour Map, Tell Gubba	17
4	Section, Tell Gubba	18
5	Plan and Section, Tell Gubba	19
6	Central Structure, Level VII, Tell Gubba	22
7	Top Plan, Central Structure, Level VII, Tell Gubba	23
8	Early Dynastic I Houses, Plan, Tell Gubba	25
9	Plan of Store Houses, EDI Period, Tell Gubba	26
10	Plan, Level II, Tell Gubba	28
11	Painted Pottery, Level VII, Tell Gubba	33
12	Painted Pottery, Levels VII, VI, Tell Gubba	34
13	Painted Pottery, Level VI, Tell Gubba	35
14	Painted Pottery, Levels VI, V, Tell Gubba	36
15	Painted Pottery, Level V, Tell Gubba	37
16	Painted Pottery, Level V, Tell Gubba	38
17	Painted Pottery, Levels V, IV, Tell Gubba	39
18	Painted Pottery, Level IV, Tell Gubba	40
19	Pottery, Levels VII, VI, V, IV, Tell Gubba	43
20	Pottery, Levels IV, III, II, Tell Gubba	44
21	Pottery from the Graves, Tell Gubba	45
22	Seals and Seal Impressions, Tell Gubba	46
23	Stone Artifacts and Bronze Objects, Tell Gubba	47
24	Contour Map, Tell Songor A, B, C	51
25	Excavated Area and Samarra Buildings, Tell Songor A	52
26	Sections, Northern, Southern, Central Area, Tell Songor A	53
27	Plan, Samarra Buildings, Northern Area, Tell Songor A	54
28	Plan, Samarra Building, Southern Area, Tell Songor A	55
29	Plan, Mud-brick Remains, Early Dynastic Period, Western Area, Tell Songor A	56
30	Plans of Graves, Samarra, Ubaid, Isin-Larsa/Old Babylonian Periods, Tell Songor A	58
31	Samarra Pottery, Tell Songor A	61
32	Painted Samarra Pottery, Tell Songor A	62
33	Plain and Incised Samarra Pottery, Tell Songor A	63
34	Pottery, Halaf Period, Tell Songor A	66
35	Pottery, Ubaid Period, Tell Songor A	67
36	Pottery, Ubaid Period, Tell Songor A	68

37	Pottery, Ubaid Period, Tell Songor A	69
38	Pottery, Ubaid Period, Tell Songor A	70
39	Objects, Terracotta, Stone, Spindle Whorl, Samarra Period, Tell Songor A ...	71
40	Objects, Stone and Copper or Bronze, Tell Songor A	72
41	Excavated Area and Buildings, Tell Songor B	76
42	Sections, Tell Songor B	77
43	Plans, Levels I, II, Tell Songor B	78
44	Plans, Level III, Tell Songor B	79
45	Plan, Level IV, Tell Songor B	80
46	Painted Pottery, Level I, Tell Songor B	82
47	Pottery, Level II, Tell Songor B	83
48	Pottery, Level III, Tell Songor B	84
49	Pottery, Level IV, Tell Songor B	85
50	Pottery from Graves, Isin-Larsa/Old Babylon Peiod, etc, Tell Songor B	86
51	Excavation Area and Buildings, Ubaid Period, Tell Songor C	87
52	Section (North-South), Tell Songor C	88
53	Plan, Ubaid Buildings, Tell Songor C	88
54	Painted Pottery, Ubaid Period, Tell Songor C	89
55	Terracotta and Stone Objects, Tells Songor B, C	90
56	Stone Objects, Tells Songor A, B, C	91
57	Stone Artifacts, Tells Songor A, B, C	92
58	Kiln, Pottery and Glass, Tulul Hamediyāt	98
59	The Survey for the Central Remains of Tell Gubba	107
60	Comparison of Cranial Form of the Adult Males from Hamrin by Cranial Length, Breadth and Index	113
61	Comparison of Cranial Form of Pre-Islamic Adult Males from Hamrin, Southern Mesopotamia and Yorgan Tepe by cranial Length, Breadth and Index	114
62	Comparison of Cranial Form of Islamic Adult Males from Hamrin (Tell Gubba, Tell Songor A), Ashur and Nippur	115
63	Comparison of Cranial form Between Pre-Islamic and Islamic (Tell Gubba, Tell Songor A, Ashur and Nippur) Adult Males in Mesopotamia	116
64	Transition of Plan, Level VII, Tell Gubba	126
65	Table of Archaeological Remains, in Tells Gubba Songor and Hamediyāt	128
66	Lead Isotop Ratios in Different Area	217
67	Lead Isotop Ratios in Arcaeological Sample of Mesopotamia	217

LIST OF TABLES

1	Stone Assemblages from Gubba Levels IV, VIIc, VIIb	197
2	Stone Assemblage from Samarra Floor, Tell Songor A	198
3	Stone Assemblage from Level I, Tell Songor B	198
4	Stone Assemblage from Level II, Tell Songor B	199
5	Stone Assemblage from Level IA (floor), Tell Songor C	199
6	Stone Assemblage from Level IB (IB and IB floor), Tell Songor C	200
7	Stone Assemblage from Level II, Tell Songor C	201
8	Cumulative Graph Showing Different Inventories of Restructive Stone Artifacts from Seven Levels at Gubba and Songor	201
9	Amount of Skeretal Material from Harmin, Haditha, Assur and Babylon	119
10	Amount of Cranial Material Reconstructed from Hamrin Haditha, Ashur and Babylon	120
11	Measurement and Indices of Crania Excavated in Hamrin	121
12	Indices and Classification of Crania Excavated in Hamrin	122
13	Measurement and Indices of the Neo-Assyrian Crania Excavated in Haditha ...	122
14	Measurement and Indices of the Islamic Crania Excavated in Ashur	122
15	Measurement and Indices of Crania Excavated in Southern Mesopotamia and Yorgan Tepe	123
16	Lead Isotope Ratio of Bronze Daggar from Tell Gubba	218
17	Qualitative Element Analysis by Fluorescence X-ray Analysis	221
18	Mineral Components Detected by X-ray Diffraction.....	222
19	Identification of Elementes Contained in Bricks by Fluorescent X-ray Analysis	225
20	Identification of Crystallmes Contained in Bricks by X-ray Diffraction	226
21	Weight Loss by Thermal Analysis and Ignition Loss	227

国士舘大学イラク古代文化研究所沿革

1 研究所設立以前

1969(昭和44)年5月～10月 文学部藤井秀夫教授, 中央アジア・西アジア・東地中海沿岸史跡踏査(大学派遣)。9月にイラクのカルバラ近郊でアル・タール洞窟を遺跡と認定。

1970(昭和45)年12月 イラク政府より日本政府あて, 藤井教授にアル・タール発掘調査の依頼。

1971(昭和46)年3月～10月 アル・タール第一次調査(海外技術協力事業団派遣)。現地調査課題「メソポタミア文化と周辺地域文化の関係」。

1972(昭和47)年10月～1973(昭和48)年6月 アル・タール第二次調査(海外技術協力事業団派遣)。

1973(昭和48)年9月～1974(昭和49)年3月 アル・タール第三次調査(文部省科学研究費補助金)。

1974(昭和49)年10月 イラク考古総局アブドゥル・ハーディ・アル・フォアディ博士招聘(日本学術振興会)。

1975(昭和50)年8月～1976(昭和51)年3月 アル・タール第四次調査(文部省科学研究費補助金)。

2 研究所設立以降

1976(昭和51)年3月 国士舘大学に付置研究所として「イラク古代文化研究所」設置。初代所長藤井秀夫教授。教授1, 講師1, 助手1の計3名で発足。

1976(昭和51)年5月 イラク考古総局アッシリア部長タールック・マドルーム博士招聘(国際交流基金)。国際交流基金主催朝日新聞東京本社後援, 講演会『古代イラクの発掘』, 講師タールック・マドルーム博士「ニネヴェ遺跡における新たな発見」藤井秀夫教授「アル・タール遺跡の発掘」, 牟田口義郎論説委員「日本・イラクの文化交流について」

1976(昭和51)年12月 *AL-TAR, I, Excavations in Iraq, 1971～1974* 刊行(文部省科学研究費補助金)。

1977(昭和52)年6月 イラク考古総局長ムアヤッド・サイード・グメルジ博士招聘(日本学術振興会)。

1977(昭和52)年9月～12月 アル・タール第五次調査(文部省科学研究費補助金)。

1977(昭和52)年9月 アル・タール出土品に関する講演展示会(文化女子大学共催)。

1977(昭和52)年9月～1980(昭和55)年3月 イラク, ハムリン・ディヤラ調査, テル・グッバ, テル・ソングルを発掘, テル・ハメディヤート試掘, 周辺ジェネラルサーヴェイ(文部省科学研究費補助金)。

1979(昭和54)年4月 三笠宮殿下並びに同妃殿下, アル・タール洞窟及びハムリン・ディヤラのテル・グッバ, ソングル, ハメディヤート等を御視察。

1980(昭和55)年3月 「ラーフィダーン」創刊。

1980(昭和55)年 財団法人東レ科学振興会財団設立20周年記念講演会講演, 藤井秀夫教授「メソポタミア古代

文化の源流を探る」

1980(昭和55)年12月 アル・タール出土染織皮革遺物シンポジウム (川島文化事業団共催)。

1981(昭和56)年3月 イラク・テル・グッパ第Ⅶ層遺構模型完成 (文部省科学研究費補助金)。

1981(昭和56)年5月 同上模型の説明展示会 (中近東文化センター共催)。

1981(昭和56)年5月 イラク・ハディーサ調査開始 (国士舘大学学術振興費, 日本私学振興財団補助金)。柴田梵天国士舘大学総長視察。

1981(昭和56)年12月 ハディーサ第一次調査 (テル・アブ・ソール発掘) 終了。

1982(昭和57)年2月 藤井秀夫教授西ドイツ国ミュンヘン大学, チュービンゲン大学にて講演

3 所員名簿 (1982年3月現在)

所 長 藤井秀夫

所長代行 山田昭二

教 授 藤井秀夫 (古代メソポタミア史学, 文学部併任)

教 授 清水平吉 (法制史学)

講 師 川又正智 (考古学・東洋史学)

講 師 岡田保良 (建築史学・考古学)

助 手 松本 健 (考古学)

助 手 井 博幸 (考古学)

助 手 岡田浩海 (服飾史学)

副 手 小口裕通 (考古学)

教授(兼任) 山田昭二 (政経学部専任, 国際関係学)

講師(兼任) 柴田徳文 (政経学部専任, 国際関係学)

助手(兼任) 戸田有二 (文学部専任, 考古学)

非常勤講師 石田英実 (大阪大学人間科学部助教授, 形質人類学)

共同研究員 小谷仲男 (富山大学人文学部教授, 東洋史学・考古学)

共同研究員 坂本和子 (染織史学)

研究補佐員 白石律子 (自然人類学)

研究補佐員 八木和美 (考古学)

イラク学術調査団代表者 藤井秀夫

学内関連部局 増田末太郎 (学術振興課長)

国士舘大学イラク古代文化研究所紀要「ラーフィダーン」編集方針

1. 西アジア古代文化の研究およびそれに関連する諸分野を掲載対象とします。
2. 研究所の紀要ですが、外部の投稿希望の方にも広く誌上を開放し、学術の進展に寄与したいと思います。投稿資格は問いません。採否と掲載法は編集委員によって決定します。
3. 用語は日本語または英語を原則とします。他の言語での発表を希望する方は前もって編集委員に相談してください。
4. 年1回発行を原則とします。A4判横組です。

編集委員（1982年度） 委員長：藤井秀夫 委員：略

投稿規定

1. 原稿は論文・報告・書評・翻訳等の種類と長短を問いません。ただし未発表のものにかぎります。
2. 投稿原稿はすべて、署名原稿としてあつかいます。
3. 引用文献、参考文献はかならず明記してください。
4. 注および引用は、論旨をすすめるうえに、どうしても必要なものに限ります。
5. 注は原則として章末に集中して掲載します。単なる引用文献は注とせず、執筆要項11の要領で本文に示してください。
6. 採否にかかわらず、投稿原稿は返却いたしません。必要なものは投稿前にコピーをとってください。
7. 他言語レジュメ希望の場合は、投稿者において作成の上、原稿と共に送ってください。
8. 英文目次をつけますので、論題には英訳をつけてください。英文原稿の論題には日本語訳をつけてください。
9. 掲載となっても原稿料はさしあげません。発行後は本誌2部と別刷50部まで無料でさしあげます。別刷がそれ以上必要なときは作製実費をいただきます。
10. 原稿の送付先、連絡先はつぎのとおりです。

〒194-01 東京都町田市広袴844 国士舘大学イラク古代文化研究所 「ラーフィダーン」編集委員会

電話 0427-35-3135 内線196

執筆要項（日本語の場合）

1. 原稿用紙は、横書きのものとします。
2. 原稿は、青または黒のペン書きとします。鉛筆書きはうけつけません。楷書がきを守ってください。
3. 特殊な場合、古典の引用、固有名詞などをのぞき、現代かなづかい・当用漢字を用いることを原則とします。
4. 句読点、括弧、各種記号も、かならず原稿用紙のマス1箇分を使うこととします。
5. 原則として、原稿中の数字はアラビア数字で表わすこと。年号、月日もアラビア数字を用います。年号は原則として西暦で表わしてください。

6. 論文の第1ページ(表紙)には、本文を書かずに、論題(タイトル)と著者の氏名住所、所属、生年、英訳論題だけを書いてください。
7. 図、および表は、一図一表ごとに、別の紙に書き、本文とは別に一括してください。図、表ごとに、通し番号、図表名および説明、出典などを記し、本文原稿の欄外にそれぞれの、挿入箇所を指定してください。
8. 図、表の凸版原稿は、原則として、墨入済で送ってください。特殊な場合をのぞき、凸版中の写真植字などは印刷所でおこないます。
9. 写真は、はっきりしたものに限り、ネガフィルムではなく、手札判以上の大きさに焼付けしたものを送りください。
10. 写真も、図、表のあつかいにならない、通し番号、挿入箇所の指定をおこなってください。また、かならず写真の説明をつけてください。
11. 引用文献の指示は、本文中に、カギ括弧を付し、著者名、文献刊行年次、引用ページ数の順序で下記の例にしたがって記載することとします。

〔松井, 1960 : pp. 30-32〕

〔Alnabar, 1943 : p. 123〕

ただし同年次刊行の場合はアルファベットにより下記のように記載して下さい。

〔松井, 1963a : pp. 20-22〕 〔松井, 1963b : p. 10〕

12. 注は、本文と切り離し、別紙に記すこと。この場合、本文には参照箇所に、番号を、注記載の別紙には、本文のページ数をそれぞれ明記してください。
13. 本文、および注において引用した文献は、すべて原稿の末尾にまとめて、下記の要領で記入してください。
 - (1) 文献の配列は、著者名のアルファベット順とする。この場合、日本人・アラビア人等の名もラテン字で書いたと仮定して順序を決め、ヨーロッパ人名のあいだに入れてください。
 - (2) 文献の記載は、著者名、年号、論題(タイトル)、誌名、巻、号、出版社(地)名の順に配列すること。欧文の論文集、雑誌の表題には、イタリック体で印刷する指示のため下線をほどこす。単行本の場合も書名に下線をひくこと。日本文の場合は、論題にカギ括弧をほどこし、論文集、雑誌の表題には二重のカギ括弧をほどこす。雑誌の巻数は、ローマ数字(XIV)など、号数はアラビア数字の表記を用いること、同様に、欧文単行本は書名に下線をほどこし、日本文単行本は書名に二重のカギ括弧をほどこしてください。

例 論文の場合

Mallowan, M. E. L., 1947, "Excavations at Brak and Chagar Bazar" *Iraq* Vol. IX-1, London

川村喜一, 1963, 「シュメール早期の社会」『オリエント』Vol. VI-4, 日本オリエント学会

単行本の場合

Stein, Aurel, 1940, *Old Routes of Western Iran*, Macmillan, London

水野清一, 1962, 『ハイバクとカシュミル・スマスト』, 京都大学

14. 章の見出しはI, II, III, 大見出し1, 2, 3, 中見出し(1), (2), (3), 小見出しi, ii, iii, と数字をつかってください。
15. 校正は原則として初校を著者校正とします。その際に加除筆はみとめません。

正 誤 表 CORRIGENDA (VOL. I)

	誤 errata	正 recta
p.24 ㄥ.26	撈り	撚り
p.25 図Ⅰ-9 (b')	たて方向 よこ方向 カバー・ファクター (C丘)	たて糸 よこ糸 見かけの太さ (C丘)
p.35 ㄥ.2 from the bottom	方体観	立体観
p.38 ㄥ.12	絞 様	紋 様
p.43 ㄥ.8	質 料	資 料
p.50 ㄥ.1	綴織している	組織している
p.52 ㄥ.28	方向は	方法は
p.58 ㄥ.24	一 越	二 越
p.60 ㄥ.30	3-1タイプに属し、緯糸2本毎	3-2タイプに属し、緯糸2~3段毎
p.76 表上欄	パイル密度 ノット/100m平方	パイル密度 ノット/10cm平方
p.82 ㄥ.14	経糸は	緯糸は
p.91 ㄥ.7 from the bottom	木 線	木 綿
p.108 ㄥ.23	外縁帯の中左右	外縁帯のうち、左右
p.118 ㄥ.4	用途には	用途は
ㄥ.6	唐草葡萄	葡萄唐草
p.121 ㄥ.6 from the bottom	出 張	主 張
p.125 ㄥ.22	(図の矢印は~一致する)	(織物の図の経糸方向は、図Ⅲ-11, 14, 19, 20, 21, 22, 23, 29では図の横方向に置かれ、それ以外では図縦方向と一致する。但し26は確認不能)
p.135 密度 (経)	11, 10, 18	10, 10, 10
p.135 密度 (緯)	17, 34, 10	53, 34, 24
V-2 (pp.152~154)	シリコンラバー シリコンゴム	シリコーンゴム シリコーンゴム
p.153 ㄥ.15	シリコンゴムと	シリコーンゴムの
p.172 ㄥ.11	B	B2
ㄥ.3 from the bottom	所平地合	所謂平地合
p.173 ㄥ.2 from the bottom	f, 群	f, A群

刊行物案内

AL-TAR, I, Excavations in Iraq, 1971~1974

藤井秀夫編 A4版 英文 全460頁 (カラー図版入)

申込先 国士舘大学イラク古代文化研究所

郵便振替口座 東京6-76264

価格1冊9,000円 (送料とも)

「ラーフィダーン」 第I巻

(特集記事：イラク、アルタール出土染織 皮革
遺物の研究)

ラーフィダーン 第II巻

1982年 (昭和57年) 3月20日発行

編集
発行 国士舘大学イラク古代文化研究所
(所長 藤井秀夫)

東京都町田市広袴844

印刷
製本 大学印刷株式会社

広島市中区十日市町2-1-15

الرافدان

AL-RĀFIDĀN

JOURNAL OF WESTERN ASIATIC STUDIES
VOLUME II 1981

CONTENTS

PRELIMINARY REPORT OF EXCAVATIONS AT GUBBA AND SONGOR

edited by Hideo Fujii 3

Editorial Foreword	131
Preface	135
I Introduction	138
II Tell Gubba	141
III Tell Songor A	164
IV Tells Songor B, C	182
V Tulul Hamediyāt	194
VI Stone Assemblages from Gubba and Songor	195
VII Making a Model of the Building of Level VII, Tell Gubba	202
VIII Human Remains from Hamrin	206
IX Lead Isotope Ratios of Bronze from Tell Gubba	216
X Analysis of Floor Material from Building B-2, Level II, Tell Songor B	219
XI-1 X-Ray Diffractive Studies of the Mud Bricks from Hamrin and Babylon	221
XI-2 Report on Composition-Analysis of Bricks from Hamrin and Babylon	223
XII Conclusion	231
List of Plates	238
List of Figures	240
List of Tables	242

SHORT HISTORY OF THE INSTITUTE FOR CULTURAL STUDIES OF ANCIENT IRAQ, KOKUSHIKAN UNIVERSITY (in Japanese) by Editorial Board243

THE INSTITUTE FOR CULTURAL STUDIES OF ANCIENT IRAQ

KOKUSHIKAN UNIVERSITY

Tōkyo Japan

تقارير حميرين — ٦ —

التنقييات في :
تل الكبسة
تلول صُنْغَر
تلول حميدات

البعثة اليابانية في حميرين
برئاسة:
هيديو فوجي

طوكيو — بغداد



الجمهورية العراقية
وزارة الثقافة والاعلام
المؤسسة العامة للآثار والتراث

تقرير اولي عن نتائج تنقيبات تل الكبة وتلول صنكور وحمديات في سد حوض حميرين ١٩٧٧ - ١٩٨٠

المحتويات

الصفحة	
٢	تقديم المترجم - الدكتور منير يوسف طه
٤	مقدمة المحرر - الاستاذ هيديو فوجي
٦	تمهيد
٨	I المقدمة
١٠	II تل الكبة
٣٢	III تل صنكور (أ)
٤٩	IV تلول صنكور (ب) و (ج)
٦٢	V تلول حمديات
٦٢	VI مجموعة من الحجر عثر عليها في تل الكبة وتلول صنكور
	VII طريقة عمل شكل مصغر للبنية التي عثر عليها في الطبقة السابعة
٦٥	في تل الكبة
٦٨	VIII بقايا مياكل عظمية بشرية في حميرين
216	IX معدلات فلزات الرصاص من البرونز المكتشف في تل الكبة
	X تحليل بعض المواد المكتشفة على ارضية البنية (ب) الطبقة
219	الثانية في تل صنكور (ب)
221	XI-1 دراسة للبن بابل وحميرين بواسطة اشعة اكس
223	XI-2 تقرير يتضمن دراسة تحليلية لمحتويات طابوق حميرين وبابل
٧٦	XII الخاتمة عامة
٨٢	قائمة الالواح
٨٧	قائمة الاشكال
٩٢	قائمة الجداول

معهد الدراسات لحضارات العراق القديم
جامعة كوكشيكان - طوكيو - اليابان

تقديم المترجم

ان تاريخ عمل البعثات الاثريه اليابانيه فى القطر يعتبر حديثا
 اذا ما قورن بعمل بعض البعثات الاجنبيه ، كالانكليزيه ، والالمانيه
 والفرنسيه ، الا أنهم حققوا نتائج فى هذا المضمار يمكن القول عنها
 متكامله • فتنقيباتهم فى تلول الثلاث والتى بدأت فى منتصف الخمسينات
 برئاسه الامير ميكا ساقد ألقت الضوء الكثير على بعض مشاكل
 التسلسل الحضارى لعصور ما قبل التاريخ فى شمال وجنوب القطر •
 أما تنقيباتهم برئاسه الاستاذ هديو فوجى فى كهوف الطار
 والتى بدأت فى بدايه السبعينات وتوقفت عام ١٩٧٧ فهى الاخرى
 جاءت متكاملة سواء كان ذلك فى اسلوب التنقيب أو النشر •

ومنذ توقف البعثه عن التنقيب فى كهوف الطار وحتى الان فانها
 لم تدخر وسعا فى تقديم المزيد من الاعمال التنقيبيه سيان كان
 الاشتراك فى حملات التنقيب المنفرده ، أو الاعمال الانقاذيه كأشراكها
 فى انقاذ أشار سدى حميرين وحديشه •

من حصيله الاعمال هذه هو التقرير الذى بين يدينا الان والذى يعتبر
 تقريرا أوليا لنتائج حفريات تله الكبة وتلول صنكور ، وتل الحميدات والتى
 تقع جميعها فى سد حوض حميرين •

أن التنقيب فى هذه المواقع دام أكثر من ثلاثة سنوات كشفت
 البعثه خلالها عن عصور حضاريه متعاقبه • وبعد مقارنه ما هو
 مكتشف استطاعت البعثه اليابانيه ربط هذه المواقع مع
 المواقع الاثريه الاخرى داخل القطر وخارجيه •

أن التقرير بصوره عامه يحوى على دراسات مستوفيه الشروط
 العلميه الا اننا لاحظنا أثناء ترجمه عدم ترابط وتكرار بعض
 الجمل • ان الظاهره الاولى ناتجه عن ترجمه التقرير من
 اللغه اليابانيه الى اللغه الانكليزيه • أما الظاهره الثانية

فانها ناتجه من رغبه الكاتب على تأكيد بعض المعلومات
الوارده فى التقرير • على أية حال فاننا حاولنا جهد الطاقه
ربط بعض الجمل وخلافه ما يمكن حذفه ليتسنى للقارىء متابعته
بصورة تعبد الملل • هذا ولا يفوتنا ان نذكر بأن التقرير
يمتاز بطباعه واضح ومخططات وصور فوتوغرافيه دقيقه
ان هذه المميزات كانت خير عليه توثيق لنتائج البعشه فى
حوض حميرين الذى ستخمر تلوه بالمياه ان عاجلا أو آجلا •

الدكتور / منير يوسف طه

مدير التحريات / المؤسسة العامه للاثار

والتراث - بغداد

تقرير اولى عن نتائج تنقيبات البعثة اليابانية في تل الكبة وتلول منكور
الواقعة في حوض حميرين (التقرير السادس)

مقدمة المحرر

قبل البدء في سرد هذا التقرير تود البعثة الآتارية اليابانية تقديم
جزيل الشكر والامتنان الى المؤسسات والاشخاص الواردة أسمائهم أدناه وذلك
لتفضلهم بتقديم المساعدات العلمية والمالية طيلة فترة التنقيبات . نخص
بالذكر منهم المؤسسة العامة للآثار والتراث العراقية ووزارة التربية
اليابانية، جامعة كوكشيكان اليابانية، أعضاء البعثة اليابانية والممثلين
العراقيين .

المدير :- هيديو فوجي جامعة كوكشيكان
الآثاريون :- شيكيو آوكي معهد طوكيو الوطني للابحاث والممتلكات الحضارية

هيرويوكي إي جامعة كوكشيكان
هيروكو كامادا جامعة كيوتو
ماسانورى كاواماتا جامعة كوكشيكان
ريوجي ماتسوبارا جامعة نازان
كن ماتسوموتو جامعة كوكشيكان
ناكاو أوداني جامعة توياما
هيروميجي أوكوجي جامعة كوكشيكان
كاتسوهيكو أونوما جامعة لندن
تادا هيكو أوتسو متحف أدمستر
تورو شينوهارا كلية أوكاياما (العلمية)
كازومي ياكى جامعة كوكشيكان
شوايجي يوكوياما متحف ميكرو للفنون

الأنثروبولوجيين والجيولوجيين: هيديمي ايشيدا جامعة أوساكا
سانائى كاندا كلية هيوكو الطبية
ماساتوشي كاواباتا طبيب أسنان
تاكا يوشي ناسو متحف التاريخ الطبيعى في
أوساكا

يو وادا كلية هيكو الطبية

المعماريون : - كازوشي هامازاكي جامعة كيوتو
 كيوهارو هوري أجي جامعة كوماموتو
 كازوهيكو هوشي جامعة متروبوليتان - طوكيو
 ناأومي ايكوجي - معمار
 جيوكو ايتو جامعة سالوينكي (اليونان)
 شنجيرو كيري شيكي جامعة متروبوليتان - طوكيو
 بونجي كوباياشي جامعة اليابان
 ناوكي كوروكاوا جامعة متروبوليتان - طوكيو
 كوجي نيشيكاوا جامعة كيوتو
 ياسويوشي أوكادا جامعة كوكشيكان
 ماسامي يوشيزاوا معمار

الآثاريون العراقيون : -

محمد عبد القادر الموس

محمد اسماعيل محمود

الشهيد احمد مطر العيد

صلاح الدين حميد فريد

كذلك تشكر البعثة اليابانية جميع الذين ساهموا في تسهيل مهمتها أثناء عملها في حميرين وتخص بالذات وزارة التعليم اليابانية، وزارة الخارجية اليابانية، السفارة العراقية في طوكيو كذلك تشكر البعثة الشركات والمؤسسات التي كان لها الأثر العميق في انجاز مهمة التنقيب وتثبيت أواصر الصداقة ما بين العراق واليابان .

يتضمن هذا البحث الاولى نتائج التنقيبات التي أجريت من قبل البعثة اليابانية وتحت اشراف الاستاذ هيديو فوجي . وقد كتبت هذه التقارير الواردة أدنان من قبل الاشخاص التالية أسمائهم بعد مناقشات طويلة .

تمهيد هيديو فوجي

الفصل الاول هيديو فوجي

الفصل الثاني ناكاثو أوداني ، هيرويوكي اي

الفصل الثالث هيروكو كامادا ، تاداهيكو أوتسو

الفصل الرابع	كن ما تسوموتو
الفصل الخامس	ماسانورى كاواماتا
الفصل السادس	كاتسوهيكو أونوما
الفصل السابع	ياسويوشي أوكادا ، كازوهيكو هوشي
الفصل الثامن	هيديمي ايشيدا ، يو وادا
الفصل التاسع	يوشيميتسو هيرو
الفصل العاشر	زينبي ناكاكوا
الفصل الحادى عشر	أ - كازو ياماساكي
	ب - شركة نيسان الكيماوية ، معهد البحوث

المركزى في اليابان

الفصل الثاني عشر	هيديو فوجي
المحرران	هيديو فوجي ، هيرويوكي اى
المحرر المساعد	ماسانورى كاواماتا

تم رسم المخططات من السادة الواردة أسمائهم أدناه

تل الكبة هيرويوكي اى ، ياسويوشي أوكادا

تل صنكور (أ) تاداهيكو أوتسو ، هيروكو كامادا ، هيروميجي أوكوجي

تل صنكور (ب) كن ما تسوموتو ، شويجي يوكويا ما ، هيروميجي أوكوجي

تل صنكور (ج) كن ما تسوموتو ، هيروميجي أوكوجي

تلول الهيميد يان ماسانورى كاواماتا

الخارطة الطبوغرافية ماسانورى كاواماتا

عمل شكل مصغر للبناية التي عثر عليها في الطبقة السابعة في تل الكبة

ياسويوشي أوكادا ، كازوهيكو هوشي ، كازومي ياكى •

لقد تم تحديد اتجاه الشمال في هذا التقرير على البوصلة نظرا لعدم وجود

خرائط دقيقة تحدد ارتفاع تل الكبة عن مستوى سطح البحر فقد حدد مبدئيا ب ٩٢

متر بعدها وعد وصول البعثتين الأثريتين والالمانية والبلجيكية حصلنا على

الارتفاعات بصورة دقيقة لذلك لم نستدلح تنزيل الأرقام على الخرائط الواردة في

هذا التقرير •

تمهيد

نظرا لاهمية موقع تلول حميرين فقد قررت الحكومة العراقية انشاء سد

لخزن مياه نهر دىالى في مساحة تقدر ب ٣٥٠ كم مربع وبارتفاع يقدر ب ١٠٨ متر عن

مستوى سطح البحر يمتد هذا السد فيما بين ١٥٠ كم الى ١٣٠ كم شمال شـرق بغداد على طول نهـر دـيالى •

وبما أن أرض هذا السد تحتوى على عدة مواقع أثرية وتاريخية لذا قررت المؤسسة العامة للآثار في ربيع عام ١٩٧٧ البدء بانقاذ هذه المواقع قبل أن تخمرها مياه هذا السد ، وبناءً على ما جاء في تقارير الكشوفات لهذه المنطقة فانها تحوى على مالا يقل عن ٧٥ تل تعود لمختلف العصور تبدأ بالحصر الحجري الحديث وتنتهي بالعصور الاسلامية المتأخرة •

من المحتمل جدا تكون هذه المنطقة همزة الوصل ما بين الشرق والقسم الاوسط من بلاد النهرين منذ العصور السحيقة في القدم وعليه فان نتائج التنقيبات سوف تلقى كثيرا من الضوء على بعض الامور والتي لا زال يكتنفها الغموض اضافة الى ذلك فان نتائج التنقيبات سوف توضح لنا التغيرات التي طرأت على المجتمعات الزراعية الاولى وتطورها الى مدن • كذلك فان هذه النتائج سوف ترشدنا الى أسرار علم الاجناس كالسومريين وعلاقتهم ما بين حضارة الشرق وحضارة وادى الرافدين •

لقد بادرت المؤسسة العامة للآثار والتراث العراقية بالطلب في اليونسكو ومعاهد أخرى خارج القطر للمساعدة في تنظيم حملات عالمية لانقاذ هذه التلول والتي هي بدورها ملك للانسانية جميعا فعليه يجب التعاون ما بين جميع الاثاريين المخلصين لانقاذها •

كنا ولا نزال مولعين في تطور حضارة وادى الرافدين بصورة خاصة وعلاقتها بالحضارات القديمة المحيطة بها بصورة عامة • اضافة الى ذلك فاننا مولعين بالاجناس التي خلقت هذه الحضارة والى الهجرات المتعاقبة التي أتت الى هذه المنطقة بالذات • من هذا المنطلق وبالتحديد اعتبارا من عام ١٩٧١ ونحن نعمل في مجموعة تلول الطار والتي تبعد ١١٠ كم جنوب غرب بغداد ولكن لم نتوصل الى معرفة الحضارات المتعاقبة من خلال تنقيباتنا هناك لغاية عام ١٩٧٧. توقفت أعمالنا في مجموعة كهوف الطار لى تبدأ حملة أثرية جديدة في حوض حميرين ومن خلال هذه الحملة الأثرية سوف نتوصل بالتأكيد الى العلاقة ما بين جنوب وشمال وادى الرافدين من جهة وعلاقة وادى الرافدين بالهضبة الشرقية من الجهة الثانية • بعد الكشوفات السريعة في المنطقة والاستفسارات الجديدة من القسم الثقافى في وزارة التعليم اليابانية تم اختيارنا لموقع تل الكبة شأننا في ذلك شأن بقية البعثات العاملة في سد حميرين والتي تبحث عن تلول أخرى ذلك شأن بقية البعثات العاملة في سد حميرين وتمتد من العصور

الحجرية الى العصور الاسلامية المتأخرة •

كانت هناك لقاءات دورية مابين البعثات العاملة في السد للتوصل الى أفضل الصيغ سواء في العمل وللتوصل لنتائج علمية جديدة والتي تلقى مزيدا من الضوء على الحضارات المتعاقبة في بلاد مابين النهرين، إضافة الى ذلك فان المؤسسة العامة للآثار والتراث قد عقدت ثلاث ندوات (١٩٧٨ - ١٩٨١) عالمية خصصت للقاء المحاضرات الخاصة بنتائج الحفريات •

هذا لا يفوتنا ذكر الارشادات والنصائح العلمية التي وجهها اليها جلالته الامبراطور ميكاسا عند زيارته الى السد مع قرينته في نهاية نيسان من عام ١٩٧٩ . كذلك لا يفوتنا أن نتقدم بالشكر الجزيل الى الدكتور موعيد سعيد بسيم رئيس المؤسسة العامة للآثار والتراث لما قدمه لنا من مساعدة طيلة مدة التنقيبات إضافة الى ذلك فاننا نشكر السادة العاملين في المؤسسة لما أبدوه من مساعدة كالدكتور بهنام أبو الصوف المشرف العام لتنقيبات حميرين ، السيد كريم عزيز ، السيد فاضل مظلوم المدير الاداري للمشروع وصلاح الدين حميد فريد ممثل المؤسسة لمدة ثلاث سنوات إضافة الى ذلك فاننا لانسى المساعدة التي قدمها اليها المرحوم الاستاذ فؤاد سفر والذي وافته المنية في حادث اصطدام عندما كان في طريقه لزيارة مناطق التنقيب •

بحثنا هذا يتضمن الخطوط العريضة لنتائج تنقيبات البعثة اليابانية في حوض السد مضافا اليها بعض المعلومات التي حصلنا عليها من خلال المحاضرات التي القيت في الندوات العالمية الثلاث • والخلاصة المذكورة هنا مطابقة الى تلك التي نشرت في عدد سومر الخاص بتنقيبات حميرين •

I المقدمة

تل الكبة وتل حنكور الثلاث والتي أطلق عليها حنكور (ا) ، (ب) ، (ج) تبدأ من الجنوب والتي سوف تغمرها مياه السد/قد اختيرت من قبل البعثة اليابانية ، جميعها تقح عند قرب فتحة السد ، ومنخفضة عن بقية معظم التلول • في ٢٥ أيلول عام ١٩٧٧ ، وأثناء الكشف عن تل الكبة التقطت البعثة من على سفوح بحزر التلال (تل سليمة وتل بردان) ملتقطات عديدة تتمثل في مقاشط حجرية وقطع فخارية ملونة تعود الى ما قبل الفترة الاكديّة •

وبعد بناء مقر للهيئة والذي يتوسط قرية نوري أمين وقرية بردان باوى بدأ العمل في

١٩٧٧/١٠/٢٤ في تل الكبة وفي ١٩٧٧/١٠/٢٤ في تلول صُنكور •
 بعد تقسيم التل الى مربعات ابعادها ٥٠م × ٥٠م مع تسلسل القراءة هذه المربعات
 رقت I II، III من الشمال الى الجنوب و ١ ، ٢ ، ٣ من الشرق الى الغرب وعليه
 فان الجميع مابين هذين الرقمين يحدد موقع الملتقطات وسير التنقيبات • الى جنوب
 تل الكبة هناك تلول حميدات والتي تمتد ٢ كم بمحاذاة ضفة نهر نارين • فى الجهة
 الشمالية من تل حميدات عثرنا على قطع فخارية مزججة وقطع من الزجاج تعود الى
 فترتى الغزو الفرثية والساسانية الا اننا لم نعثر على أى فخار من جهته الجنوبية تبدو
 وكأنها تكوينات طبيعية. وبناء على طلب المؤسسة العامة للآثار والتراث فقد حفرتنا خندق
 اختبارى فى تل حميدات (ان نتائج التنقيبات قد ذكرت فى هذا التقرير ايضا) أما
 المنطقة التى اختارتها البعثة اليابانية للتنقيب تمتد ١ كم شرقا ، ١ كم غربا ، ٣ كم
 جنوبا ، ١ كم شمال تل الكبة والذى يقح مابين خطوط العرض ٣٤°١٢ شمالا وخطوط
 العرض ٤٤°٥٩ درجة شرقا أى أنه يقح على بعد ٥ كم من التقاء نهر دىالى بنهر
 نارين كما أنه يبعد مسافة ١٢ كم غرب مدينة السعديه • و ١٩ كم جنوب غرب مدينة
 جلولا • ان المنطقة المحيطة بتل الكبمحاطة بعدة تلول أثرية فمثلا هناك تل امليحة
 شمالا ، تل حربه والذى نقبت فيه البعثة الالمانية وتل صبره والذى نقبت فيه البعثة
 البلجيكية وتل صطه والذى نقبت فيه البعثة الاسترالية. (شكل ١)
 تلول صُنكور (ا) ، (ب) ، (ج) وتلول حميدات تكون خطا واحدا يمتد من الشمال
 الشرقى الى الجنوب ومعدل ارتفاعا ٨٨م عن مستوى سطح البحر وعلى القسم الشمالى
 الغربى بهذه التلول هناك قرية ومزارع صغيرة بينما تنتشر على قسمه الاسفل من الجهة
 الجنوبية الشرقية والتي هى أخفض بكثير من الجهة المعاكسة بعض المنخفضات المملوءة
 بالمياه الآسنة والاعشاب اضافة الى ذلك فان هناك قناة تمتد من أعلى نهر دىالى
 وتمر بمحاذاة تلول صُنكور والكبه • هناك بعض الاسماء الصغيرة تعيش فى هذه القناة
 أما أجزاء اليابس فى هذه المنخفضات فانها مراعى للاغنام وماعز وأبقار أهالى القرى •
 اضافة الى ذلك فانها تحوى بعض الطيور المائية والخنازير الوحشية والأرانب والذئاب •
 ان المعدل السنوى لهطول الامطار فى حوض حمرين يبلغ ٣٠٠ ملم يسقط معظمه
 مابين شهر تشرين الثانى وأذار لذا فان سكان هذه المنطقة يعتمدون على الديم بينما
 يعتمد سكان المناطق المنخفضة على السيح •
 درجات الحرارة متفاوتة فى الحوض حيث تصل فى الصيف الى ٥٠ درجة مئوية وتنخفض

أثناء الشتاء الى تحت الصخر في بعض الاحيان •
تنتشر في هذا الحوض بصورة خاصة زراعة القمح والشعير وزراعة القطن والرمان والتين
والبرتقال والاعناب وبحسن الخضار كالذرة والسهم والحمص والخيار والطماطة والرقى
والبامية بصورة عامة •
طالما ان الـ وض ليس بعيد عن تلول حمير فإنه يستغل في بعض الاحيان
من قبل البدو والمارين في هذه المنطقه، اما احسن أشهر السنه في الحوض
فهو شباط واذار وذلك عندما تنبت الاعشاب وتتفتح بعض الـ اوارد كالأقحوان
مثلا •

II تل الكبه

الطبقات والمخلفات الاثريه — (شكل ٣) كما هو موضح في الخارطة فان قطر

تل الكبه ٨٠ م وارتفاعه عن الارض المجاورة يبلغ ٨ م قسمه الاعلى مسطوي
يبلغ قطره ٢٠ م • سفحه الجنوبي شديد الانحدار عكس سقحة المعاكس •
بدأت تنقياتنا المتواصله في هذا التل في ٢٩ تشرين الاول ١٩٧٧ وانتهت في
٢٩ اذار ١٩٨٠ بدأ الحفر في مجس اختباري يمتد من الشمال للجنوب يبلغ
عرضه ٩ أمتار ويمتد على طول التل (تشبيك رقم ٩ ورقم ١٠) •

بعد ذلك تم تنقيب مجس اختباري اخر عرضه ٩ امتار ايضا يمتد من الشرق الى الغرب
(تشبيك رقم II ورقم III) بعدها شملت التنقيات جميع مناطق التل •
تم الكشف عن سبع طبقات ابتداءً من التربه العذراء والى اعلى نقطه فيه قسمت
هذه الطبقات كالآتي : (الطبقة الاولى) (الطبقة الثانيه) (الطبقة الثالثه)
(الطبقة الرابعه) (الطبقة الخامسه) (الطبقة السادسه) (الطبقة
السابعه) شكل رقم ٤، وطالما ان هناك اكثر من ارضيه واحده في الطبقة الواحده
فاننا قسمنا هذه الطبقة الى اقسام ثانويه أطلق عليها (أ ، ب ، ج من الاعلى
الى الاسفل) •

ان الطبقات السبع مع ارضياتها يمكن ان تشخص بالفترات التاليه :
الطبقة الاولى : من الاعلى والتي يتراوح سمكها ١٥ م تعود الى مقبره اسلامية
أبعادها ٨ م × ٥ م جميع قبورها مبنيه بالطابوق •
الطبقة الثانيه : والتي يتراوح سمكها ما بين ١٥ م الى ٣٥ م فأنهـا

تعود الى فترة الغزو الاخمينى •

الطبقة الثالثه : الى الطبقة السادسة والتي يتراوح سمكها (ما بين ٣ر٥ م —

٥ ر ٥ م فانها تعود الى عصر فجر السلالات •

أما الطبقة السابعه : والتي يتراوح سمكها (ما بين ٥ ر ٥ م الى ٨ م فانها

تعود الى المصطبه المركزيه الدائرية •

الاسوار الداخليه الدائرية رقم ١ ، ٢ عثرنا فى وسط هذا التل على مصطبه

دائرية الشكل طول قطرها ٥ متر وارتفاعها عن سطح الارضيه ٥ ر ٣ م وفي

وسط هذه المصطبه عثرنا على موقد نار يتراوح قطره ٨٠ سم وعمقه ٨٠ سم

ايضا • حول هذه المصطبه عثرنا على مرصغير يتراوح عرضه ما بين ٥٠ — ٨٠

سم وتحتها عثرنا على نفق عرضه ٩٠ سم وارتفاعه عن ارضية المصطبه ١ر٥ م ويمتد

الى عمق ٥ ر ٣ م باتجاه الموقد (لوح ٩ رقم ٢) •

ان مدخل النفق يقع فى الجهه الجنوبيه وله سقف معقود (شكل ٥ ، المقطع)

اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على مجموعه من الفخاريات من بينها اناء ذو مصب •

(شكل ١٩ رقم ٦) • ان هذه المصطبه محاطه بخمسه اسوار دائريه

الشكل اطلقنا عليها السور الدائرى رقم (٣) ، السور الدائرى رقم (٤) السور

الدائرى رقم (٥) ، السور الدائرى رقم (٦) السور الدائرى رقم (٧) بين

كل سورين عثرنا على مر ببلغ مجموعها خمس مرات . وخارج السور السابع عثرنا

على خندق يحيط السور السابع ويحاذى السور الدائرى الثامن وعلى ما يبدو ان هذا

البناء يميل الى الشكل البيضوى اكثر من الشكل الدائرى بقطر قدره (٨٠) متر

يتجه من الشمال الى الجنوب (شكل ٥) •

الاسوار الدائرية (رقم ٣ و ٤ والممر رقم ٣)

ان السور الدائرى

رقم ٢ والسور الدائرى رقم ٣ يلتقيان على ارتفاع ٤ر٥ متر من الارضيه

ويشكلان شكل قوس • ومن المحتمل ايضا ان السور الدائرى رقم ٣ والسور

الدائرى رقم ٤ والسور الدائرى رقم ٥ يشكلون اقواسا ايضا • ان الجزء

الاعلى من البناء البيضوى يصل قطره الى ٢١ مترا وفى منتصف الممر

رقم ٢ عثرنا على السلم (شكل ٥ و ٦) ان اقل سمك السور الدائرى رقم

٤ هو ٣٠ ر ١ م من الجزء الاسفل منه واقصى سمك لهذا السور يصل الى

٦٠ ر ١ م، وشكله العام دائرى يصل قطره الخارجى ١٢ر٥ متر وفى نهايته
 عثرنا على غرفه رقم ٣ (شكل ٦) . ان هذه الغرفه لها مدخل فى
 الشرقيه ومدخل اخر فى الجهه الجنوبيه يصل هذا ن المدخلان الى المررقم
 ٣ والذى هو الاخر له مدخلان احدهما يقع فى الجهه الغربيه والاخر
 يقع فى الجهه الجنوبيه الشرقيه . ان بقايا السور الدائرى رقم ٤ تصل الى
 ارتفاع من ٣ر٥ متر الى - / ٤ أمتار وعند جزئه الشرقى عثرنا على سلم . اما
 الجزء الخارجى للسور الدائرى رقم ٤ فهو مكسوبالطين بطبقه يتراوح - سمها
 بين ٢ - ٣ سم .

الاسوار الخارجيه رقم ٤ و ٥ والمررقم ٤

ان الجدار المضاف والذى يقدر

سمه بين ٥٠ - ٧٠ سم قد اضيف الى السور الدائرى رقم ٤ قد اطلقنا عليه
 ايضا السور الدائرى رقم ٤ وكلما ارتفع هذا الجدار زاد سمه . هذه الحاله
 تنطبق ايضا على السور الدائرى رقم (٥) والذى يواجه السور الدائرى رقم (٤) .
 لذا فاننا نعتقد بأن السور الدائرى رقم (٤) والسور الدائرى رقم (٥) قد اضيفا
 الى البناء فى الفترة الثانيه كذلك فانه من الملاحظ بان هذين الجدارين
 يلتقيان فى القسم الاعلى ويشكلان قوس .

ان سمك السور الدائرى رقم (٥) هو (٢) متر ويشكل شكلا بيضويا يوازي السور
 الدائرى رقم (٤) وعند نهايتهما فى الجهه الشماليه عثرنا على غرفه وعلى بئر ماء
 قطره متر واحد (لوح ٥ رقم ٢) . اما المررقم (٤) والذى يقع
 ما بين السور الدائرى رقم (٤) والسور الدائرى رقم (٥) فيبلغ عرضه (٢) متر
 لذا فانه اوسع من المرين رقم (٢ ، ٣) . يحوى هذا المر على ثلاثه
 مداخل وعلى ثلاثه سلالم كل سلم يقع فى الجهه اليسرى قرب احد المداخل اضافه
 الى ماتقدم فاننا عثرنا على طلعات على السور الدائرى رقم (٥) (لوح ٧ رقم ١)
 ان الغايه فيه فمذه الطلعات هى اما تحليه معماريه او انها استعملت
 لغرض تشييد السطح ، ان الاقتراح الثانى قد توصلنا اليه بعد ملاحظتنا لسمك الجدار
 فى الاعلى اكثر من الاسفل .

الاسوار الدائريه رقم (٦ و ٧) والمرات رقم ٥ و ٦)

تعود هذه الاسوار

والممرات الى الفترة الثالثة، فيها عثرنا على بقايا يتراوح سمكها ٢٠ - ٣٠ سم تحوى قطع فخارية تقع ما بين التربة العذراء ونهاية السور الدائرى رقم (٦) والذي يتراوح سمكه ١٥٠ - ٦٠ ر ١ متر والذي لم يبق من ارتفاعه سوى مترا واحدا، اما السور الدائرى رقم (٥) فانه سمكه يتراوح ما بين مترين ومترين ونصف والذي لم يبق من معالم ارتفاعه سوى مترا واحد - ان شكل هذين السورين هما بيضويان ايضا وقطر السور الدائرى رقم (٦) هو ٣٣ متر من الجنوب الى الشمال وقطر السور الخارجى رقم ٧ فهو ٢٨ متر من الشريق الى الغرب • اما الممرات رقم (٥) فقد بلغ عرضه متر ونصف، ارضيته مبلطة باللبن ايضا بينما الممر رقم (٦) فقد تراوح عرضه ما بين ٣ - ٣٥٠ متر لم نعثر على بقايا التسطیح للممر رقم (٦) وفى اعتقادنا بان الممر رقم (٥) كان بالتأكىد مسقف •

(الخندق الخارجى والسور الدائرى رقم ٨)

لقد تم تشييد السور الدائرى رقم (٧) على طول حافة الخندق الدائرى والذي يحيط بالبنا • ان الغايه من بناء هذا السور هو بعد ردم الخندق والذي يتراوح عرضه ما بين ٣٥ - ٤ متر الذى يبلغ عمقه مترين وهو يحيط بالسور الدائرى رقم (٧) بكامله وتتخلله بعض (الجسور) فى جهته الشرقية (شكل رقم ٥ ولوح رقم ٥) • ان القسم الدخلى للسور الدائرى رقم (٨) يبعد عن خانه هذا الخندق ستة أمتار لذا فاننا اعتبرنا هذا السور هو السور الاخير والذي يحوى اربعة جدران اضافية يبلغ اقصى سمك لها عشرة امتار • كذلك فاننا نعتقد ان هذه الجدران الاضافية قد شيدت على مراحل ومنيه مختلفه تحوى سلالم وغرف صغيرة ايضا • هذا واثناء التنقيب فاننا عثرنا على مساحة متروكه واسعه ما بين السور والخندق (باحة) تحوى غرف بعضها صغير والبعض الاخر كبير استعملت من قبل اولئك الذين بنوا هذا السور الاخير • ان هذا السور الاخير قد بنى ايضا بعد ترك استعمال الخندق الدائرى وهذه حقيقة توصلنا اليها عند ملاحظتنا لتشييد الغرف والتي بنيت فوق دفن هذا الخندق •

نهاية عصر الشبيه بالكتابه ((جمده نصر)) •

(١) الطبقة السابعه (عصر جمده نصر) تتميز التربه والتي

عشر فيها على مخلفات هذه الطبقة بكونها غريته تحوى على كثير من مكونات الجص هذا وان التربة التى تغطى التل لا تختلف كثيرا عن نوعيه التربه فى هذه الطبقة والتى عثرنا فيها على بناء دائرى الشكل مشيد باللبن مقاساته (٢٨ سم × ١٤ سم × ٧ سم) .

الحفر والكرات الحجرية

عثر على مجموعه من الحفر تحت ارضيات الممرين المرقمين (٣ و ٤) (شكل ٥) يتراوح قطر كل حفرة من بين ٦٠ سم و ١٢٠ م واعماقها تتراوح ما بين ٦٠ سم و ١٥٠ م اما اشكالها بصورة عامه فانها تشبه ((الزمزيه)) بعض جوانب هذه الحفر مبينه باللبن بينما ارضياتها قد صفت بالطابوق يعتقد ان لغايه من وجود هذه الحفر هو تخزين الحبوب . ان اهم ما يلاحظ هو الحفر الموجوده فى الممر الرابع حيث نظمت هذه الحفر على ابعاد متساوية وتتجمع حول المدخل . أما التربه التى عثر عليها داخل هذه الحفر فهى رملية اوبقايا كسر لبن . كذلك فاننا عثرنا على عدد من الحفر فى الممرين السادس والسابع وان ما جلب انبائها هو الحفرة الواقعه شرق الممر السادس (شكل ٥ لوح ١٤ ولوح ١١ رقم ٤) ويتراوح قطر هذه الحفر ١ م أما عمقها فهو ٢٣٠ م وتم العثور داخلها على ١٦ هيكل عظمى مكدمه . عشره منها تعود الى أطفال بينما الستة الباقية تعود الى أشخاص بالغين . وضعوا بصورة اعتباريه واحدا فوق الاخر . من خلال هذه الحالة يعتقد بأنه تم رمى الاموات فى هذه الحفرة واحدا بعد الاخر . كذلك عثر فى داخل هذه الحفرة على بقايا خشب وكسر فخارية مع اناء كامل (شكل ١٢ رقم ١) قرب القاع . داخل الممرات الثالث والرابع والخامس والخندق الذى يحيط بهذه البنايه الدائرية عثر فيها على عدد من الحجارة الكرويه الشكل والتى يقدر حجمها بحجم كره القدم وفى احدى مناطق الخندق عثرنا فى مكان واحد على ١٥٠ كره حجرية عثر على مجموعه من هذه الكرات فوق ارضية الممرات تعلوها قطع من اللبن . على اى حال لا نستطيع فى الوقت الحاضر الاجابه على استعمالات هذه الكرات وهل انها كانت اصلا على سطح البنايه وانها استعملت لاغراض دفاعيه ثم سقطت فى الممرات بعد تداعى البنايه وان الاعداء رموها من الخارج .

حالة الملتقطات الاثرية اثناء التنقيب *

ان الممرات الثانية والثالثة والرابع

والخامس والتي تعود الى الطبقة السابعة ب - والسابعة أ قليلة الملتقطات الاثرية الا أننا عثرنا على جره كبيرة كانت تستعمل للخن على الاكثر أما الممرات أنفسها فأننا عثرنا على حبوب متفحمة * كذلك فأننا عثرنا على حبوب متفحمة لازالت عالقة على جرار الخزن * وعلى ما يبدو بأن هذه الممرات لم تستعمل لجرار الخزن فقط بدليل العثور على كمي لا بأس بها من العظام الحيوانية واقراص مغازل خاصة في الممر الرابع ومن هذا الدليل يمكننا الاستنتاج بأن بعض هذه الممرات استعملت كأمكنه للغزل ، اضافة الى ذلك فأننا عثرنا على فأسين، ورأس رمح ومقشط مصنوعه من النحاس في الجد ار الدائري رقم ٥ (لوح ١٤ رقم ١) تمكنا من العثور على جرار خزن وبعض المواد الاخرى لذا اعتقدنا بأن هذه الممرات كانت لخن المواد الثمينة اضافة الى كونها مكانا لخن الحبوب *

حول حافات جرار الخزن السـمـجـه الصنـاعـه هناك نقوش تشبه نقوش الاختام الاسطوانيه (لوح ١٥ رقم ٥ - ٨) قد يرمز هذا الرمز (المنقوش الى صاحب الجره او الجرار او الى الشخص الواهب) الى جانب عثورنا على فخاريات ملونه بلون اسود أو أحمر فأننا عثرنا على أواني حجرية (رؤوس صولجان ، نقوش لاختام مختومه على الطين ، أختام اسطوانيه ، خرز صدفية ، اضافة الى ماتقدم فان التنقيب قد كشف عن بعض بقايا المناجل الحجرية والتي عثر عليها في وسط البناء المستدير داخل الممر الرابع *

(٢) عصر فجر السلالات الاول -

الطبقات السادسة والخامسة والرابعة والثالثة

(ب) كما هو مذكور آنفا فان الطبقة السفلى من التل قد بنيت مباشرة فوق التربة العذراء والتي تعود الى عصر جمده نصر وفوق هذه الطبقة والتي هي (الطبقة السابعة أ) عثر على بقايا لبن متكدس الى ارتفاع (م - ٢ م اضافة الى ذلك فان البنايه المستديرة لم تهجر كلياً وإنما بنى فوقها بناء اخر بأبعاد لبنه والذي هو أكبر بقليل من اللبن السابق ٣٦ سم - ٣٠ سم × ١٥ سم - ١٦ سم × ٨ سم - ٩ سم وعلى ما يبدو فان سكان الطبقة العليا استعملوا الجزء الاوسط لهذا البناء كنواة لبنائهم والذي يقدر محيطه ب ١٢ م كذلك

فانهم اضافوا عدد من الغرف حول الجزء الاوسط للبنية الدائرية (شكل
٨ لوح ١١ رقم ١) •

اننا لانعرف بالضبط هل كان هذا البناء الدائري محل عباده او مكان مقدس
(أوسبكي) هذا وان القسم الجنوبي والغربي من الجدار الدائري رقم (٨) للبنية
المستديرة قد استعمل في أدوار لاحقه ايضا •

ان بعض اجزاء البناء الدائري قد قطعت اجزاء منه في نهايه عصر فجر
السلالات الاو وبنيت بعض الغرف على قسمة الاوسط وقد تغيرت ابنيه هذه
الفترة بالذات كليا عن الفترات السابقه حيث اصبحت صغيره ومجاميع مستقله
عوضا عن الابنيه الضخمه مثال ذلك شكل رقم (٨) والذي يوضح مخطط الجهة
الشمالية الشرقيه من التل كما هو معروف فان الجزء الجنوبي والاوسط من المخطط
يحوى على غرف صغيره طول ضلع الواحد منها ١ م - ٣ م ورتبت بشكل مشعب •
ان البنية الكبيرة الواقعه من الجهه الجنوبيه والتي ابعادها ١١ م × ٤ م
يقع مدخلها من وسط الجانب الطويل • عثرنا داخلها على دكه لتقديم
القرابين أبعادها ١٥ م × ٧٠ سم ومشيدة بالبن • وعلى جانب البنية
عثرنا على بنائه اخرى لها شكل شبه منحرف يقع مدخلها من الضلع الشرقي
(الضلع الطويل) وعلى يسار هذا المدخل عثرنا على دكه قرابه صغيره الحجم
مشبهه على جانب الجدار من الداخل • كذلك فان التنقيتات قد كشفت على
آثار حرق ؟ من عده مناطق على ارضيات هذه البنيات وعلى عدد لا بأس
به من الفخاريات السمجه الصنعة والمحزوه ، أما في البنية الاخرى
والتي يبلغ طولها ١١٥ م وعرضها ٥ م والتي تحوى غرفة واحده مدخلها يقع
في ضلعها الطويل فلم نعثر على مخلفات حضارية داخلها الا على اشياء بسيطه
لا تتعدى كونها جرتين فخاريتين سمجتين الصنعه ، عثر عليهما على ارضية
الغرفة وعلى موقد مربع الشكل عثر عليه في الجانب الجنوبي خارج المدخل
الرئيسي (الاول مره نعثر على موقد مربع الشكل يعود الى عصر فجر السلالات)
اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على مجموعة من الابنيه تحيط بالبناء الدائري
بعضها يحتوى على غرفتين فقط والبعض الاخر يحتوى على غرفة واحدة وهناك
مباني اخرى تحوى بين اربعة الى سبع غرف متصلة الواحد بالاخرى
(شكل رقم ٩) بعضها يحوى فتحات تهويه يتراوح عرضها ما بين ١٠ سم - ٢٥

سم تفتح وتعلق اثناء الحاجه بواسطة قطعة من اللبن والبعض الاخر أغلقت
اما بقطع من الفخار أو بقطه من الحجر •

أما سمك جدران هذه البنايات فانه لا يتعدى نصف لبنة أى انه بين ١٥سم
— ٢٠ سم • وعلى ما يبدو فان جميع الغرف المكتشفة استعملت للسكن ارجح من
كونها قد استعملت للخن هذا وقد تمكنا من العثور على بعض متفحمت لقمح
على ارضيات لبعض الغرف • ان عرض الممرات ما بين البيوت لا يتعدى المترين
أما المداخل فان عرضها لا يتعدى المتر الواحد والتي تسع لدخول البشر
والخيل والحيوانات الاخرى وقد عثرنا اثناء التنقيب وفوق ارضيات هذه الممرات
على رماد ، كسوفخاربه بعضها ملون وبعض الحصى • ان معظم الفخاريات
الملونه عثر عليها فوق ارضيات ممرات البنايات الكبرى •

ان البنايات العائده الى عصر فجر السلالات الاول والتي تعتبر تحول من
الطبقة السادسة الى الطبقة الرابعه تتلاشى قليلا حيث ان غرف السكن اصبحت
هى الطايه • لذا فان الابنيه الدائرية قد ضاعت معالمها حتى الطبقة
الرابعه حيث عثر على جدار سميك مع مصطبه داخلية سويت الى مستوى سطح
الارض (شكل ٨) علاوه على شيوع البناء الدائرى اثناء هذه الفترة فاننا عثرنا
على جدران غير متناسقة، تتضح هذه الظاهرة خاصة فى الطبقة الثالثه •
(٣) عصر فجر السلالات الثالث (الطبقة الثالثة (أ))

على ما يبدو وبعد فترة

عصر فجر السلالات الاولى فان جميع الابنيه قد هجرت فى تل الكبه • لم تتوصل
الصورة صحيحه ودقيقه للابنيه العائده الى هذه الفترة وذلك بسبب تخريبها
اثناء الفترات اللاحقه •

وبدليل العثور على كسر فخارية تعود الى هذه الفترات وبالاخص الفترة
الاخمينيه • علاوة على ذلك فان ابنيه هذه الفترة قد قامت على انقاض ابنيه
عصر فجر السلالات الثالث اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على بئر قطره ٣ م يعود
الى الفترة الاخمينيه (شكل ٨) •

وفى داخل المجس والى عمق التربه العذراء وبعد ٢٥ م عن سطح التل
هثرنا على قبر واحد يعود الى عصر فجر السلالات الثالث • الا اننا لم نتمكن
من الكشف من هذا القبر بسبب ضيق التنقيب ويقع هذا القبر على عمق ٢ م من

سطح التل شكله العام مستطيل ابعاده ٥ م × ٢ م. وعلى ما يبدو بأن الجزء الاسفل منه مشيد بقطع من اللبن - عثر في داخله على أربعين قطعه فخاريه (شكل ٢١ لوح ١١ ورقم ٣) • وعلى بعض المتفحمت وبقايا عظام هشه حيث لم نتمكن من معرفة طريقة الدفن •

٤) الفترة الاخمينيه - الطبقة الثانية

على انقاض ابنيه عصر فجر السلالات الثالث

بنيت ابنيه الفترة الاخمينيه وعلى ما يظهر من خلال التنقيب فان ابنيه الفترة السابقة سويت قبل الشروع من بناء الابنيه اللاحقة • لذا فان جميع مستويات ابنيه عصر فجر السلالات الثالث قد ضاعت معالمها • ان جميع ابنيه الفترة الاخمينيه مشيده باللبن والذي ابعاده ٤٧ سم × ٢٥ سم × ١٠ سم •

البنية الوسطى (شكل ١٠ - لوح ١٥ رقم ٢٠)

ان هذه البنايه المربعة

والتي يمتد ضلعها الى الجبهه الشماليه والغريه بنحو ١٦ م و ١٥ م من الجبهه الشرقيه والغريه ومعدل سمك الجدار نحو ٢٥ م تقع في منتصف الموقع ، اما مد دخلها فيقع في الجبهه الشرقيه للضلع الجنوبي - تحوى هذه البنايه على ثلاث غرف صغيره كما ان سمك جدرانها اكثر من مساحتها المكشوفه • ان ارضيه هذه الغرف مغطاه بالحصى يقدر قطر الواحده من ١٥ سم - ٢٠ سم كما ان جدرانها مطلية بطبقة من الطين • ان اوسع هذه الغرف هي الغرفه الوسيطه والتي لم يعثر على اثار حفر في نصفها الشرقى. ان خلو هذه الجبهه من الحفر حملنا على الاعتقاد بان السلم للبنية قد بنى في هذا الجزء • ان سمك الجدران هو دليلنا الوحيد على وجود ابنيه فوق هذا البناء ، اضافة الى ذلك فان من المحتمل بان البنايه كانت تحوى اقواس في مداخلها • ان الجدران في الوقت الحاضر تعلو عن سطح الارض ب ٢٠ م •

السور الخارجى والممر

يوجد خارج البنايه الوسطيه سور يحيط بها يقدر سمكه بثلاثة أمتار ومابين هذا السور والبنية هناك ممر يقدر عرضه بخمسة أمتار • ولسوء الحظ فاننا لم نتوصل الى الجزء المتبقى من السور من الجبهه الغربيه للبنية والذي يقع في نهاية التل • وفى منتصف الجدار الشرقى الخارجى عثرنا على المدخل الرئيسى والذي يتراوح عرضه ٧٠ ر ١ م

ان الشكل البنائى يوحي بانها كانت لا غراض دفاعية أكثر مما هي سكنية وذلك بدليل ارتفاعها أولاً وسمك جدرانها ثانياً. في الضلع الشمالي عثرنا على مسطبة الغاية منها هو أما لوضع بعض الاشياء الخاصة بالبنائية، أو أنها استعملت للخبز .
بعد اجتياز البوابة نواجه مریدور حول البنائة لكننا لا نعرف هل أن هذا المر يعود الى نفس الفترة أو الى الفترات السابقة ونعتقد بأن شكل السطح هذا المر كان منحنياً أى بشكل قبة . هذا وأثناء التنقيبات فاننا عثرنا على كثير من كسر اللبن متناثرة هنا وهناك .

استعمال الطلعات البنائية

علاوة على بساطة هذه البنائة فاننا عثرنا بخارجها على طلعات على امتداد جداريها الشمالى والشرقى ، ان كل طلعة من هذه الطلعات يقدر طولها بنحو ٠٦٠رام وتبرز من الجدار بنحو ٠٥سم وفى كل منتصف طلعة هناك فتحة يقدر عرضها بعشرين سنتيمتر ربما استعملت لرمى السهام، أو انها ربما استعملت كحلية معمارية . أما الجدارين الآخرى تكون لهما طلعات الا أننا لم نتوصل اليهما . علاوة على ذلك فاننا عثرنا على طلعتين فى الجناح الشمالى للضلع الشرقى كانتا بحالة جيدة . كما أننا عثرنا على طلعات تقع على جانب المدخل . ان اللبن المستعمل فى جميع هذه البنائة متساوى الاحجام تقريبا كما عدا اللبن المستعمل فى اسناد هذه الطلعات فانه مربع الشكل وباعد تقدر ٣٣سم × ٣٣سم × ١٠سم وطريقة بنائه تختلف بعض الشيء عن طريقة البناء ذاته كما لذا فاننا نعتقد بأن هذه الطلعات مضافة لحماية الجدران الخارجية والمدخل الرئيسى . اننا نعتقد بان هذه البنائة قد استعملت لزمن طويل بدليل واضح وهو أن أرضية المرقد دفنت الى ارتفاع ٠٥سم عن المستوى الاصلى للبنائة كذلك فاننا نعتقد بان البنائة قد اصابها حرق شديد لذا أن معظم أبنيتها قد مل بها الدمار .

٥ - الفترة الاسلامية الطبقة الاولى

اننا نعتقد ان الابنية المشيدة فى العصر الاخمينى قد اصابها الدمار فى العصور الاسلامية ولكننا لا نعرف كيف حل الدمار فى هذه الابنية وعلى أية حال وفى أثناء التنقيبات عثرنا على قبرين يعودان الى الفترة الساسانية . أحدها عثر عليه فى الجهة الغربية قرب قمة التل وجد فى داخله قنيتين زجاجيتين دقيقتين لكل منهما

عنق طويل، أما القبر الثانى فقد عثر عليه فى الجهة الشمالية الشرقية لسفح التل ووجد فى داخله بعض الآثار المعمولة من النحاس كالقووس اليدوية والمناجيل والسيوف وعلى قطعة فخارية كاملة تقريبا (شكل ١٨ القبر) إضافة الى ذلك فاننا عثرنا على سطح التل على عدد من الكسر الفخارية المزججة تشبه الفخريات الساسانية والفرثية • فى الطبقة الاسلامية عثرنا على عدد من القبور تمتد الى عمق يتراوح ما بين ١٥ م و٢٠ م • بنيت هذه القبور من الطابوق (لوح ١٥ رقم ١) ان معظم هذه القبور تعود الى أطفال بعد ما هجر التل بصورة كاملة واعتبر من قبل الاهالى والذين يسكنون حوله بأنه مركز الجن .

٢ - الملتقطات

١ - الفخاريات : من نتائج الحفريات والكشوفات الاثرية عثرنا على مجموعة كبيرة من الفخاريات المكتشفة هى الفخاريات الملونة والفخاريات الاعتيادية إضافة الى الفخاريات السحبة الصناعة • ان معظم الفخاريات المكتشفة تعود الى عصر فجر السلالات • عثر عليها فى داخل البناية وفى الحفر فى الخندق الذى يحيط البناية • ان الفخاريات الملونة باللون الاحمر والاسود والتي تعرف بالفخاريات القرصية هى من النوع الذى عثر عليه فى مناطق أخرى من العراق والتي تعود الى عصر فجر السلالات الاول، عثر على هذه الفخاريات فى داخل الغرف والممرات وداخل الحفر • وخاصة فى الطبقة السادسة والتي تعود الى هذه الفترة • ان الفخاريات الملونة التى اكتشفت اثناء التنقيب تمثل اكثر من نصف بقية الفخاريات كمثل على ذلك ان الشكل رقم ٨ يوضح حفر أبعادها ١م × ١م × ١٥م فى داخلها عثرنا على مجموعة كبيرة من الفخاريات الاعتيادية والسحجة وعلى أربعين قطعة ملونة ومتراكمة الواحدة فوق الاخرى • فى الطبقة السادسة توصلنا الى عدة حفر تحوى هى الاخرى على مجموعة كبيرة من الفخاريات الملونة كذلك هو الحال فى الممرات الداخلية •

أما فى الطبقة الرابعة والتي أصابها الدمار من جراء حريق شديد فان الفخاريات فيها والتي تم اكتشافها كانت جميعها فى حالة جيدة وخاصة الفخاريات الملونة منها وان معظمها عثر عليها حول الافران المربعة والتي تقع فى وسط الحفر • الفخاريات الملونة نهايه العصر الشبيه بالكتابة (شكل ١١ وشكل ١٢)

ان الفخاريات التى تعود

الى هذه الفترة أو عصر (جمدة نصر) يمكن تقسيمها الى مجموعتين هي الفخاريات الاعتيادية والفخاريات الملونة •

١ - الفخاريات الاعتيادية (الاحادية اللون) (شكل ١١ رقم ١، ٢، ٣، ٤، ٥، ٦، ٧) ان هذا النوع من الفخاريات التي عثر عليها في الطبقة السابعة ملونة بلون أحادي اما أسمر غامق (رقم ١) أو أخضر غامق (رقم ٢) أو برتقالي يميل الى البني (رقم ٣، ٤، ٥، ٦، ٧) بعضها منتفخ من الخارج ، كذلك فانها تتميز بعنق قصير ومحافة حادة وعلى العموم مستديرة القاعدة قليلا • اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على مجاميع من هذا النوع من الفخاريات ذات مصبات أو مقابض صغيرة الحجم • ان صناعة هذه الفخاريات بصورة عامة جيدة كذلك فان طينتها لا تحتوى على بقايا رمل اضافة الى ذلك فهي رقيقة البدن والبعض منها مطلى بطلاء خارجي على هذا الطلاء نقوش قوامها خطوط منكسرة أو متوازية أو أنها تحوى على نقوش طير أشبه ماتكون بالزقزاق وعادة فان هذه النقوش تكون تحت العنق مباشرة • اضافة الى ذلك فان بعض هذه الفخاريات مزينة بنقوش هندسية أحادية اللون أيضا (شكل ١١ رقم ٦، ٧)

٢ - الفخاريات الملونة (النمط الاول) (شكل ١١ رقم ٢، ٤، ٥)

ان شكل وصناعة هذا النوع من الفخاريات شبيه الى حد ما بالفخاريات الانفة الذكر • ان الثلاث أوانى الموضحة في الاشكال الواردة أعلاه جميعا صناعة يدوية ان الاناء الفخارى الموضح في (شكل ١١ رقم ٢) له مصب وان قطر بدنه أطول من طوله ملون بلون أسود وبرتقالي يميل الى الاحمرار • ان هذه الالوان وعلى ما يبدو اضيفت اليه حرقة • قوام نقوشه هندسية متماثلة في خطوط أفقية متوجه وهي ترمز الى هيئة ثعبان أو ماء جارى • عامة تتميز هذه الفخاريات بكونها دقيقة وجيدة الحرق • أما الاناء الموضح في شكل (١١) رقم (٤) فله بدن كروي وعنق قصير على قسمه الاعلى نقوش هندسية ملونة باللونين الاحمر والاسود قوامها خطوط متقاطعة ومتوازية ومثلثات • اما الاناء الموضح في شكل (١١) رقم (٥) فانه اناء فريد من نوعه له جسم مربع تقريبا وعنق اسطوانى الشكل • ان طريقة التلوين على سطحه الخارجى تشبه طريقة الاناء الموضح في شكل (١١) رقم (٢) اضافة الى ذلك فاننا عثرنا كسرتين من الفخار لها نفس مواصفات هذا الاناء •

الفخاريات الملونة (النمط الثاني) شكل ١٢ رقم ١ - ٦

جميع الفخاريات المكتشفة من هذا النمط تعود الى فترة جمدة نصر • تتميز هذه الفخاريات بحافة عريضة حادة ، أو عنق مستقيم ، وكتف مرتفع ، اضافة الى ذلك فان البعض منها يحوى على بروز غالبا ما يكون فى أعلى البدن • والملاحظ فى هذه الفخاريات أيضا أن عرضها يساوى طولها • ان أقصى ما يصل عرض الاناء هو ٤٠ سم أما عرض العنق فلا يتعدى ١٠ سم • هذا واننا لم نعثر على أى فخاريات ذات مصبات الا ان البعض منها يحوى أربع أذينات صغيرة مثقوبة • ان الاناء الموضح فى شكل (١٢ رقم ٤) هو الاناء الوحيد الذى له أذينات مثلثة الشكل هى الاخرى مثقوبة • أما الاناء الموضح فى الشكل ذاته رقم (٦) فله بروز صغير جدا وغير مثقوب •

ان جميع الفخاريات من هذا النمط معمولة بالد ولا ب كذلك فان طينتها تحوى نسبة من الرمال أكثر من النمط الاول والفخاريات الاحادية اللون • كذلك فان بعض الفخاريات هذا النمط طينية سمراء باهتة أو حمراء أو سمراء تميل الى اللون الوردى • اللون الاحمر الزجاجى أو اللون الاحمر الداكن أحيانا يغطى الجزء الاسفل من الاناء أما الجزء الاعلى فغالبا ما يحمل نقوش هندسية ملونة باللون البنى الغامق أو البنى الذى يعيل الى السواد (شكل ١٢ رقم ٥) والبعض الآخر يحمل نقوش هندسية قوامها خطوط متشابكة أو حيولونات (شكل ١٢ رقم ١) ان الفخاريات الموضحة فى شكل (٢ رقم ١ ، ٢ ، ٤ ، ٥ ، ٦) تشبه الى حد كبير الفخاريات التى عثر عليها فى حوض ديبالى والتى تعود الى عصر فجر السلالات والا ول • أما رقم (٢) رقم (٤) فيعتقد بأنهما يمثلان فترة الانتقال من عصر جمدة نصر الى عصر فجر السلالات الا ول (١) •

عصر فجر السلالات الا ول

ان فخاريات هذا العصر متعددة الاشكال والانواع ومعظمها ملون باللون الاحمر والاسود ان أهم ما يميز به هذا العصر هو ظهور فخاريات ملونة باللون القرمزى لذا أطلق عليه عصر الفخار القرمزى • ولحسن الحظ فاننا عثرنا على كميات كثيرة من هذا النوع من الفخاريات فى تل جينكور اضافة الى ذلك فان هيئات أخرى قد عثرت عليه فى تلول أخرى والتى يتراوح عددها العشرة تلول (٢) اضافة الى ذلك فاننا حصلنا على هذا الفخار ذاته من ثلاث طبقات فى تل الكبة ولسهولة البحث فاننا سوف نشرح بالتفصيل فخاريات كل طبقة •

الطبقة السادسة (شكل ١٣ وشكل ١٤) وكما هو موضح فى شكل (١٣) رقم (١ ، ٢ ، ٣) فان أقصى قطر للفخاريات المكتشفة فى الطبقة السابعة يقل عن ٥٠ سم اضافة الى ذلك فان

الفخاريات ذات المصبات يزيد عددها في هذه الطبقة بالذات (شكل ١٤ رقم ١ ، ٢)
 كذلك فان طبعة فخاريات هذه الطبقة غالبا ما يكون كبير الحجم بحيث لا يمكن عزل البدن
 عن الكتف والاخير غالبا ما يكون عريضا . كذلك فان فخاريات هذه الطبقة تتميز بكونها
 دائرية الشكل من جزئها الاسفل أو الاوسط ، أما الفخاريات ذات الازينات الاربعة
 والتي عثر عليها في هذه الطبقة أيضا فانها من مخلفات أو حتى استمرارية صناعة
 الفترة السابقة (عصر جمدة نصر) .

على أى حال فان البعض منها يكون له أما أذينات أفقية كما هو موضح في شكل
 (١٤) رقم ٤ أو عمودية وكما هو موضح في الشكل ذاته رقم (٧) اضافة الى ذلك فان البعض
 منها أضيفت اليه الازينات وكما هو موضح في الشكل ذاته رقم (٥) أو أنها عديمة
 العنق وذات مصب (شكل ١٤) رقم (٢) أو أنها تحمل نقوش حيوانية ملونة (شكل ١٤ رقم ٩)
 ان معظم فخاريات هذه الطبقة معمول بالدولاب الا في حالة الفخاريات الكبيرة
 الحجم حيث عملت في بادىء الامر بتكديس الطين قبل وضعه على الدولاب أما نسبة الرمل
 فيها فهي كثيرة نسبيا وهى خشنة الملمس . أما الفخاريات احادية اللون والتي عثر عليها
 في هذه الطبقة فغالبا ما تكون ملساء لونها على العموم يميل الى الاخضرار وفي حالات
 نادرة يميل الى اللون الوردى .

اما بخصوص النقوش الملونة فاننا عثرنا على على عدد كبير منها في الجدار تعود الى
 عصر جمدة نصر عليها نقوش هندسية غالبا ما تكون على القسم الاعلى من الاناء وعلى البعض
 الآخر عليه نقوش اما حيوانية أو نباتية . في الطبقة السابعة والتي تعود الي عصر فجر
 السلالات الاول اضيف الى هذه النقوش خط عريض أحمر . كذلك فاننا عثرنا على بعض
 الفخاريات الملونة والتي لها اما أذينه واحدة كما هو الحال في شكل (١٤) رقم ١ ، ٣)
 أو اكثر من أذينه وكما هو موضح في الشكل ذاته رقم (٧،٥) ان نقوش معظم هذه الفخاريات
 غالبا ما تكون في القسم الاسفل من الاناء . أما نقوش الاناء الموضح في الشكل (١٣ رقم ٢)
 فانها نقشت على القسم الوسطى ((البدن)) كذلك فان نقوش هذا النوع من الفخاريات
 تحوى على ألوان متعددة . كالأحمر الخامق أو الأحمر الأرجوانى أو الأحمر
 البرتقالى أو البنى وماشابه ذلك . واطافة الى ذلك فان اللون الاسمر القائم والاسمر
 المائل الى السواد هذان اللونان مستعملان في النقوشة أيضا . بعض النقوش
 المكتشفة على فخاريات عصر فجر السلالات الاول هى استمرارية لتلك النقوش
 التي عثرنا عليها في الطبقات السفلى من التل والتي تعود الى عصر جمدة نصر

اما النقوش المستحدثة اثناء هذه الفترة فتمثلة فى فراشات شكل (١٤ رقم ٢) أو خطوط منكسرة متوازية أفقيا (الشكل ذاته رقم ٧) أو مثلثات متداخله • أما الفخاريات المتوسطة والصغيرة الحجم غالبا ما تكون نقوشها اما مثلثات متداخله أو أسماك (شكل ١٤ رقم ٨ •)

الطبقة الخامسة (الشكل ١٥ ، الشكل ١٦)

ان أشكال فخاريات وأنماط هذه الطبقة

شبيه لفخاريات السادة التى تعود الى نفس الفترة • الا ان هناك حالة واحده يمكن ذكرها الا وهى أن اكتاف الجرار الكبيرة الحجم قد صغر حجمه بعض الشيء والبعض منها عليها نقوش مخززه تحت العنق مباشرة (شكل ١٥ رقم ٤) أو ان لها بروزان صغيرة (شكل ١٦) أما شكل (١٥ رقم ٣) فيوضح جره لها اربعة أذنيات اثنتان منها أفقية واثنتان منها مثلثة •

كذلك فان النقوش النباتيه والحيوانيه والتي غالبا ما تكون منقوشة على الجرز الأعلى من الاناء قد كثر استعمالها فى الطبقة الخامسة • اضافة الى ذلك فان النقوش الهندسيه الاخرى كالخطوط المتوازية والمثلثات ذات الخطوط الحمراء والفراشات قد اضيفت الى النقوش السابقة • أما البروز والموضح فى الشكل (١٥) رقم (١) فقد كثر استعماله فى هذه الطبقة والطبقة الرابعه • فى الشكل (١٥) رقم (٣) يوضح ظاهره جديدة هى نقوش طيور تأكل أو تمسك بأسماك • ان شكل هذا الاناء يشابه تقريبا الاناء المحرز والموضح فى (شكل ١٩ رقم ٦) • شكل (١٥) رقم (٤) يوضح اناء فخارى كبير الحجم عثر عليه فى الطبقة الخامسة على قسمة الاعلى ان قطرية هذا الاناء هو ٤٢ سم وعلى قسمة الخارجى نقوش هندسيه • أما بدن الاناء

فمقسم الى أربعة أجزاء تحوى نقوش حيوانيه كثر مربوط وثور يعلف فوق هذين النقشين صورة سمكه • أما (شكل ١٦) فهو لجره قسمها الاعلى مجزء الى أجزاء طويله كل جزء يحوى على نقوش هندسيه سوداء اللون أما البدن والرقبه فانهما ملونتان بلون أحمر. تحت العنق مباشرة هناك اربعة بروزات مثلثة الشكل • الطبقة الرابعه (شكل ٧ وشكل ١٨) •

ليس هناك أى اختلافات جوهريه

ما بين فخاريات هذه الطبقة والطبقة الانفه الذكر • يمكننا الجزم على ذلك من خلال دراستنا للفخاريات الاحاديه اللون والفخاريات ذات البروزات الاربعه

لما الفخاريات المسبحة في هذه الطبقة فهي متمثلة في ظهور فخاريات أكبر حجماً من الفخاريات التي عثر عليها في الطبقتين الخامسة والسادسة أما للفخاريات الصغيرة والتي جميعها معموله بالدولاب فلم يطرأ عليها أي تغيير يذكر .

أما الأناة الموضح في (شكل ١٨ رقم ١) فهو اناء كبير الحجم ودقيق الصنائه إضافة الى ذلك فقد ظهر نوع جديد من الفخاريات في هذه الطبقة متمثلة بكاسات عميقة الغور (شكل ١٧ رقم ٥) وفخاريات ذات مصبات ومقبض بهيئة صغيرة (شكل ١٧ رقم ٧) .

أما الألوان فهي الاحمر الغامق والذي يشبه اللون الذي عثر عليه في الطبقة السادسة والطبقة الخامسة الا انه اصبح قليل الاستعمال في هذه الطبقة . إضافة الى النقوش الهندسية فاننا عثرنا على فخاريات عليها نقوش حيوانية عليها كالثور والخروف والماعز والخنزير الوحشي والحصان والحمار أو نقوش طيور مائه أو نقوش آدمية أسماك ونقوش نباتية .

وفي الحقيقة فان بعض هذه النقوش أحيانا تكون مجتمعة في موضوع واحد لذا فإنه من المحتمل بأنها تكون سودا لحوادث معينة (شكل ١٨ رقم ٢) إضافة الى ذلك فقد ظهرت نقوش فراشات (شكل ١٧ رقم ٤ وشكل ١٨ رقم ١) طيور (شكل ١٧ رقم ٤ ، ٥ ، ٦) شكل ١٨ رقم ٢ خطوط متوازية طوليا أو مشبكة (شكل ١٧ رقم ٦ شكل ١٨ رقم ٢) ان هذه الانواع كثيرة الاستعمال . خاصة الاشكال الموضحة في الشكل (١٧ رقم ٤) (والشكل ١٨ رقم ١) حيث عثر عليها في أماكن متعددة . في حوض حميرين .

وكما هو ملاحظ في الشكل (١٧ رقم ٤ ، ٦) وشكل (١٨ رقم ٢) فان نقوش الطيور هنا تجاير نقوش الطيور المكتشفة في الطبقتين الخامسة والسادسة والموضحة في (شكل ١٣ رقم ٢ وشكل ١٥ رقم ٣) . وعبارة اخرى فأن النقوش الحيوانية والادمية المكتشفة في الطبقتين الخامسة والسادسة أصبحت تميّل الى الواقعية اكثر من الطبقة السابفة

الشكل (١٧ رقم ٤) يوضح اناء محلى باشكال هندسية قوامها خطوط متوازية ومثلثات متقلبه لونت بلون أسود واللون الاحمر القاتم أما النقوش الادمية والموضحة في الشكل (١٨ رقم ٤) فان وجد ههنا منقوش بشكل تجريدي تمسك هذه النقوش الادمية في

كلتا يديها حيوايين منقوشين بطريقة تجريدية ايضا •
 تتميز الفخاريات المنقوشة والتي عثر عليها في الطبقة السابعة وحتى الطبقة
 الخامسة بكونها أقل دقة وأقل تأثيراً عن تلك التي عثر عليها في الطبقة الرابعة
 هذا واننا لم نتمكن من العثور على اي فخاريات ملونه في الطبقة التي تليها
 (الثالثة) • الا اننا عثرنا على مجموعه لا بأس بها من قبور هذه الطبقة والتي تعود
 الى عصر فجر السلالات الثالث شكل (٢١ رقم ٢) ان الاناء رقم (٨) والموضح في الشكل
 (رقم ١٢) قد عثر عليه في الطبقة الرابعة (ب) •

ان الشكل هذا الاناء يغاير ابيه جمده نصر الفخار المسمى بالفخار القرمزى
 والذي يعود الى عصر السلالات الاول له بدن كروي الشكل له حافة بشكل
 زاويه منفرجه اضافة الى أنه معمول باليد فانه جيد الصنعة •

٢٢) الفخاريات الاعتيادية

ان الفخاريات الاعتيادية والموضحه في شكل (١٩)
 من رقم (١-٦) قد عثر عليها داخل البنايه الدائرية (الطبقة السابعة) • تشمل
 هذه الفخاريات بكاسات نصف كرويه الشكل (شكل ١٩ رقم ١) بعضها تكون
 مستقيمه الجوانب (شكل ١٩ رقم ٢) أو كؤوس لها قاعده ضيقه تتسع الى
 الاعلى (شكل ١٩ رقم ٥) أو جرار ذات مصبات (شكل ١٩ رقم ٦) أو أواني
 صغيرة الحجم والتي عثر عليها بكميات كبيرة (شكل ١٩ رقم ٤) أو جرار
 لها اربع اذنيات (شكل ١٢ رقم ٧) والتي عثر عليها على ارضيه الطبقة (السابعة
 ح) • ان شكل هذا النوع يشبه الفخاريات الملونه النمط الاول والذي عثر عليه
 في الطبقة السابعة • (شكل ١٩ ، ٧ - ١٣) يوضح فخاريات تعود الى عصر
 فجر السلالات الاول عثر عليها في الطبقتين الخامسة والسادسة • ان الانائين
 (رقم ٧ ، ٨) والموضحين في الشكل ذاته هما اكبر حجما من الانيه المكتشفه
 في الطبقة السابعة وكذلك فان حافتيهما تتحنيان قليلا الى الداخل • اما الانائين
 (رقم ٩ ، ١٠) في الشكل ذاته فلهما بروزات في قاعهما كذلك فانهما سميكان
 وسمجا الصنعة • ان هذا النوع من الفخاريات قد عثر عليه في طبقات عصر
 فجر السلالات الاول • اننا نعتقد غير جازمين بان هذا النوع استعمل
 كأغصيه • أما الكؤوس ذات القواعد الصلده والتي وضحت في (شكل ١٩ رقم ١١)
 فان اشكالها تختلف قليلا عن تلك الكؤوس والتي عثر عليها في الطبقة السابعة

اما الاناء ذو المصب والموضح في (الشكل ١٩ رقم ١٢) فاننا نعتقد بانه مصقول باله حاده، في قسمه الداخلى والخارجى أما اشكال الجرار ذات الانبيات الاربعه والموضحه في الشكل ١٩ رقم ١٣ فانها تشبه الجرار الملونه والتي عثر عليها فى الطبقة الخامسة شكل ١٥ رقم ٣ . ان هذه الفخاريات محزره نيقوش هندسيه ما بين الانبيات ان الفخاريات الموضحه في شكل ٢٠ من ١ - ٥ قد عثرنا عليها فى الطبقة الرابعه تتمثل هذه الفخاريات بكاسات مخروطيه الشكل رقم ١ ، ٢ ، كبيرة الحجم قليلا ذات حافات معقوفه الى الخارج . اما الاناء رقم ٥ فهو شبيه بفخاريات نينوى الطبقة الخامسه . اما رقم الاناء رقم ٣ فهو محلى بدوائر محزره ومعمول من طينه نقيه ذات لون رمادى . اما الانبيه الموضحه في الشكل ٢٠ رقم ٦ ، ٧ ، ٨ قد عثر عليها فى الطبقة الثالثه

ب . ان الاناء الموضح في الشكل ذاته رقم ٦ على قسمه الاعلى أربع بروزات مقابله كذلك فان قسمة الاعلى محلى بشريط محرز . أما الاناء ذو المصب الموضح في الشكل ذاته رقم (٧) فله بدن شبه كروي وعنق قصير ومصب يصل الى ارتفاعه قرب الحافه . أما الاناء الموضح في الشكل ذاته رقم ٨ فله بدن كروي وعنق طويل مستطيل الشكل يوازي مصبه . أما الفخاريات الموضحه في الشكل ٢٠ رقم ٩ - ١٩ جميعها عثر عليها فى الطبقة الثانيه اما الكاسات الموضحه في الشكل ذاته رقم ٩ ، ١٠ ، ١١ فلها قاعده مسطحه وحافه تبرز قليلا الى الخارج . اما الاناء رقم (١٢) فيمثل كاسه قليلة الخور ، والاناءين الموضحين في الشكل ذاته رقم ١٣ ، ١٤ فلهما قاعده مدببه قليلا . الا ان الاناء رقم ١٣ سميك البدن وله عنق قصير أما الاناء رقم ١٥ فلون بلون أصفر بنى ورقيق البدن وقسمه الاعلى محلى بطوق . ان الاناء الموضح في الشكل ذاته رقم ١٦ معمول من طينه رماديه اللون طويل العنق وله بدن شبه كروي على قسمة الاعلى أربع بروزات متقابله . على قسمة الاسفل بروزات صغيره معموله باصابع اليد (٤) ومعقول من الخارج باله حاده .

ان الاناء الموضح في الشكل ذاته رقم ١٨ له مقبضين شكله العام يشبه الى حد ما الاناء رقم ١٥ . أما الاناء رقم ١٧ فقد عثر عليه داخل قبر اثنا عشرية الطبقة الثانيه أو انه يعود الى فترة احدث من ذلك . ان شكل قاعدته وفوهته فريدتان من نوعهما اضافة الى ذلك فاننا عثرنا فى هذه الطبقة على

تسعه عشر كاسا فخاريا. ان الفخاريات الموضحة في شكل (٢١) جميعها عشر عليها داخل قبر يقح في بداية التل * الاناء رقم (١) يمثل حامل فواكه قسمه الاعلى محلى بخروز هندسيه ، ان الانائين (٣ ، ٨) لهما حافة بشكل زاويه منفرجه وعلى قنسميهما العلويين اطواف بارزه أما الانائين (٢ ، ٥) فكل منهما مقبضين عمودى الشكل تقريبا وطوق بارز يفصل الكتف عن البدن * أما رقم (٧) فيوضح كاسه كبيرة الحجم ورقم ٤ يمثل اناء صغير الحجم مثقوب القاعه اما الاناء رقم ٢ فملون بلون برتقالى يميل الى الاحمرار والاسود والتى لم يبق من معالمها كثيرا * أما القسم الاعلى من الاناء رقم (٥) فمحلى بنقوش مخرزه قوامها خطوط متقاطعه ومثلثات * ان جميع الفخاريات المكتشفه معموله من طينه مخلوطه بالرمل ماعد الاناء الموضح فى الشكل ذاته رقم ٦ والذي يعود الى عصر فجر السلالات الاول اما الاناء رقم ٤ فقد عثر عليه داخل جره كبيره *
الفخاريات السمجه الصناعه

(شكل ١٩ رقم ١٥ ، ١٦) (وشكل ٢٠ رقم

٤) ان هذا النوع من الفخاريات معمول باليد عادة يتصف بكونه سميك الحافات والقاعه طينيه رملية * اضافة الى ذلك فان طينته تحوى على بقايا جص ناعم وتين * ان هذا النوع من الفخاريات قد عثر عليه فى طبقات عصر جمده نصر وعصر فجر السلالات الاول *

ان معظم الفخاريات السمجه هى جرار (شكل ١٩ رقم ١٦ لوح ١٢ رقم ٥ ، ٦) . أو كاسات كبيرة الحجم ايضا (شكل ١٩ رقم ١٥) أو كاسات معموله من قوالب (شكل ٢٠ رقم ٤) * أن قطر وارتفاع بعض هذه الجرار يصل الى ٦٠ سم اما الجرار الاصغر حجما فيصل معدل قطرها الى ٣٠ سم *

فى الطبقة السابعه والسادسه عثرنا على جرار ذات مصبات وقرب حافظها طوقا بارزا * كذلك فان بعض هذه الجرار عليها اطواق معموله بشكل حبل بعض البعض الاخر منها عليها نقوش تشبه نقوش الاختام الاسطوانيه * ان القسم الداخلى للكاسه الواحده الموضحة فى الشكل (١٩ رقم ١٥) ناعم اللمس وقسمها كثيرا منه قد تأكل *

ومن المحتمل جدا فان الكاسات معموله بالقالب (شكل ٢٠ رقم ٤) قد انتجت بشكل واسع وذلك لكثرة استعمالها فى الحياه اليوميه * ان هذا النوع من الكاسات

قد ظهر لأول مرة في عصر الوركاء إلا أنه استمر استعماله في عصر فجر السلالات في تل الكبة •

الختام

أثناء التنقيب كشفت البعثة على عدد لا بأس به من الختام المنبسطه والاسطوانيه اضافة الى طبعات الختام اسطوانيه •
الختام المنبسطه (شكل ٢٢ رقم ١٦ ، ١٧ لوح ١٤ رقم ٣ ، ٤)

ان شكل هذا النوع من الختام اما قرص او بهيئه حيوان قوام نقوشها لا تتعدى كونها رسم مبهمه عباره عن دوائر • ان جميع الختام المنبسطه هذه عثر عليها في طبقات عصر فجر السلالات الا اول ما عدا واحده منها فقد عثر عليها على ارضيه الطبقة السابعه •

الختام الاسطوانيه (شكل ٢٢ رقم ١٨ - ٢١ لوح ١٤ رقم ١٥)

ان الختمين المرقمين (١٨ ، ١٩) قد عثر عليهما فوق ارضيه الطبقة السابعه بينما الختمين المرقمين (٢٠ ، ٢١) فهما يعودان الى فترة عصر فجر السلالات الا اول • ان الختم الاسطوانى والذى عثر عليه فى الطبقة السابعه معمول من حجر السيتيتايتا ما نقوشه فقوامها اوراد ورسم هندسيه • اما تلك التى عثر عليها فى الطبقة السادسه اولفترة متأخره فان قوام نقوشها هى حيوانات متقابلة ورسم هندسيه أو مشاهد حيوانيه •
طبقات الختام الاسطوانيه (شكل ٢٢ رقم ١ - ١٥ لوح ١٣ رقم ٥ - ٨) لقد عثر على طبقات الختام الاسطوانيه فوق حافات واكتاف الجرار السمجه الصناعه مابين الطبقة السابعه والرابعه •

بعد دراستنا الطبقات توصلنا الى تمييز نقوش مختلفه منها هندسيه (رقم ١ و ٤ ، ٧ ، ١٢) حيوانيه (رقم ٢ ، ٥ ، ٨ ، ١٥) آدميه (رقم ٨ ، ١٠) أزهار (٦ ، ١٤) وفى بعض الحالات فان هذه الطبقات تحوى اما موضوعين أو اكثر من هذه المواضيع (رقم ٣ ، ١١ ، ١٤ ، ١٥) •
ان الجرار التى تحمل هذه النقوش بدأت من الطبقة السابعه الا أنها تكثرت فى طبقات عصر فجر السلالات الا اول (الطبقات السادسه - الرابعه) • اما فى

الطبقة الثالثة ب وعلى ايه حال فان هذه الطبقات تتلاشى وعضوا عــــن ذلك فانها تظهر على المسارج الفخارية * وعلى أغطية الجرار هذا وان هذه الطبقات لم تظهر على الفخاريات الملونه وانما اقتصرت على الجرار السمجة الصناعة * ان ظهور طبعات الاختام على هذه الجرار له تفسيران الاول هو تمييز صاحب الجره * أو تمييز واهبها الى المعبد *

((٣) الملتقطات الاخرى

في الممرات الداخليه للبناء الدائرى وفي طبقات عصر

فجر السلالات الاول عثرنا على عدد كبير من الخرز المتعدد الانواع والاشكال معموله في مواد مختلفه الحجر، العظم، الاصداف، النحاس، أو البرونز * فى منطقة واحدة عثرنا على اكثر من الالف خرزه مربوطه سوية (لوح ١٤ رقم ٢) أما البقيه فقد عثر عليها اثناء التنقيب *

اما الخرز معموله من الحجر فقد استعملت فيها انواع الاحجار التاليه: حجر السنتيسايتيه الكرسنال، العقيق، حجر الدم، والاحجار الكلسية * لم نعثر على خرز معموله من حجر الشذر أو حجر الازورد * أما الخرز معموله من العظام فهي غالبا ما تكون قرون حيوانات يصل طول بعض هذه الخرز الى ٨ سم والى قطر ١٥ سم *

أما الخرز معموله من الاصداف فهي معموله من الاصداف البحريه اما الخرز معمول من محلول الزجاج فقد عثر عليها فى الطبقة السابعه *

البرونزيات (شكل ٢٣ رقم ١٢ - ١٥)

أن معظم البرونزيات عثر عليها فى الطبقة

السابعه تتمثل فى الفأس الموضحه فى شكل (٢٣ رقم ١٥) والسيوف رقم (١٤) والمقاشط رقم (١٣) والابر والمسامير والخرز، وروؤس الرماح * المواد الحجرية (شكل ٢٣) انظر الفصل السادس *

الخاتمة

كنتائج لحفرياتنا وكشوفاتنا الاثريه فقد اوصلنا اثناء عملنا فى تل الكبه على بناء

دائري الشكل شيد مباشرة فوق التربة العذراء • أن هذا النوع والذي هو غير متوقع الاكتشاف يعتبر حالة نادرة في تاريخ العمارة القديمة في وادي الرافدين ، ان طريقه بناءه تدل على ابداع في التخطيط ودقة في البناء لم نتوصل بصورة نهائية الى ماهية هذا البناء الا اننا نعتقد بأنه اما كان للسكن أو انه مبنى الغرض منه التسهيلات العامة او معبداً •

ان اكتشاف اعدادا كبيرة من الفخاريات الملونه قد اعطتنا دليلا غير قاطعا بأن هذه الفخاريات اما استعملت اثناء الاحتفالات والتي تقام في المبنى او انها كانت تستعمل ضمن طقوس العبادة •

كذلك فلربما استعملت هذه الفخاريات كمخازن للامكنه المقدسه داخل البناء • ان موقد النار الثيسي المكتشف في البنايه اضافه الى بعض الابنيه الشبيهه بالانفاق والتي عثر عليها مباشرة تحت مستويات الارضيات قد لعبت دورا مهما • والبناية سكنت كذلك خلال عصور فجر السلالات الاول والثالث ثم هجرت وبعدها تحولت الى مقبره بدليل عثورنا على عدة قبور تعود الى فترات لاحقة بعد ها سكنت مرة ثانية في العصر الاخميني بدليل عثورنا في الطبقة الثالثه من التل على ابراج مراقبه تشبه الابراج والتي تعود الى فترة الملك دارا في برسيبوليس (شكل ١٠) • كذلك هناك تشابهات اخرى ما بين هذه البنايه والبنايه المسماة بالقلعه والتي عثر عليها في تل توشي جان (٥) في ايران والتي تعود الى فترة الغزو الاخميني جميعها تحوى على غرف ضيقه متوازية ومشيده باللبن • كذلّم فان البنايه المكتشفه في تل توشي جان محلاه بطلحات من الخارج لذا فان بناء تل الكبه وبناء توشي جان قد شيئا في نفس الفترة ولنفس الغرض •

Notes:

- 1) Delougaz, P., 1947, *Pottery from the Diyala Region*, Oriental Institute Publications Vol. LXIII, Chicago
- 2) Based on *Sumar* Vol. XXXV, 1979 and *Iraq* Vol. XLI, 1979. E D I Tells in Hamrin: Tell Gubba, Tells Songor A, B, Tell Abu Qasim, Tell Kheit Qasim, Tell Madhhur, Tell Razuk, Tell Hallawah, Tell Abga, Tells Ahmad-Hatchow, Tell Oasaat, Tell Suleimah, Tell Rubeida (in Bahizah)
- 3) Fukai, S., Horiuci, K., Matsutani, T., 1974, *Telul eth Talathat, The Excavation of Tell V*, The Institute of Oriental Culture, Tokyo University
- 4) Malloyan, M. E. L., 1966, *Nimurd and Its Remains*, Collins London
- 5) Stronach, D., Roaf, M., 1978, "Excavation at Tepe Nush-i Jan", *Iran* Vol. XVI

III تل سنكورا

التنقيبات

يقع تل سنكورا حوالى ٥٠٠ م جنوب شرق تل الكبه يبلغ طولُه ١٩٠ م من الجبهه الشماليه الجنوبيه ويبلغ عرضه ١٤٠ م من الجبهه الجنوبيه الشرقيه ومعدل ارتفاعه ٣ م (شكل ٢٤) .

عثر فى تل سنكورا على فخاريات تعود الى عصر سامراء والتي هى مادة البحث هنا .
كذلك فان هناك تلول أخرى تعود الى نفس الفترة هثر عليها فى حوض حميرين مثل تل رنان (١) والذي يقع غرب نهر نازين .

تل سنكورا (أ) هو التل الوحيد فى الحوض والذي عثرنا أثناء التنقيب على فخاريات حلف والعبيد اضافة الى فخاريات سامراء تقع فى شرق الموقع بعض المنخفضات تمتد هذه المنخفضات باتجاه نهر دىالى ونهار نازين . وعلى ما يبدو وان جزءا من التل قد تأكل بفعل المياه المتجمعه أو الجاريه فى هذه المنخفضات والتي تكثر فى فصل الشتاء .
قسم التل الى خمسة أجزاء هى الشماليه ، الوسط ، الخريه ، الجنوبيه والجبهه الخريه القسوى (شكل ٢٥) قسمة هذه الجهات الى خمسة امتار مربعه وقسمت طولها بحروف رومانيا وعرضها بحروف عربيه .

بدأت التنقيب فى حزيران ١٩٧٨ ، ابتداءً من نهاية الجبهه الجنوبيه وبعدها اتجه تدريجيا نحو الوسط وفى الوسط اتجه التنقيب الى الجبهه الخريه ثم الشماليه . وعندما ظهرت فخاريات سامراء فى الجبهه الشماليه من التل ركز عملنا فى هذه المنطقه اضافة الى ذلك فقد أسفر التنقيب على العثر على بعض الابنيه البسيطة والتي تعود الى نفس الفترة وقبل الشروع بالتنقيب عثرنا فى الجبهه الجنوبيه من التل على بعض القبور والتي تعود الى فترة العبيد .
وإثناء الكشف عن التل عثرنا على عدد من الحفر والتي تحوى فخاريات تعود الى عصر حلف والتي سوف نذكر تفاصيلها فيما بعد . وفى غرب التل عثرنا على بعض بقايا بناء مشيد من اللبن . ان الاثار التي عثرنا عليها تشبه آثار الكبه والتي تعود الى عصر جمده نصر وعصر فجر السلالات . عثر خلال التنقيب على ٢٨٠ قبرا تعود الى مختلف الادوار ابتداءً من سامراء الى العصر الاسلامى .
لقد تطلب تنظيف هذه القبور والتي ابتدأت من عصر سامراء وعصر ايسن لارسا والعصر البابلى القديم والساسانى الفريش الاسلامى وقتنا طويلا ويلاحظ ان معظم القبور المتأخره قد دمرت معظم الابنيه الاثريه كما ان يحضر هذه القبور عثر عليها متراكمه الواحده فوى الأخرى .

الطبقات :

ان القسم الاعلى من التل يقع فى الجهة الشمالية والذى يبلغ ارتفاعه ٩٠ر٨١م عن مستوى سطح البحر • أما التربة العذراء المكتشفة فى هذا التل حمراء تميل الى اللون البنى • واما ارتفاع التل فيبلغ ثلاثة أمتار عن سطح الارض المجاورة وانجبهه الشمالية) (شكل ٢٦ رقم ١) وجد ان التراكمات العلوية للتل والتي كانت يتراوح سمها من ٢٠سم - ٣٠سم والمكونه من تربة رملية وجمراء تميل الى اللون البنى تحوى فخاريات حلف وسامراء •

بعد ازالة الطبقة العليا من التل عثرنا على عدد من القبور تتراوح فتراتهما بين عصر حلف الى العصر الاسلامى الحديث • اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على فن فخارى يعود الى فترة حلف • أما الطبقات السفلى من التل تعود الى سامراء عثرنا فى هذه الطبقات على بقايا البن بقدر سمك هذه البقايا ما بين ٨٠سم - ١٠٠سم • كذا أن هناك طبقة سميكة من التراب عثر عليها داخل جميع الابنية المكتشفة ماعدا بناية رقم (٤) عثر فى هذه الطبقة على بعض الاثار • ان لون أرضيات البنايات المكتشفة والتي يتراوح سمها ما بين ٨سم - ٢٠سم تميل الى اللون البنى الفاتح عثر فوق هذه الارضيات على بعض الفخاريات ، تحت أرضيات البنايات المكتشفة عثر على بقايا رماد تمتد الى التربة العذراء والتي بنيت فوقها أبنية سامراء •

خارج البنايات وخارج كتل اللبن عثر على تراب يميل لونه الى اللون الازرق المائل الى الاخضرار مخلوط بالرماد وعلى طين أحمر اللون يميل الى اللون البنى • مثل هذه التراكمات عثر عليها فى البنايه رقم (١ ، ٢ ، ٣) • فى خارج منتصف البناية (٢) والى الجهة الغربيه المتجهه الى البنايه رقم (٤) عثر على طبقة سميكة من الرماد تحت كتل الرمل • فوق هذه الطبقة بنيت بناية رقم (٤) • ان جميع الابنيه المكتشفة تعود الى فترات متلاحقة ماعدا بنايه رقم (٤) والتي تعود الى عصر سامراء •

– خارج السور للواقع ضمن التشبيك VII, VI, V - ١٨ ، ١٩ ، وخارج البيت السابع عثرنا على تراكمات مكونه من تربة بنيه اللون تحت بقايا اللبن وعلى التشبيك رقم VI-

١٦ ، ١٧ ، •

عثرنا على تربة بنية اللون تحت هذه التربة عثرنا على قبر رقم ٢٤٧ والذى يعود الى فترة سامراء •

٢ – المنطقة الجنوبية (شكل ٢٦ رقم ٢) على التشبيك XXX-XXVIII رقم ٢٠ عثرنا على بقايا البن تحت

سطح التل * ولكننا لم نعثر على أى مخلفات حضارية تدلنا على ماهية أو عصر هذه البقايا أو الطبقة وعلى مقربة من هذا التشبيك تحت سطح التل عثرنا على تربة رملية لونها أحمر بنى تحتها عثرنا على قبور تعود الى فترة العبيد ، ايس لارسا ، والفترة البابلية القديمة كذلك فاننا شاهدنا بقايا تعود الى عصر سامراء في هذه المنطقة *

٣ — المنطقة الوسطى

عثر في هذه المنطقة على تراكمات مكونة من التراب والرمل * والتراكمات العليا مكونة من رمل بنى للون مخلوط بتربة بنية تميل الى الاخضرار بينما تراكمات الطبقة السفلى مكونة من طين أحمر بنى اللون وتربة خضراء اللون مخلوطة مع الرماد *

٤ — المنطقة الغربية

عثر في هذه المنطقة على تراكمات مكونة من رمل بنى يميل الى الاحمرار وتربة بنية اللون مخلوطة بالتبن ومخلوطة أيضا بالرماد * ان هذه البقايا تعود الى عصر فجر السلالات أما الطبقات السفلى من هذه المنطقة فانها تعود الى عصر حلف *

(١) طبقة قرية سامراء (شكل ٢٧ ، ٢٨) البقايا البنائية

بعد الكشف في الجهة الشمالية والجنوبية من تل هكورا عثرنا على بقايا من الابنية تعود الى عصر سامراء * الا ان العوامل الطبيعية والقبور المتأخرة قد أثرت تأثيرا مباشرا في تخريب هذه الابنية * ان البقايا البنائية من هتين الجهتين والتي تعود الى عصر سامراء لا يتعدى ارتفاعها عن ٩٠ سم ان البيت الذى عثر عليه فى التشبيك ٧- IV رقم ٢ هو البيت الوحيد الذى عثرنا عليه والذى لم يتأثر كثيرا (البيت رقم ١) ان هذا البيت بنى مباشرة فوق التربة العذراء أو فوق طبقة مكونة من التربة اللينة المخلوطة بالرماد * كذلك فقد شاهدنا في هذه المنطقة بقايا لبن مكس فوق سطح التل * ان قياسات هذا اللبن والذى يعود الى عصر سامراء ٧٠ سم × ٦٦ سم × ٨٥ سم كذلك فان هذا اللبن متتفخ من الاعلى قليلا ويحوى على بقايا تبن * عثرنا على بيت مشيد واحد من هذا النوع من اللبن قياساته ٦م × ٨م ان سمك جدار هذا البيت يبلغ ٢٠ سم وان القسم الداخلى لهذا البيت قسم الى ١٢ غرفة (شكل ٢٧) على كل زاوية من زوايا هذا البيت ونهاية كل جدار من الخارج عثرنا على طلعة كذلك فان مادة الطين استعملت لربط اللبن وبالرغم من ضعف الجدران فاننا عثرنا عليها بحالة جيدة * ان مدخل البناية يقع في الزاوية الجنوبية وعلى الضلع الغربي من البيت ان هذا المدخل قد أغلق

بالطين ومقايا اللبن • ان الخرض المكتشفة تمتد طوليا وارتفاع • ٥سم • ووجد ان كل مدخل من هذه المداخل يحوى على دكتين مبنيه من اللبن • ان أرضية هذا البيت ملبية • فى شمال منطقة التنقيب عثرنا على سبعة بيوت والتي تشبه فى تخطيطها البيت رقم ١ (شكل ٢٦ - ٢٧) غير ان طبيعة وأشكال هذه البيوت لا يزال يكتنفه الخموض • هناك جدار سميك والذي اعتقدنا انه جدار دفاعى والذي يقف فى التشبيك VII-V رقم ١٨-١٩ مبنى من اللبن • ويتراوح سمك هذا الجدار ما بين ١٥ - ٢م مشيد من لبن كبير الحجم تقدر قياساته ٧٠سم - ٧٢سم كذلك فان هذا الجدار مطلى بطبقة من الطين عثر أثناء التنقيب على عدد من المواعد احدها مستطيل الشكل عثر عليه فى التشبيك VII رقم ٢٢ أما الموقد الاخر فانه بشكل حرف ٧ عثر عليه فى التشبيك I رقم ١٩ • كلاهما عثرنا عليه خارج البيت كذلك فاننا عثرنا على حفر يقدر قطر الواحدة منها ٢٠سم تمتد الى التربة العذراء ان شكل هذه الحفر هو مخروطى داخلها مكسى بطبقة طينية سمكها ٢سم سوداء بنية اللون عثر على أحد هذه الحفر خارج البيت بينما عثر على اثنتين منها فى وسط احدى الغرف تقريبا • من خلال هذه الظاهرة اعتقدنا ان لهذه الحفر بعض الاستعمالات خاصة كاخزن مثلا • اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على فرن فى وسط منطقة البيوت رقم ٢ ، ٣ ، ٥ •

ان البن المستعمل فى بناء البيوت التى عثر عليها فى الجهة الجنوبية وطريقة بناءه لا يختلف عن ذلك الذى عثر عليه فى الجهة الشمالية للتل • ولكن هناك اختلافات بسيطة مثل اتجاه الغرف وعددها • فى الجهة الجنوبية من التل عثرنا على بيت واحد • كذلك فان التماثيل المعمولة من الطين المشوى والتي عثر عليها داخل البيوت وخارجها من الجهة الشمالية لم يعثر عليها فى الجهة الجنوبية • اضافة الى ذلك فان الفخاريات السمجة والتي عثر عليها فى الجهة الجنوبية لم يعثر على مثيلاتها فى الجهة الشمالية •

٢ - مجموعة من الحفر عثر عليها فى المنطقة الوسطى

على التشبيك XIX-XVII رقم ٢١ ، ٢٧ عثرنا على مجموعة من الحفر جميعها تحتوى على مجموعة كبيرة من الفخاريات تعود الى عصر حلف • ان شكل هذه الحفر بصورة عامة دائرى الشكل • ويقدر عمقها ما بين ١٦٠م - ٢٢٠م فى القاع • الا أن هناك حفرة واحدة تشبه الكيس (شكل ٢٩) والتي عثر عليها على عمق ٢٧٠م من سطح التل الى التربة العذراء تحوى هذه الحفر على مجموعة من الجرار الحجرية ، (أدوات حجرية) وعلى عدد

من الفخاريات والتي تعود الى عصر العبيد • كذلك فقد عثرنا علي بقايا فخاريات حلف في نفس المنطقة تحت التشبيك VII-VIII • رقم ٢٢ والتي تقع شمال المنطقة الشمالية عثرنا علي طبقة من التربة لونها باهت ملوثة ببعض فخاريات حلف خارج منطقة الحفر •
٣ - بقايا اللبن في الجهة الغربية (شكل ٢٩) علي التشبيك XX المرقم ١٦ ، ١٧ عثر

قرب السطح على بقايا لبن تعود الى عصر فجر السلالات ومقاساتها ٨×٢٠×٤٠سم وتحتوي علي رمل لونه يميل الي الرمادي الضارب الي الاخضرار اضافة الي ذلك فان هذا اللبن يحتوى على بعض التجايف • كذلك فان طريقة البناء اللبن متخايرة قليلا الا انها تشبه ما عثر عليه في موقع خيط قاسم (٢) •
ان بعض الفخاريات المكتشفة هنا تطابق الفخاريات التي عثر عليها في الطبقتين الثالثة والرابعة في تل الكبة • كذلك فان الخز المعمولة من الحجر الابيض والتي تحمل النقوش التي قوامها دوائر مخرزة داخلها نقطة تشبه الي حد ما الخز المكتشفة في موقع خيط قاسم والطبقة السابعة من تل الكبة • هذا وان بقايا اللبن الذي عثر عليه في الطبقة العليا من الجهة الجنوبية في التل تشبه اللبن المكتشف في الجهة الغربية من التل فعليه فان كلا الجهتين تعود الي عصر فجر السلالات •

٤ - المدافن

أولا عصر سامراء القبر رقم (٢٤٧) شكل ٣ رقم ١ عثر على هذا القبر علي عمق ٤٠سم من مستوى سطح التل وعلي التشبيك VI المرقم شكل ١٦ • ان هذا القبر بيضوي الشكل قياساته ٢م × ٣م عثر في داخله على هيكل عظمي واحد جمجمته متجهة الي الجهة الشرقية أما عظام القدمين فانها متجهة الي الجهة الغربية عثر عليه ممدًا تقريبا ظهره ويداها ممتدتان على جوانبه ومنثني الساقين قرب الجمجمة عثرنا على تمثال لامرأة معمول من الطين المشوي (شكل ٣٩ رقم ١) قطعة فخارية ملونة (شكل ٣١ رقم ١) قطعة من المرمر (شكل ٤٠ رقم ١) وعلى جره • اضافة الي ذلك فاننا عثرنا على قطعة فخارية أخرى • رحا حجرية • ان جميع الفخاريات المكتشفة في هذا القبر هي جوارشبيهه بالجرار الموضحة في الشكل (٣١ رقم ٢ - ٦) • وان مجموع ما عثرنا عليه من الفخاريات هي سبع قطع أربعة منها خالية من النقوش واخداها تحوي علي مقبض اما الاثنتان الباقيتان فعلي سطحها الخارجي نقوش مخرزة •

القبر رقم ٢٧٩ (شكل ٣٠ رقم ٢) • عثر علي هذا القبر في التشبيك V رقم ٢٢ تحت تربة

سراء وطبقة بينه عثر فوقها علي بقايا أبنية عصر سامراء * ان سمك هذه الطبقة والطبقة التي فوقها لا يتجاوز المتر الواحد ان شكل القبر العام وفوقها أشبه ما يكون بكيس يتسع كلما انحدر الى الداخل عثر في داخله على هيكل عظمي واحد تتجه جمجمته الى الجهة الشرقية وعظام متجهة الي الجهة الغربية اما مقدمة الجمجمة فانها متجهة الى الجهة الجنوبية الشرقية * منثنى الذراعين بحيث تصل عظام اليد الي قرب الجمجمة عثر في داخله على أربع قطع فخارية احداها داخلها جرة مزينة بنقوش قوامها خطوط متقاطعة (شكل ٣١ رقم ٧) عثر عليها قرب عظام الصدر سخن فخارى (شكل ٣١ رقم ١٠) قطعة فخارية بيضاوية الشكل تحوى على مقابض (شكل ٣١ رقم ٨) عثر عليها قرب الجمجمة اضافة الى ذلك فقد تم العثور علي جرة (شكل ٣١ رقم ٩) قرب عظام القدمين * ان هذين القبرين واللذين يعودان الي فترة سامراء متشابهتين من ناحية الشكل والمتقطات الاثرية * اضافة الى طريقه الدفن * الا أن القبر رقم ٢٧٩ أقدم من القبر رقم ٢٤٧ اننا لم نتوسع في التنقيب تحت ابنيق سامراء ولكننا نعتقد جازمين بأن هناك قبور تعود الي هذه الفترة تحت هذه الابنية *

٢ - مدافن فترة العبيد

عثر في التشبيك XXVIII المرقم ٢٠ ، ٢١ ، ٢٢ على خمسة قبور تعود الي فترة العبيد تقع في الجانب الجنوبي للتل ، القبر رقم (١) (شكل ٣٠ رقم ٣) * عثر علي هذا القبر من التشبيك XXVIII المرقم ٢٢ تتسع فوهة هذا القبر من الجهتين الشمالية الغربية والجنوبية الشرقية بحيث تصل الي ٨م × ٩م عثر في داخله علي بقايا هيكل عظمي واحد رأسه متجه الى الجهة الجنوبية الشرقية اما الوجه فيتجه الى الجهة الشمالية الشرقية ومن دراستنا لهيئة النظام اتضح لنا بأن الشخص الملحود كان مثنيا بدليل عثورنا على بقايا عظام اصابع القدمين قرب عظام الحوض * عثر قرب عظام الرقبه على بقايا خرز معموله من العقيق قرب عظام الصدر والقدمين . عثرنا على مجموعه من الخرز الا انها اصغر من الخرز السابق المذكور آنفا حيث لا يتعدى قطر الواحد منها ٤ ملم * بعضها معموله من الحجر والبعض الاخر معموله من الخشب * عند عظام الكتف عثرنا على خرزه طباشيرية (شكل ٤٠ رقم ٢) * كذلك فاننا عثرنا على ثمانية قطع فخارية واحد منها عثر عليها قرب الجمجمة ، اربع ملونه وثلاثة ساد . عثر عليها تحت عظام القدمين (شكل ٣٥ رقم ١ ، ٢ ، ٧) و (شكل ٣٦ وشكل ٣٧ رقم ٥ - ٨) .

كذلك فاننا عثرنا على ثلاث قطع فخارية اخرى. واحد منها تشبه السلحفاة ان طريقة وضع الفخاريات داخل القبر تبين لنا بأن هذه الفخاريات قد رافقت الدفن • تحت الاناء الشبيه بالسلحفاة عثرنا على بقايا عظام حيوانيه •
القبر رقم ٤

عثرنا عليه في التشبيك المرقم XXVIII - ٢٠ مستطيل الشكل وذو زوايا دائرية طوله من الجهه الشماليه الغربيه ٠ (١م ١) أما جهته الجنوبيه الشرقيه فـ ٨٠ سم في وسطه عثر على هيكل عظمى واحد يمتد من الشرق الى الغرب ومثنى قليلا ورأسه متجهه الى الشمال على الجانب الجنوبي من الجمجمه عثرنا على بقايا عظام حيوان وعلى جانب عظام الساق عثرنا على اناء مرمري (شكل ٤٠ رقم ٦) قطع فخاريه (شكل ٣٥ رقم ٥ ، ٦ ، ٩) (شكل ٣٧ رقم ١ ، ٢ ، ٤) وعلى قطع حجرية (شكل ٤٠ رقم ٣). عثر على جميع هذه الملتقطات على ارتفاع يتراوح ما بين ٢٠ - ٣٠ سم من الهيكل العظمى • أن القبور الخمسه تحتوى على بقايا ترابه بنيه اللون وتحوى على بقايا رماد وتعود الى نفس الفترة. هذا واننا لم نعثر على أى رابطة ما بين هذه القبور من حيث طريقة الدفن وطريقه وضع هدايا القبر •

(٣) مدافن فترة ايسن لارسا والعهد البابلي القديم

عثرنا على تسعه عشر قبرا تعود الى هاتين الفترتين مبنيه باللبن القبور رقم (٦٣ ، ٧١) ، (شكل ٣٠ رقم ٤) والقبور رقم (٢٥٣ ، ٢٥٩ ، ٢٧١) جميعها بحاله جيده • ان شكل هذه القبور بصورة عامه مستطيله الا انها غير منتظمه أبعادها ٢ م واحيانا تتعدى ذلك وبعضها يقدر ب ١ م واحيانا تتعدى ذلك • ان قياسات اللبن المستعمله فى بناء هذه القبور هى ٣٥ × ٣٥ × ٧ سم وتحوى على بقايا تبين • فى القبر (رقم ٧١) عثرنا على سبعة سوف من اللبن بقاياها ترتفع الى ٨٠ سم اما طريقة بناء القبر (رقم ٧١) فانها تمتد الى الداخل والهيكل العظمى ممتد واليدان الواحده فوق الاخرى وترتكز على عظام الصدر • أما الركبتان فقد عثر عليهما منحنيتان قليلا • أما القبر رقم ٦٣ فقد عثر على هيكل عظمى ممددا على ظهره والذراعين منحنيتين باتجاه الوجه لم نجد أى قاعده موحده فى الدفن الا فى حالة ثنى الهيكل اضافة الى اتجاه الرأس •

الجرار الموضحة في (الشكل ٣٨ رقم ١ - ٣ ، ٦ - ٨ ، ١٢ ، ١٢) عشر عليها
 في القبرين (٦٣ ، ٧١) كجزء من هدايا القبر • إضافة الى ذلك فاننا عثرنا
 على مجموعه من العظام الحيوانيه داخل هذه القبور قد تعود الى ما عزاو خراف .
 أما هدايا القبر الاخرى فتشمل رأس رمح معمول من النحاس دبابيس ورووس
 حراب وبعض الخرز (شكل ٤٠ رقم ٧ - ١٢) •
المدافن الاسلاميه

عثرنا اثناء التنقيب على ٢٤٠ قبرا جميعها مبنيه
 بالطابوق الكبير الحجم واللبن • وضعت جثث هؤلاء على ارضية مبنيه من
 الطابوق والقبر كله يشبه الى حد ما شكل الصندوق • أما طريقة الدفن
 فهي موحده حيث يتجه الرأس الى مكه •
 بعد دراسته الانثروبولوجيه لهؤلاء من قبل الدكتور هيدي أشارا
 والسيد يو وادا تمكننا من التعرف على توعيه من الاجناس والملاحظ ان بعض
 هذه القبور تحوى على بعض الهدايا كالمرايا وهذه طريقة غير مألوفه في عادات
 الدفن عند المسلمين الحاليه • فعليه فان الطريقة المتبعه في القبور الاسلاميه
 في تل سنكور (أ) هي حالة غير مألوفه •
(١) مدافن أخرى

كذلك فاننا عثرنا على قبر واحد يعود الى فترة حلف والى
 بعض القبور تعود الى الفترة الساسانيه والغرتيه ، ان قبور الفترة الساسانيه
 تعود الى قبر طفل عشر في داخله على اناء ملون (شكل ٣٤ رقم ١ ، ٢)
 إضافة الى فخاريات مزجه وقطع حديدية وقطع زجاجيه •

(٢) الملتقطات

(١) فخار سامراء

عثر على أربع مجاميع من فخار سامراء هي :

- ١ - الفخار السمج
- ٢ - الفخار الملون
- ٣ - الفخار المخرز
- ٤ - الفخار الاعتيادي والجيد الصنع
- ١ - ان الفخار السمج بصورة عامه يختلف كليا عن بقية المجاميع الثلاث المكتشفه
 حيث ان طينته مخلوط بالتبن • كما ان جحوم هذا النوع محدود ولا تتعدى
 جدار كبيره الحجم او احواض

٢ - الفخار الملون

ان جميع الملتقطات اثناء التنقيب في هذا النوع من الفخار لا يتعدى كونها كسر فخاريه صغيره الحجم وبعضها عثر عليه داخل القبور (شكل ٣١ رقم ١ ، ٧ ، ٨) اضافة الى ذلك فاننا عثرنا في البيوت على هذا النوع من الفخاريات (شكل ٣٢ رقم ١ - ٤) .
 وطالما اننا لم نعثر على اناء فخاري كامل فاننا لم نتوصل بالضبط الى شكل الانيه بصورة كامله. ومن خلال دراستنا لهذه الفخاريات توصلنا الى ان بعض هذه الكسر يعود امل الى جرار او صحون * وبعض هذه الجرار ذات عنق طويل (شكل ٣٢ رقم ٩) أو جرار متوسطه الحجم لينا عنق مستقيم (شكل ٣١ رقم ١ ، ٧) أو كؤوس (شكل ٣٢ رقم ١ ، ٤ ، ٥) أو جرار واسعه الفوهه (شكل ٣٢ رقم ٢ ، ٦) او كاسات (شكل ٣٢ رقم ١٦ ، ١٧) أو كاسات محموله على قاعده (شكل ٣٢ رقم ٢٠ - ٢٢) أو كاسات بيضويه (شكل ٣١ رقم ٨) . ان هذا النوع من الفخاريات يحتوى على رمل نقى وانه خشن الملمس اذا ما قورن بالفخار الجيد الصنع . كذلك فان هذا النوع من الفخاريات قد كسي بطبقة خفيفة من الطلاء وذات ملمس ناعم اضافة الى ذلك فانه جيد الحرق * ألوانه متباينه تبنى باللون يميل الى الاحمرار او بنى يميل الى الاخضرار * واهيانا احمر اللون ، أو يميل الى الاخضرار = هذا وان طبقة التلوين يمكن ازالتها بسهولة في بعض الاحيان وفي بعض الاحيان تكسو هذه الكسر طبقة ملحيه غالبا ما تؤثر على طبقة التلوين هذه . ان موضوع النقوش غالبا ما تكون تجريدية وملونه بلون واحد ما عدا قطعتين موضحتين في (الشكل ٣٢ رقم ١٦ ، ١٩) فهي تمثل نقوش هندسيه .
 ان القاعده المتبعه من هذه النقوش هي عبارة عن خطوط ضيقه ومتوازيه افقيا وأحياننا فان هذه الخطوط تعتبر بمثابة خطوطا لتقسيم بدن الاناء الى أقسام وداخل هذه الاقسام يضم نقوشا ايضا . كمثال ذلك الخطوط المشبكه (شكل ٣١ رقم ٨) ؛ (شكل ٣٢ رقم ٢ ، ٦) أو خطوط متوازيه (شكل ٣٢ رقم ٤ ، ٥) أو خطوط افقيه منكزه (شكل ٣٢ رقم ٥ ، ٨) أو خطوط متموجه (شكل ٣١ رقم ٨) أو خطوط متشابكه (شكل ٣٢ رقم ٢٣) أو مجموعه من المثلثات المتداخله في بعض الاحيان . بصورة عامة يمكننا القول بان هناك

اربعه مجاميع متميزه هى مثلثات كما هو موضح فى الشكل (٣٢ رقم ٤ ، ١٤) او مثلثات مملوءة بخطوط متقاطعه كما هو مبين فى شكل (٣٢ رقم ٢ ، ١٢ ، ١٣ ، ١٧) او مثلثات داخلها خطوط متوازية كما هو مبين فى الشكل (٣٢ رقم ١ ، ٧) او مثلثات ملونه كما هو مبين فى الشكل (٣١ رقم ٨ وشكل ٣٢ رقم ٥) لم تستعمل اكثر من نقشين من هذه النقوش فى آن واحدا ما داخل الاناء فغالبا مايكون منقوش بدوائر او مثلثات بسيطه او خطوط متقاطعه كما هو موضح فى الشكل (٣٢ رقم ٢١ ، ٢٢) .

٢) الفخاريات المخززه والفخاريات جيده الصنع

النوعين متشابهه كل الشبه فيما بينهما حيث ان طينتهما تحتوى على نسبة كبيرة من الرمل المتوسط والخبث اما معالجه سطوحها الخارجيه فعليها آثار محموله بالآلة طولها يقدر ما بين ٢ سم - ٣ سم كذلك فان سطوح بعض هذه الفخاريات مطلية بطلاء او مشطأة من سمك هذا الطلاء يتراوح ما بين ٣ ملم - ٧ ملم كذلك فان طرق معالجة هذه السطوح مختلفه فيما بينها وحتى فى الاناء الواحد اما ألوان طينتها فانها اخضر رمادى أو أصفر رمادى ، بنى رمادى وردى أو بنى غامق الا ان معظمها اخضر رمادى .

تقسم هذه الفخاريات الى عدة مجاميع منها مثلا جرار طويله العنق كاشكل ٣٣ رقم ١ ، ٢) جرار قصيرة العنق الشكل (٣٣ رقم ٤) كؤوس كبيره الحجم (شكل ٣١ رقم ٢ - ٦ ، ٩) شكل ٣٣ رقم ٧ ، ٨) جدار واسعة الفوهه (شكل ٣٣ رقم ٦) كاسات (شكل ٣٣ رقم ٣ ، ٥) كاسات بيضويه وصحون (شكل ٢١ رقم ١٠) ان ارتفاع الجرار الطويله العنق تقدر بحوالى ٣٠ سم بعضها يحوى على مقابض أو بروزات أما الكؤوس الكبيره الحجم فقد عثر عليها بكميات كبيره جدا . ان جميع هذه الكؤوس لها قاعده مستديرة والبعض منها يحوى على نقوش هندسيه قوامها مثلثات متداخله ، ما عدا كأسين عثر عليها فى القبر رقم ٢٤٧ .

تمكنا من تقسيم هذه الكؤوس الى اربع مجاميع وذلك حسب أطوالها .

أ - كؤوس طولها ٦ سم أو اقل .

ب - كؤوس يتراوح طولها ما بين ٧ سم - ٩ سم .

ج - كؤوس يتراوح طولها ما بين ١٣ سم - ١٥ سم ،

د - كؤوس طولها ٢٠ سم أو أكثر .

أن المجموعه (ح) هى اكثر المجاميع عدد أما الجرار ذات الفوهه الواسعه فانها تتميز بالسك ، واحده من هذه المجموعه والموضحه فى الشكل (٣٣) رقم

٦) لها مصب مفتوح صغير يخرج من الفوهه بشكل قناه .

اما الكاسات الفخاريه فانها تقسم الى مجموعتين :-

أ - كاسات مغلطه قليله الغور شكل ٣٣ رقم ٣

ب - كاسات شبه كرويه ذات فوهه قصيره يتميز هذا النوع بكونه

أملس من الداخل وخشن الملمس من الخارج احيانا عليه

نقوش هندسيه مخززه (شكل ٣٣ رقم ٥) .

أما الجرار الطويله العنق فبعضها مخززن بنقوش هندسيه بهيئه طوق قوام هذه النقوش اما زوايا منفرجه ، خطوط متوازيه ، خطوط منكسرة او بهيئه اقواس

بسيطه .

(٢) فخاريات حلف (شكل ٣٤)

تتميز فخاريات حلف المكتشفه فى تل صنكور (أ)

• بالاصاف التاليه

أ - طينتها تحتوى على نسبة من الرمل .

ب - سطوحها الخارجيه ناعمه الملمس .

ج - بعض ابدان الاوانى المكتشفة لها حافات حاده تبدوا وكأنها مقطوعه

بآله حاده .

د - لون طينتها تتفاوت ما بين البنى الضارب الى الاحمرار واللون البنى

كما ان سطحها الخارجى مطفى بلون أبيض او أبيض يميل الى الاسمرار ،

هـ - ان الفخاريات الملونه اما تكون احاديه اللون او ملونه بلونين .

و - نقوشها ملونه باللون الاحمر او البنى القاتم ، البنى الضارب الى

الارجوانى أو الاسود .

ز - على البعض منها نقوش لماعه . ان الكاستين الموضحتين فى شكل

(٣٤) رقم ١ ، ٤) لها فوهتين واسعتين ، أما الاوانى رقم (١ ، ٥ ،

٧ ، ١١) فى الشكل ذاته فانها تمثل كاسات ابدانها) مختلفه

بعض الشيء عن الكاسات الانف ذكرها • أما الإناثين رقم (١٢ ، ١٦)
 فقد عثر عليها بكثرة اثناء التنقيب وجميعها ملونه باللوان المختلفه
 ان معظم الكاسات المكتشفة لها قواعد حلقية •
 أما نقوشها فهي أما خطوط متوازية أو ان اجسامها قسمت الى أجزاء
 كل جزء يحوى نقوش أفقية اما النقوش الهندسيه فتتمثل بمثلثات
 أشكال معينات بشكل حراشف اسماك ، خطوط متشابكه ، خطوط
 متقاطعه ، طيور (شكل ٣٤ رقم ٤ ، ٥) وفي حالات نادره حيوانات
 (شكل ٣٤ رقم ١٣) •

أما الفخاريات الغير ملونه فهي كاسات شكل (٣٤ رقم ١٢) جرار طويله العنق
 أو قصيرة العنق (شكل ٣٤ رقم ٢٠) صحن معظمها سمج الصنعه •
 (٣) فخاريات العبيد

ان بعض كسر فخاريات العبيد قد عثر عليها قرب سطح

التل • أما بقية اللقى الاثرية فقد عثرنا عليها داخل القبور العبيديه •
 تتميز صنعه فخاريات العبيد بكونها ناعمه الملمس ، طينتها مخلوطه بالرمل النقي
 أو الخشن بعض الشيء ، كذلك فان طينتها مخلوطه مع نبات الليف • أما
 الفخاريات الملونه فانها ادق صنعه وأبدانها ملونه بلون أصفر باهت أو اصفر
 يميل الى السمرة ، وبعضها عليها طبقه بيضاء دائنه قليلا • نقوش الاخير
 منها اما بنيه قاتم أو خضراء قاتم •
 (١) الفخاريات الملونه (شكل ٣٥ ، ٣٦)

تقسم فخاريات العبيد الى الاقسام التاليه :

- أ - جرار ذات حافة حاده (شكل ٣٥ رقم ١ ، ٢) •
 - ب - جرار بيضوية الشكل تقريبا (شكل ٣٥ رقم ٤) •
 - ج - جرار كثرية الشكل (شكل ٣٥ رقم ٣) •
 - د - جرار زهرية الشكل (شكل ٣٥ رقم ٩) •
- ان الجرار المرقمه من (١ - ٤) في (شكل ٣٥) لها حافة بارزه واقسامها العليا
 منقوشة بحزم هندسيه قوامها خطوط متقاطعه أو مثلثات متقابلة هذا ولا يفوتنا
 ان نذكر بان أعناق هذه الجرار ملونه أسود داكن •
 أما الكاسات المفلطحه ذات القواعد الصغيره (شكل ٣٥ رقم ٥ - ٧) فانها

غالبا ما تكون رقيقة نوعا • ان الكاسه الموضحه فى الشكل ذاته رقم (٥)
عليها نقوش هندسيه قوامها خطوط متقاطعه تكون معينات أما الكاسه الموضحيه
فى الشكل ذاته (رقم ٦ ، ٧) فان نقوشها الملونه من خطوط عريضة وبعض الخطوط
المتقاطعه قد نقشت قرب حافتيهما •

أضافة الى ماتقدم فاننا عثرنا على كاسات كبيرة نوعا أقسامها الداخليه عليها نقوش
نباتيه بشكل وردى (شكل ٣٥ رقم ٨) أو حيوانيه (أسماك) (شكل ٣٦ رقم
٢) • هذا وقد عثرنا على اناء يشبه شكل السلحفاة طولة ٦ سم ماعدا المصب
وارتفاعه ١٢ر٥ سم قسمه الاعلى عليه نقوش قوامها مثلثات متقابلة صغيره الحجم
تتمثل نقوش فخاريات العبيد المكتشفة فى تل صنكر (أ) بنقاط كما هو موضح فى
(شكل ٣٥ رقم ١) او اوراق أوراد كما هو الحال فى الشكل ذاته (رقم ٧) ، أو خطوط
متقاطعه الشكل ذاته (رقم ٨) (شكل ٣٦ رقم ٢) أو دوائر أو اوراق أسماك أو
مثلثات •

٢) الفخاريات الاعتيادية (شكل ٣٧)

معظم هذا النوع من الفخاريات تمثل بجرار متوسطه

الحجم (شكل ٣٧ رقم ١ ، ٥) او كاسات صغيره قليلة الغور ، الشكل ذاته رقم ٣
أو صحن (شكل ٣٧ رقم ٨) ويعتقد بأن بعض هذه الصحن استعملت كأغطييه ،
تتميز هذا النوع من الفخاريات بكونه سمح الصناعه وردى الحرق •

٣) فخاريات القبور (شكل ٣٨)

بالنسبه للفخاريات الموضحه فى شكل (٣٨) رقم
١ - ٣ ، ٦ - ٨ ، ١٠ - ١٣) التى عثر عليها فى قبور تعود الى فترات أيمن
لارسا الحميد البابلى القديم بطنيه والبعض منها مخلوطه بنسبه قليله من الرمل
والتين • ان القسم الاعلى للاناين الموضحين بالشكل (٣٨ رقم ١٢ ، ١٣) معمولان
بالدولاب فقط ، أما بقيه الاوانى فانها جميعها معموله باليد ، اللون طينتها
فتفاوت ما بين اللون الاصفر الباهت الى البنى الضارب الى الاحمر او الرمادى
الضارب الى الخضره •

أما الانائين الموضحين فى الشكل ذاته رقم (٤ ، ٥) فاننا عثرنا عليهما فى
قبر يعود الى الفترة العرثيه / الساسانيه كلاهما مزجج بلون أخضر أو أخضر
يميل الى الاصفرار ••

ان الاناء الموضح فى الشكل (٣٨ رقم ٩) فانه معمول باليد وذو طينه نقيه نوعها لونها بنى باهت كذلك فان سطحه الخارجى يحوى بقايا صبغه ولا نعرف بالضبط تاريخ القبر الذى عثر فى داخله هذا الاناء اضافة الى ذلك فاننا لم نعثر على هذا النوع من الاوانى فى مناطق التنقيب الاخرى .

٤) المواد الطينية لفترة سامراء (شكل ٣٩)

الدمى الانثويه

أثناء تنقيلتنا فى طبقة سامراء فى تل صنكور عثرنا على عشرينه
دمى انثويه علاوة على صخر هذا العدد فاننا استطعنا تقسيمها الى اربع مجاميع
المجموعه الاولى :- عثرنا على دمية واحده من هذه المجموعه فى القبر رقم
٢٤٧ (شكل ٣٩ رقم ١) تتميز هذه الدمية بكونها جيدة الصنعه وناعمه
الملمس معموله من طينه نقيه بنيه اللون . طولها الكلى ١٠ سم تمثل هذه الدمية
امرأة جالسة وتحمل كل ثدى فى يد . أسلوها العام تجرىدى ويتخلى ذلك فى
طريقة ابراز محالم وجهها وساقها كتفها الايمن محلى ببروز قد يرمز الى الوشم .

المجموعه الثانيه :

تتمثل هذه المجموعه برأس دمية طينه بنيه باهته مخلوطه
بالرمل (شكل ٣٩ رقم ١) .

المجموعه الثالثه :

تتمثل هذه المجموعه ببقايا لبعض الدمى (شكل ٣٩ رقم ٤ .
٧ -) معموله بطينه نقيه لونها بنى باهت ومخلوطه بنسبه لابأس بها
من الرمل .

ان بقايا الدمية الموضحه فى شكل (٣٩ رقم ٤) يمثل امرأه واقفه يداها تلتقيان
على بطنها . على جسمها نقوش بهيئة نقاط قد ترمز الى الوشم .
أما بقايا الدميتين والموضحتين فى الشكل ذاته رقم (٥ - ٦) فيمثلان النصف
الاسفل جزء من البطن والساقين . ان الاسلوب المتبع فى عمل هاتين الدميتين
هو الاسلوب التجرىدى ايضا . حول منطقة البطن والساقين هناك خطوط عرضيه
متوازية أما الدمية الموضحه فى الشكل ذاته رقم (٧) فهي بقايا لقسم ايسر لدميه
جالسه فى الاخرى محالقة بخطوط عرضيه متوازيه .

المجموعه الرابعه :

هذه المجموعه مختلفه كل الاختلاف عن المجاميع الثلاث السالفه الذكر

فالدليه الموضحه فى الشكل (٣٩ رقم ٢) تمثل امرأه جالسه مفقوده الرأس •

اسلوبها العام تجرىدى ايضا طينتها دائنه اللون مخلوطه بالرمل •

(٢) مواد شبيهه بالقرون (شكل ٣٩ رقم ٨ ، ٩) ان هذه المواد المحموله

من الطين المشوى قد استعملت لخن بعض المواد بدليل عثونا على

• ماده متفحمه سوداء اللون •

(٣) أقراص المغازل (شكل ٣٩ رقم ١٠ - ١٦)

اثنا التقيب عثنا على

مجموعه كبيره من اقراص المغازل المحموله من الطين المشوى شكلها العام

نصف مخروطى محيطه ٤ سم وارتفاعه ٣ سم • ان طينه هذه الاقراص بنيه

تميل الى اللون الرمادى ومخلوطه بنسبه عاليه من الرمل اقسامها

العليا عليها نقوش مخززه اما اجزائها السفلى فمعظمها متآكل يزن القرص

الموضح فى الشكل (٣٩ رقم ١٠) ٨ ر ٣١ غرام •

(٤) الادوات الحجرية والبرونزية والنحاسية (شكل ٤٠) ان شكل الاله الموضحه

فى شكل (٤٠) رقم (١) تشبه الاليتين الموضحتين فى الشكل (٣٩) رقم

٨ ، ٩) والتي عثر عليها فى القبر رقم ٢٤٧ والعائد الى عصر سامراء • أما

الكسره المباشرة والموضحه فى الشكل (٤٠) رقم (٢) فقد عثر عليها فى

القبر رقم (١) والذي يعود الى فترة العبيد، أما رقم (٣) فى الشكل ذاته

والمحموله فى المرمر فقد عثنا عليه فى قبر آخر يعود الى فترة العبيد

أيضا قد يكون له تهذيب أما الاوانى الحجرية الموضحه فى الشكل ذاته

رقم (٤ - ٩) فقد عثنا عليها فى طبقة حلف والانا رقم (٦) عثنا عليه فى القبر

رقم (٤) والعائد الى فترة العبيد جميعها مصنوعه من المرمر •

أن الادوات البرونزية الموضحه فى الشكل ذاته ومن رقم ٧ - ١٢ فانها

تعود الى هدايا قبور عثر عليها فى طبقات فترة ايسن لارسا والعهد البابلى

القديم رقم ٧ ، ٨ يمثلان دبابيس رقم ٩ ، ١٠ . حول رقم ١١ ، ١٢

روءوس رماح كما أننا عثنا على مسامير نحاسيين • ولسوء الحظ فاننا

لم نستطيع معالجه هذه المواد وذلك لكثرة المبدأ المتراكم عليها •

(٥) الخاتمه

ان تل سنكور (أ) قد سكن في عصر سامراء ثم هجر بعد ذلك كذلك
فأن بعض الدلائل تشير بأن هذا التل قد استعمل كمدفن قبل فترة سامراء
بدليل عثورنا على قبر رقم ٢٧٩ يعود الى فترة احدث من ذلك * علاوة
على اكتشافنا لعدة أطوار لعصر سامراء الا أن مواد هذه الاطوار لم تختلف
كذلك هو الحال بالنسبة الى تخطيط الابنية المكتشفة. ان الدمى المكتشفة
في تل سنكور (أ) والعائده الى فترة سامراء تشبه الدمى المكتشفة في تل
جوخة مافي (٥) أما شكل اللبن فانه مختلف عن اللبن المكتشف في تل جوچه
مامى * كذلك فان بعض الدمى الانثويه المكتشفة في طبقة سامراء فانها
لا تشابه ما هو مكتشف في تل جوچه مامي شكل (٣٩ رقم ٢) *
ان أشكال فخاريات تل سنكور (أ) والعائده الى فترة سامراء مشابهه الى
فخاريات تل رهان في حوض حميرين *
أما بالنسبة الى مقارناتنا مع فخاريات جوخه مامي فاننا مع الاسف الشديد لم
نتوصل الى كليه كافقه من الفخاريات في تل جوچه مامي تساعدنا على
هذه المقارنه *
أما بالنسبة الى فخاريات عصر سامراء والمكتشفة في تل الطوق فاننا عثرنا على
بعض التشابه فيما بينها وبين ما هو مكتشف في تل سنكور (أ) اما الفخاريات
المخززه فانها تشابه تخزين فخاريات مطارده ٨ أما بخصوص قبور الفترات
اللاحقة فان جميع فخاريات قبور العبيد قد وضحت في هذا التقرير وبعده
مقارنتنا لها وجدنا أنها لا تقاير فخاريات رأس العميه (٩) *
ان ملقطات تل سنكور (أ) سواء ما هو مكتشف في طبقات سامراء أو في قبور الفترات
اللاحقة كحليف والعبيد اعطت مدلولات كثيره لا نتشار هذه الحضارات في مناطق
متعدده من بلاد الرافدين وللأسف الشديد اننا لم نستطيع انهاء تنقيتات هذا
التل ونأمل تكمله تنقياته بالسرعه الممكنه *

Notes:

- 1) Gibson, McG., 1979, "Tell Rihan Chicago-Copenhagen Excavation at Uch Tepe Hamrin", *Sumer* Vol. XXXV
- 2) Forest, J. D., 1980, "Kheit Qasim I", *Paleorient* Vol. 6
- 3) Close analogues have been reported in the materials from Tell Es-Sawwan. One is pottery and another is an alabaster object.
 - i) Behenam Abu Al-Soof, 1968, "Tell Es-Sawwan Excavation fourth season", *Sumer*

Vol. XXIV-1, 2, PL. X-16 and PL. XII

- ii) Faisal El-Wally, Behenam Abu Al-Soof, 1965, "The Excavation at Tell Es-Sawwan First Preliminary Report 1964", *Sumer* Vol. XXI Fig. 74
- 4) *ibid.*
- 5) Oates, J., 1968, "Prehistoric Investigations Near Mandari, Iraq", *Iraq* Vol. XXX-1 1969, "Choga Mami, 1967-68: A Preliminary Report", *Iraq* Vol. XXXI-2
Oates, D. and Oates, J., 1976, *The Rise of Civilization*, Oxford
- 6) This figure relates to the ones from Yarin Tepe II, on the point of view that they have grooves on both sides of the lower body, triangular arms, and the front view. But these from Yarin Tepe II are very flat seeing from the side. Figurines of this type have been compared with ones from Tepe Gawra and Tell Arpachiyah by Merpert and others. They came from the Halaf levels, and there are discussions on the Samarra pottery coming from the very levels.
 - i) Merpert, R. Munchaev, N. Bader, 1978, "Soviet Investigations in the Sinjar Plain", *Sumer* Vol. XXXIV PL. XII-3, 4, 8
 - ii) Tobler, A.J., 1950, *Excavation at Tepe Gawra*, Vol. II, Philadelphia, PL. CLIII-2
 - iii) Mallowan, M. E. L., Rose, C., 1933, "Excavation at Tell Arpachiyah", *Iraq* Vol. II-I, Fig. 47-19.
- 7) Ippolitoni, F., 1971, "The Pottery of Tell Es-Sawwan First Season", *Mesopotamia* Vol. V-VI
- 8) Braidwood, R. J., 1952, "Matarrah a Southern Variant of The Hassuna Assemblage, Excavated in 1968", *J. N. E. S.* Vol. XI
- 9) Stronach, D., 1961, "The Excavation at Ras Al-Amiya", *Iraq* Vol. XXIII-2

IV تلؤل صنكور ب ٤ ج

١ - تنقيات تل صنكور ب

يقع هذا التل على بعد ١٠٠ متر تقريبا من تل صنكور (أ) كما انه يتوسط تل صنكور أ ، ج . شكله العام بيضوي أبعاده ٦٠ متر × ٥٠ متر ومعدل ارتفاع يقدر بمتريين عن سطح الأرض المجاورة. ان قمة التل تقع الى الجهة الشمالية الشرقيه وتنحدر فى الاتجاهين الشمالى والجنوبى (شكل ٢٤) .

ابتدأت تنقيات تل صنكور ب فى السادس من تشرين الثانى عام ١٩٧٧ وانتهت فى الثانى عشر من آذار عام ١٩٧٨ . الا اننا عاودنا التنقيب فيه فى مراحل متقطعة من بدايه حزيران والى الثانى والعشرين من شهر آب ١٩٧٨ ومن بدايه تشرين الاول ولغايه الثلاثين من كانون الاول من العام نفسه ومن الثانى من آب ١٩٧٩ ولغايه الثالث والعشرين من آذار عام ١٩٨٠ . بدء التنقيب فى التشبيك المرقم IX - ٩ و X - ٩ .

وان لغايه من تنقياتنا فى تل صنكور ب هو معرفه طبقاته السكنيه وادوارها الحضارية آخذين بنظر الاعتبار انغمار التل بالمياه بعد الانتهاء من مرحله من مراحل السد .

ان نتيجة التنقيات التى شملت قمة التل الى التربه العذراء قد أسفرت عن ما يلى :-

أ - قمة التل تحوى على قبور اسلاميه

ب - تحت القبور الاسلاميه توصلنا الى قبور شملت الفترات التاليه :-

١ - الفترة العرثيه / الساسانيه

٢ - فترة ايسن لارسا ٣ - فترة العهد البابلى القديم

٤ - فترة فجر السلالات

٥ - فترة جمده نصر

ج - الطبقة الاولى من التل التى تقع فى السفح الجنوبى تعود الى

فترة العبيد .

د - الطبقة الثانيه من التل تحوى على حضارتى حلف وعبيد

د - الطبقة الثالثة تعود الى عصر حلف

- و - الطبقة الرابعة والتي تقع غرب التل تعود الى عصر حلف ايضا .
عثر فيها على بعض البيوت السكنيه (شكل ٤٢) .

الطبقات

١ - الحقبه الاولى (شكل ٤٣) .

عُثر في هذه الطبقة على فرن فخارى وعلى بعض الحفرتقع في السفح الجنوبي .
ان اشكال الافران الفخاريه بيضويه ومعدل أبعادها ٢ م × ١ م الا ان
الخرنين المرقمين K-١ ، K-٦ مشيدان تحت مستوى سطح الارض .
أما الافران الصغيره الحجم فانها دائرية الشكل ومعدل قطرها ١ م .
أن الفرن رقم K-١ هوالفرن الوحيد المشيد بالا جر ، اماالفرن رقم
K-٣ والمستدير الشكل بقطر يقدر ب ٥ ر ١ م فانه مختلف بعض الشيء عن
بقية الافران لكونه يحوى على المشعل من جهه ومكان ادخال الفخاريات
من جهه اخرى . على قمه المشعل عثرنا على طلعه تحوى على ١٧ منفذ
للنيران (لوح ٢٠ رقم ٢)

ان الحفره المرقمه (أ) والتي أبعادها ١٥ م × ٢٥ م وعمقها
١ م تبدو وكأنها حفرت بعد تخريب البنايه المسماه B-I والتي تعود
الى الطبقة الثانيه . ان دفن هذه المنطقه مكون من طين مخلوط
بالرمل وبعض كسر الفخار، أما الحفرة الكبيره الثانيه والمرقمه (ب) والتي
تقع الى جنوب الحفره الاولى فقد عثرنا فيها على كميه من الفخاريات
الغير مستعمله ، رماد ، كسر فخاريه وبعض الادوات الحجريه .
ان طول هذه الحفره لا يتعدى ٥٠ م أما معدل عرضها فيتراوح ما بين
٥ ر ١ م - ٢٥ م . وعمقها ٢ م عثر في داخلها على بقايا كسر فخاريه
رماد وادوات حجريه .

الطبقة الثانيه (شكل ٤٣)

أثناء تنقياتنا في هذه الطبقة عثرنا على بنايتين أطلقنا عليهما البنايه (ا) ، البنايه
(ب) . ان أرضية البنايه (ا) من الجهة الشرقيه مبلطة بالجص وكذلك أرضية البنايه
(ب) أرضيتها من الجهة الغربيه فقط مبلطة بالجص ان ابعاد البنايه (بدا) -
٢٣ م × ١ م أما أرضيتها فانها مبنية بالجص المخلوط وجد رانها مبينه من الطين مخلوط

بالجص المسمى (الطوف) يتراوح عرض جدرانها ٧٠سم ، أما أقصى ارتفاع لها فهو متر واحد ، الى الشمال من هذه البناية عثرنا على طريق ضيق يبلغ عرضه مترا واحدا ومبلط بالجص (لوح ٢١ رقم ٤) .

ان البناية (ب - ٢) فانها متناخّرة في وسطها عثرنا على غرفة مخططها يشبه الصليب والبعض الآخر من غرفها مقسمة الى اقسام . بعد دراستنا تبين بأنها في غاية الدقة أما مدخلها الرئيسي فقد عثرنا عليه في الضلع الشمالي الغربي ، وعلى جانبه عثرنا على السلم وسقيفة خارجية .

ان جدران هذه البناية هشيذة بالطين (الطوف) ومعدل سمك جدرانها ٨٠سم أما أرضيتها فانها مبلطة بالجص والحصي .

أثناء التنقيب عثرنا على عدد كبير من الغرف في البنائيتين (ب١ ، ب٢) ، أما في البناية (ب٤) فقد عثرنا على حفرة خزن عمقها ٥٥م وقطرها ٥٥م إضافة الى ذلك فاننا قد عثرنا على أنابيب لتصريف المياه (شكل ٢٠ رقم ٣)

ان الملتقطات الاثرية داخل هذه البنائيات قليلة جدا حيث لا تتعدى بعض الكسر الفخارية .

٣ - الطبقة الثالثة (شكل ٤٤) .

ان بقايا الطبقة الثانية استعملت كأسس لبنية هذه الطبقة بدليل أن مخطط البناية ب١ والذي عثر عليه في هذه الطبقة يطابق البناية ب٢ والعائدة الى الطبقة الثانية أما البناية ب٢ فهي ملحق للبناية ب١ ، يحوى هذا الملحق على أربع غرف إضافية أو أكثر طول ضلع كل واحدة منها ٣م . أما سمك جدرانها والمشيدة بالطين (الطوف) فيتراوح ما بين ١م - ٧٠سم . أرضياتها خبالية من الجص .

البناية (ب٣) فقد عثرنا فيها على صنارة باب وموقد نار سمك جدرانها فانه اكثر من البنائيتين (ب١ ، ب٢)

عثرنا في هذه الطبقة على عدد من الفخاريات والادوات الحجرية .

ان أرضية البنائيات المرقمة (ب٤ ، ب٥ ، ب٦) مبلطة بالجص . ونظرا لقرب هذه الطبقة من سطح التل فان أرضياتها قد تآكلت .

ان الملاحظ أيضا هنا ان مخطط البناية (ب٦) يطابق البناية المسماة (ب٢) في

الطبقة الثانية . إضافة الى ذلك فاننا عثرنا على مرطوله ٥م وعرضه ٧٠سم ، ما بين

البناية المسماة (ب٣ ، ب٤) مبلطا بالجص .

٤ - الطبقة الرابعة (شكل ٤٥)

عثرنا في التشبيك VIII-VI المرقم ٢ و ٣ ، ٦ ، ٧ على فرنين فخاريين قطر الواحد منها ٥٥رام وعلى بنايتين صغيرتين ومنفصلتين • ان البناية الواقعة في الجهة الغربية تحوى غرفتين أو أكثر • جدرانها الخارجية محلاه بطلعات • أما البناية الشرقية فانها مكونة من غرفة واحدة وفي كل زاوية من هذه الغرف عثرنا علي طلعة واحدة •

كلا البنائيتين مشيد بالطين (طوف) ان الشئ الملاحظ هنا هو تراكم طبقة من الرماد الاسود تنتشر فوق الابنية المكتشفة ، ليس لدينا سبب يعلل وجود هذه الظاهرة الا اننا نعتقد بانها نتيجة وجود الافران الفخارية •

٥ - المكتشفات الاثرية

١ - الفخاريات

١ - الطبقة الاولى (شكل ٤٦) كاسات قليلة الفهر

أثناء التنقيبات عثرنا على مجموعة كبيرة من هذا الانواع من الكاسات (شكل ٤٦ رقم ٧) ، ان بعض الفخاريات المكتشفة عليها نقوش متمثلة بأوراد بهيئة الصليب والبعض الآخر مطلية بلون واحد من الداخل والخارج •

أما النقوش الاخرى فانها متمثلة بخطوط متقاطعة غالبا ما تكون منقوشة على سطح الاناء الداخلى وسطحها الخارجى فانه محلي بخط أفقى • ان قطر هذه الكاسات لا يتعدى ٤سم وقطر قاعدتها فانه ٢سم وارتفاعها لا يتعدى ١سم • طينتها تحوى نسبة قليلة من الرمل لونه أخضر داكن أو بنى •

أما الكسات الصغيرة فانها لا تحوى على أى نقوش تذكر •

الجرار

أثناء التنقيب عثرنا على مجموعة من الجرار القصيرة العنق وذات أذينات أما طولية أو عرضية (شكل ٤٦ رقم ٢) • والقسم الاعلى منها ملون • والبعض منها لها حافات بارزة تحوى علي طوق يلتف حول أبدانها (شكل ٤٦ رقم ٣ ، ٤) وعادة تكون هذه الجرار ملونة بلون آحادى والبعض الآخر ذات فوهة مفتوحة • اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على أغطيه تعود الى هذا الجرار (شكل ٤٦ رقم ٥) •

الزورق الفخارية

ان معدل طول هذه الزوارق هو ٢٣سم ومعدل عرضها ١٢سم أما معدل ارتفاعها

فهو ٠ اسم معظمها أحادية اللون والبعض الآخر منها يحوى على نقوش قوامها خط متموج (شكل ٤٦ رقم ١)
الكاسات العميقة الغور

ان معدل ارتفاع هذه الكاسات هو ٨١ سم ومعدل قطر نفوحتها هو ٣٠ سم (شكل ٤٦ رقم ١٠) على البعض منها نقوش قوامها خط متموج ٠ ان أغلب هذه الكاسات عثر عليها في تل صنكجرا ، صنكجرب ٠

الكاسات

ان أغلب هذا الانواع من الكاسات قد عثر عليه في الطبقة الاولى (شكل ٤٦ رقم ٦) ٠ أغلبها عليها نقوش قوامها خطوط متموجة أو متقطعة ٠ اضافة على ذلك فقد عثرنا على كاسات عليها نقوش تمثل أشكال أصداف (شكل ٤٦ رقم ٨) ، رومس أبقار ووايوير (شكل ٤٦ رقم ٩) (شكل ٤٦ رقم ١١) ان هذا النوع من النقوش تشابه فخاريات حلف ٠
فخاريات الطبقة الثانية (شكل ٤٧)

تحوى هذه الطبقة على فخاريات قليلة تعود الي فترتي حلف والعبيد ٠ ان فخاريات حلف موضحة في الشكل ٤٧ ومرقمة بالارقام التالية (٢ ، ٣ ، ٤ ، ٧ ، ٨) جميعها مطلية بطلاء خفيف اما ابيض اللون أو أسود أو أحمر ٠ أما فخاريات حلف المكتشفة في هذه الطبقة فانها موضحة في الشكل ذاته ومرقمة كالتالي : (١ ، ٥ ، ٩ ، ١١) ٠ ان الكاسة الموضحة رقم (٥) لها غطاء ودينها يحتوى على ثقوب متعددة ربما استعملت كمصفاة ٠ اضافة الى ذلك فانها مطلية باللون الاحمر ٠ أما ان الاناء رقم ١١ فقد عثر عليه في فترتي حلف والعبيد الا أنه يكثر في فترة حلف عادة يكون هذا الاناء مطلى بلون أبيض داكن عليه نقوش برتقاليه اللون ٠ اما الشكلين رقم ١٠ ، ١٢ فانهما يمثلان كاستين غالبا مائر على أمثالهما فى مواقع أخرى تعود الى فترة العبيد ٠

تتميز فخاريات حلف بدقه الصنع والتلوين ٠ ان الرقم ٦ مثلا أحمر اللون طينته تحوى نسبة كبيرة من التبن نقوشة مكونه من خطوط متوازية سوداء اللون أما الفراغات فأنها ملونه بلون أحمر ٠

وهذا النوع من الفخاريات قد عثر عليه في موقعين جوخه مامي ورأس العميه

٣) الطبقة الثالثة (شكل ٤٨)

الجرار ذات العنق المستوى هي من مميزات فخاريات حلف (شكل ٤٨ رقم ١ - ٤ ، ٦) . وعادة تكون هذه كبيورة الحجم ولبعض منها له أربعة أذنيات صغيرة (شكل ٤٨ رقم ٢ ، ٦) . أما رقم (٤) فقد عثر معها على غطاء • اما الكاسات (رقم ٧ ، ٨) فانها تحوى على نقوش قوامها خطوط حمراء متوازية ومعقوله عقلا جيدا • كذلك فقد عثرنا على مجموعة من الكاسات تحتوى على ثقوب ربما استعملت كصفاة •

كذلك فقد عثرنا على كاسات عميقة الغور تعود الى فترتين حلف والعبيد (شكل ٤٨ رقم ١٢) هذا وان بعض فخاريات حلف تحتوى على طوق بارز يلتف حول جسم الاناء كما هو موضح فى شكل ٤٨ رقم ١٣ •

٤) الطبقة الرابعة (شكل ٤٩)

ان نقوش فخاريات الكاسات العميقة الغور قوامها خطوط متوازية (شكل ٤٩ رقم ١ - ٤) أما ألوانها فتتراوح بين الحمراء أو السوداء أو البيضاء أشكالها فقد وضحت فى شكل (٥٤ ، ١ - ١٣) • الكاسات (رقم ٥ ، ٦ ، ٨ ، ٩ ، ١٠ - ١٤) من الكبر الكاسات سطوحها الداخليه تحتوى على نقوش متميزه

أما القواعد المكتشفه والمصنفة فى (رقم ١٦ - ٢٤) فانها تعود الى كاسات قليلة الغور • أما (رقم ١٥) فيعود الى اناء يطلق عليه اناء الفاكهه •

ان نقوش فخاريات الطبقة الرابعة تتميز بخطوط متقاطعه ، مربعات سوداء وبيضاء اللون ، دوائر ، خطوط متموجه واوراد • اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على نقوش حيوانيه وطيور • ان فخاريات الطبقة الرابعة هذه هي فخاريات حلف كما هو الحال فى تل سنكور أ •

فخاريات القبور - (شكل ٥٠)

ان تل سنكور أ - يحتوى على اربع طبقات تعود الى فترتى حلف والعبيد الا أن القبور المنتشرة على سطح التل قد دمرت اجزاء كبيرة من التل وتاريخ هذه القبور يعود الى الفترات التاليه :

جمده نصر ، عصر فجر السالات ، ايسس لارسا ، العهد البابلى القديم ، الفرثى ، الساسانى والاسلامى • الا أن اغلب هذه القبور تعود

الى فترة ايسن لارسا والعهد البابلى القديم •
الادوات الحجرية (شكل ٥٦ ، ٥٧) انظر الفصل السادس

٢ - تنقيبات تل سنكور ج

(١) سير التنقيبات

يبعد تل سنكور ح حوالى ١٠٠ م شمالى شرق تل سنكورب • أن
 شكل التل العام مستطيل تقريبا أبعاده ٤٠ م من الشمال الى الجنوب و ٣٠ م
 من الشرق الى الغرب وبأرتفاع أقصاه متر عن سطح الارض المجاورة • قمتـــه
 ترتفع ٢٥ ر ٨٨ م عن مستوى سطح البحر •

بدأت التنقيبات فى سنكور ح الغير متواصلة فى ٤ شباط عام ١٩٧٨ ولغايه
 كانون الاول عام ١٩٧٩ (شكل ٥١) •
الطبقات والمخلفات الاثرية (شكل ٥٢ ، ٥٣)

المخلفات الاثرية فى هذا التل

تمتد الى عمق ١٦٠ م ، عثرنا فى هذا العمق على طبقتين فقط تعودان الى فترة
 العبيد • هذا وان التل قد ازيل جزء كبير منه بسبب فيضانات نهــــر
 دىالى أولا وكثره القبور الاسلاميه على سطحه ثانيا •

عثرنا فى الطبقة الاولى على بناء أبعاده ٢٥ م × ١٥ م يحتوى على ارضيتين
 (شكل ٥٢ أ ، ب) • اما بقايا الطبقة الثانية فهى متمثلة فى ارضيه
 وطبقة من الرماد لونها أسود • قد تحتوى الطبقة الاولى على وحده مكونه
 من أبنيه متعددة عدد غرفها مجتمعه ثمانية عشر كل غرفة من هذه الغرف
 مربعه الشكل طول ضلعها ٢ م جدرانها مشيده من الطين (الطوف)
 بمعدل سمك قدره ٧٠ سم • تحوى هذه الوحده على عدة مداخل
 بدليل عثورنا على عدد من سفارات الابواب • إضافة الى ذلك فاننا عثرنا
 على عدد من الافران فى الغرف التاليه : ٧ ، ٤ ، ٣ ، ٥ أما الغرفه
 رقم (١) فقد عثرنا على بالوعه عمقها ٧ م ، مملوءه بالكسر الفخاريه كذلك فان التل
 لا يخلو من عدد من المواقد والتي عثر عليها على اعماق مختلفه •

الملتقطات

١ - الفخاريات (شكل ٥٤)

الجرار :- (شكل ٥٤ رقم ١ ، ٣ ، ٤ ، ٧ ، ٨) تتميز بكونها صغيرة ومتوسطه الحجم وذات عنق قصير • بعضها يحوى على اربح أذنيات صغيرة • ان الجره الموضحه فى الشكل ذاته رقم ٨ عليها نقوش قوامها حراشف أسماك بينما الجره رقم ٧ عليها نقوش فى غاية الدقه • أما الجرتين رقم ٢ ، ٦ فانهما ذات أعناق طويله • ان هاتين الجرتين شبيهتيني بالجرار المكتشفة فى تل سنكوراً (انظر شكل ٤٠) اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على جرار ذات اغطيه (شكل ٥٤ رقم ١٠) وكاسات عميقة الغور (شكل ٥٤ رقم ١٤) عثرنا فى احدى هذه الكاسات على هيكل عظمى لرضيع •

كاسات قليلة الغور

ان شكل الكاسة الموضح فى شكل ٥٤ رقم ١١ أطول قليلا من بقية الكاسات المكتشفة • على قسمها الخارجى نقوش كذلك فقد عثرنا على عدد من الكاسات شبيهه بالكاسة الموضحه فى الشكل ٥٤ رقم ١٤ • أما الكاسه رقم ١٥ فعليها خزوز قوامها خطوط متقاطعته ان هذا النوع من الكاسات والتي تعود الى فترة العبيد لم يعثر عليه فى مناطق اخرى •

اناء فخارى بشكل سلحفاة

عثر على مجموعه من هذه الانيه تتميز بكونها سميكه ومسقوله • ان اشكال هذه الفخاريات شبيهه بتلك التى هثر عليها فى تل حاج محمد كذلك فاننا عثرنا على هذا الشكل والمطلى بلون أسود على ارضية حمراء فى تل سنكور ب (شكل ٤٧ رقم ٦) • ان خوان ألوان ونقوش الفخاريات المكتشفة فى تل سنكور ح بصورة عامة هى دقيقة ملونه بألوان متعددده كالأخضر والاحمر والبنفسجى الداكن أما النقوش فقوامها خطوط متقاطعته ، خطوط متموجه ، معينات ، أسماك ، خطوط متكسره ، مثلثات ونقاط اضافة الى ذلك فاننا عثرنا على نقوش حيوانيه كالطيور والشعابين والنمر المرقط • جميع هذه النقوش رسمت على سطح أوداخل الاناء الدقيق الصنع والمصقول صقلا جيدا •

الادوات الحجرية وبعض اللقى الاخرى (شكل ٥٥ ، ٥٦ ، ٥٧)

عثرنا أثناء التنقيب

على مجموعه من الادوات الحجرية المتمثلة فى مناجل ومقاشط جميع هذه

الادوات مشابه الى ما هو مكتشف في الطبقة الاولى في تل سنكوروب • أن
 الاحجار المعموله منها هذه الادوات غير متوفره في بلاد وادي الرافدين •
 لذا نعتقد بأنها مستورده من خارج منطقة حميرين •
 المكتشفات الاخرى فتشمل أواني حجرية كرويه الشكل ، مسناه ، رؤوس صولجان
 احجار وزن ، أقراص مغازل ، مسامير معقوفه (شكل ٥٥) انظر أيضا
 للفصل السادس •

الخاتمة

=====

ان تلول سنكوروب الثلاثة تقع قرب مفرق نهرين هما نهر دياللي ونهر نارين واللذان
 يجريان الى شمال جبال حميرين اضافة الى ذلك فان جبال حميرين تقع مابين جبال
 سلسلة زاكرسى والسهول الرسوبى لبلاد مابين النهرين •
 ولا هميه هذه المنطقة الناحية الجغرافية فاننا ركزنا عملنا فيها علنا تصل الي
 نتيجة التطور الاجتماعى الذى حل بها من ناحية وعلاقتها بجيرانها
 من ناحية ثانية ، ولولا انشاء سد حميرين لما اتاحت لنا هذه الفرصه
 العظيمه حيث مكنتنا من حل بعض المشاكل الاثاريه •
 ان تلول سنكوروب ، ح يعودان الى عصرى حلف والعبيد • أنفا سوف
 تذكر مشاكل كل حضارة على حده •

عصر حلف

=====

- ١ - ان ابنيه حلف المكتشفة فى هذين التلين مشيده بالطين
 الطوف هذا وعلاوة على ان اللبن قد أستعمل فى ابنيه عصر سامبراء
 والمكتشفة فى تل سنكوروب - الا ان أستعمال اللبن لم يكتشف فى أبنيه حلف
 والعبيد •
- ٢ - ان الطبقات العليا من التل دائما تكون أوسع فى الطبقات السفلى ظهرت
 هذه الظاهرة خاصة فى الطبقة الثالثة والثانية حيث أن أرضيات
 هذين الطبيعيه كانت ميلطة بالجص أيضا •
- ٣ - لم نعثر على فخاريات حلف المميزه أثناء التنقيب والتي تشمل أواني
 ذات فوهة واسعه منتفخه الحنق والكتف البدن أواني مغلطحه وكاسات
 ذات قواعد منبسطة •

- ٤ - عثرنا على مجموعة كبيرة من الكاسات ذات القواعد الحلقية الشكل أن السطح الداخلى والخارجى لهذه الكاسات عادة يكون منقوش بنقوش هندسيه قوامها خطوط متقاطعه . وفى قاع هذه الكاسات غالبا ما تشاهد نقوش هندسيه أيضا قوامها خطوط منكسرة ، طيور دوائر متداخله واوارد . لم نلاحظ نقوش حيوانيه أو أشكال معينه كالتى ظهرت فى تل الارجيه (١)
- ٥ - لم نعثر سوى على كسر ثلاثة تعود الى كاسات ذات أطواق تعود الى فترة حلف فى تل سنكور (٢)
- ٦ - الكاسات ذات الخور العميق والتى تعود الى فترة العبيد والتى لم يعثر عليها فى تل الارجيه وانما عثر عليها فى تبه كورا الطبقة الثلاثين عثرنا عليها فى تل سنكور ب ، ج بكثره .
- ٧ - ان الكاسات الكبيرة الحجم والتى يبلغ قطرها ٣٠ سم وذات الحافة البارزه الى الداخل والتى سطحها الخارجى يحوى على نقشه واحده قوامها خطوط متوازية أو خطوط منموجه عثرنا على هذه الكاسات فى فترة العبيد ولوانها تعود الى فترة حلف .
- ٨ - أن جميع الفخاريات المتقوشة لها ابدان منتفخه وبعضها ذات فوهات واسعة لتغطيتها بأغطية فخارية أيضا . ان هذا النوع من الفخاريات لم يعثر عليه لافى الارجيه ولا فى تبه كورا (٤) ان الفخاريات ذات الاغطيه لم تقتصر على الكاسات وانما شملت الجرار ذات الاعناق الطويلة والقصيرة ان هذا النوع من الفخاريات ولوانه بدأ فى فترة حلف الا انه شاع استعماله فى فترة العبيد . كذلك فقد عثرنا على جرار من ذات أعناق طويله خاليه من الاطواق أشكالها بصورة عامه نصف كرويه .
- ٩ - أن الاغطيه المكتشفة بعضها عليها نقوش كالخطوط المتقاطعه داخل هذه الخطوط يوجد ثقب صغير قطرة ٥ ملم ، كذلك عثرنا على فخاريات والمسماه بأنيه الفواكه .
- ١٠ - أما فيما يخص الادوات الحجرية والتى تعود الى عصر حلف فقد عثرنا على مناجل ، روعوس سهام ، مجارش . ان وجود هذه المجارش يدلنا على ان سكان التل كانوا مكثفون ذاتيا من لناحيه الزراعه ، كذلك عثرنا

على كؤوس، معموله من المرمر •

١١ - تعاويذ معموله من الطين المشوى • ان فترة حلف المكتشفة فى تل سنكور مميزة بنقوش وأوانيها الفخارية سيات كان ذلك فى الطبقات السفلى من التل أو الطبقات العليا • أما الطبقات العليا والتي أتت فوق طبقة حلف فانها تعود الى فترة العبيد • لذا فان عصر حلف المتأخر قد امتدت الى الجنوب فى منطقتين متميزتين جوفه مامي وتل سنكور ب

فترة العبيد

ان مخلفات العبيد قد عثر عليها اما فى قبور كالتى ذكرناها عند ذكرنا لتنقييات سنكور أ، أو أفران فخاريات أو حفر كبيره والستى جاء ذكرها فى تقرير سنكور (ب) أو المخلفات الحضارية والتي جاء ذكرها فى تنقييات تل سنكور ح، أما المزايا العامه فاننا سوف نذكرها آنفا وبالتفصيل •

(١) فى الثلاثة تلول عثرنا على مخلفات حلف •

(٢) ان جميع آبنيه العبيد مبنيه بالطين (الطوف) وليس اللبن •

(٣) من خلال اكتشافنا لثلاثة عشر فخارى وصلنا الى نتيجة ثابتة بان صناعه

الفخار كانت حرفه رئيسيه •

(٤) ان العادة المتبعيه فى الدفن ابان فترة العبيد هى ان الاطفال يدفنون تحت أرضية الشكن بينما الكبار يدفنون فى مقابر خارجيه • أما مميزات اللقى فهى كالتى •

(١) ان الاواني الفخاريه والشبيهه بالسلحفاة لها عنق طويل • طويله بصورة عامه ورقيقة الصناعه •

(٢) ان الكاسات القلية الخور لها طوق قريب من القاعده، والتي غالبا ما تكون منبسطة أما نقوشها فتشمل على خطوط متقاطعه، أو اداء مثلثات،

وبعض النقوش الحيوانيه •

(٣) الكاسات الفخارية غالبيتها صغيرة الحجم رقيقة، وذات قاعده مدورة عاده تكون معموله من طينه لونها اخضر باهت •

(٤) جرار ذات فوهتين

عثرنا على مجموعه من هذه الجرار بعضها ذات فوهه عريضة لوضع

غطاء فخارى • ان هذا النوع من الجرار عثر عليه فى طبقات حلف

ايضا • الا ان هناك اختلاف بسيط ما بين جرار حلف وجرار العبيد

حيث ان جرار العبيد تحتوى على ثقب والذى يستعمل التعليق ، يكون على حافة الجره ، بينما في جرار حلف يكون في وسط الاناء ويستعمل للتعاير أيضا .

(٥) لكاسات العميقة الخمر :

لها حافة مقلوه ومدون منتفخ . أما قواعدها فهي صغيرة الحجم اذا ما قورنت لحجم البدن . عادة على هذا النوع من الكاسات نقوش غالبا ما تكون هندسية قوامها خطوط متوازيه تكون عادة داخل الاناء وتحت الفوهة مباشرة . ان هذا النوع من الفخار عثر عليه في فترة حلف في تل سنكور وليس في فترة العبيد في جنوب العراق وأرأس العميه (٦) على أى حال فان هذا النوع عثر عليه في تل تبه كوا الطبقة الثامنه عشر (٧) . لذا فان هذا النوع من الكاسات بدأت صناعتها في نهاية عصر حلف واستمرت الى بدايه عصر العبيد .

(٦) الكاسات الكبيره

ان قطر هذه الكاسات يقدر بحوالى ٣٠ سم وارتفاعها ٧ سم ، غالبا ما تكون هذه الكاسات مصبوغه بلون برتقالى أو احمر وعليها نقوش قوامها خطوط متموجه ان هذا النوع من الفخار عثر عليه في تل سنكور في طبقات حلف كذلك فانه عثر عليه في طبقات العبيد في تلي سنكور ب ، ح .

(٧) فخاريات بشكل زوارق

هناك نوعين من هذه الفخاريات الا اول قميرة كأنه قارب حقيقى مصغر . ان هذا النوع من القوارب اغلب الظن قد استعمل كأناء . أما النوع الاخر فانه طويل ومنتفخ قليلا ، على قسمه الخارجى خطوط متموجه أو متقاطعه أو مطلق بلون أحادى . ان هذا النوع من القوارب عثر عليه بكميات كبيرة في تلي سنكور ب ، ج ان وجود هذه القوارب يؤكد ان سكان حميرن استعملوا القوارب في حياتهم اليوميه .

(٨) الجرار .

ان ابدان هذه الجرار كرويه الشكل ومستديرة القواعد . عثرنا

أثناء التنقيب على جرار متوسطة وصغيرة الحجم لها اعناق قصيرة وطوق
حول أبدانها وعلى أقسامها العليا اربعة اذينات صغيرة •

٩) الكاسات

ان هذا النوع من الكاسات تتميز بفوهة عمودية وقاعدته مستديرة •
أما نقوشها فقوامها خطوط متوازية أو خطوط متموجة أو متقاطعة •
عثرنا على مجموعة كبيرة من هذا النوع وهي غالبا ما تكون سمج الصناعم •

١٠ - الادوات الحجرية

أثناء التنقيب عثرنا على مجموعة من الادوات الحجرية منها مثاقب ، مناجل ، ومقاشط
هذا واننا لم نعثر على رؤوس سهام لذا نعتقد بأن المستوطنين كانوا مزارعين أكثر مما
لو كانوا صيادين • أما وجود المثاقب بكثرة فنعتقد بأنها استعملت في صناعة الفخاريات
كذلك فقد عثرنا على مجارث وأوزان وقطع حجرية متمثلة بأواني وصحون •

١١ - المكتشفات الأخرى

عثرنا على أقراص مخازل مخرزة ، أقراص فخارية ومسامير فخارية معكوفة —•
لذا فنعتقد بأن الطبقة السفلى والرابعة من تل سنكور تعود الى نهاية عصر
حلف • هذا واننا لاحظنا بأن نقوش الفخاريات تصبح بسيطة في الطبقات العليا من التل
كذلك فاننا نعتقد جازفين بأن هناك استمرارية ما بين حضارة حلف والعبيد • ان هذه
الاستمرارية تجلت في نوعية الفخاريات والتي اكتشفت في طبقات حلف والعبيد ، كذلك فان
الفخاريات المكتشفة في تل سنكور تشبه تلك التي اكتشفت في تل رأس العمية والذي يبعد
٦٠ كم جنوب بغداد •

كذلك فان فخاريات حلف لها مثيلاتها في هضبة ايران •

Notes:

- 1) Mallowan, M. E. L., 1933, "Excavation at Tell Arpachiyah", *Iraq* Vol. XI
- 2) *ibid.*
- 3) *ibid.*
- 4) Tobler, A. J., 1950, *Excavation at Tepe Gawra*, Vol. II Philadelphia
- 5) Oates, J., 1968, "Prehistoric Investigations Near Mandali, Iraq", *Iraq* Vol. XXX
- 6) Stronach, D., 1961, "The Excavation at Ras Al-Amiya", *Iraq* Vol. XXIII-2
- 7) *ibid.* Note 4)

٧ تلول حمديات

ان تلول حمديات قليلة الارتفاع وتمتد بخط واحد باتجاه الجنوب الغربى (شكل ٢). مابين كانون الاول ١٩٧٨ و آذار ١٩٧٩ حفرنا خندق اختيارى واحد فى احدى هذه التلول . ومن خلال دراستنا للآثار المكتشفة فى هذا الخندق تبين أن هذه التلول تعود الى الفترة الفرثية/الساسانية . كذلك نعتقد بأن هذا المستوطن له علاقة بتلول خابارى .

البقايا البنائية

ان احدى الابنية المكتشفة تحتوى على غرفة مربعة تحوى عدد من الجرار عثر عليها قرب أحد الجدران (شكل ٥٨ رقم ١٠ لوح ٢٣ رقم ٢ ، ٣ ، ٤) . كذلك عثرنا على غرفتين صغيرتين أرضياتهما مبلطة بمادة تشبه الاسفلت على طبقة من الجص . كذلك عثرنا على أنابيب فخارية استعملت لتصريف المياه (لوح ٢٣ رقم ٦) . قد تكون هذه البناية مكان تخمير وما عثرنا عليه هو أوانى خزن كذلك عثرنا على فرن فخارى كبير يحوى على كورتين (شكل ٥٨ رقم ١ ولوح ٢٣ رقم ١) هذا وان جدران وأرضية الخرف الصغيرة عليها طبقة جصية .

ملتقطات صغيرة

عثرنا أثناء التنقيب على كسر فخارية مزججة بلون أزرق وعلى جرة كبيرة ذات مقابض والتي تعود الى الفترة الفرثية/الساسانية (شكل ٥٨ رقم ١١) يبلغ ارتفاع الجرار المذكورة أعلاه مترا واحدا أما قطر أبدانها فهو ٦٠ سم قواعدها مدببة ومثلية من الداخل بمادة تشبه الاسفلت (شكل ٥٨ رقم ١٠ ولوح ٢٣ رقم ٤) . أما المواد الاخرى المكتشفة فتشمل قطع من مسارج فخارية وكسر زجاجية وقطع من الحديد (شكل ٥٨ رقم ٢ - ٨ ولوح ٢٣ رقم ٥) ان الملتقطات التى عثر عليها فى الخندق الاختبارى تشبه الملتقطات التى جمعناها فى تل خابارى .

VI مجاميع حجرية من تل الكبة وصنكور

فى هذا التقرير سوف نعطي وصفا موجزا للمجاميع الحجرية والتي عثر عليها فى تل الكبة وتلول صنكور (١) . ان المجاميع الموضحة فى (لوح ١ - ٧) هى معمولة من حجر يشبه الصوان والحقيق والتي عادةً ^{تكون} أنصف شفافة ولونها بنى باهت ان هذا النوع

من الاحجار استعمل لعمل النصال الاعتيادية والنصال الصغيرة الحجم • فى تل صنكوب
 وفى الطبقتين الاولى والثانية وفى تل صنكور (ج) فى الطبقات الاولى (ا) والاولى (ب) والطبقة
 الثانية • هذا واننا لم نجد أى أثر لادوات معمولة من حجر الصوان • الا أن جميع طبقات
 تل الكبة قد عثرفلبيها على نصال اعتيادية أكثر من النصال الصغيرة الحجم بينمــــا
 اكتشفنا نصال صغيرة الحجم فى المجاميع الاربعة التى عثر عليها فى تل صنكور (ب) وتل
 صنكور (ج) (صنكور ب الطبقة الاولى) (صنكور ج الطبقة الاولى) (صنكور ج الطبقة الثانية)
 كذلك فان هناك تباين فى شكل الادوات الحجرية المكتشفة ما بين طبقة وأخرى • ان لوح
 رقم ٨ يحوى جدول يوضح هذا التباين فيما بين الطبقات السبعة المكتشفة وهى الطبقة
 الرابعة والسابعة • تل الكبة الطبقة الاولى (٢) والثانية فى تل صنكور ب والطبقة الاولى ا
 والاولى (ب) والطبقة الثانية فى تل صنكور • ان أوضح تباين فى هذا الجدول هو ما بين
 تل صنكور ب الطبقة الاولى التى تحمل الارقام (٨)، (٩) وتل الكبة الطبقة الرابعة والسابعة
 والتى تحمل الارقام (١)، (٢) •

وعلى ما يبدو وان المثاقب قد لعبت دورا مهما فى الطبقة الاولى فى تل صنكور •
 أما الطبقتين فى تل الكبة فانها امتازت بالنصال الحجرية • كذلك فقد عثرنا على مجموعة من
 المقاشط فى الطبقة الثانية فى تل صنكور ج • وأثناء تنقيباتنا فى تل صنكور ب عثرنا على
 آلة حجرية تعود الى العصر الحجري القديم فى المشبك VII – ١٣ (شكل ٥٦ رقم ١) •
 عثر على هذه الآلة فى تربة بنية باهته اللون التى اعتبرناها التربة العذراء فى تل
 صنكور ب • ان عمق التربة العذراء هذه تمتد الى عمق ٦٥م من سطح التل • ان هذه
 الآلة معمولة من حجر الصوان لونه رمادى باهت كما أن عددا كبيرا من هذه الآلة قد
 عثر عليها أثناء التنقيبات فى سد حميرين • ان حافات هذه الآلة مقشوفة قليلا كما
 نعتقد بأنها صناعة محلية • أما قفاها فانه مطلى بلون أبيض • انها آلة شظية لها رأس
 مدبب وعلى قفاها أيضا بقايا أيضا بقايا أربح تشاظيف، هذه البقايا لاهى قريبة من المركز
 ولا الى الانصاف المتوازية للآلة لذا نعتقد بان هذه الآلة لاتود الى الادوات الليفروازية •
 أما نهاية الآلة فانها خشنة ومحدبة • بعد دراستنا لها نعتقد جازمين بأنها تعود
 الى الفترة الموستيرية •

اذا كانت هذه الآلة تعود الى فترة العصر الحجري القديم الاوسط فانها أتت الى
 الموقع من مناطق بعيدة جدا وتعود الى فترة البلايستوين لذا فاننا سوف
 نعيد النظر فى تاريخ أو طبقه التربة العذراء على ضوء هذه الاكتشافات •

الملاحظات ان التعبير المستخدم في هذا التقرير ((مجاميع اوات حجريه يعنى الادوات المعموله من الحجر والتي عثر عليها في طبقات أثريه غير منقبسه سابقا أو معبوثا بها)؛ ! تشمل هذه الطبقات تل الكبه أما مجموعه تلون صنكور فيالامكان تصنيفها الى مجموعتين :-

- أ - أدوات حجرية معموله من اللب والشظايا وتكون هذه الادوات للاستعمال اليومي أو أدوات حريه .
ب - مواد حجرية

أ - الادوات الحجرية

اللب : عثرنا أثناء التنقيب على مجموعة لا بأس بها من الادوات الحجرية المعمولة من لب الحجاره .

الشظايا : شظايا قشرية تكون هذه كالملة

شظايا بعضها قشرى أن هذا النوع من الشظايا يكون له قشره أيضا شظايا ليست قشرية غالبا ما تكون هذه ذات ندب على سطوحها الخارجيه ونهاياتها .

النصال : ان هذه النصال عديمه القشره وان طولها يساوي صع عرضها أو اكثر في بعض الاحيان .

النصال الصغيرة : ان هذه النصال لا يتعدى عرضها عن ٢ سم وطولها لا يتعدى ٥ سم .

الشظايا ذات الاعناق :

غالبا ماتكون عبارة عن نصال ذات أعناق ان هذه الاعناق

- تستعمل للاضافات الاخرى

لب معاد الاستعمال

يكون هذا النوع من الادوات متصل من اللب بالاضافات الى الغاية من هذه الاضافات

- هي لتسهيل الاستعمال

تكون هذه فى العادة مهذبة بالنسبة للشظايا الاخرى وهى اما تكون صغيرة أو

كبيرة وناتجة من جراء عمل آلة ما •

VII عمل شكل مصغر للبناء الذى عشر عليه فى الطبقة السابعة فى تل الكبة •

١ - تسجيل البقايا البنائية •

ان هذا البناء الذى عشر عليه فى الطبقة السابعة فى تل الكبة يعتبر من أبرز الابنية التى عشرنا عليها أثناء التنقيب • ان الشكل العام لهذا البناء بيضوى ومعقود السقوف • وما أنه الوحيد من نوعه لذا قررنا عمل شكل مصغر له • لذا فقد قمنا بدراسات موسعة لكى نجعل الشكل المصغر للبناء مقارب كل القرب الى شكل البناء • ركز عملنا على أخذ القياسات المضبوطة والاكثار من رسم المخططات وسحب الصور الفوتوغرافية • خاصة وأننا نتعامل مع شكل له أبعاد ثلاثة لذا فباستطاعتنا القول بأن عملنا هذا بدأ فى الحقل •

١ - القياسات

الى جانب أخذ قياسات كافية لشكل البناء فاننا أخذنا بنظر الاعتبار نقطة فى وسط البناء تقع فى الجدار الدائرى الخامس ومن هذه النقطة بدأنا قراءة الزوايا حيث أصبحت زاوية الصفر هى اتجاه الشمال ومنها قسمت الى الزوايا الآتية ٢٥° ، ٤٥° ، ٩٠° ، ١٣٥° ، ١٨٠° ، ٢٠٥° ، ٢٢٥° ، ٢٤٧° ، ٢٧٠° ، ٣١٥° ، ٣٥١° • وفى كل اتجاه زاوية من هذه

الزوايا فاننا عملنا مقاطع ومن اختيارنا لهذه الزوايا استطاعنا التوصل الى قياس وجوه

الجدران (شكل ٦) • أما القياسات الطولية والعرضية للبناء فقد أخذت على بعد ١٠ أمتار •

من خلال هذه العملية توصلنا الى أقصى ارتفاع للبناء والمخطط الارضى (شكل ٥٩) •

أما بخصوص الارتفاعات فاننا أيضا بدأنا من نقطة الصفر التى حددت داخل الجدر

الدائرى الخامس • • مستعملين قياس ١ - ٢٠ •

٢ - الشكل الاولى (لوح ١٦ رقم ٤)

ان هذا الشكل يغطى قلب البناء وحتى الجدار الدائرى الرابع • ان هذا الجزء من البناء كان أصعب المراحل والاكثر تعقيدا • أما الجهة الجنوبية الغربية للجدار الدائرى الخامس التى تقرأ زاويتها ما بين (٢٧٠ - ١٨٠) فاننا لاحظنا فيما بين هاتين الزاويتين طلبات استعملنا فى هذه النقطة بالذات قياس ١ - ٤٠ •

أما المواد المستعملة في بناء هذا البناء المصغر فمكونة من خشب خفيف الوزن (بلزا). ان اختيارنا لهذا النوع من الخشب لانه سهل النقل اضافة الى مرونته • سمك كل لوحة من هذا الخشب لا تتعدى المليمين هذا واننا استعملنا أثناء عملنا للشكل المصغر خشب ذو سمك ٨ سم وعلى المخطط تم بناء هذا الشكل قياس ١ - ٤٠ أخذين بنظر الاعتبار جميع الاعتبارات والقياسات الهندسية والشكل العام للبناء الحقيقي • ودقة متناهية تم ربطاً، ألواح الخشب واحدة تلو الأخرى الى أن انتهى الشكل المصغر • كذلك فاننا أخذنا بنظر الاعتبار الجدران والتي ظهرت أثناء التنقيب •

استكمال الشكل المصغر (لوح ١ ، ٢ ، ٣) في عام ١٩٨٠ بدأنا العمل في الشكل المصغر

معتمدين على المخططات والصور التي سحيت أثناء التنقيب • ان دراستنا هذه استمرت سنتين كاملتين قبل الشروع في استكمال الشكل المصغر هذا • ولا يفوتنا أن نذكر (المنحة) المالية التي قدمتها مديرية الأبحاث العلمية في وزارة التربية اليابانية والتي هي بدورها قامت برفع تكاليف الشكل المصغر •

طبيعة الشكل المصغر

ان الشكل المصغر هذا هو نسخة طبق الأصل مصغرة من البناء والذي عثرنا عليه في تل الكبة الطبقة السابعة والتي أغرقته مياه السد •

طبيعة المواد المستخدمة في الشكل المصغر تتكون من المواد الآتية :-

أولاً - خشب معاكس حيث تم بناء الشكل المصغر قتلعة متبعين نفس طريقة خشب (بلزا) ثم ربط الخشب المعاكس بمواد كيميائية خاصة •

ثانياً - ان مواصفات الشكل المصغر يمكن أن نلخصها بالأمور التالية :

١ - قياس الشكل المصغر هو ١ - ٤٠

٢ - بدأنا بالعمل في الشكل المصغر من الجهة الشمالية - الجنوبية ومتجهين

الى الجهة الشرقية - الغربية أخذين بنظر الاعتبار جميع اللبن المكتشف (لوح ١٦ رقم ٢، ٣) •

٣ - ان الشكل المصغر الاولي قد عمل من خشب معاكس يقدر سمكه ٢ ملم بينما الشكل النهائي فقد عمل من مادة كيميائية تدعى أكرليك •

٤ - ان سطوح الشكل المصغر قد طليت بمواد حيث جاءت ألوانها مطابقة لوان اللبن

والترية (لوح ١٦ رقم ١) •

مراحل استكمال الشكل المصغر

- ١ - قلع الخشب المعاكس لكل مقطع عرض ثم رتبت كل قطعة من أسفل البناء الى أعلاه .
ثم رتبت هذه القطع ترتيبا جيدا قبل عمل القالب .
 - ٢ - لا عطاء فكرة واضحة عن شكل اللبن فقد استعملنا ألواح من مادة الاكرليك ثم عملنا لها فواصل لا تضار اللبن بمادة السليكون، كذلك فاننا استعملنا ألواح بلاستيكية والتي هي بالتدرج حلت محل ألواح خشب المعاكس .
 - ٣ - ان جميع الاجزاء بما فيها الاجزاء الخالية من اللبن قد ضبطت قياساتها قبل وضعها بالقالب .
 - ٤ - ان القالب نفسه قد قسم الى عدة أجزاء وذلك لتسهيل ضبط قياساته بالشكل !تمنجز .
 - ٥ - في بعض الاحيان استعملنا صفائح من مادة البوليستر وذلك لاظهار لطوش الجدران وخاصة في الاتجاهين الشمالي والجنوبي والشرقي والغربي .
 - ٦ - اضافة الى ما تقدم فاننا أضفنا الي الشكل المصغر أمكنة الحفر ، والفخاريات المكتشفة أثناء التنقيب .
- عمل الشكل المصغر من المواد الكيميائية .

بعد أن أتمنا جميع الخطوات اللازمة لبناء هذا الشكل المصغر فاننا وصلنا الى المرحلة النهائية والتي يمكن تلخيصها كالآتي :-

- ١ - ان كل جزء من الشكل المصغر قد عمل بواسطة قالب ومن مادة السليكون وان الشكل المصغر ذاته قد طلب بمادة السليكون بطبقة يتراوح سمكها من ٢ - ٣ ملم وفوق هذه الطبقة وضعنا طبقة أخرى الخرض منها تقوية الطبقة السفلى .
- ٢ - ان الجزء الداخلى لقالب السليكون قد طلى بمادة الاكرليك حتى وصل سمكه ٢ - ٣ ملم .
- ٣ - بعد هذه العملية فاننا أضفنا مادة أخرى وحدها رفعنا مادة السليكون والطلاء الخارجى .
- ٤ - ان جميع المقامل قد طليت بمادة كيمياوية أيضا .
- ٥ - قبل عملية طلي الشكل بثلاث ألوان وهى ألوان التربة الطبيعية والمتشكلة فى لون اللبن أيضا قمنا بدراسة وافية لكى تكون الالوان متجانسة مع اللبن الاصلى للبناء .
- ٦ - ان الشكل المصغر قد وضع داخل صندوق زجاجى مغطى بقماش أخضر اللون . ان عملنا هذا يعتبر كأنجح عملية توثيق للبناء الدائرى والذي عثر عليه فى الطبقة السابعة فى ثل الكبة . والذي غمرته مياه السد وسوف يكون صورة للأثر الباقي للذين لم تتح لهم الفرصة لمشاهدة البناء الاصلى فى سد حميرين .

VIII دراسة الهياكل العظمية البشرية المكتشفة في حميرين

تقديم

في خريف عام ١٩٧٧ قررنا الاشتراك في حملة أنقاذ آثار حوض حميرين لذا قرر أعضاء الهيئة المختصين بدراسة علم الاجناس جمع مجموعة كبيرة من الهياكل العظمية البشرية لغرض دراستها ، ان هذا الرأي ممزز من قبل الدكتور مؤيد سعيد بسيم المؤسسة العامة للآثار والتراث العراقية، وخلال اثلاث سنوات التي عملنا فيها هناك فاننا جمعنا ٥٨٤ هيكلًا . ان اشتراك أعضاء متخصصين في علم الاجناس في هيئتنا كان الغرض منه هو الوقوف على طبيعة الاجناس الذين سكنوا هذه المنطقة اضافة الى حضارتهم . حوض حميرين يشكل نقطة التقاء مابين شمال وجنوب مابين النهرين من جهة وجنوب ايران من جهة ثانية . لذا فاننا نعتقد بأن هناك تأثيرات قد أتت الى هذه المنطقة من المناطق المجاورة . وبما أن أقدم ما عثر عليه في حميرين يعود الى فترة سامراء والتي تعود الى ٦٠٠٠ أو ٧٠٠٠ سنة خلت ، فان دراستنا هذه سوف تكون ليست من الناحية الأثرية فحسب بل من الناحية العرقية أيضا . واذ ما توصلنا الى كيفية تجانس هؤلاء الاقوام فيما بينهم فاننا قد أضفنا بعدا جديدا للتخيرات الحضارية والتي طرأت على المنطقة . كذلك فإن دراستنا هذه قد تدلنا على حوية الاجناس الذين سكنوا والذين بدأوا الحضارة في بلاد وادي الرافدين .

ان دراستنا هذه تحتاج الى عدد كبير من الهياكل واللازم تحليلها على أي حال فان هناك دراسة الهياكل العظمية والتي تعود الى الفترة السلوقية والتي قام بها هامى فى عام (١٨٨٤)، ودراسة قبور موقع كيش A والتي قام بدراستها بوكستن فى عام (١٩٢٤) ودراسة هياكل الحبيد والتي قام بدراستها كيث عام (١٩٦٧) ، ودراسة هياكل يوركان والتي قام بها ايرنر عام (١٩٦٧) والهياكل المكتشفة فى نجر والتي قام بدراستها سويندلر عام (١٩٥٦) .

الا أن هذه الدراسات لم تتوصل الي نتيجة علمية حول ماهية الشعوب الذين سكنوا بلاد وادي الرافدين والتطورات الحضارية التي طرأت على هذه المنطقة. لذا فان علينا الآن جمع أكبر عدد ممكن من الهياكل البشرية ومن ثم القيام بدراسات وافية لهما . كذلك فاننا نقوم بدراسة علم تجانس الاجناس هذه منذ أقدم العصور .

لقد اقترح سويندلر عام (١٩٥٦) بأن هناك تجانس سكانى مابين وادي نهر الفرات ووادي نهر دجلة . ان هذا الرأي لم يعزز بمد لولات كافية الى حد الآن لذا فمن الافضل الافضل اعادة النظر فى هذا الرأي لحين توفر المدلولات الكافية .

جميع المواد ومعالجتها •

١ - جمع المواد ونقلها : - ان جميع الطول والتي قمنا بدراسة الهياكل العظمية البشرية المكتشفة بها حتى ثمانية عشر موقعا ثلاثة عشر منها تقع في حوض حميرين أربعة من هؤلاء قد نقت من قبل البعثة اليابانية كتل الكبة وسكور ا ، ب ، ج ، ثلاثة من منطقة حديثة ، ثلاثة من آشور وتل في بابل • ان مجموع الهياكل والتي تمت دراستها حتى ٥٨٤ هيكلًا •

ان الجدول رقم (٩) يوضح عدد المواد المكتشفة في كل موقع ثلثين المادة التي جمعت قد نقلت الى اليابان للدراسة وقد حفظت في قسم علم الاجناس والبيئة البشرية في كلية العلوم الانسانية في جامعة أوساكا • هذا وقد تمت صيانته ومعالجة ٣٦١ جمجمه والجدول رقم (١٠) المنشور في هذا التقرير يبين مواقع هذه الجماجم وفتراتها وعمر كل واحد منهن وجنسه •

لقد تأخر وصول هذه الجماجم الى اليابان وذلك بسبب الاجراءات الصحية التي تتخذها الحكومة اليابانية اتجاه الامراض السارية والمعدية. اضافة الى بعض الامور الاخرى التي حالت دون الوصول لهذه الجماجم في وقتها المحدد كالغلق ميناء بازلان الياباني • لذا فاننا قد قد منا طلبا الى وزارة الزراعة اليابانية قسم الغابات والثروة السمكية لإدخال التربة مع الهياكل العظمية • وبعد هذه الاجراءات تم نقل الهياكل والتربة التي تغطيها • لقد تم ازالة هذه التربة بعد وضعها في محاليل بدرجة حرارة ١٢٠ م لمدة نصف ساعة ، اما التربة العالقة بعد اجراء هذا الخسيل قد ازيلت بواسطة غاز أوكسيد الاثيلون ، بعد هذه العملية أمكننا الحمل على هذه الهياكل داخل اليابان •

صيانة وتنظيف العظام : - لم نتمكن من تنظيف العظام البشرية بواسطة الماء خشيها ضياع حبوب اللقاح والتي قد تكون عالقة فيها أو عند غسلها بالماء فانها قد تتفتت لذا استعملنا فرشاة هوائية وغاز النايتروجين لتنظيف هذه العظام •

وما ان الهياكل العظمية التي تعود الى الفترات الحضارية القديمة عند اكتشافها تكون بحالة هشّة لذا فاننا عمدنا الى تقوية هذه الهياكل قبل وضعها في الصناديق المخصصة ، ان هذه الحالة الهشّة للهياكل ناتج عن كثافة الملح في تربة وادي

الرافدين ، تقوية هذه العظام قد تمت برشها بمحلول أكريليك بنسبه ١٠ - ٢٠ % اضافة الي بارارويد B-٧٢ بعد ما تركناها تجف جفاف طبيعي •

طبيعته الجماجم البشرية المكتشفة في حميرين :-

ان ثلث الجماجم المكتشفة

في حميرين قد تم تنقيفها وضيانتها * تعود هذه الجماجم الى ثلاثة فترات حضارية هي ايبس لارسا ، البابلى القديم ، والفترتين العرثيه والاسلاميه في هذا القسم فاننا ذكرنا أشكال هذه الجماجم لكل فترة من الفترات مع مناقشة مبسطه لكل مجموعة من هذه المجموعات اضافة الى ذلك فاننا قد اضفنا القياسات لكل جمجمه ، هذا وقد تم تحليل جماجم البالغين فقط بلغ عدد ها ٥٨ جمجمه ثلاثة عشر منها تعود الى فترة ايبس - لارسا ، والعهد البابلى القديم (تل سليمة (١٠) ، تل سنكور أ (١) - تل أبو قاسم (٣) *

ثلاثة جماجم تعود الى العصر الفرثي ، اثنان منهما تم العثور عليهما في تل الخابرى وواحد منها في تل سنكور (أ) * اثنان وأربعون جمجمه تعود الى العصر الاسلامي ، ثمانية عشر منها من العصور عليها في تل الكبه و ٢٤ في تل سنكور ، لقد تم معرفة جنس هذه الجماجم بواسطة الدراسات لكل جمجمه آخذين بنظر الاعتبار الفرق بين جمجمه الانثى وجمجمه الذكر *

جماجم من عصرى ايبس - لارسا ، والعهد البابلى القديم

ان طبيعته هذه الجماجم

تكون طويلة (انظر لوح ٢٤ رقم (١) وجدول رقم (٢) +

ان أقصى طول لهذه الجماجم قد بلغ ٩ر ١٩٠ ملم بينما أقصى عرض لهذه

الجماجم ٧ و ١٣٥ ملم لذا فان هذه الجماجم تعتبر عاليه * وما ان

معدل ارتفاع هذه الجماجم قد بلغ ٧ر ١٣٦ ملم ومعدل عرضها قد بلغ

٦ر ١٠٣ ملم فانها تعتبر من نوع الاكروكرانك ، أما مقدمات هذه الجماجم

فان حدودها ضيقة ومرتفعه وطول ارتفاعها هو ٣ر ٧١ ملم لذا فانها أورشوكرانك

(مستقيمه) * وعلى العموم يمكن القول بان جماجم فترتى ايبس لارسا والعهد

البابلى القديم طويلة وضيقة هذا وقد تم تصنيفها في الجدول رقم (١٢)

جماجم من العصر البارثى :

كما هو مذكور أعلاه فقد تم تحليل ثلاثة

جماجم فقط تعود الى هذه الفترة ان جدول رقم (١١) يبين معدل قياسات

هذه الجماجم. معدل طول وعرض كل واحد منها يعتبر قصير وضييق ١٨١ر ملم

— ٧ ر ١٣٠ مليم ، أما معدل ارتفاعها العام فهو متوسط نسبيا ، شكلها العام مستطيل نسبيا ، ان في ارسـت هذه الجماجم قد دلت على ان شكلها العام مستطيل وأنها بصورة عامة تشبه الجماجم المكتشفة في فترتي ايسـ لارسا والعصر البابلي القديم ولكنها أصغر حجما ، وهذا ناتج عن صغر ارتفاع الوجه • انظر لوح (٢٤ رقم ٢) •
جماجم من العصر الاسلامي :

هناك اختلافات ما بين الجماجم المكتشفة في تل الكبة وتل سنكور • لذا فان هاتين المجموعتين قد درستـا كل على حده •
جماجم تل الكبة :

ان أقصى عرض واقصى طول لهذه الجماجم قد بلغ ١٨٣ر٥ ملـم و — ر ١٣٨ ملـم أما معدل ارتفاعها فهو ١٣٧ر٨ ملـم ومعدل ارتفاع واجهة هذه الجماجم فهو ١١٨ر٨ ملـم والذي يعتبر نسبيا عالى ، بصورة عامه فان جماجم تل الكبة طويلة وضيقة نسبيا (لوح ٢٤ رقم ٣) أما الجماجم المكتشفة في تل سنكور (أ) فانها أعرض ولوانها تعود الى نفس الفترة كذلك فانها تتميز بانها دائرية الرأس انظر ((شكل ٢٤ — رقم ٤)) •
التغيرات التاريخيه التي طرأت على الجماجم المكتشفة في حميرين :—

وكما هو مذكور آنفا فان جماجم كل فترة من الفترات التاريخيه تتميز عن غيرها • وان شكل ٦٠ يبين توزيع وقياسات كل جمجمه من هذه الجماجم المكتشفه • ان قياسات فترتي ايسـ لارسا والعهد البابلي القديم تبين بأن جماجمها تتميز بشكل طويل وضيقة • ان اكثر من نصف هذه الجماجم يمكن ان يقال عنها من نوع (الهايبرد وليكرونك) • أما جماجم العصر الفرش فانها تشبه الى حد ما جماجم فترتي ايسـ لارسا والعهد البابلي القديم • وجماجم العصر الاسلامي فان معظمها تتميز بانها قصيرة وضيقة، أما جماجم الفترة الاسلاميه والتي أكتشفت في تل سنكور فانها تتميز بكونها دائرية الرأس •
ان التغيرات الحاصله على جماجم الفترات الانفه الذكر يمكن تلخيصها كالآتى :
ان جماجم بدايه الالف الثانى ق • م تتميز بكونها طويله ولكنها تغيرت

تدرجيا في العصر الاسلامي حيث اصبحت مستديرة الرأس وضيقة الوجه. ان اسباب هذا التغيير غير واضحه ولكننا نعتقد بان هناك موجه جديده اتت الى المنطقه وليس تخيرا عرфия قد طرأ على سكان المنطقه

مقارنه أشكال الجماجم المكتشفة في حميرن مع الجماجم المكتشفة في مناطق

اخري من وادي الرافدين :-

في الشرح أدناه سنقوم بمقارنه للجماجم المكتشفة في حميرن مع تلك التي عثر عليها في مناطق اخري من بلاد وادي الرافدين. ففي حميرن ظهر تغيير في أشكال الجماجم في العصر الاسلامي لذا فاننا سوف نقارن كل واحده على حده .

١ - أشكال جماجم حميرن ما قبل الاسلام :-

ان الجدول رقم (٦١) يبين

توزيع وقياسات الجماجم المكتشفة في حميرن والتي تعود الى ما قبل العصر الاسلامي اضافة الى ذلك فان الجدول يبين الدراسات التي قام بها كل من (كيت) لدراسة جماجم عصر العبيد في عام (١٩٢٧) و (بايستن) لدراسه قبور كيشن في عام (١٩٣١) و (سويندلر) لدراسه جماجم نفر سلوفيا في عام (١٩٥٦) و (هيرنش) لدراسة يورغان تبه في (١٩٣٩).

كذلك فان الجدول رقم (٦١) يبين فترة كيش A (من ٢٨٠٠ - ٢٥٠٠) ق م (كيش V V من ٨٠٠ - ٥٠٠ ق م) وهوركان في ٣٠٠ - ٤٠٠ ميلاديه) ان طبيعه جماجم هذه الفترات تعود الى الشكل المسمى فيزوكرونك وبراكياكرونك ولكن على العموم فان شكل هذه الجماجم يتركز في شكل دايلوكرانك أما اشكال جماجم حميرن فانها تشبه الجماجم المكتشفة في اور والتي يقارب تاريخها عصرى ايسن ولارسا والعهد البابلي القديم .

ان معدل القياسات للجماجم الاولي ونحو ٦٩ ملم بينما معدل الجماجم الثانيه هو ٩ ر ٦٩ ملم وكلاهما يشبه جماجم العبيد (٤٠٠٠ ق م) وعلى العموم فان جماجم حميرن والتي تعود الى ما قبل العصر الاسلامي شبيهه بتلك التي عثر عليها في جنوب العراق والتي تعود لنفس الفترة (لوح رقم ١٤) .

اشكال جماجم العصر الاسلامي في بلاد وادي الرافدين :-

ان أول من

قام بدراسة جماجم هذا العصر هو (سويندلر) فى عام (١٩٥٦) واننا قد حصلنا على بعض الجماجم التى تعود الى العصر ذاته من موقع آشور • جدول (٦٢) يوضح توزيع وقياسات الجماجم المكتشفة فى نفر وحميرين وآشور وكما بين (سويندلر) فان جماجم نفر تشابه الجماجم التى تعود الى قبل هذا العصر علما بان الجماجم فى تل الكبه تشبه الى حد كبير الجماجم المكتشفة فى نقر اكثر منها لاشور وتل سنكور (أ) كذلك فاننا توصلنا الى النتيجة التالية - وهى ان اشكال جماجم سنكور (أ) تنتشر اوسع من الجماجم المكتشفة فى تل الكبه والتى تعود لنفس الفترة لذا فاننا نعتقد بأن الجماجم ذات الروءوس المستديرة كانت اوسع انتشارا فى شمال ما بين النهرين فى نفس العصر •

وكما هو مذكور فى بدايه هذا التقرير فان هناك دراسات قليلة حول التطور الحرفى فى بلاد ما بين النهرين وان هذه الدراسات لم تكتمل لحد الان اضافة الى ذلك فان دراستنا لم تشمل جميع الهياكل المكتشفة فى حوض حميرين وان الدراسات المستقبلية سوف تكون مفيدة بالنسبة لهذا المضمار •

الخاتمة

فى هذا التقرير حاولنا دراسة الجماجم المكتشفة فى حوض حميرين والجماجم التى حصلنا عليها من بعض المواقع الاخرى فى بلاد ما بين النهرين معتمدين على القياسات المترية والغير مترية اضافة الى عملية الاحصاء • فى هذا التقرير اعطينا قياسات الجماجم فقط وتجنبنا المشاكل الحرفية لهذه الجماجم الا اننا توصلنا الى نتيجة مفادها بان سكان بلاد ما بين النهرين ينتمون الى سكان حوض البحر الابيض المتوسط (كروجيمان ١٩٤٠ وابكيرا ٦٠ ، ٦٨) •

ان جماجم تل سنكور أ تحوى على مجاميع مختلفة بعضها عريض أورفيح أو متوسط كذلك فان الدراسات التى قام بها كل من مستر ميكوشى من قسم العلوم فى جامعه أوساكا قد اثبتت بان اسنان جماجم سنكور (أ) تشبه تقريبا أسنان فترة جومون فى اليابان •

هذا بالإضافة الى ذلك فاننا عثرنا في تل سنكوراً على مجمله موشمه تعود الى فترة العبيد ولكنه مع الاسف الشديد لم نستطيع أخذ قياساتها بالضبط الا انه على ما يبدو تعود الى نفس الجماجم المكتشفة في مناطق أخرى من بلاد الرافدين وتعود الى نفس الفترة .

طبقاً للمدلولات لست وعشرون قبراً التي تعود للأطفال وهي من فترة العبيد والتي عثر عليها في تل عبادة فان ٥٠ ٪ منها تعود للأطفال يتراوح عمرهم ٦ شهور و ٣٥ ٪ منها تعود لاطفال يتراوح أعمارهم سنة واحدة و ١٥ ٪ منها لاطفال يتراوح أعمارهم السنتين .

ان قسماً من هذا التقرير قد قدم في الندوة العالمية الثانية حول آشور وبابل وحميرين والتي عقدت من قبل المؤسسة العامة للآثار والتراث في بغداد في (تشرين أول عام ١٩٧٩) كذلك فانها قدمت في الندوة الثانية (تشرين الثاني ١٩٨١) لذا فاننا قد اجرينا بعض التعديل على هذا التقرير .

في هذا التقرير نود ان نعبر عن خالص شكرنا وتقديرنا الى كثير من الاشخاص والمعاهد والذين ساعدوا أو عمدوا في تقديم الحون لنا أثناء التنقيب وأثناء كتابه هذه التقارير ونخص بالذكر الاستاذ مانتخرفي قسم العلوم الانسانية جامعه أوساكا والدكتور مؤيد سعيد بسيم رئيس المؤسسة العامة للآثار والتراث وذلك للمساعدات القيمة التي قدمها لنا طيله مكوثنا وعملنا في العراق كذلك نود ان نشكر الدكتور بينام ابو الصوف المشرف والدكتور طارق مظلوم مدير تنقيبات آشور والسيد صباح جاسم مدير تنقيبات حديشه والسيد علي مهدي مدير مشروع بابل كذلك فاننا نشكر الاستاذ كندا في قسم التشريح في كلية هيجو الطبيه والاستاذ اشيداً وذلك لجمعه العظام البشرية والاستاذ اكيرا من قسم العلوم في جامعه كينو والذين يعتبر أحد الاساتذه الكبار في علم الاجناس كذلك فاننا نذكر الدكتور توسوي مدير معهد أبحاث نارالوطن والممتلكات الثقافية) والذي قدم لنا المساعدات الكبيرة عند دراستنا لهياكل حميرين كذلك فاننا نتوجه بالشكر الجزيل الى فرع شركة ميتسويشي للمساعدات القيمة التي نقلناها من بغداد الى اليابان كذلك لا يفوتنا أن نذكر الاستاذ كودا مدير قسم العلوم الانسانية في جامعه أوساكا، والاستاذ نشيدا من نفس القسم والذي ساعدتنا على حفظ هذه الهياكل .

فقد قام السيد كادابانا من كلية طب الاسنان في جامعة أوساكا بزيارتنا في عام (١٩٧٩) وقيامه بدراسه واقية لهذا المزار كذلك فاننا نشكر الاستاذ ماهسى والسيد تكاتوسى من قسم التشريح في جامعه أوساكا للمساعدات التى قدمها لنا اثناء دراستنا هذه. ولا يفوتنا ان نقدم جزيل شُركنا الى السيد ماسودا رئيس قسم العلوم في جامعة كوكوشيكان وجميع أعضاء الهيئه التدريسيه في معهد الدراسات الحضارية للعراق القديم وأعضاء قسم البيولوجى والانثروبولى والبيئه في جامعه كوكوشيكان *

References

- Buxton, D., and Rice, T., 1931, "Report on the human remains found at Kish". *J. Roy. Anthropol. Inst.* LXI: pp. 57-119.
- Ehrich, R., 1939 "Late cemetery carnia." *Nuzi*. Vol. I: pp. 570-589, Cambridge, Mass.
- Ikeda, J., 1960 "Contribution to the Anthopology to Iraq." *Acta Medica et Biologica*. Vol. VIII: pp. 109-129.
- Ikeda, J., 1968 "Human Remains from Tombs in Dailaman, Northern Iran." *Anthropological Studies of West Asia*. 9: 1-35. The Institute of Oriental Culture, Tokyo
- Ishida, H., 1976 Human Remains at Al-Tar Hill A: Osteological Study. *Al-Tar*, I, *Excavation in Iraq, 1971-1974*, Kokushikan University, Tokyo.
- Ishida, H., Wada, Y., Kanda, S., Fujii, H., in press "A preliminary report on the human remains in the Hamrin basin. Iraq." *Sumer*, Baghdad,
- Keith, A., 1927 Report on the human remains. *Ur Excavation* Vol. I (Al-Ubaid): pp. 214-240, Oxford
- Krogman, M., 1940 "The people of early Iran and their ethnic affiliations". *Amer. J. Physical Anthropol.* XXVI: pp. 269-308.
- Swindler, D., 1956 *A study of the cranial and skeletal material excavated at Nippur*. Museum Monograph, The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

XII خاتمة عامة

خلال عملنا في حوض حميرين والذي استمر لسنتين ونصف السنة حصلنا على نتائج يمكن القول بانها ايجابية • ولولا مساعدة المؤسسة العامة للآثار والتراث العراقية والمعاهد والاشخاص والبعثات الاجنبية لموتوصلنا الى هذه النتائج الاتية والتي هي عبارة عن ملخص لنتائج تنقيباتنا والتي نظمت حسب التسلسل الحضارى •

عثرنا في تل سنكور (١٠) على حضارة سامراء ويعتبر هذا أقدم اكتشاف في حوض حميرين • ان البناية المكتشفة في هذا التل والتي تعود الى عصر سامراء كانت محاطة بسور سميك يشبه ما عثر عليه في تل الصوان (١) والذي يعود الى العصر ذاته أما مخدات البيوت المكتشفة في هذا التل فانها تشبه مخططات البيوت التي عثر عليها في جوخه مامي (٢) كذلك فان الفخاريات المكتشفة والتي تعود الي الفترة الانتقالية في جوخه مامي (٣) •

هذا فقد عثرنا في هذا التل على حضارة العبيد والتي تبعت حضارة سامراء كذلك فقد عثر على هذه الحضارة في تل سنكور (ب) وتل حسان (٤) والذي نقبت فيه البعثة الايطالية في تل سنكور (ب) عثرنا على طبقتين تعود الى فترة حلف و على بعض الابنية بينما لم نعثر في تل سنكور أسوى على بعض الفخاريات والا فران والتي وجدناها فوق ابنية عصر سامراء (شكل ٢٦) اضافة الى ذلك فاننا عثرنا في تل سنكور (ب) الطبقة الثانية على فخاريات حلف والعبيد متداخلة فيما بينها وان البناية رقم (٢) المكتشفة في هذه الطبقة تشبه أولئك التي عثر عليها في خيط قاسم (٥) تل عبادة (٦) تبة كورا (٧) والتي تعود الى فترة العبيد الا ان البناية المكتشفة في سنكور (ب) تختلف قليلا عن هذه البنائيات وذلك من ناحية مدخلها • كذلك فاننا عثرنا في الحابقة الثالثة من تل سنكور (ب) على ارضيات مبلطة بالجص تشبه البناية الثانية في الطبقة الثانية قد يوحى لنا هذا الاكتشاف بان هذه البناية قد بدأت في عصر حلف ، هذا ولا يفوتنا ان نذكر بأن أرضية البناية تحوى على مستويين اعدت مرتين لذا فاننا نعتقد غير جازمين بان المستوى الاسفل من البناية يعود الى عصر حلف ، بينما المستوى أى (الثانى) فانه يعود الى فترة العبيد •

اضافة الى ماتقدم فاننا عثرنا في تل سنكور الثلاثة على قبور

ومستوطنات صغيرة وان المـواد المكتشفة فى هـذـه المستوطنات الصغيرة تشبه الى حد ما ما هو مكتشف فى رأس العمية والتي تعود الى بداية عصر حلف • الا اننا لم نعثر على مواد كثيرة بالمعنى الحقيقى تعود الى فترة حلف • اما الطبقة السابعة من تل الكبة فانها تعود الى عصر جمدة نصر وان البنية الدائرية المكتشفة فى هذه الطبقة فانها تعتبر من الابنية الاكثر تمييزا الا أننا الا الآن لم نعرف ماهية هذه البنية •

اضافة الى ذلك فان تل مظهر (٨) وتل رزق (٩) وتل سليمة (١٠) قد

اكتشف فيها ابنية تشبه مخططاتها هذه البنية الا انها تتفاوت فى تواريخها والتي ترجع الى عصر فجر السلالات لذا فنعتقد بان البنية المكتشفة فى الطبقة السادسة من تل الكبة هى اقدم من البنيات المكتشفة فى التلوان الا نفة الذكر الا انها استعملت فى عصور لاحقة بعصر جمدة نصر • ان هذه البنيات جميعها تتشابه بكونها محاطة باسوار دائرية الشكل رقم ١١ (شكل ٦٤) •

بعد دراستنا لهذه البنية المكتشفة فى تل الكبة والتي استعملت فى فترات لاحقة نعتقد بانها كانت بمثابة قلعة دفاعية محاطة بخندق واسوار دفاعية لها أكثر من مدخل واحد • ان هذا النوع من البناء قد اكتشف أيضا فى تل براك (١٢) والمعبد المظلى فى تل العقيسر (١٣) والبنى على شكل حرف D فمن المحتمل بان كثير من المعابد الغير منتظمة بدأت فى الظهور واستمرت الى فترة جمدة نصر والتي أصبح حجمها فى هذه الفترة اكبر من الفترة السابقة (١٤) فى الوقت الحاضر ليس لدينا الدلائل الكافية التى تؤهلنا القول بان البناء المكتشف فى الطبقة السابعة (ب) هو بناء المعبد (شكل ٦٤) •

آما فى الطبقة اللاحقة (٧ د) فانه بنى حول هذا البناء سور سميك ومتين

مع طلعات حيث أصبح شكله العام يشبه المعبد البيضوى فى خفاجه (١٥) ان الغايه من بناء هذا السور هو حماية الجزء المركزى (للمعبد) لذا فان شكله العام قد أصبح بيضوى ومحاط بسور دائرى ومن خلال الطبقة السابعة (ب) فان السور الخارجى قد قد دفن وحل استعماله وشيد محله جدار آخر دفاعى يحيط بالمستوطن • فى داخل هذا السور شيدت

غرف مربعة الشكل بعضها تحوى على مزيج والبعض الاخر استعمل كمسكن لذا فاننا نعتقد بان هذا المستوطن الكبير قد تحول الى مكان دينى ودينى فى ان واحد • وممرور الزمن فقد أضيفت الى هذا السور اضافات الى ان أصبح عرضة عشرة أمتار أو اكثر •

ولو أن هذا البناء الدائرى المكتشف كان خالى من أى أبنية دفاعية الا انه أصبح مركز دفاعى فى الفترات اللاحقة وهذا ناتج اما عن غزو خارجى أو تغيير اجتماعى بدليل عثرنا على آثار حرق فى هذه الطبقة (السابعه) • إضافة الى ذلك فاننا عثرنا فى الطبقة (٧ ب) على عظام بشرية محترقة وعلى حفرة تحوى على ستة عشر ميلا عظيما مكسسا واحد فوق الاخر ٢ بعد هذا التخريب فان البناء على ما يبدو وقد هجرت فى نهاية عصر جمده نصر •

من خلال دراستنا الفخاريات المكتشفة فى تل الكبة فاننا لاحظنا تغييرا مستمر وليس منقطعا ما بين عصر جمده نصر وعصر فجر السلالات الاول وان نوعيه هذا الفخار شبيهه كل الشبه بفخاريات المواقع الاثرية المكتشفه فى دىالى (١٦) كذلك لاحظنا بان عصر فجر السلالات الاول خالى من النصب والتى لاحظناها فى عصر جمده نصر • إضافة الى ذلك فانهم لم يستخدموا الابنية الدائرية وانما استعاضوا عنها بأبنية مربعة الشكل لذا فان الابنية الدائرية قد توقفت استعمالها بعد عصر جمده نصر •

أما بالنسبة الى الفخاريات الملونه فانها استمرت بالاستعمال وبلغت ذروتها فى عصر جمده نصر فى تل الكبة • كذلك فاننا لم نعثر على مخلفات حضاريه كثيرة فى الطبقات العليا من تل الكبة والتى تعود الى عصر فجر السلالات •

اما بالنسبة الى الخنجر البرونزى والذى أكتشف فى الطبقة (٧ أ) (شكل ٢٢، رقم ١٤

فبعد تحليلنا لمعدنه وجدنا انه شبيه بالمعادن المكتشفة فى حوض حميرين

وتعود الى عصر فجر السلالات الاول هى كالاتى تل مظهر ، تل زرق ، تل ابوقاسم ، تل سليمه ، تل أحمد هاشو ، تل صبره ، تل عباده ، تل حلاوة ، تل خيوط قاسم ، لم يعثر على ابيه دائرية الا فى تل مظهر وتل سليمه وتل رزاق ولكن عثرنا على أبنية مربعة تعود الى نفس الفترة فى التل الاخرى كتل ابوقاسم مثلا (١٧) •

ان الاثار المكتشفة فى تل الكبة والتى تعود الى عصر فجر السلالات الثانى

غير كافيه للتوصل الى نتائج ايجابية/لذا يمكننا القول بان حوض حميرين يتباين مع حوض نهر دىالى وجنوب بلاد مابين النهرين حيث عثر فيهما على مواقع ومخلفات أثرية كثيرة تعود الى عصر فجر السلالات الاو والثانى والثالث. وما اننا عثرنا على مخلفات اثاره كثيرة تعود الى عصر فجر السلالات الاو في حوض حميرين ولم نعثر على مخلفات حضارية تعود الى عصر لاحق من عصر فجر السلالات فاننا نعتقد بان عصر فجر السلالات الاو قد استمر ولفترة طويلة في حوض حميرين، وما أن المخلفات الاثرية والتي عثر عليها في داخل القبور وعلى حافة تل الكبة تشبه بمضمونها الاثار المكتشفة في تل مظهر (١٨) لذا فانهما يعودان الى نفس الفترة *

ان القبور المكتشفة في تل صنكور (أ) ، تل سنكور (ب) تعود الى الالف الثانى قبل الميلاد ولم نعثر على اى بقايا حضارية تعود الى هذه الفترة ومن خلال متابعتنا للتنقيبات التي خلال نذنين التلين توصلنا بأن سكان هيسن هذه الفترة كانوا يدفنون موتاهم تحت أرضيات ابنيتم وتظهرت هذه الحالة أيضا في تل (العبارة) (١٩) والذي نقت فيه البعثه الاستراليه والذي يبعد ٢ كم شمال تل الكبة * أما البناء المكتشف في الطبقة الثانية من تل الكبة والذي كان محاطا بسور فاننا نعتقد بأنه كان قلعة دفاعية يشبه ما هو مكتشف في تل أبو السعود (٢٠) كذلك فان البناء المكتشف في تل الكبة يشبه ما هو مكتشف في تل توشجان (٢١) وسوسة (٢٢) وبازركاده في ايران (٢٣) * أما تلول حميدات والتي تنتشر الى بعد ١ كم في الاتجاه من الشرق الى الغرب و١ كم من الشمال الى الجنوب وحتى تل الخابرن والذي يقع غرب تل الكبة حيث عثرنا فيه على مخلفات حضارية تعود الى العصر الفرثى والساساني اضافة الى ما تقدم فاننا عثرنا على أفران لشوى الفخار وبقايا أماكن تخمير تقح في الجيمة الجنوبية من التل * كذلك فاننا عثرنا على قبور في تل الكبة وفي صنكور أ ، ب تعود الى العصرين الفرثى والساساني *

من خلال دراستنا للمخلفات الاثرية المكتشفة استطعنا الوقوف على مخلفات حضارة سامراء وماتلاها الى حد العصر الفرثى والساساني (شكل ٦٥) وبالرغم من أننا لم نعثر على بقايا حضارية بالمعنى الحقيقي تعود الى عصر الوركاء والالف الثاني قبل الميلاد ولكننا عثرنا على مخلفات بسيطة أدلتنا للقول بأن هاتين الحضارتين كانتا فعلا كائنة في حوض حميرين *

كذلك فان دراستنا لمخلفات حميرين قد وصلتنا الى النتائج التالية :-

- أ- ان سكان حوض حميرين كانوا مزارعين او مبدجنى حيوانات وصيادين *
- ب- ان البناء الدائرى المكتشف فى الطبقة ٧ من تل الكبة يعتبر من الابنية الفريدة من نوعها لذا فاننا قد عملنا شكلا مصغرا لها عرض فى المؤسسة العامة للآثار والتراث بمساعدة قسم الأبحاث العلمية فى وزارة التربية اليابانية *
- ج- بما ان الدراسات لحلم الاجناس تتطلب جمع الهياكل العظمية البشرية كشييرة العدد فاننا جمعنا كمية لا بأس بها من هذه العظام من حوض حميرين وبابل وأشور وبغداد وفى الآن تحت البحث * الا ان الدراسات الاولية لهذه الهياكل قد اعتبرت نتائج لا بأس بها سوف تنشر فى تقارير تفصيلية فى القريب العاجل * فى الوقت الحاضر قد تمعد بعثتنا على دراسة صناعة اللين القديم المكتشف فى تل الكبة الطبقة السابعة ودراسة المتفحمت للمواد العضوية اضافة الى دراستنا للفخاريات الملونة وتحليلات كربون ١٤ *

الا أن هذا التقرير يعتبر بمثابة تقرير أولى وأن تقريرنا المفصل سوف ينشر بحمد الانتهاء منه وفى النهاية نود أن نشكر الزوات التالية أسماءهم أدناه :-

د * بومر مدير المعهد الأثرى الألمانى فى بغداد والاستاذ نيكالاوس بومس جيت مدير المدرسة الأثرية البريطانية فى بغداد للمساعدة القيمة التى لاقيناها من لديهم أثناء مناقشاتنا لتنقييات حميرين

كذلك نود أن نعبر عن خالص امتناننا الى صاحب السمو الامير توكاهيتوميكاسا الذى شجعنا كثيرا على عمل شكل مصغر للبناء والذى عثرنا عليه فى تل الكبة الطبقة السابعة * ان سمو الامير كما هو معلوم يعتبر من المختصين بعلم آثار الشرق القديم عامة وآثار ما بين النهرين خاصة لذا فاننا استفدنا كثيرا من النصائح التى وجهها لنا أثناء زيارته لحوض حميرين عامة ولتنقييات البعثة اليابانية بصورة خاصة *

عند اكتشافنا لهذا البناء فى عام ١٩٧٨ أخبرنا الحكومة اليابانية بهذا الاكتشاف العظيم وعندما سمح الامير ميكاسا بهذا الخبر ألقى بمناسبة رأس السنة (١٩٧٩) شعرا عنوانه " التل " وقد ذكر فى قصيدته اكتشافنا هذا حيث قال ((خيالى يسرح فوق تلول العراق حيث مرت عليها آلاف السنين وهناك ما بين هذه التلال عثر على معبد دائرى قائم)) ان خبرة الامير ميكاسا بأثار وادى الرافدين تعود الى سنوات خلت وذلك أثناء ترأسة لتنقييات تلول الثلاثات التى بدأت عام ١٩٥٧ لذا فان الزيارة

التي قام بها في نيسان عام ١٩٧٩ قد استفدنا منها كثيرا وان المناقشات التي دارت معه حول هذا البناء كان لها الاثر العميق في نفوسنا • اضافة الى ذلك فانه ساهم مساهمة مباشرة في تمييز البناية الدائرية والتي قدمت كهدية رمزية من قبل الامير الى المؤسسة العامة للآثار والتراث بعدها قامت المؤسسة باعادة بحس الكسـر الفخارية المكتشفة في حوض حميرين لكي يقدم الامير بدراساتها شخصيا •
كذلك نود أن نقدم شكرنا الجزيل الى الدكتور كيوتارى تسويى المدير العام لمعهد تارا للأبحاث الوطنية وحماية الممتلكات الثقافية للاقتراحات القيمة التي قدمها للبعثة أثناء عملنا للشكل المصغر للبناء الدائري وأخيرا وليس آخرا أود أن أقدم كرئيس هيئة البعثة الى جميع أعضاء البعثة لهم المتواصلة طيلة أشهر التنقيب •

Notes:

- 1) Behenam Abu Al-Soof, 1968, "Excavation of the Tell es-Sawwan Fourth Season", *Sumer* Vol. XXIV
- 2) Oates, J., 1969, "Choga Mami 1967-68: A Preliminary Report", *Iraq* Vol. XXXI-2
- 3) Invernizzi, A., 1980, "Excavation in the Yalkhi Area", *Mesopotamia* Vol. XV
- 4) Oates, D., and Oates, J., 1976, *The Rise of Civilization*, Oxford
- 5) Forest, F., 1980, "Rapport sur les Fouilles de Kheit Qasim III Hamrin", *Paleorient* Vol. 6
- 6) Sabah About, 1979, "Tell Abada", *Sumer* Vol. XXXV
- 7) Tobler, A. J., 1950, *Excavation at Tepe Gawra*, Vol. II, Philadelphia
- 8) Killick, R., Roaf, M., 1979, "Excavation at Tell Madhhur", *Sumer* Vol. XXXV
- 9) Gibson, McG., 1979, "At Uch Tepe Hamrin", *Sumer* Vol. XXXV
- 10) Muhammad Az-Zahawi, 1981, "Tell Suleimah", in the 3rd Baghdad International Archaeological Symposium
- 11) *ibid.* Note 1)
- 12) Mallowan, M. E. L., 1947, "Excavation at Brak and Chagarbazar", *Iraq* Vol. IX
- 13) Lloyd, S., Safar, F., 1943, "Tell Uqail Excavation by the Iraq Government Directorate of Antiquities in 1940 and 1941", *J. N. E. S.* Vol. II
- 14) Kobayashi, B., 1959, *Kenchiku no Tanjō (The Birth of Architecture)*, Tokyo
- 15) Delougaz, P., 1940, *The Temple Oval at Khafajah*, O. I. P. Vol. LIII
- 16) Delougaz, P., 1947, *Pottery from the Diyala Region*, O. I. P. Vol. LXIII
- 17) Awad Al-Kassar, 1979, "Tell Abu Qasim", *Sumer* Vol. XXXV
- 18) *ibid.* Note 8)
- 19) Trenkwalder, H., 1979, "Tell Ababura", *Sumer* Vol. XXXV
- 20) Abudul Rahiman, M. A., 1979, "Tell Abu Al-Súud II", *Sumer* Vol. XXXV
- 21) Stronach, D., Roaf, M., 1978, "Excavation at Tepe Nush-i Jan", *Iran* Vol. XV
- 22) Ghirshman, R., 1954, "Village Perse Achemenide", *Mission Archéologique en Iran*, Tome XXXVI
- 23) Stronach, D., 1978, *Pasargadae*, Oxford

قائمة الالواح

- ١ - تل الكبة
- ١ - البناء الاوسط ، الطبقة VII
- ٢ - شكل مصغر ، الطبقة VII
- ٣ - مقطع للشكل المصغر ، الطبقة VII
- ٢ - فخار ملون ، تل الكبة
 - ١ - الطبقة IV ب
 - ٢ - الطبقة VI
 - ٣ - الطبقة V
 - ٤ - الطبقة VI
 - ٥ - الطبقة IV ب
 - ٦ - الطبقة VI
- ٣ - فخار ملون ، تل سنكور ، أ ، ب ، ج
 - ١ - عصر سامراء ، سنكور أ
 - ٢ - عصر سامراء ، سنكور أ
 - ٣ - عصر حلف ، سنكور أ
 - ٤ - عصر العبيد ، سنكور ب
 - ٥ - عصر العبيد ، سنكور ج
 - ٦ - عصر العبيد ، سنكور أ
- ٤ - التلؤل قبل التنقيب
 - ١ - تل الكبة
 - ٢ - تل سنكور أ
 - ٣ - تل سنكور ب
 - ٤ - تل سنكور ج
 - ٥ - تل الكبة اثناء التنقيب
 - ٦ - تل الكبة

- ١ - البناء الاوسط ، الطبقة VII
- ٢ - الجزء الشرقى ، الطبقة VII
- ٧ - تل الكبة
- ١ - البناء الدائرى ، الطبقة VII
- ٢ - أبنية ، الطبقة VII و ٧ - IV ب
- ٨ - تل الكبة
- ١ - البناء الاوسط ومدخله ، الطبقة VII
- ٢ - الجزء الشمالى ، الطبقة VII
- ٩ - تل الكبة
- ١ - أبنية ذات عقود ، الطبقة السابعة
- ٢ - بناء بهيئة نذق ، الطبقة VII
- ٣ - البناء الاوسط ، الطبقة VII فى الجهة الشرقية
- ١٠ - تفاصيل البناء الاوسط ، الطبقة VII ، تل الكبة
- ١ - جدران وهاليز
- ٢ - تراكمات فى الدهليز (٣) والجدار الدائرى ٣
- ٣ - جرة سمجة عثر عليها فى الدهليز ٣
- ٤ - هاليز وجدران
- ١١ - تل الكبة
- ١ - بناء ، الطبقة ٧ ، VI (عصر فجر السلالات الاول)
- ٢ - بيت استعمل للخزن (عصر فجر السلالات الاول)
- ٣ - فخاريات تعود الى قبور فى عصر فجر السلالات الثالث
- ٤ - عظام بشرية عثر عليها فى حفره ، الطبقة VII
- ١٢ - فخاريات ، تل الكبة
- ١ - فخاريات ملونة ، الطبقة VII
- ٢ - فخاريات ملونة ، الطبقة VII
- ٣ - فخاريات ملونة ، الطبقة VII
- ٤ - فخاريات ذات مصبات عثر عليها فى موقد ، الطبقة VII
- ٥ - جرة سمجة الصناعة ، الطبقة IV

- ٦ - جرة سمجة الصناعة ، الطبقة IV
- ١٣ - آثار تل الكبة
- ١ - فخاريات ملونة ، الطبقة VI
- ٢ - فخاريات ملونة ، الطبقة VI
- ٣ - فخاريات ملونة ، الطبقة V
- ٤ - فخاريات ملونة ، الطبقة VI
- ٥ - جرة مختومة سمجة الصناعة
- ٦ - جرة مختومة سمجة الصناعة
- ٧ - جرة مختومة سمجة الصناعة
- ٨ - جرة مختومة سمجة الصناعة
- ١٤ - آثار تل الكبة
- ١ - برونزيات
- ٢ - خرز
- ٣ - اختام منبسطة
- ٤ - اختام منبسطة
- ٥ - اختام أسطوانية
- ٦ - حجريات
- ١٥ - تل الكبة
- ١ - أبنية الطبقة I
- ٢ - البناء الاوسط ، الطبقة II
- ٣ - جدار ، الطبقة II فى الجهة الشرقية
- ٤ - مسرحة ، الطبقة II
- ٥ - كاسات ، الطبقة II
- ٦ - فخاريات ملونة ، الطبقة II
- ٧ - فخاريات أعتيادية ، الطبقة II
- ٨ - كاسة ، الطبقة II
- ١٦ - شكل مصغر للطبقة VII تل الكبة
- ١ - تفاصيل الجدار (٨)

- ٢ - منظور عام للشكل المصغر
 ٣ - مقطع للشكل المصغر ، البناء الاوسط
 ٤ - شكل مصغر مبدئي
 ١٧ - تل صنكور أ
- ١ - بيت يعود الى عصر سامراء فى الجهة الجنوبية الغربية
 ٢ - مدخل مغلق ، بيت يعود الى سامراء
 ٣ - قبر رقم ٢٤٧ يعود الى عصر سامراء
 ١٨ - آثار عصر سامراء فى تل صنكور أ
- ١ - فخاريات مخرزة
 ٢ - فخاريات ملونة
 ٣ - فخاريات مخرزة
 ٤ - فخاريات ملونة
 ٥ - دمي طينية
 ٦ - اقراص مغازل
- ١٩ - فخاريات ملونة ، تل صنكور أ
- ١ - كاسة ، عصر العبيد
 ٢ - كاسة ، عصر العبيد
 ٣ - جرة ، عصر العبيد
 ٤ - اناء بشكل سلحفاة ، عصر العبيد
 ٥ - جرة ، عصر العبيد
 ٦ - كاسات ، عصر العبيد
 ٧ - اناء وكاسة ، عصر حلف
- ٢٠ - تل صنكور ب
- ١ - بناء ، الطبقة II
 ٢ - فرن لشوى الفخاريات
 ٣ - انبوب لتصريف المياه
 ٤ - تبليط حجر
 ٥ - آثار تعود الى الالف الثانى قبل الميلاد " قبر "

٢١ - فخاريات ملونة ، تل منكور ب

١ - عصر العبيد

٢ - عصر العبيد

٣ - عصر حلف

٤ - عصر حلف

٥ - عصر حلف

٦ - عصر حلف

٧ - عصر حلف

٢٢ - تل منكور ج

١ - منظر عام ، مستوطن العبيد

٢ - فخاريات ، عصر العبيد

٣ - آثار حجرية وعظيمة ، عصر العبيد

٤ - فخاريات ، عصر العبيد

٥ - فخاريات ، عصر العبيد

٢٣ - تلول حميدات

١ - فرن لشوى الفخار

٢ - جرة خزن

٣ - جرة كبيرة

٤ - الجزء الاسفل لجرة كبيرة

٥ - زجاجيات

٦ - انبوب لتصريف المياه

٢٤ - بقايا عظام بشرية فى حوض حميرين تعود

١ - عصور : أيسن / لارسا ، عصر البابلى القديم فى تل منكور أ

٢ - عظام بشرية فى الفترة الفرثية عشر عليها فى تل منكور أ

٣ - عظام بشرية فى العصر الاسلامى عشر عليها فى تل الكبة

٤ - عظام بشرية فى العصر الاسلامى عشر عليها فى تل منكور أ

قائمة الاشكال

الرقم	الصفحة
١	(خارطة للمواقع الاثرية فى حوز حمرين (حوز السمديه)
٢	تل الكبه والمناطق المحيطة به
٣	خارطة ملونه لتل الكبه
٤	مقطع لتل الكبه
٥	مقطع لمخطط تل الكبه
٦	الابنيه المركزيه لتل الكبه
٧	المخطط العلوى والابنيه الوسطيه لتل الكبه
٨	بيت يعود الى عصر فجر السلالات
٩	مخطط لمخزن يعود الى عصر فجر السلالات
١٠	عشر عليه فى تل الكبه
١١	مخطط الطبقة الثانيه لتل الكبه
١٢	فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقة السابعه لتل الكبه
١٣	فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقات السابعه
١٤	والسادسه والخامسه لتل الكبه
١٥	فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقة السادسه
١٦	تل الكبه
١٧	فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقات السادسه
١٨	والخامسه لتل الكبه
١٩	فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقة الخامسه
٢٠	تل الكبه
٢١	فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقة الخامسه
٢٢	تل الكبه
٢٣	فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقات الخامسه
٢٤	والرابعه لتل الكبه

الرقم	الصفحة
	(١٨) فخاريات ملونه عشر عليها في الطبقة
40	الرابعة لتل الكبه
	(١٩) فخاريات عشر عليها في ا طبقات السابعة
43	والسادسه والخامسه والرابعه لتل الكبه
	(٢٠) فخاريات عشر عليها في الطبقة الرابعه والثالثه
44	والثانيه لتل الكبه
45	(٢١) فخاريات عشر عليها في قبور تل الكبه
	(٢٢) اختام وطبقات اختام عشر عليها فى
46	تل الكبه
	(٢٣) مواد حجرية وبرونزيه عشر عليها
47	فى تل الكبه
	(٢٤) خارظه كنتريه لتلول سنكور
51	(أ) و (ب) و (ج)
	(٢٥) المنطقه المنقبه و بنايات عصر سامراء
52	فى تل سنكور (أ)
	(٢٦) مقاطع للجهات الشماليه والجنوبيه
53	والمنطقه الوسطى لتل سنكور (أ)
	(٢٧) مخطط لابنيه عصر سامراء والجنبه الشماليه
54	لتل سنكور (أ)
55	(٢٨) مخطط لابنيه عصر سامراء والجنبه
	الجنوبيه لتل سنكور (أ)
56	(٢٩) مخطط لبقايا لبن تعود الى عصر
	فجر السلاطات الجبهه الغربيه لتل
	سنكور (أ)
58	(٣٠) مخطط لقبور تعود الى عصر سامراء ، العبيد
	، ايسن / لارسا ، والصعيد البابلى القديم شر
	عليها فى تل سنكور (أ) •

الرقم	الصفحة
61	(٣١) فخاريات تعود الى عصر سامراء عثر عليها في تل سنكور (أ) .
62	(٣٢) فخاريات ملونه عثر عليها في تل سنكور (أ)
63	(٣٣) فخاريات وفخاريات محززه تعود الى عصر سامراء عثر عليها في تل سنكور (أ)
66	(٣٤) فخاريات تعود الى عصر حلف عثر عليها في تل سنكور (أ)
67	(٣٥) فخاريات تعود الى عصر العبيد عثر عليها في تل سنكور (أ)
68	(٣٦) فخاريات تعود الى عصر العبيد عثر عليها في تل سنكور (أ)
69	(٣٧) فخاريات تعود الى عصر العبيد عثر عليها في تل سنكور (أ)
70	(٣٨) فخاريات تعود الى عصر العبيد عثر عليها في تل سنكور (أ)
71	(٣٩) مواد محموله بن الطين المشوي وحجريات واقراء مغازل تعود الى عصر سامراء عثر عليها في تل سنكور (أ)
72	(٤٠) مواد حجريه ونحاسيه وأبرونزيه عثر عليها في تل سنكور (أ) .
76	(٤١) مناطق التنقيب والابنيه المكتشفه في تل سنكور (ب)
77	(٤٢) مقطع لتل سنكور (ب)
78	(٤٣) مخططا للطبقات الأولى والثانيه لتل سنكور (ب)

الرقم	الصفحة
79	٤٤ (مخطط الطبقة الثالثه لتل سنكور (ب)
80	٤٥ (مخطط الطبقة الرابعه لتل سنكور (ب)
82	٤٦ (فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقة الاولى لتل سنكور (ب)
83	٤٧ (فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقة الثانيه لتل سنكور (ب)
84	٤٨ (فخاريات ملونه عشر عليها فى للطبقة الثالثه لتل سنكور (ب)
85	٤٩ (فخاريات ملونه عشر عليها فى الطبقة الرابعه لتل سنكور (ب)
86	٥٠ (فخاريات عشر عليها فى قبور تعود الى عصر ايس / لارسا / والعهد البابلى القديم فى تل سنكور (ب)
87	٥١ (مناطق التنقيب والابنيه العبيديه والتي عشر عليها فى تل سنكور (ج)
88	٥٢ (المقاطح الشماليه - الجنوبيه لتل سنكور (ج)
88	٥٣ (مخطط للابنيه العبيديه والتي عشر عليها فى تل سنكور (ج)
89	٥٤ (فخاريات ملونه تعود الى عصر العبيد عشر عليها فى تل سنكور (ج)
90	٥٥ (مواد معموله فى الطين المشوى والحجر عشر عليها فى تل سنكور (ب) و (ج)
91	٥٦ (مواد حجرية عشر عليها فى تل سنكور (أ) و (ب) و (ج)

الرقم	الصفحة
(٥٧)	مواد حجرية عشر عليها في تلون سنكور (أ) و (ب) و (ج)
(٥٨)	فجرن لحرق الفخاريات والزجاجيات عشر عليها في تل حميدات
(٥٩)	كشف موقص لبقايا الجزء الاوسط لتل الكبه •
(٦٠)	جدول لمقارنه قياسات الجماجم المكتشفه في حوض حميرين
(٦١)	جدول لمقارنه قياسات الجماجم المكتشفه في حوض حميرين ، جنوب بلاد وادي الرافدين وبوركان تبه •
(٦٢)	جدول لمقارنه قياسات الجماجم المكتشفه في تل الكبه وسنكور (أ) وأشور ونفر
(٦٣)	جدول لمقارنه قياسات الجماجم المكتشفه في حوض حميرين والتي تعود الى العصر الاسلامي وما قبل العصر الاسلامي وتل سنكور (أ) آشور ونفر
(٦٤)	مخطط للطبقة السابعه لتل الكبه
(٦٥)	جدول للمخلفات الاثريه ، والتي عشر عليها في تل الكبه تلون سنكور وحميدات
(٦٦)	نسب نظائر الرصاص والتي اكتشفت أثناء التنقيب •
(٦٧)	نسب نظائر الرصاص في المواد الاثريه والمكتشفه في بلاد وادي الرافدين

الرقم	قائمه الجداول	الصفحه
	(١) مجموعه من الحجريات عشر عليها في الطبقات الرابعه والسابعه (ج) والسابعه (ب) لتل الكبه	197
	(٢) مجموعه من الحجريات تعود الى عصر سامراء عشر عليها في تل سنكور (أ)	198
	(٣) مجموعه من الحجريات عشر عليها في الطبقة الاولى لتل سنكور (ب)	198
	(٤) مجموعه من الحجريات عشر عليها في الطبقة الثانيه لتل سنكور (ب)	199
	(٥) مجموعه من الحجريات عشر عليها في الطبقة الاولى (أ) لتل سنكور (ج)	199
	(٦) مجموعه من الحجريات عشر عليها في الطبقة الاولى (ب) لتل سنكور (ج)	200
	(٧) مجموعه من الحجريات عشر عليها في الطبقة الثانيه لتل سنكور (ج)	201
	(٨) شكل توضيحي يبين جرد المواد الحجريه والمكتشفة في تل الكبه وتل سنكور	201
	(٩) عدد الهياكل المكتشفه في حميرين سد حديثه آشور وبابل	119
	(١٠) عدد الجماجم المكتشفة في حميرين سد حديثه آشور وبابل	120
	(١١) قياسات الجماجم المكتشفه في حميرين	121
	(١٢) تصنيف الجماجم المكتشفه في حميرين	122
	(١٣) قياسات الجماجم والتي تعود الى العصر الاشوري المتأخر وسد حديثه *	122

الرقم	الصفحة
١٤)	قياسات الجماجم الاسلاميه والتي عشر عليها فى آشور •
١٥)	قياسات الجماجم المكتشفه فى جنوب وادي الرافدين ويوركمان تبه
١٦)	نسبه نظائر الرصاص فى خنجر برونزى. عشر عليه فى تل الكبه
١٧)	تحليلات أشعه اكر لبعض المواد المكتشفه
١٨)	التركيبات المعدنيه لبعض المواد المكتشفه عند تحليلها فى اشعه أكس
١٩)	تحليل الطابوق المكتشف بواسطه اشعه اكس
٢٠)	التعرف على تبلور الطابوق بواسطه اسعه اكس
٢١)	فقدان الوزن بالتحليل الحرارى والاشعال

====XXXXXXXXXXXX==

Hamrin Report 6

Tell Gubba
Telul Sungur
Telul Hamediat

The Japanese Archaeological Expedition to the Hamrin
Headed by Hideo Fujii

Tōkyō Baghdad

The Institute for Cultural Studies of
Ancient Iraq, Kokushikan University
Tōkyō Japan

The State Organization of Antiquities
and Heritage
Baghdad Iraq

ラーフィダーン第II巻 (1981) 付録
appendix to al-Rāfidān volume II (1981)

ملحق الرفيدان - المجلد الثاني ١٩٨١